社會科學

第四卷第二號　（年四回發行）

七月五日發賣

戰略の一般基準……佐野學
大衆的統一主義と宗派的分裂主義の闘爭……田所輝明
無産政黨の議會對策……笹尾惠三
プロレタリア青年運動の諸問題……北浦千太郎
合同問題に對する舊勞働農民黨の態度……細迫兼光
帝國主義戰爭の危機と無產階級……岡田宗司
現下の政治的情勢と農民組合の合同問題……青木惠一
農民戰線統一運動……淺沼稻次郎
勞働組合運動の戰略と戰術……荒畑寒村
戰略戰術に關する論文目錄……

〔附錄〕

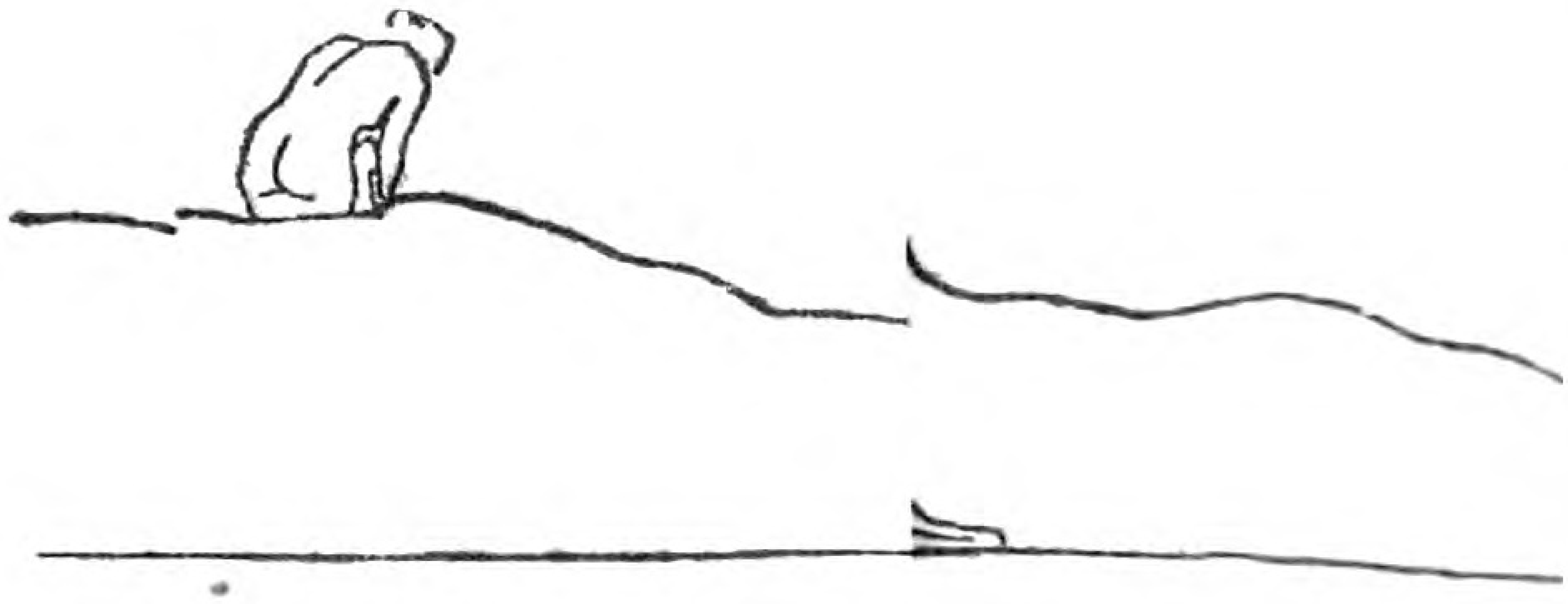
マルクスの學問的及び實際的活動の背景としての私生活……石濱知行
マルクス派陣營に於ける内亂……嘉治隆一
第一インターナショナルとマルクス……田中九一
マルクス・エンゲルス研究所……後藤信夫

定價八拾錢（送料六錢）

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四二〇

森永
マリー
ビスケット
夏の生活に食物の撰擇は重要な問題です マリー ビスケットは減退し勝ちな食欲を増進し且つ榮養上からも申し分のないものとして確信を以て御奬め致します
丸罐入 五十錢
平罐入 一圓
B-1

改造八月號目次



創作

南方への經濟的進出

阪神乃至關門が我國の北方進出への重大地點であつたことの任務の半ばは既に解消せるの感がある。我が國策？とも見るべき滿蒙の經營は滿鐵本社その他を中心として研究せられて居るが、南方への統制的研究の本據、本體がないのは我島の一翼を缺いたものの如くである。我國が傳統的に北方を重視したのは露國の政治的、軍事的全南下に對抗したもので、もとより經濟的産業的重心から割り出しての北方進出ではなかつた。即ち軍事的、政治的の進出であつたのである。我々は今後に於て我が經濟的北方進出を進止しやうとは思つてゐないが、より重要であるのは揚子江以南——就中、南支方面へ死力を注ぐべきであることを一言するものである。勿論その躍出は平和的であり、産業的であり、經濟的であることを目標とする。これら中支、南支における英、米の經濟的勢力が可なり根強く蟠居しておるのは我勢力を扶植する上に、いくたの困難はあるが、しかし我が地理的狀勢と、同種族、同文である關係は遂に英米の商品を驅逐することを可能ならしめるであらう。ただ我滿蒙に於ける關門、大連たらしむべく臺灣を策源地として利用することを忘却しておることは最大の憾みである。現下の臺灣はただ臺灣人の臺灣で、對外的には基隆——福州を通じての臺灣に過ぎない。従つて我政府の對臺策は一植民地として之を過するに止まり、その總督の如きも大臣病落第者を以つて之に充當して來た。そして內閣はただ臺灣の統治一點張りの消極方針で進んで來たのである。我國は現下に於て全對支策を根本より一轉すべき時期に遭逢した。領土的と見られた偏滿政策をかなぐりすてて全支を相手にすべての對策を新に樹立して進まねばならぬ。そして臺灣を南支、佛領印度、暹羅、瓜哇、セレベス、ボルネオ、スマトラ、マニラへの全中心として見方をかへて進み行くことを現下の緊急とせねばならぬ。そう考へた場合、臺灣と、臺灣總督府の使命が重大であり、そして我國運を決する鎖鑰が臺灣にあるを思ふべきである。我々は帝國主義的爪牙の足だまりを臺灣に求むるのではなく、實にそうした意味から英米を南支、印度その他諸島の市場より驅逐し、經濟的新日本を更生せしめる點よりして此地にいくたの施設をなすべきだと思ふ。我々はもちろん亞細亞人の亞細亞は亞細亞人を以つて治め固めよとの標語を信ずる譯ではないが、そうすることがすべての方面に無理をせず展開進出することが出來るからである。揚子江を奧へ、兩廣、雲南の奧地へ、そしてマレイ印度及諸島に至るまでを第一線圏としての臺灣を考ふるのが、新日本の經濟戰を擔任する戰士の任務ではあるまいか。

支那革命の發展と日本帝國主義の運命

猪俣津南雄

發ブルヂョアジーのみならず、また實に支那ブルヂョアジーそれ自身であつた。そこで國民軍内一勢力としての支那ブルヂョアジーは、支那共產黨の指導下に國民軍の核心的革命勢力をなせる勞働者農民の壓殺を企てた。その下手人の役割を蔣介石等が引受けた時から、國民軍

統一的國民政府の出現

最近の一見勝利的な國民政府の出現は、實は支那革命の一時的退潮を反映する。

支那の革命運動は、

一[illegible]十二日[illegible]國民黨に[illegible]
治家や軍人に率ゐられてゐる』、『國民黨運動の熱火は消え失せた、たとひ經濟的條件が許すにしても、社會的改革のプログラムを遂行するに必要な熱意が全く無くなつてゐる。』（同上二十五日支那特派員發）。更にまた十二月二日のクオータリー・プレテンも言つた――『國民黨は名ばかりの存在であること、乃至はたがく相互抗爭的な諸分派への分裂狀態にあるに過ぎないことは、今や動かすべからざる事實である。……國民黨は、一群の小將軍連の手に渡つてしまつた……。彼等の兵隊は、食はんがためにのみ戰爭し、そして食ふためには掠奪する……』

これらの將軍連の手をかりて革命的プロレタリアートを彈壓した國民黨の支那ブルヂョアジーは、同時に、日、英、米、佛の帝國主義ブルヂョアジーとの妥協――彼等への屈服――によつてのみ、それを遂行し得たのである。支那ブルヂョアジーは、自己の存立のために、國民革命をその兩面の敵に賣り渡した。一方では支那軍閥へ、他方では帝國主義者へ。では彼等がその代償として手に入れたものは何か？　最近の「統一的」國民政府こそそれである。さればこそ、わが田中將軍の政府は、「、、」政府の成立に對して『最初に、、を送つた』。辭令は辭令、[illegible]日本帝國主義に對する、、、、、勞働者農民の要求に[illegible]の、從つてもはや帝國主義者に對して強力に鬪爭し得ることの[illegible]ブルジョア＝軍閥の支那政府の出現である。革命の成就が祝はれたのではない、反革命の成功が祝はれたのだ。

各國の帝國主義者は、被搾取國支那の政治的運命に關して、常に矛盾した二つの要望の間をうろついてゐる。政治的に分裂して動亂の絶えざる支那は、全土の組織的搾取、全土の植民地化の操作に不便である。市場の安定、企業の安全がなく、帝國主義的資本は絶えず損害の危險に曝される。だが、支那全土の政治的統一を具現する強力なる中央政府は、帝國主義的侵略そのものに對する脅威である。對內的には強い、對外的には弱い支那政府。――それのみが、帝國主義者的要望の矛盾の統一を體現する。最近の國民政府は、やゝかうした體現に近づいてゐる點において、日本の帝國主義者から祝福されるに價ひした。東京日々新聞の南京特派員は曰ふ――「……不平等條約の撤廢、關稅自主權の囘復、外國軍隊の撤去など（筆者註、打倒帝國主義運動の最低要求）は、國民政府の看板であり、國民への公約であるから、國民政府がこゝに統一政府として對外關係を開く以上、これが實現に努

め、條約の履行をなさんとするのは當然のことと思はれるが、今日の如く穩健化した國民政府がこれら不平等條約の即時撤廢を求むることは萬々あるまい。このことは、外交部長王正廷の對外宣言によつても明かである。私（特派員）の見る處では、今日の國民政府の中心勢力は、譚延闓、吳稚暉、張靜江などの、經歷から生じた先輩としての勢力を中心として、それを蔣介石の武勁による勢力が衛星として廻り、更にこれを馮玉祥を背景とする王正廷、薛篤弼、李烈鈞などかとりまいてゐるといふスリー・フアー・ヘーターの持ち合ひからなつてゐる。しかしていづれを見るも穩健且つ經驗多き政治家で、殆ど北京の舊官僚と大差ない。外交の局にあたる王正廷は、昔日の新人で、今日の新人ではない。永く北京の外交界に根をおろしてゐたから、サイコロジーにおいては全く北京官僚である。且つ世界の形勢に明るいオツポチユニストであるから、國民政府が今日の環境において如何なる外交政策をとらねばならぬかといふことはよく分つてゐる筈だ……』七月二日）。

に與へたため、殊更に承認問題などとさわがれてゐるのである」と。（東日同上）

かゝる政府に對してさへ、帝國主義列強がいま承認問題にしてゐるのは何故であるか。一つには支那に對する帝國主義外交の定石である。競爭者の多い取引において、腕を見すかされる者は馬鹿を見る。それにまた、承認を急がぬことは、承認の代價を釣りあげるための秘訣ではないか。國民政府を、今日の如く穩健化さすことに成功した帝國主義者等は、此の政府への帝國主義的壓力をゆるめぬことによつて各自それぐの收穫を確實ならしめねばならぬ。

だが、列強の帝國主義者等は、國民政府の安定性をも疑つてゐる。この疑ひは、一面では彼等の希望によつて、他面では彼等の恐怖によつて裏づけられてゐる。彼等の希望の線に添うて言へば、國民政府の安定よりも更に望ましい形における支那政局の展開が考へ得られる。各帝國主義者の利害と立場の異るに從つて、國民政府の崩壞を望む理由と程度は異るにせよ、國民政府は、彼等にとつて最惡の支那政府でな

[illegible]國民黨[illegible]帝國主義[illegible]の勢力は今[illegible]、この[illegible]國民政府の内部に各自の政治的エージェントを設定し强化することに向けられてゐる。そこからも亦認內鬨の駈引きは生ずる。米國と英國と日本の帝國主義者等は、かく、各自にとつて最有利なる支那政權の轉形を思惑しつゝ、それ自身、國民政府不安定化の動因をなしてゐる。

けれども、競爭的な列强のかうした暗中飛躍それ自體は、一方ではおのづからまた力のバランスをつくり出し、それ自體强力ならぬ國民政府の存立を永らへしめる作用を營まぬでもない。そしてひとたび特にこの運命的な同士討ちの一點を頭において考へる時、帝國主義列强は極めて「穩健な」國民政府の成立にさへ恐怖を感ずべき十分の理由をもつてゐる。

現在の國民政府は、對立する政治勢力の一時的妥協、矛盾せる諸力の一時的均衡のうへに立つてゐる。一昨年來の革命的國民軍の鬪爭目標は、本來、支那大衆の——また、、、、、、の——本質的利益に忠實に、各國の帝國主義者と支那軍閥との打倒に置かれた。そして容捨なき鬪爭は端的に彼等に向けられて些の妥協をも許さなかつたばかりでなく、野火の如く全土に擴がれる革命行動は一擧にして勞農支那[illegible]せた[illegible]かくして、[illegible]に[illegible]鬪爭的[illegible]勢力[illegible]政府[illegible]成立[illegible]際に、支那革命の發展を資本主義の限界内に喰ひ止めること、その目的の共通なることの故について、國民軍内の支那ブルヂョアジーは先づ日英米の帝國主義者より積極的消極的支持を得、進んで支那諸軍閥と妥協しその或者を「北伐軍」に合流せしめ得たのである。

合成して革命的プロレタリアートを抑壓しをる三つの力、支那のブルジョア的勢力と軍閥的勢力とそして帝國主義的諸勢力、それは互に敵對的な力であり、必然に反撥し合ふ力である。帝國主義の諸勢力そのものが更にそうであることは前既にこれを見た。これら抑壓の諸力の間の妥協と、バランスとに生ずる必然的な破綻は、現國民政府を動搖せしめ、勞働者農民を蹶起せしめずにはおかない。

か、それよりも先づ、この反革命的な北伐軍の成功と國民政府の成立とが既に、それだけ支那ブルヂョアジーを強めたことを帝國主義者は知つてゐる。國民政府の權力を形づくる諸勢力は、相互の間に對立はあるとはいへ、「支那ブルヂョアジーの支那」といふ根本標語において一致する。そして帝國主義者から見る時、ブルヂョア中心の新政府

は、「軍閥の支那」を標語としたところの、これまでのどの支那政府よりも御し難い。十年前までの支那軍閥は、不平等條約の下に榮え得た。しかし、今日政權を取つた支那ブルヂョアにとつては、關稅自主權の獲得その他によつて外國ブルヂョアジーと平等——少くとも——の搾取條件を我物とすることが、自己存立上の死活的必要となつてゐる。勞働者農民の革命的勢力を抑へるために帝國主義者と妥協し、その庇護の下に統一的政府を得、それによつて自己を强めたところの支那ブルヂョアジーは、今や鉾を逆まにして帝國主義勢力を排擊せぬであらうか？——かくしてまた、帝國主義者は國民政府の承認を延期する。

事實において、不平等條約の撤廢、關稅自主權の回復、外國の軍隊の撤去等における帝國主義者との闘爭こそは、東日記者が指摘した通り『國民政府の看板であり、國民への公約である』。この公約なくして『民軍』の勝利はあり得なかつた。そしてその公約の履行なくして、國民政府は長く支那民衆の支持を受けることは出來ない。しかるにもし、わが東日記者の謂ゆる穩健化した國民政府が、果して記者の說く如く不平等條約の撤廢を容易に敢行し得ないとなつたら、欺かれたる支那大衆は、かつての民軍左翼勢力の指導の下に、再び端的な反帝國主義の闘爭のために起たぬであらうか？ この恐怖が、帝國主義者をして國民政府の承認は、その治安維持能力を見てからにすると言はしめてゐる。

支那革命の發展の方向

國民政府は、『支那ブルヂョアの支那』といふ根本標語に一致を見出す諸勢力のブロックを代表する。が、このブロックにおける支那ブルヂョアジーそのものの勢力は決して强大でない。

東京朝日新聞の社說記者が指摘したやうに、『北伐の成功は、大勢に雷同した舊軍閥を無造作に收容したことがあづかつて力ある。今日の國民軍なるものの內容を洗つて見れば、半ば以上は舊軍閥の看板を塗り變へたものである。』これらの軍閥はそれ〴〵にみな、多かれ少かれ、日、英、米、佛の帝國主義者と結び、或者は全くその傀儡と化してゐた。從つて國民革命の根本目標の一たる打倒帝國主義は、打倒軍閥によらなければ不可能であつた。しかるにまた彼等は、武力を擁して諸方に割據し、國內關稅を徵して交通と取引を妨げ、血稅を課して農民勞働者を誅求し、權力の爭奪に沒頭して農業組織を荒廢に委し、兵亂を起して農民の掠奪を事としてゐた。そしてかゝる武權を維持せんがために、帝國主義者の手先とさへなつてゐたのである。

彼等の權力を顚覆することなくして、統一國家は不可能であり、彼

[illegible]くして、[illegible]は不可避である。革命的民衆[illegible]遂したのは必然であり、當然であつた。しかるに、國民黨をたて革命の道具に轉化した國民黨ブルヂョアは、軍閥との闘爭を戰ひつくす代りに却つて之れと妥協し、國民政府における軍閥的勢力を優勢ならしめてしまつた。今や國民政府は、統一的政府勢頭の仕事として、裁兵——軍制の統一と中央集權——を敢行すべき必要に迫られてゐる。裁兵の實績は、國民黨ブルヂョアが果して軍閥的勢力を克服し得るか否かを決定する。妥協的、反革命的な彼等ブルヂョアジーは、『容易に不平等條約を撤廢し得ないであらう』と同じやうに、軍閥の克服によつて新しき支那を建設し得るには餘りにも無氣力であり、無力である。

支那の新興ブルヂョアジーと支那諸軍閥との妥協、——現に成立せる政治的ブロックの經濟的政治的根據は、(一)兩者いづれもが帝國主義的資本に支配せられ、(二)帝國主義者と共に支那の革命的プロレタリアートを强壓することに當面緊急の兩者共通の利害を有したことに加へて、(三)勞働者を搾取する支那ブルヂョアの大多數が地主をも兼ねて農民を搾取しつゝあると同時に、農民を誅求する支那軍閥が次第に資本家をも兼ねつゝあることである。軍閥のブルヂョア化は、彼等をして、國民黨ブルヂョアとの提携を容易ならしめた。だが、それは[illegible]る支那ブルヂョアジーに、農民の革命的反抗の前に屈服した。例へば昨年二月のロンドン・タイムス特派員は報じてゐる——『……組織された農民は、現に、廣東省を支配してゐる。彼等は自ら小作料額を指定し、抵抗する地主は危險に曝される。……一人の地主が殺害されたが、勞働組合は、殺害者たる農夫を裁判所から奪還した。そして彼は無罪の宣告を言ひ渡された。……舊き小作制度は廢棄され、新しいものが取つて代りつゝある』革命的農民の强壓は、武力を必要ならしめる。そして武力は、軍閥の手に握られてゐる。支那ブルヂョアジーは、それ自身地主を兼ねるところから、ブルヂョアジーとしての徹底的闘爭を半封建的軍閥に向けることが出來ない。

裁兵の問題と並んで、反革命的國民政府の力を超越した多くの問題が、近く『全國財政會議』の卓上に置かれやうとしてゐる。曰く、租税の中央集中、財政權の統一、國税地方税の區分。だが、このブルヂョア的税制のＡＢＣの實行は、——そしてそれを財政會議の圓卓において決定せんとすることは、軍閥と戰はずして軍閥の特權を放棄せしめんとするものである。だから、外交辭令を心得た帝國主義者は言つてゐる『諸君は虚心坦懷に協力することが肝心だ、吾々は衷心それを

要望する！』

しかるにまた、全國財政會議のプログラムは、それらにも恰して帝國主義者の苦笑をそゝるものを含んでゐる。曰く、國債の整理、幣制の改革、銀行制度の改革、保護貿易の採用、關稅自主權の確立。いかにも、『支那ブルヂョアジーの支那』はそれらの實現によつてのみ可能ではあらう。だが、その實現の企圖は、――そしてそれを、帝國主義者と妥協したブルジョア軍閥の圓卓會議で決定せんとすることは、帝國主義者と戰はずして帝國主義勢力を掃蕩せんと欲するものである。だから、外交辭令のうちにも、、をほのめかすことを忘れない帝國主義は言つてゐる、『諸君の議案は堂々たるものだ、だが實行の可能性がとぼしいために机上の空論に終らないやうに！』

我が日本の帝國主義者は、、、、、、、、支那ブルヂョアジーに「忠告」する時の常套論として、日本もかつて帝國主義列强の壓迫の下に不平等條約を强いられて苦しんだことをあげ、支那今日の要求に同情し、さて支那もまた、恰度日本がしたやうに、漸進的に一步々々不平等條約撤廢の要求を實現すべきであつて、特に先づ、內に國力の充實を圖つて後初めて帝國主義列强と抗爭すべきであると說く。意識的な自由主義者や、無意識的に、、、、、、、、、を摑まされてゐる多くの人々は、知らず〳〵我田引水に、かうした「忠告」のしかたにも共鳴する。だが、それは無思考力者のすることである。日本と支那の類推は、事態の本質に一顧をだに與へる者には一顧にだも價ひせぬ。試みに想へ、かつて日本において、今日の支那におけるが如く、自國の鐵道の殆んどすべてが外國資本の物であつたことがあるといふのか？　重要鑛山と工場の極めて多くと、大部分の商業中心地と主要金融機關とが、外國資本の支配下に置かれたことがあるといふのか？　そしてこの帝國主義的資本の勢力が、事每に、、、、となつて現はれたことがあるといふのか？　更にまた、不平等條約に加へて、軍閥が課する國內關稅のために、自國商品が外國商品に數十倍する課稅のハンデキャップをうけるやうな馬鹿げたことが曾つてあつたか？　かつての日本と、今日の支那の事態とは、程度の差ではない。質の相異である。

――先づ內に國力を充實せよといふ、だが、その國力充實のための絕對不可缺の第一步が、帝國主義勢力と軍閥との打倒にあることこそが、支那今日の事態の核心的特質であり、その革命運動の、、、、であるのだ。そして支那共產黨指導下の革命的勞働者農民の運動のみが、此の現代支那の眞要求に、、、、その實現のための眞の力であることを、正に、、、、、によつて實證したのであつた。

最近に、革命的勞働者農民を彈壓して「統一的」國民政府――反革

[illegible]のための闘争が不可能の[illegible]る解答こそは、國民政府の運命と、支那革命の發展の方向とを、決定的に示すであらう。

吾々はすでに、支那ブルジョアジーが如何に軍閥に對して弱いかを見た。從つて軍閥に對する徹底的闘争を遂行し得ないことを見た。半封建的軍閥の特權を廢止し得ざる國民政府は、彼等の誅求に對して革命的反抗の段階にまで進出せる支那大衆、わけても最厖大な農民大衆の支持を失はねばならぬ。

支那ブルジョアジーは、軍閥的勢力に對して弱いだけではない。彼等はまた、帝國主義的資本の支配下にある。工鑛業においても、運輸においても、また金融においても、支那ブルヂョアの資本利潤は外國資本に横奪せられ、後者に對する抗争の必要を痛感せしめてはゐるが、しかも有力な支那ブルヂョアのかなりに多くは、外國資本に隷屬することによつて始めて自己の資本利潤を引出すといふ地位にある。資本家はしばしば民族よりも利潤を愛する。そこで帝國主義者に對する支那ブルヂョアの陣營は急進派と「穩健」派とに分裂し、「穩健」派は更に、いづれの帝國主義的資本に隷屬し倚存するかによつて、——米國のか、英國のか、日本のかによつて、また幾つかに分裂してゐる。

[illegible]支那の[illegible]、、、帝國主義の桎梏の下に[illegible]して行はれた。從つて支那[illegible]有力な産業資本ブルヂョアがない。そして、現在の支那資本の代表的形態としての商業資本と金貸資本は、外國資本への隷屬倚存の狀態を脱してをらぬ。

各種の重要産業における外國資本の壓倒的優越のさまを一瞥すれば、支那の産業資本の幼弱さが知れる。即ち、炭坑に投ぜられた資本全體の七割は、日英獨の資本である。鐵鑛及び製鐵事業にあつては、その資本の殆んどすべてが日本のものである。世界産額の四〇%を占めるアンチモニー鑛は獨逸資本の獨占である。紡績資本の六割以上と、造船資本の大部分とが、日本と英國のものである。鐵道に至つては、總哩數約七千五百哩の六割弱に當る四千三百哩ほどが、支那の官營線と稱せられてゐるが、他は直接外國資本の經營に屬し、その官營線すらが施設原價五億六千萬元のうち五億二千萬元は外資によつてゐる。

問題は、この力弱き、しかも内部的に分裂せる支那ブルヂョアジーが、敢然たる闘争によつて帝國主義勢力を打破し、現代支那の根本要求を充たし得るかにある。それは彼等にとつて、軍閥勢力の克服にもまして至難であるであらう。彼等が、遲疑し、逡巡し、不平等條約の

撤廢、關稅自立權の獲得その他の反帝國主義的公約を、彼等の國民黨が履行し得ざる限り、支那大衆の信頼は彼等の國民政府を離れねばならぬ。物質的生產力の發展への内的促迫は、彼等を待たない。彼等を待たずして急速に支那大衆の覺醒へと押進め、打倒軍閥と打倒帝國主義の、、、、、、はますます熾熱化するであらう。大衆は、斷乎たる、、、、、、、を求めずにはをらない。そして彼等はそれを「一鎖のほかに何物も失はぬ」支那プロレタリアートの階級的組織に見出すであらう。吾々は現に強大なる革命的勢力としての、少くともかゝる潜勢力としてのプロレタリアートを支那に見る。

日本の政治經濟においても、曾つては資本家階級は微力であつた。そしてそれに應當してプロレタリア階級も少數であり、無力であつた。世界大戰前には、日本における資本主義的發展の程度に不相應に日本プロレタリアートは無力であつた。その狀態は、戰後の今日に至つても尚ほ多かれ少なかれ續いてゐる。しかるに支那は反對である。支那においては、支那資本のほかに、それに十倍する帝國主義的資本がある。全體としての支那プロレタリアートは、支那ブルヂョアが支那の政治經濟に占める地位に不相應に多數であり、強大でなければならぬ。支那プロレタリアの數は既に五百萬人を超え、うち三十五萬人以上が組合に組織されてをる。彼等は、大正十五年一ヶ年間に、上海のみでも百七十回のストライキを決行し、二十萬人がそれに參加した。常勝的な革命軍の前衞は彼等の總工會であつた。東洋未曾有の歴史的總罷業の敢行者は彼等であつた。

支那ブルヂョアは、ブルヂョアそのものとしては、帝國主義勢力と闘争する力も有たない。彼等は、たゞプロレタリア大衆の闘争力を利用することによつてのみ、その力を有ち得る。だが、プロレタリア大衆闘争的に動員することは、たゞさへ自己の力不相應に強大なプロレタリアートを、更に強力ならしめるのみである。それはまた、プロレタリアを階級的結成に進ましめずには置かない。それ故に支那ブルヂョアは、プロレタリアートを抑へねばならなかつた。この矛盾が、支那ブルヂョアの致命的弱所をなしてゐる。それは、曾つての新興日本ブルジョアの經驗にのぼらなかつた矛盾である。漸くにして資本主義的發展の端緒につける支那において、そのブルヂョアジーが、國民革命の强力な先頭部隊たり得ざる根本理由がそこにある。

しかるに、支那プロレタリアートは、自己解放のための絶對不可缺の第一歩を、打倒軍閥と打倒帝國主義とに見出すばかりでなく、それらの闘争においても、ブルヂョアジーの陷つてゐるやうな矛盾を有たない。彼等の階級的立場は、軍閥との闘争を躊躇せしめる何物をも有たないと同じやうに、帝國主義の打倒に向つても端的な攻進あるのみ

[illegible]プロレタリアートとは、現代支那における一の基本的な革命的勢力として對立する。いづれが國民革命を遂行して新しき支那をつくり得るか、——それを決するいま一つの根本要因は支那農民である。何故なら、農民は尙ほ支那人口の壓倒的多數を占めてゐる。

支那の國民革命は、一面においてまさしくブルヂョア民主主義革命である。フランスのブルヂョア革命は、ブルヂョア（市民）と農民との協力によつて成就された。當時の佛蘭西農民の場合にも劣らず、現代支那の農民革命の客觀的條件は熟してゐる。支那ブルヂョアジーは國民革命の指導權を維持し、ブルヂョア民主主義革命に自身の型を與へるためには、革命的農民を滿足させる政策を遂行し得なくてはならぬ。それによつて農民を自己の陣營に獲得し得なくてはならぬ。だがそれは可能か？

それは不可能である。何故なら彼等は、資本家と同時に地主を兼ねてゐる！　彼等は、軍閥勢力と妥協してその特權を存續せしめる。從つて彼等は、重税の負擔から農民を解放することが出來ない。そして彼等の極大限の農業政策をもつてしても、農民を地代の桎梏から解放することが出來ない。

[illegible]實を、[illegible]て、これに[illegible]農民の[illegible]ーにあり得やうか。ブルヂョアジーは、自身の發展の基礎になる[illegible]家ではなかつた。

數十年に及んだ軍閥的政權爭奪の動亂は、變革的な資本主義的發展と相俟つて、支那の農業經濟を崩壞に瀕せしめてゐる。水利の設備は荒廢し、地方の補充は行はれない。頻々たる直接の掠奪に加へて、不換紙幣による掠奪が絶えない。幾百萬の農民が、賃銀勞働者におちぶれて行く。幾百萬の農民が、或は匪徒に、或は傭兵に化して、掠奪者の群に投ずる。更に幾百萬の農民は餓死に瀕し、最後の幾百萬は起つて革命戰線に就いた。（組織された農民——主として小作農民——の數は、舊北京政府の保守的な報告に基づいて算定しても、優に三百萬人を超えてゐる）。

沒落の農民、沒落の手工業者、その大群の不斷の流れが工場に向つて押流がされ、支那プロレタリアートの上に加へられる「產業豫備軍」の壓力は正に窒息點に近づいてゐる。格言的な低賃銀、十四時間勞働、婦女幼年の酷使、災害的な死亡率、——それらすべてに特徴づけられる支那勞働階級の現狀は、たゞ彼等を打ちのめす鐵鞭がしばしば外國

資本家の手にあることを外にして、悉くかの英國産業革命の古典的な畫面の再現である。

だが、英國の産業革命は、世界資本主義の勃興を告げる警鐘であつたのに、現代支那に高鳴るそれは、沒落期世界資本主義の弔鐘と交響する。

類似の暗黒がひとしく本能的な反逆を必然ならしめるにしても、まだマルクスを知らず、無産階級國家を知らなかつたイギリスの勞働者は、たゞ機械を破壞して鬱憤を晴らしたのに、、、、、、、、、、、、、、、、、、を知る支那プロレタリアートは、階級的政黨に自らを結成して組織的闘爭を展開した。

支那ブルヂョアは、帝國主義の魔王に呪はれた畸形兒として生れた。幼にして早くも世界資本主義の沒落の鐘を聞く者にふさわしく、彼等の肌は生くさき黒布に被はれてゐる。——當面のブルヂョア民主主義革命を通じて支那資本主義の大道を拓くこと、それは彼等にゆるされてをらない。

支那プロレタリアートは直進する。支那民族の統一と獨立のための闘爭——國民革命——の、、、は、彼等に賭さねばならぬ。農民革命が、、してゐる。そして支那數億の農民大衆が更生のための必死の闘爭は、革命的プロレタリアートの、、、、に、支那ブルヂョアジーの顚覆による農民解放の達成に、、、、、、しなくてはならぬ。それはい、、、農民本位のブルヂョア民主主義革命であるであらう。だが、支那におけるそれは、資本主義の限界を突破してのみ實現される。勞働者＝農民の支那獲つて始めて、その確乎たる民族的統一及び獨立のために必要な生産諸力の展開もまた決定的に準備される。支那革命の發展においては、その正常の諸段階が、飛躍によつて短縮される。

吾々は、階級關係の力學的分析によつて規定されたる支那革命の發展の根本方向と、その具體的な發展過程とを混同してはならぬ。後者は、革命、反革命の諸勢力の交互の進出と退却、それぐ\の結合と分裂と再結成の刻々の變化を呈しつゝ進展する。現在の瞬間は、一般に革命的勢力の一時的退潮に特徴づけられてゐることを、吾々は指摘した。革命的勢力の盛りかへしは、現在のブルヂョア的國民政府が、革命的プロレタリアートを彈壓するために、國民革命そのものの目的——打倒軍閥と打倒帝國主義——を裏切つてゐることを、時局の進展が曝露しはじめると共に始まるであらう。それは一般的に、革命支那に對する帝國主義列強の硬化の傾向と並行する。

、、、、、支那プロレタリアにのぞむ帝國主義者等は、動搖の支那を占領して完全な植民地と化さぬであらうか？　實例は同じ亞細亞の印度にあつた。軍閥間の際限もない戰爭、階級間の闘爭の不決定的

[illegible]
外國商品に對する購買力を殺し、投下された外國資本の利潤と安全とを脅かすことの甚しいだけこれだけ、帝國主義者はいよ〳〵支那の占領と征服と植民地化への衝動に驅られるであらう。

だが、印度に倣つて支那を卜し得るのは、帝國主義者の白晝夢においてのことである。印度の植民地化は、世界資本主義の隆興期において、而かも當時の資本主義世界に獨自の地位を占めた英國の力によつて實現された。それでさへ、優に二百年間の努力を要した。だが、亞細亞の諸民族が隷屬への道を辿れる歷史的時代は決定的に過ぎてゐる。すでに大勢は轉じて亞細亞民族の解放にむかつた。そしてその反帝國主義の獨立運動の强烈さこそが、世界資本主義沒落の至大要因をなすのではないか。支那今日の侵略者は、唯だ一つの强國ではなかつた。今日の支那は、世界最强の四權力、米、英、日、佛によつて爭奪される。四大强國の協同による支那の占領と統治、乃至は分割、――それはまさに四國の利害の最尖鋭な對立の故に不可能でなければならぬ。唯だ一國による獨占的な支那所有への企て、それこそ致命的な世界戰爭の爆發なくては止まぬであらう。そして、いくつかの楔機の機會的な結びつきが、その事實化を齎らすでもあらう。

[illegible]
[illegible]勞働大衆の革命的勢力は[illegible]である。

日本帝國主義の運命

日本帝國主義は、革命的支那プロレタリアートの、、、、であり得る。隣接する支那こそが日本帝國主義の殆ど唯一の侵入地であり、革命支那の問題は日本帝國主義にとつて死活的なそれであり、そして今日まで日本帝國主義の主たる强所が武力的優越に存すること、そこに日本帝國主義の特質がある。

海外に投ぜられた日本資本の九割以上が支那にある。その對支投資額は、二十五億と算せられてゐる。この金額の大きさを感ぜしめる比較としては、日本全國の鑛業に投ぜられた資本（會社拂込）の總額が僅かに六億であり、製絲、紡績その他の纖維工業全體に投ぜられたそれの總額は九億、電氣事業に投ぜられた額が十一億に過ぎないことを指摘出來る。即ち、對支投資は、我が日本の此の三大事業の資本金總額を併せたものに匹敵する。

日本の對支投資は、英國のそれよりも大きい。米國に至つては僅かに三億圓といはれ、その半ば以上が、教育、學校、病院などに投ぜら

れてゐる。

二十五億の日本資本のうち七億は、「有名」な西原借款その他の政府借款で、殘る十八億の大部──十三億餘──は、滿洲における資本家企業となつて作用してゐる。次いでは上海における三億餘圓があり、その他、一億の靑島以下、漢口、天津、九江、等、等──支那全土の樞要商業中心地にして有力な日本資本の活動を見ざる所は少い。長江以南における企業投資のみでも、優に四億を超えてゐる。但し、以上の數字は、支那に設けられた支店を通じて作用してゐる日本資本の或るものを除外してある。かゝる資本は、主として商業資本と銀行資本で、この範疇に屬するものこそは、三井物產、三井銀行、正金銀行、住友銀行、三菱銀行、臺灣銀行、朝鮮銀行等、それ自身巨大な、そして直ちに政治的壓力を加へ得るところの資本であることを忘れてはならぬ。

だが、以上の考察では尚ほ支那經濟における日本資本の、、、、を示すに十分でない。では、それは如何なる產業に如何なる地位を占めてゐるか？ 支那において生產される基本的原料は石炭と鐵であるが、石炭の年生產約二千五百萬噸の四分の一は、日本資本の支配下にあつて、英國資本の勢力を拔いてゐる。鐵に至つては、鐵鑛の年生產百萬噸の九割以上が日本資本の支配下にある。支那の製造工業にあつては、紡績が殆ど唯一の近代產業的な發達を遂げてゐるに過ぎないのに、此の事業部門の資本の少くとも六割は日本資本である、大正十二年をとれば、在支紡績工場總數百十九工場のうち支那人所有のもの七十三、日本人所有のもの四十一、總錘數三百八十萬餘錘のうち前者に屬するもの二百十萬錘、後者に屬するもの百二十萬錘であるが、名義上支那人所有のもので日本資本の支配下にあるものが多數にのぼるとされてゐる。日本紡績聯合會（カルテル）は、支那に投下した紡績資本を二億三千餘萬圓と發表した。

鐵道にあつては、外人經營のもの總延長二千三百哩のうち、日本資本は一千哩以上を經營し、尚ほかなりに多額の鐵道借款をもつてゐる。更に海運においては、支那の對外貿易に從事する船舶の三割乃至四割は日本船舶が占め、英國船舶の勢力と伯仲する。また、しばく見逃される所であるが、上海長崎線、福州臺灣線、大連佐世保線、旅順芝罘威海衛線、その他の電線も、日本の經營に屬してゐる。

日本の商業資本が支那市場に、「日本の銀行資本が支那金融に占める地位を數字的に示すことはむづかしい。だが、前者については後に述べる貿易關係によつて一斑を知ることが出來、後者については、例へば正金銀行の發行する紙幣が東三省において最高の流通力を有し、臺灣銀行の紙幣が福建省に勢力を振ふのを見ても想像し得られる。支那

[illegible]

[illegible]でなく、また[illegible]投資を行ひつゝ、[illegible]型的な帝國主義的金融資本として[illegible]しつゝある。

すべて七億にのぼる我が對支借款は、政治借款においては借款國十三ヶ國の首位を占め、更に鐵道借款全體の二割と、電信借款全體の九割と、地方團體借款全體の五割とを占めてゐる。そして南滿洲と東蒙古における日本資本が、金融、商業、工業、鑛業、林業、漁業、鐵道海運、港灣の全領域に亘つて、、、、、、であることは改めて言ふまでもない。

以上に要約された日本資本の、、、、は、單純な「經濟關係」の設定以外以上に出てゐる。

國境を知らないのは資本の常態であると曰ふ。日本にも外國資本は入込んでゐると曰ふ。有無相通こそ望しいではないかと曰ふ。あだかも、日本の資本が支那資本主義の血液を富ます役をでもしてゐるかのやうに！ またあだかも、日本資本が支那資本と對等の條件で滿足してゐるかのやうに！ 更にまた、さも日本資本が支那、、の完全な、、、、してでもゐるかのやうに！――だが、支那における日本資本は、本來の經濟的優越に加ふるに、「治外法權」をもつ資本として、課税されざる資本として、基本原料を獨占する資本として、各種の優先權[illegible]、、、、、[illegible]、、、、、、、、[illegible]を[illegible]し、[illegible]に投ぜられた[illegible]本に、[illegible]門に日本領土を持込んでゐる。、、、、、、、とによつて獲得せしめられた特權的日本資本は、それらによつてのみ維持せられ、發展せしめられねばならぬ。それは、支那を半植民地たらしめてゐる資本であり、資源と市場と投資域における獨占的地位の維持と擴大とのために列強資本と抗爭する資本であり、その故にまさに帝國主義的資本である。

支那における日本資本が優越すればするだけ、支那經濟と支那大衆とのうへに加へ得る厭迫は強く、それが強ければ強いほど、革命支那の反抗は熾烈である。そしてそれが熾烈であればあるほど、、、、、、、、、、、。優越は死をもつて把持せねばならぬ。帝國主義的資本にあつては、優越こそが生命であり、その喪失と共に沒落が始まる。だが、支那の革命的勢力――國民的反帝國主義的勢力、特にプロレタリア勢力――の勝利の一歩々々に、日本資本の特權の剝奪であり優越の喪失である。

わが帝國主義者は、現實にこの脅威の前に立たされた。彼等が恃む所は、、である。彼等は叫んだ、國難、國難！ 國民よ、、、、、、、、、、、、。――そこで彼等は、五十隻の軍艦、三ヶ師團の

兵隊を支那へ逃れ込んだ。、、、、、に指でもさして見ろ!!

東京朝日新聞の奉天特派員は七月三日の同紙に書いてゐる —「東三省が現在何故にかくも靜かであらうかといふならば、說明を加へるまでもなく、それは日本軍が異様に光る眼をむいてにらんでゐるからである。……歷代の關東軍司令官のうちで最もこはいのは現在奉天にある村岡關東軍司令官で、このくらゐ強く支那をにらんだことは空前の出來事である」だが、「東三省の內部は、いつでも青天白日旗を揭げて差支ないだけの事實の變化は、とうの昔に出來てゐる。民衆の心理には今や南も北もあつたものでない。必ず何等かの機會に東三省の一角には近く青天白日旗が揭げられる日がくるのであらうと考へられるが、この點についても奉天官憲などはこれに對していかなる態度に出づるか、今でこそ五色の旗であくまで押進むといつてゐるが、雲行次第ではいつこれが變化しないとも限らぬ情勢にある。……いづれにしても日本はこの際滿洲において永年の懸案を解決せんとするならば、從來のやうな姑息なやり口ではますます窮地に陷るべきは火をみるよりも明かである。もちろん、武力的解決法は避けねばならぬが、武力に優る別箇の解決法は必ず存在することゝ思ふ。」（七月四日）

日本帝國主義は、亞細亞における其の、、の相對的優越により、英吉利帝國主義の、、として、の分け前を得てゐた時代を終つた。世界大戰は、日本資本主義に、跳躍的な膨脹を遂げる僥倖を與へた。尨大な戰時利潤による急速度の資本蓄積は、日本帝國主義をして、武力よりは寧ろ資力による爭覇に向はしめるに足るかに見えた。戰時市場の消滅と共に、大正九年恐慌を通じ、俄かに現實のものとなつた尨大な餘剩資本は、もし革命の展開さへなかつたならば、滔々と支那に流出したに違ひない。だが、その吐口は塞がれてゐた。震災の打擊と諸般の「整理」難と世界市場の不安定とによつて、日本資本主義は長期の不況に襲はれた。が、それにしても、日本の資本力は戰前のそれに：：倍してゐる。支那において爭ふ限り、日本資本はもはや英國資本を恐れない。事實において、英國の勢力範圍に起つた國民革命の勝利の一步每に英國資本の失へる商權は、、、、、、、をつけた日本資本に歸して行つた。

とはいへ、資本力による爭覇の敵としてはアメリカの資本がある。米國資本主義は、戰時に遂げたる大發展と大蓄積の勢ひを、戰後における歐洲及び南米への尨大な資本輸出によつて維持して來た。だが、かゝる資本輸出の不可避的な停頓 ——そしてそれは近づいてゐる——と共に、アメリカ資本は支那に向はずにはをれない。しかもそれは字の如き「懸河の勢ひ」をもつてであらう。何故なら、資本主義的發展

段階が——アメリカの如く——高かければ高いほど、常に現實化せんとする矛盾はそれだけ深刻であり、その解決はそれだけ强力にのみなされねばならない。

經濟的侵略、資力による爭覇にあつては、アメリカ資本こそが壓倒的である。しかし彼れは亞細亞における日本の武力を恐れてゐる。それだから彼れは日本の武斷主義を難じ、自らは平和主義を裝つて支那ブルヂョアジーにたはむれかける。日本資本もそれを眞似たい。わけても金融恐慌以來、獨占的な大銀行に集中されて「變態性金融緩慢」を釀しつゝある巨細の遊資のために、資本輸出への促進は强まつてゐる。だが、支那革命鎭壓の急務と、壓倒的なアメリカ資本との對抗及びその眞劍な進出に先立つて地歩を固めおく必要とは、日本資本をして滿蒙問題の「、、、、、」を思はしめずには置かない。

かくして、わが帝國主義ブルヂョアジーは、、、、、、、、、、、、、、、との間を絶えず動搖する形勢の變化と各自の對支利害の如何とによつて、彼等の陣營内の二分派の構成と旗色もまた變化する。だが、彼等の走る歴史的軌道はすでに劃されてゐる。支那革命の發展が彼等を走らせる。そして米國の帝國主義者も、その英國の同僚も、また極東日本の同僚も、一方では造艦制限を約しながら、他方では——何たる聰明さだ！——造艦能力の增大に必死の競爭的努力を捧げてゐる。

日本帝國主義の、、、、は、革命支那大衆の、、、、、、、を險やすからしめた。特に一九一五年の對支二十一ヶ條以來深く支那大衆の胸裡に刻まれた意識的組織的努力として繰返されて來た「排日」運動は、最近二度の出兵によつてまた燃えあがつた。「排日」は、言ふまでもなく、、、、、、、、、、を排斥するのではなく、支那における日本の資本及び帝國主義權力の排擊である。それは支那國民革命の、、、、、、、、、でなければならぬ。

支那の革命運動が今日まで日本資本主義に與へて來た打擊の程度を數字的に示すことは出來ない。だが、それが最も熾烈であつた大正十二年上半期の對支輸出は、前年度同期の二割、三千二百萬圓を減じ、同年全年を通ずれば前年の一割五分、五千萬圓を減じた。大正八年の日貨排斥は、同年五月—七月の上海、漢口及び上流各港において日本船舶の積載する支那人貨物の數量は、前年同期の積載量の八割弱、十七萬三千噸の激減を來たさしめた。これらの數字は單に指標的に過ぎない。茲に最も重要なことは、全體としての革命運動の日本資本主義に與へる經濟的影響であり、それがたとひ日本の貿易及び投資その他の減少といふ積極的打擊とならぬまでにも、增加發展の速度を著しく緩漫ならしめてゐることである。戰時において急激甚大なる蓄積を遂げそれ

に伴ふ「資本集積によつて既に「獨占の段階」に入り込める日本資本主義が、戰後、それに照應する旺盛な帝國主義的發展の地を支那に見出し得なかつたこと、——それこそ、吾々がすでに幾度か論證したやうに、この深刻な永久的不景氣となつてゐるところの、生産力と市場の間の深大矛盾をつくり出だす至大要因である。日本帝國主義の運命は、從つて日本資本主義の運命は、「支那問題の解決」如何にかゝつてゐる。

戰後の日本貿易は、常に輸入超過を續け、昭和元年の入超は四億四千萬圓に達した。この貿易勘定の不足を補ひ得るものは、貿易外の受取勘定のみである。しかるに同年において五億三千萬圓を示した同勘定の八割を占める四億二千萬圓は、海外事業及び業務利益と海運及保險關係收入から生じてをり、その大部分が支那に對する投資及び貿易に基づいてゐる。更にまた、日本の輸出總額約二十億圓の二割五分乃至三割に近いものが支那へ行くことを想へば、支那投資と支那市場とが、日本の國際貸借關係において如何に決定的な重みをもつかが知れるであらう。

だが、對支貿易の内容も劣らず重要である。(支那にとつての重要さとしては、日支貿易が支那の貿易全體の二割五分以上を占めることによつて明かである)。日本の綿織物は、その總生産高の約三割五分に當る四億三千萬圓を輸出し、生絲に次ぐ最重要輸出品たが、その六割以上が支那へゆく。そして支那からの輸入を見れば、豆類、小麥、米、鳥卵、食鹽の如き主要食料の供給と、石炭と鐵の獲得において支那に依存することます〱大である。

なかんづく重大なのは鐵問題である。戰時の膨脹によつて日本の製鋼能力は年二百萬噸に達してゐるのに、現實の生産高は百萬噸を出でず、百二十萬噸が輸入されてゐる。國内で生産される百萬噸も、その原料たる銑鐵の半分を輸入に俟つ。殘る半分は國内で生産されるが、その原料たる鐵鑛は殆どすべて輸入に俟つ。日本帝國主義は、當然にこの戰略的重要性の至大なる鋼鐵の自給自足のためには如何なる努力も惜まない。そしてそれはまた日本の支配的金融資本の支配下にある重工業を、その設備過剩から救ひ出す。だが、此の經濟的軍事的意義の絶大な帝國主義的企圖の實現にとつて、、、、、、支那のみが所要原料の確實な供給者たり得ることを忘れてはならない。

日本資本主義は、今やそれ自身その最後的な獨占の段階に入込めることの故に、成功的な帝國主義的進出によつてのみ發展を維持し得る。支那は、日本資本の帝國主義的侵入のために殘された唯一の地域であるばかりではない。その支那が、すでに、市場として投資域として又た原料資源として、日本の資本主義經濟そのものの最重要な構成

部分をなしてゐる。しかもそれが、日本資本の特權と獨占的優越及びその他の爭覇を條件としてのみ、さうした構成部分たり得てゐる。支那の革命的大衆の日本帝國主義に對する鬪爭、——その、、、、、、の一歩々々は、二つに一つの運命に日本資本主義を導くであらう。一方では、日本資本主義における生產力と市場との矛盾——今でさへかくも深大なる——を、更に深大ならしめることにより、從つて發展の速度を更に緩漫ならしめることにより、從つてまた沒落への轉向を切迫せしめることにより、日本××××の××なる×××××を必然ならしめる。だが他方では、恐らくはそれに先立つてすでに、我が帝國主義ブルジョアジーをして××××××に敢進せしめるであらう。そしてそれは、×××××××と化さねば止まぬであらう。だが、その時こそは、「×××××××。」そこに、日本帝國主義の運命がある。

蓋然性は後者にあらう。支那革命は、その發展の一定段階において早くも日本の××××××××かす。加ふるに、日本帝國主義の主動力は、金融資本と××との、異例的に緊密强固な融合から成つてゐる。支那革命の鎭壓と、支那の×××化とに死活的利害を有つものは、鐵道と××××××と鐵と石炭とをめぐる金融資本と××との一體物である。支那における鐵道や鑛山の經營においても、また借款においても、日本帝國主義はとに××××にかゝるのにはない。それが、日本帝國主義をして、××××××と、その使用の鈍遲に、從つて×××な××とを不可避ならしめてゐる。

明治維新の經濟革命

高橋龜吉

—明治維新の經濟革命—

第一、明治維新の「經濟革命」の意義

顧るに、明治維新前後の我國は、所謂封建末期乃至資本主義前期の歴史的時代に於て、可なり完全なる「自給自足」經濟を爲しながら、

たわけではなかつた。

この秋に於て、歐米に發達せる資本主義の大波濤は、文字通り疑耳に水の如く、突如として我が海岸に打ち寄せた。斯くてその後の我國に於ける幾波瀾と、支那印度等の「近事」とに由る經驗の結果は、好むと好まざるとにせよ、從來の封建制度を以て歐米の資本主義に對抗することの到底不可能なることを認めざるを得なかつた。之れ即ち、昨日まで「尊王攘夷」の標語を掲げ、その名に於て政權を奪取した明治政府が、新たに責任の位置に立つや否や、「開國進步」の新看板に之を取替へざるを得なかつたわけだ。

玆に私の謂ふ「明治維新の經濟革命」とは、即ち、以上の如き明治政府の意識的な企圖——しかし資本主義の全體系を把握して後ち、之を組織的に移植せんとしたものでは

なく、[illegible]

[illegible]

例へば、

一、維新の「經濟革命」は我が封建制度それ自體の成熟の結果、その母胎から飛出したものではなくて、専ら、外國資本主義國に對抗せんがために敢行せられたものであつた。即ち內的事情からではなくて外的事情の聯迫が基調であつた。

二、維新「經濟革命」の遂行者は、從つて、資本家階級それ自身ではなくて、當時の支配階級なりし武士階級であつた。即ち、資本家階級が武士階級（當時の支配階級）に對して反抗せるものではなくて、武士階級自らが、その位地の擁護のために斷行した捨身の甦生手段であつた。

三、從つて又、「經濟革命」の指導者となり、實行者となつて常に陣頭に立ち、中心勢力となつたものは、當時の我が資本家階級ではなくて、武士階級の化身たる明治政府それ自身であつた。

四、「經濟革命」の內容は、從つて、日本自體の經濟的要求に聽くと云ふことよりも、主として對外競爭（政治的、軍事的、經濟的）を主眼とする傾ありて、専ら、外國資本主義文物の「輸入模倣」に全力が注がれた。

さりながら、右を以て「變則」だと云ふわけは先進國に對比して見る場合のことであつて、之を「後進國」の發展として見る場合には、右は必しも變則とは云ひ得ない。蓋し、後進國の發展は、必しも、先進國 [illegible]

[illegible]「經濟革命」[illegible]

治維新の「經濟革命」は封建末期の日本が、已に高度の發展を示せる歐米資本主義に突如として接觸しながら、歐米資本主義の「植民地」化せられることなく、之と對抗しながら、自らを成功的に資本主義化したる經緯を語るものとして、及びその發展の礎石を如何にして布いたかの歷史を示すものとして、就中意味があるわけである。

扨て、謂ふ所の明治維新の「經濟革命」の進行であるが、その「革命」の劃期は、明治元年ではなくて寧ろ明治四年七月の廢藩置縣であつた。顧るに、慶應四年（即ち明治元年）の「王政維新」は、要するに、封建的覇權が、德川から朝廷に移動したと云ふ、單なる「政權爭奪」がその「革命」の基調であつた。いかにも、「王政維新」と共に、資本主義的精神は、諸種の改革の裡に斷片的に已に織込まれてゐた。しかしながら、大觀して、明治四年の「廢藩置縣」までに於ては、經濟上社會上のことは、大體に舊幕時代のやり來りをそのまゝ踏襲したと云ふに過ぎなかつた。而して、各藩は依然として舊幕時代の如く各地に割據して、德川の薩長に對する復讐戰乃至は薩長間の內輪破れ等々の「次の戰亂」に備へる爲め汲々としてゐた。蓋し、斯かる情態の下に於ては、直接生產の發達に必要な「改革」が斷行せられる餘裕などのあらう筈はなかつたのであつた。然るに「廢藩置縣」の斷行は、茲に中央集權制度に基礎を置く國家の統一を確立せしめ、かくて明治政

府の基礎を著しく鞏固にするに至つた。而して、これを前期として明治政府の社會的經濟的大改革は、嵐の如くに斷行せられるに至つたのである。しかし乍ら、此の「經濟革命」は專ら、明治政府の先覺者が、机上に於て、「法制」の上に施した革命を本流とし、之に「實際的」革命が實驗的に行はれたと云ふに止り、その意味し結果する所は遠大ではあつたけれども、未だ、實際の社會、經濟上に、之を具體化するには至らなかつたのであつた。その漸く具體化されるに至つたのは、早くも明治二十年前後以降のことゝ云はねばならない。

それは兎に角、いま、明治維新の「經濟革命」に於ける主要點について見るに、その第一は、武士階級の撤廢であつた。この撤廢は、四民平等、封建的階級制度の廢絕を指標するものであつて、從來、封建的階級制度の下にあつて、精神的にも物質的にも極度に壓迫せられて來た生產階級は、こゝにその階級的羈絆から解放せられるに至つた。

その第二は、職業及び營業の自由、住居及び移轉の自由、契約の自由等、「自由競爭」制度の採用であつた。かくして從來、世襲、獨占、習慣の桎梏の下に萎縮せる「經濟」に對し、新たに潑溂たる生命を吹き込みその十分の機能を發揮せしめることゝなつた。

その第三は、私有權の確保、貨幣經濟制度の確立等に依つて、資本主義的精神の培養に資したことである。

斯くして、我が資本主義「經濟」は、その發達に必要な法制上の舗石を自ら布くの勞を採ることなく、明治政府の「先覺者」の勞に依つて前以て舗裝された坦々たる道に旅立ちした。然し乍ら、以上の如き社會、經濟上の大改革は、當時の社會の實際とは少からず先走つたものであつたが故に、圓滑に進行し得る筈はなかつた。そこには、社會經濟上の大混亂が伴はれた。又、政治的には進步派對保守派の抗爭があり、權力の爭奪があり、利害の齟齬と錯交があつた。斯樣にして、此の維新の「經濟革命」は又、之に伴ふ幾多の波瀾と不安とに開續せられた。例へば、地租の改正その他の制度の改革に反對して各地に農民一揆が頻發した。また、征韓論の波亂、佐賀の亂、征臺の役、西南の役等々の大小幾つかの戰亂も勃發した。

斯くの如く一方には政權を中心として武力的鬪爭が間斷なく行はれ、一方には社會、經濟上に先走つた變革が行はれると云ふ不安、動搖、混亂の狀態の下に於ては、云ふまでもなく、官民の努力が、經濟的發達のために集中せられ得るわけがない。即ち、明治政府先覺者の斷行した折角の社會經濟上の大改革も、明治當初約十ヶ年間に於てはその效果を未だ擧げるに至らなかつた。とは云へ、この大改革は、その後の我が經濟的發達の礎石をなしたものであつた。

尚ほ、こゝに繰返し注意を要することは、明治維新に於ける經濟上の革命は、當時の我が產業發達過程の中に孕まれた胎兒か、或程度まで成育した當然の結果として母體から飛び出したといつた種類のものでは無かつたといふことである。即ち、明治維新の革命が、幕府對薩長の覇權爭奪に出發しながら、遂に一の資本主義的社會革命に發展し

かくて、要するに、維新の目的は[illegible]

[illegible]

結果にあつた。即ち、[illegible]明治政府の[illegible]は、[illegible]

かくて新政府[illegible]に至つた。先づここになすべきことは、[illegible]

ここにおいて[illegible]に足る「富國強兵」の實に、先づ國を[illegible]き、東西の制度文物を移植するにない」といふ如き、[illegible]とした言葉の理に合意せられてゐたのであつた。

斯様にして、明治維新に於ける經濟革命の主力は、已述の如く、專ら泰西資本主義の「移植」と云ふ方向に注がれた。ただ、その移植は、[illegible]の上に[illegible]の建築物を引くそうなわけにはゆかなかつた。そこには、三千年の[illegible]、三百年の歴史を持つ日本の封建制度が[illegible]していた。[illegible]ここに於ける事情の上に、歐米の制度文物を如何に移入するかは大きな問題であつた。加ふるに、已に說述せし如く、維新當初の資本主義的政策は、維新政府が、資本主義の全體系を[illegible]にしてこれを一度に實行したものではなかつた。或は從來の[illegible]に於ける[illegible]の變遷、[illegible]、外國等の刺激に際して、その要求に應じて、或は政府事業[illegible]に於ける政府の必要に基き、或は諸國貿易に伴ふ經濟的[illegible]に[illegible]られて、[illegible]の一部分的に、[illegible]たのであつた。茲に初めて一の資本主義的經濟革命の成立を見るに至つたのである。この意味に於て、我が維新の經濟革命は、[illegible]本主義の移植に二つの[illegible]を[illegible]したと云へ、[illegible]

其を[illegible]であつた。

かくて、維新の經濟革命が[illegible]に至つた[illegible]、これを、しかし、之を更に仔細に要約すると、大體如き要因[illegible]んで達成したものなることを看取することが出來る。

(一) 歐米諸國の經濟的及び外交的資本の壓迫により誘因せられたもの。

(二) 明治政府の先覺者が、世界の大勢を洞察して事前に實行したもの。

(三) 外國貿易の刺戟に基くもの。

(四) 廢藩置縣の結果、日本全國を一體とする統一的國家の出現を中心とせるもの。

(五) 階級制度の撤廢、封建的士族階級の解體に基くもの。

以上五點の中、維新の經濟革命を實現した[illegible]勢力は、云ふまでもなく、(一)の歐米諸國の經濟的及び外交的壓迫であつて、(二)以下(五)の諸點は、畢竟この壓迫が種々の形に於て派生的に發現したものに外ならない。

いま、前掲五大要因の各々の内容を逐ひ一瞥すると、(一)は、何[illegible]歐米一部の人の專占していた貿易を一般人の自由に解放し、又[illegible]自由の貿易を導入せる如き、或は貨幣制度の改革統一をなし、以[illegible]經濟の生成を促進せしめし如き、又、[illegible]らしめし如き、[illegible]

法制を急施せしめ、資本主義の法律的基礎を築いた如き等々のことを擧げることが出來る。

(二)の明治政府の先覺者が世界の大勢を豫知して實行した經濟革命は、こゝに謂ふ「維新の經濟革命」の骨子をなすものであつて、その實行方法は二様であつた。その第一は、專ら法律制度の改廢であつて、極めて果敢に封建諸制度を廢絶し、資本主義的諸制度を採用した。その第二は、政府自ら先頭に立つて、歐米先進國の產業の輸入移植に努力し、政府直營の下に之の普及發達を圖らんとしたことである。だが、第一の諸制度の改廢は、當時の實際の社會の進歩に著しく先走つて行はれた結果、少なからぬ社會的動搖と政治的波瀾とを齎らすこととなり、その安定に至る迄の期間に於ては、却つて產業の發達を阻害した。又、第二の政府直營による歐米產業の實際上の輸入移植は、直接間接にその後の我が產業の資本主義的發達に多大の効果を齎らしたものではあるが、之を政府の事業として見れば、多くは財政的に失敗に歸し、收支相償ふ產業として發達することは出來なかつた。

(三)の外國貿易の刺戟に因る經濟革命は、他のそれの如く一般の神經を尖らしはしなかつたが、その影響する所は、徐々ながら深刻且つ普遍的であつた。而してその影響は、一方に於ては各種の輸入品による我が在來產業の壓迫として現はれ、他方に於ては生絲、茶その他の輸出による刺戟として現はれた。

(四)の統一的獨裁國家の出現に因る經濟革命は、二様の形態をとつて現はれた。その一は專ら制度の上の革命であつて、例へば、地租、驛傳、運輸等の改革である。第二の形態は經濟生活の上に實際に現れたものであつて、各藩割據の自給自足經濟が全國經濟となり、人民の移住併に產業の地理的分業の發達に因つて、こゝに我が經濟が一の革命に襲はれるに至つた事實である。

(五)の武士階級の撤廢に因る經濟革命とは、當時まで支配階級として、智識的にも精神的にも最もよく訓練の行屆いてゐた約五十萬戸の武士階級が、新に、生產階級として甦生すべく強要せられ、急に經濟界に流れ込んだ變動を機縁として、我が經濟が一大革命を起すに至つた事實を指すのである。

然し乍ら、明治政府に依る經濟革命の斯くの如き凡ゆる斷面も、之を大局から見れば、要するに歐米の外交的壓迫に對抗せんとした努力の派生的現象に外ならない。だが、維新の經濟革命を齎らすに至つた事情は、勿論それだけではなかつた。歐米の外交的壓迫に對抗せんとする努力を中心として、そこには種々の力が複雜に働いてゐる。その複雜せる種々の力を、理解の便宜上大別したものが、即ち右の五項である。

進んで右の五項に關し、以下更に詳述するつもりであるが、しかし、思ふに、その前、幕末に於ける產業狀態を明らかにしておくことが、維新の「經濟革命」の理解に最も便宜であらう。そこで、先づ此の點から以下說述するであらう。

第二、維新前の產業狀態

明治維新以後に於ける我が產業の發達が、如何に革命的であつたかの理解を明かにするためには、一應、維新以前に於ける我が產業狀態を一瞥して置く必要がある。

維新以前の我が產業は、謂ゆる封建制度の桎梏の下に生成したものである。而してこの封建制度は第一に、その社會經濟の秩序を保つ方法として、士農工商といふ四大階級（この他に堂上、、、、等の區別もあるが）を設け、原則として各階級は、他の階級の職に就くことを嚴禁した。而してその各階級內部に於ける職業、位地等の按配は、家柄、門閥等によつて世襲される定めであつた。即ち職業の獨占と世襲が政治的に保證されて居り、維新後に於ける如く競爭に脅やかされる惧れもなく、全く文字通りの平和と安定の甘夢を恣にしてゐた。

かくて、すべては舊慣によつて導かれ、先例に依つて規定せられ、「新規」なことは、世の平和を破る反逆者として「法度」となり、膺懲を蒙むつた。云ふまでもなく、かゝる制度の下に於ては、凡ゆる進步は休止される。產業も亦その例外たるを得ない。かくて、維新前の我が產業は、階級と獨占と世襲とによつて厚く圍繞せられて、殆んど何等の進步發達もなくその運行を續けて來たのであつた。

更に又、維新前の我が產業は、一種の「戰時經濟」を常態とした仕組の下にあつた。されば、武士階級の便宜が何よりも第一であり、凡ゆる經濟政策に、專ら戰時的[illegible]にあつた。例へば、各藩はそれぞれ割據して、その藩內に於て[illegible]自給自足の方法をとつた。その上、產業上必要な交通の開發も、軍事上の立場から放置せられた。かくして、產業發達の基本的條件たる土地、氣候、資源等の適否に從つて生產を分業し、各藩互にその生產物を交換するといふことは殆んど絕望であつた。

斯かる狀態の下に於ては、その產業が米穀偏重のものとなるは自然である。蓋し、戰時的立場から云ふも、又、平時生活の必要度から云ふも、主食物生產の確保を第一とするからである。加ふるに、當時、武士階級が「貢納」として生產階級から徵收する財源は、專ら米穀の收穫に限られてゐた。かくて、この貢納の多きを要求する立場からも、當時の支配者は米穀生產の增大を特に重要視したのであつた。斯樣にして、維新前に於ては、米穀の生產のためには、他の生產を犧牲にして惜しまなかつた。例へば、本田畑（米穀を耕作し得る土地）には、桑、煙草、甘蔗の如き、米穀以外のものを作るを嚴禁した。又、米穀生產の減少を憂ふる立場から、或は土地の賣買を禁じ、或は百姓の移住を許さず、或は一定の土地の耕作を強制するが如きことをもやつたのであつた。

また、この自給自足の原則は、日本全體として外國に對する場合に於ても、更に徹底的に行はれた。即ち、謂ゆる鎖國主義の勵行に依つて、外國との交通を全く絕ち、文字通り孤立の經濟を續けてゐたのであ

た。

だが、以上は大體觀としてのことであつて、此間に於ても幾多の產業は、限られたる小範圍に於てではあるが、或る程度の商品經濟の生成の途を追ひながら發達して、一の獨立產業となるに至つた。而していま之を大別すると、次の二種類に分つことが出來る。即ちその（一）は、大名其他の貴族的要求並に武士階級の要求を滿たす爲めの產業であり、（二）は、江戶、大阪其他都市生活の發達に伴ふ產業である。

この（一）の產業とは、漆器、陶器、銅器、織物及び象牙、珊瑚その他の彫刻等の工藝品、並に刀劍弓矢等の武具を指すのであつて、これ等の產業は、京都、江戶等の都市產業として發達したもの以外は、各地大名の特別保護の下に、藩の名產として發達したものであつたと云つてよい。（二）の都會生活の發達に伴つた商品生產としての產業は、要するに當時の都會人の日用品を供給するものであつて、その重なるものは、（米穀を外にすれば）水油、蠟等の燈料、木綿、絹紬、藍玉等の衣料、酒、醬油、鹽、茶、砂糖、海產品、煙草等の食料及び嗜好料、材木、疊表等の建築料、鍋釜、陶磁器、紙等の日用品並にその他の雜貨類であつた。而して、これ等の生產並に販賣は、町人自らが獨立して司つてゐたのは、大阪、江戶、京都等の

より之が物產會所とも云ふ）に依つて、今日の商業會議所に似た方法に於て經營されてゐたのであつて、當時の重なる產業の實權は、町人にあつたのではなく、各藩にあつた。同樣のことは、又分配の分野に於ても云はれる。而して、當時、產業の支配權を握つてゐた商業會所は、階級と家柄の傳統とに圍繞せられて、所謂「お國なり」以上のことをなし得る自由と覇氣とを有せず、御役目大事にその日その日が失策なしに暮れればよいといふ役人のみから成立つてゐた。その上に、階級意識に基く生產行爲賤視の風がコビリ着いてゐた。斯かる事情の下に於て、生產の資本主義的發達を求めるは到底不可能の事であつて、只だ一の大變革にのみそれを求め得る事情にあつた。

その大變革は遂に慶應四年に至つて、先づ革命的政變となつて勃發し、それに續いて次第に近代の資本主義的生產の發達を見るに至つたのである。

第三、政治制度に於ける經濟革命

維新に於ける經濟革命が、制度の上に具體化された樣式は二樣である。（一）は主として政治制度に關する方面に於て與へられたもので

的發達を促進する方法として、泰西の諸制度を新に移植しようとするにあつた。即ち、(一)は破壞的、消極的色彩に強く、(二)は建設的積極的色彩に强い。

而して、明治維新に於て政治制度の改革に依つて經濟革命が敢行せられたとは、要するに、封建制度の破壞に依つて、生産階級が從來の社會的羈絆から解放されたといふことを指すに外ならぬ。例へば、階級制度の撤廢、世襲制度の廢止、「株」、「座」、「家元」その他の名に依る獨占の廢絶、その他凰の如く斷行された諸制度の變革がそれである。私はいま、これ等無數の變革を、説明の便宜上、(一)職業の自由、(二)交易の自由、(三)住所及び移轉の自由、(四)私有財産權の確認の四大項目に分つて鳥瞰することゝする。

(一) 職業の自由を齎らした諸制度の變革

その一は、商工業に於ける「株」、「座」その他の獨占制度の撤廢であつて、明治元年五月に商法司の布達せる「商法大意」の中に於て、問屋株その他の獨占を解除し、賣償の自由を認めた。その二は、武士階級の商農工就業を許したことであつて、明治四年十二月に『華士族、卒在官の外、農工商の職業差許候に付ては、右營業候者は、業體、人名等管轄府縣に於て取調べ大藏省へ屆出づべし』との布告があつた。而して、この大藏省への屆出の件は、明治十年四月四日の布達を以て、華族の外は「其の儀に及ばず」といふことになつた。この結果、當時貧窮に苦しんでゐた多くの士族は、新たなる生涯を開拓せんとし[illegible]の如く農工商に至るに至つた。それと同時に、[illegible]由を與へたことであつて、從來百姓には、農業を除いて、商工業に就くことも、農業の傍ら商賣をすることも禁止されてゐた。その意圖せし所は、要するに農業第一の封建經濟政策から、農村人口が町人化することを阻止しやうとするに在つた。然るに維新政府はこの種の制限を解除した。例へば、明治五年八月大藏省達の中には『農業の傍、商業を相營み候儀禁止致候向も有之候處、自今勝手たるべし』とある。更に、從來、本田畑に米以外のものを作ることを嚴禁してゐたが、明治四年九月に「田畑勝手作」が許された。かくて、當時の我が人口の大部分を占めてゐた百姓が、我が産業發達の上に、自由に活躍し得るに至つた。その四は、各藩國産會所の民業束縛の解放であつて、從來は人民の職業の自由は又、各藩の國産會所の活動に依つて少からず束縛されてゐた。然るに、明治四年七月の廢藩置縣は、斯の如き民業に對する一切の束縛を一掃した。だが、三都及び諸開港場等に於ては、この種の壓迫の解放は、已に明治二年六月の太政官達に依つて斷行されてゐた。

その他明治四年八月に、、、、の稱が廢せられたと同時にこれ等の階級に職業の自由が與へられ、同四年四月の布達に依つて、從來幕府又は諸藩の獨占の形にあつた鑛山の開發採掘を一般人に許すに至つた。序に一言すべきは、明治維新に際し、從來の階級的な桎梏關係一切を解放し、人身賣買及びこれに類似したことを嚴禁したこ

る。即ち、明治五年に『僕婢、娼妓等の年期を限り、人身賣買類似者を解放し、雇使必ず一年限りとす』と規定した。それと共に政府は、當時現存の藝娼妓を權力を以て解放せんとした程、急進的な手段をも採つた。

明治維新の革命が、職業の自由を齎らすに至つた重なる點は、大體以上の如くであるが、この職業自由の經濟革命が、爾後我が産業發達の上に、如何に重大なる役割を演ずるに至つたかは、改めて説明するまでもあるまい。

(二) 交易の自由を齎らした諸制度の變革

その一は、外國貿易を自由にしたことであつて、從來の鎖國主義を破つて「開國」を決行したのは、その最たるものである。而してこの開國は、從來和蘭一國に許與してゐたのがその他の諸國にもこれを許すに至つたといふ量的なものではなくて、從來は幕府が外國貿易を獨占し、その特許を受けた者のみが、長崎の出島に於て蘭人と取引することが出來たのであるが、それ等の獨占と束縛の一切を廢し、之を一般人の自由とするに至つたのである。尤も、所謂「開國」は、嘉永六年ペルリの來朝に端を發し、安政四、五兩年に於て、幕府は既に、米、蘭、露、英、佛の五ケ國と條約を締結し、[illegible]議決定し、茲に始めて開國は、一般的の實質を見るに至つたのである。

その二は、從來の「驛傳」制度を撤廢したことである。この驛傳制度とは、舊幕時代に於ける陸上交通制度のことであるが、幕末に於てはそれが腐朽の極に達し、ために産業の發達は著しく阻害されてゐたのであつた。即ち、この制度は、一方に於て一の獨占となつて、運輸の發達を全然封じ、他方に於て、その定賃銀(幕府、諸藩武士の)が極めて安く、且つ沿道人民の農事の都合如何を問はず、參覲交代その他に要する多數の人馬を徵發し、ために農民の耐え難き負擔を強いてゐたのである。然るに、明治政府はその政權掌握と共に、驛傳制度の改革に着手し、各種の改正を試みたが、遂に明治四年十一月に至り、行人の公私士民の別なく陸運會社(政府が勸奬して設立せしめた一私立營利會社)の人馬を使用し、相對賃錢を以て旅行せしむるに至り、舊來の惡弊は根本的に撤去されることになつた。かくて運輸機關は俄然として發達するに至り、産業の發達を促進する一大拍車に化するに至つた。

その他交易の自由を齎らした制度の改革としては、先づ既述の株座等の獨占の解放がある。その結果、生産品の賣買は自由となつた。

職業の異動を[illegible]

（二） 移轉及び住所の自由を齎らした諸制度の[illegible]

これには、明治元年五月に府藩に私に關所を設けることを禁じたるに端を發し、次いで二年一月に至り、諸道の關門を撤廢して、こゝに始めて國内交通は全く自由となつた。然し乍ら當時は未だ、反政府浪人等の取締の必要上、脱藩を嚴戒し、士民を別たずその藩地に府籍することを強要する政策を採り、未だ住居の自由は完全に行はれてはゐなかつた。然し乍ら斯様な政策も、政府の基礎の固まると共に何時しか弛み、大體に廢藩置縣を劃期として住居の自由も認められるに至つた。その結果、人口は生産條件の最もよく具はれる地に職を求めて自由に流動することとなり、産業發達の上に及ぼした影響は甚大であつた。

以上は專ら農工商についてであるが、武士についても同様のことが云はれる。即ち、武士は從來は家祿に縛られて、その藩地以外に一歩も踏み出し得なかつた。然るに、その住所の自由を許されるに至り、その結果、人材の多くは中央その他の大都市に集中し、その有爲の才能を我が産業發達の上に活躍さすこととなつた。

（四） 私有財産權の確認及び尊重

これは舊幕時代と雖も、全然認めてゐなかつたわけでは無論ないが、當時のそれは武士階級の利害の上に立ち、一般生産階級のそれに對しては多くの制限が加へられてゐた。所が、明治維新の後に於ては、政府は專ら生産階級の立場に立つて、之を認め、明治維新以來の[illegible]した形に於て法制上に現はれたるは、明治二十二年の憲法發布による[illegible]確保であつた。

第四、經濟組織に於ける「經濟革命」

明治維新に於ける經濟組織の改革が、爾後の我が産業の發達に革命的變化を及ぼした重なるものとしては、（一）交通機關の革命、（二）貨幣經濟の完成、（三）會社及び銀行制度の移植の三つを擧げることが出來る。

（一） 交通機關の革命

交通機關の革命は、維新以來の我が産業の發達に最も甚大の影響を及ぼしたものである。而して維新に於ける交通機關の革命は二様であつた。その（一）は泰西文物の移植に依るもの、その（二）は舊交通制度の改廢の結果として生れたものである。而して所謂交通機關の革命は、主として前者に基因するものであつて、後者に原因する所は比較的に鮮少であつた。

先づ（一）に依る交通機關の革命は、幕末に於ける汽船の輸入に始まつたが、然し當時は主として之を軍用に利用するに止り、隨つてその經濟的影響は、未だ云ふに足りないものであつた。然るに、明治三年一月、明治政府は舊幕府及び各藩から收めた洋式船舶を民間に下附して回漕會社を設立せしめ、東京横濱と大阪神戸間に定期航海を開始せし

めしを手始めに、內外の汽船は我が沿岸に航路を開き、こゝに爾來の運輸法は一大革命に面するに至つた。即ち、汽船の發達は、運賃を低下し、航海日數を著しく短縮し、且つ正確安全にした。加ふるに、年中常に航海をなし得るなど、從來の運輸に大革命を齎らし、こゝに我が產業はその面目を一新するの基礎を築かれるに至つた。

更に陸上に於ては、內外人の鐵道布設請願に刺戟せられ、政府は政治上及び經濟上の必要から鐵道官營のことに決し、所要資本を外債に仰ぎ、先づ京濱線の布設に着手した。即ち明治三年三月に東京橫濱間の鐵道布設の測量に着手し、五年九月十二日その竣工開業式を擧行するに至り、之を手始めに、更に全國に鐵道網を張るの案を立てゝ事業を進めたのであつた。斯くて陸上の交通もこゝに一大革命に當面したのであつた。然し乍ら、その現實の發達振から見れば、明治十年頃までは未だその萌芽時代の域を脫せず、隨つてその影響が稍々具體的に產業の上に現はれるに至つたのは、少くとも明治十七八年以後のことである。それは兎も角、この交通機關の發達が我が生產力の發達の上に及ぼした影響は甚大であつた。

明治維新の交通革命は又、郵便電信制度の發達によつて齎らされた。通信は、維新以前に於ては主として所謂「飛脚問屋」の司る所であつて、その不備不便は想像の外であつた。然るに明治政府は、四年三月に至り、官營主義の下に新式郵便制度を先づ東京、大阪間に實施し、爾後之を漸次全國に擴大し、且つ賃銀も始めは區間制であつたのを、六年四月に至り之を全國均一制とし、こゝに近代的郵便制度を確立するに至つた。次で明治八年には爲替、貯金の業務が創始せられ、同時に外國郵便の開始せられるあり、こゝに我が通信制度に異常の發展をなし、以て產業の發達に多大の貢獻をなすに至つた。

通信の發達は又、電信の創設普及によつて齎らされた。顧るに、電信機が我國に紹介せられたのは、嘉永六年、米國ペルリ提督がモールス電信機一座を幕府に贈呈したに始まる。その後舊幕時代に於ても稍々電信の研究的試驗が行はれてゐたのであるが、維新政府は早くも電信の必要を認め、兵馬倥偬の裡に、英國より電信機及び技師を徵傭して、明治二年八月に先づ橫濱燈明台役所と橫濱裁判所との間に電信線を架し、專ら官用通信を授受してその技術を試み、次いで同年十二月に橫濱、東京間の架線に成功し、こゝにいよいよ公衆通信を取扱ふこととなつた。その後明治六七年頃から著しく發達し、間もなく全國の重要都市、港灣間を電線を以て連絡するに至つた。

思ふに、初め各藩の封建的權力爭奪に源を發した明治の維新が、遂に一の中央集權國家として統一されるに至つた根因の第一は、云ふ迄もなく、當時の外國の壓迫に抗するには「擧國一致」を必要としたと云ふ外的壓迫であつた。だが、その後よく三百年の封建割據の舊習を破つて、現實に統一國家としての日本を建設せしめ得た物質的基礎をなしたものの第一は、實に電信、鐵道及び汽船の普及にあつた。若しもこれ等の交通機關の發達がなかつたとせば、中央集權は到底現實し

尋ら[illegible]
並衣ヽ資本の發達を釋益したのみならず、[illegible]りと云ふべきである。

（二）貨幣經濟の完成

現代に於ける產業の發達は、貨幣經濟の完成を前提としてのことである。蓋し、謂ふ所の資本主義經濟の巧妙極る仕組みは、貨幣經濟を中樞として回轉し得るものであるからである。然るに、明治維新以前の我が經濟は、主として二つの事情から、未だ完全なる貨幣經濟となるに至らなかつた。その一は、當時の貨幣制度の紊亂と不統一であり、他の一は、貨幣の代りに米が尙ほ弘く使用されてゐたことである。

明治政府は、この紊亂せる幣制を廓淸統一すべく、早くも明治元年四月、劃一純正なる貨幣を新鑄するに決し、同年十一月大阪造幣局の設立に着手し、次いで二年十一月には舊幣制を廢して、新貨幣法を發布し、三年十一月には、已に、造幣局竣工して新貨幣の鑄造に着手するに至つた。

維新前後までに於ける我が經濟が、謂ふ所の貨幣經濟に成熟することを阻まれてゐたいま一つの根因は、その稅制と祿制とであつた。卽ち當時に於ては租稅は、專ら米を貢納として徵收し、隨つて藩士に與へる祿その他の費用も亦米を以て支給せられた。かくて當時は米を以て貨幣に代用し、著しく貨幣の機能に制限を加へてゐた。然るに明治[illegible]
[illegible]したが、[illegible]の地租改正と（二）明治八年九月七日に、[illegible]祿の額の稱呼を廢して之を金祿に改めたこととの二つであらう。（一）の地租改正の結果、從來はその年の收穫の一定割合（公けには五公五民と稱し一石の收穫あれば、五石を租稅として貢納した）を貢納する定めであつたものを、作の豐凶、米價の如何に拘らず、一定金額の租稅を納めることとなつた。この結果、百姓は、いやでもその米を賣つて之を貨幣に換へる必要に迫られて、こゝに從來貨幣經濟と最も緣の遠かつた農民を、貨幣經濟の渦巻きに引張り込むこととなつた。

次に、明治八年九月に米額稱呼の家祿を金祿に變へるに至り、政府の支出の全部が、この時に至り貨幣に統一されることとなつた。斯くて從來、米の支給を受け來つた舊武士階級、官吏の生活は、こゝに完全に貨幣經濟化されるに至つた。

又、從來は米穀其他の實物の大部分を政府自ら管理してゐたのであるが、右の二大變革の結果、その全部を農民自らをして處分せしむることとなり、これを中心として民間の商業的活動分野は一大膨脹をなし、この方面からも國民經濟の貨幣化は著しく促進された。

以上の如く、一は貨幣制度の完成の方面から、他は稅制及び財政の改革の方面から、維新以來、我が經濟の貨幣化の準備は急激に完備し來つた。而して更に、之に拍車をつけたものは既述の交通機關の發達

であつた。かくてわが資本主義經濟の一基礎は完成するに至つたのである。

（三） 會社、銀行制度の移植

明治政府が泰西の式に範り、殖産興業を旺んにせんとして先づ當面した困難は、邦人の資力小にして、近代的産業の經營に必要な資本を有せず、また歐米資本家の競爭に對抗するに必要な資力に欠けてゐると云ふことであつた。そこで、當時この困難を凌駕する方法として識者の目敏くも認めたものは、歐米に發達せる會社組織（當時は合本組織と云はれた）の移植であつた。明治政府は、早くも明治二年に全國の重なる富豪を結合し、自ら肝煎となつて、爲替會社を組織せしめ、また明治四年には、大藏省から「立會略則」（澁澤榮一著）及び「會社辨」（福地源一郞譯）を頒布して、「合本」組織の勸奬に全力を擧げたるが如きは、卽ちその結果に外ならない。だが、今日謂ふ所の會社組織の形を備へたものが愈々實現するに至つたのは、明治五年八月公布の國立銀行條例に基き、六年六月第一國立銀行の創立されたのを嚆矢とする。

斯樣に、會社組織の必要は、識者の間に高唱せられ、政府はその普及に努力した。然し、明治十年までの經濟革命時代に於ては、漸く銀行事業にその萠芽を發せるに止り、未だ云ふに足る會社組織の發達を見るに至らなかつたのであるが、明治十八九年以後のそれの著しい發達は明治十年迄に於て既に其の基礎を固めつゝあつたのである。

己に言及した如く、我が國の會社組織は、銀行事業を前衛とし、且つ本隊として發達した。これは、歐洲の會社組織が、主として貿易事業を先驅として發達したのとその趣を異にしてゐる。これは先づ明治政府が、維新の際に濫發した紙幣の整理方法として、國立銀行を設立することに力を盡し、紙幣發行の特權を賦與したことに起因する。卽ち明治政府は、主として財政上の理由から、之を誘ふに紙幣發行其他各種の特權を以てし、殆んど手を取らんばかりにして銀行を組織せしめた。だが當時國立銀行に與へられた特權の中心であつた紙幣發行權は、その後政府の不換紙幣の増發の結果、その下落となり、これにつれて、銀行紙幣の金貨兌換を要求するもの多く、結局銀行は實質上何等の特權をも享有せざることとなり、經營難に陷つた。

こゝに於て政府は、從來の銀行政策を立て直す必要に迫られたが、宛かも政府は、明治九年華士族の祿制を撤廢して之に金祿公債證書を下附するの大改革を斷行し、その下附公債を如何に利用せしむるかの方策を樹立する必要に迫られた。かくて、この二つの必要を滿すべく一石二鳥の方策として編み出されたのが、明治九年の國立銀行條例の改正であつた。この結果、國立銀行は公債を資本として、正貨兌換を必要とせぬ紙幣の發行をなし得る特權を賦與され、こゝに銀行勃興の氣運を始めて作るに至つた。之れ、我が會社の發達が、初め銀行を前衛とし、且つ本隊として進行した理由である。

兎に角、右の如き事情と經過との下に、會社及び銀行制度は新に我

[illegible]
[illegible]に接し、爾後の[illegible]業の發展を[illegible]資本[illegible]
礎を築くことが出來たのである。

第五、外國貿易の刺戟による我が經濟の變革

安政六年正月（明治元年より九ヶ年前）、横濱開港と共に、近代的意味の外國貿易は行はれた。事實、當時貿易開始と共に、江戸に於ては一時生絲その他の物資に欠乏を來し、加ふに内外の金銀比價が著しく相異する爲め、我國は滔々たる金の流出と洋銀の流入に見舞はれ、ために貨幣制度を紊し、物價の著騰を招く等、既に早くから外國貿易の影響が無いではなかつた。だが、當時に於ては、尚ほ鎖國攘夷論旺んにて、貿易は極度に脅かされ、未だ論ずるに足る發達を見るに至らなかつた。而して外國貿易の開始が、我が産業の上に注目に値する影響を及ぼすに至つたのは、明治維新を劃期とする。その劈頭に於て我が經濟政策に一大變革を齎らしたものは、明治二年の凶作に際し、多量の外國米が輸入せられたことである。この外米の輸入は、開國したばかりの我が朝野の識者に、外國貿易の利益が如何に大であるかを實物を以て教へ、この結果、從來凶作の萬一の場合を慮り、米穀の自給自足政策を固執し來つた迷夢を一朝にして覺さしめたのである。明治政府がその後、或は米穀偏重の耕作制限を撤去して耕作物の自由を許し、

[illegible]
[illegible]の發達に多大の貢獻を[illegible]
人の實物教訓に基因する所が大であつた。

だが、外國貿易の開始が、更に廣汎な變化を具體的に我が産業の上に齎らすに至つたのは、輸出入品量が相當の額に達し、その現實の壓迫が我が産業を少からず刺戟するに至つた後のことである。云ふまでもなく、その刺戟は、輸出品から來たものと、輸入品から來たものとの二つがあつて、それぞれ我が産業の發達に及ほした影響を異にしてゐる。

顧るに、維新當時外國からの輸入品が我が産業を刺戟した所は極めて華やかであり、之れに比すれば、我が輸出品のそれは極めて地味であつた。だが、その眞に我が産業に及ぼした影響から云へば、輸出品のそれは輸入品に劣らなかつた。否、當時に於ては寧ろ、輸入品のそれ以上に多大の影響を齎らした。即ち、當時に於ける我が輸出品の重なるものは、生絲類、茶、水産物、穀類、石炭、銅の五種であつて、これのみで金輸出額の九割内外を占めてゐた。就中、生絲はその大宗であつて全輸出の五割内外を占め、次に茶は二割五分を占め、この二者にて全輸出額の七八割を占めてゐた。隨つて輸出が我が産業に及ぼした影響は、この生絲、茶の二種を中心とするものが最とするが、その何れも我が農村經濟の内容に一大變革を結果した。例へば、維新以後我が農業が三百年の封建的保守の生産方法を一朝にして棄て、進取的

にョリ有利な新產業に向つて邁進する氣風を招いたものは、實にこの生絲類（蠶種をも含む）及び米の大なる輸出であつた。また我が國の產業革命は、農家の片手間仕事を犧牲として發展したものであるにも拘はらず、當時の農村經濟が大なる悲慘事にも陷らずして之を凌駕するを得たのは、實に農村に於けるこの生絲、茶等の產業の勃興に根因する。また、幕末に於て行詰つた我が農業が、維新以後新に急速の發展を示し、日清戰爭以降に於ける我が產業大發展の素地を造る根因の一をなしたのも亦、農產品輸出の道の拓けたことに基因する。この點については、米の輸出解禁の影響をも附記せねばならぬ。蓋し、之によつて、豐年その他內地に供給過剩の米が輸出され得ることとなり、往時の如き米價の暴落を防ぎ、農業の發展に資する所は大であつたからである。

維新當時の我が產業が、輸出によつて一大變革を受けたいま一つの方面は、鑛業であつた。尤も、その輸出高は、明治當初に於ては未だ遠く生絲、茶等に及ばず、水產物にも劣つてゐた。だが、輸出の解放に基く利潤の約束は、從來全く眠つてゐた我が鑛業に一大刺戟を與へこゝに石炭と銅とを中心とする我が鑛業の勃興を呼ぶに至つた。而して鑛業の發達は、大小幾多の富豪を培ひ、延いてその他の產業の資本主義的發達に資する所が多大であつた。

輸出の刺戟はまた、屏風、扇子、團扇、提灯等の紙製品、漆器、陶器等の雜貨品の需要增加のために、從來の每戶生產法に不便を生じ、玆に小規模ながら、職工を一場屋に集めて生產さすといふ一種の工場工業を我が在來の工業の上にも齎らした。尤もそれは、明治十年迄の經濟革命期には殆んど現れなかつたのであつて、その影響が漸く目立つに至つたのは、明治十一年以後のことであつた。

次に輸入品の刺戟によつて我が產業が蒙つた資本主義化の影響を見るにその中機械その他の輸入が及ぼした影響に就いては、次章に述べることにして之を除けば、その最も大なる影響を蒙つた方面は、衣服關係の生產部面であつた。卽ち、明治當初に於ける我が輸入品の重なるものは、綿絲類、綿織物、毛織物、砂糖、金屬の五種類であつて、之等で全輸入の約七割を占めてゐた。就中、その輸入の大宗なりし綿絲、綿布は、從來我が衣料の中心として全國到處に於て家庭的に生產せられてゐたのである。所へ機械製の輸入品が遙に優秀な製品をョリ廉價に供給し始めた。こゝに我が綿絲布關係の產業は、一大變化を蒙らざるを得なかつた。卽ち、その影響は遂に、從來の農業の副業としての綿絲手繰の廢滅となり、こゝに一方には農家經濟の內容に激變を起し、他方には織物業の改革、綿絲紡績事業の發生となり、廣汎なる影響を我が產業に及すに至つたのである。尤も、織物業の一大革命來については、その完成のためには別に優秀な織機及びアニリン染料等の輸入の協力を必要とした。

その他、以上の如き廣汎且つ甚大な影響は當時未だ及ぼさなかつたが、その後の我が產業發達の上に少なからぬ影響を齎らした輸入品を

して[illegible]に、石油、[illegible]、[illegible]、[illegible]諸品を擧げることが出來る。就中、石油及びランプの輸入は、我が菜種及び藍の栽培を驟減せしめ、石油事業の發達を齎らした。而してマッチ、メリヤス、石鹸等の雜貨は、間もなく我が民間の手に依つて模倣、生産せられるに至り、明治十年代には、早くも一の輸出産業にまで發達して、茲に新たに重要なる手工的産業を樹立せしめた。

最後に、輸入品が我が産業に及ぼした影響として、いま一つ注目に値ひするものは、當時の官民の歐化主義と相俟つて、我が風俗習慣が一變し、ために多くの新産業は之を追つて生起し、之に反し、在來の産業の多くは、顧客を失つて衰滅するに至つたといふことである。

第六、政府の直營に依る歐米産業の移植

維新當時の泰西産業の模倣移植につき、最も注目に値することは、必要と認めた多くの産業を、政府自ら卒先して之を興し、之を經營して範を民間に示したことである。而して政府のこの方針は、王政維新の當初から、明治十三年、財政的壓迫を根因として政府の産業方針が鋭角的に方向轉換を餘儀なくされるに至るまで持續せられ、擴張せられた。

既に關說した如く、明治維新當時、産業の資本主義的發展の必要を痛感したものは、町人ではなくて、政府の先覺者であつた。その上に、當時の町人は、幕末に於ける波瀾のために著しく疲弊し、引込み思案[illegible]を創設する等泰西式産業移植の實驗を試むことは、[illegible]不可能であつた。にも拘らず、政府先覺者に依れば、泰西式産業移植の必要に、一日も之を[illegible]すべからざる最大緊要事であつた。斯かる事情の下に於て、政府自ら利害を度外にして、泰西産業移植實驗の責に任ずるに至つたのは當然と云はねばならない。然し乍ら、明治政府をして、斯く必要の泰西式産業を直營する大方針を決定せしむるに至つた思想的背景は、資本主義的産業保護主義のそれではなく、寧ろ封建的藩政の下に從來行はれつゝあつた「國産會所」の傳統であつた。即ち封建的觀念の基本に資本主義的文明を接木せんとしたのであつた。にも拘らず、それが木に竹を接いだ結果に陷らず、却つて、この精神が明治末年までも我が朝野を支配し、我が産業の多くが、常に政府の翼下から巢立つたわけは、要するにこの封建的産業政策が、獨逸流の資本家的保護政策に何時の間にか合流して了つたからである。而して、この兩者の合流を可能ならしめた堺割は、資本主義的後進國として先進國に對抗するの必要に迫られてゐたといふ共通點であつた。

然し乍ら、右は專らその本流について云へることであつて、いま之を全面的に觀察すれば、維新政府が産業を直營するに至つた理由の重なるものとしては、少くとも左の諸點を擧げる必要があらう。

一、泰西式の殖産興業奬勵のための模範を示すため＝これは本流をなすものである。

二、軍事上幕府より取り上げたもの＝例へば横須賀、長崎等の造船所、鐵工所、兵器廠等＝の引繼經營。

三、財政上の收入的目的を多分に含めながら、旁々泰西式産業の移植の範を示さんとしたもの＝例へば鑛山經營の如き、之によつて收入を得、財政の足しにせんとしたものである。

四、紙幣下落防止策としての正貨維新政策の一として＝例へば綿絲紡績の官營乃至紡機貸下げ等。

五、外國先進國の教訓により國營主義を可とする意識に基くもの＝例へば郵便、電信、鐵道、電話、郵便爲替、郵便貯金等。

斯くて政府は、自ら率先して百般の泰西産業の移植に、經營に從事したのであつたが、この爲め政府を通じて國民の拂つた犧牲は、後ちに政府の財政を行詰らす一因となつた程に多大であつた。にも拘らず、當時直ちに現はれた効果は、寧ろ失敗に屬する方が多いといふ有樣であつた。しかし之れを大觀すれば、政府が直接實行し、經驗を積んだことによつて、こゝに始めて我が産業の地面に歐米の技術設備等の發芽成育する種は蒔かれたのであつた。而して、これは後日のことであるが、これらの事業は、爾後の發達を容易にするため、極めて廉價に殆んど全部を民間に拂下げられるに至つた。

第七、舊武士の生産階級化と經濟の革命

武士階級の維持は、維新以後幾多の事情のため、次第に不可能となつた。こゝに於て政府は、明治三年に先づ有祿者歸商農の途を開き翌四年十二月には、在官者に非ざる一般華士族卒に對し、農工商の業を營むことを許し、次で明治六年十二月には、士族以下祿高百石未滿の者に限つて家祿奉還を許し、之に對して産業資金として、永世祿奉還者には家祿六ヶ年分、終身祿には四ヶ年分を一時に下賜することゝした。爾來數次の改正あり、明治九年八月に至り從來の家祿を一定の比率を以て公債證書に代へ、その公債證書の賣買の許されるに及び、こゝに華士族卒等の歸農工商問題は、少くともその制度の部面に於ては、一段落を告げたのであつた。

然し乍ら、これ等の結果、武士の家祿收入は、金額に直して維新前に比すると、約三分の一に激減した。加ふるに、此間に米價は二倍近くにも騰貴し、武士階級の生活は甚だしく窮迫するに至つた。こゝに於て政府は、舊武士階級の生活を安定せしむるため、之に産業を授け、殖産の途を開き與へることに全力を盡さゞるを得なかつた。斯くて政府の採つた方策は極めて多岐であつたが、その重なるものは、（一）開墾事業の官營、助成、（二）官營工場、鐵道その他の職工、役員等に可及的舊武士を採用したこと、（三）各地に士族授産場を設けて士族に職業を授けたこと、（四）産業の創始に必要な資本を貸下げた等であつた。

所で、以上の如き士族の殖産興業に對する政府の援助、並に士族自身の撰ぶ方向は、共に期せずして、主として泰西産業の移植模倣に集

[illegible]
に泰西産業の移植模倣に全力を擧げ[illegible]しかし乍ら、斯の如き目的のために、政府が國民の資力を動員し得る力には限りがある。こゝに於て、明治政府は、泰西産業の移植模倣の實行者を、更に廣汎なる民間に求めざるを得なかつた。しかし、當時の農商工階級は已述の如く卑屈無氣力にて、到底、明治政府の要求するが如き新事業、新企劃の冒險を敢行し得る資格を備へてゐない。然るに、士族は已述の如き生活の壓迫から、新に生産界に飛込まざるを得ざる事情に直面してゐたが、彼等士族としては、此際、舊來の農商工の分野に於て、舊來の農商工階級と競爭するよりも、同じく「新米」として生産界に乘り出すからには、當時、誰にも同樣に新規の事業たる泰西産業の移植模倣に進出するを遙かに有利とした。且つ、此の方向には、就中、政府の保護援助等が已述の如く厚かつた。

斯樣にして、舊武士にして、泰西産業の移植模倣の分野に、新生涯を見出すものが就中多數であつた。尤も、これ等新産業に從事するに至つた士族の數は、士族全體に比すれば割合に少かつたが、これを維新當初に於て、歐米よりの移植産業に從事せし人員より云へば、その大多數は舊武士階級出身であつた。而して維新以後野火の如く勃興した泰西式産業が、その必要とした多くの優秀な新産業軍を容易に市場に求め得たわけは、約二百萬人の舊武士が、新に産業軍として加入し來り、その要求に應じたからであつた。かくて、維新に於ける武士階級の[illegible]は單に[illegible]のではない。[illegible]は[illegible]階級が、一方には自らを[illegible]すると共に、既にその手を以て自から再び新時代の支配階級として誕生せしめた[illegible]兩度の一大轉換を意味するものであつた。こゝに於ても、我が維新の經濟革命は、[illegible]に値する獨自の歴史的發展を示してゐる。

斯くして生産階級化した舊武士が、泰西式産業の移植に於て演せし役割の中、その最も顯著なものの第一は、會社制度の採用に於けるそれであらう。蓋し、我が國に全々無經驗なる泰西式會社制度の移植に際し、この會社の設立、成育並にその機能を十分發揮せしめ得る人材は當時に於ては、智的、精神的に最もよく訓練された武士階級を措いては、他にそれを求めることは殆んど不可能であつた。又之を當時人材の巢淵であつた武士階級の側から云ふも、有能の輩がその手腕を經濟の上に振ふには、會社經營の任に當るを最も有利とした。蓋し、民業よりも官吏を榮譽とした當時にあつては、同じく民業に從事するにしても、相當の社會的榮譽と責任を荷ひ得る會社經營を何よりも先づ欲したであらうからだ。

尙ほ、會社組織の發達に對する舊武士階級の貢獻として、此際看過し得ざることは、明治十四年に岩倉卿等が奔走して華族を糾合し、日本鐵道株式會社を興し、東京青森間の鐵道敷設に着手したことである。蓋し、之によつて鐵道事業の私設經營の有利なることが一般に證明せられ、ここに明治十九年以後に於ける鐵道會社勃興の端緒を開く[illegible]

たからである。

その他、右の如く人的意味に於てのみならず、その資本的意味に於ても、舊武士階級は會社組織に際し大なる役割を演じた。即ち、本文の他の個所で述べた如く、我が國の會社の前衛をなしたものは銀行であつたが、當初創立された各銀行の資本の大部分は、この舊武士の有した金祿公債から成り立つてゐる。尤もそれは、政府の巧妙なる國立銀行條例（明治九年改正の）に依るからくりにあつたのではあるが……

又、舊武士階級は、技術者として、我が産業發達の中心的位地を占めてゐる。例へば、我が泰西式産業發生の培養場であつた官營諸産業に於ける技師、技手、職工、女工の大部分は、殆んど舊武士階級の出身者であつた。又當時、外國に留學せし者或は我が學校に學びし農、工、理、化學の卒業生の多くも亦、舊武士出身であつた。更に、民間に於て泰西産業の移植に成功せし者の多くも亦舊武士出身者であつた。

以上は極めて例示的ではあるが、之れに依つて、維新當初の泰西産業の移植時代に於て舊武士階級が如何に大なる役割を演じたかの大勢を鳥瞰するに難くないであらう。

第八、維新「經濟革命」の破綻と新經濟政策

維新の「經濟革命」は以上の如くにして敢行せられた。しかし、それの實現には、多大の費用を蕩盡した。例へば、（一）維新當時の戰亂を始め、その後の百姓一揆其他の暴動の頻發、佐賀の亂、西南役等の内亂、台灣征伐其他の外患等に費されたる金額は今日の金にして約二億圓に達してゐる。（二）又、明治政府は「經濟革命」の斷行者であつたが、しかし舊封建制度の負擔を、勞農露國の革命の如く抹殺したものではなくて、之を引繼ぎ負擔した（その額は少なからず削減せられたが）。その額が今日の金にして約五億圓を算し、明治當初の貧弱なる富力を以てしては、その元利の支拂は極めて重い負擔であつた。（三）以上のみでなく、明治政府は、已述の如く、利害を度外して、莫大の費用を投じ、泰西産業の移植模倣に力を盡した。云ふまでもなく、此のためには巨額の金を支出した。（四）更に又、泰西産業の移植模倣は又民間に於ても、出來るだけ敢行せられた。この費用も鮮少ではなかつた。（五）加ふるに又、當時の歐化萬能主義と外國資本主義製品の優秀とは、我が風俗を一變し、歐米品の消費は滔々として國内を風靡した。（六）然るに、此間に於て、國内經濟は或は政治上の不安動搖のため、或は經濟制度の激變に由來する混亂のため、或は歐米品の競爭のため、著しく衰微凋落してその生産は激減した。

斯樣のわけで、明治維新以後に於ける「經濟革命」の遂行に必要なりし多大の物質人物——大砲小銃軍艦其他の兵器から、汽船鐵道機械其他の設備品、外人技師職工費留學生等の費用、毛織物綿絲布等の各種の消耗品等々——の殆んど全部分は、之を外國の供給に仰がざるを

[illegible]なかつたか、しかし、その支[illegible]

を以て賄ふこと能はず、その大部分は、過去の蓄積の貨幣に由つて賄はれた。即ち、金銀貨の流出に專ら依存したのであつた。だが、斯様な財政の仕方には限りがある。何時かは、國內の金銀か涸渇せざるを得ないからだ。而して、我が明治維新の革命に於ては、此の財政的破綻が、明治十年の西南役を機緣として遂に暴露せられた。即ち、西南戰役の後に襲ひ來つた紙幣の暴落がそれである。例へば、明治十年頃までは政府の不換紙幣は、金銀價と略ぼ同じ値段であつた。それが十一年頃漸く下落の勢ひを強くし、十四年に於ては金一圓に對し紙幣一圓九十三錢、即ち約半値にまで暴落したのである。

之を繰返して極く砕いた言葉で云へば、此の紙幣の暴落は、從來の如き明治政府の行き方、即ち急激果敢なる資本主義化政策に對し、當時の我が經濟實力が、その犧牲の多大なるに最早耐へ得ざるに至つて、茲に之を表明するに至つたものである。當時、我が朝野は、此の警鐘を以て、「國家の破産」を脅威するものとして怯へたが、その意味は要するに、之を以上の如く理解すべきであつたのであつた。――當時は左様にハッキリとは考へずに、單に紙幣の暴落を以て國家の破産として之に怯へたのであつたが……。

斯様にして、明治十一年以後の我が朝野は、「國家破産」の聲に脅かされ、何は措いても此の紙幣の下落を喰ひ止めざるべからずと云ふことに全力を盡すに至つた。而して、此間幾多の手段の試みられたる後、[illegible]財政整理の[illegible]大改革[illegible]十一年[illegible]た。この改革は、謂ふに、或る點まで、所謂維新の一新經濟政策[illegible]の方向轉換と一脈相通ずるものがあつて、研究の興味に値する點が多いであらう。明治十三年十一月の大改革とは即ち左の如きものであつた。

一、財政の一大整理を敢行した。

（イ）十三年十一月五日第四十八號布告を以て、從來中央財政より支辦せしものの中、

（一）府縣廳舍建築修繕費、（二）府縣監獄費等を地方稅支辦とし、且つ地方稅支辦の府縣土木費中、官費下渡金を十四年度より廢止し、その代りとして、地租に對する地方稅賦課率を從來の「五分の一以內」より「三分の一以內」に擴張す。

（ロ）中央諸官省の經費を節約し、十四年度歲計は、前年度に比し官省費百餘萬圓、府縣費二百五十餘萬圓を減ず。

二、十三年十一月五日、工場拂下の概則を定め、從來工業勸獎の爲め官設せる諸工場、諸鑛山は、漸次之を人民の營業に歸せしむることとし、之を諸省に令達した。

三、同日、海外支拂經費は、海關稅その他より收入する正貨の範圍に止めるの豫算を立て、勉めて正貨の仕拂を減少する政策を採り、この目的のため各廳をして一般の歲計豫算の外、別に正貨の歲計豫算をも作らしめた。この結果、外國派遣官吏、留學生、傭外國人、外國品購入代等は、尠からず節約を强ひられ、茲に邦人尊重、國產使用傾向の機緣を作るに至つた。

右の財政策に於ける大改革が、當時のわが經濟政策の上に意圖せし精神は、要するに、明治政府從來の經濟政策に對し、左の如き變革を齎らすこととなつたのである。

一、財政の一大緊縮に因つて、從來の如き急激なる人爲的積極的資本主義化政策は一時中止せられた。

二、就中、政府の必要と認めたる泰西産業の移植は、損得に拘らず、政府自ら巨大の資本を投じて模範的に官營するといふ方針は一擲された。即ち、民營に於て利益の擧がる見込ある産業のみが、移植せられ、然らざるものは放擲されるといふ資本主義的な新方針に一變した。

三、我が産業の急激な資本主義化のため、從來大規模に行はれた外人採用、外國品使用、留學生派遣等の外國萬能主義は、海外に支拂ふ「正貨支出」を可及的節約する目的のために一大制約を受け、之に代つて、出來るだけ内國人、内國品を使用するといふ國産奬勵的政策に一變した。

四、從來明治政府の經濟政策は、泰西産業の移植模倣に專ら集中したものであつたが、右の(三)と同じ理由の下に、輸出品奬勵の必要起り、玆に、明治政府の經濟政策は、在來の我が産業發達のために多大の努力を拂ふに至つた。

五、紙幣整理の他の半面である物價の下落によつて、民間の消費力を著しく制限し、外品の消費を抑へ、内産の輸出を促進し、從來の消費關係を一變せしめた。

六、以上の如き各種の新經濟政策の結果として、從來の如き急激な強行軍的な泰西産業の移入模倣の歩調は一變して、專ら之を資本主義的處理の進行(即ち利益ある産業のみ移植する)に委することゝなつた。

右の中、我が資本主義發達史上、特に注目に値する點は、(二)の工場拂下方針の決定についてゞある。蓋し、この新政策は、明治政府從來の實際的資本主義化政策の根幹とも稱すべき、模範工場の官營主義に對し、急角度の方向轉換を聲明したものに外ならぬからだ。之を轉機として明治政府の經濟政策は極めて濃厚なる慈父的干渉主義から、少からず自由放任主義的な方向に轉じ、必要産業の直接官營の方針からその間接保護(資本家援助)の方針に移行して行つた。而してその原因は專ら財産的原因に基くものであつて、或る一部の人々が誤り傳へる如く、當時我が産業が既に獨立し得るに至つたといふ理由からではなかつたのである。而して、明治十四年の農商務省の設立は、明治政府の此の新經濟政策の更に具體的表現に外ならなかつた。

以上に由つて容易に看取し得る如く、明治維新に發足せる我國「經濟革命」の澎湃たる進行は、その急激果敢なる歩調を、大體に明治十一年前後まで續けたが、しかし、此時に於て、從來の如き急激果敢の資本主義化政策の持續は、財政的に不可能となり、玆に明治政府は急角度の方向轉換を意味する「新經濟政策」を採用するに至つたのであつた。即ち、玆に、明治維新の經濟革命は一先づ、時代を劃したのであつて、それ以前と以後とでは、その政策に少からぬ差異を認め得るのである。(完)

米國金融資本の世界征服

丸岡重堯

大債務國より大債權國への轉化

米國の資本主義は大戰以來急激な發展を遂げた。それは勿論歐洲大戰其者に歸し得られる。即ち一つには其の輸入を多く仰ぐ歐洲に於ける工業生產力の激減があり、加ふるに、船舶不足に依る運賃の激騰があつて、米國に於いては原料品の價格と製品の價格との間に開きが大きくなり、それが愈々擴大するに至つて、大戰前からの工業化の過程が激成されるに至つたのである。尤も之れは米國のみに限つたことではない、東南洋、アフリカ及び南米等の農業國乃至は半農業國たる域を脫しない植民地並に後進國一般に就いても等しく云ひ得ることである。乍併、戰時中米國の資本主義が此等植民地並に後進工業諸國に比し比較にならぬ飛躍的大發展を遂げたことは更めて云ふまでもない所である。蓋しその理由は、米國は大戰前旣に歐洲以外に於ける最大最强の資本主義國であつたことゝ、且つその大發展を遂げしめ得た潛在的經濟力があつたからだ。謂ふ所の潛在的經濟力とは、一つは資源及び原料の豐富であることゝ、いま一つには人口の多大なることである。只單に人口が多いといふのみでは問題にならぬ。その人口が所謂教養せられて購買力の增進となり、組織化されて能率ある勞働力を提供することを條件とする。米國の人口は正にそれだ。更に米國の資本主義をして他の追隨を許さぬ飛躍的大發展を遂げしめ得たいま一つの理由は、米國が大戰半ばに聯合國側に加擔して、聯合國側の兵站部として軍需品、食糧品、其他原料の供給に從事したことである。斯くして米國は歐洲諸國が國を擧げて戰爭に從事し、且つ大戰後交戰國が疲勞し盡して餘力なきに乘じて最も大なる發展をなし得たのである。

吾々は右の事實を最も端的に同國の外國貿易の激增のうちに見ることが出來る。尤も茲では同國資本主義の發展其者を問題とするのでないから、其內容に立入つて深く觀察する必要はない。只その輸出入總額、就中輸出の增加から結果される出超額の增加に注意すればよい。即ち一九一四年度（同年六月末に終る年度）の輸出は二十三億六千五百萬弗であつたものが、戰爭の進むにつれて每年增加の程度を强め、一九一七年度には六十二億九千萬弗となり、翌一九一八年度には僅少ながら六十億弗を割つたが、一九一九年（曆年）には七十九億二千萬

弗となり、翌一九二〇年には遂に八十二億二千八百萬弗の巨額に達した。斯くして此間出超も一九一四年度の僅か四億七千百萬弗であつたものが、翌一九一五年度には十億弗を突破し、一九一八年度を除いては、毎年十億弗前後を増しつゝ、一九一九年には遂に四十億一千六百萬弗の出超額を示した。開戰當時（一九一四年七月一日）から同年末までの出超額累計實に百五十五億四千百萬弗の巨額に達する。之が米國が内に資本主義の發達を遂げつゝ戰爭に依つて直接かせいだ金高である。更に昨一九二七年末までの累計では實に二百卅六億四千五百萬弗に達して居る。

右の如き米國貨物の出超が專ら對歐關係から招來されたことはいふまでもないが、試みに、開戰以來一九一九年末までの對歐出超額をみるに、百七十億弗、更に一九二七年末までには實に二百七十三億弗からの出超を示し、何れも前記の米國全體としての出超額以上に出てゐる。

然らば、斯うした巨額の出超額は如何に處分せられ、乃至は如何なる形に轉化されたかといふに大様次の四點に盡きる。

（一）　英國を主とする歐洲に存在してゐた米國の公社債等有價證券を償還又は買戻したこと、その金額は大凡そ五十億弗、換言すれば、米國はそれだけ戰前の對外借金を返したことになる。

（二）　金の流入である。即ち金の純流入は開戰以來急增して一九一七年度までの三ヶ年間に十一億一千四百萬弗に達した。尤も閉戰直後に於ける歐洲諸國の急需に促されて一九一九年末まで三億六千六百弗を流出したが、其後は引續き流入し、一九二〇年――一九二四年間に十五億四千二百萬弗の純流入である。一九二五年には却つて一億三千四百萬弗を流出し、一九二六年の流入は九千八百萬弗、一九二七年のそれは六百萬弗と近年甚だしく減少して來て居る。が結局、開戰以來の純流入は二十二億六千八百萬弗に上つて居る。斯くして戰前（一九一三年末）世界金保有高（流通高を含む）五十四億二千百萬弗の三割五分五厘を占めてゐた米國の金保有高は昨一九二七年末頃には四十六億弗に達し、全世界の約半分近くを占むるに至つて居る。

（三）　所謂對米戰債と稱せらるゝ所のものであつて、元金總額百億弗以上に達する對歐債權を所有したことである。云ふまでもなく、米國政府が歐洲聯合國の戰時債務に應じて債權者となり、民間事業界が事實聯合國の兵站部として活動し、その結果既述の如き出超を示したのであるが、何れにしろ此出超額の最も多くの部分は米國政府の對歐戰債として殘つてゐるのである。今日ではそれに利子がついて、總額百卅數億弗近くの巨額の債權となつて居る。

（四）　更に民間金融資本家の諸外國の政府、地方自治體及び會社、其他私團體に對する投資である。米國商務省調査に據ると、昨一九二七年六月末現在に於いては、その投資總額大凡百廿三億弗と計算されて居る。近着の雜誌に散見したムーディス投資調査所（Moody's Investors Service）の調査に據ると、最近は百卅億弗近くに達して居る。勿

論、調査局の報道に依るも、大凡その數とみて大差なからう。

斯くして戰時から戰後にかけての米國資本主義の飛躍的發展は、出超額の激增となつて現はれ、更に右の如き諸形式をとつて、米國をして債務國より債權國に、資本輸入國より輸出國に轉換せしめたのである。

米帝國主義の基礎たる資本輸出狀態

扨て、吾々はアメリカ帝國主義の基礎をなす米資の輸出狀態に就いてみなければならぬ。即ち前揭(四)に就いての詳述である。

既述の如く、米國は、歐洲大戰前に於いては、未だ尙債務國であり、資本輸入國であつた。即ち一九一三年頃には、米國は貸付資本の形態に於いて、歐洲、主として英國から約五十億弗の債務を負つてゐた。尤もラテン・アメリカを初めとしカナダ、歐洲等へは米國は大凡そ廿六億弗近くの債權、即ち投資を持つてゐた。大戰の進むにつれて、債務は全く償還され、反對に米國資本の對外投資は年と共に激增した。そして此の米國の對外投資增加の大勢は、戰爭後の短期間の經濟界の繁榮に打續く一九二〇—二一年の反動的不況以來に於いても依然として續けられた。米國商務省の調査に據ると、一九二三年末には既に八十一億五百萬弗に達し、一九二四年末には九十二億三千萬弗、一九二五年末には遂に百億弗を突破すること四億五百萬弗となつた。それが既述の如く一九二七年六月末には百廿二億弗、最近には百卅億弗近くの巨額に達したのである。斯くして近年米國の年々納むる所の利子收入のみで七億弗に達する。

然らば此等米國對外投資の方向如何。そして又その方向の變化はどうか、次に之れを矢張、同國商務省の調査についてみる。試みに先づ別表を見よ。

米國對外投資國別表(單位百萬弗)

投資先	一九一三年末	一九二三年末	一九二四年末	一九二五年末	一九二七年六月末
ヨーロッパ	三五〇	一、三〇〇	一、九〇〇	二、五〇〇	三、三五〇
ラテン・アメリカ	一、三三〇	三、七六〇	四、〇四〇	四、二一〇	四、八〇〇
カナダ及ニュウ・ファウンドランド	七五〇	二、四五〇	二、六〇〇	二、八二五	三、一〇〇
アジア及オーストラリヤ等	一七五	五九五	六九〇	八七〇	九五〇
計	二、六〇五	八、一〇五	九、二三〇	一〇、四〇五	一二、二〇〇

先づ最近の一九二七年六月末現在に就いてみるに、依然としてラテン・アメリカ、即ち中央及び南アメリカに對する投資が最も多く、四十八億弗、全投資額の三割九分を占めて居る。之れに次いでは歐洲に對する卅三億五千萬弗、全體の二割七分である。米國の對外投資地としては從來久しくカナダ及びニュウ・ファウンドランドに次ぎ第三位の位置にゐた歐洲に對する投資が近年漸次增加し遂に僅少ながら初めて之れを追越し、第二位の位置についたことは注目に値する。何れこの點は後述するであらう。カナダ及びニュウ・ファウンドランドに對する投資は卅一億弗、全體の二割六分である。アジア及びオーストラリヤへ

へは九億五千萬弗、全體の八分弱に當る

ラテン・アメリカへの投資

——モンロウ主義の意義——

そこで先づラテン・アメリカへの投資に就いてみる。更めて云ふまでもなく、貨物の輸出入が單にそれ自身に止まる限り、それは深い意味を持つものではないが、資本の輸出入となると、それは資本主義制の下に於いては、重大なる意義を持つ。即ち或は相手國の財政の上に支配力を及ぼし、或は鑛山、鐵道、耕地、其他恒久的固定資産の上に魔手を伸すに至るからである。等しく資本の輸出、對外投資といふも之れを性質から大別して一つは貸付資本としての形態をとる證券投資と、いま一つは直接産業資本としての投資とがあつて、既述の如き投資國の魔手が振はれる危險性の就中多いのは後者、即ち直接産業資本投資である。而もラテン・アメリカへの米國の投資は直接産業投資が比較的最も多い。此點は殊に、アメリカ帝國主義がモンロー主義の美名の下に暴威を逞うする所以として注意を要する。

尙、玆に此方面に於ける米國の投資に關聯して看過することの出來ないのは、此方面に於ける英國の投資である。最近の……其他歐洲諸國の……が、英國のそれは未だ六十億弗に達し、……億六千三百萬弗を算して居る。之れにみても此間、米國が此方面に於いて先進投資國たる英國を主とする歐洲諸國と如何に鬪爭し來つたか、また尙此後如何に多大の鬪爭を戰はなければならぬかゞ窺はれよう。そは兎に角、米國の此方面に於ける投資の國別はどうなつて居るか。之れを前揭のマッケー會社の調査に據つて窺ふに、先づ第一位を占むるは、キューバの十四億弗、第二位はメキシコの十二億八千八百萬弗、後はずつと下つてチリーの四億五千百萬弗である。それに次いではブラジル、アルゼンチン、更に下つてはコロンビヤ、ヴェネズエラ、ペル、ボリヴィア、中央アメリカ諸國等である。

キューバに對する投資は云ふまでもなく主として同地の主要産業であり世界で第一位を占むる砂糖事業に對するものである。同國は世界に於ける甘蔗の二割八分を生産し、その收穫の八割五分は米國に輸入され、米國で消費される砂糖の大凡半分はキューバから來ることになつて居る。尤も米國の同國に對する投資のうち砂糖への投資は約六割であつて、其殘は實に鐵道、公營物、都市の土地、煙草、工場、鑛山、商業、農業、港灣等に對するものである。誠にキューバは一八九六年

而も開戰以來最近までに五割の增加を示してゐる。その主なるものは同國主要産業たる石油事業への投資である。抑々メキシコは米國に次ぐ石油産國であつて、石油資源の漸次涸渇を憂へられてゐる米國としては近隣に位する此豐富なる石油資源を見逃がすわけにはゆかない。之れが爲めに、有らゆる機會を利用し、殊に政狀の不安なるに乘じて革命を獎勵し、加勢さへすることに依つて、內政干涉を行ひ、自國の利益の伸張をはかつて來たのである。誠に一九一〇年以來の同國の歷史は全く米國の內政干涉其者の歷史であり、又それに依つて最も苦しめられて來たのである。斯樣な事情の爲めに、メキシコは近年常にラテン・アメリカに於ける反米同盟の牛耳を執り、常にその運動の先頭を切つて來た。

チリーへの投資が多く直接間接に硝石事業への投資であることは想像に難くない。

其ブラジルにしろアルゼンチンにしろ、何れもその國の主要産業へ向け投資が行はれてゐること云ふまでもないが、ラテン・アメリカ全體を通じて何れの國にも夫々多額の投資がなされて居るのは、鐵道及び其他運輸機關に對してゞある。而も鐵道及び其他運輸機關への投資が比較的最も多いのは、何んと云つても中央アメリカだ。そして玆に於いては對外投資と云へば殆んど米國が押へて居る。英國の投資が多いのは南米、殊に米國から遠く離れて居るアルゼンチン、ブラジル等である。

米國が中央アメリカに於いて就中鐵道及び其他の[illegible]投資をなしたといふことは、一つは之れに依つて此地方[illegible]をなさんとしたことに在ること勿論であるが、いま一つ[illegible]次に重要なのは、軍事的關係に依るものである。今日、中[illegible]に於いて經濟的にも又は政治的にも最も重要なる運輸機關[illegible]ふまでもなくパナマ運河である。ところがパナマ運河は米[illegible]りの缺點を持つて居る。假令又持つてゐないとした所で、[illegible]つ之れに代はる兩洋をつらねる運河が是非共に必要である。[illegible]れが爲め夙にニカラグアを貫ぬく一大運河開鑿の計畫を樹て、[illegible]現に狂暴なる努力を試みて來たのである。ニカラグアを中心と[illegible]ント・ドミンゴ、ハイチ等中央アメリカに於ける米國の內政干涉[illegible]は實に玆に在るのである。昨春以來、ニカラグアに又復內亂が[illegible]れて居る。モンカダ將軍とサンディノ將軍との爭鬪の間に米國が[illegible]込み、軍隊を遣して前者を助け後者を絶滅せんとして戰を續けて居る[illegible]また一九〇九年の內政干涉に依る擾亂を繰返してゐるのだ。本年々初に於いては、同國一都市に於いてサンディノ將軍は共和制を宣言し勞働者農民は彼を支持し、コリントには武器積込拒否のストライキが行はれ、南米の總ての國々では夫々米國のニカラグア內政干涉反對の運動が起された。殊に注意を要するは、其地理的關係から米國の干涉を受くること最も少なく、從つて反米感情の最も疎かつたアルゼンチンが此問題に就いて果然反米の一大アジテーションを起したことであ

る。

斯くして今より三年以前、アメリカ反帝國主義同盟 Anti-Imperialist League of America が創立された當時は、到る所、冷淡な態度がとられてゐたが、其後各國に支部が出來、支持者も今日では二百萬以上の個人及び團體員を有して居る。そして該同盟の中心的構成員は勞働者及び農民である。この同盟に結成されない一般市民の間にもニカラグア問題を中心として反米感情が最近著しく萌じて來たことは既述せるアルゼンチンの事例にみて明かであらう。

カナダへの投資
——平和的侵入——

次は、カナダへの投資である。カナダは政治的には兎に角、經濟的には、地理的關係も多分に與つて、全く米國の一州たる感がある。歐洲大戰前、未だ米國が自國内に於いて發展の餘地を十分持つてゐた當時は問題はなかつたが、大戰以來同國資本主義の飛躍的發展の爲め、カナダの豐富なる資源は米國にとつて決定的に必要となつた。カナダは耕地面積五億三千七百八十餘萬エーカア、米國の二億九千三百八十餘萬エーカアに比し約二倍半、森林面積は米國の五億エーカ

あると云はれて居る。米國の投資は此等を日當に行はれて居る……る。大戰前に於いては餘り資本を要しなかつたが、兎に角、殆んど英國資本の獨占であり、大戰の終つた一九一八年ですら同國に於ける外國資本二十四億一千七百萬弗のうち英國は未だ十八億六千萬弗からあり、米國は四億一千七百萬弗に過ぎなかつた。然るに、一九二〇年以來米國は英國を追越し、一九二三年に既に外國投資總額四十七億九千六百萬弗中、英國は廿億弗に足らぬに反し、米國は廿四億七千八百萬弗となり、其後年と共に激增して居る。斯くして今日、同國の重要なる經濟的活動の多くは事實米國金融資本の支配下に在る。而もカナダへの米國金融資本の侵入は何等の兵力乃至は權力の強制を伴はなかつたことはラテン・アメリカの場合と全く事情を異にする。事實、米資は、國内に於いて東部から西部に移動すると全く同樣にカナダに流入するのであつて、政治的國境は何等の障害とならぬ。カナダは今日全く米國の一州に外ならぬ。米國に於ける經濟統計が往々カナダの分を含めるも亦此間の事情を示すものとしてみられる。

支那への投資

西し同國は最近までに石油の増加を示してゐる。その主なるものには自國主要産業たる石油事業への投資である。就中メキシコは米國に次ぐ石油産出國であつて、石油資源の稍々涸渇を憂へられてゐる米國としては近隣に位する此豊富なる石油資源を見逃がすわけにはゆかない。之れが爲めに、有らゆる機會を利用し、殊に政狀の不安なるに乘じて革命を煽動し、加勢さへすることに依つて、内政干渉を行ひ、自國の利益の伸張をはかつて來たのである。蓋し一九一〇年以來の同國の歷史は全く米國の内政干渉其者の歷史であり、又それに依つて最も苦しめられて來たのである。斯樣な事情の爲めに、メキシコは近年常にラテン・アメリカに於ける反米同盟の牛耳を執り、常にその運動の先頭を切つて來た。

チリーへの投資が多く直接間接に硝石事業への投資であることは想像に難くない。

其ブラジルにしろアルゼンチンにしろ、何れもその國の主要産業へ向け投資が行はれてゐること云ふまでもないが、ラテン・アメリカ全體を通して何れの國にも夫々多額の投資がなされて居るのは、鐵道及び其他運輸機關に對してゞある。而も鐵道及び其他運輸機關への投資が比較的最も多いのは、何んと云つても中央アメリカだ。そして玆に於いては對外投資と云へば殆んど米國が押へて居る。英國の投資が多いのは南米、殊に米國から遠く離れて居るアルゼンチン、ブラジル等である。

米國が中央アメリカに於いて或は鐵道及び其他の運輸機關に多くの投資をなしたといふことは、一つには之れに依つて此地方の資源の開拓をなさんとしたことに在ること勿論であるが、いま一つには、そしてこれ大に重要なのに、軍事的關係に依るものである。今日、中央アメリカに於いて經濟的にも又は政治的にも最も重要なる運輸機關と云へばいふまでもなくパナマ運河である。ところがパナマ運河は軍事的に可なりの缺點を持つて居る。假令又持つてゐないとした所で、他にいま一つ之れに代はる兩洋をつらねる運河が是非共に必要である。米國は之れが爲め既にニカラグアを貫ぬく一大運河開鑿の計畫を樹て、その實現に狂暴なる努力を試みて來たのである。ニカラグアを中心とするサント・ドミンコ、ハイチ等中央アメリカに於ける米國の内政干渉の根因は實に玆に在るのである。昨春以來、ニカラグアに又復内亂が醸成されて居る。モンカダ將軍とサンテイノ將軍との爭鬪の間に米國が入り込み、軍隊を遣して前者を助け後者を絶滅せんとして戰を續けて居る。また一九〇九年の内政干渉に依る擾亂を繰返してゐるのだ。本年々初に於いては、同國一都市に於いてサンテイノ將軍は共和制を宣言し、勞働者農民は彼を支持し、コリントには武器積込拒否のストライキ行はれ、南米の總ての國々では夫々米國のニカラグア内政干渉反對運動が起された。殊に注意を要するは、其地理的關係から米國の影響を受くること最も少なく、從つて反米感情の最も強かつたアルゼンチンが此問題に就いて果然反米の一大アジテーシ

依つて、更に、此等の諸國は勿論のこと、歐洲全體への米資流入の大勢が激成された。

本年の一月廿一日のフイナンシヤル・アンド・クロニクル誌は例に依つて昨一九二七年中の米國の對外投資（茲では證券投資）を要略して居るが、それに據ると、カナダへの投資三億九千八百萬弗、ラテン・アメリカへの四億二千六百萬弗に對し歐洲へは七億五千三百萬弗に達して居る。中にもドイツへの投資は依然として最も多く二億八千六百萬弗近くを占めて居る。イタリに對しても一億一千九百萬弗近くあつたことは注目を惹く。

フランスは對米戰債支拂を遲延し居た爲め、米國は之れに業をにやし、過去三年間同國の產業的外債の發行を禁止してゐたが、本年一月中旬之れを正式に解除した。蓋し米國が略安定に目安のついた同國へ大々的投資を行ふ爲めであるとみられて居る。

斯くの如くして今日、歐洲諸國の產業は多分に米國金融資本の支配下に在り、又支配下に來らんとして居る。ドイツの如きは其重要產業の大部分が然うであるとのことである。而も茲に注意すべきは米國の對歐投資が持つ特殊的意義である。といふのは他でもない、歐洲の產業は多く世界的市場を有し、世界的霸權を掌握して居るからであつて、そこへの米國資本の投下に依る支配の確立は、米國產業の强敵を强敵として無くなすことになるからである。

對米戰債への一瞥

歐洲諸國が米國に負ふ所の負債は啻に右の民間金融資本家に依る投資のみに止まらず、更に又、先にも言及して置いた歐洲諸國の政府が米國政府に負うて居る戰時債務があることを忘れてはならぬ。米國政府が戰時債權として有するもの總額百十五、六億弗のうち歐洲以外のものとしてはリベリヤの二萬六千餘弗、ニカラグアの十六萬六千弗であるが勿論問題ではなく、他は悉く對歐債權である。そして實に之れは戰後米國の帝國主義に對する主要なる基礎をなしたものである。と共に更にその支拂期間の續く來るべき六十年前後（支拂期限は何れも六十二年、協定期日は一九二三年乃至一九二六年）は、歐洲諸國に總額二百廿一億弗からの支拂を强制するのである。その實行の可能なると否とを問はず、斯うした事情の下に於いて歐洲に對する米 の帝國主義的魔手は此後益々振はれるであらう。

對米戰債國別（單位千弗）
Wirtschaft und Statistik 1927. 1. Januar-Heft に據る

	債務元本	支拂協定額	利子共支拂額
英國	四、〇七四、八一八	四、六〇〇、〇〇〇	一一、一〇五、九六五
フランス	三、三四〇、四一六	四、〇二五、〇〇〇	六、八四七、六七四
ベルギ	三七七、〇二九	四一七、七八〇	七二七、八三〇
イタリ	一、六四七、八六九	二、〇四二、〇〇〇	二、四〇七、六七七

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
ルーマニア	[illegible]六、一二八	四四、五六〇	一一〇、[illegible]
ポーランド	二五九、六六六	一七八、五六〇	四三五、六八七
チェッコ・スロヴァキア	九一、八七九	一一五、〇〇〇	三一二、八一一
エストニア	一三、〇六六	一三、八三〇	三三、三三一
フインランド	八、二八一	九、〇〇〇	二一、六九五
ラトヴィア	五、一三二	五、七七五	一三、九五八
リトアニア	四、九八一	六、〇三〇	一四、五三一
ハンガリ	一、六八五	一、九三九	四、六九三
A B 計	九八〇、九六六	一、五三三、三五四	三、一四五、五二五

（Bは上記チェッコ・スロヴァキア以下ハンガリまでの諸國）

（備考）Aはドイツより賠償金を取得する諸國
　　　Bはドイツより賠償金を取得せざる諸國
尙、Bの內には次の諸國がある。

オーストリ	三一、二七二、四二二弗	內利子	七、二一六、七一二弗
（一九四三年迄支拂猶豫）			
リベリア	三三、四一八	同	七、四一八
（特に整理協定をなさず支拂實行）			
ニカラグア	八四、六九〇	無利子	
（同　上）			
ロシア	二六〇、九九一、四〇一	同	六八、三九〇、一〇四
（承認せず）			

此等の元本及び利子金額は一九二五年十一月十五日の狀況に據る（[illegible]）

只今件、最後に少しく注意を喚起して置き度いことは、歐洲に對して斯様な巨額の投資乃至は債權を持つて居る米國は、それが爲めに近年明かに、矛盾に陷つてゐるといふことである。いふ意味は斯うだ、米國が此等巨額の投資乃至は債權の元本及び利子（時には利潤）を毎年强要するといふことは、千歩を讓つて不可能でないとしても、疲弊し盡せる歐洲を更に彌が上にも疲弊のどん底に追ひやるものである。ところが斯くして歐洲に購買力の激減することは其の貨物輸出總額の約半分を歐洲に向ける米國産業資本家の到底堪へ得るところでない。玆に於いて米國の産業資本家、就中、對歐輸出品の大部分を占むるものが農産物である關係上、大地主、大農業家の利害と同國金融資本家との利害は鋭く對立する。此事實は、一面未だ多分に農業國である米國の現段階にとつて、決して容易な問題ではない。

外部的に斯うした巨額の債權の取立てが、結局、歐洲無産階級の反抗を激成する可能性のあることは事新しく詳述する必要はないであらう。

（一九二八、三、五）

樞密院改革問題の歸趣

蠟山政道

一

今回樞密院に於ける治安維持法改正の論議を中心として、樞密院そのものの改革や議院法の改正等憲政の重要なる制度に就ての改革論が持ち上つた。先頃の優詔問題と云ひ、今回の樞府問題と云ひ、世人をして現内閣の行動の憲政の常道に背馳する所あるを思はしむると共に、我が憲政そのものが今や所謂憲法論爭の時代に入れるのではないか、と考へしむるに至つた。

然るに、世上行はるる所の論議には必ずしも高所大所より我が憲政の赴くべき道を指示するに役立つものの少いのみか、從來の行きがかりや目前の政爭に捕はれ、感情を交へたるものがあつて、議論の喧しきに比して、結局何物をも齎らす[illegible]

は、前内閣の倒潰原因が同じく樞密院に於る緊急勅令の運命に存してゐたので、今日内閣を異にする場合と雖も、その態度を一にすべきでないと云ふ點に存する。然るに、今回は一部の樞密顧問官と内閣との策應があり、且つ顧問官の間にも未曾有の議論があつたに拘らず、無理矢理に多數を以て内閣の希望に應じたと云ふやうな批難がある。そこで、樞密院の政黨化と云ふ聲が擧り、その本來の職務に背馳せるものであると云ふ所から、之が改革論となり、無用論となつた。之は一應尤もな議論である。然し乍ら、この方面からする議論の中には我々の俄に首肯し兼ねるものがあり、且つ論者の爲にも執らざる所のものがある。例へば、民政黨の側から發せられた所のものであつて、單に

[illegible]ることを警戒する[illegible]いたであらう。六月二十六日小川政務調査會長の名に於て發表せる聲明書の一部に於ては昨年の若槻内閣の緊急勅令案がこの二ヶ條に亘つてゐたことを指摘してゐる。然し乍ら、それ故に前例と同じくこの案を否決せねば矛盾に陷ると云ふ主張を爲す者ありとすれば、單に形式的に矛盾を避けよと云ふ譯はないから、それは實質的には樞密院の手を借りて内閣の運命を決せしめんと希望するものと見られる。然しそれは前回の處置を正當なりと認むることとなるばかりでなく、斯くの如き手段によつて政變の到來を許容すると云ふ結果となる。この點は朝日新聞の社説に於ても論及された所である。斯くの如きは樞密院改革問題の根本趣旨に反するものと言はねばならぬ。

惟ふに、樞密院の構成及び權限が今日の如く廣大であつて、内閣と結合して實際上多くの立法を行ふことを可能ならしめてゐる所の、我が憲法の設定趣旨から見るならば、如何に顧問官の選任を嚴正にするとしても、その行ふ解釋の實質的内容が時によつて異り得ることは制度上當然である。多くの論者が制度が惡いのでなく、それを運用する人物が惡いのであると云ふが如き姑息なる議論を爲しゐるのは、我が憲法制定の内面的歷史を知らぬ者か又は知つても顧みて他を云ふの類に過ぎない。なぜなら、樞密院の存在は政黨内閣の發達を前提とせざる憲法の與へた所であるからである。我國政治の重心が官僚藩閥の間に[illegible]しつゝあるに當つては、[illegible]かれ少かれ政黨的色彩を持つに至るは必然である。なぜなら、顧問官の選任が實質的に内閣の推薦によつて行はれるのみならず、國家權力はその性質上一に歸する傾向を有するものであり、分立するものは統一的權力の下に委任されたる職權のみであるからである。從つて政黨政治を否認するならいざ知らず、之を認めて尙且つ樞密院の嚴正なる獨立を要求し、單に形式上のコンシステンシーを問題とし、或は制度の性質を離れて個人を云爲するが如きは、寔に議論の焦點を離れたるものと言はなければならぬ。

次に今回樞府問題の惹起されるに至りたる第二の方面を見るに、それは憲法問題と言はんより寧ろ政治問題である。即ち、この機關あるが故に、當然議會の權限たる立法事項が、緊急勅令の形式に於て立法府の手を經ずして制定せられ、現内閣のたま〳〵當面せる如き政情に於ては、議會政治の否認が行はるると云ふ批難である。斯くの如き議論は、何等憲法上の意味を有してゐない。なぜなら、政治上の責任としては、内閣の負ふべき所であつて、緊急勅令の制度が憲法上認められてゐる以上、樞密院としては當然の職務を遂行してゐるに過ぎないからである。從つてこの方面から生ずる非難は何等法律上の根據を有するものではない。

それにも拘らず、現內閣の政治的責任に對して本來無責任なるべき樞密院がその責を頒たねばならぬものであるかの如く、樞密院の存在そのものまでを云爲するに至れるは何故であらうか。ここに、政治現象を觀察する者にとつて逸す可らざる國民の政治思想の微妙なる變遷が存するのである。專制政治の治下に於ては、法令が如何なる機關に於て發せられようと毫も問題でなかつた。立憲政治となりても、その初期に於ては一般國民は實質的意義に於る法規が形式上如何なる機關に於て制定せられるかを多く問題としない。少くともその一部分が國會によつて立法されるならば、それで滿足してゐた。然るに、憲政の發達と共に下院の優越なる政治現象と共に責任內閣なる政治制度を齎らすに至り、實質的意義に於る制定法規は總て下院の權限としてその手に收め技術上必要なるもののみ之を內閣及び各官廳に委任して立法せしむるの道に出でんとする傾向を示すのである。今日及び將來に於る我が憲法論爭は、意識的若くは無意識的にこの政治的動向に胚胎するものであると推斷して大過ない。こは、恐らく我が憲法の註釋と反するものであらう。或は解釋の如何によつては自由な解釋がつかないものでもなからう。然し、憲法解釋問題としては、何れにせよ、この政治的進展にして認むべくんば、今回の如く憲法上當然なる樞府の處置が國民の政治感情の前に明に改革を要するものとして映じ來る所以が理解せられるであらう。ここに、政治家の考慮すべき重大なる政治問題が存すると思ふ。

二

總て樞密院が憲法上及び官制上如何なる職權限を有し、其如何なる部分が一箇の政治問題として論議されるのであるかを檢して見よう。憲法第五十六條には「樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニヨリテ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス」とある。又樞密院官制第一條には「樞密院ハ天皇親臨シテ重要ノ國務ヲ諮詢スル所トス」とある。而して、如何なる事項について樞密院に諮詢せらるるやは法制上天皇の自由なりと雖も、一定の事項に就ては必ず諮詢せられねばならぬ規定がある。その諮詢事項なるものは、學者の通常分類する所に依れば、之を二種に大別せられる。

その一は皇室の機關としての職務權限である。即ち樞密院官制第六條第一號の定むる所であつて、皇室の典範に於て其權限に屬せしめられたる事項である。

その二は國務に關する職務權限である。官制に於ては第二號以下第六號に亘つてゐる。之を內容によつて分類すれば、左の四種に分つことを得る。この分類は美濃部博士の採用されてゐる所である。

(1)憲法に關する職務權限。之は更に二樣に分たれる。一は憲法及び其附屬法令の制定は改正に就てであり他は其解釋に關する疑義である。

(2)議會に代るべき職務權限。本來は議會の議決を經るを適當とするものであるが、他の必要から議會の議決を經る代りに、樞密院に諮詢せらるべきものである。これも二種に分たれる。一は議會の閉會中の

[illegible]依る緊急勅令であ[illegible]に附議せずして樞密院に諮詢せらるべきものとして居るのであつて、[illegible]の宣告、期間ある勅令、國際條約等である。

(3)自律的職務權限。樞密院官制及び事務規程の改正も樞密院の諮詢を要する。

(4)臨時に諮詢せられる事項。こは任意に決定せられる所であるが、從來の歷史から徴するに、官制の制定及び改正、官吏任用令の制定及び改正等である。

以上の諸諮詢事項中政治上問題となるのは、第二分類中の第二及び第四の事項である。第一分類の事項の如き皇室の機關としての職務權限に就ては、何人と雖も之を問題とするものはあるまい。從て如何に單純なる廢止論者と雖も、この方面に於る樞密院の存在を含めて云爲してゐるものではなからう。又第二分類の國務に關する職務權限と雖も、その第一の憲法に關するものに就ては、樞密院成立の歷史的沿革に鑑み且つ憲法裁判所の設け無き今日、敢て之が存在を無用なりとする者は尠いであらう。勿論これに就ては議論は岐れるであらうが、少くとも之は政治上の問題として樞密院の存在が論議の對象となる直接の原因ではあるまい。要するに、樞密院の改革問題と言へば、その第二分類中の第二及び第四の事項であつて、當然又は通常議會の職務權限たるものが、樞密院に與へられてゐる事項に關するものと見て差支ない。

[illegible]充分なる權限を與へて居らぬ。[illegible]この憲法の定むる所と國會[illegible]下院を中心とする政治的勢力の發達に依る責任內閣制度の要求とが相杆格し衝突し始めたのである。この影響の大なるべき問題を如何に調整し解決するか。畢竟するに、樞密院改革問題の歸趨は、この政治の發達てふ見地よりして求めらるべきである。

從て民政黨の或る論者の如く、又多くの大新聞の論調の示す如く、樞密院を無用なり、廢止すべし、と論ずるにしても、その議論の目標として、先づ樞密院そのものの廢止なりや或は國會と實質的に對立する限りの方面を廢止すべしと云ふのであるか、を明白にしなければならぬ。と同時に、我が國の立法制度全體に對する洞察の下に、國會の有すべき權限、その技術的條件等に就て、今日の事態に代るべき新たなる機構の建設を伴はねばならぬ。即ち根本的に我が憲法の定むる立法制度の檢覈批判と、之に代るべき實行可能なる政策の案出樹立の下に、樞密院の廢止又は改革を主張するに非ざれば、歷史的にも法制的にも確乎たる基礎を有する樞密院の如き重大なる機關の處理は到底實際問題とはなり得ぬであらう。若し夫れ、議會にして未だ責任內閣の確立にも暗雲低迷し、立法政策及び技術に就ても尙ほ多くの缺陷を有する時、憲法又は樞密院官制の改正を要するが如き大問題を主張するとしても、そは云ふ可くして行はれぬ。されば、この問題に關聯し、又その

他の理由よりして議會そのものの職務權限を擴張充實する案策が叫び出されたのは、寧ろ事理の當然である。曰く開期の延長、曰く議會召集權、曰く常設委員會の設置問題等、之である。余は、寧ろこの際徹底的に議會そのものの全般に亘りて考察を遂ぐべきであると思ふ。

憲法の改正にせよ、樞密院の改正にせよ、何れも審重愼議すべき性質のもので輕々に論斷すべきものでなく、且つ何れも改革の對象たる樞密院の同意を要するものであるが、冷靜にしてよく判斷されたる輿論と之を代表する責任政府とが相一致してその改革を要望する時、かやうな健全なる政治的發達を阻止する者は寧ろ國家の禍ひである。眞個の問題は、反つて國民の側にある。普選の下に參政の權利を享有する一千萬の大衆が、その選良の府たる國會の權限の充實に對して眞摯なる要望を有するや否や、彼等の選良たる政黨政治家がよくこの大問題を解決するに足る着實にして確乎たる案策を有するや否や。これが寧ろ考慮に値する問題である。

三

然らば、實際問題として、この問題の解決指針は如何に樹立せらるべきか。今は、かやうな問題を具體的に且つ詳細に論ずべき場合ではないが、その大體の方向を律すべき原理的方針とも考へられるものを二、三述べて見よう。之に就ては十九世紀以來の各國の議會政治、その立法制度の趨勢を參照すべきは論を俟たぬ所であるが、紙幅の都合上その一々の場合の對照の引用は之を他日の機會に讓らう。

先づ第一に、議會の立法權の充實を圖ることである。憲法學者の論ずる所に依れば、日本憲法の解釋上議會は立法權を有するものではなく、一定の法規を制定するに際して協贊を與ふるに過ぎぬと言はれてゐる。ここに謂ふ立法權とは政治學的意義に使用されたものであつて、その所謂協贊の意義と同じである。我々の問題とするのは、その協贊の範圍の擴張であり、充實である。と言つても事柄は同じである。例へば、樞密院官制の定むる所に從ひ國際條約の批准の如きは議會の開會中と雖も議會に附議されぬ。然るに、近時の國際條約中には國民生活の實質に觸れたるもの甚だ多く、それより受くる利害關係は甚だ密接である。國民の代表が、この條約の批准に協贊し得ぬと云ふ理はどうしても成立たない。國際條約の性質を適當に分類し、その或者に就ては議會に附議する制度に改むることは、議會の立法權の擴張となる。又憲法第九條に定むる所の警察命令の如きも我國特有の制度であるが、この外特定の事項に限つて議會の協贊を俟たずして行はるゝ副立法の制度が多々ある。これらの制度は、當該國家の政治發達の程度に從つて改むべきものであらう。それらの多くが、行政權の當然の作用として行はるゝものであつて、新に人民の權利義務に就ての規律を定むるものでないとの憲法學者の言の如くにしても、その限界は決して明瞭に劃定し得ない。從つて、一定の手續の下に議會の承諾を求むるの方法を講ずべきであらう。

第二は、緊急勅令の制限方法を講ずることである。今回實際問題とし

[illegible]常設委員會の[illegible]方法がある[illegible]適當に議ずれば、第二、第三の方法は自ら無用に歸する。[illegible]の如きはその好例である。常時開會が原則であつて休會は適宜に院議を以て決するの方法を執つてゐる。斯くの如き制度に依らずとも、六ヶ月位の期間を定め、その間適當に休會期間を議決して行けばよいと考へられる。常設委員會の設置に就て、その制度の價値に就ては特別の考慮を拂ふ必要があるが、短期間しか議會の開會せぬ國に於ては、一應考究に値する。特に外交委員會の必要が大である。各國の制度に就ての比較研究は他の場所に於て試みたから茲では再言することを省く（拙著『國際政治と國際行政』（第九章）參照）。この制度に對する余の結論は、反對黨の有力ならざる國に於て特にその價値が大であると云ふに在る。若し二大政黨對立の國であるならば、米國の如き特殊の憲法組織を有する國を除き、夫れ程大でない。寧ろ議員を含めた所の、實際家より成る常設諮問委員會を各省に附屬せしむる制度の方が好ましい。これは議會の權限の擴張とは自ら異るとも見られよう。

以上の外、緊急勅令の發布をして、事實上議會の權限を制限せしむる事なからしむる趣旨よりして、或る豫測し得べき事項に就ては豫め法律を以て一般法を規定し置くことも一方法である。その法律に準據して、その施行を爲す場合に於て、樞密院の諮詢を經るものとせば、多少歷史的機關の權威によつて法令の施行に威嚴を加へしむる事となるであらう。余は過ぐる年滯英中總同盟罷業の際、一九二〇年の「緊急權能法」に準據して、その施行を宣言する樞密院會議がバツキンガム宮殿[illegible]その時[illegible]委[illegible]院の作用しなかく〜に威嚴のあるものであると感じた。然かもそは議會の委任の下に行はれたものであつて、決して議會の權限を無視したものでない。勿論今回の我國の場合とは聊か異るものではあるが、緊急の必要は寧ろ我れの場合に優るものがあつたと思ふ。勿論かやうな一般法は個々の特殊な事件を一々豫想して立法し得ないものであるが、或る場合には寧ろ反て效力のあるものではないかと思ふ。

最後に第三の方法として、委任立法制度の考究を爲さねばならぬ。議會は一々の立法を詳細に亘つて爲し得ないし、又することを得策とするものでない。そこで、議會の立法權の擴充は當然に委任立法の制度を伴ふものである。この點は實質的には既に我國に行はれてゐる所であるが、とりたてて問題とする所以のものは、我が憲法の趣旨ではい之を以て寧ろ例外としてゐるのを、原則として實現する必要あるがためである。之によつて、議會は行政府の統制を爲すと共にその技術的智識を利用することによつて自己の負擔を省くことが出來るのである。

以上の三箇の方面に原理的方針を求めて、我が立法制度の改革方針となし、議會をして立法の中心たらしめるならば、樞密院はその國務に關する職務權限の中議會に代はれるものを議會に與へ、專ら皇室の機關として將又憲法に關する一部の機關として、歷史的傳統を負ひつゝ存續し得るであらう。かくして我が國の憲政はその有終の美を濟すの道に一歩進み得るであらう。頑迷なる保守と過激なる變革とは、共に創造と建設との敵である。余は樞密院の改革問題の歸趨を、我が憲政の赴くべき道より達觀して、斯く觀ずるものである。

時評

樞府の自己曝露

山川均

『緊急勅令が公布となつた。樞府のお爺さん達のあたまの中も公布になつた』。或る新聞には、かう書いてある。（『朝日』）『輿論もへちまの皮、けふ樞府の老人、寄つてたかつて道理を引込ます日』『非難罵聲も何のその。耐久ダンスの向ふを張つて、踊るわ踊るわ、樞密院の禿頭白頭』（『日日』）――『樞府の權威全く地に墜つと貴族院が呆れてゐる。貴族院に呆きれられたんだから、樞府のだらしなさも想像がつかう』（『讀賣』）――『憲法の番犬、策動顧問、無用有害、少壯蹶起、樞革必要……』（『時事』）――『政友會樞密院支部遂に成る』（『國民』）――等々。

樞密院の『お爺さんたち』の頭の中が公布せられたことは、疑ひがない。けれどもそれと同時に、たゞに『頭の中』ばかりでなく、その腹の底までも公布せられたところに、恐らくは、一そうの興味がある。

すでに酷罰主義の惡法と認められてゐる治安維持法を、さらに酷罰的にする必要があるかどうか？　この問題については、輿論はすでに明らかな答を與へてゐる。次にこの改正を、緊急勅令によつて行ふことは、憲法の正しい解釋の上から、許さるべきことであるかどうか？　この問題に對しても、輿論は明確な答へを與へてゐる。さらにこの、憲法上から疑ひのある（或は寧ろ、疑ひのない！）問題に對して、いはゆる『憲法の番犬』はいかに行動すべきであるか？　この問題に對しても、輿論は疑ひの餘地なき答を與へてゐる。この答へが明白であればあるほど、樞密院がこの問題に答へることは、一そう困難であつた。顧問官が老體にもかゝはらず、田中首相をして『心より敬服』せしめるほどの前代未聞の骨折りをしたのも、そのためであつた。

[illegible]

うん顧問官の中には、積極的に極刑主義を主張した、少數の勇敢な鬪士があつた。この人人にとつては、死刑はなほ輕きにすぐるかのように思はれた。死刑以上の極刑の見當らなかつたことは、彼らの不在であつた。勇敢な鬪士は、どこでも少數である。顧問官の大多數も、實際には、極刑の主張者であつたらう。しかしながら樞密院が緊急勅令案を可決した正式の理由は、必ずしもそうではない。それがどのような遠慮と必要とにもとづいてゐたかは別問題として、兎も角も形式の上では、樞密院は、治安維持法の改正が實際に必要であるかどうかといふ、內容上の見解によつてこの問題を決定することを、ことさらに避けたのであつた。樞密院は、政治上の責任を負ふものではない。政治上の實際に責任を負ふ政府が、必要だといへばそれまでゞある！この點では、樞密院はその行動を、純然たる『憲法の番犬』たる本分の範圍內に限定したのである。

第二の問題は、顧問官の練達をもつてしても、第一の問題ほどに、容易に回避することはできなかつた。なぜならば、これこそまさに、『憲法の番犬』の當然の本分に屬する問題であつたから。

そこで『憲法の番犬』としては、樞密院は『憲法第八條に基く勅令案の制定については』、『これが運用を濫りにすべきに非ず』と云はざるを得なかつた。しかし反動的政黨の番犬は、おのづから別様の吠え

[illegible]

の意図にとつて內閣を倒すのに、無責任な實際政治に干渉す決するものだ。それ故に、止むを得ず、勅令案は可決するよりほかに致し方がない！

これによつて樞密院は、二つの原則を主張した。即ち第一には、樞密院は、嚴密にその行動を憲法の解釋の範圍にとゞめ、實際政治には少しも干渉せぬといふ原則である。第二には、樞密院は、憲法上の解釋は兎も角として、原則として、或る內閣に與へる影響の考慮に基づいて行動しなければならぬといふことである。これは政治不干渉の聲明にして、同時にまた、政治干渉の聲明にほかならぬ。

『民政黨內閣は倒してもよく、政友會內閣は倒すべからず、といふ憲法論が、樞府から生れた……』（『讀賣』）『昔は內閣をつぶすために否決、今は內閣がつぶれるから可決、樞府の可否いづくにある』（『朝日』）『共產主義以上に恐るべきものは、樞密院の政黨化』（『國民』）――新聞には、かう書いてある。けれども少なくとも、現代の反動勢力を代表する諸政黨にとつては、樞密院の政治干渉は、必ずしも恐ろしいものではない。もし現代の反動勢力を代表する政黨が、樞密院の明らかな政治干渉に對して、何ら議會政治政黨政治への脅威をも感じないとしたならば、それは樞密院の『政黨化』のためにほかならぬ。もちろん樞密院が勅令案を否決して呉れたなら、そして政友會內閣が倒れてゐたな

ら、民政黨にとつては有難いにちがひない。樞密院の有用性は、民政黨にとつては僅かに増大する。かように反動的政治勢力が、二つ又は二つ以上の政黨に分れてゐる以上は、この對立關係の範圍内においては、樞密院の政治干渉は、一つ一つの政黨にとつては或は脅威であり或は幸榮であるにちがひない。けれども反動的政治勢力全體として見たならば、樞密院がもはやこの反動的政治勢力を代表する政黨に對立したところの、別個の政治勢力を形成してゐるのでなく、それが『政黨化』してゐればゐるほど、その政治干渉は、當面直接の利害の問題ではあつても、議會政治や政黨政治を脅やかすところの根本的な危險ではなくなつてくる。

政黨化の代りに、政黨と政權を爭はうとした往年の貴族院に對しては、政黨は危險を感じた（たしかに、共産主義以上の！）」それ故に、護憲運動が起こつた。樞密院の政黨化（ないしは政友會化）に對しては、民政黨は樞府廢止運動の代りに、當然にも『自重』するのである。

樞密院は、勅令案の可決の條件として、四ヶ條の、いはゆる『強き意味の』警告的決議をした。内閣の運命に影響を與へることが政治干渉だとしたならば、時の内閣に對して、一定の具體的な政策と施政を命令する（よし警告といふ名目に出よ）ことは、あつた具體的な政治干渉であるにちがひない。

しかしこの樞密院の『お爺さんたち』の『強き』勸告には、一たいどこを狙つて打つたらう。『檢察制度を完備して犯罪の發生を未然に防止する方策を講ずべし』。よろしい、田中内閣は云はれぬ先きに、例ひ二百萬圓の大仕掛けな特別高等警察網の完備を觸れ出してゐる。『國際警察の施設を改善して思想取締上に遺憾なきを期すべし』。よろしい、田中内閣に云はれぬ先きに、この警察網を國際的に擴ろげる計畫を急いでゐる。『教育施設の改善を計り思想善導上深甚の注意を拂ふべし』。云はるまでもなく、思想の善導は、田中内閣の得意の領分である。『各般の社會施設を完備して國民生活の安定を計るべし』。たしかに『國民生活の安定を目標として進む』（四月十一日聲明書）ことにおいては、田中首相は、樞府の『お爺さんたち』よりも、少なくとも六十日の先覺者なのである。樞密院は、最も痛くない箇所を、最も『強く』打つたのである。反動勢力を代表する政黨は、もとよりこの種の政治干渉にも、何らの危險をも感じない。

思想は善導せられたり

——(時評)——

[illegible]

[illegible]の思想の善導』は、今や當面の日程中の日程となつた[illegible]

政友會によれば、『素より多年陶冶されたる國民性が輕薄なる外來思想に動搖さるゝなきは勿論なれども』、しかしながら今日は『又國民思想上未曾有の困難』である。田中首相によると、『萬古不易の國民性はこの根本精神によつて鍛錬陶冶されて居る』が、『險惡の思想に對して徹底的に矯正』し、『青年學生を善導』しなければならぬ。

さらに鐵道大臣によると、『根本原因は國民精神が(然り、多年陶冶された萬古不易なこの國民精神が!)弛緩し、道義の觀念が衰頽した』からであつて、『この根源を淸め道德の田地を十分に耕耘する時は、惡思想蔓延の餘地なきに至ること』夢疑ひなしとある。然るに内務大臣に聞くと、日本人には『親子の愛情』があるから、『過激思想の撲滅は容易』であつて、その秘法は『孝子節婦を奬勵』することにある。

文部大臣に從へば、『これを救助する途は』、『先づ我が建國の由來を證得せしめて確乎不拔(いふまでもなく、多年陶冶鍛錬された萬古不易の國民性のほかに)な國民精神を涵養する』こと、もう一つは、青年に、運動競技を盛んにやらせることである!

政府部内の急進部分と目されてゐる社會局の長官の見解によると、思想善導の方針は、精神的、物質的の兩方面に分類される。そして『精神的方面』は、さらに『普通敎育的と社會敎化的との二つに分類せ[illegible]

[illegible]

力して、[illegible]的な分類である。

尤もこの、精神物質の二元論に對しては、一元論的の異論がある。『思想問題の發生する原因は、經濟的理由からといふよりは、寧ろ青少年時代の思想が健實に培はれて居らぬためである』。そこで思想善導の方法は、『敎科書を思想訓練に適切なるやう改善すると同時に、之が編纂には憂國の碩學鴻儒(誰?)をして當らしめる』こと、小大學の敎員敎授の防疫的思想檢査を行ふこと、同盟休校を嚴罰すること、君ケ代の外に精神作興國民歌を作ること、等々。(地方長官會議第四日目、『時事新報』)この一元的見解は、或る程度まで、文部大臣によつても裏書きされてゐる。『近時に於ける不健全思想は、多くは唯物的見地に立脚し精神的方面を輕視するものであります』。そこでこの思想困難を打開するためには、『宗敎家の奮勵努力』に俟たなければならぬ。

すべての人間は、何事かを考へる。いかに無意識的な行動にも、何らかの思想が伴隨する。これは人間の行動の萬古不易の法則であつて世の中には『考へのない政治家』もあるといふことは、決してこの原則を無効にするものではない。そこで、あらゆる人間の行動の通路たるこの思想を善導することが、『拔本塞源』の道だといふことになる。尤も、思想と名づける人間の行動の下水鐵管は、これを然るべき所

に善導することもできるが、蓋をしてしまうこともできる。二百萬圓の特別高等警察網と一百萬圓の思想善導費、これが現代の最も考へのある政治家が、思想國難の『拔本塞源』の道を求めて終に發見した方法なのである。警察網の完成は『塞源』の道であつて、學校――この思想鐵管の製作所――における生徒監の増員、思想調査機關の設置、東洋思想講座の新設、精神學研究の獎勵等等は、たしかに『拔本』に相當する！

「生活安定」の最少限

かうして樞密院の『強き意味の』警告條件は、田中内閣によつて遺憾なく滿たされたが、たゞ僅かに、最後の一項目が殘つてゐる。けれども『國民生活の安定』は、畢竟、物質の問題であつて、國民に生活の安定を保障しなければならぬといふやうな、『唯物的見解に立脚した』思想を指して、『不健全な思想』とはいふのである。かゝる思想は『宗教』によつて『排撃』しなければならぬ！

人はパンのみにて活きるものではない。たしかに、空氣は、パンよりも緊急である。そこで政府が、國民生活の安定のために與へようとしてゐるのは、パンではなくて、もつと緊急な空氣である。政府は、憂國の碩學鴻儒、生徒監、國民歌、精神科學、東洋思想講座等々によつて、國民の胃の腑を膨らませようとするのである。

これは最近の國際勞働會議で採用せられた『最低賃銀決定機關の創設又は維持に關する條約案』に對する態度が、根本的にこれを示してゐる。

國際勞働會議が、資本家の立場から見たいはゆる勞資協調主義を、國際的に象徴した機關であることは云ふまでもない。この機關において、當然にも政府の勢力と結合した傭主側の勢力が、常に優勢を占めてゐることも、云ふまでもない。さらに、かうして出來上つた決議さへも、實際においては何らの力もないことも、何人もよく知つてゐる。最低賃銀に關聯した今度の決議も、協調主義の紙屑籠にすでに一杯になつてゐる反古の一枚であることも自明である。ことにこの條約案では、最低賃銀を決定する機關の性質、形態、運用は、各國の政府に任かされてゐる。たゞ『如何なる場合にも』動かすことのできない原則的な基準は、この決定機關のうちに使用者側と勞働者側とは同數の代表者を出し、從つて、使用者側の勢力は、第三者的代表者の勢力と合して、いつでも壓倒的優勢を占めることが保障せられてゐることである。さらに、最低賃銀制を實施する職業の範圍と、最低賃銀率と

[illegible]有力に擁護せられてゐる國々においては、資本家に不利益にこの力と會面するよりも、寧ろこの種の最低賃銀制と最低賃銀決定機關とを喜ぶにちがひない。

しかしながらこの最低限度における最低賃銀制——最低限度における生活の安定——の說容さへも、わが國における資本の代表者にとつては、精神科學と國民服ほどに、『國民の生活の安定』にとつて緊急なものではないのである。

けれどもそれと同時に、わが國の資本の指導者が、この最低限度における最低賃銀の保障をさへも回避しようとしてゐることは、一面に[illegible]資本主義[illegible]における『合理化』[illegible]主義的發展の可能の範圍と限度とを決定する。もしわが國の工業が、依然として無制限な搾取を基礎としてのみ僅かに『合理化』されるとしたならば、これはその行詰りの機會が極めて近いといふことを暗示するものにほかならぬ。

かように資本の代表者が、最低賃銀制の原則を認めることを欲しない時に、それは不充分であるとは云へ、そして極めて部分的であるとは云へ、海上勞働者が組合の行動によつて、わが國における最初の最低賃銀制を獲得したことは、たしかに注目に値ひすることである。

帝國主義的平和愛好者の欣快

これに反して米國の第二次不戰條約の提案に對しては、平和の好愛者たるわが國の帝國主義的政治家も、例によつて『欣然として』これを應諾するものと見做されてゐる。

不戰條約成立の結果が、帝國主義的戰爭をどの程度に防止し得るかは、大した問題でない。國際戰爭を避けようとする試みは、いつでも例外なく、國際戰爭の危險の增大と比例する。帝國主義的戰爭は、帝國主義的諸國はいつでも戰爭を欲してゐるものだといふ事實を特色とするものではなくて、寧ろ反對に、出來得るかぎり戰爭を避けようとする——さらに精密に云へば、最も有利に戰爭し得る機會と條件以外においては、絕對に戰爭を避けようとする——熱心な努力にもかゝわらず、戰爭が避くべからざる唯一の『自衞』の手段となるところに、帝國主義的戰爭の特質がある。米國の不戰條約案は、まさにこの『自衞權』を除さぬあらゆる場合（ほんの僅かな例外である！）において、『締盟國は人類の福祉を增進すべく神聖なる義務を有することを深く

銘記』する起誓を取り交はそうといふのである。

第二次不戰條約案は、少なくとも形においては、第一次のそれとほとんど異るところはない。けれども實例においては、帝國主義列國のいろ〳〵な注文と條件との妥協の代價によつて、その成立を買はんとしてゐるものである。これは言ひ換へれば、第二の戰爭の危機を孕んでゐるヨーロッパの現在の諸關係を、そのまゝ嚥み下すことを意味してゐる。

しかしながら不戰條約の成立が、今後の國際戰爭の上に、何らの影響をも持たぬと考へることも、固より誤つてゐる。それは帝國主義列國が、戰爭の機會を探ぶ方法を一そう複雜にかつ微妙にする。不戰條約の違反者となることなしに、即ち不戰條約の遵奉から得られる一切の利益を失ふことなしに、いかにして戰勝者となり得るかは、極めて重要な、專門の一技術となるにちがひない。

不戰條約の成立は――もし成立するならば――國際帝國主義的發展の進路の上に、何らの重大な變化を來たすものではない。不戰條約によつて、帝國主義的戰爭が避け得られるかゞ興味ある問題なのではなくて、この條約案の成立は、國際帝國主義の體系のうちに占める、提唱者たる米國の重要性が、十分に承認せられたことを意味する點に、寧ろより大なる興味がある。いま一つの興味は、帝國主義の國際的體系を象徵した國際聯盟のほかに立つて來たアメリカが、この不戰條約を通じて、この國際帝國主義的の體系のうちに、正式に結合せられる

ことである。」

新刊紹介

◆唯物論史上卷（ランゲ著・川合貞一譯・原著は出版後已に半世紀以上を經てゐるが唯物論の歷史としてその右に出づるものがないと云はるゝ權威書である。定價四圓・東京市日本橋區通三丁目・丸善株式會社）

◆觀念的辯證法批判（プレハーノフ著・川內唯彥譯 定價四拾錢・東京市牛込區肴町一二・南宋書院）

◆歐米經濟界の喜悲劇（本多精一著・定價貳圓・東京市神田區材木町一二・騷人社書局）

◆日本戲曲集（文藝家協會編昭和三年版・東京市牛込區矢來町・新潮社）

◆產業の武裝と勞働階級（ハア・ヴアイス著・水野正次譯・定價五拾錢・東京市神田區駿河臺西紅梅町一二・同人社）

◆世界社會主義文藝叢書 十月（ヤーコウレフ作・井田孝平譯・定價壹圓・東京市牛込區肴町一二・南宋書院）

◆詩集 阿片の夜（矢野文夫著・定價壹圓・東京市小石川區江戶川町一八・交蘭社）

経済時評

資金偏在の中毒症状

錢信託であつて、昨年三月末の四億九千百萬圓から、本年五月末は八億三千八百萬圓と、三億四千七百萬圓の增加となつてゐる。この三者の合計十三億四千萬圓であつて、これだけの巨額なる資金が一局部に集積したのであるから、極端なる資金偏在といはねばならぬのである。

二、資金偏在の諸原因

かくの如き極端なる資金偏在が、如何なる作用によつて行はれたかといふに、これに對しては二樣に區別して考ふることが出來る。即ち一時的原因と恒久的原因とがこれである。一時的原因として第一に擧ぐべきは、昨年の金融恐慌以來當局者の採つたインフレーション政策である。即ち政府は銀行救濟（預金者救濟ともいふ）の目的から、特別融通及び臺灣融資（昭和二年法律第五十五號及五十六號）の二法律によつて、日本銀行の貸出を敢行し、通貨を膨脹せしめたことである。この兩者の金額八億七千九百萬圓であるが、この中臺灣銀行に融通したる一億八千五百萬圓は、主としてコール・マネーの返濟に充當したから、コール・ローンとして多額の金額を臺銀に放出してゐた三井、安田等の大銀行は遙かに資金の增加を招來し、特別融通の六億八千七百萬圓は、全國八十餘行の預金支拂ひとなり、その預金の拂戻しを受けたるものは、その金額ではなくとも大部分は他の堅實なる銀行に預金の預け替へを行ふは當然の數であつて、この場合多く大銀行こ流れ込み、一半は郵便貯金、金錢信託となつて、こゝに資金偏在を形成づける有力なる原因を爲したのである。第二は昨年の金融恐慌そのものである。即ちこれによつて人心は極度の不安に陷り、ために資金は比較的安全なる大銀行の預金、郵便貯金となつて、多くこれ等に集中した。第三は財界不況に伴ふ資金需要の減退である。わが國においては資金需要の減退は既に久しいものであつて、大正九年の財界反動以來、十二年の震災打擊、更に昨年の金融恐慌等のため信用は極度に收縮して一般財界は萎靡振はず、海外諸國においても、これまで殆んど整理期に屬してゐたため更に活況なく、これ等の事情が相俟つて資金需要の減退を繼續し、最近においては一層此傾向が著しくなつて來たのである。かゝる狀態となつては資本を擁するものは何れかの方法によつて利殖の途を講ぜねばならず。こゝに信託預金（金錢信託）及び銀行預金の增加を招來した譯である。

三、大銀行主義の時代

次に恒久的原因としては、金融構成の變化である。これについては大銀行主義の實現と中流銀行の潰滅との二事項を擧ぐることが出來る。大銀行主義の現はれは、わが國においては相當古い問題である。即ち日清戰後における銀行濫設時代を一轉機として、銀行集中主義を採るに至り、政府も大正五年には新設等に對しては認可制を執り、續いて資本金の制限、監督の嚴重、合併の獎勵等を併行したため、一時

[illegible]たところへ、昨年の金融恐慌に一層これを助成せしめ[illegible]ま、これを大藏省調査によつて見るに、昭和元年末に全國銀行數千五百七十八行に達したものが二年末には千四百廿八行と、一年間に百五十行を減少し、本年六月末現在においては千三百卅一行に減少してゐる。かくして大銀行主義は急速の發展を遂げたのであるが、更にこの傾向を助成したものは、金融恐慌の打擊によつて、中流銀行の潰滅したことである。即ち村井、中井、八十四、近江等の諸銀行が破綻したため極端なる大銀行主義と化するに至つた。

かくの如く今日の資金偏在が、一時的原因と恒久的原因との交流によつて出來上つてゐるとすれば、その性質、影響、對策等を究むるにもこの見地から出發せねばならぬものと思ふ。しかして一時的原因のみから來たものとすれば、その原因は早晩消滅すべき運命にあるものであるから、それと同時に資金偏在も緩和され、それほど問題とするに及ばぬかも知れぬ。然しながら恒久的原因との交流によるものとすれば、たとへ一時的原因は消滅するとも、單にこれだけでは容易に資金偏在は緩和さるゝものでないから、この資金偏在は比較的永續性を有するものと見ることが出來、從つていろ〱の問題が生じて來るのである。

四、日銀の勢力失墜

[illegible]い。[illegible]來た結果とは見ることが出來ず、財界不況その[illegible]の事情が相交錯しては居るが、その一原因たるに相違ない。この金利低下によつて事業會社の内容整理、即ち高利債借換等を行ひ、それだけ企業整理を進捗せしめ、更にまた金利低下は有價證券の値上りを招致し、これが處分を有利にしたため、これを擔保として貸出してゐる銀行の整理を進行せしむる等、財界整理に效果を齎したことは否むことは出來まい。

然しながら、この資金偏在が財界各方面にいろ〱の弊害を醸生しつゝあることは看過することは出來ぬのである。先づその第一は日本銀行の機能失墜、延いて通貨統制の不能、金利政策の破綻である。いふまでもなく日本銀行は一國の中央銀行として、財界の事情に應じ、通貨の量を調節する完全なる機能がなければならぬ。然るに最近の狀態においては資金偏在のため、大銀行よりの預金が巨額に達し、常に四億四、五千萬圓を擁してゐるのであつて、これを金融恐慌前の普通狀態たる七八千萬圓に比すれば六、七倍の增加である。かゝる多額な預金があつては、たとへ日本銀行が通貨を收縮せしむる目的から金利を引上げたとて、この預金の支拂が一方に行はるれば何等その效果はなく、その反對の場合もこれと同一であつて、こゝに通貨統制力の失墜、金利政策の破綻を招來したのである。この結果は何うかといふに、金

利は赴くまゝに放任され、株式その他の思惑や空景氣を煽揚することがあつたとするも、日銀の力では何うすることも出來ぬといふ危險なる狀態にあるばかりでなく、國民生活に直接關係ある物價政策についても如何なることもなし能はざる、殆んど半身不隨の症狀を呈してゐるのである。第二は中小商工業者の資金難であつて、中小商工業者の有力なる金融機關は中小銀行なるにも拘らず、この中小銀行が資金偏在によつて、反對に非常なる資金涸渇に陷り、その融通能力がないのみならず、從來中小商工業者のために最も有力機關となつてゐた中流銀行の蹉跌は、一層この情勢を顯著ならしめたのである。これ一國產業上の見地から見て由々しき問題である。

五、危險なる證劵類の騰貴

第三は有價證劵類の昂騰である。昨年來資金偏在のため大銀行はその遊資の放資口に窮し、公社債類の投資となり、そのため國債類は過去一ヶ年間に十圓内外の昂騰を演じ、償還期限七、八年後までのものは市價悉く額面に到達し、その他社債類は勿論、株式等は何れも昂騰を告げ、新東株の如きも百九十圓臺となつて、近年における高値に進んだのである。勿論國債市價の昂騰は、一面國家信用の昂上ともいひ得るが、これにはそれだけの根柢がなくてはならぬ。然るに今次の昂騰は單に資金偏在といふ事實のみによつて起つたことであつて、それ以外何ものもない。故にその反動を豫期せねばならぬのである。社債類その他株式等も同じことであつて、決して根柢的理由がある譯でないから、何かの機會に崩壞の運命は免れぬのである。そればかりでない、根柢のない昂騰は、整理の過程にある財界を毒するものたるはいふまでもない。殊にわが財界の前途には、金解禁といふドウしてもその實施を急がねばならぬ重大問題を控へてゐるのである。金解禁を實行すれば當然通貨の收縮を招來し、有價證劵その他一般物價を低落せしむることは明らかである。若しいま有價證劵類が何等根柢なき昂騰を演じたとすれば、それだけ反落を多からしめ、財界に對する波動を大にすることゝなる。延いて爲政者にその反動の大を顧慮せしめて、不自然にその解禁期を遲延せしむることゝなる。第四は爲替相場の低落である。わが爲替相場は正金の對米建値において、去る三月末四十八ドル丁度の高位に上つたのであるが、その後漸落して五月上旬には四十五ドル八分の七に落込んだ。この低落の原因としては日支關係等もあるが、輸出期に入るもなほ四十六ドル臺に低迷し、やゝもすれば軟化の氣勢にあるは、全く資金偏在、金融緩慢の結果に外ならぬ。

六、資金偏在の中毒症狀

即ちわが國においては一流銀行等が遊資を擁してその處分に窮してゐるに反し、米國においては近年珍らしい金利高となり、コール・マネー七分内外に達し、一般金利も昂騰したため、金利關係から資金の流出が旺盛となり、輸出期なるにも拘らず、反對にその低落を招致し

[illegible]いことであるが、世上にはその低落を以つて輸出の好機となす[illegible]る歓迎すべきとするものもある。けれどもこれは單に當面の事實に囚はれたる謬想に過ぎないのである。何んとなればこの場合の輸出には凡て市價が低落してゐるから、それだけ海外から受取る賣却代金は少ないのである。少なければ輸入品の購買力もそれだけ少ない譯であつて安く賣つて高く買ふこととなるから一國にとつては結局不利となるのである。第五は物價の昂騰である。これは爲替低落により輸入の阻止から、最初輸入關係品の昂騰を馴致し、延いて一般物價にも及ぶことゝなるが、かくては國民生活に對する大なる脅威たることはいふまでもない。第六は不急事業に對する資金の固定である。例へば鐵道、電力、運河等は安い金利を以つてすれば引き合ふものであるから、かゝる機會に乘じて新設、擴張することゝなるが、何れかといへばこれ等は急を要せざる事業であつて、わが國としては急を要する事業は他にいくらもある。故にこれ等不急事業に資金が固定すれば、今後その他の事業に需要が起つた場合、それだけ金融を不圓滑にするものである。第六は銀行殊に一流銀行の利益減退である。これは資金偏在のため互額の遊資を抱擁する結果、當然來るべき運命で、こゝに完全に、資金偏在の自己中毒に罹つた譯である。この結果は不堅實なる貸出となるは免れぬところであつて、更に財界を毒することゝなる。

七、官民協力して善處を要す

かくの如く資金偏在が恐るべき弊害を包藏してゐるとすれば、速かにこれを緩和せしめねばならぬことはいふまでもない。しかしてこれが對策を講ずるに當つても、前記の如くその原因を單に一時的のものとせぬのであるから、單に該原因の除却だけではその效果はないとするもので結局以下三策を以つて比較的有効適切なものとする。第一は銀行預金の利下げである。現在東京においては定期甲種五分、乙種五分八厘となつてゐる。これに對し主として大銀行が預金利下を敢行することである。然らば或る程度まで預金の減少となり、資金を分散せしむることが出來る。第二は大銀行が中小商工業者に對して貸出範圍を擴張することである。これは國內的に行詰つた大銀行の打開策、延いては今後の自衞策としても意義のあることで、その方法等は決して難事のものではあるまい、かくするにおいてかなり緩和さるゝことはいふまでもない。第三は商工業の振興である。これは官民とも大なる自覺に基かねば到底出來得ざることであるが、最も有効なる資金偏在緩和策はこれを措いて外に出でまい。これがためには先づ物價及び勞銀の低下を計らねばならず、かくして根柢的に貿易の改善を期せねばならぬのである。

政府並に日銀が、資金偏在を緩和せんがために、郵便貯金から集まつた預金部の資金を地方に貸付けたり、國債を賣却して遊資を日銀に

吸收したりして居るけれども、その効果は極めて薄く、前記の如く依然として甚だしき偏在の狀態にある。しかも近來その弊害は漸く顯著となりつゝあるを以つて、政府並に、日銀は速かに對策を講ぜねばならぬは勿論一般國民も亦これと協力して、單に自己一時の利益にのみとらはれず、國家永遠の利福の爲めに奉仕するの覺悟なくば、恐るべき結果を招來するであらう。われ等は特に大銀行家が、公共心に目ざめむ事を希望せざるを得ぬ。（三　七—八）

豫算編成の難礁

—英米の緊縮方針と我豫算膨脹—

濫發された空手形

昭和三年度の豫算は、議會解散の結果不成立に終つたので、目下編成中の昭和四年度の豫算案は、現内閣の主義政策を實現する最初の豫算案といふべきであらう。昭和三年度の不成立豫算には、農地金庫法案を初めとし、政友會のいはゆる重要政策は、何等實現さるゝことなかつたにもかゝはらず、一般會計の收支總額は各十七億七千餘萬圓といふ、實に空前の大膨脹豫算であつた。しかるに現内閣の諸公は、在野以來高唱し來つた産業立國、積極政策を何としても、來年度豫算に實現せしめねば、國民を欺くことゝなるのみならず、去る五十五議會以來政權維持の必要上、心ならずも公約したる數々の事項がある。即ち實業同志會とのいはゆる政策協定、明政會にひきずられて殆んど滿場一致で衆議院を通過した經濟國難決議、並に治安維持法が、樞密院を通過の際附せられた希望決議等は、いづれも現内閣に誠意あらばこれを何等かの形を以つて、明年度豫算案に實現せねばならぬ筈である。要するに現内閣は、今や大風呂敷のしめくゝりの難局に遭遇したわけである。

わが國財政の現狀は、現内閣の濫發したる空手形を回收すべく、頗る都合の惡い狀態にあるを以つて、止むなく現内閣は從來の威勢のよい、政友會のいはゆる積極方針に緊縮政策を加味し、左の如き昭和四年度豫算編成方針を閣議で決定したのである。

一、新規事業は重要政策と稱すべきものに限る。

二、重要政策以外の經費については極力緊縮方針をとり、萬止むを得ざるものは既定經費の節約をもつてそれに充つる事。

三、この外一般的に[illegible]につき[illegible]すこと。

右の方針によつて政府は目下豫算編成を急いでゐるのであるが、來年度豫算の審議決定は來る十一月遲くも御大禮が舉行されるので例年より一ヶ月早くその決定を見ることとしてゐるから、大藏省における査定は七月中に終了、直ちに特別會計の豫算審議に移り、來る十月中旬までには豫算閣議最後の決定を見る筈との事である。

合せ難い收支の辻褄

來年度の新規事業の財源たるべき剩餘金自由財源に就て見るに本年五月以來支那事變の爲めに支出せし金額既に約四千萬圓に上つてゐる結果、昭和元年及び二年度における剩餘金總額は僅かに一億一千萬圓見當となり、これがまづ來年度新規事業の主たる財源となる譯である。

然るに政府としては來年度豫算に計上すべき義務若しくは政治的責任あるもの換言すれば前記剩餘金より控除すべき金額としては

減債基金繰入額	一千二百五十萬圓
昭和三四年度追加豫算財源	六千萬圓
（對支出兵の撤去及善後處理費及その他豫備金支出豫定額）	四千萬圓
地租及營業税減税額	一千八百萬圓
合計	一億三千五百萬圓

即ち以上の數字は多少の增減はあるべきも大體において控除さるべきものと見るを至當とすべく、かゝる場合前記の繰越剩餘金を超過す[illegible]

五十五議會に於て貴衆兩院[illegible]協定し來年度豫算に計上すべく[illegible]たる事項中重なる内容を擧ぐれば

一、俸給及兵士待遇費	四千萬圓
一、煙草値下による負擔減	二千萬圓

この外昭和二年度剩餘金の減債基金繰入等の事項もあり、更に何の樞密院の希望決議たる一、教育の改善、二、檢察制度の完備、三、社會政策的施設の實現等を何とか形づけねばならず、又經濟國難決議即ち

一、建設用に大節約を行ひ國民負擔の輕減その他社會事業を行ふこと

二、剩餘金は既定計畫に充當するもの丶外、減債基金に繰入るゝこと

三、社會政策的見地より税制整理を行ひ階級負擔の調和を圖ること

も何とか穩をつけなければ院議を無視したこととなり、他面三土藏相は財政難緩和の唯一の材料たる公債發行額は二億圓以内に止める旨を再三言明してゐる關係もありとにかく現内閣の豫算編成は他に徹底的の局面打開策を講ずるに非れば殆んど行詰りの狀態といふも敢て過言ではない。

以上の如くとにかく新規事業財源は至つて微々たるに拘らず政府のなすべき事業就中政治上責任ある事項は多々山積の狀態にあり他面各省の來年度新規事業費要求は前記の閣議申合せ事項を裏切り山本農相の農地金庫案及び肥料管理案を始めとし各種のいはゆる積極政策費目盛澤山の盛況を呈し、その要求總額實に三億二三千萬圓に達すると稱

せられてゐる。政府並に與黨の間には公債增發論、新稅創設論又は增稅論も行はれて居るとの事であるが大體に於て既定經費の節約、關稅引上、その他により大體左の如き補塡方法を講ぜんとしつゝありといふ。

既定經費の整理節約	三千萬圓
事業の中止繰延	三千萬圓
獨逸賠償金繰入	一千五百萬圓
鐵、木材等十八種の關稅引上	一千萬圓
昭和四年度自然增收	一千萬圓
合　計	九千五百萬圓

以上の捻出により辛ふじて當面の辻褄を合せんとしてゐるといはれてゐるが假りにこれを實現したりとするもこの僅少なる九千五百萬圓見當にては到底叙上の諸事項を實現し責任を果すを得ず、結局は實同との協定、經濟國難決議、樞密院の希望決議等は態よく無視されるは免れざるべく更に各省の要求も三分の一程度に削減されるの止むなきに立至るは事理明白なる次第といはねばならぬ。

果して然りとすれば現內閣は徒らに積極政策の聲のみ大にしてその實は何等取立てゝいふ程の事業もなさず反對に鐵、木材等の關稅引上げにより物價昂騰の因を造るに止まる事となるがさりとて玆に現內閣年來の主張の如く積極政策を實現せんとすれば例の社會政策的見地に立てる新稅の創設又は增稅を斷行するか或は公債の增發をなすか、さなくば全然積極政策を放擲するかこの二者何れかを選ばねばならぬ羽目に陷つてゐる。わが國情の現勢は果してこの積極政策の實現を許容し得るや否やそれが重大問題である。

英米の緊縮整理と國力回復

戰時戰後に於ける歐米各國の實情を一瞥するに、英米兩國の如きは戰後、國家の財政は勿論各方面とも徹底的の整理を斷行し今や兩國は堅實なる回復期に入り、その實證は各方面の統計に現はれつゝある。

卽ち英國の大正九年の歲入は十四億二千五百萬ポンドであつたが、昭和二年には歲入(豫算)八億一千八百萬ポンドにして此の間六億七百萬ポンドを縮少し、國債は大正九年末發行殘高七十八億七千六百萬ポンドから昭和二年末には七十六億五千三百萬ポンドとこの間二億二千三百萬ポンドを減少してゐる。しかして英國の貿易は大正七年の入超七億八千三百萬ポンドより昭和二年には三億八千七百萬ポンドとなり、この間入超三億九千六百萬ポンドを減少し、事業の新設擴張資本金總額は大正十年中累計九千二百萬ポンドより昭和二年中は二億一千八百萬ポンドと一億二千六百萬ポンドを增加してゐる。又米國においても、大正九年度の歲入五十六億二千四百萬ドルより昭和二年度には三十億二千八百萬ドルと二十五億九千六百萬圓の節減をなし、大正九年末の國債發行殘高は二百四十三億三千萬ドルであつたが昭和二年末には百八十四億二千萬ドルとなりこの間五十九億一千萬ドルを減少してゐる

る。

即ち英米兩國は戰後官民一致の[illegible]努力により事業及財政の整理をなし今や前記の如く國力は着々として堅實なる回復を示し就中米國の如きは去る六月末日をもつて締切りたる一九二七——一九二八年財政年度に於ては三億九千八百萬ドルの歳入超過を示せる狀態である。

然るにわが國においては大正九年度の豫算歳入總額十三億五千九百萬圓なりしものが昭和三年度（實行豫算）には十七億九百萬圓と却つて三億五千萬圓の膨脹を來たし一方國債發行高は大正九年末現在の卅一億一千五百萬圓より昭和三年五月末日には實に五十四億六千九百萬圓とこの間二十三億五千四百萬圓の激增を來たし全く英米と正反對の進路を取りつゝある。この結果わが國力は久しきに亘る不況のドン底に彷徨して前途いつ展開し得べしとの豫測もつかず、辛うじて外債の增發乃至借金政策により表面を糊塗しつゝある現狀である。即ちまづ貿易について見るに大正八年以降入超に次ぐに入超をもつて——大正八年より本年上半期末までの入超累計は三十二億七千三百萬圓となり結局正貨總額も戰時好況時代の最高即ち大正十年一月末現在の二十一億八千三百萬圓より激減して今や（本年四月末）十二億四千六百萬圓となり、この間九億四千萬圓の減少を示してゐる。

しかして他面全國手形交換高が大正八年の七百七十一億九百萬圓より昭和二年には六百二十四億二千九百萬圓と百四十六億八千萬圓の減少を示し、わが事業界の新設擴張の資本金は、大正十年中二十二億三[illegible]六億七千八百萬圓を減じ[illegible]戰時好況時代より漸次委縮せる事實は明白に立證し得るのである。然るに政府の豫算は前述の如くこの事業界の委縮、民間負擔力の減少等の事實に何等頓着なく年々歳々膨脹に次ぐに膨脹をもつてし、しかも今後更に膨脹せしめんとしてゐる。實に國家を誤るの大なるものであつて今やわが國民は、內に財界不振の實情を熟視すると共に外に列強の殷盛に趣きつゝある事情を考慮し、もつて斷乎として積極方針を一擲し、飽くまで民力の涵養、負擔の輕減を敢行し、以て他日雄飛の基礎を培ふべき時であつて、徒らに傳統を追ひ、若しくは世の非難を顧念し、乃至黨勢の擴張に腐心し國費を膨脹せしむべき時機ではない。この際むしろ徹底的の緊縮整理を敢行し、減税を行ひ、極力民力涵養をなさねばならぬ時である。國民はこの國情をも顧みず人氣取政策や黨勢擴張に國帑を浪費せんとする事なき樣充分に監視せねばならぬ。

（三—七—八）

中國國民政府に望む

根岸佶

一、國民革命の前途

國民軍は北洋軍閥を破つて、北京城を陥れ略ぼ南北を平定した。樂觀するものは支那多年の熱望した國民革命成功したと説き、悲觀するものは第一次革命と同樣國民軍中に内訌生じ、軈がて軍閥の攻討を繰返すだらうと論ずる。國民軍が嶺南の一角から打倒軍閥反帝國主義をモットーとして兵を起し、支那民族の共鳴を得、二歳ならずして全國を風靡した際だから、當分其偉功を沒却する罪首となるやうなもの出まいと思はれる。また大小の軍閥私兵を擁して四方に割據し中央政府の威力觀るに足るものなく、列強は八十餘年獲得した特殊の權利々益を擁護し國民政府なるものを承認するに至らないのであるから、これ

居るが現在は恐らく軍政期から訓政期に入らんとするものだらう。明治政府は江戸城を收めてから辛苦經營の末、數年を經て廢藩置縣の斷行により、國内を統一し、三十年の後不平等條約を改正し列强と對等に進み、始めて維新の大業を完成した。今支那は日本に比し環境順潮であるから、日本の半分の力を用ゐ數倍の功を擧ぐること出來るが、封建諸侯に等しき軍閥を一掃して國内を改造し、列强の根深き帝國主義を打倒して國際水平となり依て以て、國民革命を成就すること決して容易でない。以下少しく此問題につき卑見を述べてみよう。

二、兵權奉還

國民黨は

維新の先覺者に、三百諸侯が依然として其封內に於て兵力と法權とを有する限り、明治政府は徒らに空名を擁するのみで、全國を統一することは出來ないから、苦心慘憺、各藩主を說伏し、版籍を奉還せしめた。今や東三省に張學良あり、雲南に唐繼堯あり、四川に大小軍閥あり、國民軍の巨星蔣介石・馮玉祥・閻錫山・白崇禧・李宗仁・李濟琛の徒各々勢力範圍に割據して居ること略ぼ明治初年に於ける薩長土肥の諸藩と異ならない。若し彼等にして兵權を拋棄せなければ、南京政府も亦戊辰の京都政府と似たものであらう。それで目下支那に於て軍閥の兵權を削ぐ爲の裁兵が高調せられ居る。

裁兵は國防と財政の均衡上より決定せなければならぬが、之につき南京政府は如何なる案を有して居るか。新聞紙の傳ふる所に據ると、現在支那に三百個師團あるから、之を六十個師團に縮少し、毎師團の定員を一萬人にしたいといふのである。國防財政の兩面から見て適當であるだらうか。支那の現狀では日本や露西亞を目標として國防を決定する譯に行かないから、主として國內の治安維持を目標にせなければならぬ。支那には統制ある土匪團所在に割據し、河南の樊鐘秀の如きは流石の梟雄馮玉祥をして心膽を寒からしめる。省內に相當の正規軍隊なければ、到底治安を維持すること出來ない。清朝は袁世凱の獻策を容れ、三十六個師團を建設する計劃で、十七個師團を完成したとき、革命起り、それより南北新募の兵年々增加し、大正九年に百二十八師團八十九萬六千三百六十二人に達した。それで裁兵の議熾んに起り國務總理靳雲鵬等は三年を期し、六十四個師團一百十萬人に縮少することを企てた。六十師團あれば大省に四個師團、中省に三個師團、小省に二個師團位、常設することが出來るから、治安を維持するに充分であらうと思ふ。唯財政上之を支持し得るや否やが問題である。一師團の兵員は或は一萬五千と號し、或は一萬と稱するが、實數七千であつて、一ヶ年の經費百七十五萬元に過ぎない。それで一億五百萬元あれば六十個師團を支持することが出來るのだ。民國八年の決定豫算の歲入四億四千四十一萬九千七百八十六元であるから、財權中央に歸する限り、六十個師團の軍費を支出すること困難でない。從ふて六十個師團を存置することは、國防財政兩方面から見て、適當であると信ずる。

支那當局の說に從へば、三百個師團現存して居るとのことだから六十個師團を存置せんには二百四十個師團を削減せなければならぬ。今信ずべき報道に據るに全國の軍隊百八十萬人即ち二百六十個師團しかないとのことだから、眞に削減すべきものは二百個師團、百四十萬人に過ぎなかろう。第一次革命亂後の裁兵の例に照するに三ヶ月分の俸給と旅費を支給する外、不拂俸給を支拂ふこととし俸給及旅費一千三百二十萬二千四百元、不拂俸給一千五百九十一萬元、合計二千九百十一萬二千四百元を支拂ひ、官佐一萬八千七百二十名、士卒三十一萬六千一百名を解散した。即ち平均一萬人を解散するに八十七萬元を支拂ふに過ぎない。今一萬人につき一百萬元を支拂ふものとするも一億四千萬元あれば裁兵の目的を達成すること出來るのだ。特別關稅會議に

於て日英米三國專門委員で協定した差等税率を實行するときは、關税收入から、關税擔保借款元利、釐金廢止補償費、新整理公債元利、及湖廣津浦兩鐵道借款費を控除し尚ほ一千七百萬元殘る勘定になるから、之を擔保とし內外債を募集すれば、裁兵費を捻出すること容易である。

世間で裁兵問題を以て難關とし國民革命の成否は之によりトすることと出來ると論ずるものあるが、上述の通り技術的方面から觀察して六ヶ敷ものでない。唯問題は國民軍の巨頭が兵權を中央政府に奉還するや否やに存する。新聞紙傳ふ所に據れば蔣介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁、及李濟琛等は各〻占領した地域の軍區長となり區內の師團を統率するを得るとのことである。若し果して然らば彼等は袁氏歿後の巡閱使と畧ぼ同樣の地位を占むることになり、舊軍閥に代ふるに新軍閥を以てする虞ある。從ふて彼等は日本の三百諸侯に倣つて兵權を中央に奉還して勇退高踏するか又は大久保木戶の如く寸兵を佩びないで臺閣の一員となり恪勤盡粹し依て以て國內を統一するやうにせなければならぬ。若し然らざるときは國民黨の諸公が如何なる猷謀大策を案出しても、中央政府は威令城外に及ばなかつた、北京政府と等しく權力

三、條約改正

國際水平は國內統一と並んだ國民政府の最大使命である。國內を統一する爲め打倒軍閥を標語とするのは得策であるが國際水平を招來する爲め反帝國主義を題目とするのは危險である。北伐軍が反帝國主義を題目とした爲め妄りに排外心を挑發し曩に南京事件を惹起し今復た濟南事件を惹起した。若し日本を始め列强が寬大な處置に出でなかつたなら國民軍は太平天國軍の覆轍に陷つたかも知れない。反帝國主義の眼目は孫逸仙の遺言にある通り不平等條約を廢止し列强の束縛から解放されんとするにあるのだ。赤露に煽てられ暴力に依り國權を恢復する手段に出でないで日本に倣ひ合理的に不平等條約を改正する方法を採ればよいでないか。不平等條約には種類多いが其最も重要なものは税關と法權に屬するものであるから此二つさへ恢復すれば他は刃を向へて解くことも出來るのである。之を恢復する方法に、關係各國を集めて會議するのと、國別談判する二つある。日本の例によると國別談判するのがよい。日本は支那と等しく不平等條約に苦しめられ、北

失政頻りなることの認定した、政具體策に就き確たるに及んで其氣勢の旺盛に列國一同と會議するに存することを看破し非常の決心を以て國別談判に從事した。先づ日本と最も親密であつた英吉利と交渉を開始し條約改正の目的を達したので、自餘の國家も亦已むを得ず英吉利に倣つて承認することとなり、始めて國權を恢復して列強と對等になつた。今支那が不平等條約を改正することにつき列國會議を開くことの不利なるは特別關税會議に徴し明白であるから、日本の施設に倣ひ、支那に對し最も同情を表する日本と先づ其交渉を試むべきであつて北京政府當局が此處置を採つたのは確かに賢明といふべきだ。國民政府の新外交部長王正廷は條約改正の意思あることを言明し、支那の一方的意思で條約を廢棄せぬことを暗示し北伐軍の末流の如く兵力に依り列強の勢力を驅逐する模様ない。

若し此態度を一貫するならば、何國も誠意を以て其達成を援助すべきであらう。但し南京政府は條約改正會議を開く意向なりとの噂あるがこれは支那にとり不利であつて北京政府の遺策を繼承し國別談判を爲すべきである。我邦は既に昭和二年一月二十一日から北京政府と條約改正談判を開始して居つたが南京政府として希望するならば引續き同政府と談判してもよく又國際會議に參加してもよく要は適切な方針の下に支那をして列強と平等の地位に立たしめればよいのである。

日支條約改正談判に就て日本の執つた根本方針は互惠的對等主義に基き根本的に條約の改正を行ひ支那國民の合理的な希望を實現せしめる。但し過渡時代的なる條約改正を行ふことになつて、急激に變化を起し之が爲め日支兩國民に如何なる損害を與へるかも知れないから、之を調節するに足るべき一時的規定を設けんとするのであつた。これは當然するところなき政策であつて何時如何なる場合にても變更する必要なからう。先づ税權問題についていへば、關税特別會議で日本が中外に表明した通り一定年より支那に關税自主權を許し國定税率實施前日まで日英米三國專門委員間に決定せられた七分五厘乃至二割七分五厘の差等税率を行ひ國定税率實施後少くとも十年間適當な互惠主義に基く協定税率を行ふやうにすればよからう。但し原料品食料品等日本の經濟生活に必要なものは輸出税を廢止し同時に防穀令の如き封建的制度を撤去せしめなければならぬ。尋で法權問題についていへば、日本は夙に治外法權を撤廢する意思あつて彼の不評判な二十一ヶ條要求を提出した際すら其傍意を漏し北京に於ける法權委員會に於ても亦支那の爲め周旋を怠らなかつた。歐米人は支那人と人情風俗を異にするのみならず支那の裁判に對し不安を抱き廣東貿易時代から支那の法廷に服することを嫌ひ今に至るまで殆んど變りなく過般の法權委員會に於ける態度によく其情表はれて居る。日本としては歐米人の態度如何に拘らず、支那全國に亘り一般的に治外法權を撤廢するとも將たまた支那の準備整つた地方から順次之を撤廢することも一に支那の要求に任せてよかろうと思ふ。但し支那今日の法制は不備であるから日本人の裁判に對し適當な保障を爲さしむると同時に相互主義に依り土地所有權を

許さしむるべきこと論を俟たぬ。以上は日本としての極度の讓歩であつて支那は何れの國よりもこれに優る讓歩を期待すること出來ぬから支那は之に滿足し新改訂條約を締結すべきである。而し日支間に對等條約成立すれば他の不平等條約國も之に傚ふべきは日本の前例に照らし明かである。又若し支那が列國と對等の地位に進めば國民黨の諸公が主張して居る政治的經濟的敎育的各種の利權をも恢復すること容易であつて是れ亦日本の例に顧み疑ふべき餘地ないのである。從つて諸公は反帝國主義などを標榜し面白からぬ行動を採るをやめ吾人の說く所に遵ひ條約改正の一路に向つて驀進し他を顧みないがよかろう。

四、國民革命の成敗

以上述べた通り國民軍の巨頭が軍閥を詛ふ國民の意思を尊重し自ら兵權を中央に奉還し國民政府が支那に同情を寄せる諸國家に對し國別談判に依り條約を改正せば國內を統一し國際水平となつて支那の多年希望し努力した所謂國民革命なるもの成功するのである。之を三百諸侯をして三百年間撫循した土地人民を奉還せしめ、リツツルヂヤツプとして未開國扱ひする列强をして對等條約を締結せしめた日本の維新に比すれば其難易同日の談でなかろう。然し明治初年廟堂の諸公西鄉木戶大久保などは不世出の雄傑であり、上參議から下邏卒に至るまで何れも皆忠誠君國に許して居つた。三條岩倉の二公は薩長の均衡に苦心し薩長出身の先輩も亦調和に努めた。特に外交に愼み所謂小を以て大に事ふる傾すらあつた。文字通り、上下同心協力國事に貢獻し數十年を經て維新の大業纔かに成就した。今支那を觀るに三傑に比すべき人物一寸見當らず國民軍の諸將兵權を奉還するや否や疑はしく、反て地盤や政權を爭ふやうな模樣ないでもない。而も之を調停するに足るべき適材あるかどうか判らない。外交に至りては濟南事件後大に愼んで居るやうだが尙ほ列强の意思に反して海關鹽務郵政を處分せんとする風あり、南北を通じ根深い排日運動を試みて居る。甚だしきは一方的意思に不平等條約を廢止せんとするひらめきさへ見へる。此儘に進んで行けば北伐軍起つたときの反帝國主義運動に逆轉する虞若無でない。殊に支那は明治維新と異り國家改造に鉅億の資金を要し袁氏が假大統領となつたとき五年に亘り六億元を要するものとし五國財團から二億五千萬元を借り入れた外、クリスプやダコタなどの一億元位の諸款を起した。國民政府も亦裁兵費を始め鉅億の資金を要すること明かであつて其大半は之を外國に仰がなければならぬこと是れ亦疑ひない。然るに自ら好んで外國と事を構ふれば改造に必要な資金を借ること出來ないばかりでなく、不平等條約改正も亦むつかしくなるだろうと思ふ。從つて國民革命は日本の採つた方向をたどれば明治維新よりも容易であろうが、彼等の步みつゝある道から推せば種々疑問があつて一派の論者の如く國民革命成就すると斷定するのは尙早でなかろうか。第一次革命の失敗したとき外國人間に靑年支那は淸朝より腐敗し支那を統治する能力ないから國際管理にせなければならぬとの論生

した。昨年北伐軍が徐州の戰に負けたとき國民革命の前途を危ぶむもの十第一革命に民黨金であつて北伐軍に金錢金であるとの酷評すら生じた。若し不幸にして今回も亦失敗すれば國民革命の信用地を掃ひ國際管理論など擡頭し支那にとり憂ふべき事態發生するだろう。吾人は國民軍諸公に犠牲心を發揮して兵權を中央に奉還し外交を愼重にして條約を改正し國民革命の完成に努力することを勸告したい。若し彼等にして斯くの如くなれば、日本も亦過去に於ける誤謬に顧み、深厚な同情を寄せ、單に道德的の援助のみならず、借款を引受くるなど積極的援助を試み、率先して國民政府を承認し、模範的な條約改正を斷行し支那をして宿望を達成せしむべきこと勿論であろう。

高畠素之著

マルクス學解說

（四六版 三八〇頁）

定價壹圓 送料拾八錢

最新刊

本書は現代思想の主潮たるマルクスの學說を、通俗的に、而も相當專門的に、一般讀者に理解せしむる目的の下に著述したるもので、この任務に於て、著者が我國最適任者の一人であることは、何人も認むるところであらう。本書の前身（マルクス十二講）は既に多大の歡迎を享けた。が、更に幾多の改訂を加へた本書は、マルクス學全盛の今日、實に各人必讀の書である。

〔目次〕

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

「我が懺悔」を中心として見たトルストイ

武者小路實篤

クロポトキンが今から二十三四年前「露西亜文學の理想と現實」の内に、トルストイに就てかうかいてゐる

「併しルッソーの歿後、トルストイが其道德上の著作で人々の良心を動かした程それほど深い感化を及ぼした者は確かに他にはない。彼は深い印象的の形で、當時の道德問題の諸相を怖るゝ處なく述べた。故に彼の著書を讀む者は、最早それ等の問題を忘れ、または等閑に附する事は出來ず、如何にかして何等かの解決を得たいと感ぜずにはゐられない。從つてトルストイの影響は、單に十年二十年の年限を以て計らるべきものでなくて、もつと永くつゞくであらうと思ふ。それはまた一國に限らるべきものではない。數百萬部の彼の著書は、あらゆる國語にて讀まれ、あらゆる階級、あらゆる國民の男女に向つて同樣に訴へ、そして到る處で同じ結果を生じてゐる。トルストイは今日世界に於て最も愛せられ――最も深く愛せられた人である」(アルス版)

自分はクロポトキンのドストエフスキー論には同感出來ない處が多かつたが、このトルストイに關する言葉は全部的に賛成である。

そして僕が一番トルストイに夢中になつてゐた時分に或はその一二年前にこの論文がかゝれたことに興味をもつ。

そして自分もトルストイを熱愛した一人である。

そして自分が新しき村の仕事を始めたのも、「如何にかして何等かの解決を」得ないではおさまらないものをトルストイから目ざまされたからである。

自分は十九から二十二三位いまでトルストイに夢中になつてゐた。そして手に入るかぎり讀んだ。たゞトルストイの「戰爭と平和」だけはよまなかつたが、それはドイツのレクラム版きり當時手に入れることが出來なかつたが、それが三分の一以上ぬかしてあるので、完全譯を手に入れたいと思つてゐる內、熱病時代を通りすぎたからである。

それから自分はトルストイの本をあまり見なかつた。その間にも、「闇の力」や「クロイチエル・ソナタ」なぞはよみかへしたり、芝居

で見たりして感激したが、しかしあまりに影響を受けすぎそれに中毒しかけた自分は一時トルストイの本をよむ氣になれなかつた。

處がこの頃又よみなほしたくなつた。

自分は先日丸善でトルストイの遺作の出てゐる本をかつた。そしてその内のトルストイの晩年の寫眞を見てゐたら涙ぐんだ。偉い恩師を思ひ出したので。

實際自分は正直に云つて、トルストイを熱愛した、それは初戀に何處か似てゐる。當時片假名のトの字を見ても顏がほてるのを覺えた。

そしてトルストイの一言一句が出てゐる雜誌を見ると、それがどの本のぬきがきにしろ買つて歸らないわけにはゆかなかつた。そして人をつかまへるとトルストイの話をもち出した。

なぜそんなに僕を夢中にさせる力があつたのか。そしてそれは無論、僕許りではない。全世界には何十萬とゐたらう。ローマン・ローランの仲間もトルストイに夢中になつてゐたらしい。日本でも澤山のトルストイアンが出來た。

今はかげをひそめてゐるが、影響を何かの形でとめてゐる人は決して少くないであらう。

はゆかない。

トルストイはまれに見る正直ものであり、まれに見る本音をはける人であり、そして實によくものを見てゐる。彼は何事も中途半端でおさまらない。彼は死と戰ひ、そしてそれに打ちかつた。それは愛の力による。そして彼は實にこの地上の人間の生命を愛し、そのために全體で考へ、そしてそのために默つてゐられないことをしやべる。

○

自分はこゝでトルストイのことをくわしくかくわけにはゆかない。それは短時間に、又短い紙數では不可能なことだ。彼の著書は實に多い。そして彼の文獻は實に多い。彼のことを書かうと思ふと、その材料が多すぎて啞然としてしまう。

佛教のたとへに、「渇いた旅人が水をのもうと思つてある湖水に出た。その湖水の水は實に甘いのだが、旅人はあまり水が多いので、何處からのんでいゝかわからないので、ついに水をのまずに死んでしまつた」と云ふ話があるが佛教も勿論さうだが、トルストイも一寸手がつけられない。何處からのんでもいゝわけだが、さて何處から手につけて、いゝかわからない。

探究したい。かいていつてには切りがないし、無責任なことはかきたくないから。

自分は正直に云つて、トルストイの作品はずつと前によんだまゝで、その後よまないのではつ切り覚えてゐないが、しかし自分が忘れることの出來ないのは短篇の「ルチエルン」だ、之は最初に獨逸語で字引ひき〳〵よんだので忘れられないが、さすがに若い時の作だが後年クロイチエル・ソナタをかくことが出來た人だけの熱情を感じる。そして貧しきものにたいする同情、世俗にたいする怒り、火のやうな文字、さすがにトルストイでないと書けないものと思つた。

「戰爭と平和」「アンナ・カレニナ」が大作であり傑作であることは定評であるし、僕は恥かしい話だが前にもかいたが「戰爭と平和」はよんでゐないし、「アンナ・カレニナ」もすべて前に隨分よろこんで感心してよんだが、はつ切りしたことが云へないから、之は他の人にゆづるか、他日にゆづることにしたい。しかし二つの作品はトルストイの作品中の二大大山であり、之あるためにトルストイが無比な大きさの姿をもつて我々にのぞんでくることは事實である。

その二つをぬかして、大物は「復活」であるが、之はあとで少しくわしく讀みなほしてかいて見たい。

その他前に云つた「クロイチエル・ソナタ」「闇の力」は勿論、「光闇を照らす、」なぞも恐ろしい。「童話」は又素敵である。もう隨分前に、二十二三年前に上田敏氏を訪問した時、トルストイの他のものは亡びても「寓話」は何時までのこるであらうと云ふ意味のことをかいたことがあつたが、他のものはともかく寓話がすばらしいものであることはまちがいない。その他、「主人と僕」、「イワン・イリイッチの死」なぞ思ひ出してもなつかしい氣持がする。何か清淨なものにふれた思ひ出がのこる。

「家庭の幸福」なぞもドイツ譯でよんだ時は隨分涙ぐみ、いゝ思ひ出がのこつてゐるが、その後阿部次郎の譯でよんだらつやがぬけてゐていゝ思ひ出がけされたやうに思つた。「クロイチエル・ソナタ」は同君の譯でよみなほして感心をあらたにされたが。

自分が最も影響をうけたのは何と云つても宗教的論文である。加藤直士譯「我が宗教」は僕を夢中にさせた。

それから「神の國は汝爾のうちにあり」なぞ、それから「我等何をなすべきか」も加藤一夫の譯でよんでおどろいた。

日露戰爭時分に出た、論文にも實に感動した。あとでよんだ時は當時程感動は出來なかつたかと思ふが、「簡易福音書」は何度よんだか。

それ等の本は今、日向の新しき村においてある。

自分はこゝでトルストイを讀んだ時の思ひ出を語らうと思ふのではない。トルストイの本音を人々と共にきゝたいと思ふのである。

それはトルストイの本をよむにしくはない。

それに自分はまづ、「我が懺悔」を人々と一緒によみたく思ふ。自分は手許にある春秋社版の細田源吉譯による。(私の懺悔となつてゐる

が、我が……の方が僕にはぴつたりする。それは始めにさう云ふ題でよんだせいもあると思ふ。

○

（我が懺悔について）

自分はこゝでトルストイが自己の半生にたいする總決算を見、そして新しい生活に入る經路を知ることが出來る。言葉は簡單明瞭だけに、トルストイの斷定には簡單明瞭すぎていゝすぎてゐる所も多いかと思ふ。しかし全體として見ては實によく見、よくかいてあると思ふ。トルストイが人生上に根本的なうたがいをかけ、それがために一歩一歩道がとざされ、ついに光明をすつかり失ない、死のみが事實のやうに思ひ、自殺の誘惑におそはれ、それからそれに打ち克つまでの記錄で、我等には實に教はることが多い。殊に文職人の惡口なぞは我等が耳がいたくなる處が多い。

またいろ／＼の點で日本もロシヤも同じことであることを教はる。

「私は心から自分を善良な有徳な人間にしようと願つた。が、私は若かつたし、慾情もあつたし、しかも一人ぼつちで、全く一人ぼつちで、[illegible]打のあるものとして見出した。私はかうした情慾に身を委ねて、[illegible]年長者達のやうになることによつて、私のこの世に占めてゐる位置と云ふものが、私の周圍の人々を滿足させる事を感じた……」

之は日本でも事實である。日本の學生達にとつても事實である。之はなぜか、その理由についてはトルストイは何にも云つてゐない。

（僕自身の考をこゝで少し云はさしてもらへば、之は人間に與へられた競爭心の病的なあらはれのやうに思ふ。他人が自分よりも優ることを嫌ふ。意識されない本能、他人にまけずに自己をよくするのが面倒であり、又人間にあたへられた本能的快樂をむさぼりながら他人に負けたくない、慾のいゝ根性から出てくるものと思ふ、自分の姿の醜くさを見たくない處からも出てくる）

又トルストイはかう云つてゐる。

「私は虚榮心から、金儲から、矜持から、ものを書くことを始めた。私は人間として選んだと同じ道を、著作家としても取つた。私は著作によつて名聲と金錢とを得るが爲めに、强ひて善良なものを押し隠して、而かも邪惡なものゝ前に拜跪した。私は筆をとつてゐる間に、ど

思ふ。しかし、之は少し誇張しすぎてゐるやうに思へる。かくしてもかくし切れない偉きトルストイのよさは著作の内に閃いてゐるにちがいない。そしてかく動機も全部的に虚栄心等許りからとは思へない。少くもトルストイの作を見て。しかしその内にさう云ふ分子があつたことは嘘ではあるまい。そして其處に誇張された恥かしさを感じるのは、トルストイだからだと云へる。

しかし解釋が少し簡單過ぎはしないか。それが全部とは思へない。しかし中途半端でとまれないトルストイは自分の態度の不純や、醜くさを用捨出來ないのは當然であり、我等もその非難の聲を何處かに受けないわけにはゆかない。

僞惡者をよそおう、我等は一部、僞善者であり、一部僞惡者である。正體を示すのが怖いし、又示されるのも怖いのだ。

トルストイは又から云つてゐる。

『私は周圍を見る餘裕もなく、私の交つてゐる文士達に共通した人生上の偏見や意見やが、私自身のものになり、そして以前の、より善き生活を求めるあらゆる苦鬪は、全く跡を絶つてしまつた。』

『私の同じ仲間達によつて抱かれたその人生觀は畢竟人生は一個の進展であつて、その進展に於ける主要な役割は、吾々思想家によつて演ぜられるもので、しかもその思想家の中でも最も主要な力をもつものは詩人であると云ふのである。吾々の使命は人類を教へるにあつた。』

トルストイはそれから、教へるものが、何にも實は知つてゐないことを段々さとつて來たことをかいてゐる。

『殊にその第三年目に於いて、私はこの信仰の神聖さを疑ひ出して、更に詳細に考察してみようとした。私の注意を惹いた第一の疑ふべき事實は、この信仰の使徒達は彼等自身の間に一致がないといふことであつた。』

そしてお互に自分達ばかりが正しいと主張し、論爭し、非難し、欺き、誑かし合つた』

そしてトルストイは今度はその人達の生活を見た。すると

『これ等の文士達が不道徳な生活を送つてゐる事、彼等の多くは無價値な凡俗な人達であつて、以前の私の放縱な生活や、軍隊の生活において交き合つた人達よりも、遙かに低い道徳的標準に止つてゐる事を自ら考へるに至つた。』

『この人達は、あの、自ら聖人だと意識してゐる人々や、もしくは神聖といふことが彼らに空虚な名目になつてゐる人々にのみ見られるやうな自信を、著しく持つてゐる人達ばかりだつた。』

『私は人間を、同時に自分自身を、嫌惡するやうにな』つた。

から云ふ風にぬきがきしてゆくときりがないが、しかし之でもわかるやうにトルストイはものゝ正體をつかまないでは我慢の出來ない男であり、彼の目にあつては、人々が皆ボロ〳〵の着物をきて居るやうに見えた。殊に彼は宗教にたいしては敏感であつた。

こゝで自分は少し「我が懺悔」からはなれて、文壇に入つた當時の

トルストイのことを他の方面から見て見やうと思ふ

トルストイは自分の方が當時の文壇人にかいてゐるが、大トルストイ傳の著者ビリユーコフは

『ペテルブルグの文學者のサークルへ、レフ・トルストーイはその激しい、如何にも藝術家らしい、感じ易い氣質を、その已む事なき、時々には怒り易くさへある性格をもつて現れた。そして穏かな、制度を守つてゐる連中の間に、時ならぬ嵐を捲き起した。』（原久一郎譯）

トルストイの「我が懺悔」には自分が如何にもおとなしく同化されるやうにとれるかき方がしてあるが、それも嘘とは云へないが、しかし第二者が見ればビリユーコフの云ふ方が本當であらう。トルストイは傲慢さも手つだつてゐたし、驕さも手つだつてゐたかも知れないが、同時になまやさしく同化される男とは思はない。

フエツトウの回想錄は當時のありさまをよく語つてゐて、トルストイの面目が躍如としてゐる。次ぎの話は有名な話ではあるが何度よんでも面白い話だからかいておく。

『トウルゲーニエフは（ペテルブルグの習慣に從つて）毎朝早く起きて茶を飲んだ。そして私は短かい私の滯在中、毎日自由に漫談

ふに眠つてゐる伯を起さないやうにといふ心遣ひから、そく聲で話し合つた。』

『何時もあんな風なんですよ』とトウルゲーニエフは笑を浮べて言つた。『セバストーポリの砲兵隊から歸つて來て、私のうちに御輿を据えると、すぐもう御苦勞千萬な遊蕩生活に飛び込んだんです。酒色、ジプシイの女、賭博で、夜明かしです。そして午後二時頃まで、死んだやうになつて眠るのです。もう少しお手柔かにした方が好いと言つて、自制せしめようと努めてゐるのですが、もう先生、首を横に振つて、てんで相手にしないのです』

又フエツトウは云ふ。

『初對面のそもそもから、私は此の若いトルストーイの中に、書物の批判に於て世間一般の人々が取り入れてある凡ての判斷に、本能的に反抗するやうなところのあるものを觀てとつた』

之等の言葉、又次ぎにのべるツルゲーネフとの口論の有樣なぞを見ると、トルストイの態度がはつきり目に浮ぶ。彼は「我が懺悔」ではすぐ自分が當時の文士達の人生觀にかぶれたやうにかいてある。

[illegible]

そして私はプラトーにとつての[illegible]にとつての[illegible]やうな人に出逢ふことは出來なかつた。然し又プラトーの[illegible]のやうな性質ともちがつてゐたのは本質であらうが、同時、又トルストイが尊敬するのに足る人がゐなかつたのも事實である。そしてミケルアンゼロ型の處をいく分もつ彼は、自分よりも[illegible]するツルゲーネフに辛抱が出來なかつた。ミケルアンゼロがダ・ヴインチに辛抱が出來なかつたやうに。

そして或日爆發が來た。

「此の有名なグリガローキツチが、その同じニエクラーソフの家で、トルストーイとトウルゲーニエフとの爭論について、いろんな話の末に、斯う傳えてくれた。「君、君」——と喘ぎながら、眼に笑ひの涙を浮べながら、私の肩へ手をかけて、グリガローキツチは言つた。「こゝにどんな一幕が演じられたか、君は想像もつかないでせう。いやハヤ、全くどうも！ トウルゲーニエフはピイ〳〵と泣くやうな聲を出し、手で咽喉を抑へ、瀕死の羚羊のやうな眼附をして、「もうこれ以上は耐え得ない！ 私は氣管支カタルなんだ！」と囁くやうな聲で言つて、大股で三つの部屋をブツ通しに行つたり來たりし始める。「氣管支カタル」トルストーイは追掛けるやうに呟いた。「氣管支カタルなんざ氣病なんだ、金切聲を出させる仕事に過ぎないのだ……」勿論、主人役のニエクラーソフは氣が氣ぢやない。彼は「現代人のドル箱と感じ

[illegible]になつて、部屋に入つた。[illegible]て好いか分らない。トルストイは[illegible]の長椅子の上に寢ころんで、ふくれ面をしてゐる。とトゥルゲーニエフはまた、トウルゲーニエフで短かいジヤケツの裾をさばいて、ポケツトへ兩手を突込んで、三つの部屋をぶつ通しに、行きつ戻りつやつてゐる。……」二人の面目が生きてゐる。（この喧嘩はツルゲネーフが部屋つて家から出ていつたのでやつとおさまつたらしい）

又もう一つ有名な話がある。

グリガローヰツチの文壇回想錄にあるのださうだが、グリガローヰツチが、トルストイが「現代人」編輯部へ正餐に招かれ時、トルストイが同誌の人に知人がゐないので、案内役をした。途中で彼はトルストイに現代の編輯部の人々がジヨージ・サンドを狂信的に崇拜してゐるから、サンドの攻擊はさしひかへるやうに注意した。食事は無難にすぎた。そしてトルストイは可成控目にしてゐた。處が終り近かくなつて人々がサンドの近作を賞め出したら、トルストイはとう〳〵辛抱が出來ないで、自分の感情を爆發させてしまつた。

「もし彼女の小說の女主人公等が、實在してゐるものなら、戒めのために、差詰め「恥さらし車」に縛りつけて、ペテルブルグの街々を引づりまわすがいゝ。」

グリガローヰツチは又から云つてゐる。

「話の相手が權威ある人物と思はれゝば思はれるだけ、ます〳〵反對の事を云つて、論戰しようといふ氣持か、執拗に、彼をそそり立てるのであつた。彼が傾聽してゐるところ、深くかくれた灰色の眼の奧から、自分の話相手をちつと見戍つてゐるところ、皮肉に脣を嚙み合せてゐるところを見たら、はゝあ奴さん、また當面の問題を考へてゐるのでなしに、その突拍子もない點で相手を辟易させ、面喰はせるに足るやうな、奇拔な意見を考究してゐるのだなと、かう考へてよかつた。若い時分のトルストーイ（當時二十七八）は私の眼にはかう人物として映つたのである」（原久一郎譯）

自分はこのトルストイの態度をいゝとは云はない。しかしこの位いの勢があつて大作家にもなれ、全世界をゆりうごかすことが出來たことは見のがせない。

だからトルストイのこの癖にへこたれたツルゲーネフはうまいことを云つた。

トルストイの兄ニコライについてかう云つた。

「ニコライに偉大な作家になるにかけてゐるものはたゞ大作家になる必要な缺點をもつてゐないことだ」

ことを知つてゐる。」

それで又「我が懺悔」に歸ることにする。

トルストイは一度び自分の仕事の神聖を疑がつてから、彼は結婚する時期までの生活を彼は無意味なものと見てゐる。否無意味以上「今や私には、吾々と瘋狂院の患者との間に、何の差別もないことが明白である」と云つてゐる。つまり何も知らないでゐながら、自己を優良な人間であると考へてゐたことの馬鹿々々しさを彼は五十近かくなつて痛感したのだつた。

彼はそれを始めは漠然と疑つてゐたゞけで、すべての狂人と同じく、自分以外のすべての人を狂人だと思つてゐたのだと云つてゐる。

彼はその間に外國へ行き巴里で公開的な死刑執行を見た。

彼はその時の感じのことを「我が懺悔」にかうかいてゐる。

「私が巴里の滯在中、ふと見物した公開的な死刑執行の光景は、進步に對する私の迷信的な信仰の弱點を、露はに示した。私は頭が身體から截ち切られるのを見、そしてその二つの部分が別々に箱の中に落ちる響音を聞いた時に、私の理性ではなく、私の全存在を以て、凡ての既成事物の知識に關する理論も、又は進步の理論も、この行爲を是認

く、正しきこと、必要なることを遂行しなければならない。我はかう思つた。」（細田源吉譯）

この斷頭台の光景を見たことは實に强い刺戟をトルストイに與へたことはトルストイの日記にもあらはれ、その他他の人の語でもつたへられてゐる。日記の方は大トルストイ傳にかいてあるのでついでにぬきがきする。

『千八百五十七年四月六日。六時より七時の間に起床、死刑執行を見物に行く。太い白い、健康さうな頸、聖書の接吻、それから――死。何といふ無意味。強烈な、空しく消え去らない印象。余は政治家にあらず。道德と藝術。私は知り、愛し、同情することが出來る……斷頭台が長いこと私に眠ることを許さず、自分の周圍を省みしめた。』（原久一郎譯）

その後彼は只ニコライの死にあつた。まだ若かつた彼の兄は一年間病氣にくるしめぬかれて死んだ。彼は我が懺悔にかいてゐる。

『彼は立派な才能もあり、親切でもあり、眞面目な性質の人でもあつたが、しかし自分がこれ迄何故に生きて來たか、又は死が彼にとつて何の意味を持つてゐるかも知らずして死んだ。彼のながいそして苦しい煩ひの間、如何なる理論も、この疑問に對する答をば彼にも私にも與へることは出來なかつた。しかしその當時は疑問を起す機會も極くまれにしかなかつた。結局私は、依然として進歩に對する信仰を公言しつゝ生活することを止めなかつた』

かう云ふ點にかいてゐては堪りきれないから、か

する。

ともかくトルストイはその後田舎に引こみ百姓

それから病氣になつた。「一年間、私は管理人として學校の事や雜誌のことに沒頭し、死ぬるほどの苦し

云つてゐる。それからサマラへ轉地し、「新鮮な空氣をみ、只管動物的生活を生きようといふ考へで曠野に向

れから健康をとりもどし歸つて結婚した。

彼はその間に澤山のすぐれた作をかいたことは云

は何と云はふと、それ等の作は立派なものにちがいな

そして子供がつぎ〳〵と生れ、「戰爭と平和」や

ナ」をかいた。そして五十近くなるまで、彼は父

つたが、一度まかれた、人生にたいする懷疑の芽は

とう〳〵彼をどうすることも出來ない目にあはせて

彼は「何故か」「それから何か」と云ふ問題にますく

した。

「私の生活は、俄然停止した、私は呼吸したり、食つたり、飲んだり、寢たりすることは出來た。……もう私には眞實な生活がなかつた。私は私が合理的だと感じ得ることの遂行のために努力しやうなぞとは塵ほどの望みを抱かなかつた。」

そして彼は或る斷崖の端に立たされ、最後の破滅以外何ものも見る

「話の相手が權威ある人物と思はれゝば思はれるだけ、ます〳〵反對の事を云つて、論戰しようといふ氣持が、執拗に、彼をそそり立てるのであつた。彼が傾聽してゐるところ、深くかくれた灰色の眼の奥から、自分の話相手をぢつと見戍つてゐるところ、皮肉に唇を嚙み合せてゐるところを見たら、はゝあ奴さん、また當面の問題を考へてゐるのでなしに、その突拍子もない點で相手を辟易させ、面喰はせるに足るやうな、奇拔な意見を考究してゐるのだなと、かう考へてよかつた。若い時分のトルストーイ（當時二十七八）は私の眼にはかう人物として映つたのである」（原久一郎譯）

自分はこのトルストイの態度をいゝとは云はない。しかしこの位いの勢があつて大作家にもなれ、全世界をゆりうごかすことが出來たことは見のがせない。

だからトルストイのこの癖にへこたれたツルゲーネフはうまいことを云つた。

トルストイの兄ニコライについてかう云つた。

「ニコライに偉大な作家になるにかけてゐるものはたゞ大作家になる必要な缺點をもつてゐないことだ」

それはとりもなほさず、弟のレフがその缺點を持ちすぎてゐることを云ひたかつたにちがいない。

○

自分はかう云ふ風にトルストイのことをかいていつては切りがないことを知つてゐる。

それで又「我が懺悔」に歸ることにする。

トルストイは一度び自分の仕事の神聖を疑がつてから、彼は結婚する時期までの生活を彼は無意味なものと見てゐる。否無意味以上「今や私には、吾々と瘋狂院の患者との間に、何の差別もないことが明白である」と云つてゐる。つまり何も知らないでゐながら、自己を優良な人間であると考へてゐたことの馬鹿々々しさを彼は五十近かくなつて痛感したのだつた。

彼はそれを始めは漠然と疑つてゐたゞけで、すべての狂人と同じく、自分以外のすべての人を狂人だと思つてゐたのだと云つてゐる。

彼はその間に外國へ行き巴里で公開的な死刑執行を見た。

彼はその時の感じのことを「我が懺悔」にかうかいてゐる。

「私が巴里の滞在中、ふと見物した公開的な死刑執行の光景は、進歩に對する私の迷信的な信仰の弱點を、露はに示した。私は頭が身體から截ち切られるのを見、そしてその二つの部分が別々に箱の中に落ちる響音を聞いた時に、私の理性ではなく、私の全存在を以て、凡ての既成事物の知識に關する理論も、又は進歩の理論も、この行爲を是認する事は出來ないといふ事を見た。たとへ開闢以來の全世界の人間が、どんな理論によつてこの事を必要であると見做さうとも、そんな事はない。これは惡事だ。だから私は、他の人々の言行でなく、又は進歩說に據ることなく、私は私の心に於いて眞實だと感じたものに據つ

ここ正しきこと、必要なることを死刑しなければならないと言はさう思つた。」（植田嚴譯）

この斷頭台の光景を見たことは實に強い刺戟をトルストイに與へたことはトルストイの日記にもあらはれ、その他他の人の語でもつたへられてゐる。日記の方は大トルストイ傳にかいてあるのでついでにぬきがきする。

『千八百五十七年四月六日。六時より七時の間に起床、死刑執行を見物に行く。太い白い、健康さうな頸、聖書の接吻、それから――死。何といふ無意味。強烈な、空しく消え去らない印象。余は政治家にあらず。道徳と藝術。私は知り、愛し、同情することが出來る……斷頭台が長いこと私に眠ることを許さず、自分の周圍を省みしめた。』（原久一郎譯）

その後彼は只ニコライの死にあつた。まだ若かつた彼の兄は一年間病氣にくるしめぬかれて死んだ。彼は我が懺悔にかいてゐる。

『彼は立派な才能もあり、親切でもあり、眞面目な性質の人でもあつたが、しかし自分がこれ迄何故に生きて來たか、又は死が彼にとつて何の意味を持つてゐるかも知らずして死んだ。彼のながいそして苦しい煩ひの間、如何なる理論も、この疑問に對する答をば彼にも私にも與へることは出來なかつた。しかしその當時は疑問を起す機會も極くまれにしかなかつた。結局私は、依然として進歩に對する信仰を公言しつゝ生活することを止めなかつた』

かう云ふ點においてゝては置かれないから、自分に[illegible]、ここ〳〵する。

ともかくトルストイはその後田舎に引こみ百姓の子に學校を起し、それから病氣になつた二一年間、私は管理人として、義務をつくし、學校の事や雜誌のことに沒頭し、死ぬるほどの苦しみをした」と彼は云つてゐる。それからサマラへ轉地し、「新鮮な空氣を吸ひ、馬乳を飲み、只管動物的生活を生きようといふ考へで曠野に向つて出發し」それから健康をとりもどし歸つて結婚した。

彼はその間に澤山のすぐれた作をかいたことは云ふまでもない。彼は何と云はふと、それ等の作は立派なものにちがいない。

そして子供がつぎ〳〵と生れ、「戰爭と平和」や「アンナ、カレニナ」をかいた。そして五十近くなるまで、彼は父としての務めに骨折つたが、一度まかれた、人生にたいする懷疑の芽は次第に生長して、とう〳〵彼をどうすることも出來ない目にあはせてしまつた。

彼は「何故か」「それから何か」と云ふ問題にます〳〵なやまされたした。

「私の生活は、俄然停止した、私は呼吸したり、食つたり、飲んだり、寝たりすることは出來た。……もう私には眞實な生活がなかつた。私は私が合理的だと感じ得ることの遂行のために努力しやうなどとは願ほどの望みを抱かなかつた。」

そして彼は或る斷崖の端に立たされ、最後の破滅以外何ものも見る

ことが出來なかつた。

他の人ならごまかせたかも知れない。しかし彼はごまかせなかつた。それは若き佛陀をおそつたものと同じものであつたらう。名譽と金と家庭の幸福、だが自分の内にある不死のものはすべて影をかくした。虚無、自殺。

「自殺と云ふ考へが、以前に自分の生活をより善くしようとした考へと同じく、自然に私に起つて來た」

白耳義のベルハーレンもこの危期を經驗したやうに聞いてゐる。その他日本でも有島武郎、芥川龍之介など、強度にちがいはあつても、同じものを見たかと思ふ。

トルストイは、縊死する誘惑を避けるために紐をかくしたり、鐵砲をもつて歩くのをやめたりした。

しかし彼はまた『死んで居る或るものがあつた。』

彼は又から云つてゐる

『これが私の到達した状態で、その頃の私の生活のあらゆる状態は、極めて幸福であつて、年齢もまだ五十歳にならなかつた。私は善良あどけない、可愛い妻や善い子供達をもつ……どころか私は私と同階級、同職業の人達には稀に見る……肉體力とを享樂してゐた。私は百姓と共に刈り續けることが出來たし、何等惡い結果も知らずに一氣に十時間の精神的な働きを續けることも出來た。』

もしトルストイが貧乏であつたら、又トルストイが病氣だつたら、或は子供の一人が病氣だつたら、不足してゐるものが多かつたら、トルストイは反つて精神的な空虚さを感じなかつたかも知れない。彼はその不足をとりもどすために戰ふことに夢中になれたから。しかしトルストイには缺けたものがなかつた。そして得たものは空虚さであつた。

蘆花生が勝利者の悲哀と云ふことを云つたことがある。どう云ふ意味だつたか忘れたが、トルストイもそれに似た悲哀だ。彼はのぞんだものを得た。だがそれは空なものに過ぎなかつた。

「疾病と死とは、今日でなく明日、私の愛するものにも、私にも襲つて來るであらう（實際彼等は襲はれたのだ）そして惡臭と蛆蟲との外には何物も殘らないであらう。……なぜ人間は齷齪するのだ。なぜ人は

[illegible]に必ず死ぬものである。彼はその人間が必ず死ぬと云ふことをはつきり目に見せるために彼東洋のたとへ話をもつて來た。彼はかう云つてゐる。

「東洋の昔噺に、或る一人の旅人が、草原で恐ろしい野獸に襲はれたと云ふ話がある。この旅人は猛獸から身を救はふと思つて、水の涸れた井戸の中に飛び込んだが、彼はその底に一匹の龍が彼を呑まうとして口をあけてるのを見た。不幸な男は猛獸にひきさかれるのを恐れてよぢのぼることも出來ず、龍にのまれるのが怖くつて井戸の底にとび込むことも出來なかつた。それで井戸のすきまからはへてゐる小さな木の枝をしつかりつかんで身をさゝへた。しかし彼の手はつかれてまもなく彼を待ちぶせしてゐる二つのどつちかに身をまかせるより仕方がないことを感じた。しかししつかり身をさゝへてゐた。すると彼は二つの白と黒との鼠が來て彼がつかまつてゐる小さい木の幹のまはりを走り、そして噛むのを見た。見るまに木は噛み切られ彼は井戸の底の怪物の口の中におちなければならない。旅人は自分が助からないこと、亡びることを見、又知つた。しかし彼は木にぶらさがつてゐられる間周圍をさがした。そして木の葉の上に蜜がおちてゐるのを見た、彼はその方へ舌をのばし、そしてそれをなめた」

彼はこの旅人の氣持をさながら味はないわけにはゆかなかつたのだ。それは普通の人が見ると病的と思はれた程、この事實を正視しな[illegible]の氣持を味はふにしては餘りにこのことに氣をうばはれすぎてゐる。

それはおろかなためか、又は生命の法則に從つてゐるためかはわからない。ともかく旅人のやうな目に逢つたらたまらないが、自分が現在そんな目にあつてゐるとは思はないでゐられる。しかしトルストイはゐられなかつた。そして晝と夜の鼠が彼の生命の木の根を根氣よく噛んでゐるのを見た。

彼がぢつとしてゐられないのは當然である。彼は其處で死にもの狂ひで、その苦しみからのがれやうとした。

『以前龍の恐怖から私をごまかしてくれた人生の喜びも最早私をごまかさなくなつた。屢々人は私に云つた。「どうせ人生の意義はつかめない。考へないで、生きていらつしやい。」しかし私にはそれは出來ない。私はあまりに長くそれをつゞけて來たのだから。そして今や私は日夜私が死に向つて急いでいることを見るより仕方がなかつた。私はたゞそのことだけを見る、たつたこの一つのことだけが――眞理である、他はいつはりである』

この一つの考へが彼をとらへて放さず、あらゆることをこの考へで見る。

彼にとつては人生が虚僞であり、從つて藝術も虚僞になつた。龍を見た彼は蜜を甘いとは思へなくなつた。

「それは恐ろしいことであつた。その怖しさから逃れるために私は自殺しやうと思つた。私は私を待つてゐるものに恐れを感じた。私は實際の状況よりもこの恐怖の方がひどいことを知つてゐた。しかし私は最後までまつ忍耐がなかつた。……暗黒の恐怖があまりに大きかつた、私は出來るだけ早く細か銃丸で恐怖からのがれたかつた。この感情が私を自殺させるやうに強迫した。」

しかしトルストイは何度も考へなほした。

そして何處かに自分の考へちがいがありはしないかと考へた。

もしこの通りだと人間が今日まで生てゐることは出來なかつたらうと彼は考へた。そしてこの問題について人智の許す限りの智慧を彼は調べ出した。實に根氣よく彼はさがした。

まづ科學を調べた。そしてその結果は人生は無意義なものであると云ふことを認識するより仕方がなかつた。

それから彼は自分の位置や、いろ／＼の人を知つてゐるのを利用して彼は調べるだけ調べて見た。さすがにトルストイだけの全力をつくし、根氣よく調べた。

「私が今日行ひ、明日行ふだらうことが結局なにゝなるのだ、私の一生は結局なにゝなるのか」

之れがトルストイの問題である。そしてこの問題は換言すると、

「なんのために私は生きるのだ。なんのために私はもとめてゐるのか。なんのために私は行ふのか。」又換言すると「私の一生にさけられない又私を見つめてゐる死に否定されない何かの意味があるのか」

トルストイはこの問題は最も愚かな小供から最も賢い老人にいたるまで誰もが感じてゐる問題であることを知つてゐる。

そして彼は之を無比の根氣で解決しやうとした。

自分はこゝでくわしくその解決を得るまでのトルストイの道程を書かうとは思はない。それは「我が懺悔」を見てもらへばいゝ。

自分はこゝには出來るだけ簡單にかきたいと思つてゐる。しかしこの問題に入つた以上、出來だけトルストイの解決した方法をはつきりし、そしてそれについて自分の考へをかいて見たい。

○

人生は理窟で考へてわかるものではない。それをトルストイは始め理窟で解決しやうとした。そして彼は矢張り失敗したのである。そして得る處は自分と同じやうた問題に無解決に人々が終つてゐることだつた。

彼はソロモンと佛陀とショウペンハウエルとに知己を見出した。(しかし彼の佛陀についての考へは少し同感出來ないが、しかし佛教のことはよく知らないから他日にする)

ともかく彼はかう云つてゐる。

「釋迦は、人生に慰樂を見出すことが出來なかつた。で、人生は極めて不幸であると斷じ、死後その生命の甦らない爲め、また生命を根絶する爲めに、全力を盡して彼自身及び他人をかゝる不幸から脱れし

[illegible]二円の[illegible]所望すべき事である」とソクラテスは言つてゐる。[illegible]

しかしトルストイは最後に信仰により、殊に民衆、労働者、農民の内に生てゐる信仰で救はれることになるが、それ迄の道程で、もう少しのべたいことがある。

それは有島武郎や、芥川龍之介のぶつかつてつきぬけられないものにトルストイもぶつかつて、ともかくつきぬけることが出来た、経路を少しはつ切りしたいからでもある。

少くも人生に就て考へてゐる人には参考になる點が多いと思ふ所を素通りは出来にくいからである。

トルストイは理性で人生を解決しようとして、そして人生は悪であり虚僞であると云ふことを知らされた、そして信仰によると理性を否定しなければならなかつた。彼は理性に従つて人生を否定するか、信仰によつて理性を否定するかこの二つの道を撰ばないわけにはゆかなくなつた。そして彼にとつて理性を否定することは人生を否定するよりやさしいとはいかなかつた。彼はこの二つのヂレンマにおちいつてたえられない状態に落ち入つた。

そして彼はこの矛盾からのがれるためには二つの道があることに氣がついた。

一つは「私が理性的と名付てゐるものが、私の思つてゐる程理性的[illegible]

其處で彼は自分の考を再び吟味し[illegible]にした。そして彼は彼の考へに一つの欠陥のあるのを見出した。

それはもとく彼の問題てのものに無理があることだつた。彼のやうに過ぎゆく人生そのものに恒久で不滅なものを求めたことだつた。

だから彼は満足出来なかつたことを知つた。其處で今度は無常の人生を認めてそれが不滅なものに對してどう云ふ關係を結べばいゝのかと云ふことを彼は考へた。そして彼はその答へを信仰に於て見出すことが出来た。

「どう生きたらいゝか」の問ひにたいしては、答へは與へられてゐた。「神の立法に従つて。」

「私の現在の生活からは何が生ずるか。」

「永遠の苦痛と永遠の祝福。」

「人生には死にやつけられない意味があるか」

「不死の神への一致、天國」

彼はこゝで今迄唯一と思つてゐた理性的認識の他に、理性的ではないが、一つの他の認識があることを知つた。「それは信仰である、そしてそれは生きる能力を與へる。」

其處で彼は又信仰と云ふものがどう云ふ力をもつものかを吟味する。

○我等異教徒は、少くも耶蘇教徒でなく、佛教や儒教によつて敎へられてゐる我々は、トルストイとはまるでちがう考へ方に馴れてゐる。彼は信仰を非理性的なものと思つてゐる。そして信仰によつてのみ生きる意義を見出し得ると思つてゐる。それはトルストイの場合事實である。しかし西洋人程所謂理性的でないためか、或はより理性的であるためか、我々は不滅のものにたいする感じ、不死なものにたいする感じを信仰と云ふ言葉であらはすよりは、眞理と云ふ言葉であらはす方がはつ切りする。眞理に生る、仁に生る、なぞと云ふ言葉は我等には非理性的には思へない。そしてそれは理窟以上の事實として映づる。我等は非理性的な神を信じる前に、もつと理性的な生命の意志を感ずる。それはゲーテや、ホイットマンも感じてゐたものである。たから一概に東洋的とは云へないが、トルストイの場合と少しちがう。しかし自分はトルストイの考へ方に反對するのではない。トルストイはトルストイらしい考へ方で、事實を見たのである。

其處でトルストイは信仰についてから云つてゐる。

「どんな信仰でも、信仰の答へは有限の存在に無限の意義を與へる

のと一致するだけでもなく、——信仰は人生の意義を認識するこ
あり、それによつて自己を否定せず、反つて生ることである。信仰は人生の力である。

そして彼は信仰なしには人は生きられないと云つてゐる。

我々は實に多くの人が信仰なしに、如何に生くべきかを知らずに生きてゐるのを見る。その内には死ぬのがこわいだけで生てゐる人もあらう。だが多くは知らずに人生の力に支配されて生てゐるのであらう。しかし自覺なきそれ等の人はたゞまぐれあたりに生てゐるにすぎない。いつ人生からはみ出ないと限らない。否多くははみ出てゐて氣がつかない。たまに氣がついても更にごまかすにすぎない。

しかしそのごまかしの内にも生命の力は何かの形で働いてゐる。しかしそれは實にあぶない生活である。トルストイはそれ等の人を本當の意味で生きてゐるとは思ふまい。

トルストイはこの信仰を感じてから、自分の過去の内面生活を顧みて身ぶるいしたと云つてゐる。そして彼は云つた。

「今や私には明らかになつた。それで人は生きてゐられる爲には無限

[illegible]
におどういた。[illegible]心の[illegible]を[illegible]して[illegible]時、[illegible]
するのは當然のことである。トルストイはそれに氣がついた。そして
「私は何か、無限の一部分である。この二個の內に不[illegible]は[illegible]はつて
ゐる」
とトルストイは云つてゐる。

そして彼はこの問題から人間はどう生くべきかを理性的に考へなほしてゆく。

その根氣のよさには感心すると同時に、東洋流の直觀から見るとあまりに又まわり道をすぎてゐるやうに見える。しかし內心の要求の强い、精神力の强い、ものをごまかすことの出來ないトルストイは一歩一歩と目的に近づいて、途中でへたばらない。問題をすこしもごまかしもしない。それは死ぬか生きるかの問題だから當然でもあるが、その力の强さには感心しないわけにはゆかない。

「無限なる神、心靈の神性、人事と神の結合、心靈の統一と本質、人間の道德的善惡の觀念、」

之等の觀念なしには人生はあり得ないことにトルストイは氣がつくが、しかし彼はそれを何處までも自己が腑におちるやうに自己流に考へないではやまなかつた

○

自分はかう云ふ調子でかいてゆくと遂に「我が懺悔」の梗概をかく

[illegible]
[illegible]は、[illegible]
我等は人生について[illegible]に考へて見ることはわるいことではない
から。そして多くの人は人生の[illegible]を見[illegible]

自分達はトルストイによつて普通の我々の生き方では、人生はついに不可であることを示されて來た。

之からが大事な時である。だが自分は之からトルストイとはなれる。なぜかと云へば、之からトルストイはロシヤの宗教生活に入るので、我々の生活とは少し趣のちがふ生活に入るから。

しかし全部をぬくのも氣になるから、簡單にかくと、

彼はそれからロシヤの宗教生活に注意し始める。そして先づ自己の周圍の人々の信仰から吟味してゆく。そしてにせものはすべてトルストイによつて見やぶられる。

「即ち私と同階級の信者等の迷信は、彼等に必要のない迷信であつて、一種の快樂主義者の氣散じとして役立つより外には、何等彼等の生活を感化しないものであるが、信仰ある勞働階級の迷信は、それなくしては彼等を考へることが出來ないほどに、彼等の生活の中に織り込まれてゐるのであつた」。（細田源吉譯）

そして彼は勢ひ、民衆の內に眞の信仰があることを知り、彼は民衆にますます心をひかれることになる。

「私は更に注意深かく更に廣く自分の周圍を眺め、過去及び現在の人類全體の生活を研究した。そして私は、人生の意義を理解して生き且つ死ぬる事の出來たものは、二人や、三人や、十人や、百人でなく、數千數百萬の人々であることを見た。凡てこれ等の人々は、その生活法や、思考力や、教育や、地位やの點でさまぐ\に分れてはゐるが、凡て一樣に私の生死の意義について無智であるとは正反對にそれを知つてゐる。そして靜かに日常の仕事をし、そして缺乏と苦痛に耐へ、生き、且つ死んで、そして其處に虚無を見ず、善きものを見てゐる。

「私はそれ等の人々が好きになつた。彼等の生活に深かく入れば入るほど、それ等生きてゐる人、死んだ人のことをよんだり聞いたりすればする程、彼等が好きになり、益々生きるのが樂になつて來た。私はかうして二年間を過ごした。」

そしてその間にトルストイは自分が段々變化してきたことに氣がついて來た。そして今迄の生活がいやになつた。そして

「勞働階級の生活や、人生を創造する全き人類が彼の眞の意義で私の前に姿をあらはした。それが人生そのものであることを知り、この人生に與へられた意義こそ眞理である。私は又人生をさう受けいれた」

其處で今度は新しい生活が始まる。

○

「我等文士の生活は本當の生活からはなれやすく、やゝもすると疊の水練、實にかいた料理を食ふやうな眞似におち入りやすい。空想の生活、實質なき生活、眞の人生にとつくまない生活になりやすい。

それでは人生の眞の姿を味はふことは出來ない。先づ本當に生ることが必要である。

人生は机の上で理解すべきものでも、つくり出すべきものでもなく、生くべきものである。トルストイは頭で考へる内に氣が滅入つて來、人生が虚無に見えた。今や、民衆の内の本當に生きた人々にふれた。そして生命にぢかにふれた。人間は進歩するものと云ふ概念は彼を救ふにたりない。しかし人生を創造する人々の生命にぢかにふれる時、彼の生命は勇氣づけられてくる。

あぶくを食つても餓ゑたものは生々出來ない。しかし眞に飯を食ふ時、人は腹がはり生々してくる。精神的要求もさうだ。トルストイは今や本當の食物にありつけたのだ。餓ゑがひどかつただけ、彼は正身のあるものを本當に求めてゐた。そして彼はそれを本當に生きないわけにゆかない人々によつてあたへられた。しかし人々から與へられただけではだめである。自分で生きなければ。

彼は自分の生活がまちがつてゐたことに氣がつく、又それによつて我等に反省を強いる。

「私の生活はどうだつた」

「惡だ」その答へは完全に正しい。たゞその答へを自分許りにかぎらないで、一般にあてはめたのがわるかつた。」

其處で彼は徹底したトルストイアンに自分を築き上げやうとするよ

『[illegible]
[illegible]
めねばならなかつたのである』

そして彼はついに「自分自身の爲でなく、凡ての人のために働かねばならない」ことに氣がつく。それが彼には鳥が飛んだり子を育つたりすることが美しいやうに美しく自然であるやうに思へて來た。

『私は寄生虫として生きて來た。そして私が何のために生きてゐると私にきいたら、私は無目的と云ふ答へを得る。人生の意義はそれを獲得することにある。それなのに私は三十年間、人生を獲得せず、自己と他人の内の人生を亡ぼしてゐた。その結果、私の一生が無意義で惡であると云ふこと』當然のことである。

しかしこのことに氣がつけば、すぐ救はれるとはゆかない。それには生活をなほすことが必要である。そして如何に生くべきかゞ必要になる。

そして彼は寄生虫の生活ではない眞の生活を求めた。そして彼はそれを勞働階級の單純生活に眞の生活を見、又神を求めた。

「吾々人間は、凡て神の意志によつて地上に來た。神は人間が各自自分の聖靈を破滅さすことも救ふことも出來るやうに人間をつくつた。人生に於ての人間の務は彼等の聖靈を救ふことにある。彼の聖靈を救ふためには神の如く生きなければならない。神のやうに生るには人生

[illegible]
[illegible]ろ―

是はトルストイによくわかる話であつた。しかし彼はその教へを受けるために教會へ入るといろいろ彼には腑におちない我慢の出來にくいものに出つくわした。

しかしそれ等こそ僕達にはあまり興味のないことである。

しかし當時のロシヤ人のトルストイにとつてはそれは中々重大事件であつた。そして彼はついに教會の教への内に何が信ずべきものであり、何が信ずべからざるものか、はつ切りするやうになつて、トルストイの正體はますますはつ切りするのだが、「我が懺悔」には其處まではかいてゐない。

彼は一八七九年彼が五十一才の時「我が懺悔」の第一部をかき上げた。そして第二部に「私が、發見した誤謬と眞實とは何か、そして私の到達した結果は何か」をかかうとした。

しかし、それは他の本になつたが、懺悔は三年後に、見た、一つの夢がかき加へられて公けにされることになつた。

○

人には少し長がすぎるかと思ふ程、我が懺悔のことをかいて來た。

[illegible]

假面劇之をよみなほ[illegible]

ゐることではあつたが、しか[illegible]
て時々空虚になりかける氣持を[illegible]
きしめ、本氣になつて仕事をしたいと云ふ氣持にな[illegible]
が懺悔」をよみなほしたことはいゝことであつた。

から云ふ本こそかくに價ひする本だと思つた。それは人々に眞に生きる道を示す本だからである。そして自己と同じ悩みをもつものには生命の書になり得る本だからである。

かゝないではゐられない、又かいて人に示さないではゐられない本と云ふのはかう云ふ本だと思ふ程、こゝには眞劍な人生上の悩みと、それに打ちかつた道が示されてゐる。

「人は己れの生命のために働けば亡びる」それを實にはつ切り示してゐる。同時に亡びたくない人は「神の意志」のまゝに生きなければならないことをはつ切りさせてゐる。

自分は之をよみなほし、又トルストイの「人生觀」をひろいよみして、自分の人生觀は實に多くトルストイから得てゐることを知つた。自分は忘れてゐたが、實に自分の云ひたいこと、よく云ふことがトルストイによつて實にひつゝこく云はれてゐるのに今更に感心もしおど

[illegible]生活、眞の人生にとつくまない生活になりやすい。[illegible]はふことは出來ない。先づ本當に生

[illegible]

た。それはいゝが、[illegible]
ある。

トルストイは眞の幸福は求めた。しか[illegible]絶した。病的な快樂を拒絶するのは元より當[illegible]絶することを天國へ入る第一要件としすぎ[illegible]に恐れすぎた。

から云ふと簡單すぎ、トルストイがその[illegible]をくわしくのべないと誤解されやすいが、今その時間[illegible]に云ふが、肉や、快樂は永生には有害無益になりやすい[illegible]ゐるのは事實である。人間は其處にまだ[illegible]うつてゐ[illegible]證明される。人は肉體や、快樂を主にす[illegible]やす[illegible]

出現にスト[illegible]
につくられ、一つの生命を托されたのは、先づ自分の生命を生かすことを命じられてゐるやうなもので、自己の生命をある所まで生かすためにはエゴイストも時に必要である。健全なエゴイストは、女々しい愛他的行為よりは美しい。しかしエゴイストは大木になり切るまで、又自己が無意味にいぢけないために與へられてゐるもので、それ以上の價値はない。だから大木になり切つたトルストイにとつてエゴイストは無意味なものに見へるのは當然すぎることである。

しかし若い時、トルストイが人並はづれてエゴイストであつたとした所が、それはトルストイの一生を大きくすることに役立つたので、あまりに早く克服されては反つてよくなかつたとも思へる。

又よき子孫をこの世にのこしたがる。又やゝもすると怠けたがる人人を奮起させるために、天與の獎勵が與へられてゐることも一概にわるいとは云へない。それ等をよろこんで受け入れて、そして更に人類的に生きられる道がある。トルストイは「苦惱によつてのみ、人は目ざまされ、本當の生活に入らなければやまないやうにつくられてゐる」と云つてゐる。それは本當である。しかし人生は苦惱だけで發達されて眞の幸福に入ると許りはきまらないのである。眞のよき親は親のよろこびに導かれて子を育てることも出來る。喜びと苦しみと兩方に我等は導かれる。

よき子を得るためによき戀愛がめぐまれ、よき仕事のためによき友・[illegible]

聖フランシスは[illegible]感じる。

たしかに人生には多くある。だが[illegible]得る。トルストイもそれを知らなくはない[illegible]がそれを恐れすぎてゐる所がある[illegible]マンや、ゲーテをトルストイと同[illegible]

しかし大事なことは人類の意志[illegible]ことである。それが可能の時トルス[illegible]る。その點トルストイはたしかに「な[illegible]づよく敎へてくれた稀有な人である。

僕は自分の人生觀の根本がトルストイと全[illegible]じる。たゞ僕は日本人であり、そして赤子の心を[illegible]トルストイ親爺から時々小言を云はれるのは大事な[illegible]る。

終りに自分は「我が懺悔」以外の方から當時のトルストイを[illegible]い。その種本は原久一郎譯ビリユーコフ著大トルストイ傳だと云ふことを告白して、原君に感謝しておく。

『レフ・トルストーイが、オプチナの修道院に逗留してゐた當時の有樣を敍した文章を、私はセルゲーイ・ペトウローヰッチ・アルブーゾの述べたものから引用しやう。……

それはこの頃トルストイのものをよまない人が多くはないかと思つたのと、一度よんだ人ももう一度思ひかへして見るのもいゝと思つたからだ。

僕自身之をよみなほして、今更に感動した。昔、よくよんで知つてゐることではあつたが、しかし自分の生活を顧み、人生を思ひ、そして時々空虚になりかける氣持を味はふことで、決心を新にし、生活をひきしめ、本氣になつて仕事をしたいと云ふ氣持になつてゐる時に「我が懺悔」をよみなほしたことはいゝことであつた。

かう云ふ本こそかくに價ひする本だと思つた。それは人々に眞に生きる道を示す本だからである。そして自己と同じ悩みをもつものには生命の路になり得る本だからである。

かゝないではゐられない、又かいて人に示さないではゐられない本と云ふのはかう云ふ本だと思ふ、こゝには眞劍な人生上の悩みと、それに打ちかつた道が示されてゐる。

「人は己れの生命のために働けば亡びる」それを實にはつきり示してゐる。同時に亡びたくない人は「神の意志」のまゝに生きなければならない、

ろこびもした。

そしてトルストイが人生の虚無と眞正面に取組んで少しもごまかさず、何年も何年も苦しみぬいて、そして遂に人生の意義、人間は如何に生きればいゝか、人生が無意味に見へるのは生き方のあやまりからくるもので、人生そのものからくるものでないことを知るまで、また知つてそれを行はふとしたその根氣よさ、苦闘に驚嘆する。あさり人種の日本人から見るとそれはおどろくべきである。

しかしそれならトルストイの考が完全かと云ふに僕にはさうは思はれない。

トルストイはあまりに「なくて叶はぬ一つのものを」たよりすぎた。それはいゝが、他のものを排斥しすぎたやうに僕には思へるのである。

トルストイは眞の幸福は求めた。しかしそのために快樂をすべて拒絶した。病的な快樂を拒絶するのは元より當然だが、天與の快樂も拒絶することを天國へ入る第一要件としすぎた。肉につくものをあまりに恐れすぎた。

に[illegible]られ、一つの生命を失つてただちに、新しい自分の生命を生みだすことを命じられてゐるやうなもので、自己の生命をある所まで生かすためにはエゴイストも時に必要である。健全なエゴイストは、女々しい愛他的行爲よりは美しい。しかしエゴイストは大木になり切るまで、又自己が無意味にいぢけないために與へられてゐるもので、それ以上の價値はない。だから大木になり切つたトルストイにとつてエゴイストは無意味なものに見へるのは當然すぎることである。

しかし若い時、トルストイが人並はづれてエゴイストであつたとした所が、それはトルストイの一生を大きくすることに役立つたので、あまりに早く克服されては反つてよくなかつたとも思へる。

又よき子孫をこの世にのこしたがる。又やゝもすると怠けたがる人人を奮起させるために、天與の獎勵が與へられてゐることも一概にわるいとは云へない。それ等をよろこんで受け入れて、そして更に人類的に生きられる道がある。トルストイは「苦惱によつてのみ、人は目ざまされ、本當の生活に入らなければやまないやうにつくられてゐる」と云つてゐる。それは本當である。しかし人生は苦惱だけで轉達されて眞の幸福に入ると許りはきまらないのである。眞のよき母は親のよろこびに導かれて子を育てることも出來る。喜びと苦しみと兩方に我等は導かれる。

よき子を得るためによき戀愛がめぐまれ、よき仕事のためによき友[illegible]起こる。

たしかに人生には[illegible]もある。だが[illegible]もあり得る。[illegible]得る。トルストイもそれを知らなくはない。或は知りすぎてゐる。だがそれを恐れすぎてゐる所があるやうに思ふ。その點、僕はホイットマンや、ゲーテをトルストイと同時に愛する。

しかし大事なことは人類の意志を調和して生きることであり、又死ぬことである。それが可能の時トルストイの求めてゐたものは與へられる。その點トルストイはたしかに「なくてはならないもの」を我等に力づよく教へてくれた稀有な人である。

僕は自分の人生觀の根本がトルストイと全く一致してゐることを感じる。たゞ僕は日本人であり、そして赤子の心をもつ呑氣人である。トルストイ親爺から時々小言を云はれるのは大事なことと思つてゐる。

終りに自分は「我が懺悔」以外の方から當時のトルストイを見たい。その種本は原久一郎譯ビリユーコフ著大トルストイ傳だと云ふことを告白して、原君に感謝しておく。

『レフ・トルストーイが、オプチナの修道院に逗留してゐた當時の有樣を叙した文章を、私はセルゲーイ・ペトウローキツチ・アルブーゾの述べたものから引用しやう。……

『午後の六時にオプチナの修道院へ到着した。晩餐の用意を知らする鈴が鳴つた。吾々は信者姿な纏いたまゝで食堂へ入つた。吾々は普通の食卓に迎へられず、乞食と一緒に食事を摂らせられた。私は僧侶を顧みた。が、彼は此の隣席の人達を少しも輕蔑するやうなところなく、さも滿足さうにクワス酒を飲み、そして食つた。クワス酒はひどく彼の氣に入つた。

『晩餐のすんだ後で、吾々は三等の旅人宿へ泊りに行つた。』

（うつすと長くなるからあと梗概にする）

僧侶はトルストイ等が貴族なので、普通の室に通さずに、ゴミ部屋へ通され、汚物と蟲けらにへこたれて、アルブゾフが一ルーブル出して別室に入れてもらう。處が其處には靴屋が一緒にゐて、雷のやうないびきをかくのでトルストイはおどろいて、

「セルゲーイ、此の男を起して鼾をかゝないやうに云つてくれ」と云ふ。

さすがに貴族の癖はぬけ切らない。

處が靴屋は

「[illegible]

ゆく。……

こゝで彼はあまり滿足されず、教會にたいする彼の否定的な考へを強くする。

トルストイの面影が目に浮んでくる。

次ぎにその時分、ツルゲネーフと再會する時のことを一寸かかう。

ツルゲネーフが始め手紙をよこし、それからトルストイが訪問することになる。もうトルストイも若くはない。

トルストイがツルゲネーフに電報をまちがつて打つたので、ツルゲネーフは明日トルストイがくると感動してまつてゐた日の夜おそく犬が吹へるのと、口笛の音を、ヤー・ボローンスキーと云ふ詩人がツルゲーネフの家にゐて起きてゐたので氣がつき、窓から顔を出すと、ブルーザ（粗末な外套）を着た、[illegible]のバンドをした半白の、淺黒い何處かの百姓が、一人の百姓に金をはらつてゐた。その金をはらつた百姓がボローンスキーに「あなたはボローンスキさんですね」と云ふ。

それがトルストイだつた。

ツルゲーネフも起きてゐることが彼の[illegible]

[illegible]のであつた。

「レフ・トルストイは自分の思想を押し付けず、靜かにイワーン・トゥルゲーニエフの抗議に耳を傾けてゐるのであつた。要するに彼はもう私が若い時に知つてゐたあの伯爵ではなかつた」

トルストイは日記にかうかいてゐる。

「七月九日、十日、トウルゲーニエフの許にて。懐しいボロンスキーは、靜かに繪と著作とに耽つてゐる。人を非難する事のない、蒼白い、靜かな人だ。トウルゲーニエフは神の名を恐れてゐる。が矢張りその存在を認めてゐる。然し、矢張りナイーブな穏かな男だ。贅澤と放逸三昧の生活振り」

ツルゲーネフのことよりボローンスキイの名をさきに上げてゐる所にもトルストイらしさが出てゐるやうだ。ツルゲーネフの方は文學一點ばりで、トルストイをなつかしがり、讃美してゐる。

トルストイが歸つたのちも、トルストイの「戰爭と平和」の散兵第六聯隊の二個大隊が佛軍と戰ふためにバグラチオンのあたりを過ぎる處をよんで、

「現代文學の如何なる作品の中にも、私は之れ以上の描寫を一つも見ません。實にすばらしい描寫だ。正に描寫は此の[illegible]でなければならない……」と夢中で歡喜に堪へないやうにほめてゐた。

二人の有樣が目に見える。

[illegible]

[illegible]ストイ夫人の手記を抜きがきして[illegible]

社會に生きた人間に[illegible]を見るのは[illegible]しいことだ[illegible]

「ニコラーイ・フョードロヰッチは聖人だ。小さな[illegible]にすぶつてゐる。職務の執行ですつて？ そんなことは自から分ります」といふ。給料をのぞまない、シャツもなければ、靴下もないのだ』

『ニコラーイ・フョードロヰッチ・フョードロフです。これはルミヤンフスカヤ圖書館の司書係りをやつてゐる人です。私が貴方に屢々お話した事は憶へておいでゝせう。彼等は凡ての人々の肉身の儘の復活を目的とする。全人類共通の仕事の計畫を立てたのです。……斯うした信仰のお蔭で、彼はその實生活に於て最も純眞な基督教信者なのです。……』

以下は夫人の手紙である。

「千八百八十一年十月十四日

モスクワにて

「……私共がこちらに參りましてから、昨日で滿一月になります。しかも私は誰にも一節も聞きませんでした。最初の二週間は絶間なく泣いてばかりゐました。レーヲチカ（トルストイのこと）が更に沈んだばかりでなく、捨鉢な、ひどい冷淡さを見せるやうになりましたので。レーヲチカは眠りもせず、物も食べず、時々「文字通り」自分でも泣い

てましたの。ですから私、自分が狂ひになるに違ひないと思ひましたの。その當時どんなに私が面變りして痩せてゐたかを見たら、あなたはきつと吃驚したに違ひないと思ひます。軈てレーヴチカはトウウエールスカヤ縣へ旅行に出て、彼地の有知の方々パクーニン一家の人々にあひ、それから彼地の田舍のある異端的な非宗教信者を訪問して、そして家へ戻つて來た時には、あの人の憂鬱は薄らいでゐました。今ではあの人も、僕屋に月六ループルでちんまりとした靜かな部屋を二つ借りて、其處で執筆することに慣れて來ました。執筆の合間には「乙女が原」に行つて河を渡つて、雀ケ丘へ登り、百姓達と一緒に薪を挽いたり、割つたりしてゐます。あの人にはそれが愉快で面白いのです。」

自分はトルストイ夫人がトルストイを理解することが少ないのを非難しやうとは思はない。反つてこの理解なき手紙こそ、他の文けんよりより以上、はつ切りトルストイの當時の有樣を知らせてくれる。

○

自分はトルストイの一面に切りふれなかつたかと思ふ。だが人生そのものについて教へて

トルストイは我等が如何に生活してはいけないかを實によく示してくれて居る。いかに今の日本で我等は生くべきかを實際的に知り又行ふのは我等の務ではないか。

新刊紹介

◆戀愛占易 (支那珍籍全集・一冊弐圓・東京市赤坂區青山南町六丁目・支那文獻刊行會)

◆支那漫談 (村松梢風著・定價壹圓二拾錢・東京市神田區材木町二 騒人社書局)

◆山登り (松永安左衛門・定價壹圓五拾錢・東京市日本橋區通四丁目七・巧藝社)

◆愛欲變相圖 (近藤經一著・定價弐圓・東京市牛込區矢來町・新潮社)

◆農民闘爭の戰術とその躍進 (大西俊夫著・定價七拾

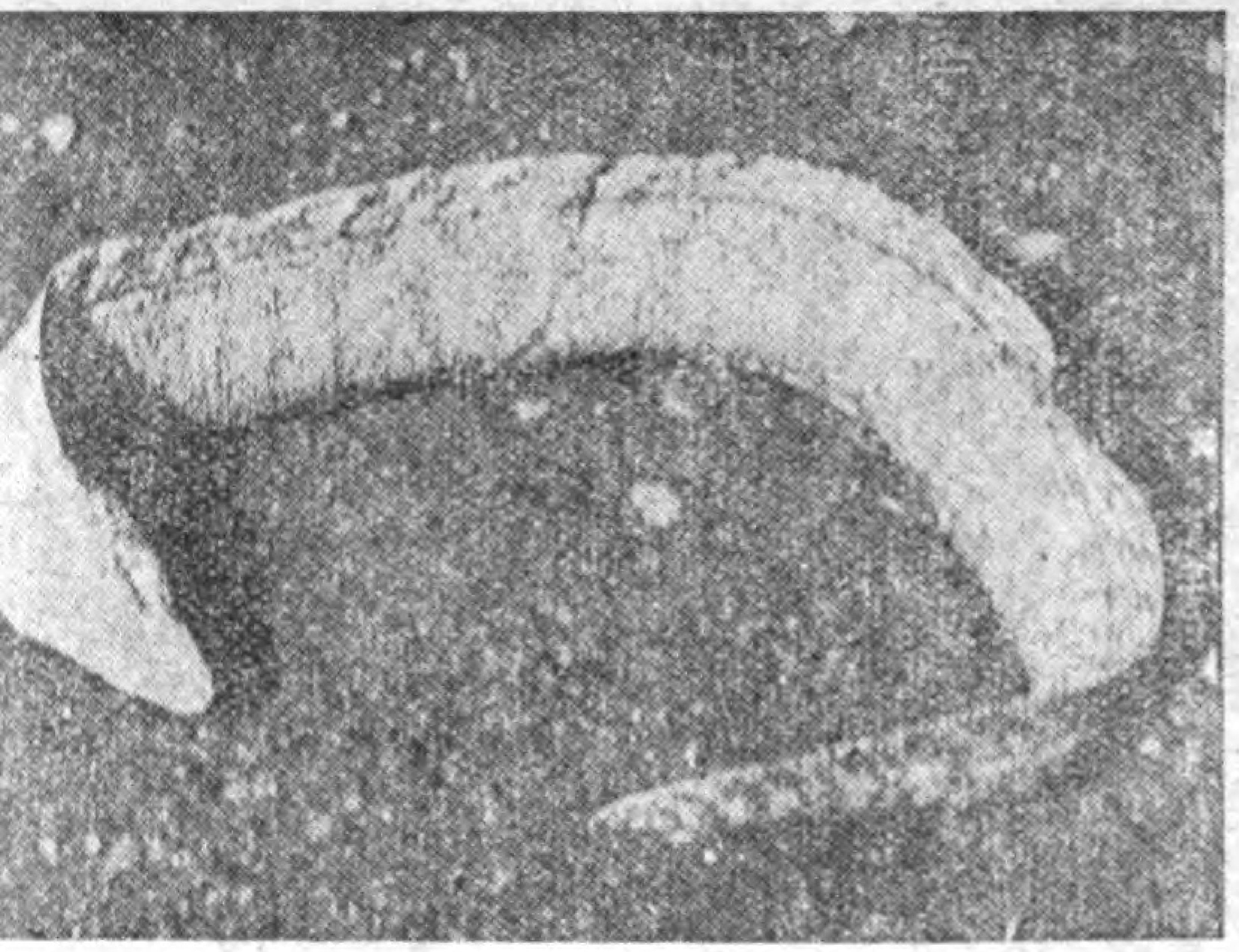
海底の闘爭

三浦定之助

弱肉強食は生物界の常である。陸上に於ては獅子の棲む深山と、兎や雉子の居る近郊と、鼠や猫の棲む人家附近とは自ら隔てがあつて相犯すべからざる區域がある。然し海中に於ては、幕末の識者がロンドンの水は東京灣に通ずると云つた如く、沖合に游泳する大鯨が鰯魚を追うて時々其巨姿を港灣内に現はす様に、強者の弱者に對する攻撃は甚だ自由である。而していわしの大鯨に對する如く弱者は常に弱者で衆寡敵せずと云ふ様な事は適用出來ない場合が多いが、然し岩礁の間に於ては其力量相似て互ひに相爭ふ場合、何れを勝ちと定め難い好取組も少なくないのである。茲には狡智に長けたこと猛惡うつぼの格闘の有様を述べやう。

うつぼ　なまだ　じやうなぎ

うつぼは一見するからに身の毛も立つ様な魚である。其日常の習性を知れば尚ほぞつとする様な魚であらう。海底の石の下、岩の割れ目、又は海藻の濃密なる間に隠れてゐる。半身を出して好餌の來るを待つか、又石の下とか穴の奥から其前を通る何者をも逃すまいと鋭い眼光を投げつゝある。春秋の大潮時には干上る様な淺い海岸に迄も來る。外房州の沿岸、暖かき春の日に遙る〳〵潮干狩に行つた女生徒の一團が、珍らしい貝、美しい小魚、名も知らぬ海藻などを漁る喜びの餘り、水際に至つて岩の下なる愛らしい小貝を採らうとすると、突然孔から飛び出して其指に喰ひついたものがある。驚いて手を引くと岡にある様な恐しい形相をした蛇の様なものが其半身を現はした。きやつと一聲氣絶して倒れ、僚友に助けられて歸宅後も數十日床にツイタと云ふ様な例がある。荒海の男子も恐れる様な岩窟の海底に素裸で飛込んで、さゞえやうになどを採る本職の海女でさへ、うつぼに指を喰ひつかれて一ヶ月も二ヶ月も仕事を休むことを餘儀なくせられて、一家糊口に窮する様な事も珍らしくないのである。よくあわびやさゞえ、うになどの產する外洋に居るので、東京灣の様な所には居ない。主として太平洋岸の外洋方面に居て、なまだ、じやうなぎ、などの別名もあり、九州方面ではきだこなどと云はれて居る。



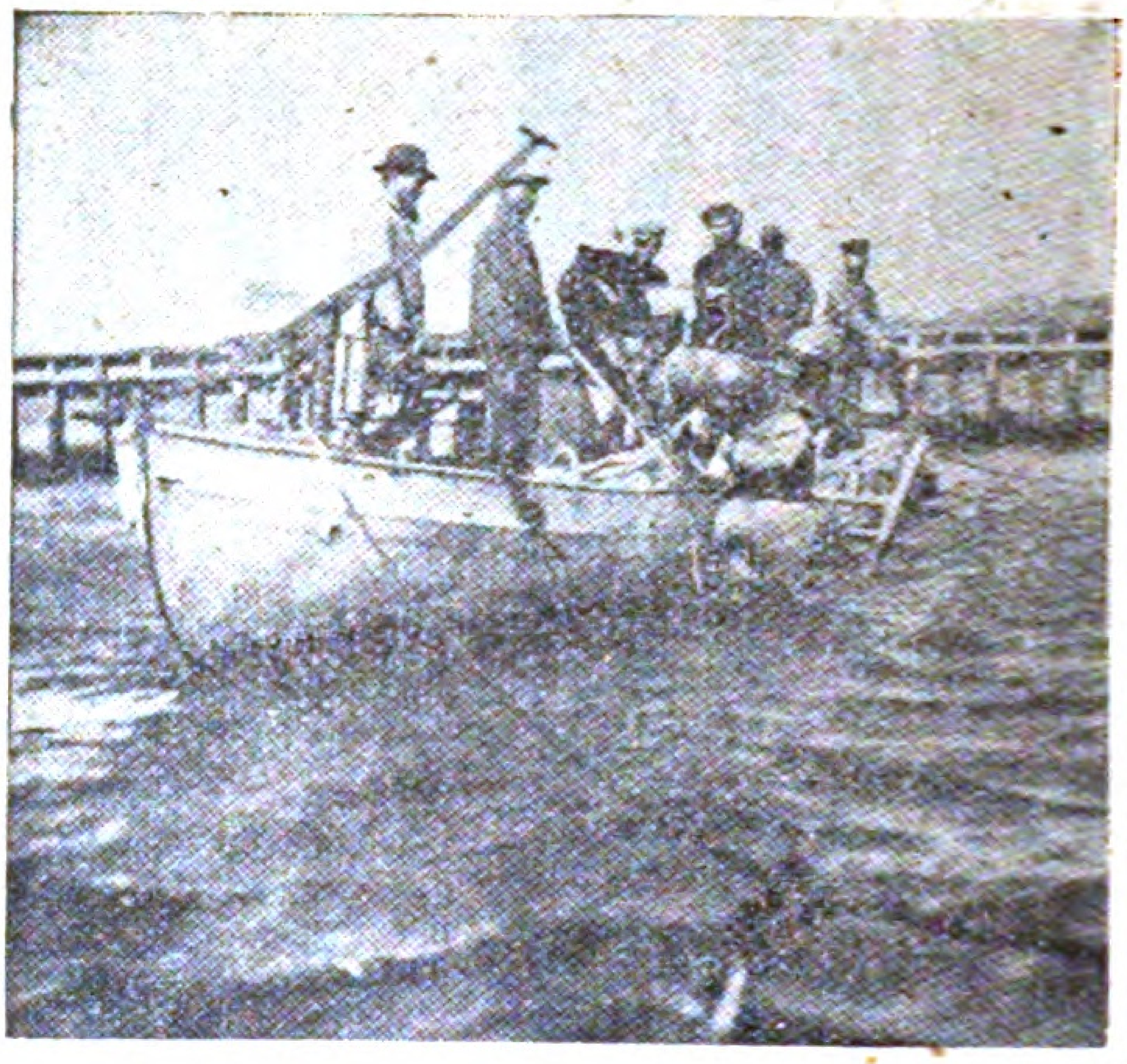
うつぼ

潜水夫とうつぼ

重もい潜水裝具をつけては居るが、潜水服内の空氣の浮力で潜水夫には感じない様になつて居る。即ち潜水夫は體重量がない様なものだから、海底の波や潮流又は岩底の凹凸などにつまづいてよろけてうつぼの孔の附近に手をついて、彼れから噛み付かれた例も稀れでない。又あ

もうつぼの居る様た割れ目では、あわびを起しても直ぐ拾けないで、其の孔の中を一應鉏で何回となく盲目突きに突いてうつぼを追ひ拂つて後でなければ、之れを拾はないと云ふ様に用心されて居る。斯かる盲目突き鉏の一擊を喰つて、附近の他の出口から絶大の長いうつぼが飛び出して逃げて行く様な時は、豪膽の潜水夫も冷汗三斗震へ上らざるを得ないのである。潜水夫は長い空氣管と麻綱の二本の尾を引いてゐる。白い空氣泡は銀子の如き光を放つて吐き出される。手には鋭い鉏を持つて、怪物の様な姿が近づいて行く。うつぼは岩孔から半身を出して四方を見て居るが、潜水夫が近くなつても決して逃げる様な事をしない。否、彼は生れて逃げると云ふ事を知らないのだ。愈々近づいて其頭上に鉏先を擬すると、體を斜めにして口を開いて飛びかゝらん計りの姿勢で見詰めて居る。大きいのになると四貫匁もあり、體巾が五寸もある。而し彼とても氣味が悪いのだらう。決して孔から出て飛び懸つては來ない。潜水夫が彼れを突く時は頭から頸の所を突く。然る時は如何に大きいうつぼでも全身を鉏の柄に堅く巻きつけて少し

れを曳きながら飛んで行く冠氣者である。船の上に揚げられてからも這ひ廻はつて手當り次第に嚙み付いて歩るく。漁夫は船上では素足で居るから、他の仕事で夢中になつて居る時にうつぼが這ひ出して、其足指を嚙まされた例など又珍らしくない。若し海底でうつぼが孔から半身出して指を嚙まれたら、其手を動かさずに痛さを忍んでじつとして居るがよい。然る中にうつぼは其食物にあらざる事を知るや、之れを放して孔の奧深く去るのである。之れを無理に手を引くと彼れうつぼの尻尾の力は絶大である、孔底の一部に支へて全身の力で曳くから指の皮は剝がれ、肉は切れて、慘たる光景を來たすのである。幸ひにしてうつぼには毒を含まないから生命に關はる事がない。あかえいとか又は他の魚の如く猛毒を含むものならば之程恐るべき魚はないだらう。上圖は潜水夫がうつぼを突いて來る圖である。

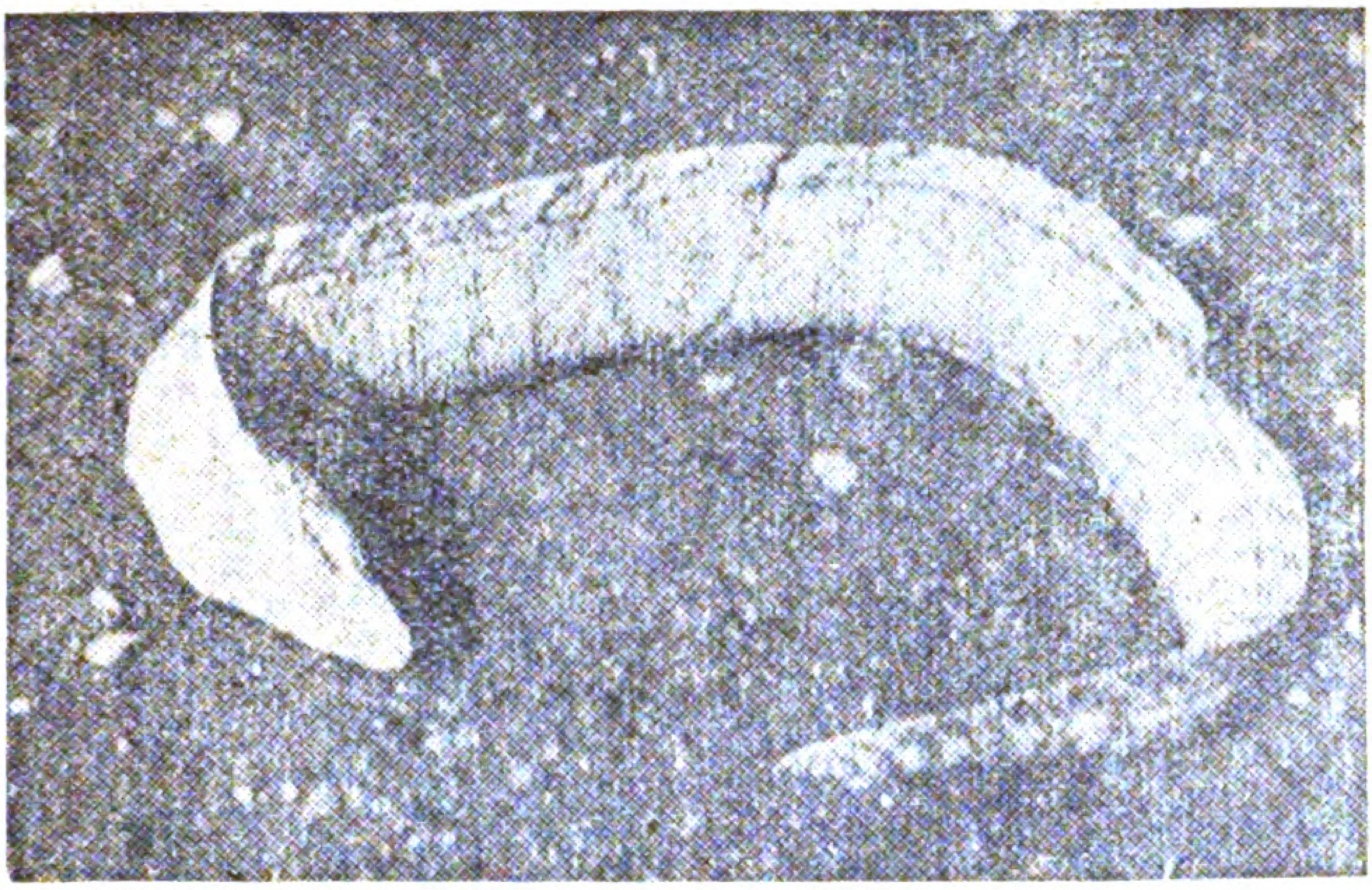


うつぼは潜水夫に襲ひかゝる事もある。即ち海底で潜水夫が小魚を突いて其口に紐を通してぶら下げて[illegible]ら之れを見たうつぼが突然飛び出して來て小魚を[illegible]樣な辻泥棒を働く事もある。

うつぼの日常

うつぼは房州邊ではなまだ又神奈川邊では蛇鰻と云ふて居るが[illegible]のは胸鰭がない。體が楕圓だが尻尾は扁平な櫓の樣である。故にな[illegible]だが泳ぐ時は鰻の樣に腹這ひになつて泳がないで體を直横にして[illegible]を下に、又他の半面を上にして體を波形に運動させて中々速かに進行する。勿論海藻の間を獲物を探がしながら除々に泳ぐ時は腹這になつても泳ぐ。斯くしてうつぼは海底岩礁の長い割れ目に沿うて二寸か三寸の狹まい岩の間を自由に迅速に泳ぐもので、又割れ目と云ふ處は凡ての魚類の棲家であつて、うつぼは之等豐富なる餌の間に生活して居るので、普通海底を泳いではうつぼは速さが他の魚に比し甚だ鈍いが、斯樣な狹まい割れ目を泳いでは恐らくうつぼ程速い魚はないのである。斯樣な割れ目は普通魚ダナと云はれて居る。うつぼは甚だ嗅覺の強い魚で潜水夫が鰮を網の袋の中に入れて海底に投げて置いて見て居ると、遙か潮流の下手の方からうつぼが岩石の緣を辿り又は海藻の葉の見匿れに横倒しになつて泳いで來る。止まつては泳ぎ又泳いでは止まり其方向を感知するものゝ如く、而して鰮の餌につくや否や考ふる間もなく直ちに飛びつく。而して網の袋中にあるいわしに喰ひつい

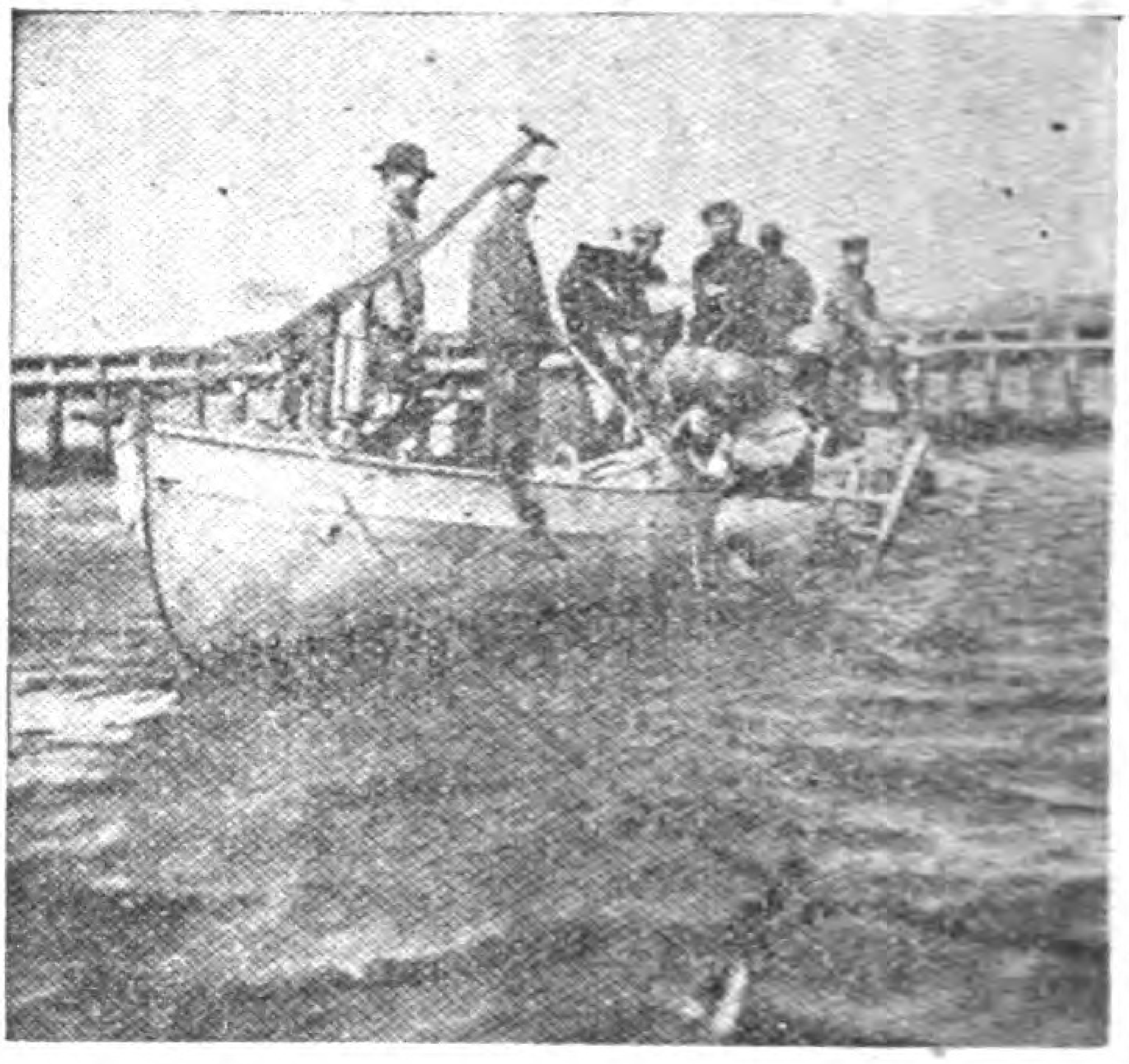
潜水夫とうつぼ



うつぼ

重もい潜水裝具をつけては居るが、潜水服内の空氣の浮力で潜水夫には感じない様になつて居る。即ち潜水夫は體重量がない様なものだから、海底の波や潮流又は岩底の凹凸などにつまづいてよろけてうつぼの孔の附近に手をついて、彼れから噛み付かれた例も稀れでない。又あわび捕りの潜水夫が岩の割れ目にあるあわびなどを、岩を起して之れを拾はうとして其手に噛みつかれる故に、潜水夫は海底ではよろけても手はつかないで、銛柄を杖の代りにつく。又あわび採りなどもうつぼの居る様な割れ目では、あわびを起しても直ぐ拾はないで、其の孔の中を一應銛で何回となく盲目突きに突いてうつぼを追ひ拂つて後でなければ、之れを拾はないと云ふ様に用心されて居る。斯かる盲目突き、銛の一撃を喰つて、附近の他の出口から絶大の長いうつぼが飛び出して逃げて行く様な時は、豪膽の潜水夫も冷汗三斗震へ上らざるを得ないのである。潜水夫は長い空氣管と麻綱の二本の尾を引いてゐる。白い空氣泡は銀子の如き光を放つて吐き出される。手には鋭い銛を持つて、怪物の様な姿が近づいて行く。うつぼは岩孔から半身を出して四方を見て居るが、潜水夫が近くなつても決して逃げる様な事をしない。否、彼は生れて逃げると云ふ事を知らないのだ。愈々近づいて其頭上に銛先を擬すると、體を斜めにして口を開いて飛びかゝらん計りの姿勢で見詰めて居る。大きいのになると四貫匁もあり、體巾が五寸もある。而し彼とても氣味が悪いのだらう。決して孔から出て飛び懸つては來ない。潜水夫が彼れを突く時は頭から頸の所を突く。然る時は如何に大きいうつぼでも全身を銛の柄に堅く巻きつけて少しも動かない。尚ほ他の一個所は彼れの肛門に當る所を突く事で、然る時はうつぼはだらりと長くなつて殆んど動かない。若し其他の所を突く、例へば腹部とか尻尾の邊であると、或ひは猛烈にあばれまわり、而して其口先に當つた所は、銛の柄であらうと潜水夫の足であらうと、手であらうと、所構はず噛み付く。堅い樫で造つた銛の柄にさへ深く齒跡を殘すと云ふ有様で、若しも銛から逃がれると其場が飛び出して之れも、

れを捉きながら掴んで行くのである。[illegible]も這ひ廻はつて手當り次第に嚙み付いて步るく。漁夫は船上では素足で居るから、他の仕事で夢中になつて居る時にうつぼが這ひ出して、其足指を嚙まれた例など又珍らしくない。若し海底でうつぼが孔から半身出して指を嚙まれたら、其手を動かさずに痛さを忍んでじつとして居るがよい。然る中にうつぼは其食物にあらざる事を知るや、之れを放して孔の奥深く去るのである。之れを無理に手を引くと彼れうつぼの尻尾の力は絶大である、孔底の一部に支へて全身の力で曳くから指の皮は剝がれ、肉は切れて、慘たる光景を來たすのである。幸ひにしてうつぼには毒を含まないから生命に關はる事がない。あかえいとか又は他の魚の如く猛毒を含むものならば之程恐るべき魚はないだらう。上圖は潜水夫がうつぼを突いて來る圖である。



うつぼは潜水夫に襲ひかゝる事もある。即ち海底で潜水夫が小魚を[illegible]之れを見たうつぼは突然首を出して[illegible]を咬み切つて了ふ[illegible]事もある。

うつぼの日常

うつぼは房州邊ではなまだ又神奈川邊では蛇鰻と云ふて居るが普通のは胸鰭がない。體格は楕圓だが尻尾は扁平た櫓の様である。故になまだが泳ぐ時は鰻の様に腹這ひになつて泳がないで體を直横にして半面を下に、又他の半面を上にして體を波形に運動させて中々速かに進行する。勿論海藻の間を獲物を探がしながら除々に泳ぐ時は腹這になつても泳ぐ。斯くしてうつぼは海底岩礁の長い割れ目に沿うて二寸か三寸の狹まい岩の間を自由に迅速に泳ぐもので、又割れ目と云ふ處は凡ての魚類の棲家であつて、うつぼは之等豐富なる餌の間に生活して居るので、普通海底を泳いではうつぼは速さが他の魚に比し甚だ鈍いが、斯様な狹まい割れ目を泳いでは恐らくうつぼ程速い魚はないのである。斯様な割れ目は普通魚ダナと云はれて居る。うつぼは甚だ嗅覺の強い魚で潜水夫が鰮を網の袋の中に入れて海底に投げて置いて見て居ると、遙か潮流の下手の方からうつぼが岩石の縁を辿り又は海藻の葉の見匿れに横倒しになつて泳いで來る。止まつては泳ぎ又泳いでは止まり其方向を感知するものゝ如く、而して鰮の餌につくや否や考ふる間もなく直ちに飛びつく。而して網の袋中にあるいわしに喰ひつい

て其鋭い歯を鋼糸に引つ懸けて其體を七重八重に折り曲げ、又はぐり〳〵と廻轉する。而して其尾端が石の割れ目か海藻の根などの支ふるものがあると確かと之れで巻きつけてぐい〳〵と曳いて飽く迄も綱を破らずに置かない形相を示すので、之れを他の魚類が網の目から出て居るいわしの尾や頭を食べて一尾づゝ引き出して喰はうとするに比すると其猛烈な事は同日の論ではない。故にうつぼを釣るには丈夫な釣糸に石でも何んでも手頃なのを付けて、丈夫な釣針に魚の頭でも何でもよいつけて投げ込んで置くと、一人で釣を暇の小浴んで釣れて來くるのである。此際潮の早い波浪の高い海底岩礁の岡門の大なる荒波である事は勿論である。

なまだ（うつぼ二種）

房州方面にはなまだに二種あつて、一はほんなまだ他はあづきなまだである。一見して區別は甚だ容易で、ほんなまだは黄色の地に黒點の集まつた斑點がある。他は名の如くあづき色に黒い紋理がある。あづきなまだの方は性質強猛でなく常に半身を孔から出してるが、潜水夫が行くと頭を引つ込めて仕舞ふ。而して岩の割れ目とか斷崖の下などでなければ餘り見られない。ほんなまだになると岩礁を離れて泳ぎ廻はる。海藻の蔭とか又は海底の

地方が多い。秋季から二月頃にかけて最も美[illegible]と稱せられ、漁村では高價に賣買される。營養に富んで呼吸器病の人などに賞美されて居る。肛門より下の方は小骨が多く食はれないが胴の方は鹽燒にして殊に其皮は賞美されて居る。

うつぼの尻尾

うつぼは如斯獰猛な魚である。今竹の棒などで潜水夫が頭の先きに突き出すと大なるものは猛然として喰ひついて來る。而して何な竹の先きで一寸〳〵と頭を叩いてやると五寸か三寸頭を引つ込める丈けで其長い體は新たなる曲線を畫くに過ぎない。中々逃げないが今其曲つて海藻の葉下などに隱れて居る尻尾を少しでも竹先で離されると雲霞と逃げ去つて仕舞ふのである。而して彼自身の安全なる隱れ家の奥に潜入するのである。其所は海藻の蔭や何かでなく奥深い岩の間で手の及ばない所である。

男性的なうつぼ

普通の魚であると漁網などは非常に恐れる。いわしなどは鯨でも通

どは何んとも思つて居ない。罠に掛かつて居るのでとくうをむいて居る。其所にある罠に惚れてそこ〳〵して居る小魚を、奪ひと捕つて悠よ。彼は馬鹿なのか！而然は網目の大いさ、身體の通過する所は悠然なく出て行つて仕舞ふ。網の外から網中の魚を喰ひに反對に入つて來るものもある。又刺網などに大きい魚などが懸つて死んで居ると之れを捕らへ喰ひに來る。彼の歯は丸棒を並べた様なものだが之れの用ひ方が器用なので魚肉など中々よく切れる。彼は歯を魚肉へ深く打ち込んでグルリと彼の體を一轉換すると彼の口一杯の刺身は綺麗に切り取られる。彼れが悠々として食事をして居る内に無數の小魚が其獲物の周圍に集つてくる。普通ならばうつぼの一睨みに震ひ上がつて雲霞と逃げ出す小魚共も強敵うつぼが身命を賭して獲た御馳走に遠慮なく御仲間入りをする。うつぼが喰べた食ひ跡から其力相當の小さい御馳走を、持て逃げても行かないで其附近で食つて居る。然もうつぼは之等こそ泥棒を追ひ拂はふともしない。仲間のうつぼも集まつて來て瞬く間に彼の大切の獲物は喰ひ盡されて仕舞ふ。然しうつぼは平氣だ。食ひ足らなければ第二の獲物を探すであらう。無慾なのか馬鹿なのか、何んと云ふ男性的な魚であらう。

たこ

如斯男性的な強猛なるうつぼの相手方になるたこは如何なる魚であらう。諸君は日常市場で見られるから說明は略す。彼れはたこ入

[illegible]れて居ない。

たこの不死身

たこは御承知の如く其足が八本もある。而して一本々々に強力なる吸盤が二百も三百もついて居る。此手で捕らへられたら如何な魚も一と堪まりもないだらう。彼れは多くは岩の孔の中又は石の下等に穴を掘つて隱れて居るが、其目が穴奥から光つて居るのも氣味が惡るい。而して一本の手がふら〳〵と出て來る。如何なる魚と雖も手の屆く所に至れば必ず格鬪を仕掛ける。第一の手が屆いたら最後彼の八本の手は次ぎ次ぎに繰り出されてぐる〳〵巻きにして仕舞ふ。彼の唯一の戰法は敵の呼吸を止めることである。即ち手と足で押へつけて絞めつける柔術屋の様なものである。彼の歯は俗に云ふとびからすと云ふ様なもので獲物の肉を喰ふにはよいが一撃を與へて敵を殺すと云ふ様なものではない。時には穴から出して居る手先を他の魚から喰ひ切られる第二第三と取られる。然したこ入道は餘り痛痒を感じないのであらう再三の失敗を省みずよく辛棒して遂ひには敵を屠るの機を待つのである。然して一度敵から喰はれた手は日ならずしてドシ〳〵成長する。凡そ半年も經てば元の通りに立派な手になる。諸君はよくたこの手が七本とか六本しか無いのを見るとが珍らしくない。又太い手が根本から切れて其先きに細い手が出來たのを見ると[illegible]

ふ。實に不死身だ。學者はこれを再生と云ふ。要するに二本や三本の手を噛まれても平氣だ。其内には致命傷を與へるぞと云ふ捨身で行く戰法だ。皮を切らせて敵の肉を切れと云ふ樣な昔の武藝の達人の云つた事をたこは遠い昔から心得て居るのである。其實行の爲めには八本も手が用意されて居ると云ふ鬪士である。

たこの性質

たこの戰法は敵の呼吸の根を止めると云ふ事であるから、彼は魚も食ふが、さゞえとかあわびとか眞珠貝とか云ふしやれた御馳走に預る事が出來る。魚としてあわびや何かの味を知つて居るのは恐らくたこだけであらう。彼れは此等貝類の呼吸を止めて殺すので眞珠業者などはたこの爲めに大恐慌を來たすのである。たこの棲家の邊に行つて見るならばあわび殼などの新らしいものは三つも四つも捨てゝあるだらう。又はいせえびのからなどが捨てられて居るのもある。故に潜水夫が斯樣な新鮮なるたこの喰ひ殼があつて穴奧にたこが居ないならば之等を動かさずに其儘にして置いて、次回に其孔奧から必ずたこを捕る事が出來るのである。斯樣にたこは獲物を屠つてから多くは自分の匿れ家に持ち歸つて悠々として食ふので

かいうつぼの男性的な淡白さと比する時に……

たこは産卵期になると石を運んで來て、たこ塚と云つて四疋も五疋…

も居れる樣な匿れ家を作る。又、少し大きい岩穴には三疋も四疋も共棲する事がある。斯樣な時に潜水夫は餌を穴の入り口に持つて行つてやると、或る一疋が捕らうとする、と他の二疋が之れを妨害して捕らせまいとして、平和た棲家の内にたこ同志大格鬪を始める。餌には豫め糸がつけてあるから、之れを曳いてたこを引き出さうとすると一疋が追うて穴を出樣とする、と他の者は押へつけて出すまいと爭ふ。又ある一疋が好い棲家を見付て其處に居ると他の強者が來て弱小なる先住者を追ひ出して占領しようとする、穴が大きくて一所に居るに充分であつても中々他人は入れない。之れを以てたこ同志大喧嘩を起す事がある。前述の如くたこの戰法は呼吸を止めると云ふ事で、仲間の戰爭では敵の水管の中に手を入れて放さない、と云ふ事は勝利の唯一つの方法である。斯くして敵の水管を塞いだが最後、手の一本や二本喰ひ切られるのは平氣である。普通の魚ならば多くは相爭ふ時は大きいものは勝つのであるが、たこの場合は自分の倍もあるのを殺して穴の奧で喰べて居る事もある。尚ほたこ漁師も船の中に海水を通ずる活す間

[illegible]
如く一つの[illegible]の下に三つも四つも[illegible]ると云ふに[illegible]すると、[illegible]
所好きの性癖を持ち乍ら面白い對照をなして居る。

たこは匿れ家の外では意氣地がない

たこは晩は自由に海底を運動しあわび、いせえびなどを捕り廻はる。又は石の上に休養して八本の手を綺麗に組んで眠つて居る時もある。矢はり穴の奥底より廣々とした海底が好きなのだらう。而してたこは飽く迄も用心深い魚であつて、彼の體色を其止まる所の岩礁の色と同じ色に變ずる事が出來る。其上彼の手や足の吸盤などは皆隱して仕舞ひ坊主頭の下にぐる〳〵巻きにして丁度岩の突端の樣に似て居るので之れを見付ける事は容易でない。所謂保護色及び擬態である。然しながら穴外に於ては色々の食肉魚が往來する。而してたこは骨も鱗もない實に美味な肉塊である。如何に變裝術に巧みなたこと雖も彼等に見付かつたら最後攻撃をその頭部に食らふ。一度たこであると云つた事が氣付かれたら彼の周圍には附近の色々な魚が集まつて來る。ふぐ、いしだい、くろだい、うつぼは云ふに及ばないのである。ふぐの樣な魚でも其歯は甚だ鋭い、たこの頭に其口が付くや否や其所には口一杯の肉が取られて穴が出來て仕舞ふのである。八本の足は不死身を誇つて振り廻しても又黒汁を吐き出して所在を晦まさうとしても樂[illegible]を暗ます事は仲々出來ない。又防ぐ事も出來ない。而して水中に於て

[illegible]
し、見るも[illegible]
は北海道邊に行くと五十尋位に達する[illegible]たるものが[illegible]に[illegible]
りを立てゝ悠然として歩るく樣は遠くから見ると、潜水夫が歩るいて居ると見られる事もある。斯樣なのは晝間でも歩るいて居る。普通の魚位では何處から來ても歯が立たない。カレイ、ヒラメ、タラなどを遠慮なく飽食する。

潜水夫とたこ

潜水夫は海底で色々な悪戯をたこに仕掛けて見て其性質を確める。以上述べる如くたこは適當の隱れ家即ち金城鐵壁による中は彼の威力は大なるものがあるが裸で廣場に出ては全く無力だ。故に海底に壺の樣のもの、又は一升徳利の口が碎れて入り口が大きくなつたものとかがあると喜んで之れを隱れ家とする。潜水夫がこの彼の城寨たる碎れた燒き物を持つても決して出ない。若し手を差し入れて其坊主頭を捉つて引つ張り出さうとするとち切れても密着してゐる。首が千切れても從はないと云ふ事はたこにはよく當て嵌まる事だ。三十貫も四十貫もある樣な大たこを銛でつく。御承知の如く潜水夫の銛は三尺ばかりしかない。頭をつかれながら其手を差し述べて潜水夫の兜の排氣の出る所を塞ぐ。事によると百匁位のたこが一人で[illegible]

て一面に吸盤が並いで居ることがあつて潜水夫が船の上に登つて來ても尙は附いて居て、離はれる事もある。要するにたこの動く方法は吸ひついて動くと云ふ方法で、潜水器の排氣孔の如く無限に空氣が出て來る所では彼の吸盤の作用が無力なのは勿論である。たこの坊主頭と云ふ所は胴腹であつて頭や口は其下にある。潜水夫が坊主頭を捕へると、たこは頭を曲げて吸盤で吸ひつけて足の中間の口とびからすで食ひつく。中々強力で潜水夫の手に嚙みついて一塊の肉をとる位は容易なことである。

たことうつぼの闘争

以上述べて來たやうにうつぼは此上もない猛武者である。無慾で男性的で逃ぐる事を知らない。彼の鋭い歯が一度敵の肉を深く刺すならば彼の強い尻尾は岩窟の奥底の狹まい身動きもならない所に敵を引き込んで仕舞ふ。普通の魚は前進力こそ強いが後退する力などは幾らもない。斯樣な身一杯の狹まい所に入れられたら最後だ、うつぼは敵の眼と眼の間と云ふ樣な急所をよく知つてるに於ては誰よりも勝つてゐる。恰も短劍の勇士が突然暗から出て其不意を襲ひ急所を一ゑぐりして陥し穴の中に打ち込んだ樣なものである

へ容易でない。彼の呼吸を止める
るなら切つて見ろ！彼の坊主頭の急所は鐵壁の内に守られて
の體色の變化骨のない軟かな身體は或ひは岩角と見せ小石の如く又穴の底から細い手先きを出して小貝の如く見せるなど其變裝術の上手なる事如何なる忍術屋も及ぶまい。尙ほ所在を暗にすべく黑汁があつて現代の戰爭の煙幕にも等しい。尙ほ敵を殪すべき毒液を有し不備ながらも嚙みつくべき歯があつて、あわびやさゞえの如きものさへ容易に食ふ事を知つて居る。智謀の彼而して慾張り屋の意地惡るの彼、扨てこれとうつぼは非常に好取組である。吾々は長い間潜水して居るが、斯樣な場面を自然の儘で見る事は不可能だ。兩者の眞劍仕合をすべき道場を作つて各其特意とする妙技を見たい。事柄は至つて簡單だ。

古い素燒の壺をたこの居る海底へ捨てゝ、流れない樣に石を附けた紐で結んで置く。約一ケ月程してから、潜水器を以て先づ兼ねてたこを招いて置いた古壺を捜がしに行つて見る。壺の附近にはあわびの新しい殻が二つばかり轉つて居る。既にたこがこの中に住みついてゐる證據だ。壺口から奥を見ると、兩眼を光らして底の方にぴつたりくつゝいてゐる。試みにいわしを糸に吉して壺口へ覗かせると、可笑かつ

かて岩礁の錯々たる間に、破れ目から半身を出して居るうつぼの胴體を見いだした。潜水夫が徐々と少しづゝ體を引き込め、頭だけは出してゐる。其鼻先き二尺ばかり離れた處にたこの入つた壺口を向けて棚繋せしめ五尺ばかり後退して兩雄の一擧一動を注視する。男性的のうつぼは直ちに穴から半身を出して來た。たこ壺のあることはまだ氣がつかぬらしい。潜水夫の方に鎌首を向けて居る。暫くするとたこ壺の中からたこは手をふら〳〵させて出て來た。勿論狡智に長けた彼の事である、強敵うつぼをば既に壺の奥底から發見して居るに違ひない。と、うつぼの鎌首が突然たこ壺の入り口に向けられるや否や、投げ槍の如く壺に向つて突入した。陽の光鈍き海底の、氣味悪い靜寂の中に、戰は開始される。大海の一角に、唯二つ動くもの、而も對手の肉を喰む命掛けの闘爭だ。うつぼの尻尾は岩穴を離れて堅い鐵のかすがひの如く壺の外面底に固定され、直ちに戰闘が開始される。全力を以て奥底に引き込まうとするたこ、壺外へ引ッ張り出さうとするうつぼ。或る時は三寸も五寸もうつぼの體が壺外へ出て來るが、又漸次に引ッ張り込まれる。兩雄は戰爭に夢中だ。潜水夫は充分に近寄つて穴底を見るとうつぼはたこの太腿に喰ひついて居る。たこはうつぼをぐる〳〵巻きにしめて紋め込まうと八本の足が縦横に使ひ分けられるが、うつぼの樣に鱗がなく、體の表面は澤山の粘液で掩はれてるものは吸盤の効力も著しくないと見えてつるり〳〵と脱けられる。十分ばかりするとうつぼの身體はづる〳〵と壺の中に入つた。僅かに壺の入り口に其尻尾がかゝつて居るがもう動かない。遂にたこの獲物になつたのだ。若し之れはうつぼがたこに比して甚だ小さかつた。今度は二倍大のうつぼに組合はさせる。今度はうつぼの尻尾は岩穴を離れないで固定されて居る。而して彼の體はぐり〳〵と廻轉する。丁度ブルドックが敵を喰へて打ち振る樣だ。始めは一進一退だが、だん〳〵うつぼの身體が穴の中に入つて行く。と共に段々とたこが壺口に姿を現はして來た。彼の武器である八本の手も強力なうつぼの攻撃に堪へられず唯に匿れ家にしばり付からうとする丈けで、敵を紋込む余力がない。其吸盤は壺から一つ離れ二つ離れ遂にはうつぼの穴の中にその體を引き込まれて仕舞つた。それでも暫時は敵の穴の縁に八本の足が密着して居たが、漸次に色が悪るくなり、潜水夫が之れを引き出して見る頃は彼の坊主頭は已に喰ひ盡されて仕舞つて居た。

うつぼは敵を屠つて又穴の中に匿れ、海底には空しき壺のみが殘された。そんな爭ひが何時あつたかと言つた風に、海底は再び靜寂に滿された。

漱石の思ひ出（十一）

夏目鏡子述
松岡譲筆録

五十　雛子の死

前の年の三月桃の節句の前の晩、お雛様を飾つて宵雛のおまつりをして、お若い門下の方々が幾人かおいでになつて白酒をのんだりしてゐらつしやる時に、私共の一番季の女の兒が生まれました。節句にちなんで雛子と名づけました。これが早く亡くなるからでもあつたでせうが、智慧も早く、非常なおしやまつ子でございました。一個年もたつたこの年の秋頃には、よち〳〵裏で遊んで居ては、自分も見様見眞似で猫の墓にお水を上げに行つて、序に自分もその水を飲んで了ふといふ案配でちつとも目が離せません。それが

をりました。そのうちに夕飯時になります。いつもですと、小さいのばかりがうぢやと集まるのですから、とても大騒動なので、この雛子とその上の小さい男の子の方とだけは、めい〳〵お守りがおんぶして外へ避難して、さて皆のごはんがすんだ頃を見計らつてかへつて來て、それから御飯をやるといふ方法でやつて居たのですが、此日はどうしたはづみか、御飯を一足先きにたべさせて、それから外へ行くといふので、茶の間の隣の六疊で始めました。ところが自分一人で御飯を頂かうといふので、おもりのもつてる匙を取り上げて、お茶碗片手に「かう？　かう？」と片言まじりに食べ方を聞きながら食べて居りますう

[illegible]
[illegible]
[illegible]きかへすといつた風に丈夫なのでもあつたのです。[illegible]
ん[illegible]に四五度ひきつけたことがあつたので、[illegible]
ず、子守が[illegible]み込んで水を吹きかけますが、これは又どうした
ことか、いつものやうに手取早く息を吹きかへしません。

其時、私は外の子供たちと一緒に茶の間で御飯を食べかけてゐたのですが、例の騒ぎもいつものものと聞き流してそのまゝ箸を運んで居りましたが、何だか長いのが氣になりますので出て參ゐりました。さうしていつもやるやうに水を吹つかけて呼んだり搖すつたりして見ましたが、ぐたりとして白眼をむいたまゝ一向きゝめがございません。どうも自分たちの手におへさうもないので、すぐ前のお醫者さんを呼びにやりました。

醫者がかけつけてすぐ樟注射をして下さいます。反應がありません。どうも様子が變だから、ともかく浣腸をして見ませうといつてその仕度にかゝりますと、すつかり肛門が開いてゐるといふので、びつくりして了ゐました。これはいけない、いつもかゝりつけのお醫者さんをといふわけで急き立てました。

丁度其時、書齋には中村古峽さんが見えて居りまして、夏目と話をしてらつしやいました。子供の様子が變なので夏目を呼びにやらせますが、夏目もいつものゝだと高をくゝつてるのでせう、一向來てくれ

[illegible]
[illegible]
きゝめがありませんでした。どうにも仕樣がありません。といつてあきらめて了ふには、餘りに呆氣ない、うそのやうな咄嗟な出來事で、みんなぼんやり何かにつまゝれたやうな氣持になつて了ゐました。誠にこれ迄澤山の子供たちも一人殘らず生長して來て缺けたものもないので、なほ更のことこんな始めての不幸に參ゐつて了つたわけでございます。がどう考へても夢のやうで、つひさつきまで元氣にしてゐた吾が子が、ぽつくり死んで了つたといふ感じがして來ないのでありました。

けれども亡くなりました上は、如何に夢心地でなげいて居ても是非がありません。ともかく形ばかりのお葬ひを出してやらなければならないのでございますが、さてこゝに一つの困つたことがおこりました。といふのは私たちは分家をして居りまして、家から葬式を出したこともなく、又誰の位牌もないので法事をしたこともないので、きまつた菩提寺といふものがないのでございます。一體夏目の本家は代々、小石川小日向の本法寺といふ淨土眞宗の名刹の門徒で、そこに先祖からのお墓もあるのですが、夏目が餘り眞宗を好みません上に、本法寺の檀下になるといふ氣もしないので、どうしたものだらうかと言つて居

たのですが、此の場合、急にうまい分別もなく、兄さんなどもともかく今度は本法寺に頼んだらよからうといふことで、ではこん度のところはといふので本法寺にきまりました。

さて葬式となつても、仰々しい馬鹿騒ぎは困るし、第一それに子供ではあるし、普通の盛り物だの花だのといふを嫌つて、何とか突飛でなく、しんみりみんなで身内のものを葬ふといふ氣持になれるとかないかと申して居りましたが、そのうちにふと西洋に居てあちらのお葬式を見た印象から思ひついたとか申しまして、誰彼れの區別なしでみんなで送つてつて葬つてやらう、これが一番い〻といふ至極簡單な思ひ付きで、葬式の日には、葬場の本法寺へみんなで馬車を連らねてついて行くといふことに致しました。

御通夜になつて本法寺から通夜僧が來ます。夏目は、おれは通夜なんか嫌ひだ、みんなかへつてねた方がい〻ぢやないかといつて居りましたが、私たちが死體を守る爲めだからなど〻申しまして、それはそのま〻續けてやりました。自分ではい〻加減おそくなつてからねて了つたやうでございました。

其時、夏目が申しますには、

「おれなんぞ死んだつて通夜なんかしてくれるなよ」

といふので、私の母が、

「でもみんなでからやつてついてゐるのは、一つには死んだ佛に明日出てかぢつたりなんかしないやうに死體を護つてついてるのでございますよ。若し貴方の時に、誰でもついてなくつて鼠でもかぢられたらどうなさいます」

と申しますと、夏目は興がつて、

「さうなつたら、かへつて痛い痛いつて生きかへるかも知れませんね。」

と皆を笑はして居りました。

其通夜僧が餘り上品な方ではなく、よせばいゝのに何でもかつかじめるやうな話を致します。

「お寺では何でも頂戴致します。死んだ佛のものは、皆どこでもお宅では氣味悪がられたりしますので、何でも頂きますし、又お宅によつては供養の爲めとあつて遺品を御寄進なさいます方もございます。」

といふやうな話から、

「どうかそんなものがございましたら御遠慮なく。」

と氣をきかした積りで、今にも何でも貰らつて行かうといつた素振りをします。

「例へばお棺におかけになつてる白いきれ、あんなものでも頂きます。」

に、とう〱夏目もあいそがつきたといふ風に、

「いや、あれは葬儀屋から借りたものです。」

[illegible]うして[illegible]でやきました。
お骨にしましてからしばらく家におきましたが、家が狭くもあり、第一子供たちが怖いので気にもなりますしするので、埋葬する迄お寺へ預けることになりました。ところが私が、埋葬状だけもつてるとどこかになくしさうな気がしてましたので、お骨の箱の中に入れたまゝ、それなりに寺へあづけて了つたのです。

それからしばらくしてから雑司ヶ谷に墓地を買ひましたので、いよいよそこへ埋葬しやうといふことになつて、お骨を寺に貰ひに行くと寺で渡してくれません。寺の方では、寺の墓地へ墓を立てさせて金にしやうといふ魂膽なものと見えて、此方から使にやつたものには何のかんのと理窟を構へて、どうしても手渡ししてくれないのです。埋葬書ぐるみお骨をとられてるのでどうすることも出來ません。そこで、始めから本法寺にお墓をこさへる意志はないのでしたが、から露骨になれば段々いやになつて、意地にも早く取り戻さうといふことになり、かといつていゝ加減の使を差し向けておいたんでは先方が聞かないので、そこで私の弟にたのみまして、弟の知り合ひの辯護士の手で告訴狀を書いて貰ひ、さうしてやつと取り戻したのでした。お骨は雑司ヶ谷の墓地に埋めました。夏目が自分で小い墓標を書いてやりました。其後、墓をたてゝやらうといふので、津田青楓さんに御墓の設計をお願ひしましたこともありましたが、とうとう墓は造らずにしまひ[illegible]

もし[illegible]たらと[illegible]と思ひましたが、それも[illegible]やうな気が[illegible]まゝ默つて居りました。臨終へ何もかもすんだ後で其話をしますと、本當に然うすればよかつた。さうすれば死體もよくわかつたらうに。ちつとも窮屈なことなんかないよ。自分はまるでそんなこと気がつかなかつたと惜しさうに申して居りました。夏目が亡くなりました時に、私が進んで解剖して戴くやうに申し出ましたのは、その時のことを思ひ出したからです。

子供をなくしたことは始めての悲しい經驗であり、それが又盛りの末の子である上に、看護も何もしないでもぎとられるやうにわかれたのですから、當座は何も手につかず、ぼおつとして居りました。口に出してこそ何も申しませんでしたが、これは相當にこたへた様子で、随分心のうちでは悲しんでも居たやうでした。子供に逝かれるといふものはいやなもんだなあなどゝ、つくづく思ひつめたやうに言つて居たこともありました。

一體頭さへ悪くない時には、随分の子煩悩で、子供たちが何をしやうと、にこにこ笑つて見て居るか、自分も相手になつて遊ぶか、でなければわれるやうな騒動の中に坐はつて、すまして一向氣にもかゝらないらしく本をよんだりして居たものでした。例へば長女の筆子が一番先に立つて、帯をかついで號令をかけると、みんなぞろぞろついて

大變な足踏みで書齋の廊下を訓練したりして歩るいても平氣な顏で、やかましいとも言はず書見してゐるかと思へば、前に西片町に居た時などは、二階に子供たちが居て、今にも落つこちさうにあばれても、今にどうなるとかと思つたねなど丶呑氣なとを言つて氣にもとめずに居りました位です。此頃の子供たちのあばれやうと來たら大したもので、家の子供たちの外に友達が集まつてさわぎ立てるので、散步に出て大通りから家の方へ曲かる二三丁先の角迄來ると、ワアツ〳〵と家の中で子供達があばれてるのが手にとるやうに聞こえるといつたわけです。しかし頭が惡くなつてつむじをまげない以上呑氣なものでした。

この雛子の急死の模樣は、「彼岸過迄」の中の一篇「雨の降る日」といふ中に詳しく書かれて居ります。この小說は亡くなつた子供の悲しみから漸く氣をとりなほして、一月から四月迄朝日新聞に連載したものなのですが、亡くなつた子供の追憶ともいふべき「雨の降る日」は、丁度雛子の二度目の誕生日の三月二日に書き出して、百ケ日に當る七月に書き了つた、それも何かの因緣で、子供の爲めにい丶供養をしてやつたといふ風なとが、急死のあつた時居合はされた中村古峽さんへ[illegible]

のですから、こんな手紙を見たりなどしますと、一寸妙な氣がします。しかしそんなことをいつたらあべこべにそれ御覽なさいとでも言はれると思つたものですか、一切そんな氣の弱さうなとは私には申しませんでした。

しかし隨分感じの强い人と申しますか、氣の弱い人と申しますか理窟の上では迷信的なとを一切けなしつけてゐる癖に、怪談じみた因緣ばなしなどを致しますと、怖がりまして、もうよしてくれ、ねられないからなど丶、よく眞劍にこんな話になりますと降參したものでした。

或る時こんな話をしたことがあります。親類の鈴木の兄嫁が、四ケ市でチブスに罹つて、それから大變重くなつたといふので家の者が心配して居ますと、丁度大晦日の一夜あければ元日になるといふ夜のこと、鈴木のお父さんがねてますと、枕元にその病人がフロック・コオトを着て坐はつて挨拶をして居ります。病氣だといふのにどうしたのだらう、あゝ、さうだ、てつきり暇乞に來たのだなと思つて、此方でも挨拶をしやうとするとふつと目がさめた。おかしなことがあるものだと

と、野呂[illegible]病勢が大分悪くなつた時分は[illegible]もなく、××さん、××さんと看護婦を呼んで、どこそこに入つてるフロツク・コオトを出して下さいといふ。妙にうなされ一寸譫語をいつてるとは思ひましたが、貴方は今御病人ですから駄目でございますよ、おなほりになつたらお出ししませうと答へますと、あゝ、さうですかと言つた切りしばらくそのまゝ默つて居ります。するうちに又一時たつと、××さん、フロツク・コオトを出して下さいといふのださうです。變なと思つてゐたが、今になつて思ひ合はせて見れば、丁度お父さんのところへフロツク・コオトを着ておわかれにいらした時刻だといふことでした。

こんな話をしますと、もうよしてくれ、ねられないからと、本當に心から怖いものと見えて、それは〳〵憶病らしくいふのでございました。

五十一　私の迷信

其雛子のお骨をいざ埋めやうといふ前になりまして、私が又日のいゝとか悪いとかいふことを氣にしまして、其頃丁度私の妹をよそへかたづけるのでちよい〳〵里へ參ります其のかへり道に、今日は一寸日の吉凶判斷に例の占の天狗のところへよつて見て貰はうと思ひまして里を出てまゐりますと、ひよつこり小石川の白山のところで森卷吉さんにお逢ひしました。家へいらつしやるとのことで御一緒にし[illegible]すぐに[illegible]かへりますからといつて[illegible]日を卜つて貰らつてかへつてまゐりますと、[illegible]來てお話をしてらつしやいます。[illegible]は私の[illegible]を見ると、

「さつき森に逢つたといふが、大分遅いぢやないか。[illegible]さんのところ）へでもよつて居たのかい。」

と申します。そこで私も正直に天狗のところへ寄つて、雛子のお骨を埋める日の吉凶を占てもらつて來たと申しますと、夏目は又かと言はぬばかりに、

「此奴は馬鹿な奴だな。亭主より餘程天狗の方を信用してるんだから、かなはないや。」

に、例の森さんも大笑ひで

「そいつはよかつたなあ。」

頭がよくつて、機嫌のいゝ時は、こんな其場の笑ひ話で紛はすものでしたし、又大患以來一つは一々そんなことをかれこれいふのも大人氣ないとも思つて居たでせうし、第一氣もおとなしく落ちついてゐて、私が旅をするのにお守りなんかを入れてやつても、別にそれをどうするといふこともありませんで、かへつてお前の入れてくれたお守りがお尻の方へまはつて、わたら丁度尻の下になつたが、かへつて勿體ないぢやないかなどゝいつてゐたものです。それからそのお守りを、一

緒に旅したお友達がお連れになつた易者が見て、不思議がつて訊ねるから、細君が女難よけのお守りを入れてくれたんだよと言つたなど〻冗談を言つてゐた位のものです。しかし一旦頭の工合が險惡になつて來ると、隨分の悲喜劇をおこします。私の迷信的な仕草が一々氣に入らなくなるのですが、私の方でもさうなると自然益々迷信的になるといつたところも出て來て、こつそり夏目に知らせないやうにして、夏目の頭がなほるやうに氣が鎭まるやうにといろ／＼なことをするのでした。後から考へると滑稽なことでも、其時には苦しまぎれに神佛頼みをするやうなものですから一生懸命です。

例へば、亡くなる大正五年には正月から例の頭が惡くて、以前洋行後千駄木に居た頃程ではなかつたにしても、ともかく大變な見幕で、手のつけられない始末に、子供だまし見たいなおまじないなのですが、牛込の穴八幡の入口に大變よくきく蟲封じのお札を出すところがあると聞いて、それをもらつて來て子供達の居る六疊の部屋に南向に柱に打ちつけておきまして、長い釘を「封じ」と書いてある眞中に打ち込むのです。それを毎日一度づゝ鐵鎚で打つのですが、夏目が外[illegible]

出來上ると、それを封筒の中に入れて、[illegible]自分で[illegible]に行く、これが日課でもあり、又たつた一度の外出なのです。それも五分間とかゝらぬ暇なので、其間に釘を打ち込むわけなのです。出かけるとそれとばかりに大急ぎで毎日少しづゝ釘の頭を叩いて、何時は[illegible]ぬ顔をして居りました。

ところがある日のことです。その日の原稿を書いてポストに入れに參るとて玄關に出ました。送り出て門を出た頃を見計らつてゆつくりやればよかつたのを、それといふので書齋に居るうちに大急ぎに六疊にかけ込んで、かん／＼釘の頭を叩いたものです。と、これを聞きつけて、何をするんだといつて六疊に上がつて參りました。見ると恐ろしい見幕で、折角の蟲封じの札を滅茶々々に叩きこわし、それを一まるめにしてごみ溜めの中に捨てゝ了ひました。後で勿體ないといふのでそれを拾ふやら大騒ぎをしましたが、[illegible]の機嫌になつた時には、耳が非常に働くので、何かやつてるに違ひないと感づいてるところへ、飛んだぬかりをやつたものらしいのです。それでもさうなつて來ると[illegible]

ると　つて塩梅に[illegible]度づゝ藥をのみます。其の藥の中に苦搗丸を入れて、一緒にオブラートに包んでやつたらよからう。かういふ素人流には名案だといふものを考へつきまして、少しづゝ丸藥を藥の眞中に入れて包んでやつて居たのです。最初は怖る怖る少量づゝやつて居るうちに、段々大膽にもなり、又ぞんざいにもなつて、長女なんぞが始終それをやるのですが、なれつこになつて粉の中にうまく入れゝばいゝのを外へはみ出して作つてやつたものです。と、とうとう見付かつて了つて、小つぴどく怒られたことなどもありました。餘り苦しくなると、つひそんな今から考へると愚にもつかないことを考へるやうになるのです。

しかしこれは頭の險惡の時のことです。

子供が亡くなりましてからといふものしばらくの間は、あとの子供たちにも親切で、以前には殆んどそんなこともなかつた一家總出でどつかへ行くなどゝいふことも致しました。一度月島へ汐干狩に行つたことがございます。夏目も卒先して汐干狩には行つたことがないから行かうと申し、子供たちも父と一緒に一家打ち揃つて行くなどゝいふことはないとなので喜んで參りましたが、合憎と風が強くて海へ出ることが出來ません。仕方なしにやはり汐干に來て、同じく海へ出られない連中が、月島の川が海へ出るところの岸につながれて、中で歌を唄つたり踊つたり酒宴をしたりで大はしやぎでしたが、其間に舟を

すか、昼間も汐干より外な面白さうなものないかと言つて喜んで居て居りました。

ところが其うちに雷鳴りがなつて來る、えらい夕立が來る。お陰で汐干どころの騷ぎではなく、みんなずぶ濡れになつて散々の體でかへつてまゐりました。

やはり其頃のこと、同じくみんなで井ノ頭へ參つたことがあります。此の時も大層上機嫌で、廣い池のまはりで子供たちが嬉しさうに遊ぶのを、ベンチの上に仰向けにねころんで始終にこにこしながら眺めて居りました。

五十二　其頃の交友二三

長塚節さんの長篇小說「土」を、自分の紹介で朝日新聞にのせたのは此の少し前かと思ひますが、それが御緣になつて長塚さんがちよいちよいお遊びに見えて居りましたが、九州の方へいらつしやるについて、喉頭結核にかゝつてられて、それを福岡大學の久保猪之吉博士に診て頂きたいといふので、久保さんに宛てゝ紹介狀を出したのは此頃だつたでございませう。

長塚さんの「土」には大層感心した樣子で、序文を書いたりしる位ですが、其中に自分の娘に是非この小說を讀ませますなどゝいふ書いてをります。が元來娘たちに小說をよませるのは大嫌ひで、い

ど厳禁の形でありました。といふのは、第一半可な文學話などをやられては堪らないといふのと、それが昂じて、よく女流の作家で家へいらしたりなどする方のやうになられちやかなはないと口癖のやうに申しまして、娘が小説を讀むのをひどく嫌つて居りました。そんなわけで自分のの人のの、區別なしに、後になつても大きな娘達には全く小説を讀ませないといつてよい位でした。

かしてらしたので、よく其地の名産品を送つて下さいました。多くはこまぐした文房具の類か木彫の類でした。橋口さんは以前私どもが千駄木に居た頃始終おいでになつて、夏目と繪端書の交換などをしてらしたのです。夏目はそれら支那骨董を又人一倍面白がりまして、物によつては机の上において眺めたり磨いたりして居りましたが、送つて下さるものだけに満足が出來ず、此方から自分で欲しいものを言つてやつて買つて頂いたりもして居りました。それがみんな二圓だの五圓だの、高々十圓位かとまりなのです。支那のものは面白くて安いといつて喜んで居りました。

笹川臨風さんや横山大觀さんなんぞがおよび下すつたのも、此の前後であつたかと覺えて居ります。一度前におよび下すつた時には執筆の方が忙しいとかで失禮し、其後ひとりで大觀さんのところをお訪ねしたとかありました。すると取り次ぎの書生さんが先生は留守だといふので、其儘よろしくといつてかへりますと、後から書生さんが追つかけて來て、お會ひしますからどうぞおかへり下さいといふので、又素直について行つたさうです。大觀さんは繪を描いてられて、繪を描いてる時には面會人を斷はる習慣になつて居るので、玄關子が氣をきかして居留守を使つたものと知れ、御馳走になつてかへつて來に

銷夏と消費經濟

前田繁一

時は移り、人また變つて同じではないでも云ふ連中に取つては、又年寄りのお談義かと一笑に附されるであらうが、斯ふした經濟に無頓着な人間が多ければ多い程、安價に、そして手輕に夏の暑さを逃れんと希求し、又は少額な經費に依つて子供を一と夏海邊にでも遊ばせ、身體を健全にしたいと願ふ者の負擔を增し、多大の迷惑を掛ける事になる事を忘れてはならぬ。

ろうに、何時に變らず東京驛も上野驛も乘客で大混雜、殊に此の暑さに、ムツト不愉快極まるまでにいきれる列車目がけて押し寄せる人の數の多き、到底算を以てし難い。昨今は所謂炎暑の候なるが故に、何れ學生の休暇を利用して父母の許に歸らんとするもの、友人相集ふて登山を目論むもの、家族打ち伴れて或は海邊に、或は山間の里に暑を避けるもの等、其の多くが所謂避暑客であろう事は想像に難くない。斯ふして避暑するものが、果して克く暑さを逃れ得るかどうかは別問題として、玆に銷夏と消費經濟と云つた樣な事に對して若干の考察を試みよう。勿論有り餘る程の金と時間が有り、又はよし僅かに土曜の半日と日曜の一日より時間はなくとも、僅かに汽車賃を握つて飛び出す程度の身であつても、それが一年中の勞苦を忘れ、一週間の苦勞の帳消しに經濟なんか眼中にない、たゞ無暗に時間と金を使ひ、たゞ暗雲に遊ぶんだと

一外人の逃げ出す輕井澤一

現在でも輕井澤には外人の避暑客が可成りに多い。然し數年前に比較すべくもない。數年前までは、輕非澤を以て東洋第一の避暑地なりとして外人間に愛慕され、遙々上海、香港邊からわざ〳〵避暑に來る外人すらあり、眞夏の輕井澤は外人で大いに賑やつたものだと云ふ。道往く人は殆んど外人ばかりであつたとさへ云はれて居た。それが近年になつて日本人で避暑に入り込むものが漸く多くなり、日本人の入り込む數の增加するに反して外人の姿が年一年減つて行く。何故に數年前は[illegible]されて居たに外人間に喜ばれ、今は又何が故に外人の姿が薄れ行くか。さあらうが、數年前に涼しい所として外人を喜ばせた輕井澤は、今日と雖も外人の所謂價値を損しないだけの涼しさを保持して居る。數年前に外人の目を喜ばせた新緑は、より益々豊となつて外人の喜びを增しこそすれ、決して外人の足を遠ざける原因とはならぬ。然も外人の姿は年一年減じて行く。その原因は云ふまでもなく日本人が續々入り込むからだ。外人は日本人を嫌ふ。と云ふよりも日本人の消費經濟上の無知識を嫌ふ。日本人の消費經濟の無知と過てる虚榮心から來る物品の大名買ひを嫌ひ、此の大名買ひから來る物價の昂騰を嫌ふからである。

一物價を釣り上げる大名買一

高崎へ二十五哩熊谷へ五十哩、上野へは八十八哩もあり、ちよつと東京へ出るにも五時間はかゝると云ふ不便な輕井澤ではあり、避暑地としての以外は他に何の能もない輕井澤であるから、商品の輸送料から云つても、又殆んど夏場に一年間の生活費を稼ぎ出さねばならぬと云ふ點から云つても、さぞや同地の物價は非常に高からうとは一般に想像させられる所である。それが數年前までは殆んど京

京の物價と變らず、物に依つては却つて東京より安かつた。と云ふのが消費經濟知識の發達した外人が、朝な夕なにバスケットを下げて輕井澤の町を上から下へ、出來るだけ品質の良い、出來るだけ安い物をと店から店へ漁つて歩く。斯くされる事に依つて商店相互の間には、必然的に猛烈な競爭が起る。商店相互の競爭は勢ひ物價を引下げ、品質も良化する。斯くして何年間か外人間には輕井澤と云ふものが、涼しい事に於て、又生活の樂であつた事に於て、またなき良避暑地たり得たのであつた。それが最近日本人が盛に入り込み不精な奥樣や虚榮心の强いお孃さん達が、電話で注文したり御用聞き委せにして品物を見向きもせず、商店のあてがふがまゝに物品を受取り、店員の云ふがまゝに代價を支拂ふと云ふ樣になつてからは、商店相互の競爭は追追少くなり、物價は漸次高くなつて品質も惡化する。日本人の無頓着な消費經濟に因つて安樂であつた眞夏の生活を根本的に破壞され、[illegible]

—類例の少ない貧乏な日本人—

無頓着な日本人の消費經濟が、日本人の消費經濟に對する無智識が斯くの如く外人に多大の迷惑を掛けて居るばかりか、日本人相互間にも非常な損害と迷惑を與へる。即ち數年前までは餘り避暑地として世間に知られず、物價も又安くて非常に良い所だと思つて居た所が、良避暑地として追々世人に知られ、避暑客がだん／＼增加するに伴つて物價が騰貴して來る。世間的になつて來れば來る程避暑に要する經費が多くかゝる樣になり、生やさしい金を持つたんではウツカリ避暑にも行けぬと云ふ事になつてしまう。斯ふした事は一々各避暑地に就いて説明するまでもなく、殆んど總ての避暑地が左樣だと云ひ得る狀態である。之れが爲に眞に子供の健康增進を念じ、輕い負擔で避暑したいと願ふ連中がどれほど迷惑をする事か。單に避暑地にのみ限らぬ。斯ふしたお互ひの消費經濟の無智識が、お互の日常生活上どれ程大なる損害を招來しつゝ

後の財界不況時以來[illegible]井銀行が調べた所を以てしても、各國の富が國民一人當りにして米國では六千六百八十六七圓であり、英國が五千二百十六圓餘、佛國が二千九百五十一圓であるのに對して、我が國は僅かに四百四十圓と云ふ貧乏振りである。支那や伊太利ですら日本の二倍半と云ふ事になつて居る。又國民の所得にした所で、

國別	一人當りの所得
日本(本國)	六〇・〇〇円
支那	一二〇・〇〇
米國	一、二三二・〇〇
英國(本國)	八四〇・六〇
佛國(本國)	二九五・二一
伊太利	三〇三・六五
白耳義	四四六・三九

右表の如く我國の國民所得は、何れの國よりも非常に少い、お話にもならぬ情けない狀態に在るのである。勿論我國の國民所得が諸外國のそれに比してよし少くても、我國の物價

年次	[illegible]	[illegible]
大正二年	一〇〇・〇	一〇〇・〇
八年	二三五・八	―
九年	二五九・四	―
十年	二〇〇・四	―
十一年	一九五・八	二五〇・〇
十二年	一九九・一	二三三・〇
十三年	二〇六・五	二三〇・〇
十四年	二〇一・七	二二八・〇
十五年	一七八・〇	一八九・〇
昭和二年	一七〇・〇	一八六・〇
三年五月	一八〇・〇	一八二・〇

―貧乏な日本が物價は最高―

我國の物價も、右表の通り歐洲戰後漸次低落の歩調をたどりつゝありとは云へ、今尚戰前に比して八割以上も高値を保持して居る。今主要各國の物價指數を見ても、日本の樣に低落の歩みの鈍い國はない。即ち大正二年に於ける各國の指數を百とし、昨年十月の各國物價指數をそれに比較して見る。

國別	おろし賣物價指數	小賣物價指數
日本	一六九・八	二〇九・〇
米國	一四〇・一	一三三・〇
英國	一四一・九	一六五・〇
ドイツ	一三九・八	一三二・六

即ち國民所得が日本の約二十倍近くに達する[illegible]高くまで下り、日本の[illegible]のある英國の物價が戰前の大體三分高であり、ドイツも又五割一分六厘高に過ぎないと云ふのに、獨り諸外國に比して割合に乏しい貧乏な日本が、國民所得のお話にならぬ少額な日本が、依然として十割以上高い品物を買はなければならぬと云ふ、皮肉極まる現狀に在るのである。從つて我國に於ては、大正九年の二五五と云ふ國民の生活費指數を最高とし、其後昨年末までに九割一分も低下して一六四となり、戰前に比して僅々六割四分の生活費增加ですむ樣になつて居るのを始め、獨逸が僅かに五割の生活費增ですむと云ふ今日、日本人の生活狀態はどうかと云ふに、最近内閣統計局で調べた給料生活者の生活狀態を見ても、左表に依つて大體を推し得る樣に非常な生活苦に惱んで居るのである。

月收入階級	實收入	勤勞所得に對する生計費の過不足(△印不足)	實收入に對する生計費の過不足(△印不足)
六〇圓未滿	五一・八四	△一二・八六	△[illegible]・〇六
八〇圓〃	七一・五三	△九・二六	△三・九八
一〇〇圓〃	九〇・一五	△一五・八〇	△五・八四
一二〇圓〃	一〇九・二五	△一四・九二	△二・八四
一四〇圓〃	一二九・四六	△二〇・八五	△二・二四
一六〇圓〃	一四九・〇五	△一七・八四	四・八七
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
二〇〇圓〃	一[illegible]〇・一四	△一八・二一	四・二一
二〇〇圓以上	二三一・一三	△一五・三四	五・一四

即ちお話の通り、勤勞所得だけでは毎月々々少なからざる生計費に不足を來たし、[illegible]をしたり、財産收入で補ひもので漸く其の不足を補ふと云ふ有樣であり、それも百四十圓未滿の收入階級はどうあがいても毎月不足を[illegible]つて行く事が出來ないと云ふ現狀に在る。

―輕井澤が良い手本―

何故に日本の物價が諸外國の樣に下らぬか、何故に我國の國民生活が樂にならないのかは今更多く云ふまでもない。前述した輕井澤の現狀が何よりも雄辯に其の理由を明かにして居る。日本の國民が貧乏であり、收入がお話にもならぬ少額であるのにも拘らず、消費經濟に關して一向無頓着であり、今尚一部に唾棄すべき成金者風の大名買を以て得々たる不良の奴が多いからである。吾々は自己の生活を樂にする爲に、而して國民相互の生活を安定せしむるが爲に、先づ何よりも大いに消費經濟の改善に心せねばならぬ。お互の迷惑を思ひ、お互の負擔を輕からしむる爲に大名買をやめねばならぬ。暑さを忘れんとして氷を口にする以前に、氷屋に走らせる女中の暑さを思つてやらねばならぬ。

『産業の合理化』に就て

北浦千太郎

『産業の合理化』とは何ぞや？　一見單純なこの命題も、之に階級的性質が盛られると甚だ複雑なものになつて來る。例へば、ソヴエツト・ロシアに於ける産業の合理化は、勞働階級の利益のため、社會主義建設のために行はれるが、資本主義諸國に於ける合理化は、ブルジョアジーのため、資本主義制度を强めるために行はれる。（之を例へば、我國の石炭聯合會が炭價引上げのために生産制限をやつてゐるのも、産業の合理化と云へば云へるのであるが、斯かる合理化は利潤の増大を計ることに外ならないからである。）

以上の本質的な階級的見地を外にしても、ソヴエツト・ロシアと資本主義的諸國との間には産業の合理化の點に於て深刻な相違がある。ロシアでは合理化の主要な刺戟物は大衆の需要を充たすことであり、從つてまた生産を擴張することであるに反し、資本主義諸國に於ける合理化は、現在のところ生産制限による市場への適應である。卽ち前者は生産量よりも廣い市場を持つに反し、後者は生産量よりも相對的に少ない市場を持つてゐるのである。從つて前者は失業〆遞減のパースペクチーヴを有するが、後者は失業者増大の見透しを持つてゐるのである。

以上の相違を頭に入れて、資本主義諸國に於ける産業の合理化方法を次に一瞥する。

資本主義諸國に於ける産業の合理化の方法は次の如きものがある。

一、勞働階級に對する搾取の増大による産業の合理化

二、生産過程の所謂フォード化による産業の合理化

三、工業的企業の集中による産業の合理化

以上の中（一）の方法は、利潤を主要目的として産業を經營する資本家によつて、第一に採用される方法である。この場合に於ける産業の合理化とは、勞働時間の延長、勞働賃銀の低下、賦課税の増大、生活必需品の價格の釣上げ等を意味する。

この方法によつて歐洲の勞働者は殆ど完全に八時間勞働制を横奪され、甚だしきは九時間勞働から十五時間勞働に延長された國（ブルガリヤ）さへある。而も勞働時間の増加に對し、賃銀は著しく低落してをり、獨逸の如きは一九二五―二六年に於ける勞働者の實收賃銀は、戰前の七九％であり、波蘭、イタリーに於ける賃銀も最低生活費を下ること遙かに遠いものがある。それ許りではない。勞働時間が延長し、賃銀が低落したにも拘はらず産業の合理化は、生活必要品の價格を釣上げるので、勞働者の生活は一層苦しいものとなるのである。

以上の如く産業の合理化は、一方に於て、勞働階級の生活水準を低下せしめながらも、他方（二）（三）の方法によつて勞働者一人當りの生産力を著るしく増大させてゐるのである。例へば獨逸に於ては、（二）（三）の方法による産業の合理化の結果は、戰前から一九二六年までに實收賃銀が一〇％弱方低落してゐるにも拘はらず、この期間に於て勞働者一人當りの生産力を一七％方増大させてをり、アメリカでは資銀が一一％（名稱賃銀）方増大したに過ぎないのに、勞働者一人當りの生産力が三〇％（一九一九―二六年）方増大している。

以上に於ても明かなやうに、資本主義國に於ける『産業の合理化』とは、低落せんとする利潤を、勞働者の生活低下によつて補塡せんとすることに外ならない。

ニューヨーク

紐育縦横記

長沼重隆

世界の都會といふ都會のうちで、最も眩しく、變化の激しい都會といつたら、ニューヨークとわが東京に指を屈せざるを得まい。昨年請暇歸朝して、つい此間再び任地ニューヨークに向つた知人の一外交官は、同地を去つて五年になる私を捉へて『ニューヨークは變つたよ』といつた。成程さうかなと思つた。またこの春來朝した舊知の佛國系米人も、矢張ニューヨークの變化を說いてやまなかつた。ハドソン河底を打貫いて、ニューヨークとジャーシイを繫なく大隧道が完成したときかす。自動車が何台とか並んで通れる大したものだと言ふ。で私は『さうかい、其麼に變るなら、君達が今度歸つて見たら、無また吃驚する種が増えてゐるだらう！』とやり返して置いた。

ニューヨークの變化に就て、よく引合に出されるこんな小話がある。或る外人漫遊客がニューヨークに著いて、早速何處の俱樂部の晩餐に招ばれた。その歸りに乘つてゐる自動車が來た時と同じ街筋を馳つてゐるのに氣が附いたので、同乘の案內人に『君、この邊は今朝來る時尤う見て通つた所ぢやないか』といふと、案內人は『それは確してゐますが、あゝして建築してゐたうちに、どれだけの變化が起つたか、夫をお見せしたいと思ひまして……』と、澄まし込んで答へたといふ。

今日のニューヨークは果して彼等の言ふが如くひどく變つてゐるかも知れぬ。またそれ程變つてゐないかも知れない。だが何しろ私がゐたのは五年前のことである。若しかすると、この私の執筆は、今は昔のニューヨーク談になりはしないかと懸念される。

× × ×

ニューヨークに五、六年暮した私は、今でも夏になるとあのニューヨークの暑さを思ひ出す。尤もニューヨークの暑さは日本のやうな蒸し暑いのとは違つて、かつと突喊的な、いやに男性的な暑氣である。日盛りを太陽の熱に燗れた白い鋪道をこつ／＼歩いてゐると、今にも不意に抱きつくかと思はれる位だ。それだけ涼しい夕方になるのが待遠しい。

自家用自動車のある手合は日中、日[illegible]

掛けるが、多くは公園やロングアイランドの海浜――ブライトン、ロツカウヰイ乃至コネー・アイランドあたりへ出掛ける。極く暑い晩は海岸で寝たり、公園の芝生の上やベンチで寝たりする者もある。海岸で好い氣持で眠つてゐる間に、満潮になつて波に攫はれて溺死したなどいふ話も年に一度位はきいた。公園に寝る人々のために、警官が度々懐中物の張番をやるといふ嘘のやうな話もある。私などはワシントン公園から出るバスの二階に陣取つて、第五街からリヴアサイド・ドライヴを通り、百八十町辺まで行つて又引返すといふ至極安直な納涼をよくやつたものだ。

ニューヨークの夏の思出で嬉しかつた事は蚊が全くゐなかつた事である。到つて不風流な私は、日本で珍重する蚊柱や蚊の唸り、蚊遣火などといふ夏の景物に對する俳諧趣味には一向感興が湧かない。全く日本の夏で困るのは暑さよりは蚊である。私は蚊の存在は日本の一部風流人に聊かの詩興を與へるかも知れぬが、經濟的、衛生上に非常な損失を與へて居るとさへ思つてゐる。この蚊がゐなかつたら、第一蚊帳などといふ餘計なものが要らずに濟むし、蚊遣線香などの必要もない。東京だけでいつても、二百萬人が夏用ひる蚊帳や蚊遣線香の

て蚊のために東京市民だけが蒙る損害だけで

來よう。その上に有害な蚊遣線香の煙、火事の危險、不眠、更に蚊の媒介する猛烈な傳染病のことを考へると、孑孑とても馬鹿には出來ぬ。

だからこれは卓見果斷の爲政家が出て、下水や川の設備に徹底的な改善を施さないうちは、永遠に續く災害だ。それにしてもジャンバル、ジャンが逃げたあの巴里の大下水管のことが思ひ出されるが、巴里人は恁うした公共の設備に、百年は愚か、五百年、千年の未來を考へてかゝつてゐる處が床しくも偉い。到底日本人には眞似の出來ない經営である。一體日本人は智慧は控へ目に、消極的に出すのを尊しとしてゐるらしい。壁際まで押つけられるまで手を拱いてゐる。總てが受動的だ。日本の文明そのものが既にさうではないか。私は常々から、足駄と自動車の泥除などは、日本人獨特の偉大な發明で、消極的智慧者としての日本の國民性を遺憾なく現はしてゐると思ふ者だ。雨が降る。路が悪くなる。下駄では都合が悪いので足駄を發明した。進んで道路を直す代りに足駄を考案した處がいかにも日本人の面目を發揮してゐる。そしてあの二本歯で猿の如く、曲藝師の如く、驚くべき巧妙さで泥路を歩き廻る。

買つても、昔の従つても乃至は誤と思つて居たのかしら。若しこの村には八十國の人口取締がある事などは、何處か遠い外國のことゝでも思つてゐるらしい。

妙のことからニューヨークの話がとんだ脱線をして終つた。

×　　×　　×

ニューヨークへ行つた外國人は口を揃へて同地に名所舊蹟が鮮ないといつて、矢張新開地だから、植民地だから爭はれぬなどと貶す。歐羅巴で暫の旅行を續けて來た日本人ですら、ニューヨークの詰らなさを兎や角いふ。然し米國は未だ曾て彼等の歴史を偽つたことがない筈である。素と和蘭の植民地であり、次で英國の植民地であつたことを隱し立したことはなかつた筈である。夫れにも拘らず、ニューヨークをそんな風に罵る人達は、米國の歴史の短かいといふ事實を故意に忘れて、難癖つける旋毛曲りか、さもなくば救ひ難い沒趣漢に相違ない。

言ふ迄もなく現在のアメリカ人はもと〳〵土地生え抜きのものではなく、歐洲やどこやらからの渡來人である。其點我々の日本だつて同じことだ。唯我に二千五百年の歴史があり、彼に三百年そこ〳〵の歴史しかないといふ相違に止まる。だがそれすらも悠々久遠の大宇宙から見れば、高が一斷違ふか違はぬだけの話、栗粒一つ多いか少いかの問題に過ぎぬ。

ニューヨークの開發といふと大袈裟だが、同地に初めて白人種が其足跡を印したのは、一六〇九年に英國人ヘンリー・ハドソンが半月號で北航、今のハドソン河口に到着し、本島附近の島即ちマンハッタン島に上陸した時である。一六〇九年といへば日本の慶長十四年、徳川二代將軍秀忠の時代にあたる。

それから數年經つて、和蘭人アドリアン・ブロックがインデアンと毛皮貿易の爲めに、タイガア號でやつて來たが、其乘船が燒失したので、上陸して今のブロードウヰイ四十一番地の近所に數棟の假小舍を建てた。これがニューヨークに白人種の住んだ最初の記録である。其處は夫以來和蘭人の毛皮貿易の中心地となつた。今も其邊でブロードウヰイと交差してゐる町にビーヴアといふのがあるが、これは當時取引された毛皮が凡て海狸の皮であつたところから來てゐる。

このビーヴア町を初め、ニューヨークの處々や町名に、當時の歴史を偲ばしめるものが澤山ある。有名なウオール街は、一六五二年に和蘭人がインデアンや近隣の植民地人種の襲撃に備へるために、砦を築造した處である。いま寶石商の多いメードン・レーン――あそこあたりには美しい芝生が在つたのであらう。又あの税關前の掌の様な狹い小公園のボーリン・グリーンは、昔市民が球轉ばしをやつた跡だと謂ふ。私は曾てポムペイ廢墟の風呂屋の中庭に、球轉ばしに使つたと謂はれる大きな石の球を見たことがあるが、して見るとこの遊戲は二千年の昔から在つたものと見える。

それからマンハッタン島の南端、ハドソン河がニューヨーク灣に注

ぐ雄大な景色を前にバタリー公園がある。此處に一六九二年の英領時代に、佛蘭西艦隊の來攻に對する砲壘が築かれたものである。恁うした町名、地名の由來は、恰度東京の銀座、入船町、傳馬町、八重洲町などといふのと軌を一にする。太田道灌の江戸築城と、ニューヨークへハドソンが初めて著いた時を比べると、後者が百二三十年も新しい。從つて『江戸から東京へ』だけの史蹟は無論ないとしても、ニューヨークはまたニューヨークに相應した、幾多史興を盜くものを持合はせてゐようといふものだ。

―（ニューヨーク）―

ニューヨークがほんとに白人種のニューヨークとなつたのは一六二六年（寛永三年）である。即ちこの年に和蘭西印度商會は北米大陸に於ける植民政策確立のため、新世界に於ける最初の統治者ピーター・ミニユエットの手を經て、土著民アメリカン・インデアンから價格六十ギルダー（米貨約廿四弗）に相當する詰らぬ物品と交換でマンハッタン島を得たのである。そして其植民地を祖國の首都に因んでニューアムステルダムと名づけた。其頃は木皮で葺いた粗末な家屋が三十軒、住民は僅か二百名に過ぎなかつたといふ。

ニューアムステルダムは其後一六六四年、英王チャールス二世の臣

七八八年北米合衆國の獨立が成つてからは
ユーヨーク」となり、今日でも矢張無限に變化し、進展し、膨脹する「新しいニューヨーク」であるのである。

三百年前僅か二十四弗で買ひとられたマンハッタン島は、一九二六年の調査に據ると、その地價のみで七十一億五千四百五十四萬弗といふ莫大なものであるさうだが、この驚異に値する富を致したアメリカ人の努力もさることながら、彼等が如何に宿命的にマモン大神の庇護恩惠に浴してゐるかはこれでも想像出來よう。

×　×　×

ニューヨークの象徴は、何といつてもあの摩天樓閣と、ニューヨーク灣頭の自由女神像であらねばならぬ。人類は如何なる國に於ても、如何なる時代に於ても、完全な自由といふものは持たなかつた筈である。其未だ得ざる自由の與へるといふ假想の幸福に憧憬れて、これを偶像に祀り上げる。私は屢々バタリー公園に立つて、遥かベドロー島上、右手に炬火を高く捧げた自由女神像――あの皮肉な人類の大きな幻影の象徴を眺めたことである。オー・ヘンリーの短篇『高きにある女性』ここの「自由た人」の

[illegible]であるこの他のアメリカの混成民族は[illegible]。たとへば伊太利人は羅馬への憧憬にあたつて、希臘人はアポロ、ヴィナスの神話を、北歐人はその自慢のサガを、愛蘭人はゲール民族の慘しい傳說を後に取殘して來たのである。そして新しい世界の高天ヶ原に、彼等自身の神話を打建てようといふのである。尤も彼等がやつて來る前に既に神樣がゐたとすれば、それはニューヨーク灣頭の自由女神たゞ一柱であることは確かだ。他の神々は果してまだ生れてゐないのであらうか？

恁うした移住民達の新神話創造の意氣込はブランダー・マシュースの小說『明日の自信』の主人公フランク・サルテーンの言葉に見られる。サルテーンは其心願の國米國に着いた夜、ニュージャーシイ側からニューヨークへ渡る船の上から、赤々と星華の如く輝くニューヨークの街の灯を眺めて、武者振ひしながら『これからお前を征服するか、それとも戰ひに倒れるか、どつちかだ！』と叫んだのだ。

あゝ勇敢なアメリカ民族の卵！　彼等は建設の前の破壞のため、彼等の祖先傳來の傳統を惜氣もなくさらりとかなぐり捨てて來たのである。そして先づ古い傳統を破棄して、更に新しい傳統を築かんとし、血に流れてゐる神話を捨てて新しい神話の創造にとりかゝつたのである。彼等の新しい神話の神々は何であらうか。マモン神族か、それともマルス神族か……私は豫言を差控へよう。

この無傳統、文化的系圖を一切有たぬ[illegible]民族の大都會ニューヨークは、[illegible]ニューヨークはもとからコスモポリタンの都會だつたことは[illegible]地が和蘭領で人口四、五百の時分ですら、既に十八箇國語が使はれてゐた事實でも知れよう。現在のニューヨークには實に六十何箇國の人種が住んでゐて、伊太利人町、猶太人町、アルメニア人町、支那人町、黑人町などと、同人種集合の町が諸方に散在してゐる。一九二六年の市當局の調査では人口六百三十六萬千六百。それがマンハッタン、ブロンクス、ブルクリン、クヰーンス、リッチモンドの五區、三百二十平方哩の土地に蜂窩を營んで住んでゐる。そのうち約二割強が純米人系で、あとの八割は外來移民及其子孫又は黑人である。

五、六年前日本へも來たことのあるジュリアン・ストリートといふニューヨーク生れの小說家は『ニューヨークのアメリカ人は、希臘人や、伊太利人や、露西亞人や、愛蘭人や、佛蘭西人や、瑞西人たちから散々な目に會はされてゐる。然し乍らアメリカ人は誇ふべき一個の事館も有してゐない。詰り虐められ損である』とこぼしたことがある。當らずとも遠からずである。

×　×　×

このアメリカの代表的大都會ニューヨークの表通りがブロードウヰイである。そしてニューヨークの代表的詩人ホヰットマン、ウオルト・ホヰットマン、一つの宇宙だ、生粹のマンハッタン兒[illegible]と揚言した彼にブロードウヰイを歌つた詩が[illegible]

次に別離するとしやう。
日夜のけぢめもない、何といふ躁狂た人間の潮の満干！
何といふ情熱、何といふ輝麗、それから熱心さが汝の流れを泳いで
ゐることか！
何といふ悪と幸福と悲哀の旋轉が汝を阻んでゐることか！
何といふ不思議な、意味ありげな秋波だ——それは愛の内光だ！
秋波と嫉妬と、嘲笑と侮蔑と、希望と抱負と！
汝の大奮闘——汝の競技場——無邊際に長く描かれた線と集團を有
つ汝！
（汝の舗石、町の曲り角、正面のみが、彼等の比類なき物語を語るこ
とが出來るのだ、
汝の華やかな窓々から、宏壯なホテルの數々——汝の廣い舗道）
軒々と滑べりゆくもの、あるいは小刻みに、あるいは引摺つてゆく無數
の足の汝！
汝は歡樂の世界そのものの如く——永遠無久なる、充ち群がるせゝ
ら笑ひの人生そのもののやうだ！

…、直ちに以て今日のブロードウヰイの[illegible]る。

日本人で恐らく最初にニユーヨークの地を踏んだのは萬延元年日本の遣米使節の一行であらう。一八六〇年ワシントンから同地に到着し、ブロードウヰイを米國の儀衞兵に護られて、堂々たる大行列をやつた使節中の副使村垣淡路守はその手記に『當地は合衆國第一の都會なれば、繋泊船も夥しく、繁榮の地と見えて……人家も稠密にして家屋美なり、云々』と記してゐる。

ブロードウヰイの繁華はサツカレーから激賞され、キツプリングから罵倒された。キツプリングは人類の渦巻かへる雜踏の町を見て『アメリカ人は野蠻人だ、異教徒だ』といつた。そもそも印度の森林からとび出し、あの息づまるやうな行儀のよい英國で成長した彼が、世界に比類のない殷盛なブロードウヰイを眺めて嘲罵を浴びせたのは無理もない。一體このキツプリングだが、さすがに血は爭はれぬものだ、揺籃の國に生ひ立つても、根強い排他的なアングロ、サクソン民族の特性を暴露して『東は東、西は西』などといふ大分前から日本人のレツテル

[illegible]の実際に[illegible]てゐる[illegible]な眼を開かせることだらう。

× × ×

話は[illegible]アメリカ是々非々、ニューヨーク是々非々の問題を中心に堂々巡りをやつた形になつたが、最後にニューヨークの名所一二について書いて見よう。

これは特に文學趣味のある人のことだが、ニューヨークへ行つて是非訪ねなければならぬ處に、フオダムに在る詩人アラン・ポオの舊居と、ニューヨークのクオター・ラタンといはれてゐるグリンヰッチ・ヴイレージとがある。

フオダムにあるポオの小舍は、ポオが一八四六年の春から同四九年七月まで若き病妻ヴアジニアと彼女の母クレム夫人の三人で住んでゐた所である。もとはキングスブリッヂ・ロードのフオダムの丘の上にあつたものだが、拾數年前、ニューヨーク州で詩人の舊居保存のため拾萬弗を支出し、今のポオ公園の地を買入れ、小舍を同公園に移した。ブロンクス公園行の高架線に乘つて、公園停車場より一つ手前のフオダム・ロード停留場で下車すれば、徒歩五六町で直ぐ達せられる。いまの公園はフオダム公園を改稱したものだが、今もつて舊名を呼ぶ者が多く、ポオ・パークの名は甚だ知られてゐない。公園の附近は甚だ散文的で、アパートメントが立並んでゐる。そのうちに一軒ポオ・アパートメントといふのがある。

[illegible]てゐる。[illegible]ポーチであり、[illegible]小食堂である。[illegible]にはポオが[illegible]たといふ[illegible]があり、小寝室にはヴアジニアが[illegible]だといふ寝台が置いてある。他に半二階にポオの居間と號る小さな寝室とがある。ポオがこの小屋を借れるやうになつたのは、ポオのことから彼の出版屋と詩をかくイングリッシュといふ醫師との間に訴訟が起り、本屋の方が敗訴となつて、可成の賠償金がとれたので、そのうち二百廿五弗をポオに與へた。ポオはそれまで病妻と下宿を轉々したが、自分達の家庭を持ちたく思つてゐた矢先、思はぬ金が入つたので、借家をすることにし、遂にこの家を見つけたのであつた。家賃は月五弗だつたといふ。その頃は實に邊鄙な處で、ニューヨークの中心までは七八哩はあつたであらう。そこを金のない時ポオは原稿を持つて歩いて行つたものだ。いくらポオが書いても働いても親子三人の充分な生活費はなかつた。食べる物の全くない時などは、クレム夫人は屋前の雜草を摘んで煮てたべたといふ。寒さと飢で病が昂進して、ひどく咳入るヴアジニアを暖めるために、飼つてる大きな黒猫を抱かせたり、ポオが兵學校時代の大外套をかけてやつたりしたといふ。だが生前不遇薄倖だつたポオの天才の光は、いまや世界に輝いてゐる。彼は實にこれアメリカの國寶である。

× × ×

今のグリーンキッチ・ヴイレージは一寸表から覗いたのでは、風變りな妙な名前のカフエや、氣の好いた古本屋や美術品を賣る小店があるだけだが、あれで前世紀の中葉から現代へかけてのニューヨーク居住の文學者、美術家達の生活、それから彼等の作品を知つてゐると、ワシントン公園を中心としたあの邊一帶、所謂グリーンキッチ村が、いかに興味深い文學的名所に富んでゐるかを發見する。

ワシントン公園の北側は昔から富豪の邸宅が並んでゐるが、そこがいろんな小說の主人公の住居となつてゐるのも面白く、ヘンリー・ジエームスの或る作品などもその一つである。いま高架線の通つてゐる第六街のウエーヴアレー・プレースに一八三七年にポオが住んでゐた。そこで彼の傑作『アッシヤー家の沒落』が書かれた。矢張其附近のクリストフア街には、英國詩人メースフイルドが未だ船員をやつたりしてゐた放浪時代に、一時働いてゐた酒場がある。

「虎」のクレマンソオも一八六〇年代、ニューヨークのこの界隈で佛蘭西語の教師などしてぶら〳〵してゐたものだ。今はもうないがワシントン公園の南、ブロードウヰイとブレーカー街には獨逸人プフアフの經營してゐた有名た地下室のビーア・ホールがあつた。一八六〇年前後ホイットマン、ステッドマン、ホーヰルズ、マーク・トウヰン、ウヰリアム・ウインタースたどいふ人達が毎日のやうに出入した所である。

これらは孰れも昔の話であるが、いまでもこのグリーンキッチ村で、現代米國文壇の花形連、オニール、メンケン、ネーザン、アンダスン其他大小の詩人、文學者の姿を見受けることは珍しいことではない。何といつても此處はニューヨークでは見逃がせない名所の一つであらう。（終）

ニューヨークの娯樂圏

佐々木指月

巨大な富はいつも興味の目をもつて眺められる。だが若しそれが、美しく魅力に富んだ若い女のものだとしたら、その富は二倍の興味をもつて眺められるにちがひない。なぜなら、その女だけの富をもつて、何をやり出すか、誰にも分つたものでないからである。

ニユーヨークは[illegible]P[illegible]るメリーウイドーだ。かの女は[illegible]に[illegible]はどんなものかと云ふことを知つてゐる。さうしてかの女は今では自由な[illegible]のなかに放たれた自由の焔火に燃える自由なパッション。それにそゝぐに盡きることなきその富。モダン バビロンは、巴里の如く金で買ふことの出來る女ではない。かの女は金でこの地上にはないものまで買はうとしてゐるのだ。

宵に、好きな男を買つて、翌朝はその男を、ガーベーヂへ入れて、ダムウエイターで送り出す。それはかの女には平凡きはまるスポートなのだ。富のメリーウイドーのする遊戯は、すべて罪惡と云ふ名稱からはぶかれる。それはすべて Innocent の一字のうちに含まれてしまう。

ニユーヨークのブロードウェイ――そこは東京の銀座と淺草をごつちやにしたやうなところだと云つたら、では、賑かな、面白いところだと云ふ想像がつくであらう。しかしブロードウェイといつても背はなかなかロングウエイであつて、南のはづれの海岸のバッタリーから、北のはづれのヨンカースの二百六十二丁目まで、ざつと十五哩ほどもある。その長い間がすべて銀座と淺草のコンビネーションかと云ふと、決してさう云ふわけではない。世界に名だたるブロードウェイとは、四十三丁目のタイムススコエアから、五十七丁目までの、十四五ブラックの間のことだ。その十四五ブラックは、眞ッ直ぐなセヴンス[illegible]に狭いストリートがあつて、それがセヴンスアヴェニュー[illegible]る。そこは丁度三角形をした一區域で、この一區劃には、このパッショネートなメリーウイドーの、アミューズメントセンターである。

百聞一見にしかずとは、お上りさんが振り廻はす唯一の言葉であるが、このアミューズメントセンタアだけは、一見したばかりでは、さつぱり樣子がわからない。ブロードウェイを一見した人の印象はどんなものかと云へば、只もう恐ろしい人混である。劇場のポスターの杜である。そこのイルミネーションの天の川である。オートモビルの[illegible]地獄である。追ひ立てられるレストランと、喉ッぱいアイスクリームと、汗だくのカラー、カフスと、それから頭痛と、それから鼻血と、それだけのことである。何が面白いのだか、どこに面白いものがあるのだか、さつぱりわからない。どこもこゝもシーツ賣り切れの劇場ばかりで、お上りさんはテケツガールの愛想のない顏でものぞいて歸つてくるぐらゐなところが落ちである。

『どうだつたね、夕べ、ブロードウェイを見物して少しは面白かつたかね？』『ねつから面白くなかつた。』『そんなはずはないわけだ、面白いところが見つからなかつたらう？』『別にどうも、これは[illegible]ヨークの暗黒面の象徴だといふやうなものも見當らなかつ[illegible]が、ある藥劑店の前へ立つて、ショーウインドのなかの[illegible]このクラークが出て來て、早く行つ[illegible]しよ[illegible]、

云つたよ。「やられたね、なにがそこに並べてあつたね？」脱脂綿だのガーゼの巻いたのだの、それから赤いゴムで出来てゐる色々なものが並べてあつたよ。」「さうだらう。あれはみんな男の用ひるものではないのだ。あんなものを、君、立つて見てゐると色情狂だと思はれるよ。そんな物騒な男が見世の前に立つてゐては、女の客は気味悪るがつて這入るも出るも出来ないさ。だから君、追ひ立てられたんだよ。」『そんなら何も麗々しくあんなものを並べて置くには及ばないじやないか？』「それを並べなければ薬剤店がはやらないのだ。」ブロードウエイの眞ン中でもかい。」「さうだ。すべて、あれに、関係をもつたものなら、消毒薬でも、殺菌剤でも、何んでも、かんでも、お好みのものがあると云ふ、あれはそのしるしなんだ。君の所謂ニューヨークの暗黒面の、あれが即ち象徴なんだ。」「これは恐れ入つた。いやに通をきかせるじやないか？」「いや、決してさう云ふわけではない。暗黒面の象徴は、明るいランプのついてゐるショーウインドのプレートガラスのなかにあるのさ。しかし、ニューヨークのブライトサイド——明るい半面を見やらうと思つたら、フエフスアヴエニューあたりの、チヤーチの暗いドームのなかを覗かなければならない。明る、

二四百五十萬弗といはれてゐる。それはどう云ふ計算だと
と晩のうちに、ここのヘーヴへあつまる人が、三十萬人ほどあつて、それが一人で平均十五弗宛の金を使ふと見て、さう云ふことになるのださうだが、ボクなぞはいつあそこを通つても、自動車代のニックルよりほか使つたことはなかつた。たまに劇場へ行くとしても、一弗よりほか使つたことはなかつた。帰りに、十セントのコーヒーに、廿五セントのハットケーキ、廿五セントの煙草を買つて、ウエートレスにテンセンツのチップをやるくらゐなものであるが、それでも一弗と七十セントはかゝる。尤もそれは極くしみッたれなところだが、若しも君が、ジーグフエルドの美人林の所謂The feast for the eyesを享楽しやうと思つて、ニューアムスターダムあたりのレザーヴドシーツを買へば、それだけでも十弗は消えるのだし、ことに、そのシーツの数が、そこにだけでも四百五十八もあると云ふに、それが毎晩売り切れになるところを見ると、平均十五弗とは、まだ、うちわに見積つてゐるのであらう？ホテルへ落ちる金、キヤバレーへ落ちる金、ナイトクラブへ落ちる金が、その四百五十萬弗のなかに、含まれてゐるのだ

か、つて[illegible]ベチュ[illegible]、昨日の[illegible]時に、[illegible]に[illegible]ないか
もしれない。なにしろそれに普通の[illegible]ではないのである。

たとへば、あすこのナイトクラブのありさまをさつと描寫して見やうか？ ナイトクラブは勿論昼間のものではない。と云つて夜のブロードウエイの眞ん中を往つたり來たり歩いて見ても見つからうわけはない。最も流行するナイト倶樂部は、ブロードウエイを一寸右に少し這入つたストリートの穴藏のやうなビルデングや、またはギヤラーヂの跡や、さうしたがらんどうな家のなかにあつて、その入口は、きまつて、洗濯屋や、倉庫や、小さな見世屋なぞのわきに一寸ついてゐる。家賃はなにしろさういふところは安いのだし、そこへお上りさんなどが、まぎれ込んで、使はせられるのられないのツて、まるであれでは金をただで取られてしまうやうなものだ。それでお上りさんは、とても難有がつてゐるのだからお話にならない。先づ儲かる商賣と云へば、今日のニューヨークであれに越したものはあるまい。そのかはり法律からは、始終睨まれてゐるのだから、そのナイト倶樂部の持主は、よほど、すばしこく立ちまはらなければならない。

日本には、かうした種類のものはないから、そこの空氣を想像することは、そこを見ずには餘程むづかしからう？ しかもこのナイト倶樂部といふものは、最近ひよツこり流行しだしたものであるから、これを説明することもまた面倒だ。今から考へると、それは殆んど十年[illegible]
ふやうな[illegible]つた[illegible]
させるのたが、安い[illegible]に[illegible]れた[illegible]
ぶれは、大方さまつてゐて、またか[illegible]は來ないにしても、いつもピストルをかくしてゐる暴力團の團長とか、博徒の親分とか、女ならば賣笑婦の情夫、時間相當間男などといつたやうな手合で、そこで交はされる會話が既に尋常な會話ではなかつた。かうした血なまぐさい人間のバチルスが呼吸する一種の空氣は、同じやうな地下室から這入れたリズムの音樂ジヤズの低鎔の音色とともに、近々に所謂ゴールドコーストに住む人々の生活のなかへ混りこんだ。成金の百萬長者街パークアヴエニュー、あの通をニューヨークの Gold Coast といふのであるが、騒い議論のトラフイツクは、通行を止められてゐるあの通の、飾り立てたアパートメントの生活に響いたジヤズ。それはやがて、ブロードウエイの、新しい意味でのリングサイドのテーブルの間に、華やかなシフオンの錯覺となり、タキシードの嘲傷となり、さうしてそれに融はれたマレヴランドな血の花となつて開いたが、それが即ちこのミツドナイトクラブである。

ブロードウエイに限らず、今日のニューヨークの娯樂場とそこの享樂の心理とを覗かうと思ふのには、どうしてもこの、以前のアンダーヲールドのリングサイドの地下室と、今の眩惑を感じさせられる金ピカのナイト倶樂部とが、同じリズムと、同じ空氣の展開であるといふ

ことを知らなければならない。さもなければ、今日のニユーヨーカーが、何を樂み、何を遂つてゐるかといふことはわからないであらう？と、まア、ボクに云はせて置き給へ。まんざらうそぢやアないんだから。

先づ輪廓はこのくらゐにして置いて、さてこのナイトクラブへ來た人たちは、その一夜をどうして暮すか？ 何がそんなに面白くてここへ來るのか？ それを少し書いて見よう。とにかくこのナイトクラプ——それもたくさんあるにはあるが、四十二丁目の The Jazz Flutes あたりで一晩明かすつもりだと、ニユーヨークで響いてゐる大抵な人の顔を見ることが出來る。のみならず音に聞いた美人と話をすることも出來ないとは限らない。劇場やスクリンのスター、お乳の美人若いヴアイオラ・ゴーリングや、フラツパーの標本クララ・ボーや、淋しいムードのリリアン・ギツシと、思ひがけなくテーブルを隣り合せて掛けないとも限らない。何もきまりを惡がるに及ばない。『ヘロー、リリアンさん！』とか、『ヘロー、ボーちやん！』とか聲をかけて見給へ、向ふではきつと華やかな微笑を向けて、君の生涯の印象に、かの女のそのグリテングの烙印を押してくれるから。

れる。それは、ストリートで飲めば十五セントか五十セン
だ。しかもそれは、誰もついでくれるのではない。一人でついで飲まなければならない。けれどもそれが本物のワインでも飲んでゐるやうに見えて、それがなんだか法律でも犯してゐるやうに見えて、空氣にどうも、蒸い感じがするのである。

尤もそこではなにも飲み食ひしないでも、席料と云ふものがとられる。それを Cover charge と云ふのであるが、Reuben とか、今も話した The Jazz Flutes あたりへ行くと、十弗はそのために拂はなければならない。さうして、脚の揃はぬ、がたぴしするテーブルを抱へて、その上で安全剃刀の刃のやうなぺかぺかのサンドイッチ——それが一弗と廿五センツもするやつをしやぶつて、ストリートで買へば十セントの卷煙草に三十セン拂つて、それを賣りに來るガールに廿五セントのテツプをやつて、しかも自分のふかした煙草の煙は人の鼻に吸はれて、自分は人のふかした煙草を吸はねばならぬ。煙草の煙と女の臭氣で噎えたナイトクラブの空氣。そこへ、そこのホーステス、女主人に紹介されて、現はれたのが、ハーノー何んとか云ふ婦人

には、さすがの日本にもまだないやうだ。これを見ても日本の詩人に、くすぶつてゐると云ふことがわかる——これはおまけだ。

ナイト倶樂部の話をこまかく書いてゐたのでは一と晩書いても書ききれない。しかしこのナイトクラブの空氣と、そのムードを知れば、あとはもうキアバレーにしろ、カフェにしろ大抵同じことである。それも、ぼつ〱書くとしやうが、ボクがこゝで、どうしても云はして貰はなければならないことは、なぜさうした、ざつくばらん、むき出し、無禮講みたやうなところへ、さうした途方もないハイカラな人たちがあつまつて、そこへまたお上りさんが途方もない金をとられに來るのであらうか？　それはなる程、ゴールドコーストの生活に倦きた人々が、イーストサイドのリングセラーの生活に興味を感じて、或はまた以前のそれを戀ひしがつて、ブロードウエイのまんなかへ、それを引ッ張り出したのかも知れない。いやさうである。尤もこれは、日本のブルジョアが、米久のコマギレとしやれる心理とは、全く同じものではないが、何しろそこに現代のアメリカンの逐ひまはしてゐる或るものの姿が見えるのである。そこにニューヨークがある。それゆえにニューヨークのスカイスクレーパーは段々高くなる。ニューヨークのガールたちのスカーツは段々短かくなる。ニューヨークの現實は段段ファンタシテイックになる。ニューヨークは地上の束縛から空氣のなかに飛び上らうとしてゐるのだ。ノンセンスと、インノーセントの翅で飛ばうメリーウイドー、しかしかの女のゴールドサイキはあんまり贅すぎる。

露と、セメントと、不安と、ギャスリンと、倦怠と、スイプファイテングのニューヨークは、花と云へば窓際のベコニヤ、自轉車と云へば、大衆の脚ぐらゐなもので人間はいつも生活のつんだ大衆の群から逃れることは出來ない。それだからこそ、ノンセンスだ、インノーセントだ、ファンタシテイックだ。それらのものから人々は取り持たれ、樂しまされ、面白い印象を與へられて、しばらくの間でも自我を忘れ去らうとする。だからそれの對象は第一に活動寫眞だ——なんと云つても今日の人間の自我忘却は、活動寫眞によつて與へられることが、最も手近で、さうして最も安直な方法であらう？　現實からのエスケープは、ニューヨークのまんなかでも、活動寫眞のエクスタシーから見出される。エクスタシーと云ふ言葉もかういふところへ使はれては泣き出すかも知れないが、現實の單調からのエスケープは、先づそこから始められる。遠い西のキヤメラの都のハリーウッド。そこの生活は、このニューヨークに住む人の生活に代つて、現實からのエスケープをやつてゐてくれるんだ。銀色のスクリンの上に出て來るクララ・ボーちやん！　パーラマウント映畫會社が、かの女をスターにする前には、かの女は善良なステノにならうとしてゐたんだ。メリー・ブライアンは工場の畫家だつたとか、クリープ・ブルックは世界大戰當時の本當の勇士だつたとか、いやかれはロンドンで新聞記者をしてゐたとか、それがやはり現實からの逃走の意味をもつて語られる。

きのスクリンスターは、ハリーウッドにも、たつた二人で、それはベベ・ダニエルスと、エステル・ラルストンばかりだ。ベービー・ペギーは今ではニユーヨークのステーヂに出てゐるなぞと、この三人はもう最初から地上で産れたものではない如くに思はれて、それがいかにも樂しい夢を見つゞけてゐる人たちかなにかのやうに、その物語は人人の耳に喜ばれる。だからニユーヨークの人の心を、ぞつとさせる娛樂のクライマックスは、凡ての現實からの逃走だ。ノンセンス、インノーセント、フラップドードル、フリムフラム、ミツドナイト倶樂部のドンチヤン騷ぎだ。

日本のチヤンバラも、たしかにこの種類の心理の産物であるに違ひないが、たゞそれが日本のは、いやに屁理窟がこびりついてゐるが、ニユーヨークのはまるで理窟に合つてゐない。ハリーウッドのプロダクシヨンも、日本で喜ばれるのは、ニユーヨークでは喜ばれない。日本ではあらゆるハッピーエンデングは嫌はれるが、ニユーヨークでは、どんな無理をこじつけても、あらゆるフイルムはハッピーエンデングにしないと、人々がいやがる。ジヤズ、チヤーレストンのフラツピングなあのリズムが、なぜアメリカで産れたかは、これによつて考へてもわかることだ。銀座を通つて放送のジヤズをきくと、ジヤズは泣いてゐるがブロードウエイのナイトクラブでジヤズをきくと、世界中が踊り出す。ナイトクラブの存在の理由はこれだ。

ニユーヨークの劇場のフートライトやスポツトライトに照らされる人々の話をこゝでしてゐるわけには行かない。またそのパフオーマンセスの話をしてゐるページもない。さうさなア！ ヒツポドロムの舞臺の上で、曲馬の馬が馬糞をしたら、ある女が淑女を侮辱したと云つて訴へたといふ話は、あんまり馬鹿氣てゐやう。ボーレスクの美人のはだか踊りを、舞臺に近いシーツから、オペラグラスで覗いて叱られるお上りさんの話も古からう。ヴオデヴイルの全く輕い一と幕物——ミツドナイトショー——それは夜の十一時半頃からはじまる——たとへば隨分笑はせる『女ばかりの土耳古風呂の晩』のやうなもの、こいつは書けば長くなる。こまつたなア！待ち給へ！さう〳〵、とても、のん氣なものがある。それは、トピックソングスと云ふものだ。映畫とヴオデヴイルを一緒に見せる劇場で、たとへばマジエステックのやうなところ、一弗から三弗半ぐらゐで見られるやうなところへ行くと、映畫の幕合ひにその日〳〵の出來事なぞが、うたに作られて、それがスクリンの上に映し出される。さうしてオーケストラがそれに合はして、ゆつくりとしたメロデーを吹奏する。二度もそのメロデーをくり返へせば、客たちはそれを覺えて、一度にうたひ出す。さうしてスクリン一ぱいに映つてゐるそれを終りまでうたつて行く。終りが來ると客たちは拍手して、またはじめからオーケストラの吹奏をくり返すべく催促する。そのうたが、また全く愚にもつかないのだが、誰もかれも、みんな口あいて一度にそれをうたふところは、まさに文化の悲劇であると云はねばならぬ。あゝもして、少しの間でも現實から逃

れたいか？

キャバレーとは何んだらうか？（[illegible]）とは、ハイカラなレストランのことであるといつてしまへばそれでおしまいだが、どのくらゐハイカラなのだか、それをざつと話して見やう。

入口で外套と帽子をあづかる。出る時に少なくとも廿五センツのテップをやらぬと、どんな赤恥をかゝせられるかもしれぬ。かういふところでテップを出すのは、つまり恥の保護をするのだ。カバーチャーチはところによつて違ふけれども、ロングエーカースコエヤの――これはブロードウエイと、四十七丁目と、セヴンスアヴェニューの交叉點に當るのだが、そこのプリユーランタンあたりへ行くと、五弗はおきまりだ。ナイトクラブのよりは安い。厚いカーペットの上で、がたりともしないテーブルの上で、御馳走をたべながら、美人の踊りを見ることが出來る。その美人も一人や二人ではない。廿人三十人と數へるのに目もくらむ程な美人が風車のやうに踊る。いづれも裸體ですよ――と云ひたいが少しは何か着てゐる。それからまた君等のゐるテーブルの傍へは肩から赤い紐を結んで、前に淺い箱をかけたガールスが、殆んど裸體で、シガレットを賣りに來る。そのガールがどうかすれば、蝶々のやうにテーブルへ飛び上つて、、、、、げて見せてくれる。オペラグラスはいらない。尤もそれはテップ次第だ。美人の踊りの合ひ間には、客たちがテーブルを離れて、自分たちの連れて來た女を抱いてダンスする。一人で行つた男なぞはきまりが惡くてしやうが[illegible]

[illegible]を待つと云ふことはない。つまり、男を待つてゐるのだ。[illegible]

「いや、先夜は失禮しました」とか何んとか、通りかゝりのやうな顔で話しかけると、「あら、いついらしつたの、あたい少しも知らなかつたわ、こゝへお掛けなさいよ。一緒に何か食べましやう」と、まるで前からの知り合ひのやうに、ぱつを合はしてくれる。かうなればしめたもので、それから一緒にダンスでもして、それから話の進めやうで、歸りにはホテルへなりどこへなり、勝手なところへお出なさい。その先はどうすればいゝか？　それはこゝで書いて教へて上るわけには行かない。

つまりキャバレーは美人林料理店で、しかもダンスホールで、しかもその高級のコーテザンスの出沒するところである。上品なことはナイトクラブよりも上品だが、下品なことはナイトクラブよりも下品だ。この謎がわかつたら、君等もまた一人の Broadwayite だ。

しかし、ニユーヨークの娛樂區域は何もそのブロードウエイに限りはしない。ブロードウエイから、バスに乘つて四十丁ほど下街へ來ると、そこに Greenwich Village といふところがある。つまりグリニツチ村だ。村といつても何も畠があるわけではないが、さうして空地があるわけでもないが、こゝはニユーヨークのロマンテイックスタートと云はれてゐるところで、アメリカの[illegible]、

う云ふ話をはじめると、とても說明に手間がかゝるが、巴里あたりから渡つて來た美術家たちが、こゝでかれらのアメリカでのボヘミアンライフをはじめた。ろくに働かずに、一生獨身で、自由戀愛をやつて、死ぬときには醉つぱらつて、往來でのたれて死ぬ。これが即ちボヘミーの生活だ。ニューヨークがまだダッチタウンと呼ばれてゐた昔から、こゝにはフレンチコロニーがあつたので、今でもこのグリニッチヴイレッヂには古くフランス人が住んでゐる。したがつて、ピユリタンのヤンキーのニューヨークのなかで、こゝの空氣だけは一寸違つてゐたものである。つまりこゝは昔からアーテストの巣であつた。セコンドアヴェニューの地下鐵のリングサイドの空氣から、ナイト倶樂部が離れたとすれば、このヴイレッヂの藝術の空氣から、テールームなるものが離れたと云つて差し支へなからう。

今ではニューヨーク到るところにテールームなるものがある。しかし、そこのムードは、やはりボヘミーの系統をひいてゐることは爭へない。先づ試みに、セントラルパークイースト六十丁目東入りのヴイレッヂストアといふテールームあたりへ行つて見ると、そこの空氣は外のレストランなぞとはまるで違ふ。なんとなくアーテステックで、[illegible]

茶をついで出す。ドラマの話[illegible]り込められてしまう。コロナの小型のタイプライターを用ひ[illegible]て、お客のゐない時には詩でも作つてゐやうと云ふのだから、そのお上品なことは押して知るべしだ。ところが、二度行つても三度行つても同じ話しだ。云ふことが型にはまつてゐるのでお座がさめるが、しかしさうしたテールームの女のなかには、天才がゐないとも限らない。そんなのにうつかりテップただをやらうものなら、煙草でも買つてお吸ひなさいと、つき返へされてしまう。尤も、そつと、ソーサの下に忍ばしてくれれば、次に行つたときに、愛想よくしてくれる。だからした女でも、いゝものにならぬとは限らない。

しかし、今日のグリニッチヴイレッヂは、もう亡びた。今ではあすこは、イタリアンの勞働者と、安女郎の巣になつた。家賃が上つてアーテストには住み切れなくなつたからだし、また古風な赤煉瓦のヴイレッヂ風の建物は皆こわされて、新式のアパートメントに換へられた結果である。

電車のなかで、向ふ側に腰かけてゐる美人の顏をいつ迄も見てゐると、その女が[illegible]

は一美人だなと感心しながら、階段を歩いてゐると、あの階下の
のプラットホームへ——あれは地下鐵に乘つてゐた時だつたか、その地下鐵が出つた時に、その女がこちらを睨みつけて立つた。しまつた、と、自分の膝に目をうつして小さくなつてゐると、その女は出て行つてしまつた。失禮なことをしたと恐縮してゐると、誰かが、うしろのプレートガラスをこつ〳〵叩いた。はつと振り向くと、今の美人が、スマイリングでお出で〳〵をしてゐる。しめたと思つて飛び出さうとした時には、もう遲かつた。地下鐵は動きはじめた。

ニューヨークのアミューズメントは、どこにどうころがつてゐないとも限らない。よほど氣をつけてゐないと、千載一遇の好機を逸することがある。

この種の話をしだしたら切れ目はない。とにかくモダンのバビロンと云はれるニューヨークだ。かの女は、うんとこしよと金のあるメリーウイドウだ。君の欲するアミューズメントは、街の角々のタキシメンに訊ねて見給へ。君の行く先を、かれは必ず知つてゐる。

海上大爭議は何を敎へたか

──模範的爭議解決の敎訓的價値──

赤松克麿

一

過般行はれた日本海員組合對船主協會の海上大爭議は、單に近年に於ける代表的大爭議であるばかりでなく、我國勞働運動史上に於て最大の敎訓的價値を含むものとして、我々の深甚なる考察的要求を唆る重大事件であると信ずる。海上大爭議は險惡化を極めた野田大爭議と異つて、呆氣ない程、短期間のうちに、圓滿裡に解決したのであるが、斯くの如き大規模の罷業が、斯くの如き過程を踏んで解決したことは、實に我國空前の出來事であつて、我々は、政府も資本家も勞働組合も、共に此の異常なる事件に對して、愼重なる考察を加ふべき必要のあることを切實に感ずるものである。

私は此の事件の十分なる理解を得るために少しく時間を溯つて説かねばならぬ。

從來我國海員の職業紹介事業は、海員掖濟會といふ團體によつて行はれて來た。此の團體は政府が海運隆昌のため當面の急務であるとして、大正十三年、海員掖濟、海員養成、海員職業紹介等の目的を有する公益慈善團體として作つた半官半民の團體であつた。此の會も創立當初は相當の成績を擧げたが、時日の經過と共に次第に無用の長物化したばかりでなく、資本家の手先となつて勞働條件の低下を圖る結果を生じ、更に勞働組合運動の健實なる發達を沮害する有害的存在となつて來た。ところが大正九年伊太利ゼノアに開かれた第二回國際勞働會議の決定した條約案に依れば、海員の職業紹介事業は、船主及び船員團體の共同機關若くは政府自身が之を經營することになり、我が政府は大正十一年末に至つて此の條約案を批准實施したものである。然るに其後政府は、何故か日本海員組合の存在を無視して、船主の傀儡たる海員掖濟會に毎年五萬六千圓の補助金を與へて、職業紹介事業を行はしめたのである。紛爭の萌芽が玆に頭を出した。

二

海員組合は堪忍袋の緒を切つた。四萬五千の海員を抱擁し、海國の運命を左右する同組合は、一萬の高級船員を有する日本海員協會の援助を得て、過去數年來の懸案たる海員職業紹介權を掖濟會より奪還すべく大正十四年七月上旬より一大運動を起すことになつた。

彼等は全國重要都市に演説會を開いて、一齊に遞信當局の無能と掖濟會の非道を完膚なきまでに攻擊し、若し此の要求が容れられなければ、總罷業を辭せずとの牢乎たる決意を示した。

ところが遞信當局は此の形勢に驚き、急いで省議を決定し、八月二十五日安達遞相は柏崎海員組合長、藤村海員協會理事長等と會見し、組合側の要求通り、掖濟會の職業紹介事

業を禁止せしめ、之を船主及び船員團體共同の機關に經營せしむる旨を聲明するに至つた。海員組合は更に血塗らずして凱歌を擧げた。遞信省は九月二日、海員職業紹介委員會を召集して、その具體案を協議作製せしめたが、海員團體の正論が容れられて、「第二回國際勞働總會の決定した職業紹介所設置に關する條約の趣旨に基き、船主及海員の代表團體をして海事協同會を組織せしめ、政府の監督の下に船員の職業紹介事業を經營せしむる」旨の決議が成立した。

三

かくして海事協同會といふ新團體が生れた。これの構成分子は、日本船主協會、日本海員組合、海員協會の三團體であつて、その事業は、船員の職業紹介、船員の待遇に關する事項の協議決定、船員船主間の爭議の豫防及調停、船員の募集及寄宿舍の經營等である。玆に注意すべきことは、海事協同會の成立は、海員職業紹介權を海員救濟會より奪取したばかりでなく、前述の諸事項に關して、海員組合及び海員協會が、完全なる團體交涉權を獲得した一事である。實に此の一事たるや、我國勞働運動多年の悩みであり而して今日尚ほ其の解決を見ざる所の難問の核心を、最初にそして完全に解決したものであつて、我國勞働運動史上に於ける特筆すべき劃期的事實たるを失はない。今回の海上大爭議の圓滿解決も、その根因を玆に求むることが至當である。

ところが間もなく海事協同會の存在に關して、興味ある論爭が展開された。これを攻擊する者は當時の勞農黨書記長細迫兼光君であり、これを擁護する者は海員組合の庶務部長米窪滿亮君である。細迫君によれば、海事協同會は階級的裏切りの機關であり、米窪君によれば、それは現實主義の一大勝利である。（社會思想第五卷第十一號及第十二號參照）。海事協同會の存在が如何なる意義を有するか、今回の海上大爭議の解決は、此の問題に對して明確なる判決を與へたものと云はねばならぬ。

四

今回の大爭議の中心點は、最低賃銀制の問題に存する。海員の最低賃銀制に關する要求は、既に昭和二年五月に開かれた海員組合第六回定期大會に現はれて居る。同大會に於て最低賃銀制確立の議案を提出した堀主使章氏の說明によれば、米國は成文を以て、英國は慣習を以て、既に此の制度を行ふて居るが、我國には未だ成文慣習共に之を實行して居ない。會社によつて海員の賃銀は千差萬別であるから、是非之を統一して、現在の如き船主の利己的な強制的賃銀制より海員大衆を救ひ、以て彼等の劣惡な生活條件を改善する必要があると云ふのである。しかして總會は滿場一致を以て最低賃銀制の確立を認むる決議文を可決したのである。海員組合は右の決議文を關係政府當局に提出して、法規の制定を促すと共に、一般船主に對しても右制度を船内に確立するやう努力することとなつた。尚ほ同組合は同年十月、海事協同會に右の要求を提出したところ、同會は此の原則を承認して、その實行準備のため本年一月より調査部を設くるに至つた。

其後、此の問題は未解決のまゝ時日を經過したが、海員大衆の間から社外船乘組船員待遇改善問題がやかましくなつて來たので、海員組合は到頭痺れを切らして、本年五月

第七回定期總會に於ては、その態度が著しく硬化し、再び最低賃銀制の確立の決議を可決すると共に、實行方法として「右決議を目下審議されつゝある海事協同會特別委員會及び船主に提出し、四週間の回答期を與へ、その回答の如何によつては斷乎たる處置を取ること」を決定した。尚ほ同總會は、川崎汽船會社の乘組員待遇に關して、一個の強硬なる決議を通過したが、その後會社の態度の不誠意のため、正に罷業が勃發せんとしたところ、漸く會社の讓歩によつて、無事解決を見た。海員組合は意氣益々揚つて最低賃銀制の確立に向つて一路邁進することになつたのである。

五

海事協同會は五月卅一日以來本會議を開いて此の問題を議したが、船主側委員と海員委員側との間には甚しき距離があり、しかも兩者は各自の主張を固持した結果、六月五日夜

全國各港に於ける社外船三百五十隻は完全に罷業狀態に入つて、組合本部は見事な統制振りを發揮した。ところが一方直ちに仲裁委員會（遞信省管船局長を議長として勞資二名宛の委員より成るもの）が開かれ、數次の審議を重ねた結果、大體川崎汽船會社の實施した案を參考として解決の光明を見出し、總罷業は僅か四日間にして九日朝から罷業狀態は解除されることになつた。此の解決案が、噸數別の最低賃銀制に多少の缺點があるにせよ、海員大衆の要求を大體に容れたものであることは明かである。

今回の大爭議に就いて我々の先づ感ずることは、勞資双方の交渉關係の健全性である。前に述べたやうに、海員組合は既に完全なる團體交渉權を獲得して居るので、勞資双方の代表は平等の立場に立つて、正々堂々と最低賃銀制に就いて論爭を交へた。海事協同會に於ける此の

ある。若し資

とすれば、爭議が一個の硬化症に陷つ

にコヂれて來ることは、我國多數の爭議の實證する所である。野田の大爭議の如きは、會社側に計畫的なる組合破壞の陰謀が存在したために、最も惡性なる硬化症に陷つたのであつた。此の點に關して海上大爭議は、我國多數の爭議に見受ける所の不必要なる勞資間の疑心と感情と面目意識とを取り去り、實に重大なる爭議ではあつたが、爭議を包む勞働氣に一個の明るさが漂ふて居た。今日、勞働組合に團體交渉權を與へることは、政府及び資本家の嫌忌しつゝある所であるが、若し政府に多少の聰明さがあるならば、無産大衆の思想惡化を取締るために、數百萬圓の金を投じて高等警察網を充實するよりは、積極的に勞働大衆に團體交渉權を與へることによつて如何に現下の勞働運動から暗鬱性を拭ひ去り得

[illegible]步調を以て發展を續け、[illegible]資本家から勞働組合[illegible]豐と共に協調組合だの裏切り者だのと云つて有ちゆる惡罵を浴びせられつゝ進んで來たのであるが、その來ずる所の英國流の勞働組合主義を堅く取つて動じなかつた。我國の勞働組合が何れも最も弱點とする所の財政狀態に於ても、此の組合は優秀な成績を示し、本年三月末日現在に於て、基本積立金十七萬五千圓、共濟積立金十六萬六千圓を示して居る。彼等が先きに海員掖濟會より海員職業紹介權を奪ひ、同時に完全なる團體交渉權を獲得し、以て堅牢なる陣營を築き、更にその充實した財政と權威ある統制力とに依つて、勞働條件の最大要素たる最低賃銀制の確立を志し、見事に勝利を占めたことは、一面に於て此の組合の指導精神の勝利と云はねばならぬ。今回の爭議に於て、海員組合が郵船と商船の二大勢力を除外した社外船の資本家のみを對手としたことは、その戰術の巧妙を語るものであつて、しかも此等の船主協會が、船舶の種類や航路の長短や船形の大小等によつて利害必しも一致せず、平素から強固なる結束力を示[illegible]

[illegible]と對比するとき、[illegible]の一つを茲に求めることが出來る。野田の大爭議に於て、總同盟として爭議統制力に多少の遺憾の點のあつたことは、今回の海員組合の秩序整然たる統制力に比較して、我々の考慮に値するものがある。

最後に我々の注意を引く點は官憲の公平性である。爭議の際に官憲が資本家側に加擔することによつて、形勢が險惡化されることは珍らしからぬ現象であつて、就中、政黨勢力を背景とする官憲の偏頗政策は最も勞働者側の心理を强烈化させる。先般の岡谷爭議、野田爭議の如きが、政友會の露骨なる資本家支持があつたために、如何に問題を紛糾せしめたかは極めて明瞭な事實である。然るに今回の海上爭議に於ては、珍らしくも官憲の態度は極めて公平であつた。殊に面白いことは、海員組合が二名の勞働側仲裁委員の中に、兵庫縣警察部長井上政信氏を推したことである。警察部長を勞働側委員に推して、資本家委員と協議せしめるが如きは、あまりに放膽振りを發揮したやうでもあるが、結果に於て

[illegible]る思想は、[illegible]所が可成りあつた。船主協會が爭議解決後、政府當局の態度に「甚しき遺憾」を表して居るのは滑稽である。海員組合が最初から一切の秘密主義を排して進み、官憲に對しても凡て爭議內容を開放し、また紛糾狀態に入つても地方線の命令航路だけは之を續行したことなどは官憲の印象を良化するに著しく效果があつたと思はれる。

〰〰〰〰〰〰

左翼政黨運動のこと若干

青野季吉

勞働農民黨が田中反動內閣のために解散を命ぜられてから、もうだいぶ時日がたつた。いつたいその後、勞働農民黨の殘存勢力はどうなつたのか？　一時は『今や全無產階級的政治意識が大衆の間に侵潤し』てゐた筈であつたが、その大衆の高揚された意識はどうなつたのであらうか？

我々は、解散當時『政府が百度び解散を命ずるなら、百度び勞農黨の結社を屆出でるであらう。』と言ふ、悲痛な、多少氣負つた宣言を、黨の幹部の口から發せられたのを憶へ聞いた。

我々は、黨幹部が當局の彈壓に向つて、抗議の演說會を數度、主として東京に開いたことを聞いた。

我々は、黨幹部が、黨の解散の不當を喝らして、政府を相手取つて訴訟を起してゐることを聞いた。

我々は、また、黨幹部が、新黨準備會を結んで、舊勞農黨の再建に努力してゐることを知つてゐる。

だが、我々は、百度びどころか十度の結社の屆出のあつたことを聞かない。我々は『從前よりは一層增進はしてゐても、些かでも減退してゐるものとは絕對的に考へられない』（大山氏の言葉）潜勢力が、反動政府に向つて、それにふさはしい有力さをもつて、抗議したことを聞かない。我々は、また、新黨準備會が、舊黨の再建にたいして、具體的な、力強い一歩を踏み出したことも、これを聞かない。

かくて、勞働農民黨のその後は、いつたいどうなつたのか？と言ふ疑問が、自然に湧いて來る。

○

解散を命ぜられて後の勞働農民黨の第一着にすべき仕事は、舊勢力を離散せしめないことであつた。これは誰にでも分り切つてゐることである。

しかし黨幹部には、それの出來ない、苦しい事情があつた。その事情の一つは、勿論、反動內閣の、、、に近い彈壓であるが、他の一つは、舊黨の主要勢力であつた日本農民組合が、黨解散後、舊黨再建、政黨行動に向つて、極度の消極的態度を示して來たことであつた。これは農民組合としては、止むを得ないことであつた。この二三年來、極政治主義のために引廻されて、組合の存在の危くなるほどまでに、內部の組合同結合力を失ひかけてゐた日本農民組合としては、舊黨再建よりは先づ組合の內部整理をと考へるのは、當然である。だが、日本農民組合のこの甚しい消極的な態度が、黨の新黨準備會の活動の大部分を封じたことは疑ひない。

黨幹部の活動、新黨準備會の行動はそんなであるとして、それなら舊黨の大衆は、自ら如何ら言ふ動向をとつたか？　黨幹部の側からの積極的、意識的な動きかけが稀薄である以上、今や黨を失つた大衆は、自然的に離散

するか、それともその地方的運動において自治的結合をするか、その二者の外はないのである。

山形、長野、千葉等に組織された地方政黨京都、神戸等に組織されつつあるそれは、そうして生れたもの乃至生れつゝあるものである。

ところで、黨の新黨準備會と、これらの地方政黨との關係連絡は、どうであるか？

我々は黨の準備會が、これらの地方政黨の生起にたいして、反對の意見をもつてゐることを聞いた。したがつて、準備會とこれらの地方政黨との間に、有機的な關係が成つてゐないことを知る。否、地方政黨の或るものにいたつては、黨の準備會を構成する舊幹部に反對して、組織された、乃至組織されつゝあるものである。

○

舊勞働農民黨の新黨準備會が『鋭意』舊黨の再建につとめてゐる時に、舊黨の事實上の『理論的』指導者であつた部分に、甚しい理論上の旋回があつた。全くそれは旋回であつて、展開でもなければ、發展でもない。これここに[illegible]生み出すことの出來ないのは、無理もない。

その理論的旋回の中に浮き上つた二つの提案は、次のやうなものである。

第一は、『勞農協議會』なるものゝ提唱である。この提唱された新らしい組織は、政治行動の機關とも、經濟運動の中心勢力ともつかず、大衆の組織であるやうでもあれば、前衞の結合を目圖としたもののやうでもあつて、一向要領を得ないものである。そうしてこの種の組織體は、一層洗練された形においては、合法的大衆黨の存在と否とに關らず、常に、勞働及び農民運動の持つ可き組織體であつて、それの提唱は、當面の問題たる舊黨再建にたいして、何等の積極的な貢獻でもなく、寧ろ、その運動を紊亂させるに結果するものである。

第二、黨の新黨準備會に、即時に、日勞黨と無條件に合同すべし、と言ふ主張がある、と思ふと、事實それが旋回して、新黨準備會はそれだけで、舊勞農黨の殘存勢力のみを糾合して、新黨を組織せよ、と言つた風に說かれる。實際、現在のところ、黨の新黨準備會は、ここ[illegible]であるが、無條件に合同を要求[illegible]合法的政黨を組織せよ、と言ふ日勞黨側の提議には、若干無理はあるが、事實上合法的大衆黨の再建を殆んど不可能ならしめるやうな道を、しかも誤つた態度で進むことは、人をしてその實際の目標がどこにあるのかと、疑問を起させざるを得ない。

第三、そうかと思ふと、更に『理論』は魔術的に旋回して、も早や合法的政黨の要はない、と主張され、他に例へば社民黨、日勞黨が存在する時に、更に一個の無產政黨を樹立するのは、明白な『分裂主義』だと言つた風に唱へられる。合法的大衆黨の存在がとにかく可能であり、且つその性質を具へた黨の行動すべき範圍が山ほどあるのに——さればこそ舊勞農黨があり、黨の『劃期的な仕事』があつたのだ——それの必要を否定することは、尠くとも無產階級の戰術ではない。一部の指導者による合法的政黨の組織が、事實上不可能だと言つて、も早や合法的政黨はいらないと主張するのは、明白に宗派的である。また、いまの『分裂主義』云々も、極度の旋回であ

る。再建され乃至は新らたに樹立される黨が、無産政黨の合同を目圖せず、戰線の統一に事々に背馳する性質を具へた黨であると前提したら、その主張は成立つであらう。だが、その新らたな黨が、誠意をもつて合同問題にのぞみ、實際上戰線の統一に貢獻するの性質を具へた黨であるならば、またそうした黨を先づ樹立することを主要の目標としてをれば、そのやうな主張の生れて來る筈はないのである。しかも今や要求されてゐる左翼政黨は、右のやうな前提を體現した黨（！）ではなくて、後者の使命を帶びた黨である。

○

勞農黨の新黨準備會の行動をも含めて、左翼政黨運動は、今後、どうなつて行くか、どうなつて行く可きであるか？　これは可成り六つかしい問題である。だが、差詰め次のことは言ひ得られる。

勞農黨の新黨準備會に關しては、先づ合法的大衆黨の樹立可能な道をとつて進むべきである。新らたな勢力と融合することも、その一つである。新らたな要素を加へて、その可能性をつくることも、その一つである。舊勢力をまじへて成つてゐる諸地方政黨を聯結して、その大衆の意見、要求にしたがつて、黨組織への積極な歩みを歩むことも、その一つである。これをもつて、官權への降服であり、大衆への追隨であるとするのは、これも明白に小兒病的である。今日小さな降服を忍ばないとすれば、明日大きな降服を強ひられねばならぬ。しかも合法的大衆黨組織の可能が殘されており、そうした黨に與へられた仕事が山ほどある時、可能な條件によつてさうした黨をつくることは、降服でも、追隨でも、何でもないのである、

勞農黨の新黨準備會が、舊黨を再建すること、乃至新黨を樹立することが出來ないとしても、それで日本の左翼政黨運動が一時終熄したものと言ふことは出來ない。否、日本の左翼政黨運動は、そうした黨の新黨準備會を後に殘しつゝ、前面に進み出るであらうし、また進み出なければならぬ、

この運動に關して言へば、その政黨組織においては、一、左翼要素を廣汎にとり入れること、二、黨の成立可能を前提條件として、舊勞農黨の新黨準備會とも結合すること、三、勞農黨解散後成立した諸地方政黨を聯結し、その大衆の意志を反映すること、等々が要求されねばならぬ。否、尠くともその目標で進むことが要求されねばならぬ。而して、その組織された黨においては、一、それが文字通りに大衆的共同戰線黨であること、二、されば黨内に完全な民主主義が行はれること、三、無産政黨の合同、戰線の統一（これこそ反動政府にたいする闘爭、支配的金融ブルヂョアジーにたいする闘爭の、事實上の有力な一歩進出である。）に向つて、誠意をもつて、直進することを中心の意志とし、それに相應した形態と行動をとること、等々が要求されなければならぬ。一言にして之を言へば、その黨は、舊勞働農民黨に内存した缺陷を、徹底的に清算した黨でなければならぬ。

この唯一の、眞の左翼政黨運動は、必らずや近い時日の中に擡頭するであらうし、その黨こそは、日本の無産階級の壓倒的要求である政黨合同、戰線統一の仕事の、眞の擔ひ手であらう。（七・九）

父よ悲む勿れ（四）

麻生久

四

父親の察しの通り、若い客人は、父親の炭坑經營の冒險談よりも、溫情主義の勞働問題よりも、それから又彼の前に並べられてゐる山程の御馳走よりも、彼の未來の妻の美しい姿の一目の方が、どれ丈け滿腹すべき御馳走であるか分らなかつたのである。彼は夕方、父親に伴はれて來る道すがら、今夜一夜を、美しい未來の妻の家に過ごす事の樂しさを、心行くまで胸の裡に描き出して、その悦びにひたつて來たのである。玄關を開けた瞬間にも彼の胸は躍つた。書齋の扉が開く度に彼の胸は躍つた。座敷に來て御馳走になり出してから、廊下に足音のする度に、彼の胸は躍つた。それ程、此青年は未だ生な純情の青年であつた。

もう時を經てから、父親が、多榮子は臥つたかと母親に聞いた時、其母親の口から、多榮子が、少し身體が懸くて休んでゐる事を知つた時には、彼の心は、ほんとに、がつかりして仕舞つた。それからは、彼の心は、何とかして、多榮子の病床を見舞ひたいと、云ひ出したい慾望で焦々してゐるのであつた。

叔父は叔父で、表面何事も起らなかつた樣な顏をして、二人おつき合をして酒を飲みながらも、氣が焦々して、幾ら飲んでも醉ふ事が出來なかつた。そして、炭坑經營に就ての具體的な話が出て來ると、言を曖昧にして、もうそれ以上話を進めないやうにした。母親は母親で、弟から娘の決心の變らない事を聞いてからは、一層不安が增してそはそはしてゐた。そして、御馳走の失策ばかりしてゐた。おまけに二人の女中までも、此變な空氣の中に卷き込まれて、狐につまゝれた樣になり、そこいらを、たゞ迂路〳〵して、これも失策ばかりしてゐた。

こんな風で、家の中は、頂度大嵐が來る直ぐ前のやうに、變に、上つ調子な處があるかと思へば馬鹿に沈み切つた處があり、明るい處があるかと思へば、妙に憂欝な處があつて、全體が、何か知らそは〳〵した不安に蔽はれてゐた。

そして、何も知らずに、一人い丶氣持に醉つた父親と、何か知ら物足らぬ氣持を抱いた未來の花婿であるべき筈であつた若者と、困惑の塊のやうになつて、むしやくしやしてゐる叔父とが、それ〴〵の思ひを抱いて寢床の中に片付いたのは、最早十一時近い頃であつた。

そして又、叔父から室の中に封じ込まれた多榮子は、叔父が去つてからも、長い間、机に片肘ついた儘坐つてゐた。彼女の頭の中には、ありとあらゆる事が、取り止めもなく、走馬燈のやうにぐる〳〵廻つてゐた。

彼女は、座敷の方が靜つて、どうやら皆が寢床に就いたと思はれてから、やつと、何となく安心した氣持になる事が出來た。

彼女は、母親に會ひたい氣持がして、幾度か室を出やうと考へたのであつたが、室の外に出るのが、何となく恐しい氣持がして止めて仕舞つた。廣い家の中で、たゞ此一室ばかりが安心して居る事の出來る城廓のやうに思はれた。

軈て彼女は机の前から立ち上つて、熱した頭を冷すために、窓を開いて外を眺めやつた。

窓の下方には、もう長い間見馴れて來た、炭坑町や、坑夫達の長屋や、工場や事務所が、深く靜に蔽はれて、密集した電燈の光に其位置を示しながら、暗夜の中に深い眠りに落ちてゐる。たゞ、選炭場の傍の眞黑な煙突のみが、怪物の樣に高く闇の中に突つ立つて、その頂から白い煙を物凄く空に向つて吐き出してゐる。

彼女は、窓の傍に立つて、凝つと、その夜の光景を眺めてゐる間に、云ひ知れぬ深い悲みが胸に迫つて來るのを感じた。

……あゝ此炭坑にも、最早これで御別れだ。そして、私は父や母にも別れて、何も持たないたゞ一人の人間になるのだ……

けれ共、彼女の胸は、そんなに長く悲みの中に浸つてはゐなかつた。

軈て、新しい生活に對する憧憬と希望とが、生き〳〵と蘇へつて、彼女の胸を力強く波うたせ始めた。

彼女は、未來の希望に輝く瞳をあげて、も一度、闇の中に眠つてゐる町の方を眺めやつた。そして心の中で力いつぱいに叫んだ。

……さようなら、私の古い生活よ……

四二

多榮子は、心の中でさう叫ぶと、何となく爽々しい氣持になつて、軈て窓を閉め、寢床の中に身を橫へた。そしてその爽々しい氣持の儘、何とかして眠りに就かうとして、暗闇の中に深く顏を埋めて、身

[illegible]を覚つて
[illegible]の眼の前に[illegible]して仕舞つ
[illegible]奇妙な疑りを[illegible]したのである。
れ共、それは不可能な事であつた。彼女はいくら追ひ拂はうと努力しても、色々な光景や想ひが、間断なく襲つて来て、それをどうする事も出来なかつた。彼女は、しまひには眠る事にさへも、激しい恐怖を自分自身に対して感じなければならなかつた。

『まあ私はどうしたのだらう。此位な事に昂奮して眠られないなんて、こんな弱い事でどうなるものか』

けれ共、こんな自分に対する叱咤に拘らず、彼女の閉ぢた眼の中には次ぎから次ぎへと自分の周囲に渦巻き起つた、激しい葛藤が、或るものは濃く、或るものは淡く、或るものは長く、或るものはほんの瞬間、現れては消え、現れては消えして行つた。

人生の行路に疲れ果てながら、なほ自分を頑張り通さうとして焦り抜いてる父の顔も眼の中に浮んだ。濃い眉の下の窪んだ奥の方から光つて見える悲痛な眼、絶壁のやうに高い鼻……其鼻は近頃は顔が痩せたので一層高く聳え立つて見える。そしてまあ、その顔は、何と年老いて憔悴して来た事であらう。

かと思ふと、其顔が何時の間にか穏かな母の顔に変つて、限りない愛を湛へた其眼が、悲しげに、[illegible]
[illegible]にになつてゐるやうに[illegible]
悩み叫んだ。

「お父さん、許して下さい。私は決してお父さんが憎いのぢやないのです。私はほんとにお父さんを愛してゐるのです。こんなにも、こらこんなにも、」

彼女は寝床の中で、夢中に寝衣を掻きむしるかの様に両手を激しく動した。そして又心の中で叫び続けた。

『だつて私にはさうするより仕方がないんですもの。私は前科炭坑主の妻になんぞなるのが厭なんですもの』

と又、何時か彼女の眼の前には、父が落盤で腰の骨を打ち砕いて、もう半年も床に就いたつ切りでゐる陰惨な道下の家の光景が浮び上つて来た。壁もろくに敷いてない物置小屋のやうな坑夫長屋の薄暗い一室の奥の片隅に、ボロをはぎ合せて縫つた薄い蒲団にくるまつて、彼女の父は何時も絶望したやうな眼で入口の方を眺めてゐる。其顔は、蓬々と延びた髭の中に埋められ、入口の方を眺めてゐる眼は、奥の方に引込んで、何の生気も希望もないやうに、たゞ薄気味悪くギヨロギヨロと光つてゐる。営養不良と心痛とで痩せさらぼつた彼女の母は、もう生きる事にさへ疲れ果てたやうになつて一日ぼんやり炉端に坐つてゐる。子供達は何時も腹をへらして、ぎやあ／＼泣いたり擲り合つたりして騒いでゐる。それこそ、ほんとに希望のない陰惨な坑夫生活の

象徵であつた。彼女はその光景を思ひ浮べた時、ふつと何時か道子が自分に云つた言葉を思ひ出した。

『うちのお父さんの樣に、子供の時から眞面目にお酒も飲まないで働いても、結局あんな事になれば誰も見向きもしないで私達は食べる事も出來ないんですもの。ほんとに今の世の中を呪はずにはゐられないわ。私達は自分の力で自分の身體を守るより道がないんですもの』

その決然とした言葉を聞いた時、彼女は太い鐵の棒で頭を叩きつけられた樣た苦みを感じたのであつた。

彼女はその時の事を思ひ出すと、又しても心の中で叫んだ。

『道子さん、今までの事は許して頂戴、私は今こんなに苦んで貴方と一緒にならうとしてゐるんですもの』

それでも道子の冷たい眼は、反抗に燃ゆるやうに、にこりともせずに自分を睨みつけてゐるやうに思はれた。彼女はも一度激しく心の中で叫んだ。

『道子さん、何故笑つて呉れないの。何故、何故、何故……』

若い客人は、後になつても未來の花嫁の姿が見えないので、バツの惡さうな樣子時に、遂々辛棒しきれずに、顏を赤くしたから、で、母親に口を切つた。

『多榮子さんは、矢張り身體がお惡いのですか』

『いゝえ、大した事はないのですけれ共ねえ、少々風を引いたやうで』

母親は、此何も知らない氣の毒な婿に對して取り繕ふやうに優しくさう云つた。そして、どうかもうこれ以上何も云ひ出して呉れねばよいがと心の中に希つた。優しい親思な彼女にはそれがほんとに辛かつたのである。

それでも婿は、愈々氣遣はしげに、持つてゐる茶碗と箸とを下に置きながら、眉の間に皺を寄せて云つた。

『それはいけませんねえ。昨日お友達のところにいらつしたのが惡かつたのではないですか。昨日はあんなに寒かつたから』

『えゝ、昨日あんなに寒かつたものだから』

『ひどくならなければいゝですが。何なら僕の方から醫者を呼んで上

[illegible]ハイカラになつて、飾り女を大切にするものだから増長して仕舞ふて多榮も一つ[illegible]さんから、うんと強く仕込んで貰はんといかんアハヽヽヽ』

父の未來の婿は夫れを聞くと、嬉しげに微笑しながら、母親の方に向いて同感を求めるやうに云つた。

『お父さんは、大分舊式ですねえ。女だつて奴隷ぢやないのですから、矢張り自由と人格を認めなくちやならないですよ。昔と今とでは時勢も違ひますからねえ、お母さんの時代は、まるで女を奴隷のやうに扱つて來たんですもの。僕の母だつて父から隨分いぢめられて實に氣の毒だつたですよ。僕は何時でも母の味方でしたハヽヽヽ』

『ホヽヽ、當節は大分世の中が變つて來ましたので娘達は幸福ですよ』

母親は心の中で苦笑しながらも、其場のバツを合せない譯には行かなかつた。

『うちのお父さんなぞも、頑固で、何かと云ふと直ぐに癇癪を起して、この年老のおばあさんに手をあげるのですよ。それでも近頃は大分氣が弱くなつて來ましたけれどオホヽヽ』

『馬鹿を云へ』

と、父親は非常に上機嫌で、併し、婿の前にいくらかバツの悪いやうな恰好をして云つた

[illegible]を呑み込んで、多榮もびしく〳〵やらなければいけないぜ』

叔父は、飯を食ひ終ると、たゞ默つて煙草ばかりスパスパとのんでゐた。そしておしまひに吐き出すやうに云つた。

『どうも、今の若い者の氣持は俺等には、何を考へてるのだか見當がつかん。どうも今日の教育が間違つてるやうだ』

彼は、昨夜、多榮子に手古摺つてから、すつかり考へ込んで仕舞つたのであつた。

始め彼が母親から其話を聞いた時には、多榮子の云ふ事を、單に一寸した羞かしがりの我儘だ位ゐに考へてゐたのであつた。それが實際會つて話して見て、彼は全く飽氣にとられて、未だ子供だとばかり思つてゐた姪の前に、手の施しやうもなく立竦んで仕舞つたのである。

最初は、冗談にして仕舞はうとし、次ぎは威嚇し、三度目には哀願までしたのであつたが、子供と馬鹿にしてゐた姪は、頑として彼を手もなく刎ね返して仕舞つた。彼には、何の力があの小娘をさうさせるのか、全く見當がつかなくなつたのである。

四

未來の花婿は、朝飯が終つて、最早歸るべき時が近づいて來ると彼の心は、何かそは〳〵して落ちつかなくなつて來た。彼の心は、一

度く多榮子の病床を見舞ひたい、と云ひ出さうかどうかと云ふ事で、いつぱいになつてゐた。彼は愈々時間が迫つてもう歸らねばならぬまぎはとなつて、遂々辛棒しきれずに意を決して、何げない樣子を裝つて、それでも顔を赤く染めながら母親の方に向いて云つた。

『僕、折角來たのですから、一寸多榮子さんの御見舞がしたいのですけれど……』

それを聞くと母親は狼狽の色を現しながら、それを止めるやうに、

『いゝえ、なにもう大丈夫ですよ。それに、あれの室も取り散してあるので……』

と、危うく云ひ譯をした。けれ共、何も察しのない父親は、冗談のやうに云つてのけた。

『母、そんな事は止し給へ。それだから、どうも女が增長するのだよハヽヽヽ』

未來の婿もバツの惡さを苦笑にまぎらさゞるを得なかつた。そして、未來の美しい妻を見る事の出來ぬ物足りなさでいつぱいになりながら、淋しく闇の中を歸つて行つた。

母親と叔父とは、漸くほつとした。

けれ共、そのほつとは、ほんの束の間のほつとであつた。今一步の先には、激しい大嵐が襲つて來やうと待ち構へてゐるのである。

そして、その大嵐は、未來の花婿が歸ると直ぐに、父親の書齋で、すさまじい狀ひに荒れ始めた。

父親は、上機嫌で、彼の花婿を玄關に送り出して書齋に歸つて、安樂椅子に腰掛けた時、彼の前に腰掛けた義弟の口から、何か多榮子に關する不吉らしい言葉を聞くと、何の事か意味を解する事が出來ぬやうに、

『えゝ、えゝ、忠助さん、多榮がどうかしたのかい』

と、義弟の方に向きながら問ひ返した。

『多榮の病氣がどうだつて』

義弟は、その樣子を見ると、全く當惑そのものゝ樣な表情をして、義兄の顔を眺めながら、氣遅れした樣に、へどもどと言葉を續けた。

『いや、病氣ぢやない。實はその、多榮に少々困つた事が出來たんで……』

『なに、多榮がどうしたつて』

未だ何の事か意味が分らずに、父親は椅子から乘り出して義弟の方を眺めながら訊いた。叔父は愈々當惑し切つて云つた。

『どうも結婚の話が……』

『何、結婚がどうした』

『それが、多榮がどうも、その』

『多榮が』

『多榮が厭だと云ふので』

『えゝ、多榮が厭だ。何が』

『結婚するのが……』

其れだて[illegible]
―一度聞き返した。
『多榮が結婚ご[illegible]たつて』
『さうに[illegible]たと云ふので』

父親は、判然とその言葉を聞くと、思はず後にのけぞつて、椅子の背にひどく彼の頭をぶちつけた。そして彼は暫時の間、呆然として、妻と義弟の顔を、たゞ無意味に見つめてゐた。その義弟も、全く此場の光景に對して施すべき術を失つて仕舞たやうに、たゞ茫やりと、失神した様になつて自分を見詰めてゐる義兄の顔を眺め返してゐた。

と、父親は、不意に身を起して、半ば立ち上るやうな恰好をすると、激しい、力いつぱいな聲で彼の妻の名を呼んだ。

『崎ッ　崎ッ』

その聲は、家中に響きわたつた。そして、彼は、妻の姿が扉のところに現れると、その方を睨み付けながら、いきなり呶鳴つた。

『馬鹿ッ…貴様は…自分の…娘が…ど…どんな…ことを…しとるか…知らんのかつ』

扉のそばに立つた母親は、そこに釘づけにされたやうに凝つと立つた儘、たゞ飽氣にとられて、荒れ狂ふ夫の怒聲を浴びてゐた。

その茫やりした妻の様子を眺めると、彼は愈々氣を焦ちながら、噛みつくやうに呶鳴りつけた。

『馬鹿ッ　何を茫やりしとる、早く多榮を引き摺つて來んか、馬鹿が

それを聞くと、叔父は、眼瞼で父親の方を押へながら、

『まゝゝ大兄は待つた方がいゝ』

と止めてから、姉の方に向いて、

『姉さん、貴方も、そんな處に茫やりしてゐないで、まあ、そこを閉めて、こつちにお掛けなさい』

母親は、弟のその言葉でやつと自分に返つたやうに、室の中に這入ると、靜かに扉を閉めてから、弟の傍の椅子に腰掛けて、凝つと夫の方を見やつた。それは丁度、娘の罪を自分で背負つて、審きの宣告の下るのを待つてゐるやうに思はれた。けれ共、彼女のかうした沈默は、夫の心を愈々焦々させた。そして彼は、如何にも憎さげに妻の方を見遣りながら、云つた。

『貴様、娘の事を知つとるだらう。この結婚に何か不足だ。云つて見い、俺を何と思つてる、馬鹿なッ』

それでも母親は默つてゐた。

『云つて見い、云へんのか』

『お父さん。そんなに私を怒つてもしかたがないぢやありませんか』

彼女は、夫の顔を眺めながら、訴へるやうに云つた。それを聞くと、彼の焦々した癇癪玉は一層激しく破裂して仕舞つた。

『何ッ怒つてどうするつ。馬鹿がッ、これを怒らずにどうするんだ。よし貴様が云へなけりや、俺が行つて訊いて來てやる』

父親は、さう云ふと、いきなり安樂椅子から立ち上つた。それを見ると、叔父は、吃驚して自分も立ち上りながら、

『まゝゝ義兄さん、お待ちなさい。そんなに昂奮して怒つても、しかたがない。引き摺つて連れて來たつてどうもならんのだから。兎に角落着いて善後策を講じなきあ。あれだつて、もう子供ぢやないのだから、たゞ嚇かしたり怒つたりして見たところで解決はつかん。まあ、待つて下さい義兄さん』

彼は、さう云ひながら、猛り立つた猛獸でも引き止めるやうに、一生懸命に義兄を抱き止めて、やつと椅子に腰を下させた。

『義兄さん、多榮を呼ぶのもいゝが、それより、たゞこつちが怒つてばかりゐたんでは何にもならん。私も昨夜あれの考へを聞きもしたし、怒つても見たんだが、どうして、そんな事ぢやあ、今の若い者は駄目だ。忠雄でもさうだが、多榮も矢張り何かそんな事にかぶれてるやうだから、なまなか怒つたりすると却つて意地になつて仕舞ふ。まあ義兄さんも多榮を呼ぶなら呼ぶで、少し氣を沈めてからにしないと、餘り突然な話しだから無理もないが』

けれ共、正直で頑固一圖な父親に對して、怒るなと云ふのは、出來ない事を強いるに等しい事であつた。

そんな事は、彼にとつてあり得べからざる事であると同時に、夢にもそんな事の起るのを想像して見た事もなかつた事である。而も、たつた今まで、彼の婿は、彼の家に居て、彼と話しをし、彼と炭坑の事を相談し、娘の病氣の事まで心配して歸つたのである。

それが一瞬後には、一切の破壞と絕望とが、突如として、自分を裏切りながら、霹靂の如く頭上に落ちて來て、自分を打ち碎いたのである。

彼には何を考へる暇も與へられてもゐなければ、又、こんな時に、物事を冷靜に考へるやうな頭も與へられてはゐない。

實際、彼の全身全心は怒りに燃え立つてゐた。彼は義弟の云ふ事も、妻の云ふ事も耳には這入らなかつた。そして椅子に腰を下してからも、娘を連れて來いと呶鳴り立てた。彼は、兎に角、一刻も早く娘を自分の前に置いて、思ふ樣とつちめて、自分の思ふ通りに返事をさせねばならぬ、と云ふ氣持に攻め立てられた。

『それぢやあ、姉さん、兎に角、多榮さんを一度こゝに連れて來て下さい。非常に重大な事だから、義兄さんも、矢張り一度多榮に話しをする事が必要でしやう。さうしないと話しが進まない』

叔父は、遂々母親に向つてさう云つた。

『さうだねえ。それぢやあ、私が行つて、あれを連れて來よう』

母親は、あきらめたやうにさう云ふと、娘を連れて來るために室から出て行つた。

啄木斷片

土岐善麿

×

五四・〇〇圓	社の賞與
五・〇〇	米内山より御禮
三・六五	十二月分俸給前借殘り
三・〇〇	精神修養稿料
一・〇〇	秀才文壇稿料
一・〇〇	早稻田文學稿料
二五・〇〇	宮崎君より補助
二七・〇〇	一月分俸給の内前借
九・〇〇	夜勤手當
八・〇〇	朝日歌壇手當
一五・〇〇	協信會より借入
五・〇〇	書籍質入
計	百六十五圓六十五錢

×

啄木の死後、未亡人の節子さんから僕の預つた遺稿類を調べると、その間に、こんなことを誌した紙片が發見された。これは明治四十三年、即ち彼が窮迫悲慘な中に、二十七年の短生涯を終つた前々年における、年末の收入總額をまとめたものだ。

啄木は一生を通じて、一度も物質的に餘裕のある月も、年も、送つたことが無い。その時々の支拂などは、滅茶苦茶であるより外はなかつたが、それでもこの四十三年の「おほみそか」などは、まだ〱いくらかいゝ方だつた。支出總額は、いま調べる資料を發見し難いが、この收支決算で、一圓餘の殘額があつたらしい。不時の出費もあり、積り重なつた借財のしまつもしなければならず、下宿屋にも古くからの債務がある。醫藥料も相當多額に上つた。

年明けてゆるめる心！
うつとりと
來し方をすべて忘れしごとし。

×

腹の底より欠伸もよほし
ながながと欠伸してみぬ、

今年の元日。

それでもかうして、いやな「おほみそか」をきりぬけて、百八の鐘の音が消えて、元日になると、僅かに「ゆるめる心」を持つことはできた、腹の底からの長欠伸を思ふ存分にやつて、戸外にきこえる追羽子のひゞきや笑聲にも耳を傾けることができた。四十四年である。

何となく
今年はよきことあるごとし、
元日の朝、晴れて風無し。

「よきことあるごとし」と樂しみにしたその「今年」の二月、どうも前年の秋頃から下腹部がふくれて、すこしおかしい〳〵と思つてゐたのが、診察を受けた結果慢性腹膜炎とわかつて、それからは、發熱と不安と焦燥との病院生活、病床生活が續いたのだ。初夏前後になつて、いくらか病勢がおこたり、「呼子と口笛」にまとめた數篇の長詩に、新しい感興を起すまで、小康を得たが、冬から翌年の春にかけて、もうそんな勇氣も出なかつた。

それとなく
その由るところ悲しまる、
元日の午後の眠たき心。

自己の實際生活と、當時一世をおどろかした重大事件に對する考察から、彼の思索は全く唯物史觀的動向を進めて、

やゝ遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も——
近づく日のあり。

といふやうに思ひつめるまでになつた、一方、肉親に對する斷ちがたい愛に惱み、またそれに慰められもした。

ひる寢せし兒の枕邊に
人形を買ひ來てかざり、
ひとり樂しむ。

彼の家庭のきり詰めた生計費の中に、なほ一個の人形を買つた費目のあることは、却つて一層の傷心を催さしめるではないか。

五十四圓の「社の賞與」といふのは、彼が四十二年の三月一日から校正係として勤めるやうになつた東京朝日新聞社の年末賞與である。入社當時は月給二十五圓で、四十三年の十二月には二十八圓に昇つたのだが、この賞與はそれ迄の半期の月給二十七圓に對する二箇月分だつたらうと想像される。「米内山より御禮」といふのは何かわからない。三圓六十五錢の俸給前借殘りは、あとにも、一月分の内二十七圓前借したところから察すると、十一月に前借した十二月分のうちにも多少の殘りをしておいた中から、社關係の雜費をいくらか差引かれて、かういふハシタが現はれたものだらう。稿料のすくないことは實に今昔の感に堪へないが、秀才文壇のも早稲田文學のも短歌十首に對するものと思はれる。二十年後の今日では、一首分にも足りないが、當時としては、短歌に對して稿料をもらふことなどはまだよほど特別な方で、

[illegible]

臥たりか醫[illegible]の[illegible]によつて[illegible]に[illegible]けられ、[illegible]その[illegible]に

たつて九圓の手當を受けたことは、[illegible]家族の[illegible]といはなければ

ならない[illegible]のいろ〳〵」と題する感想が、朝日新聞に掲載されたの

も、この四十三年十二月で、これは四回に亘つてゐるが、これの稿料

はもらはなかつたものらしい。この文章の終りにある一節は私の悲しい玩具である」といふ文句が、あとで有名になつたのだが、歌との連想を起させた「人形」――「目を移して、死んだものゝやうに疊の上に投げ出されてある人形を見た」といふその人形は、前にあげた「見の枕邊」においた人形とは同じものでないに相違ない。

二晩おきに、
夜の一時頃に切通の坂を上りしも――
勤めなればかな。

この二晩おきの勤めが、九圓の夜勤手當になつたのだが、これは十月からのことで、それがために多少、財政上の足しにはなつたが、彼の健康によくなかつたことも想像するに餘りある。健康のためばかりではない。彼は自己の才能を尊重し、どうかしてそれを發揮する機會をもたなければならないといふ野望と、その前後、異常な熱意をもつて深入りしつつあつた社會思想研究の念願のために、すこしでも時間の餘裕が欲しく、そのためにはいくらか都合よくなりかけた物質生活をも犠牲にして、十二月の末に、この夜勤はやめてしまつたのだ。協

[illegible]

た。これから[illegible]の[illegible]をこ[illegible]ことも、[illegible]の[illegible]をすることも

[illegible]より啄木さかのこ、[illegible]

はのほとんど一銭にわたる俗習にあつたにすぎない。それよりも重要すべきことは二十五圓の補助を「宮崎君」から受けてゐることだ。「宮崎君」は、宮崎郁雨君のことで、啄木が、補助を受けたのは、たゞこの年の、この月ばかりでは無い。

大川の水の面を見るごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ

かういふ一首が歌集「一握の砂」の中にある。その「一握の砂」は、二人の畏友にデヂケートされたが、その一人は宮崎郁雨君なのだ。極言すれば、啄木の生活に宮崎君の不斷の補助がなかつたら、彼の一家族は文字通りに飢えたかも知れない。啄木の遺稿を愛惜し、その才分を尊重するものは、すくなくもあれまでに、その表現を完うせしめた一種の「パトロン」として、宮崎君のあることを忘れてはならない。

それでも、なほ不足した。それで五圓だけの藏書を質屋の庫に送つた。これが幾册で、どんな種類のものであつたかは明かでないが、當時五圓だけの質種は決して僅少な分量ではなかつたらう。

賣り賣りて
手垢きたなきドイツ語の辭書のみ殘る

夏の末かな

こんなことは前にも幾度かあつた體驗だ。死後、その藏書を調べてみると、社會主義、無政府主義のもの十幾種しかなかつた。これらは四十三年の六月頃からボツ／＼收集したもので、他には目につくやうなものも無かつたのだ。遺稿と一緒に、僕はそれらを預つたが、大震災の時、僕の家財一切と共に燼になつてしまつた。

かうして四十三年は越したが、本郷の下宿蓋平館に對する負債百餘圓は、どうにもならなかつた。それは死後まで殘つた。啄木全集が新潮社から三冊出版されることになつて、印税がはひつた時、金田一京助君に、石川君の借金はどうでせうと相談したら、蓋平館のは、わたしが受印を捺してあるので、閉口してゐます、といふことだつたから、協議の上百圓だけそこの主人に送つた。蓋平館では意外に思つたらしいが、啄木も、死んで、初めて借金の一つがぬけた。そして金田一君に迷惑をかけた一部も帳消しとなり、こゝにその多年の友情にも報ひることゝなつたわけだ。

×

啄木の墓は函館の立待岬にある。その記念碑は郷里の澁民村に建つた。

啄木の遺骨が郷里に埋められなかつた事情は僕にも關係がある。

初め啄木の母堂が、四十五年の一月から病床に就き、三月七日遂に死去したので、葬式の相談をすると、どこと定つた菩提寺もない。遺骨の埋葬もアテが無いといふことだつたので、僕の生れた淺草の等光寺に、その葬式を始末することゝなり、僕の兄に頼んで、墓地の一部に納めたのだ。そんな事情から、啄木の遺骨も母堂のと同じ穴に納めたのだが、翌年の春、三月二十二日に函館圖書館の岡田健藏君が、僕を訪問されて、遺族や親類の希望だから、遺骨を函館に持つてゆきたいとのことだつた。僕は寺院の内に生れ、墓地の間に育つたものだが、遺骨などゝいふものに對しては、當時殊に唯物論者的な思想傾向から、たいして深い關心も持たなかつたし、まして縁者の希望とあれば、その交渉の使命を帶びて上京された岡田君のいふ通り、それを引渡すことが適當だと考へた。親類の間には、啄木の遺骨を澁民村に埋葬しようといふ説も、相當強固にあつたことは、ずつと後になつて僕も聞き知つたが、岡田君は、啄木を函館にも持ち歸ることを極力主張して、みづから、その任にあたつたわけだ。

立待岬に「故啄木石川一一族之墓」といふ墓標の建てられたのは、大正二年、未亡人の節子さんがまだ苦しい呼吸をひきとつて、その四十九日の忌日に當る六月二十二日で、埋骨式はひどい暴風雨の中に行はれたといふ。

なきがらはさびしきもいか、あら磯のかかるところに埋めはおさつ。

荒磯のかなしき友が墓の杭、このまゝ朽ちてあとなかれかし。

大正六年の夏僕は北海道に遊んだ時、立待岬へも行つて、こんなこ

ともに[illegible]愛を[illegible]、いかにも寂しい[illegible]
が、[illegible]いかにも啄木の[illegible]、僕の一家族の墓としてふさはしい墓
簡略なものだつた。然しそんな墓標すら、潮風の中に朽ちたら、もう
そのまゝでもいゝやうに僕は思つた。その時にも、僕は、死んだあと
の骨などはどうでもいゝと考へた。函館の人達が、啄木との交遊を紀
念するために、もつと永久的な、立派な塋域を造るといふ計畫に對し
ては、僕は初めから贊成しなかつた。それには經濟的な理由もあつた
と共に、あまり立派な設計のものは、あの啄木の生涯と思想に思ひ比
べて、却つて奇異な感を起すだらうと思つたのだ。然したとへ僕など
が反對しても、それが函館の人達の故人に對する友情と、實現の熱心
と努力を拘束したりするいはれもなし、その事業に干渉する權能もな
かつた。

その後、計畫は着々進展して、堂々たる塋域が完成したといふこと
だ。僕は然しまだ行つてみない。實際眼前にみて來たものゝ話による
と、どこの富豪のものかと思ふほどのもので、おそらく近代日本の文
學者中、これほど立派な塋域をもつものは、絶無稀有だらうとのこと
だ。人の話では、そこへ參詣した啄木の崇拜者達が實に、びつくりす
る。そして、もし啄木の生前、こんな墓を建てるだけの金があつた
ら、かわいゝ妻子は飢えさせなかつたらうといふやうな意味の歌を落
書きするものがあるので、遺族が困るといふやうなことも聞かさ
れた。僕にも直接それらのことに關する手紙を遺族から寄越したこと

[illegible]た、函館[illegible]
[illegible]にもつと[illegible]されると[illegible]考へ[illegible]それに一本[illegible]
の啄木」として、それでいゝのだ。澁民村に建てられた記念の碑に、そ
れを計畫した當時の事情から考へて、その裏面にたゞ「無名青年之
徒」がこれを建てたとばかり刻んであることにも、意義がある。函館の
人達は、啄木が最も愛しなつかしんでゐたのは函館の地だと考へ、そ
の熱意を傾けて、あの塋域にそれを具現したことは、むしろ自然だ。
また岩手の青年達が、過去における啄木をして、「石をもて追はるるご
とく」出て行かせたといふことに悲痛な反逆を感じ、この鄕愁の詩人
をふたゝび鄕里に迎へもどさう、その紀念のために、柳青む北上川の
ほとりへほつつりと一基の碑をおしたてたその努力も、またむしろ自
然だ。塋域も紀念碑もつくらず、たゞ「啄木會」といふ名のもとに、自
由研究をすゝめてゐる集團の各地に存在することも、意義がある。東
京盛岡を初め、函館、小樽、札幌など北海道の各地、大阪、佐賀、神
戸、長崎その他、僕の知つてゐるだけでも「啄木會」が隨分おほい。
そしてそれは芭蕉忌とか、子規忌とかいふやうなものと本質が全く相
異してゐる。然も、啄木の理解において、それらがまた必ずしも一樣
でないことは、すべて啄木の「偉大さ」をしめすものでなければなら
ない。

ボンベーの女市長サロジニ

野口米次郎

お互に詩人として私とサロジニ・ナイヅウとの友人關係は隨分と古い。私が彼女の名前を知り彼女の詩に始めて觸れたのは三十年も昔のことであるが、私が個人的に彼女と相識の間柄になつたのは十五年前のことである、……それは倫敦でハイド公園を前に控へたパーク・レーンの一養生院の小さい部屋であつた。その時彼女は何とかいつた病氣で手術を受け病後をその養生院で養つて居つた。彼女は病後とはいひ乍ら好奇心と美への願望で光るといふことの出來る眼で私を見詰めた。彼女はシンデリラでも穿きさうな小さい華奢な黄金色で塗つた靴を穿いたまま、部屋の寢臺の上に長なりに寢そべつた。私もそれに腰をへさせられた。

私が彼女と前記の養生院で共に語つた時アーサー・シモンズも一緒であつた。シモンズはその當時發狂に近い位の激烈な神經衰弱からやつと回復しかけたばかりの時であつて、彼の言葉は明晰を欠いた。サロジニは側から一々彼の言葉を反復して通辯の役をして呉れた。養生院の部屋は草花で飾つてあつた。私共はその草花を前にし後にして右にし左にして愉快な午後を費やした。サロジニは私より四歳も若い、してみると彼女は今日五十歳の老マダムだ。彼女は四人の子持ちである。然し彼女は依然として熱い太陽がぎらつく印度畜足附の儘で印[illegible]

の政治家で[illegible]ある。そして彼女は近く布哇の婦人會[illegible]席する爲に彼地へ渡航する途次わが日本に立寄るといふことである。私は常て彼女を詩人として親しんだが、今度は私は政事家として彼女を迎へなければならないことになつた。私は彼女に語つたことがある、『君の小さい印度人のスリッパで頑固な重い皮の靴を穿く西洋人を踏みにじらねばならない。西洋人の空虚な理智の劍に對して君や僕は花の一枝を武器として戰はねばならない』私は昔も今も變らず詩人として文字と文字との間を彷徨してゐるが、彼女は今立つて『ああ、時が來た……男子と同等の資格で生存を主張する時、西洋人と同等の資格で東洋人の地位を主張する時が來た……われに從つて起て、來れ、東洋の女よ』と叫んでゐる。

若し彼女が日本へ來たならば、私は彼女を

プロレ

中野重

日本のプロレタリア詩について僕が何か書くといふことは、僕に特別の意見があるといふこと〻は違ふ。事實僕は、今までそれについて澤山の人が言つたり考へたりして來たやうなことを考へて居るものであり、また僕らが考へ及ばなかつた多くの問題は、後から後からと生れて來た新しい詩人達の頭で全く新鮮に考へられ、その上それが眼に見えて實行されて居る。僕が日本のプロレタリア詩についてこ〻に何か書きつけるとすれば、いきほひそれは、さういふもの〻單純な跡づけにならない訣には行かない。さういふ跡づけは結局一種の記錄であつて創造的價値を幾らも持たないものだ。したがつて詩的價値を幾らも持たないものだ。さういふ記錄の幾らずよりも詩の一行の方が本當は問題なのだ。しかも、一行ではなく三行も十行もの詩がどしどし生れて居るのだから、この記錄は殘念ながら見すぼらしいものにならない訣には行かない。大體詩人に取つては詩を書くことが問題なのであつて、詩について書くことは、問題であり得るとしても餘りい〻問題ではないのだ。

だが一體いま日本のプロレタリア詩はどんな工合か。

日本のプロレタリア詩は今、謂はゞその生誕の日から成長の日に移つて行かうとして居る。生誕の日にはそれは一色に叫んだ。今日はそれが雜色に叫ばうとして居る。森山啓は戰旗の六月號で次のやうに言つて居る（序ながら戰旗の六月號は發禁を喰つた。でそれから引用することは大して無駄でないだらうし、それに僕がこ〻に書き得るよりも森山啓の方がもつとよく書いて居るから）。

「——多くの詩に盛られた一般的プロレタリア的感情——鬪爭におけるプロレタリアを表象する時誰もが表象し得るであらうところのプロレタリアの姿——は最早、我々が現實の

せ宣

單純な物の觀方

ートは歴史的使命を持

よつて自らを解放する』と

とそれほど隔りもないとこ

犧牲者の身うちの者は、、を

リアの子は勇士と育たねばな

同志の熱狂がある、呼びかはす

えて、そして死屍をこえて……

達よ、最初の詩人がこれをうたひ

つた後は、長くがや〳〵とうた

は餘りにうたひ古されたもので

多くの同志の詩を見て、我々

詩であることを感じはする。

詩だ、これこそが詩だ』と

よりは、それは寧ろ『どれも

感じさせるのだ。同じこと

同じ宣言は幾度も繰り返へ

い。たとへ我々がその宣言

らうとも――。」

で、森山啓は、詩人が彼の激情をそのまゝ叫んで居ることから、複雑なプロレタリアートの現實の中へはいつて行くことによつて開かれて來るだらう新しい叙事詩の問題を提出して居る。さういふ叙事詩は生れつゝあるし、また更に宏大に生れて行くだらう。そしてこれは彼の意見の他の面に過ぎないのだが、さういふ叙事詩の展開そのものが同時に、今までかつて發せられなかつた叙情詩のうた口をも吹き鳴らして行くに違ひない。

かういふ詩を今まで書いて來、これから詩のかういふ面を掘り起して行かうとする詩人達はどんな人々か。西澤隆二の言ひ方によれば「今まで全く詩を書いたことのなかつた人人であり、詩は如何にして書くべきかを知るよりも先きに詩を書いてしまつた處の人々である。」

勿論さういふ人々以外の人があづからぬといふ訣ではなく、從來の詩人そのものが見せて行くだらうところのメタモルフオジーレンが大きな點を打つて行くのは寧ろ今後のことに屬するのではあらうが、しかも西澤がこゝに書いたやうな人々の中にこそ、一切の傳統にかゝはりのない獨立の苗が伸びて行くのだ。そいつは全く新しくて、その新しさは、それが自分自身以外の古いものを頭から知らないほどに新しいといふところに特徴を持つて居る。プロレタリア詩の未來は一にこゝにかゝつて居る。從來の詩人の努力がこゝに向けられない限り、それは昔逃げながらナポレオンを破門した陸軍のアカデミーの跡つぎになるだらう。

ではさういふ詩はどういふ風にして多くの人々のものになつて來たか。

そのことのために僕らが採つて來た方法は主としてマキビラと出版と朗讀との三つだ。勿論詩が割合に容易に民衆の中にはいるといふ事は、僕らが採つて來たかういふ方法そのものによる外に、詩といふものが元來文學の中でも謂はゞ最も少年的なものであるといふその性質によるのではあるが。出版やビラは別にして、朗讀が積極的にやられ始めたのは日本ではプロレタリア詩をその初めとするだらう。言ふまでもなくこゝに言ふ朗讀は例へば若菜集や天地有情やには無關係のものだ。これらの外になほ外國で持たれて居る朗讀の特別の形――シユプレヒユールの類――が持たれるやうになるだらう。

いづれにしろ日本のプロレタリア詩は、かやうな方向へかくうな勢で押し進んで行くに違ひない。現在でも日本の持つて居る詩のあるものは世界のプロレタリアの前にその價値を評價される。それらはその小さなまたは大きな姿で次から次へと生れ、そのつながりは日本プロレタリアートが世界プロレタリアートの進みの中で持つ一つの鎖を鳴らすだらう。そして、これは僕一個の臆測であるが、このつながりは飽くまでもつながりであつて、だから一つの結び目が生きながら紀念塔となるやうなことなく、歌聲そのものである詩が沈默の中に消えて行くやうな形でのつながりであるだらう。

春信・寫樂・その他

吉井勇

春信のつかひのごとく夢に來る深編笠の女虚無
僧

春信の淺妻舟の繪のまへに立ちて思ふもかのひ
とのこと

似るひとのありて心はときめきぬ春信ゑがく七
小町にも

柳屋のお藤ものを思ふらむ春信の繪のなかに
あるとき

行燈のほのかなる灯もなつかしやわが春信の座
敷八景

なまめきしものの二つをここに見る定家の歌と
春信の繪と

松阪屋野風の姿月にありて春信の繪の忘られぬ
かな

春信の繪とは思へどこころ寄る蚊帳のなかなる
玉の肌に

うばたまの夜の色のみか春信はいしくも描きぬ
梅のにほひを

春信のおせんの茶屋の繪のなかに君の姿を見し
は誰が子ぞ

蓮池の舟の女にもの問ひぬ春信の繪てふことも忘れて

寂蓮と云へる法師の歌の繪にふと春信のさびしさを見る

雲母摺の雲母黒うして寫樂の繪いよよ寂しくなりまさるかな

寫樂の繪生きて臺詞を云ふごとし大谷德次の奴袖助

幸四郎が持てる朱羅宇の煙管にも寫樂のなげきありと知れりや

鸚鵡亭讃と書きたる字もうすく寫樂の繪よりはかなさは來ぬ

雲母摺の寫樂の夏となりにけり幸四郎の鼻松助の眉

眞の井は半四郎ならむ寫樂の繪見つつむかしを戀しとおもひぬ

さながらに寫樂のなげくすがたなり都傳內口上の繪も

寫樂の繪見ればわが世ものろはしくなりぬと云ひぬ醉狂の友

海老藏の六部すがたを描くときも寫樂つめたく笑みてありけむ

人の世を嘲けるごとき寂しさは寫樂の描ける松助の顏

松助の浪人ものの月代に寫樂のうれひいよよ深しも

寫樂の繪見てあるほどに何となく世の厭はしくなりにけるかな

南蠻の屛風のなかの伴天連がものを云ひなばをかしからまし

竹林の七賢の繪のまへに立ちもの思ひするわれにやはあらぬ

淸長の矢の根五郎が襖よりぬけ出でて來る時をおもひぬ

うつくしき阿國歌舞伎の繪卷ものこのごろ夜ごとわが夢に入る

又兵衞の人麿の像おもしろし歌の聖も錆び翁めき

われをかし懷月堂の艶女にもいささか似たるひとを見るかな

一双の四條河原の繪屛風を見て京を戀ふかのひとを戀ふ

師宣の描く女の寂しさとつつましさをば君にたとへむ

北齋の七夕の繪をしみじみと見つめて思ふ江戸のゆうべを

露絲の物語よな繪がかたるほのかに遠きものがたりよな

それぞれに似しひとあればよしと見む春章の繪も豐春の繪も

しら玉の肌にすずしき風ふきて美人浴後の繪の夏は來ぬ

支那名媛詩鈔

佐藤春夫

朝のわかれ

我念歡的的　子行猶豫情
霧露隱芙蓉　見蓮不分明

子夜

さだかにも目にうつるかな
行きがての人がうしろで、
朝ぎりにはちすはかくれ
おぼろめき花も見えぬに。

春のさかり

陽春二三月　草與水同色
攀條摘香花　言是歡氣息

孟珠

きさらぎやよひ春のさかり
草と水との色はみどり
枝をたはめて薔薇をつめば
うれしき人が息の香ぞする。

採蓮

風日正晴明　荷花蔽州渚
不見採蓮人　只聞花下語

端淑卿

さわやかに風や日かげや
花はちす汀(みぎは)をつつみ
かげ見えで蓮とる子は
花がくれかたらふ聲す。

そぞろごころ

竹榻清人夢　花香潤酒杯
覺來有幽趣　明月滿妝臺

馬月嬌

夢こそ清けれ竹の寢椅子に
杯あまけれ花のかほりに
目ざめてそぞろに樂しきかなや
月かげさやかに櫛笥(くしげ)を照らす。

若き日を

勸君莫惜金縷衣　勸君須惜少年時
花開堪折直須折　莫待無花空折枝

杜秋娘

綾にしき何をか惜しむ
惜しめただ君わかき日を
折らむいざ花よかりせば
ためらはば枝に花なし。

又

年少當及時　蹉跎日就老
若不信儂語　但看霜下草

子夜

わかき命は一ときの
よろめきて日に老ゆかん
わが言の葉をうたがはば
霜に敷かるる草を見よ。

われとわが戀人と

儂作北斗星　千年無轉移

歡行白日心　朝東暮還西
子夜

われは北斗の星なれや
千年（ちとせ）かはらぬものなるを
天つ日をなすみこころの
あしたは東くれは西。

水かがみ

輕鬢覺浮雲　雙蛾初擬月
水澄正落釵　萍開理垂髮
沈滿願

浮ぐもの鬢　月のまゆ
うき草さけてかんざしの
沈みしあたり澄みわたる

灑點愁人淚　不許秋風吹
吹到長江裏　江流無盡期
景翩翩

戀するものの涙をば
な吹きはらひそ秋風よ
吹きて河邊に落ちゆかば
水逝き果たす時あらじ。

貧しき女のうたへる

夜久織未休　戛々鳴寒機
機中一疋練　終作阿誰衣
兪汝舟妻

モスクワの印象（その一）

中條百合子

トウェルスカヤの大通を左へ入る。角の中央出版所にはトルキスタン文字の出版広告が張り出され、午後は、飾窓に通行人がたかつて人間と猫の内臓模型を飽かず眺める。緑色の圓い鍔附帽をかぶつた辻待ち橇の馭者が、その人だかりを白髯の中から眺めてゐる。

中央電信局の建築が、殆ど出來上つた。材料置場の小舍を雪が蔽ふて居る。トタンの番小屋の函屋根も白く凍つて居る。

――ダワイ！　ダワイ！　ダワイ！

馬橇が六臺つながつて、横通へ入つて來た。セメント袋を積んで居る。工事場の木戸内へ一臺づゝ入れられた。番兵は裾長外套の肩に銃を吊つて居る。

長靴に二月の雪を踏みしめ、番兵は右に歩く。左に歩く。然し歩哨の地點からは遠く去らず、彼は口笛を吹いた。交代に間がある――。

日曜に飾つた女の肩からふいと心の首を持ちあげた時、番兵は向ふ側の歩道をゆく二人の女を見た。大股に雪の上を――自分の女の記憶の上を踏みしめるのを瞬間忘れて番兵は、自分の目前を見つゞけた。

――支那女？――

一人の女は黒づくめ。一人の女は茶色づくめ。手皮の襟から出て居る脣を動かして彼女達は番兵の理解せぬ言葉を喋り、黒づくめの女の方が高笑ひをした。

番兵は銃をゆすり上げ、更に女達の後姿を見守つた。街の平つたい建物の見とほし。後から取りつけたに違ひない露台が一つ無意味に中空にとび出して居る。下に

ホテル・パッサージ

電氣入りの看板が出て居た。バルチック海に春先の暴風が起る朝、この看板は揺れる。そして軋む。黄色い紙に書いた獻立が貼り出してあ

るそのホテルの馬鹿らしく重い扉を體で押しあけて、先づ黒づくめの女が入つた。つゞいて、茶色外套の女も入つて仕舞つた。――バング！

肉入饅頭賣りが來た。彼が胸からつるした天火の湯氣が、煽りで散つた。同時に肉入饅頭の温い匂ひも湯氣とともに散る。

番兵の、田舍の脳髄の襞の間で東洋女の平たい顏の印象がぼやけた。たゞ好奇心の感覺が、漠然神經に遺つて居る。その時、永い間立つて居る馭馬が尾を揚げ、心地よげにゆつくり排泄作用を行つた。雪解けの水に濡れた向ひ屋根の雨樋にモスクワの雀がとまつて、熱心に、逞しい馬の後脚の間に落ちた、出來たての、湯氣の出る餌さを見張つた。

ホテルの四階の端に、日本女の部屋があつた。下足場に棕櫚が置いてある。そこから日本女の室まで、七十二段、黒赤絲花模様の粗末な絨氈がうねくり登つて居る。昇降機は無い。あつても動かぬ昇降機がモスクワぢゅうに澤山ある。日本女は一日に少くとも二百八十段上つたり下りたりした。其度に事務室の前を通りすぎた。事務室の白い戸には三越の文具部にあるインクスタンドの通りな碧硝子の把手がついて居て、執務時間、第八時より十二時。第十四時より第二十二時と掛札が下つて居る。新モスクワの生活法を、レーニンの大寫眞が眺めて居る。

四階の手摺から下を見下すと、下足場の棕櫚の擴つた青葉の天邊と、その蔭に半分かくされた圓卓、うつむいて上靴をはいて居る女の背なかまで一つ平面に遠く見えた。棕櫚があるから、人は此處から身を投げても死ぬことは出來ない。

一人の日本女は、一日のうちに何度もそこから下を覗いた。

夜になると、小さい花電燈が二つ點いた。廊下は靜かだ。よく女中が手摺のそばに椅子を持ち出し、キャラコの布に糸拔細工をやつた。女中は瘦せて居る。栗色の毛をかたくくる〳〵巻きにして居る。海老茶色のジャケツを着て小さい耳飾をして居る。日本女は、手摺によりかゝり、文法沒却法で彼女と話した。

――今夜寒い

――寒い！　貴女の部屋は？　温くありませんか？

――部屋は温い、勿論！　こゝ、廊下に居て寒くない？　あなたの家は温い？

――温い。西日がさす。温いけれど夏はやり切れない。

――西日は體によくない

――よくない

――さうだ！　あなた……

――肺がわるいと――二ケ月――掛ります？　肺が[illegible]云ふことは、こゝ、肺、ね。私は時間が足りないから他の働が出來ない。

療養所は滿員だ。日本にも肺の惡い人が居るだらうか。流感が此那置土産をして行つた。三期になつたら療養所へ行けるだらう。其那話をする。

廊下の白い壁に質素な圓時計がかゝつて居て、半時毎に、彼女達の頭の上で時を打つた。その時計の鳴る音を、日本女は床の中で眠らず六つまで聽くこともある。雪と煤煙とのモスクワ、穢さの裡に美しさがある居心地よいモスクワの日の出は七時半だ。――

一九二〇年には百二萬八千であつたモスクワの人口が一九二六年に二百一萬八千人に増大した。

この結果、モスクワでは、四つの世帶がたつた一つの厨房しかない貸室に生活を營み、あらゆる小學校は二部教授を授け、Yと私とは既に二ケ月ホテルの一室に生活し續けなければならないことになる。毎日、事務室の青羅紗の上に、我々は六留の宿料と一割の税とを置く。金庫をひかへて坐つて居るトルストフカの事務員が、一枚の受取りをよこす。受取の裏には、普通のホテル取締規則の他に、宿泊料は[illegible]許されることを[illegible]してゐる。[illegible]、夜はYと、[illegible]と一緒に[illegible]になつてハツと思ひ出し、[illegible]事務室へ駆け下りるのも、[illegible]無理ない次第ではないか。貸室は一杯だ。ホテルには空いた部屋がある。そこへも行かずYと私が一室に起居を供にし、寢臺を供にし、通風口の開けられない夜中は互に互の吐く炭酸瓦斯さへ分け喫つて居るのは、モスクワの人口過剰に比例して輕き我等のポケットが最大原因だ。我々は、シベリア鐵道以來の練習で出來る丈互の存在を神經の埒外に放逐し、永きモスクワの多の夜夜を暮す。然し、私はものが書けぬ。Yは無遠慮に發音練習をやることが出來ない。これは不便だ。而も、嚴然たる我等の經濟が結論するところの不便だから、Yも私も、互に向つてヒステリーを起す權利がない。私は自分の内攻的ヒステリーを少し整理して、田舎者のハンカチーフのやうな青格子縞のテーブル掛の上で考へる。犬養健さんの小説「明るい人」の中に此那意味の文句があつた。「西洋人は一人でも多勢かたまつた時つよくなるが、東洋人は獨りの時の方が心的に最もつよい。」――ピーター・クラポートキンは彼のロシア文學の理想と現實の緒論の中に、十四世紀のロシアに於ける蒙古族侵入の經緯を書いた。自分の獨居慾から自然東洋と西洋とを對立させて見る心持になるのだが、この緒論の一部が今

一種の意味をもつて思ひ出される。ジンギス汗は彼の剽悍な騎兵を率ゐて疾風のやうにロシアを襲つた。彼の兵は到るところで破壊し、勝利した。然し、綜合的に自分の戰勝地を支配する手腕が民族的に缺けて居た爲、再び其をモスクワ太公の手に歸せしめた。ＣＣＣＰはロシア史を書きなほした。そこで人は讀む。「商人ロマノフ」が十七世紀の初頭に初めて權力を掌握した、と。この見地からしてのモスクワ太公とは何者であつたらうか。兎に角彼が、蒙古族には無かつた彼の內なる歐羅巴の血で、ロシアをロシアに還し得たことだけは疑ひない。尨大な土地とともに亞細亞と歐羅巴とが民族中に混り合つて居ることを特色の一つとするロシアが、斯のやうな場合いつも彼等の中なる歐羅巴的なものに優先され、導かれて來た經驗は面白いと思ふ。例へば、エイゼンシュタインが、最近一九一七年の「十月」を映畫にした。我々は、建物ぢゆうの階段と床が大理石の、然しその大理石は既に古く、人の足の下で中凹に磨り減つた活動寫眞館で、午後四時のスクリーンの上に其を觀た。ウラヂミル・イリイッチ（レーニン）と

ります。

多かれ少なかれ民族の中にあるに違ひない亞細亞的なもの、東洋的なものを、我々は、日本の集團は、さし當り二月二十日までにどのやうに轉向させるであらうか。――

私の胸の裡では日本が、極めて心臟に近い場所で何とも云へず賑々しく動き始める。默つて頰杖をついて卓子掛の緣糸のほつれをぽつねんと縫つては居られなくなる。私はYを呼ぶ。

彼女は、綠の、シベリア鐵道でアメリカ女が其を見て嘲笑したところの、厚ぼつたい、男ものも見たいな上被の中から、私を振向く。私は多くの賢いこと愚かなことをとりまぜ喋り出す。軈てYも椅子を向けなほし、彼女の常識法である「違ふよ、さうぢやあないさ」を以て進出して來る。それから後、我々がどんなに、どんなことについて喋るか――ホテルの淡綠色の壁ばかりが知つて居る。

この時、ホテルの廊下の隅の女中のところでけたゝましくベルが鳴つた。戸棚の前で、女中は印度の詩人の室に撒く南京蟲よけ藥を

つ六十二號、日本女の隣を開けた。ホテルにはプロフインテルンにも代表者が一杯溜り込んで居る。彼方にも代表員！　こちらにも代表！

代表員は長靴のまゝ長椅子に坐る。代表員の食事は無代だ。平常は卓子に白い紙をかけ、色つけ經木造花で飾つてあるホテルの狹い食堂は、代表員が居る時食卓に本ものゝ布の卓子掛がかゝる。きちんと疊んだ新しいサルフエトカと、いゝ方の、光つて重い揃ひのナイフや肉叉がいつ行つて見ても並んで居る。海坊主の給仕は大盆を捧げ、或は空手で絶えず白前掛をひらめかせ代表員の胃袋充塡をして廻らなければならない。彼は不機嫌だ。

日本女は、茶が飲みたくなつた。日本女は扉をあけ、廊下へ半身出した。隣室の扉も開いて居る。各々食物を註文する數人のがや〳〵する聲と、海坊主が「宜しい、宜しい」答へて居る聲がする。遂に給仕が廊下へ出、日本女が口を利かうとした時、追つかけて更に一人の代表員が室內から叫んだ。

——持つて來い、ナルザーン（炭酸水）！

——……畏りました……

Yはモスクワ第一大學へ教授ペレウェルゼフの口元を見つめに出か

ような ペレウェルゼフの聲は言語學的につゝまれて居るが、[illegible]に行くない。たゞYにとつて幾何かの困難があるといふのは、總て文學批評の本か、小説とは違ふいやに讀み難い漢字で印刷されて居る通り、講壇の上に於ても、ペレウェルゼフの言葉は、Yの知識と調和し難い。それでもYは、日本よりの黒きおかつぱを、やつぱり隙だらけの講堂に現す。そして、十九世紀のロシアに於ける貴族文學、中流文學、民衆の文學について講義されて居る筈のものを聽くであらう。

私は、その間ホテルの室に居る。貴重な獨りの時間を貪慾に利用しようとする。

それから、ロシア語初等會話を、B夫人についてやる。——

モスクワに來て私の深く感じたことが一つある。それは、現代のCCPが外國人の旅行者に對して、どんな行届いた觀光の案內役を設けて居るかといふことだ。モスクワの停車場へ下りる。午後二時迄の時間であつたら、彼はタクシーをやとひ、眞直、マーラヤ、ニキーツカヤ通の對外文化聯絡協會へ行けばよい。元は金持の商人の邸宅であつたその建物の、下の廣間の、隅の事務机に向つて掛け。そこには髪の黒い、眼の大きい美しい廿七歳の女が坐つて居る。彼が日本語と伊太利語以外の言葉を話せば、翌朝から彼が丁度茶を飲み終つたといふ時刻に、協會から案內者が派遣されるであらう。彼が二日モスク

檎はきたない雪の上へころがり落ちさうになつた。商人は慌てゝ自分で籠を上げた。——巡査は再び兩手をポケットへ突込んで歩き出した。大道商人も並んで、林檎籠の重みで胸を反らせ乍ら、親しげに巡査に顏を向け喋り、笑ひ、行く。——暫く歩いた時、彼等の行手を遮るやうにして横丁から一臺空の荷橇が出て來た。それを見て林檎賣は一歩巡査をやり過したと思ふと、いきなりその橇馬の鼻面を掠め、重い林檎籠を腹の前に抱へたなり、よたくり而も極めて手際よく、彼方側の歩道の人ごみの間へ逃げ込んでしまつた。巡査が振り返る。車道の空間には、おつことして行つた味噌漉笊みたいなものと一緒にまだ彼の笑顏が殘つて居る。もう、樺色外套の背中は見えない。——

自分は思はず笑つた。これはロシア的だ。そして農民的だ。彼がうまくやつたのが何だか滑稽で、私はひとりでに笑へた。歩道に立ち止つて見て居た者も笑つて居る。巡査は、別に追つかけようともせず、傷けられた表情もなく林檎賣の逃げた方角を眺みて居たが、兩手はポケットに入れたまゝ、やがて四ツ角へ向つて歩き去つた。味噌漉しみたいなものは、どこかの物賣女が拾つた。

ロープシンは自殺しなければならなかつた。政治的見地からすれば彼自身、不幸な最後を豫想しない譯ではなかつたらう。然し、彼はロシアなしではもう生きて居られなかつた。だから還つて來た。そして死んだ。彼のこの激しき鄕愁の原因はどこにあつたのだらうか。

又こゝに、世界を震駭させた十日間の筆者ジョン・リードがある。彼は饑餓時代に南露で流行病の爲に死んだ。ジョン・リードは機敏なアメリカのジャーナリストとしての手腕の他に、他人ごとでない愛と興味をロシアとロシアの新生活に對して抱いて居た。世界を震駭させた十日間に、彼はどんな私見も挾まず記錄的に書いて居るが、記錄蒐集の濃やかさと整理の印象的な點に、我々は彼がどんなにロシアに魅力を感じ理解して居たかを知る。彼を惹きつけ、我等を吸ひよせ殆ど眼を離させぬロシア生活の魅力とは、一體どこに在る何ものなのであらうか。

私は感じる。其をモスクワの古く狹い街路の上に。群集の中に。或はホテルの粗末な絨氈の上を濶歩する代表員のキューキュー鳴る長靴の上に。瑞西の旅行者はアルプスと碧い湖と林とを見る。何より先自然が美觀で彼に作用し、各々の才能に從つて三色版のエハガキのやうにか、或は散文詩のやうにか彼の印象記を書かせるであらう。ロシアには、このやうな意味の風光は無い。モスクワでは、例へば、古風た寺院の外壁の龕に嵌めこまれた十八世紀の聖畫に興味をひかれた

ら、彼は必ず同時にその外套の下で日向葵の種をコップに入れて二哥で賣つて居る婆さんの存在をも目に入れなければならない。聖堂の古さ、婆さんが頭にかぶつた穢い布、婆さんの前を突切つて通行する皮外套の女共産黨員の黒靴下の急速な運動など――互が互に對照する人生の斷面が一目の裡にとび込んで來る。彼が若し、風景として感覺の裡におどり込んで來る其等人生の斷片を吸收するだけの溌々した生きてであるなら、同時に、其處から何か民族的雰圍氣といふやうなものを感得するのは、寧ろ當然なことだ。

或時、私はホテル・サボイの食堂に坐つて居た。ホテル・サボイは外國旅客專門のホテルで、昇降機掛は英語で「おかけ下さい」と云ひ、給仕頭は白ネクタイをつけて居る。私の前には黒イクラとレモンをのせた鮭と酒がある。皆日本人だ。半官的職業に携る人々で、數年――彼等の經歷の最初の振り出しをロシアで始めたといふやうな人も居る。革命前と後のロシア比較論なども出て、その論に對しては私の頭の中に夥しい疑問記號が發生したが、やがて一人が、忿懣を感じるやうな口調で云つた。

「兎に角ロシアは泥沼ですよ、一遍足を入れたらもう拔かれやしない。その證據にロシアで商賣して金儲けした人間なんぞありやしません。損に損する、それで居て、何故だかやつぱりロシアから足は拔かれない――全く泥沼さ」

この言葉は私の感情に、丁度沼地の泥を蹴る旅人の足の感じと同じ快い効果を及ぼした。愉快になつて私は笑ひ、其は本當です、と賛成した。私は、ロシアの深さ、彼を惱らすその深さと其に伴ふ大きさ、重さを感じ知つて居る。そして、私は、彼とは正反對にその民族的なロシアの深さを殆ど熱情的に愛する。この深さ、大きさこそ、我等をこのやうに吸ひよせ魅するところの、魅力の第一の源であると思ふ。ロープシンは、フランスや瑞西で、この一種特別な深さを見つけられなかつたのであらう。ジョン・リードの若きアメリカの眼は、この深さを理解し、民族のあらゆる大才と醜聞の劇場をそこに認めたのではなかつたらうか。所謂ロシア氣質のエッセンスとして文學とともに外國に流布して居た合言葉、一九一七年以前の「ニチエヴオー」或は「同じこつた」革命後のすべての赤きもの、動的なもの、其等は何かの角度で、この深さ大きさから發展した部分的なものだ。

深さ。――だが、この言葉は漠然として居る。私の感じでは、深さにも種類があると思ふ。例へば活動の字幕に、アフリカ大森林の深さところ、と云ふタイトルが出たとする。我等の受ける印象は必ず、地面の上から人間の頭上高く上へ上へ、繁茂した木下闇の感じだ。深い。

と皇帝の紋章が林立して居る。其等は叫喚に似て居る。見廻すと、赤き廣場を渦巻きにして殆ど八方の空に十字架が聳えて居る。十字架は此廣場で平和を表して居ない。恐怖を語つて居る。民衆の恐怖と支配者の魂にあつた恐怖を示して居る。民衆はつめかける、海のやうに。首斬台で鉞はもう砥がれた。血は雪に浸みるであらう。神よ！我等の父皇帝よ！慈愛深き皇后よ！城壁は厚い。内なる人は見えない。門は閉る。總てに對する慰安と答へとは、黄金の十字架と鷲——坊主と兵士が與へるであらう（？）

我々は革命博物館に於けるより數倍の現實的効果で、一九二八年の赤き廣場に前時代の史的實證を觀るのだ。、、。、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、。、、。濠の柳が水に映る。お濠の石垣からは何がのぞいてゐる？　松の枝。いつも緑深き松の枝。——松は天然の植物だ。——松を見て人間は何を感じる。——…………

彼は靈感のやうに一つの事に思ひ當るであらう。「是は尤もだ。ロシアに十月があつたのは。そして、この澤山な十字架と鷲との上に今日一片の赤旗が高く翻らなければならなかつたのは」と。彼は理解ある旅行者として、撥ね返さずには居られぬ礎石が、ロシアの民衆の上にあつたことを知るのだ。

この礎石に就ては、現代ロシアの民衆自身も忘れては居ない。勞働新聞の特報グラフイックに、一九一二年のレンスキー事件の寫眞がのる。レンスキー金鑛でストライキが起つた。指導した勞働者が捕縛された。その釋放を求めて集つた勞働者の群集を無警告で射撃し二百七十人を殺した事件だ。此事件に關して議會で質問が出た時、内務大臣マカロフは斯う答へた。

——その通りだ。今後もさうであるだらう。此は簡明で殘虐な言葉だ。然し、此樣な理解し難いやうた暴虐が、逆説的にロシアの民族に潜在する異常な飛躍性を示して居るところに注目すべきだ。ロシア民族の持つて居る深さ、大きさは、彼等の濃い陰とともに、凡そ其が人間の心にあり得るものなら、どんな聖きものも、どんな醜怪なものも、極限まで發育させる氣味惡い程のゆとりを持つて居る。其だけ話して觀ると本氣に仕難いやうな專制にしても、其が存在し得た限りで必ず民族の最少量以上には出なかつたのだ。——何とも云へぬロシア的ゆとりで、專制者の生活が各人の生活を底まで引かき廻して仕舞はぬうちは、一切のパンと彼等の魂に忍耐の遊ぶ餘裕のあつたものは、誰が琥珀張の室で誰といちやついて居やうが、彼等はこせ〳〵しなかつた。「俺のことではない」そして、根強く生きつゞけて來たのだ。

愈々或が日夜叫びつゞけ、「我慢出来ない」時が来た時、彼等は如何那工合に背中の重荷を投げ棄てたか？　世界の人間が驚愕して髪の毛を逆立て、総て一斉に喚き出した程投げ棄てた。ロシア人は「我慢出来ない！」と呻いて或状態の中から立ち上つた時が最も恐ろしい。彼は飛躍する。彼の最大の可能でどつちかへ飛躍する。神へ向つてか、悪魔へ向つてか。民衆は天真で自分達の裡にあるこの天才と恐怖とを自覚して居ないやうに見える。ロシア史のあらゆる偉大な瞬間と恐ろしき瞬間は、心理的には、この山羊皮外套の中で體温高き民衆の飛躍性と深い關係を持つて居ると思ふ。

或民族の持つ風呂によつて、彼等の気質の一部を観察出来るものとすれば、ロシア風呂は獨特だ。日本のやうに湯槽の中で水を沸かすのでもないし、沸かした湯を寒暖計で計りつゝ注ぎ出す科學的方法でもない。室がある。一方の隅に胸位の高さまでの石がある。其は焼石だ。眞赤な焼石だ。其焼石に、いきなり水をぶつかける。パッ！　水蒸気が立つ。忽ち水蒸気で室が一杯になる。その蒸風呂で、スラヴの汗と脂をしぼるのだが、焼石に水をぶつかける時、こつがある。人は、必ず體をかゞめ、下から焼石へ向つて水をぶつつけなければならぬ。立つて焼石に水をかける。一時に太蒸気が膜の様に顔を打つ。人は死ぬ。——石が吸ひ込んだ熱、或はペチカの煉瓦の温みがロシア人のあたゝかさだ。

この温みが藝術を通つて出て来た時、我々は所謂ロシア的情緒の如何なるものかを知る。藝術に於ても彼等は人生派だ。その言葉に耳を傾けさせようとするなら、先づ引例を彼等の脚にはいて居る長靴にとれ。詩的美文は彼等を魅するどんな力も持たぬ。この意味で、的確で皮肉な警句をもつて論旨を進めるブハーリンの明快な文章は、生粋にロシア的だ。

彼等の手は遅い。なか／＼捗らぬ。口は早い民衆だ。彼等は多勢の人が自分に注目するから、つい口を噤むと云ふ日本人の心持は全然知らぬ。自分の主張を一人でも多くの人に聴いて貰ひたいからこそ話す。熱心になか／＼上手く話す。又、民衆は言葉に對する一種の馴れと敏感さとをもつて居て非常によい聴きてだ。人混みの中でもいつか知ら際だつた一つの聲の云ふことは聴いて居て、野次る。或は賛成する。——批評があるのだ。此は、モスクワ市井生活の愉快な特徴の一つで、革命前は人口の約半数読み書きを知らなかつた民衆が、如何に言葉で訓練されて来たか、言葉を聴きわける才能を磨かれて来たか、興味がある。若しロシアの民衆が昔からの一種特別なこの才能を持たな

い、古い御堂の或ものは實に理性なき美で通りすがりの旅行者をも魅する。これは北、これは南だが、髪へ桃色の花房を押したタヒチ土人の娘の、裸の黒い原始な皮膚の美が、モスクワの御堂のごちやくした、灯かげのチラチラする黴くさい洞の中にあるのだ。

復活祭の夜、總ての劇場とキネマが閉され、大劇場のオペラ役者は基督救世主寺院で聖歌を歌ふ。勞働新聞は一週間前にこの事について時評を書いた。――「勞働者は何處へ行くんだ？　教會か？　芝居か？」――此問題は我々の興味を牽いた。何故なら、勞働者は日頃反宗教教育を受けて居る。古き民族的祝祭が一九二八年にどのやうな新形式と内容をもつて現れるか、CCCP生活に目立つ一つの標でなければならない。

アルバアト廣場に電車が停る。乞食が車内へ入つて來た。彼は腰から下がない。胴の末端は四角い板で、板の下に四つの水車輪がある。兩手にローラースケートをはいて、

CCCPの皮肉と諧謔の好標本である「鋸」は、復活祭號だ。表紙に此那繪がある。鼠色職衣の勞働者が白布を頭にかぶつて水の入つたバケツを下げて歩いて來た。女に訊いて居る。

――お前、今日クラブの反宗教演説へ行くかね？　お寺へ行く方がよつぽどまし

――澤山だよもう、あんな宗教！

だわ――今日あすこフェイエルベルクが出るのよ

い、復活祭の前日、殆とすべての食料品販賣所でパンの棚と瓶棚が空ッぽになつた。其那ことを豫想しなかつた日本女のところにはパンが無い。

勞働新聞の論説に拘らず、十四日の晩は基督救世主寺院の四方の壁に數百本の蠟燭が點りオペラ役者が聖歌を歌つた。大群集が石段につめかけ、手車の胡桃賣りは午前二時の凍つた坂道でいゝ商賣をした。

ルイコフの名によるクラブ、其他モスクワぢゆうのクラブでは其夜、樂隊が鳴つた。コムソモーノツヒコムソモルカが、チャールスト

基督救世主寺院の大理石の壁の上に重量ある壇にかざり合ひたるつた。布をかぶつた若い女が、遠くの祭壇の儀式の様子を眺めようとして聖旗につかまりその臺にのつかつて伸び上つた。掌に灯した蠟燭の光で下から顔を照らされた老婆が、片手でその女の外套の脇を引つぱつた。

——何

——下りなさいよ、そんなところに乘つかつて

——何故

婆さんは自分の連れに横目をつかひ、瘦せた肩を揺り上げた。

——壞れるといけないからさ。——第一足場にする場所ぢやないぢやないか。勿體ない

——聖壇へのつて居るんぢやありませんよ

——同じことだ

矢張り蠟燭の灯をかばひつゝ立つてゐる男が、聖旗臺の女に向ひ手を振ツた。

——止めろ

布をかぶつた女は動かず、周圍の人群を見下して恐ろしい顔をした。そして低い早口の惡體を投げつけた。同じ聖旗につかまつて居たもう一人の女が靜に其處から下りさうにした。白布の女はその腕を運へ、下ろさないと——婦女の上半身、恐らく〳〵にアラブの手觸とともに心臓の在る胸骨のすれ〳〵下の處くらゐまで素肌スラブ式から脱皮して居るのは確かだ。彼女は古風に胸へ蠟燭をつけて立つて居る婆さんや男のやうに、聖旗から立ちのぼる宗教的精神などは認めない。金紙でパカ〳〵した旗は要するに旗で、彼女が足臺に必要とする一尺五寸の高さを丁度その支臺が持つて居る時、どうして其處へ登つて惡いといふことがあらう。ましてその支臺は一人や二人の女を載せて充分頑丈である場合。

彼女の論理の終點から出直して、然し、私は日本のギリシヤ教なき心に感じる。このCCCP婦人市民らしく鬪志つよき彼女は何故そのやうに熱烈に一尺五寸の足臺が欲しいのだらうか。何故小半町も遠い彼方の祭壇で往つたり來たりする大蠟燭の燦さと僧冠の天邊だけを群衆の頭越しに眺めて滿足することは出來ないのか。彼女が革命までに食べた復活祭の色つけ卵の數だけ、彼女の裡で鐘の音とゝもに甦る何ものかゞあるのだ。非常に微妙な何ものか、説明し難き何ものか、それが彼女を狩り立てる。聖旗臺によぢ登らせる。僧正か十字架を捧げて屈んだり伸びたりするその光景を見ないでは、CCCPの新文化の大氣中に1/3だけ脱皮した彼女の魂がたんのうし得ないのだ。

を創る計畫が起つた。同時に、シベリアから一つの投書がモスクワへ屆いた。「私の村にはまだ一つも學校が無い。昔の通り耳學問や僅かな獨習で我慢しなければならない。一日も早くこの狀態から救はれたいものだと思ふ」ロシアの地面は其那に尨大なのだ。邊土まで文化を屆かせる爲にも、中央の壓力を高く、高く。

モスクワ市を繞む環狀並木道は今美しき五月の新綠だ。ストラスナーヤ廣場からニキーツスキー門まで柔い菩提樹の若葉がくれに、赤、黃、紺、プロカルトの波が微風にふくらんだ。並木道の左右に賣店が並び、各々が意匠した店名を、「アガニョーク」「ゴスイズダート」青葉の下に揭げて居る。此はモスクワの書籍市だ。菩提樹の新綠、空のプロカルト、構成派風な賣店の塗料の色彩、すべて新鮮だ。アーチを潛つて無數の市民を牽きよせる。樹蔭のベンチに居ると、モスクワ讀書人をなして居る男女のあらゆる分野、年齡の見本を——教授、作家、勞働者、學生、今は繪本を抱へて勇み歩く將來のピオニエールまでを包括する團體などの、鳥瞰圖を、[illegible]

ホーテー」をたつた二十哥で買ふことが出來る。——丸善の二十部と[illegible]潰れたボリソフ書店の目録から、どうしてこのやうな書籍の快き氾濫を想像出來よう！

文化の革命へ參與する印刷物のＣＣＣＰ的精力の代表はデミヤン・ベードヌイの詩だ。プラウダ新聞社の輪轉機は、日曜日とメイ・デーとを除いて毎日廻轉して居る。ベードヌイの詩作も殆ど常に輪轉機と共に！ ベードヌイは部屋着姿で新聞を擴げる。恐らくその新聞の二面の左肩には彼の昨日の詩が載つて居るだらう。五月一日、ワルシャワで殺された勞働者の寫眞が出て居る。彼は其を觀る。感じる。數行の横書文字が書かれる。翌日その詩は新聞に出るであらう。

文化の革命に參與する他の端には勞働通信員、村落通信員がある。「通信は正確な場所、時、多數者の生活と關係ある事實を必要とする。空想、空虚な革命的字句、外國語を避けよ。常に事實を擧げ」勞働者は、身元證明帖、クラブ會員證の間から、更に一つの體溫で暖[illegible]

日本の[illegible]

ミラノフは[illegible]

く。第二一組の椅子で居心地よくなつたのに、価格は彼を驚かしそして、花をすてた。

——お前はブルヂョアだよ。お嬢さまだよ。商人根性！

然し、商人根性とは何か。清純を好むのは商人根性か？エム・オルガノヴヰッチはこのCCCP風な偏見打破の為に勞働新聞へ投書する必要を認めた。

蹴球が好きで、ラヂオ組立ての上手なコーリヤは、市立銀行の三階にある家で、新聞を讀んで居た。卓子の中央に彼が直したスタンドが灯つて居る。母が向ひ側で獨逸語の論文翻譯をして居る。母はよく働いた。コーリヤは母を尊敬して居る。コーリヤの見て居るイズヴエスチヤの第一面には大見出しで、「パチシヤフ・アマヌル・ハンのモスクワ到着」と云ふ記事が寫眞つきで出て居た。「停車場に於けるアマヌル・ハンとタヴーリシチ、カリーニン、ヴオロシロフ、カラハン」「白い髭を生やした圓顔の王の隣席で、中折帽をかぶつた白髯のカリーニンが下を向いて何か見て居る。」「停車場を出んとする王、カリーニン、ヴオロシロフ、並アフガニスタン大使」最後に、「停車場前の閲兵」。—

[illegible]

[illegible]

——ママ！

母を呼びかけた。

——なに

——ママ、何故此邦にパチシヤフを歡迎するのさ。自分の皇帝に惡いつて殺しといて、何故よその皇帝は歡迎するのさ

——…………

母は答へない。

——ママ！

髮のほつれた頭を仕事にうつむけたまゝ、母は短く答へた。

——外交に必要だからだよ

メイエルホリドは、「検察官」のフレストコフに太き黒ブチのロイド眼鏡をかけさせた。白い襟の上の黒襟飾、黒い髭、黒いタキシドー。黒と白とで全身をつゝまれた蒼白いフレストコフは、音樂につれ陶器人形のやうに奇麗に肥つた市長夫人と絡み合つて狭い片明りの舞臺の上で踊る。意志や感動や人生の目的を知らぬ[illegible]人形のやうに

止途なく踊る。狹窄衣が出で、呼子が鳴つて、小惡魔のやうに哄笑する人間ともが見物席をかけずり廻つて、近代的檢察官の幕が急速に下りる。又幕が上る。メーエルホリドが大股に出て來た。頭を下げる。引込む。メーエルホリドは、半洋袴をつけて、スウエターを着て、洒落た長靴下の先にきつちり紐を編んだ赤革靴を穿いて居る。パセテイツクなハリウツドの住人と云ふ風俗だ。—

これは、メイエルホリドだけの趣向ではない。我々は作家ピリニヤークのひろき胸廓の上にも、ヴエーラ・イムベル夫人の若き夫活動寫眞管理人の腦にも、このアメリカ流行の明らかな斷片を見出すことが出來る。彼等はアメリカ旅行の計畫について話し、木訥、フセワロード・イワノフはアメリカへ出かけた。アメリカの何が彼等を牽くのであらう。

日本の雜誌改造がフオード自動車會社の記事に興味を示した。モスクヴの雜誌照明燈も、フオード自動車工場内部の寫眞を掲載した。二つの現象の間にどんな相異があるのだらうか。CCCPに於けるメリー・ピツクフオード、ダグラス・フエア

市民ルイパコフと「照明燈」が自動車について語る。それは徒アメリカの持つ技術への興味だ。進歩せるアメリカの技術、機械。—ロシアの土地は耕地、油田、鑛山をもつて二千百三十五萬平方粁の上に廣漠とひろがつて居る。アメリカでも同じく昔は眠つてゐた土地を一世紀半の間に、あのやうな大生産場と化した。カリフオルニアで使用される播種機と草刈機は、CCCPのタヴーリシチが働く共同農場にもなければならぬ。そして、いつ彼等の農場から停車場までの六十露里を自動車で馳れるだけ、生産は豐富に能率的に進むであらうか。革命後は特別な字引が其爲にいる程CCCPに夥しき略語とともに、アメリカはロシアに多少とも影響した。

モスクヴの「農民の家」を訪問する。元は大レストランであつた建物の内部が、如何に文化革命の目的によつて變更され、配置されて居るかと云ふ點に外國よりの客は驚ろかされる。農作、牧畜に關するダイアグラム、標本。武器標本室。農民生産陳列室。ビロードのトルス

[illegible]部に云ふであらう
——アメリカにさへ未だ無かつたものです。

作家の一部を擁へて居るアメリカは、當然歯車や梃子以外のものだ。其等CCCPの作家は、革命十年紀念祭を終つて、批評家ゼリンスキーの言葉によれば「着物を着換へたばかりでは無い、心まで變つた」新しいロシアの若き讀者が、何か、自身にさへ未だ不分明な要求を感じて居ることを豫感して居るのだ。

事實、一九二八年のモスクワに於て、昔ながらの憂鬱を云々するのは、無意味な感傷主義となつた。現代青年等の文學的趣向は、額まで髪をかぶつて一日一晩坐り通し「人生とは何ぞや」と呻くことでは無い。彼等は父祖譲りのロシア的魂を、蹴球に、仕事台の上の振子廻しに、知的時評的諧謔、或は輕快なる戀愛に放散する。「動的」と云ふ合言葉はモスクワの空に響いて居る。動き無き所から、澱んだ沼の泡のやうに立ち昇る魂の憂鬱の代りに、モスクワの憂鬱は動きと動きの間から、過度な聚合性の底から生れる。——アーク燈の下をちらりと横切るコムソモーレッがぴつたり影を吸ひよせて居る女はもう昨日の女で無いところから、又、其建物内には五百人の人間が賣笑婦も混

彼等には、既る[illegible]
CCCP日常生活とは全然違つたアメリカ映畫が[illegible]された所の[illegible]
にはゴーゴリによつて代表されたロシアの悲惨な悲しく可笑しき[illegible]が、現代に於て内容と調子をかへて来た。笑つた次の瞬間、人間の醜くけようない愚かさとけち臭さで、生きて居る自分の胸が痛むやうな笑ひより、もつと朗らかな、人生の肯定的な諧謔が求められる。此等すべての心理的要求に應じるどんな作品を、作家達は彼等のタイプライターから打ち出しつゝあるか。

なかなか困難な問題だ。CCCPの作家もCCCPに生活して居る以上、まして現代、環境は讀者と大體同じだ。讀者の心持にある要求は作家の氣持にも在るとして、それを如何那きつかけで、どんなものに創造して行くか。「十月」と「飢饉」とは、現在までに記録として書き得る丈は書きつくされた。稀有な社會的素材は多くの才能を發育させたが、今それは更に十年、或は廿年後史的材料として扱はれるべきものになつて居る。接續點に在る感じだ。作家も自己の新しき發育、轉機を待ちつゝ、作をつゞけて居る。——いろいろにして書いて見て居る。

ロシアは金持と王とをふりすてゝ新文化を求めて居る。ヨナタンの
アメリカは、積んだ金を土臺にして、その上に新しき文化中心を創り

つゝある。ピョートル大帝が和蘭に向けて漕ぎ出した船を、一九二八年に一部の作家は北米合洲國に向けて漕がんと欲して居るのだ。アメリカは、自動車製作技術に於てCCCPに先行して居るとともに、世界の新文化を創造する技術に於ても、そのやうに先行して居るであらうか。半年冬籠りをしなければならぬCCCPの魂が、如何にアメリカの明るさを受用するか。カウ・ボーイと幌馬車時代のロマンスの代りにステンカラーヂンと赤き十月を持つロシアが、どんなにアメリカ風快活さを反射するか。それは興味あるみものだ。

日本女の部屋のテレスの欄干に雨のしづくがたまつた。昨日雨が降つた。今日も雨が降る。五月の雨だ。

日本女は、そこに六ケ月生きたモスクワから、新生活が始まつたばかりのロシアを強く感じて居る。CCCPは、廿世紀の地球に於て他の何處にも無いよきものを持たうとして居る。同時に、他のどこにも無い厖大な未完成と困難を持つて居る。

赤き前かけの女巾ナーデンカはパン粉をこねて居る。下宿[illegible]ル・ゲオルクヴイツチ、いつもきつちりした髪をして、革の時計紐を反つた胸につけて居るが、タシケントに在る家屋の買ひてを見つけることは不可能になつた。彼の子を一人持つた女が千二百留の扶助料不拂ひに對してミハイル・ゲオルクヴイツチを訴へ、法廷はタシケントの家を差押へた。室にあるトルコ刺繍も四百留ではなか〱賣れない。

一人の日本女は海のあるレーニングラードへ出發するだらう。

附記。 新しきロシアに就ては未だ沢山聞きたいことがあるし、又書かなければならない事がある。モスクワ生活の印象としても此は一部分だ。逆居のこと其他は續編として別に書きたいと思つて居る。（五月三十日前後から、モスクワに白パンが無くなつた。天候は不順で寒い。）

ソウエト・ロシヤ觀劇記

秋田雨雀

一　モスクワの劇場

私はモスクワで最初に芝居へ行つて、一寸意外な感じがしたことが一つある――それは劇場の位置や構造についてゞあつた。私は日本の劇場の位置や構造から聯想して、藝術座の玄關を入つた時、一寸びつくりさせられた。私は實は帝劇や歌舞伎のやうに、獨立した建築物か、何處か靜かな廣場のやうなところにあることだらうと想像して行つた。ところがその藝術座はクレムリンの近くのあの賑かなトウエルスカヤ街とクズネツキ・モスト街とを結びつける橫町の、あるレストオラントの隣に普通の店屋と玄關を並べてゐた。二重戸の玄關を入ると外套やガローシをぬぐところがあつて、これが觀客席の地下室になつてゐる。外套と上靴を脫いで、身輕に階段を登れば、そこは步いても音のしないやうな靜かな廊下になる。こゝへ入ると、私達は全く外の音をきくことが出來ない。快い暖房裝置が私達の身體を柔かに包んで吳れる。厚い壁と二重の戸と二重のガラス窓が全く第一の現實から私達を隔離して、第二の現實に私達を直面させる。

モスクワの劇場は、「劇場廣場」に堂々と君臨してゐる大劇場の他は小劇場でも、藝術座でも、メイエリホリドでも、ワフタンゴフでも革命劇場でも皆な極くつゝましい形で、市井の建物の中に立交つてゐる。これはソウエト・ロシヤの演劇の位置を說明してゐるやうで、私は面白いと思つた。もとの蝙蝠座のあつた劇場なども、やはりトウエルスカヤ街の横丁の地下室に立派な舞臺を持つてゐる。ホテル、パン屋、菜食食堂、郵便局などの隣りに世界的な評價を博してゐる藝術の殿堂のあるのは何んともいへない親しみの感じを與へるではないか。ほんとにソウエト・ロシヤでは演劇はパンや肉のやうに必要なものであり、郵便局のやうに手輕に用の足りるものになつてゐる。

劇場については、從來の興行劇場の他に、革命後無數の劇場(舞臺)が一般公衆に開放されてゐることも知らなければならない。今日モスクワ、レニングラードの職業組合にはきつと立派な舞臺がある、そしてその舞臺では絕えず演劇やコンツェルトが催されてゐる。それ

等のクラブは大部分革命前は貴族や富豪の邸宅であつた。今日の「職業組合會館」は革命十週年會合の行はれたところであるが、そこの大理石の圓柱のある大ホールは革命前までは一般の市民にはその存在さへ知られなかつたといはれてゐる。その一事だけでも、ソウエト・ロシヤの發生の理由があるやうな氣がされる。私はレニングラードで、妖僧ラスプチンを殺害した青年貴族の邸宅の中に千人ほどの客を入れられる大ホールと、その地下室に眼を奪ふほどの美しい模範的な小劇場を見せてもらつて驚いたことがある。すべてそれ等の舞臺が今日では全ソウエトの勞働者達の爲めに開かれてゐる。

二　演劇の性質と觀客

ソウエト・ロシヤの演劇を見て、一體誰が芝居を見てゐるのかといふことが一番最初に來る疑問だ──モスクワでは、私達の知つてゐる範圍では、劇場は殆んど毎夜滿員つゞきだ。ソウエト・ロシヤはそんなにお金持で、そんなに呑氣なのであらうか？　その理由は極く簡單だ。ソウエト・ロシヤでは演劇の性質が一變してゐる。演劇はもはや

る。（但し、劇場及び演劇の性質によつて觀客の性質を多少異にすることは勿論である）、私はモスクワで、度々日本の新劇や、歌舞伎の觀客席を思ひ出して、ソウエトの勞働者達をほんとに羨ましいと思つた。そして、いつの日日本にこのやうな美しい光景が見られるだらうと柄にもなく「愛國心」に似たやうな熱情に襲はれたことが度々であつた。ソウエトのある哲學者が「ソウエトの未だ到らないところを恥ぢる……」といふ意味のことを謙遜して言はれたのを度々きいたが、勞働者がソウエトの工場と劇場を占領してゐるだけでも、その哲學者の言葉を引込めてもらうに充分の理由があると私は私の友人に言つたことがあつた。

そんなら、それ等の劇場で何んなものが演ぜられてゐるか、といふことは當然第二の疑問として起つて來なければならない。ソウエト・ロシヤの演劇は二つの方向から謬つて見られる恐れがある。一つは從來のロシヤが完成した近代劇的體系の継續としてソウエト・ロシヤの演劇を見やうとすることで、第二はイデオロギストの性急な觀察である。實際のソ

至は革命的指導精神を持つた演劇で、最後のものは、藝術的目的によつてなされる移動的演劇である。この内、私達を最も強く刺激したものは最後の移動演劇であつた。この種類の演劇を見てゐると、ソウエト・ロシヤに於て初めて社會的イデオロギーと藝術の職能とが一元になりかけてゐることが感じさせられる。そしてそれは決してソウエト・ロシヤの藝術に對してばかりでなく、また同時に人類の持つ藝術の將來に對しても、一つの光を投げてゐるものだと感じさせられる。

私は下にソウエト・ロシヤで見た六つの演劇のノートを記して見る。演劇に興味を持つ人々には多少參考になるかも知れない。ノートはその當時の印象を殘すために手を加へずにそのまゝにして置いた。

（一）「檢察官」（メイエリホリド）

近來メイエリホリドの「檢察官」ほど問題になつた芝居はたい——

メイエリホリド

私は既に日本にゐた時からこの芝居の批評を二つほど讀んでゐた。然し批評だけでは、何うしてもこの芝居の演出が充分に飲み込めなかつた。メイエリホリドはゴーゴリの愛好者側とイデオロギスト側の双方から批難を受けたといはれてゐる、然しそれにも拘らず、メイエリホリドの「檢察官」はこの二つのシーズンに渉つての最も成功した演出の一つだといはれてゐる。ゴーゴリの愛好者はメイエリホリドの改作はゴーゴリへの冒瀆だといひ、イデオロギストはメイエリホリドの演出はメイエリホリドの不健全性を暴露したもので、メイエリホリドの邪路を示してゐるに過ぎないと言つた。然しメイエリホリドの味方と、一般の演劇愛好者は「檢察官」を見るためにこの劇場に殺到した。メイエリホリドは何んのために「檢察官」を改作したか？

メイエリホリド側にいはせると、作家はその時代の政治特に檢閲制度によつて制作の自由を制限されてゐることが多い、それ故その政治や制度から解放された時代に於ては、その作家の語らうとしたことを充分語らせるといふことは自由であり、寧ろ自然なことであるといふの

であつた。それに反して改作を非とするものはゴーゴリのやうな國民的天才の完全な藝術を改作することは天才を傷けるものであり、また例へ、ゴーゴリがその當時の政治や制度に支配されてゐたとしても、ゴーゴリの天才はこの作物によつて充分に自己の思想を表現し盡してゐる。また政治や制度に影響されて、然も自己を失はなければこそ、このやうな立派な藝術が生れたのだ、原作を最も自然に表現するこそゴーゴリの思想を完全に生すものだといつた。またある人は「検察官」の發表された時、當時の皇帝は寧ろゴーゴリの天才を激賞したといふやうな反證まで擧げた――然し結局メイエリホリドの「検察官」は、メイエリホリドの「検察官」として存在をつゞけた、そして小劇場の原作通りの「検察官」と並演されながらも決してその存在の理由を失はなかつた。

私は十月二十五日（一九二七）、小雨の降る日メイエリホリド劇場を訪ふた。装飾のないガランとした内部、そして舞臺には歌舞伎の御殿のやうなものを構成主義化したと思はれるやうな道具が幕なしに觀客に向つて展開されてゐた。御殿の奥の唐紙が、板戸になつて開閉が出來るやうになつて、その間から、舞臺背後に用意された色々な別の舞臺が、

舞臺背景が次ぎ次ぎに用…けるために　ではノートの中の二三の…どめる。

第二場の市長のフレスタコフ訪問のシーンでは、ボブジンスキーが戸の鍵穴から覗いてゐるのを市長が、内から戸を開くと、ボブジンスキーは室の中にのめつて來て二階の階段をすべり落ちて、下の室で下男が地下室から薪をとつてゐるその穴に落つこちてしまふ。こゝで觀客は先づあつけに取られてしまふ。この場ではフレスタコフは原作にない一人の貴族のやうな服装をした青年を供つてゐることも注意しなければならない、そしてこの男は何の場面にも出て來て、フレスタコフに飲食物を供給してもらふ。この男は實に意地汚く貪欲だ。この男によつてフレスタコフの貪欲性、野卑性をも代表させてゐる。

第三場はフレスタコフを迎へる市長の家――こゝでは市長の妻君とその娘がお互に着物の好みについて爭ふ、そして娘は泣き出してしまふ。これは原作をよく説明してゐて少しも不自然を感じさせない。たゞ注意すべきことは原作ではこの家は小さな田舎の町長程度であるべきものを大都市の市長の家庭としてメイエリホリドが演出してゐる

を暗示してゐるらしい。メイエリホリドのこの同じ手法が、もう一人の人物を創り出させてゐる。この人物は立派な服裝をした中年の軍人で狂氣じみた態度でいつでも夫人の後について來ては、やたらにピアノを彈く。第八場ではこの軍人は全く狂人のやうにピアノを亂打する。この男は夫人の愛がフレスタコフに向けられる度にピアノを亂打するところを見れば、彼は夫人を愛してゐて、その絶望を示してゐるらしく思はれる。第六の寢室の場で、夫人と娘がフレスタコフの寢室を覗いて、二人とも奇聲をたてるところや、第八の二つのキスの場は演出者の病的な敏感性を示してゐる。第七のコムミツションの場で、腐敗した官吏達が舞臺正面の別々の戸から出て來てコムミツションを差出すところは少し念が入りすぎてゐる。

その他この演出の特異な點を擧げると、原作では、フレスタコフのかへつた後、ほんとうの檢察官が來たといふ知らせを受けた時、各官吏は驚いて化石してしまふ形になるのを、ほんとうの人形を並べたり、市長が後に狂人になつて、自分の使つてゐた大勢の部下のために狹窄衣を着せられる點などであらうが、この最後の場面が中心が二つに別れて統一を失つてゐる傾きがあつた。要するにメイエリホリドの「檢察官」は彼の冒險性の偶然に成功した一例にすぎない、そのことは後に擧げるグレボイドフの「智慧の悲しみ」の失敗によつて證據立てられると思ふ。

（II）　裝甲列車（藝術座）

フセオドル・イワノフの「裝甲列車」は彼の小説を劇化したもので、私の見たソウエトの演劇の内で、最もソウエト式の特徴性を持つてゐるものであつた。私は私の友人のB君とこの芝居を見るために藝術座を訪ふたのは、四月七日（一九二八）の夜だつた。私達は、劇場を訪ふと、スタニスラウスキの美しい女秘書が出て來て親切に切符を渡して呉れた。その時はもう芝居が初つてゐたので、私達は一寸の間廊下に立つてゐなければならなかつた。B君は大變氣をもんで特別に私を入れやうとしたが、こゝの男案内人は少しも讓歩しなかつた。私はそれを却つて面白いと思つた。藝術座は開演中は絶對に客を觀客席に入れないことにしてゐる。

「裝甲列車」は白軍と赤軍の戰爭を描いたもので、この戰爭中に多數派（ボリシヰキー）のイデオロギーにより、資本主義的腐敗軍隊と戰ふ勇敢な「自衞團」の行動を忠實に描いてあるので、ドキユーメントとしても、アギートとしても最も貴重な文獻の一つといはなければならない。この芝居では、多數派の宣傳家で、模範的なゲラシウヰチと純樸な農民で、後では「自衞團」の勇敢な團長となるウエルシーニンといふ二人の人物が活躍してゐる。白軍の裝甲列車はつひに自衞團に奪ひ取られてしまつて、多數派が最後の勝利を得るといふ筋である。

やがて、第二幕目が開いた――舞臺は暗いシベリアの大[illegible]

とした鐵橋の下。こゝにコルチヤックの二人の士官が出て來る。一人は貴族出、一人は農民出、この二人の軍人と民衆との關係が短いシーンの間によく暗示されてゐる。最初は純朴な一個の農民に過ぎなかつたウエルシーニンが外來軍の侵略によつて、初めて人間としての自覺を得て來る。名優カチヤーロフはこのウエルシーニンに扮してゐたが、次第に英雄的になつて行く一個の人間をよく表現してゐた。百姓ウエルシーニンの妻の純情さも眞實だ。

（第三幕）はシベリアの小驛――「自衞團」が近づいて來るといふので、反動的民衆や乘客が狼狽を極めてゐる――こゝにも貴族出の士官と農民出の士官が對稱されてゐる。群集の扱ひ方の驚くべき手腕！白軍は「自衞團」の一名を捕へて銃殺してその靴を奪ふ。この光景は非常に強い印象を與へる。赤軍の味方で向日葵の實を賣つてゐる支那人のスパイの巧妙な研究、これに扮した俳優の用意周到さ。「自衞團」は近づいて來る、群集は狂氣のやうに叫ぶ「汽車を進めろ〳〵！」

（第四幕）古い教會堂の屋上――この場面はこの芝居で一番劇的な部分。こゝには農民ウエルシーニンに統率されてゐる勇敢な「自衞團」の一隊がゐる。アメリカの兵士が捕虜となつて來る。「自衞團」はこの兵士と話してゐる内に、彼は決して自分達の敵でない、却つて眞の人間としての友であることを發見する――「自衞團」はアメリカの兵士を憫いて泣く。鐵橋破壞の任を帶びた「自衞團」の一人がその責任を果さない、カチヤロフの扮したウエルシーニンは自己激勵の意味で涙を[illegible]

（第五幕）[illegible]によつて「自衞團」[illegible]て白軍の運轉する裝甲列車を[illegible]やうとする同志を、支那人の同志[illegible]る――闇の中に裝甲列車の轟しい音[illegible]

（第六幕）裝甲列車の中――[illegible]した白軍の士官[illegible]て發砲してゐる――ゲーリングの「自衞團」[illegible]射の研究――農民は遂に列車を占領した！[illegible]す、曉の近い夜を列車が驀く！

（第七幕）では皆に愛された多數派の參謀、[illegible]外來軍のスパイの爲めに暗殺される。

（第八幕）ステーションの近くの鐵工場――勇敢な[illegible]ウイチの遺骸がこゝに運ばれて來る――美しく、[illegible]やがて人々は手に手に武器を持つて正義の[illegible]美しく染められた、ウエルシーニンは死[illegible]景――汽車は音をたてゝ動出して行く！

この時、藝術座の觀客は熱狂して[illegible]舞臺の上に呼びかへした。

（III）「智慧の悲しみ」メイエ[illegible]

メイエリホリドの「智慧の悲しみ」を私の見たのは

たつた——私は七時半から友人の[illegible]君と凱旋門の近くのメイエリホリド劇場へ行つた。この作者のグレボイドフはプーシキン以前の作家で、ペルシヤの公使時代にペルシヤ人のために刺されて死んだ人である。私は演劇博物館で何氣なくこの作者を刺した鋭利な半月形のペルシヤの短刀の前に立たされてびつくりしたことがあつた。侵略主義の舊ロシヤの政策に對して刺客が反感を起したものである。然も自由のために殺されたグレボイドフはロシヤの最初の自由思想家を主人公とした戯曲の作者であり、そしてその作物がソウエト・ロシヤのコムニストの演出家によつて演出されてゐる——歴史は皮肉にも平氣にこの事を私達に語つてゐる。

この作物は二十年代のインテリゲンツアの煩悶を描いたもので、フランス風の自由主義の教育を受けたチヤツキといふ貴族の青年と當時のモスクワの堕落した老貴族との衝突を描き、眼醒めた青年貴族はすべてに失望してモスクワを捨てゝ去ることを描いたもので、日本では古く八杉氏の飜譯がある筈である。メイエリホリドがこのクラシックの戯曲を何んな手法で演出するかといふことは世間の注目的になつてゐた。「檢察官」の新演出に、ある種類の成功を收め得たメイエリホリドはこの演出に對する世間の期待を一層大きくした。

初演なので劇場は文士、俳優、舞臺監督等の專門家及びその他の有力家で一杯になつてゐた——私達は觀客の中に批評家のラガチエフスキー、文士のフエージン、舞臺監督のタイロフ、對外文化聯絡協會のカ

ゝメネゝ夫人なぞの顔を見た——
もつかず、寫實主義ともつかない不思議な
ンなしに觀客に對つて展開されてゐる、これに
に課してゐるXなのである。兎に角恐ろしく
る。舞臺兩側に飴色に塗られたヴェランダのやうな
のヴェランダには眞鍮のやうな手摺がついてゐる、
い足臺のあるオーケストラの臺がある、舞臺には
あつて、この置舞臺は左右のヴェランダの下の
やうになつてゐる——こゝにもメイエリホリドの
（この傾向は寧ろ惡癖といつていゝもの）がある。
て、私の友人に、メイエリホリドは「ビオ・メカニ
が、これは「ゼータク・メカニズム」だといつた
を惜しまずに造られたものである。ソウエト・ロシ
立とはいへもう少し簡素な裝置が出來さうなもの
嵐のやうな拍手が起つてメイエリホリドの瘦せた
雜作に舞臺の上に驅け出して來た、神經質的でありなが
は骨張つた手を振つてこの芝居の演出に關する抱負を簡單に說
はり出て來た時と同じやうな態度でひつこんで行つた。

メイエリホリドがひつこむと、すぐに鐘が鳴つた。左右三つづつの投光器が働き初めた。十七の場面が次ぎ〱に展開されて行く。裏の形で各場面の推移を示して見る。

としたゝ鐵橋の下。こゝにコルチヤックの二人の士官が出て來る。一人は貴族出、一人は農民出、この二人の軍人と民衆との關係が短いシーンの間によく暗示されてゐる。最初は純朴な一個の農民に過ぎなかつたウエルシーニンが外來軍の侵略によつて、初めて人間としての自覺を得て來る。名優カチヤーロフはこのウエルシーニンに扮してゐたが、次第に英雄的になつて行く一個の人間をよく表現してゐた。百姓ウエルシーニンの妻の純情さも眞實だ。

(第三幕)はシベリアの小驛――「自衛團」が近づいて來るといふので、反動的民衆や乘客が狼狽を極めてゐる――こゝにも貴族出の士官と農民出の士官が對稱されてゐる。　群集の扱ひ方の驚くべき手腕！白軍は「自衛團」の一名を捕へて銃殺してその靴を奪ふ。この光景は非常に強い印象を與へる。赤軍の味方で向日葵の實を賣つてゐる支那人のスパイの巧妙な研究、これに扮した俳優の用意周到さ。「自衛團」は近づいて來る、群集は狂氣のやうに叫ぶ「汽車を進めろ〱！」

(第四幕)古い教會堂の屋上――この場面はこの芝居で一番劇的な部分。こゝには農民ウエルシーニンに統率されてゐる勇敢な「自衛團」の一隊がゐる。アメリカの兵士が捕虜となつて來る。「自衛團」はこの兵士と話してゐる内に、彼は決して自分達の敵でなひ、却つて眞の人間としての友であることを發見する――「自衛團」はアメリカの兵士を慨いて泣く。鐵橋破壞の任を帶びた「自衛團」の一人がその責任を果さない、カチヤロフの扮したウエルシーニンは自己激勵の意味で涙を振つてその男を銃殺する。

(第五幕)では犠牲的精神によつて「自衛團」は各々自分の身を捨て白軍の運轉する裝甲列車を喰止めやうとする。今將に線路の上に臥やうとする同志を、支那人の同志は突然押分のけて自ら列車の下になる――闇の中に裝甲列車の怖しい音！

(第六幕)裝甲列車の中――疲勞し譫した白軍の士官達が民衆に對つて發砲してゐる――ゲーリングの「海戰」以上の猛烈さ――大砲の發射の研究――農民は遂に列車を占領した！一人の學生は列車を動かす、曉の近い夜を列車が動く！

(第七幕)では皆に愛された多數派の參謀、ゲラシウイチは憎むべき外來軍のスパイの爲めに暗殺される。

(第八幕)ステーションの近くの鐵工場――勇敢た死を遂げたゲラシウイチの遺骸がこゝに運ばれて來る――美しく、悲壯な告別の式！やがて人々は手に手に武器を持つて正義のための戰ひに行く――空は美しく染められた、ウエルシーニンは死者を弔ふ――廣い市街地の遠景――汽車は音をたてゝ動出して行く！

この時、藝術座の觀客は熱狂して幾度も幾度も名優カチヤーロフを舞臺の上に呼びかへした。

(III)「智慧の悲しみ」(メイエリホリド)

メイエリホリドの「智慧の悲しみ」を私の見たのは三月十二日の夜

[illegible]グレボイドフは[illegible]

[illegible]作家で、ペルシヤの公使時代にペルシヤ人のために殺されて死んだ人である。私は演劇博物館で何気なくこの作者を刺した鋭利な作用[illegible]時のペルシヤの短刀の前に立たされてびつくりしたことがあつた。彼が自由主義の爲にロシヤの政策に對して刺客が反感を起したものである。然しも自由のために殺されたグレボイドフはロシヤの最初の自由思想家を主人公とした戯曲の作者であり、そしてその作物がソウエト・ロシヤのコムムニストの演出家によつて演出されてゐる――歴史は皮肉にも不意にこの事を私達に語つてゐる。

この作物は二十年代のインテリゲンツアの煩悶を描いたもので、フランス風の自由主義の教育を受けたチヤツキといふ貴族の青年と當時のモスクワの墮落した老貴族との衝突を描き、眼醒めた青年貴族はすべてに失望してモスクワを捨てゝ去ることを描いたもので、日本では古く八杉氏の飜譯がある筈である。メイエリホリドがこのクラシツクの戯曲を何んな手法で演出するかといふことは世間の注目の的になつてゐた。「檢察官」の新演出に、ある種類の成功を收め得たメイエリホリドはこの演出に對する世間の期待を一層大きくした。

初演なので劇場は文士、俳優、舞臺監督等の専門家及びその他の有力家で一杯になつてゐた――私達は觀客の中に批評家のラガチエフスキー、文士のフエージン、舞臺監督のタイロフ、對外文化聯絡協會のカ[illegible]

[illegible]さて、[illegible]ンなしに觀客に對つて[illegible]されてゐる、これはメイエ[illegible]に認してゐる[illegible]である。更に[illegible]る。舞臺兩側に[illegible]色に塗られたヴエランダのやうなものがあつて、そのヴエランダには階段のやうな手摺がついてゐる、舞臺正面奥には高い足臺のあるオーケストラの臺がある、舞臺には三段に廻舞臺がしてあつて、この廻舞臺は左右のヴエランダの下の奈落の中に出入れされるやうになつてゐる――こゝにもメイエリホリドの歌舞伎好みの傾向（この傾向は寧ろ惡癖といつていゝもの）がある。私はこの舞臺を見て、私の友人に、メイエリホリドは「ビオ・メカニズム」といつてゐるが、これは「ゼータク・メカニズム」だといつた位ゐこの舞臺は費用を惜しまずに造られたものである。ソウエト・ロシヤの劇場は如何に孤立とはいへもう少し簡素な裝置が出來さうなものだと私は感じた。

嵐のやうな拍手が起つてメイエリホリドの痩せたノッポな身體が無雜作に舞臺の上に驅け出して來た、神經質的でありながら無邪氣な彼は骨張つた手を振つてこの芝居の演出に關する抱負を簡單に說べてやはり出て來た時と同じやうな態度でひつこんで行つた。

メイエリホリドがひつこむと、すぐに鈴が鳴つた。左右三つづつの投光器が働き初めた。十七の場面が次ぎ〳〵に展開されて行く。表の形で各場面の推移を示して見る。

(一)酒場——熱狂した男女が樂器に合はせて跳り狂つてゐる——赤と青の強烈な光(二)老貴族ファムソフの控へ室——女中のゐるところへ老貴族が忍び込んで來る、女中は貴族を嫌つて逃げまどう——當時の貴族の無爲と腐敗を示してゐる。(三)場所の變化は大膽に衝立によつて現はされる、この場面では正面に一つのドアを現はす衝立——こゝでも他の男が先きの女中にふざけかゝる——當時の貴族に共通な風習らしい。そこへ老貴族とその娘のマルチヤが出て來る。この娘にはメイエリホリド夫人が扮してゐる——イズヴエチアの劇評家はメイエリホリドは夫人に着物を着替へさせたいためにこの芝居をやつたのだらうと惡口を言つてゐた。(四)ダンスの稽古場——これも當時の貴族の生活を現はすために描いたものらしい——貴族の女達が外國のダンスの女師匠についてダンスの稽古をしてゐる、男の音樂者がおど〱しながらピアノを彈いてゐる、女中は貴族達の衣裳を丹念に整理してゐる。こゝにクラスの對立の幽かな暗示がある。(五)肖像畫の室——こゝでは北極探險者のやうな服裝をした人物が一人立つてゐる。その男が厚い着物を一枚づつ幾枚も脱いで行く、その形の中に當時の貴族のぜいた

アノに對ふ。(六)長椅子の間——老人はたらしたく、[illegible]の青年に談話筆記をさせてゐる。老貴族とチヤツキの正面衝突がこの場で初めて行はれる——彼等はイデオロギーに於ても趣味の上に於ても全く妥協し難い世界にゐることが發見される。チヤツキに扮した若い俳優は「レキゾル」ではフレスタコフに扮した人。老貴族とチヤツキは烈しい論爭を眺める(七)玉突場と讀書室——前の舞台は玉突場で後の舞台は讀書室になつて、こゝに當時の新舊二つの生活の對立を示してゐる——前の舞台では老貴族は軍人達と玉を突き酒を飲んでゐる、後の舞台ではチヤツキは自由思想に影響されてゐる四五人の青年達と讀書をしたり、議論をしたりしてゐる。この場面はお互に交渉なしに行はれる。この對立は觀客に何か深いものを投げ與へた。(八)白い廣間——貴族の娘マルチヤがソフアに倒れてゐる、腕に負傷をした一人の青年と武裝した氣取屋の軍人とが同時に娘を看護しやうとする。軍人が立派な花輪を買つて來ると青年と娘がキスをしてゐるといふ滑稽な場面がある——この時正面上の大きな臺の上に五十人ほどのオーケス

と[illegible]るところが一幕目になつてゐる―ここにもメイエ[illegible]舞台は[illegible]截染が裁はれてゐる。(三)夜會が始つた、オーケストラの[illegible]の窓から吹き込まれて來る。やゝポンチ化された貴族の男女が出て來る、盛んなダンスが始まる―チヤツキと七人の眞面目た青年は衝立の手前に眞面目に論じ合つてゐる―後方の光線は消されても暗い光の中でダンスをつゞけさせて置くのは面白い。この場面も何かを投げ與へる(四)大食堂―これは驚いた、舞台前面は兩袖まで大食堂で七八十人の貴族がテイブルに對つて食事をしてゐる。貴族達は馬鹿らしい會話をつゞけながら食事をしてゐるところへ、右手花道(メイエリホリドは觀客席の一部を遠慮なく花道にしてゐる)から青年チヤツキはハムレツトのやうな容子をして食堂を横ぎつて行く、貴族達は無言のまゝチヤツキの姿を見送る―「可愛相にチヤツキは頭が變になりましたね!」といふ言葉を歌舞伎の科白のやうに受渡して行く(五)娘と軍人、チヤツキは淋しくピアノに對ふ―チヤツキの絶望はだんく深くなつて行く(六)赤い衝立―テーブルの上には酒と果物、多勢の女がヴエランダの上を行列を組みながら通つて行く―皆行つた後でチヤツキは淋しさうに椅子によつてピアノを彈く、非常な淋しい曲のピアノ(七)白の衝立―一人の青年は女中を追ふて行く、娘はその青年を追ふて來る―女は失望―老貴族は突然出て來てウエランダの上でピストルを射る、何んの爲めにピストルを射るのか少しも理解されない[illegible]がまた暗い[illegible]たのだ…………

（四）「リユボヒ・ヤロワヤ」（ヤロワヤの戀）（小劇場）

トレニイエフの「リユボヒ・ヤロワヤ」を小劇場に見たのは私の歸國に間もない四月の二十七日だつた。私は去年のシーズンの内の最も成功した芝居の一つとして「リユボヒ・ヤロワヤ」の名を度々人にきかされてゐたので、この芝居を見る前に可なり好奇を感じてゐた。私はこの夜、ユデヤ演劇運動の先驅者で、甞つて東京で逢つたことのあるヒルシペーン夫妻を劇場内で見たことも記憶すべき出來事の一つである。マダム・ヒルシペーンは印度の頭巾を頭に卷いてゐたが、二人はモスクワでの再會をひどく喜んで呉れた。

「リユボヒ・ヤロワーヤ」はヤロワーヤ夫妻が「赤」「白」兩軍に別れ別れに屬して、妻は赤軍のスパイとして白軍の中に入り込み、夫は白軍の士官として働いてゐるが、この二人は自分の持つてゐるイデオロギーと個人としての感情との矛盾に苦しめられたが、妻のヤロワーヤは夫の死に際して敢然として自己のイデオロギーに就くといふ筋で、ソウエト革命の成功の裏面に潜んでゐる人間の苦痛を描いてゐる。舞臺は堅實な寫實主義的構成主義で、四場ほどの舞臺を立體的に組合はせて、絶えずそれを廻轉させて行く。兩方の世界を交錯させて

表現してゐるところにこの作者の技巧が伺はれる。何處ともなく日本の時代物の技巧に似てゐる點がある。たゞ日本の時代物では「赤」と「白」が最後に妥協することによつて終りを告げてゐるのに反して、この芝居では妥協を捨てゝイデオロギーに忠實であることによつて終局を告げてゐる。また小さな表を掲げて芝居の進行を示して見やう。

(一)最初の幕では(無論カーテンなし)(表)が赤軍の活動を示し(裏)が白軍の生活で、終りは白軍と宗教家の行列や祈禱のポンチ化で結んでゐる。(數千人の觀客はこのポンチ化を見て一度に笑聲を立てた)。(二)第一場の赤軍の陣營が今白軍のために占領されてゐる。女主人公のヤロワーヤは眺めてこゝに姿を表はして來る――ヤロワーヤは中年の理智的なしつかりした體格の女、彼女は他の同志と共に白軍の中に入り込んで行く――白軍の陣營では、赤の代りに三色旗が掲げられる。ダンスの知らせ、美しい一人の女性がこの陣營にゐる、この女性を取り巻く三人の高等武官の戀愛。この武官達のポンチ化(裏)白軍の本部、命令、秘密の書類、男のスパイ(四)最初の舞臺にかへる――牧師と婆さんがボリシヰキの噂さをしてゐる、イデオロギーに對する不理解を示すポンチ化。プロフエソルといふ名のついた老人が監獄から出される。この人物はインテリゲンツアの

情と自分のイデオロギーとの矛盾のために苦しむ。ワ、地主、インテリゲンツアの一團が白軍の司令官に讃辭を呈するためにやつて來る。インテリゲンツアだけ讃辭を阻止されるところも巧妙、司令官は數百の讃辭に對して「プラガダリユー!」(ありがたう!」と一言言つてそつくりかへる形などは實に巧妙なもの。――ここではヤロワーヤは再びその夫と逢ふことになる、夫妻は戰爭のことについて語り合ふ。夫は、民衆は自由を欲してゐる、然し、それは革命によつて得られはしない、今は戰ふべき時である、最後まで戰はなければならない――夫妻はまた別々の世界に別れて行く(六)立派なレストオラント、夜――ダンスが始る、戀の場面がある――ボリシヰキがゐるといふ噂さが突然持上る、レストオラントの全會集が叫び廻る、白軍の娘子軍の士官が氣絶するといふやうな可笑味がある(七)赤軍が次第に力を得て來る。ブルジョワの轉倒する形、逃げまとう有產階級のポンチ化、大きな蓄音機の喇叭や、コルセットをかゝへて逃げ廻る人々――口々に「アフトモビール!」「アフトモビール!」を叫ぶ――僧侶は大きなトランクをかゝへて逃げ廻はる――赤軍の兵士とヤロワーヤ

[illegible]（これは小山内氏も書いてゐられたときいたが、私はこの芝居（新派の芝居の定義では芝居とはいへない）を見て初めてソウエト・ロシヤに全く新しい藝術が發生してゐるなと感じた——私のこの芝居を見たのは四月廿四日で、ナルコムヒン（文部省）の附屬劇場であつた。この芝居の團體は失業者組合によつて組織されてゐるもので、俳優は天才ある監督の下に置かれて非常な訓練を經たものである。この芝居はスポーツと演劇とを調和させたやうなもので、背景はなく、肉體のスポーツ的訓練を基本として勞働と生産を讃美し、ソウエトのイデオロギーを藝術的に表現しやうとしたものである——數十のリパートリーの內、私達の見たもの丶二三を左に揭げて見やう。右手に大きなピアノが一臺置いてある——舞臺裝置はない、監督者が出て自分達の芝居の主旨を簡單にのべて行く。

(一)楯を持つ舞踊——（楯には機械、大砲、工場、電燈、赤衛軍の繪が構成主義的手法で描かれてゐる）楯を持つた男女はスポーツマンのやうな立派な肉體をして舞臺に練り出して來る。すべて俳優の動作は立派な音樂に伴はれる——インダストリゼーシヤン、エレクトリゼーシヤン、ラツオナリゼーシヤンといふ意味のことを言つてソウエトの社會的欲求を示す——楯を組合はせると、時計の形、齒車の形、工場の形、星の形になり最後に赤煉瓦の形になる。

(二)八人の男女の舞踊——コツクのやうな服裝をした八人の男女が愉快さうに唄ひながら踊り廻る——歌の文句の一つに「己れ達は何んにもいはない……」といふやうなのがあつた。これは生活の喜びを示したものだらうと思つた。（或はサチール風の意味を持つてゐるものかも知れない）

(三)コムソムル、コムソムルカの舞踊——この一團は[illegible]を音樂に合はせて演じ、最後にピオニーロの[illegible]たダンスにな[illegible]る。楯を[illegible]く時の形はすてき。

(四)二人の男女が舞臺の左右に立つて男女のダンサーの形を説明して行く——ダンサーは音樂につれて、スポーツ的訓練で、色々な形を表現して行く——鍛冶屋の形、あらゆる機械の形、色々な作業の形（例へば鐵材、木材を運ぶ形）を人間の肉體で表はして行く、最後にタンクの形。

(五)プロレタリア詩人、キリサーノフ（「日露藝術」にこの詩人の譯詩があつた）の詩を基調としたダンスをおどる——赤い大黒帽を冠つた人々が二つの旗を持つて來て、おどりながら一つの旗をすてる。すてられた旗は英國の資本主義を示してゐる。

(六)ロシアの村落のパロデー——はロシヤの農民の生活を示してゐる、歌もダンスも實に立派なものである。これはや丶農民に對するサチール的な意味があるらしく思はれた。この他色々なものがあるが、最後に、

(七)綜合オーケストラ——といふ不思議な音樂があつた。このオーケストラは手近かにあるあらゆる樂器もしくは音樂的要素を取入れて一つのオーケストラを作るのである。メガホン、呼りん、鐘、カスターネツト、木琴色々なものが不思議な調和を示して來る——二人の女の人が櫛のやうなものに薄い紙をあて丶鋭い不思議な音をたて丶ゐるのも耳に止つた。

（一九二八、[illegible]

デュポン博士の妻

―凡愚列傳のうち―

長谷川如是閑

一

「然し君方若い連中では、まだ二三十年間に亘る女の話を、自分の體驗として話し得る資格のあるものはない譯だね。」

學生達に圍まれた、最早停年に間もなさ相なA教授は、さういつてシガーの煙を吹きながら一同を見廻したが、その時、學生達はいろ〱の典型の女性について話してゐたのだ。

「それはどういふ典型の女です？」

「體驗といはれるから、創作に出て來る人物ぢやないでせうね？」

「先生にも女に關する體驗があるのですか？」

學生は口々にそんなことをいつてゐる。

「さう一時にいろ〱のことを聽かれても返事に困る。まあ解釋は君等に任かせて、僕は事實だけを話さうか。然し可なり長い話だよ。」

「長くてもいゝから話して下さい。先生の女の話でもマルマル先生の講義をきいてゐるよりは增しでせう。」

「失敬なことをいつて後で謝罪するなよ。何しろ話の規模が大いぞ。舞臺は日本からヨーロッパ、アフリカに亘り、人物は黃人、白人、半黑人を含み、時間は約三十年に亘つてゐるのだからね。」

「大きいや、ポチポチ先生の講義の前置きそつくりですぜ。」

「混ぜ返すな。……話は大分昔に溯るのだ。さう、明治何年か……とにかく日清戰爭と日露戰爭の中間だと思ひ給へ。何しろ我輩の學生時代だからね、君等はまだ母の胎内どころか、兩親の青春期に於ける妄想の中を走り廻つてゐた頃のことだ。僕は何かの必要から、急に學校の餘暇にフランス語を習はうと思ひ立つたのだ。所が適當な先生が見つからないで困つたね。その頃は漢學や數學や英語の個人教授を私宅でやつてゐるのはちよい〱見かけたものだが、そんなものは今日

ではもう無くなつたね。それは皆、看板だけ馬鹿に大い、貸長屋の軒先きから閾に達するほどの大きさの奴をぶら下げてゐたものだ。今ぢや仙台の師團司令部へでも行かなければあんな大きい看板は見當らないが、そいつに織谷流とか晩稼流とかいつたやうな字體で、堂々と何々學舍、何々義塾なんて看板相應に大い名を掲げてゐるが、家の中に入ると、六疊に四疊半位の家で、飯時分に行くと、隣の部屋で細君が膳立をしてゐるのが丸見へで、こつちの腹のへつてゐる時などは稽古がちつとも身に入らないで弱らせられたものだ。

『所がさういふ所を方々廻つて見たが、フランス語を教へてくれるといふ所は一軒もなく、頗る閉口して、危うく諦めてしまはうとした時に、ある日神田の小川町邊の狹い横町を通ると——今はもうその邊は燒つてしまつて見當がつかなくなつたが、その横町を通つてゐると、ふとフランス語教授の看板を見つけた。それはまた例の師團司令部の正反對に馬鹿に小さい看板で、羊羹の折の蓋か何かを間に合はせたものらしいのだ。それに銹釘流の、今でこそあんな銹釘流も珍らしくはないが、その頃としては、日本人の字としては珍らしい悪筆で『フランス語教授』とかいてある。無論、たゞ通り過ぎたら見落してしまふ所だ

ら、嗅かい、うま相な香ひか……方を見て、譯もなく逡巡してゐると、ふと目に入つたのが……ンス語教授」の看板だつたのさ。食慾も時には智識慾の補助機關の役をするものだね。

『で近よつてその看板をよく見ると、下の方に更らに小さく「チュポン博士」と書いてある。なほよく見ると、その傍に更らに小さく、これはフランス語で Docteur en theologie とかいてある。何んで「博士」だけ原文を添へたのかわからないが、とにかくその文句が長いので、名前を書く余白はもうなくなつてゐるので名前の原文は省略したものだらうが、それにしても「チュポン」とは何う綴るのだらうと考へてゐると、又嗅か相た燒芋の香がしたので、そのチュポンを「燒芋十本」と、僕自身で飜譯してしまつたよ。

『で燒芋屋にも充分執着を感じてゐたが、先づ知識慾の方を先きにして——そこが我輩の我輩たる所以だね——取りあへず、十本博士の門を叩くこととした。

『でその燒芋屋と、今一軒は何だつたか覺へないが、その間の、全く

「デュッポンさんの家ですかい？　この路地ですよ」

といふのだ。親爺は躊躇して、明かに「千本さん」といった。

「でも此路地には家なんかないぢやありませんか？」

といふと、親爺は、こんどは丁寧に、露路の入口に出て來て、突當りを指しながら、

「それ、あの板塀に潜戸がありませう、あれを開けて入ると、右の方に臺所が見へますが、そつちへ行つちやいけねへ、左の方を見ると離れの椽先が見えますからね。それがデュッポンさんの部屋でさ。」

と教へてくれた。僕はすぐにも燒芋を買つてやりたい程、この親爺の親切な説明に感謝したが、それは歸りのことゝして、教へられた通り、潜戸を開けて入つて行つた。

「成程、右の方に臺所があつて、その横に土藏がある。その土藏を中に置いて、左の方を見ると、風流な門があつて、その奥は洒落れた庭になつてゐる。扉もない門なので、構はず入つて、椽先へ立つたが、座敷も中々洒落れた作りで、今考へて見ると、茶人の隱居所といふ所だね。

「けれども誰れも居ないぢやないか。座敷の殆んど中央に、立派なデスクがあつて、大きい回轉椅子が一つと、外に長椅子が一つ小椅子が一つあつたが、人の居相な氣はひもない。僕は、先方がフランス人で

には、

「御免下さい。」

と怒鳴つた。けれども返事がない。日本語なので、解らないのぢやないかと思つたが、然し、人間の聲といふことさへわかれば、誰れかが出て來る筈だ。もう一遍、今度は、一層大きい聲で「御免下さい。」と怒鳴つて見た。

「依然として返事がない。仕方なしに、又扉のない門を出て、臺所の方へ廻つて腰障子の外から前の通りの「御免下さい」を怒鳴つてやつたら、中から、女の聲で、

「何屋さん？」

といはれたので、大に面喰つたが、腹も立つたので、

「フランス語を教へていたゞきたいのです。」

と怒鳴ると、中で涼しい女の笑聲がして、腰障子をあけて、その女が現はれた。見ると、女中らしいが、中々美人でね。尤もその時分の我々にとつては、女の若いのは皆美人だつたのだが、然し、この女の印象は、數十年後の今日、なほそのアフター・イメージが我輩の腦裡から全く消え去つてしまはない所を見ると、やつぱり相應美人だつたのだらうね。

「でこちらは、新らためてどぎまぎして、咽喉をつまらしてグウ〳〵

いつてゐると、女も、今の笑ひがまだやまないので、口がきけずに、しかもその口を手の甲などで蔽ひかくしもせずに、美しい齒を見せて、身體をゆすりながらアハ〳〵笑つてゐるのだ。僕も仕方なしにお交際に苦笑してゐると、漸く女は、

「何うも失禮しました。」

と丁寧にお辭儀をしてあやまる。それに釣られてこつちもお辭儀をする。そんなことをしてゐる中に、後ろの方で、いきなり、變なかすれ聲で、英語のやうなことを怒鳴るのが耳に入つた。

「僕は驚いて、後へ向き直ると、更らに、

「カム・ヒア・マイ・ボーイ。」

と今度はその英語がきゝ取れた。見ると、例の門の内の座敷の椽先きに、西洋人が突立つて、頻りに顋を動かして、僕を招んでゐるのが見える。

「僕は危うく美人に挨拶するのを忘れて、そつちへ駈け出さうとしたが、その時また美人の涼しい笑ひ聲が耳に入つたので、ふり返つて、

「ありがたう」と怒鳴つたね。

の耳は全く眉のために押しつけられてしまつてゐる。
の邊は、それと反對に右の方が後方へと捻ぢ曲つたやうに突出てゐる
て、その頃の駄洒落で「捻ぢん棒」とか何とかいつて頑固な奴のそん
な風に捻ぢくれたのがあつたが、全くその眉だね。生れたての赤ん坊
の頭と足を兩手にもつて手拭を絞るやうな工合に捻るとあんな風な人
間が出來上るかも知れない。とても尋常の形ぢやないね。フランスに
たつてザラにある形ぢやなからうよ。

『そのフランス人の顏がまた身體相應に複雜なのだ。眼は二つあるには相違ないが右の方の眼は隣の鼻を見まいとして逃げてゐるといつたやうに、六十度の角度に向つて飛び放れてゐて、殆んど眉毛の先きに――といひたいが、鼻は上に乘つかつてゐるので、それがため眉毛が中斷されて、その代りとして、赤くまくれた眼瞼が装飾的に一の場所を取つて」ゐる。而かもその眼と遙か下の方にある口の、その目と反射角をなして同じく右の下方へ六十度の傾斜で引き延ばされてゐる脣との間に亘つて、南北アメリカの形をした連續した二つの引ツつりがある。

はきりに、[illegible]

「この館にしろ、錯覺にしろ、あとでこそ可笑しいとも思つ[illegible]、大抵それを見た時には、笑ふ所か、鬼氣のする程氣持に感じがして、一體他の見てゐるのは人間か知ら？と思つたね。全く薄氣味がわるいが、逃げて歸る譯にも行かないので、もぢ〳〵してゐると、そのフランス人が頻りに頤をしやくつて座敷に上れと命令する。仕方なしに上つて、彼れの頤の向いてゐる方を見ると長椅子があつたので、それに腰をかけてしまつた。

『然るに、デュポン博士は中々自分の回轉椅子の所へやつて來ない。何をしてゐるのかと、ふりかへつて見ると、頻りに爪先きで身體をもがいてゐる。僕はてつきり、先生、急病が起つたなと思つたので、大に面喰つて、長椅子から跳ね上つて、先生の傍へ行つて、「先生何うかしましたか、」といはうとしたが相憎それが急に英語で出て來ないぢやないか。暫くして口から出まかせに、『ワッツ・マッター・ウヰズ・ユー？アー・ユー・イル？』なんかと頻りに繰り返すが、それがちつとも通じない樣子で、先生、頗る緊張した顏で僕の顏をジロ〳〵見ながら、やつぱり泳ぎの稽古をしてゐるやうな恰好でもがいてゐる。『今にもぶつ倒れ相な樣子だつたが、そんな風にもがいてゐるうちに、いつのまにか、回轉椅子の所まで來て、やつとそれに腰をかけた。僕は又「アー・ユー・イル？」を繰り返すと、先生、眞面目な顏をして、頻りと首をふつてゐたが、やがて、

[illegible]

といふ[illegible]

んだがね、僕は餘計可笑しみの強い[illegible]へ入つたと思つて、何とかいつてやりたいと文句を考へてゐると、先生僅かに、僕がびつくりして飛び上つた程の聲で笑ひ出すぢやないか。それがまた何ともいへない不思議な聲で、とても人間の笑ひ聲とは思へない。といつて動物の聲でもなし強ひて云へば、豚が喘息をやんだやうな聲とでもいはうか、しかもその聲が先生の喉から外へ出ないで、內に入つて行くのだから頗る珍だね。笑聲を發してゐるのでなくて、笑聲を吸つてゐるのだね。そいつが吸ひ切れないで四苦八苦といふ恰好だ。嚏でもしてゐるのだと、背中を擦つてやるといふこともあるが、笑つてゐるには相違ないらしいから、さうも行かず、僕はフランス語で笑ふとこんな聲が出るのか知らんと、愚にもつかないことを考へながら、先生の笑ひやむのを待つてゐるが、中々やまない。

『呆れ返つて、更めて先生の顏を眺めると驚いたね。聲は確かに笑ひ聲だが、その顏は、どう見ても泣き顏だらうぢやないか。目尻と口の端を、子供がべそをかいたやうにへし曲げて、白なまずのやうな斑の一杯にある顏を、紙屑のやうに皺だらけにして、その片面だけ、まるで電氣でもかけられたやうにピク〳〵震動させてゐる。さうして、涙がポロ〳〵垂れる、水洟と涎がだら〳〵流れる。だらしのない事夥しい。横腹に兩手をあてゝ、頻りに悶えてゐるところを見るとやつぱり

笑つてゐるらしいが、顔を見ると、何うしても泣いてゐるとしか思はれない。僕は、モーパッサンの英譯で、よく、「大に笑つて、殆んど泣いてゐる」といふやうな文句のあつたのを想ひ出して、「こいつだな」と思つて見たが、それにしても、もういゝ加減やみ相なものだと思つて待つてゐるけれども、何うしてもやまない。しまひには僕も聊か腹が立つて、思はずまた「ワッツ・マッター」をやつたが、まるで扇風器に紙丸をぶつたやうに刎ね飛はされて、博士の苦悶は一層激烈を加へるばかりだ。

『その時、突然、例の扉のない門をくゞつて一人の洋裝の婦人が飛び込んで來た、と思ふと、靴もぬがずに座敷に上つて、いきなり博士を正面から抱き上げて、僕の方からはその女の身體の陰になつて見えなかつたが、何かやつてゐるうちに、急にその恐ろしい笑聲が已んで、それこそ大風の後のやうに靜かになつた。

『婦人は博士をもとのやうに椅子にかけさせて、こつちを向き直つたが、見ると、その顔は薄墨をぬつたやうな黑い色で、インド人より白いやうだが、エジプトかアラビア邊の人間だらうと思はれた。――尤も

もしまいか、それでも實物に出喰はしたら多少面喰ふだらう、我我の時代では、そんな女の實物は愚か寫眞も見たことはないのだから、僕のぞつとした氣持は察すべきだらう。そいつの、黄昏の空に瞬いてゐる二つの星のやうな眼――といふ形容は受賣りだが顔が黑いから闇の空だね――そんな眼で凝つとこつちを見られた時には、我輩の青春の血は心臓から頭の方へ龍卷きのやうに昇つて來たので、我輩はグラ〳〵として、四方が急に眞暗になつたやうに感じたね。

『龍卷が終つて再びその婦人の顔を我輩の面前に見出したが、それに比較すべき女性について全く無知識な僕も、たゞ一人、クレオパトラといふ女のあつたことを想ひ出して、この女こそ、あの有名な淫蕩な女王そのものであるまいかと思つた。尤も我輩が畫で見たクレオパトラはもつと眞白ろだが、實際はやつぱりあの邊の女なのだから、この女位の色合だつたらう。然し、この女は可なり年はとつてゐる樣子で、頰の邊によくお伯母さんに見るやうな縱皺がよつてゐる。確かにアントニーに七八年は死に遲れたクレオパトラだね。

『恐らく我輩が眺めてゐる

フランス一式代といふ言葉と、それをいつか[illegible]りきと[illegible]が余りに烈しいコントラストを為してゐるので、僕は思はず吹き出してしまつたね。

「何にしても、僕は突然變な所へ飛び込んで、つゞけ様に異様な外國人に出喰はしたので、殆んど顛倒してしまつて、一體俺は何處にゐるのだらうと考へたね。これで家が日本造りでなくて、今の帝國ホテルのやうな所だつたら、僕はとても現實の世界にゐるとは思はなかつたらうよ。で茫然としてゐると、眼の前の博士は、手巾を出して、頻りに捻ぢ曲つた髭や顎の邊を拭いてゐたが、やがて、僕に向つて、

「お前はフランス語を習ひたいのか？」

と云つて、なほ何かいつたが、學校の先生の英語の發音とは大分違ふやうでちつともわからなかつた。同様にこつちの英語も向ふに通じ惡いらしく、丁度歌舞伎の「だんまり」のやうに、双方で英國人の英語でない英語を手さぐりで渡し合つて偶々手の觸つた分だけで話をすゝめた譯さ。

『デュポン博士——Dupont と綴るのだ相だ。だからこれから發音を更めてデュポンとするよ。——のいふ所によると、先生、語學の教授には大に自信があつて、英語を少しでもやつたものなら、少くとも半年位でフランス語を話し、且つ書けるやうにして見せるといふのだ。さうして、デスクの上の紙片を僕に見せやうとするのだが、その紙をもつ博士の手つきが亦珍で、一枚の紙切れを持つのに、まるで、泥棒の[illegible]のやうな手つきをして、[illegible]開めて、その指の間に紙切れを挟んで僕の前へ突きつけるのだが、僕はその紙を見ないで、博士の手ばかり見てゐたよ。

「博士は、その紙に書いてあるのはフランス文の手紙だが、それに博士の教へた東京大學の卒業生が箱根から先生に寄したもので、この紳士は六ヶ月先生についたに過ぎないがもうこの通り立派なフランス文を書くやうになつたといふのである。博士は手紙の文句を指先で差しながら一字〱讀んできかせるのだが、その指先はブル〱震へてゐて、手紙の上をあつちへ行きこつちへ行きしてゐるので、先生讀みながら「こゝのグランマーが間違つてゐる」などといふけれども、指先を見てゐると、上から下まで全部間違つてゐることになる。

『それが終ると、博士はじり〱と椅子から身體をもち上げたが、やがてまた先刻緣先きでやつたやうに、曲つた身體をいよ〱曲り〱ながら苦悶を始めた。こいつはまた「アー・ユー・イルー」が始まつたなと思つて、僕もわれ知らず立ち上つて、ぶつ倒れたら抱き止めやうと身構へてゐると、博士の身體は、いつのまにか椅子から離れて、背後の書棚の方へ近づいて行つた。僕は漸く氣がついた。それは急病の發作ではなくて、博士一流の歩き方だつたのだ。人騒がせの歩き方もあつたものだと思つたね。

博士は書棚からノートのやうなものを取り出して、又苦悶を始めると自づから元の椅子へと納まつて、そのノートをひろげて、それが皆自分

の考案になつた獨特の教授法で、教科書なんぞは一切使はず、すべてこのノートによつて教授すると、忽ち今の紳士のやうに、六ケ月で書くことも話すことも相應に出來るやうになるといつて、終りに、

「しかもそれでオンリー五十錢だ。」

といふやうなことをつけ加へた。僕はその五十錢の意味がわからないので、質問すると、博士は頻りに何かしやべるけれども、さつぱりわからない、たゞ何とか「フイー」といつたやうなので、之を要するに月謝のことだらうと思つたが、餘り安いので、

「五十錢？」

とダメを押すと、

「オー・イエス、五十錢。」

といつて何度か頷いて見せる。その時分は、月謝も安かつたが、然し例の何々學舍、何々義塾のやうな所でも月謝は大抵一圓は取つたものだ。西洋人で五十錢は少し安いと思つたが、然し、このフランス人の説明によると、こゝは一週間に三日だけ通ふ定めで、一日二時間教へるといふのだから、月謝も從つて半額なのだらうと思つた。とにかく馬鹿に安い所が氣に入つて、早速入學を申込んで、僕の住所姓名をローマ字で書いて、……

へない奴があるか、人な……

「無論拂ふ。」

と答へた。すると博士も滿足らしく頷いたが、デスクの上の五十錢銀貨を、博士は例の變な手つきでジリジリと僕の方へ押しやりながら、

「今日の分は要らぬ、この次ぎから拂へ。」

といふ。又變なことをいひ出したなと思つて、

「これは月謝だ。」

といふと、先生、急に眞面目な顔をして、右の手を高く上げて、かぢかんだ人差指を一本見せて、その手を二三度上下に振りながら、

「一時間。」

と大きな聲でいつて、次ぎに、同じく左の手を擧げて、鷲の爪のやうな指を辛うじて五本とも開いて、

「五拾錢。」

と怒鳴つた。五十錢は月謝ではなく、一時間の値段だつたのだ。

書生の我輩は、大に度膽をぬかれて、博士の差上げた兩手を、突然中空に現はれた二つの妖怪でも見上げるやうに、……

「さう思ふと、急に、我慢も何もついたら　いくら[illegible]だつて、隣席人がさう險惡な眼附で、個人教授などする筈がない。何んぼ[illegible]らずの學生でも月五十錢で西洋人に個人教授をうけやうなどといふのは、虫のいゝのを通り越して、寧ろ圖々しい位だ。さう氣がつくと、流石の我輩も、顔から火が出るやうな氣がして、穴があれば入りたいとは全くこのことだと思つた。

「然し、元來このフランス人が西洋人などと稱する資格があるかい。こんな變手古な恰好をして、もし日本人だつたら腕車に乘つて二本の棒で往來を漕いで歩く連中と見られても理窟は云へやしない。だから僕だつて、西洋人を相手にしてゐる氣がしなかつたから――腕車の連中を相手にしてゐる氣になつて、一ヶ月五十錢と獨り合點をした譯だ。」

そんな風にも考へて見たが、依然として氣まりの惡いことに變りはなかつた。出した五十錢銀貨を眞赤になつて引込めながら、もし僕が靴を穿いて來たんでなかつたら、すぐと下駄をつゝかけて逃げ出す筈だつたが、相憎編み上げをぬいで上つてゐるので、すぐと驅け出すわけにも行かない。居るに居られず逃げるに逃げられず、進退谷つてモジ〳〵してゐると、博士は氣の毒だと思つたのだらう、慰めるやうな調子で頻りと、何かいつてくれるのだが、こつちはすつかり逆上せてゐるから、一言半句もわからない、わかつたつて何うにもなる話ぢやないがね。すると、博士は私の手を、その蜘蛛の足のやうな指をもつた掌一杯に[illegible]ドル・パイ[illegible]といつて[illegible][illegible]入れてもしたやうに[illegible]て、夢中で[illegible]つかけて、[illegible]もしないで、このまゝ逃げ出してしまつた。お蔭で歸りには買つてやる筈の娘の玩具のことなんかすつかり忘れて、道々も、まるで目の前にデュポン博士の[illegible]つた姿が見えてゐるやうに、冷汗をかき續けながら下宿へ歸つた譯さ。

『所が翌日學校へ出かけやうとして、自分の靴をとり出して見るとそれはまるで違つた靴ぢやないか。同じやうなふるさではあるが、自分のよりは遙か上等らしい品で、腐つても鯛といつた工合だ。下宿の爺に聽いて見たが、下宿人のうちにはそんな靴を穿いてゐるものはないといふ。よく考へて見ると、確かに昨日デュポン博士の所で、先生の靴を間違つて穿いて來たに違ひない。さう氣がつくと堪へず寒氣がしたね。二つの妖星が眼の前に現はれて、『一時間』『五十錢』と高く呼ばつてゐる聲が耳元に響いてゐるやうな氣がしてゐるのだ。

「でもその靴はどうしても取り代へに行かなければならない。此方の靴の方が上等だつたらそのまゝでもよからうが、向ふが上等なのだから、このまゝ濟ませば、日本人は狡いと思はれるに違ひないから困惑である。氣まりの惡いことなど考へては居られない、といふことになつたが、確かに閉口したね。たゞさへ口出しの出來ない所へ、「エキスキューズ、ミー」、私は、私の[illegible]に向つて次の[illegible]をとつ[illegible]

どの面下げていつて行かれると思ふ。考へても冷汗が出る。
『で僕はこの靴を取り代へに行くには、何うしても十二圓の月謝を工面して、一月でも博士の所へ通ふことにして、差引をつけねばならないと考へた。今から考へて見ると、何ういふロジックでそんな風に思ひこんだものか全くわからないが、とにかくさう思ひ込んで、金の工面を考へたが、無論、十二圓といふ大金がさう安々と出來る筈がない。殊に急に迫つてゐて、貯蓄なんぞを待つてはゐられない。で仕方なしに夏の物をあらひざらひ質屋へ持ち込んで强硬に談判したが、何うしても六圓しか貸しやがらない。然し、六圓でも一時間五十錢づつとすれば十二時間は拂へる。一日二時間の所を一時間半にして貰つて、一週三日の所を二日にすれば、六圓で丁度一月分ある勘定だ。よし、さうして貰はうと考へて、早速その靴をぶら下げて、下駄穿きで出かけた。逃げる時の用意ではない、靴が一足しかないので、博士の靴を穿いて行かぬ限り、下駄で行くより仕方が無かつたのだ。
『今度は、此方も一々指を使つて、何うやらかうやら談判を終つて、愈我輩は、デュポン博士の弟子といふことになつた。無論、次ぎの月の工面のつくあてはないのだから、一月限りの弟子の筈だつたが、は大違ひたといつて、とう〳〵[illegible]が、來月はもう金の出來る見込がないから來ないだらうと[illegible]まつた。所がそれをきいて博士は大に感服した樣子で、――無論博士は、僕が靴を間違へたゝめに、そんな破目になつたとは知る筈がないから、感心な青年だと思つたのだらう。月謝を半分にまけてやるといひ出した。さうして今度はフランス語で、然し間違はないやうに一トケ月三圓」といつて、一本の指と三本の指を見せた。
『三圓も無論苦痛だが、さうまでいはれて後へ引くのは日本男兒でないと思つて、とにかくつゞけることにして、次ぎの月も出かけたが、その間始めの日に出て來た黑い女が一度も姿を見せないのが、僕は我輩に大に氣になつて居たのだ。
『通つてゐるうちに、樣子をきくと、博士の借りてゐる所は、大きい屋敷の一部を區劃したので、たつた二間しか無くて、それに便所と、臺所代りの二疊程の板敷の部屋があるばかりなのだ。だからその女の隱れてゐる場所もない譯だ。どこか外にゐる女があの時偶然來合せたのかとも思つたが、それにしては、挨拶もせず全く家の人らしいのが

[illegible]を持つて、フォークで[illegible]ジャガ芋を突差して口へもつて行き、スプーンで[illegible]からべとくの粥のやうな飯をすくひ上げてたべてゐる。その食べ物の貧弱なのに驚いたが、その分量の多いのにも驚いたね。だが見てゐると、どうしても人間が食事をしてゐるといふ恰好ではなく、動物園の檻の中で大猿が物を喰つてゐるといふ圖だね。一體西洋人の食事は動物的だよ。猫が鼠を喰つてゐるといふ形だ。猫が牙をむき出して、肉に爪を立て、無しやぶりつくところを、ナイフとフォークで現はしてゐるのだ。さうして喰物を平らげるのが專門で、その間碌に口も利かない。日本のやうに食事をしながら、話をしたり、歌を唄つたり、食事といふものが、腹をふくらせる仕事でなくて腹をへらす仕事になつてゐるのと違つて、西洋人の食事は犬猫同然、「まてく今物を喰つてゐるんだ」と兩手をシヤに構へて首をこんな風に左右へ捻ぢ曲げながら、むしやむしやゝつてゐる。たゞいろく文化的の裝飾が、その動物的動作を蔽ひ隱してゐるだけだが、デュボン博士の食事に至つては、西洋人の食事マイナス文化的裝飾なのだから、犬猫そつくりなのだよ。僕はそれを眺めながらこんな風にまでして物を喰つて、強ひて生きて行く必要がどこにあるのかと、つくぐ人間の生存慾の淺ましさに悲觀したね。デュボン博士のそれのやうな、喰ひかけの捻ぢパンのやうな身體を強ひて保存する必要を感じてゐる人間があらうとは思はれないが、

[illegible]

「然し、博士は[illegible]を固めるに至つたのか、僕には[illegible]つてつきはしない。だから要するに、博士も亦、たゞ死ぬ[illegible]ただ生きてゐるといふ外に何の理由もなしに生きてゐる無數の人間の中の一人に過ぎないと思つて、そゞろに憐れを催したのだが、それが僕の大に誤つた觀察であつたことは、後にぞ思ひ知られける、だつたのだ。

「とにかくも、僕は、この年になつて、遠い異國に漂浪して、犬小屋の前に、飽滿した犬のために顧みもされずに棄てられてあるやうな食物を喰つて生きてゐる人間もあるかと思ふと全く悲しくなつたね、實際僕は、悲しい芝居を見てゐるやうな氣持になつて、涙が出て來相でやりきれないので、覺えたてのフランス語の單語を交ぜて、意味もないことをしやべり出すと、先生、だらしなく下顎に流れてゐる汁を手の甲で拭きく、それを一々フランス語で云ひ直してくれる。そのうちに僕が、先生は、自分で炊事をするのかといふやうなことをいふと、博士は、それをフランス語にしてくれないで、何か別のことをフランス語でいつてゐる。で、問ひ返すと、それを英語に飜譯して、

「妻の居ない時は自分でやる。」

と云つた。それを聞いて僕は思はず、練習問答を中止してしま[illegible]

た。あのクレオパトラは、博士の妻君なのだらうか？　この捻パンの奴さ、圓滿に行かないのか知ら。僕は好奇心からきいて見た。

やうなフランス人があのクレオパトラの夫！　僕はあり得べからざる事だと思つた。念のため、先日會つた婦人がそれかと尋ねると、博士はフランス語で

「ウイ・メツシエー、彼女はマダム・デュポンである。」

と文法を教へる時のやうな口調で二度繰り返した。さう聽いて僕は更めて、この生き殘つたアントニーを見直したが、見てゐると先生の身體や顔面の歪みが段々烈しくなつて行くやうに見えて、怖くなつた位だ。

「然し、それで、このフランス人が、犬の國の料理のやうなものを喰つても生きて行かうと努めてゐる理由が漸くわかつたわけだ。あゝいふ女王のやうな妻君をもつたら、博士の身體が、もう二つ三つ捻ぢ廻はされても死ぬ譯には行くまい。然し、何うして、セキスピアーも想ひ及ばなかつた、こんな風の「アントニー・エンド・クレオパトラ」の結合が出來たのか、全く不思議だ。クレオパトラの鼻が曲つてゐたら世界の歴史がどんなに違つてゐた

「何うして汝の妻は何時も留守なのです？」

「彼女は自分の仕事をもつてゐる」と博士は澄してゐる。「どんな種類の仕事？」と尋ねると、博士は、首の附け根の工合が狂つてよく廻はらぬといつたやうに、ギシ／＼と首をふつて、

「それは余の知つたことではない」

といふ。それが僕には「お前の知つたことではない」といはれたやうに感じられたので、それ以上追求する勇氣もなかつた。然し、アフリカ人にしろアラビア人にしろ、このやうに、不自由な亭主を抛り放しにして自分の仕事に沒頭してゐるのはひどい女だと思つて、一層博士に對する同情を禁じ得なかつた。第一、先日のやうに、博士が病的に笑ひ出した時に、あの妻君が來ておまじないのやうなことをしてやらなかつたら、博士はいつまでも笑ひ悶えてゐなければなるまい。元來それが彼女のビジネスであらねばならぬのではないか、などと慨歎

[illegible]ないうちに二三ヶ月を過してしまつたが、その間、僕の外に博士の許に通つてゐるものがあるらしくも思はれなかつた。時間はそれ〳〵違へてあるにしても、偶には一人二人ぶつかり合ふこともある筈なのに、嘗て外の生徒の來合せてゐたのを見たことがない。或は來た連中も先生の姿を見て膽をつぶして入門する氣になれないのではないか、それだと頗る氣の毒な話なので、僕は柄になく同情して、先輩を一人紹介して、作文を見て貰ふことにしたら、博士は大變喜んだ所を見ると、先生、やつぱり大に不景氣を感じてゐたに相違ないね。

「そのうちに、何うした加減か、マダム・デュポンの姿を折々見うけるやうになつたが、後には、僕の行く日には大抵マダムが家にゐるのを見るやうになつた。段々先生とも懇意になつて、互に戲談なんぞもいひ合ふやうになつたが、ある日博士は僕の作文を讀んで行く中に、

「マダム・デュポンはクレオパトラのやうに美しい。」

とかいてあるのを發見して、縁先きで編物をしてゐたマダムを態々よんで、そこを指して見せたのはよかつたね。

「それを讀むと、マダムは、怒つたやうな、然しその底に嬉しい相な笑ひを匿してゐるやうな顏をして僕の方を凝つと見るのだが、その變に力のある眼付で睨まれて、僕は寒氣がして思はず身體を縮めたね。然し恐しくてぞつとした時の寒氣でなくて、嬉しいことに出喰してぞく〳〵する時の寒氣だつたね。すると博士が急に大きい聲で笑ひ出

[illegible]と思つて、ぎよつとしたが、幸ひ今度のは一二分[illegible]と涙の洪水を免れた。前後で妻君がおきまりな[illegible]をする[illegible]く博士を[illegible]上げないと思つた。笑ひ已んだ博士は、妻君に、水を與れろといふ時に、真面目な顏をして「私のクレオパトラ」と呼びかけたので、僕は吹き出した。

『デュポン博士は、會話や作文によく本國の自慢見たいなことをいふので、大に祖國に執着を感じてゐることがわかるが、マダムは、博士がそんなことを大きな聲で僕にいつてゐる時に、輕蔑したやうな眼付で、博士を見ることがある。あんまりフランスに好意をもつてゐない證據だと思つた。殊に博士が、得意らしく、

「私は祖先の中に一人の陸軍大將と一人の海軍中將とをもつ。」

と大きな聲で二三度繰り返した時にはマダムは、いつもの輕蔑の眼付でなしに、頗る險惡な、反感と憎惡に燃えてゐるといつたやうな眼つきで博士を睨んだが、美人があんな眼付をすると馬鹿に凄味の惡いものだ。

『さうかうしてゐるうち、僕は猛烈な腸カタルをやつて學校も二た月ほど休んでしまつたが、回復してから、デュポン先生の所へ出かけて行くと、驚いたね。例の潜戸をくゞつて入つて見ると、扉のなかつた門に扉が出來て、それが固く閉つてゐて、押しても開かないので、僕つてまた臺所の方へ行つて尋ねたら、美人の女中の代りに恐しく醜つ

た婆さんが現はれて、この家はもう持主が代つてゐるのだが、そんな西洋人のことは何も知らないといふ。恐らく、家の賣られた時に先生は店立てを喰はされたのだらう。外へ出て芋屋で聽いたが、芋屋の親爺も「十本さん」の行衞については何も知らなかつた。歸りに、文章を直して貰つてゐる先輩の所に寄つて聽いて見たら、前月の末頃から、博士に宛てゝ出した手紙が皆戻つて來るので、先輩は前の家主の移つた先きに問ひ合はせて見たが、やはり知らないといふ返事だつたので、そのまゝになつてゐるといふのだ。で僕は、博士にもマダムにも可なり執着はあつたが、何とも仕方がないので、日本人の先生を探してフランス語の稽古をつゞけて、それきりその片ちんばの「アントニーとクレオパトラ」に會ひもしなければ、消息もきかなかつた。』

A教授はこゝまで話し來て、更らにシガーに火をつけながら、いつた。

『これから舞臺がヨーロッパに移るのだよ。』

二

『で話は飛んで「此間二十何年經過」といふことになるのだ。』とA教授はつゞけた。『僕の二度目の洋行の時それは世界大戰の前の年のことだ。僕はパリであのセナーの前のホテル・ホワイヨーといふのに泊つてゐると、その食堂で時々顏を合せる男に、何だか見覺のあるやうな顏の男がゐるのだね。始めその男が僕の眼についたのは、西洋人にしては大分色の黑いためだつたが、段々顏を合せてゐると、何んだか覺のあるやうだが、何うしても想ひ出せない。すると妙なことには、向ふでも、此方に眼をつけてゐるやうに、斜めに向ひ合つた別の食卓に座りながら、時々双方の眼と眼とが合ふのだね。そんなことから一寸目禮を交したのがもとで、それからは會ふと互に挨拶をするやうになつたが、ホテルの給仕に聽いて見たら、その男は泊り客ではなく、たゞ時々食事に來る古い得意だといふことだつた。

『すると、ある日の午後にシャンゼリゼーを散歩してゐると、その男も後方からぶら〳〵やつて來てそれから話を始めて、連れ立つて歩いてゐるうちに、あるカフエに入ることになつた譯さ。さうして皆がやつてゐるやうに、珈琲一杯位註文して、二人列んでぽかんと往來を眺めてゐるうちに、何かの話の拍子で、その男が、自分も一寸日本に行つたことがあるといふのだね。成程それで日本人に眼をつけたのかと思つたが、何しに日本に行つたのかときくと、男は、自分の兩親が數年前に日本で死んだので、そのあと始末に行つたのだといつて、如何にも悲し相な——悲しいといふよりは、何か大變いやなことを想ひ出したやうな憂鬱の顏をして、それきり默つてしまつたので、僕も何も聞かずにしまつた。

『二三日經つて、またその男とホテルの食堂で顏を合せたが、食後に僕が中庭に面した廊下の長椅子に腰をかけてゐる所へ、その男がやつて來て、傍に腰をかけて二人で話を始めたわけさ。そのうちに後ろを通

りかゝつたホテルの婦主人が通りすがりに此の男に挨拶をする時に、Monsieur Dupont といつたのを聽いたので、僕は久しく忘れてゐた、僕のアベセを習つた先生のことを想ひだした。忘れてゐたとはいふものゝ、あの時分の印象は、博士にしろマダムにしろ、今に目先きにちらついてゐる位、僕の腦裡にこびりついてゐるのだから、デュポンといふ聲をきいた時には、僕は殆んど自分が一尺も飛び上つたかと思はれたほど、驚いた――といふのか何といふのか、とにかくハッと思つたのだね。さうして傍にゐる男に、我れ知らず、

「汝もデュポン君といひますか?」

といつたから、向ふは面喰つたらう。

「さうです。」

といつたまゝ呆れたやうな顏でこつちを見てゐる。で僕は、

「私が學生の頃に、東京でフランス語を習つた先生もデュポン博士といひました。」

といふと、今度は向ふが、それこそ實際一尺も飛び上つた程驚いて、吶りながら、

「そのデュポン博士が私の父です。」

といつた。さういはれた時には、此方はもうそんなに驚きはしなかつた。成程、見たやうな顏だと思つたのは、此の男の顏に、たしかにマダム・デュポンの俤が殘つてゐるからだつた。然し博士夫婦の間にこんな立派な青年紳士の息子があらうとは全く思ひ設けなかつたことだつたので、僕はやつぱり不思議な發見をしたやうな驚きを感じた。とにかく奇遇には違ひない。それにしても、デュポン一家の人間は、皆が皆、僕の度膽をぬくやうな手續で現はれて來るのも不思議だね。

「段々聞いて見ると、デュポン博士夫婦は、此の小デュポンを地中海の對岸のアルジエリーに殘して日本に行つたもので、小デュポン君は母方の親族に育てられて、後に巴里に來て、今ではアルジエリーの首府アルジエーにあるアフリカ通ひの汽船會社のパリの代理店の支配人になつてゐるといふのである。父のデュポン博士は、元來アルジエーのフランス人の女學校の校長をしてゐたのだが、病氣でやめて、その後日本の教會に派遣されたといふことだけはわかつてゐたが、その後の消息は全く不明だつたのだ相だ。然るに、數年前、突然博士夫婦がつぎ〳〵に横濱で死んだといふ通知がデュポン君の許に達したので、同君は日本へ來たわけなのだ。

『其のマダム・デュポンは、アリジエリーの土着の種族のベルベル族の出で何とかいふ――きいたけど忘れてしまつたが、ある地方の、日本でいへば、華族見たいの家の娘で、アルジエーに出て、デュポン博士が校長だつた學校を卒業したのだが、その後博士と結婚した相だ。我輩の察する所によると、何うも、博士の學校を罷めたことが、病氣よりも、この結婚に原因してゐたのではないかと思はれるね。むろんその頃のことについて小デュポンは何も知らない。同君は自分の産れた所が何處であつたかもよくわかつてゐない、

が、更らに驚くべきことは、同君は自分の父があんな畸形的の身體をしてゐたことも、横面にアメリカのあつたことも、全く知らないのだ。同君は、アルジエー時代の父の寫眞を今でも持つてゐるが、父は立派な體格で、病氣で學校をやめたといふことが訝かしいと思つてゐたのだといつた。然し、僕は話のはずみで、博士の身體のことを一寸話したものだから、デュポン君は頻りにそれを追及するので、いひ惡くて甚だ困つたが、とにかく、博士の身體や顏のことを話した處が、デュポン君は馬鹿に驚いたやうな顏をして恐ろしく考へ込んでしまつた。僕が餘計な口を述べらせさへしなければ、同君は寫眞によつて立派な父のイルージョンを持つてゐることが出來たのに、全く氣の毒な打ち壞しをしてしまつたと思つたね。

『處がデュポン君は深い溜息をついて、突然、

「私の母は恐ろしい女です。」

と小聲で呟くやうにいつたので僕はびつくりして同君の顏を見ると、同君は、身慄ひをして、外方を向いてしまつたが、暫らくして、やゝ落付いた調子で、

「私は、母の手紙に貴方のことについて……

自分の居所を書いてゐませんでした。私は……

手紙の出された土地を知るだけでした。で私は常に母から手紙を貰ひながら、母には一本の手紙も送ることが出來ませんでした。父からは何も參りませんでしたが、それは恐らく母が、私の居所を父に知らせないからだと思ひます。母は、私の居所を彼女の親戚から知らされてゐたのでしやう。」

「どんなことをお母さんは書いて居ました。」

と私が質問すると、デュポン君は、

「それが今思ふと恐ろしいことを書いてゐたのでした。私は、何ういふ理由からともなしに、母の手紙は片端しから燒き棄てゝしまつて、一本も殘しませんでした。やはりそれでよかつたのです。」

「恐ろしい事とは？」

「それは皆フランスを呪ふ言葉だつたのです。私は今貴方から父の身體のことをきいて、始めて母の手紙の意味がわかりました。今までは私には母の手紙は、全く解くべからざる謎だつたのです。無意識にそれを燒き棄てたのもその理由からでしたらう。その謎は解けました。

同君は聲をあげたが、やゝ落ついた體で、

「母はあなたのことを手紙にかいてゐました」

　又それを繰り返して、言葉をつゞけた。

「母は書いてゐました『今私のフランス人にはたつた一人の生徒しかない（母は父のことをいつも『私のフランス人』とばかり書いてゐました）。その生徒は愉快な、さうして大さう親切な、日本の青年で、さうして一層いゝことには、私を愛してゐる』と書いてありました。」

『僕は大に面喰つたね。あのクレオパトラめ死んでまで人を面喰はせやがると思つたね、然し、手紙の僕に關する部分はそれ切りらしかつたので先づ安心した。デュポン君は、再び憂鬱な顔になつて、

「母の手紙は、徹頭徹尾フランスに對するアリジェリー人の復讐心を表白したもので、その何うにもならない憎惡心を私の胸に植ゑつけるのが母の手紙のもつてゐた使命だつたのです。歴史に出てゐたりゐなかつたりする、フランスのアルジエリー人に對する暴虐の數々を、母の手紙には繰り返し〳〵、——殆んど同じことばかりですが——書きつらねてゐるのでした。アルジエリーの大守が、貸金の催促のためフランスの領事と談判中に、大守が腹を立てゝ領事の顔を扇子で叩いたのが原因で、アルジエリーはとう〳〵フランスのものにされてしまつたことや、それから千八百三十一年には、有名なロヴイゴー侯が、二三のアラビア人が泥棒を働いたといふので、全住民を夜の間に女子供や老人やも引括めて鏖殺しにしたのでしたが、其殺された中には、母の一族のものもありました。四十五年には、佛蘭西に追はれてしまひ、洞穴に逃げ込んだ五百餘りの良民を、プリシエー將軍は、その穴の入口で火を焚かして蒸し焼きにしましたが、その五百人の中には、現に母の伯母がゐたといふことでした。母はそんな事實を、必ず一つづつか又は二つづつ、手紙の冒頭に、それが私を呼びかけるに必要の文句でゝもあるかの如くに必ず書き記すのでした。賠償としてフランス政府は個人の土地を莫大の區域に亘つて取り上げましたが、その内の母の家の土地を買ひ戻すことを、母は私の神聖な義務の一つとして繰り返して書いて來ました。然しそんなことは要するに、母の手紙の最も重要の部分ではなかつたのです。恐ろしいのは、そんなことではありません。」

さういつてデュポン君は身體を縮めたが、更らに言葉をついで、

「私はそのことをいつてしまひます。母が優しい言葉で語つた唯一人の人であつたといつてもいゝ貴下に、そのことをいつてしまひます。それは貴下が、決してそれがために母を憎むやうなことはなさるまいと思ふからです。私の母は……。」

　デュポン君はさういつてしばらく躊躇してゐたが、軈て思ひ切つたやうに、

「母はかういふことをかいてゐました『私のやうなか弱い女が、どうして神々さへも虐げを忍んでゐなければならないやうな（と母のいふのは、フランスの支配者が、アルジエリーの八つの種族の神々を祭つた各地の神殿を悉く焼き拂ひ、打ち壊してしまつたことを指してゐる

るのです。」そんな暴虐なフランスに對して何うして仇を酬いることが出來やう。だから私は、私自身の持物であるこのフランス人に復仇する。私は私のフランス人をよく知つてゐる。彼れは、私にフランス人の神を拜ませやうとしてゐる。彼れは彼自からのフランスのためには、自分を殺しても、私達をフランスの神の神殿の祭にしやうとしてゐる。彼れは、若い頃、アルジエリーに渡つて來て、大きな聲でそれを街頭で叫び廻つてゐたのだ。私はその僞善者を捉へてやつたのだ。イギリス人は、私の國の奴隷を解放させるために、大砲で私の國を攻めたが、私は一人のフランス人を、私の國の新しい奴隷にするために、私自身の武器を用ゐるのだ。彼れは頑丈な、美しい男だ。それも女の持物にする奴隷には適はしい條件だ。けれども、彼れの女主人は、彼れの頑丈さと美くしさを玩具にするのみでは滿足しないのだ。我々を虐げたフランスが何んなにならなければならないかを、私は、私のフランス人によつて表現させなければならない。見ておいで！　今に私は、『フランスよ、こんなになれ！』と私のフランス人を　フランスの目の前に投げつけてやるだらう。おゝ、もう私のフランス人は、フランスそれ自からの運命を表現し始めた。……』さういつたことを其の手段か[illegible]

た、その恐ろしい畸形の私の父なのです。母は父をさういふ形に作り上げることを、やはり彼女自身の神聖な義務と考へてゐたのです。」

「さうすると、デュポン博士の身體は、マダム・デュポンがあんなにしたといふのですか？」

私は事の意外なのに呆れて、覺えずさういつて訊ねた。

「さうです。」

デュポン君はさういつたきりその理由を說明しなかつた。

「マダム・デュポンは何うしたら博士をあんな形にすることが出來たのです？」

「それは私にもわかりません。けれども、父は母と一緒にアルジエリーを離れるまでは確かに私が寫眞で見てゐるやうな立派な標本的のフランス人でした。私共が子供のうちに聽かされた魔術者の話は、單なる作り話ではなかつたのでせう。私共の種族には、ヨーロッパ人の知らない藥物を持つてゐるのではないでせうか。」

さういつてデュポン君は考へてゐたが、

「それとももつと露骨の方法で、父に危害を與へて、あんな形にしたの

[illegible]。私は自分の可愛い子供のお前に話すことは出來ないが、私[illegible]れは、どんな風に自分が私に征服されてゐるかといふことを證據立てるために、馬鹿か氣狂ひか獸かがするやうな眞似を私にして見せることさへ珍らしくない。私は知つてゐる、彼れはフランスに忠實なのではない、私に忠實なのだ。私はフランスに云つてやる、「お前は、獸共が自分の情慾を充たすための口實に使はれる六つのアルファベに過ぎないのだ。フランスよ！ お前は何物でもない。何物でもないお前を、私達はどうすることも出來ない。こゝに居る一人のフランス人こそフランスそのものなのだ。私は彼れを罰することによつてのみお前を罰することが出來るのだ。彼れは、私のために火の中に投げ込まれても、それに耐へることが、それがために死ぬことが、フランスの神の命令だと思つてゐる。實は、それは彼れ自身の情慾の命令なのだ。フランスよ、お前も自分の情慾の命令によつて火の中へ歩いて行つて、さうしてそれが何物でもない六つのアルファベの命令だと叫んでゐるのだ。」と母はかいてゐました。かういつた文句を、今から考へて見ると、父の身體のそんな風になつた事情も幻ろげながら察することが出來ます。」

『さういつてデュポン君は深い溜息をつくのだ。我輩は、全く茫然として、口も利けなかつた。たゞふと想ひ出したのは、博士が「私のクレオパトラ」といつた時の、眞面目な顔付きだつた。今考へて見ると、その顔には博士の悲壯な決心が現はれてゐたのだ。 マダム・デュポンは、[illegible]

れも[illegible]に見えねばならぬ[illegible]

「貴下のお母さんは、デュポン博士がフランスを現はしてゐたやうに、自分はアルジエリーを現はしてゐると考へて居たのでせう？」

「それが何よりも私をいら〳〵させるのです。」

デュポン君は激しい口調でいひつゞけた。

「母の手紙を讀む度に、私は、人間同士が何うしてこんな風な役にも立たない憎惡と反感の炎のうちに生命を投じてゐるのだらう？と忌々しくてたまらなかつたのです。母はフランス人だけがアルジエリーを虐げた人間だと思ひ込んでゐたのです。女は、自分自身の肉感に觸れたものだけを憎み又は愛することの出來る生物です。アルジエリー人を虐げたものは、フランス人だけではありません。そのフランス人に虐殺されたトルコ人やアラビア人やも、十九世紀にフランス人のやつたことを、ずつと以前からアルジエリーに對してやつて來たのです。フランス人がアルジエリーにとつて獅子ならば、トルコ人、アラビア人等は虎です、狼です。十八世紀には、我がアルジエリーは、地中海から大西洋へかけて海上を大荒しに荒し廻した海賊の巣で、アルジエリーは、海賊の街でした。それは皆アラビア人の仕業です。こんな人間が束になつてフランス人に殺されるのは當然の運命です。たゞそれがためにいつも難儀をするのはアルジエリー人の最大多數を占めてゐるわれ

〱ベルベル人です。我々の種族はその一番の始めは、何うだか知りませんが、とにかくアルジエリーの土着の住民として、全く生産の生活の外に何にも知らない人間です。耕し、紡ぎ、織り、作り、アルジエリー人を生かす仕事に専念して、アルジェリー人を殺す仕事などに携つたことなぞは未だ曾てありませんでした。さういふ我々の頭の上には大昔から、ローマ人、アラビア人、トルコ人、モロッコ人、スペイン人等が、いつも〱アルジエリー人を殺す組織、アルジエリー人から掠奪する組織を作つてゐたのです。我我ベルベル人は彼等に貢物を捧げることによつて、彼等のために皆殺しにされることを脱れてゐたのでした。彼等同士は、互に貢物を捧げることを肯んじないので――さうでせう、彼等は貢物を奪ふことは出來ても、それを作ることは出來ない種族です――だから互に殺し合ひをして、貢物を取り上げる地位に自分を据ゑやうと争つたのです。迷惑なのはわれ〱ベルベル人です。その度毎に、老弱男女の見境もなく彼等の巻き添へを喰ひます。たま〱フランス人の武器の力が、今迄のその連中の誰れのよりも強大だつたので、その殺戮の規模も大きかつたに過ぎないのです。」

『デュポン君は、薄黒い顔を血の色で染めて、[illegible]

です。今また現に、フランスとドイツとはあのアフ[illegible]ひ合ふために躍起となつてゐます。彼等は早晩、大規模の殺し合ひを始めるでせう。われ〱ベルベル人は、いつまでもさういふ頭の上の殺し合ひを見てゐなければならないのでせうか？ それがわれ〱に關係のないことならば、いつまでも堪へてゐられませうが、その度、驅り立てられて、楯に使はれ楯に使はれるのは一番數の多いわれ〱ベルベル人です。早晩起るべき大規模の殺し合ひにも、ヨーロッパのベルベル人は無數に殺ろされるでせう。かういふ場合、私の母のやうに、フランス人のことだけ知つてアラビヤ人のことを知らないで猛り立つてゐるものは、アラビア人のために喜んでフランス人の武器の餌となるのです。それがアルジエリーの愛國者です。私の父も、私の母のアルジエリーに於けると同じ意味で、フランスの愛國者でした。二人は當然殺し合ふべき運命にあるものでした。一つの國の愛國者と他の國の愛國者とは必ず殺し合ひます。その二つが夫婦になつても、さういふ關係に異りはありません。その殺し合ひで、父がつひに敗けたのでした。われ〱ベルベル人は、つひに自分の家族の内部に於て、さうした殺し合ひを見るに至つたのです。さういふ親達から生れ

維新回天史の一面（其八）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　徳富猪一郎

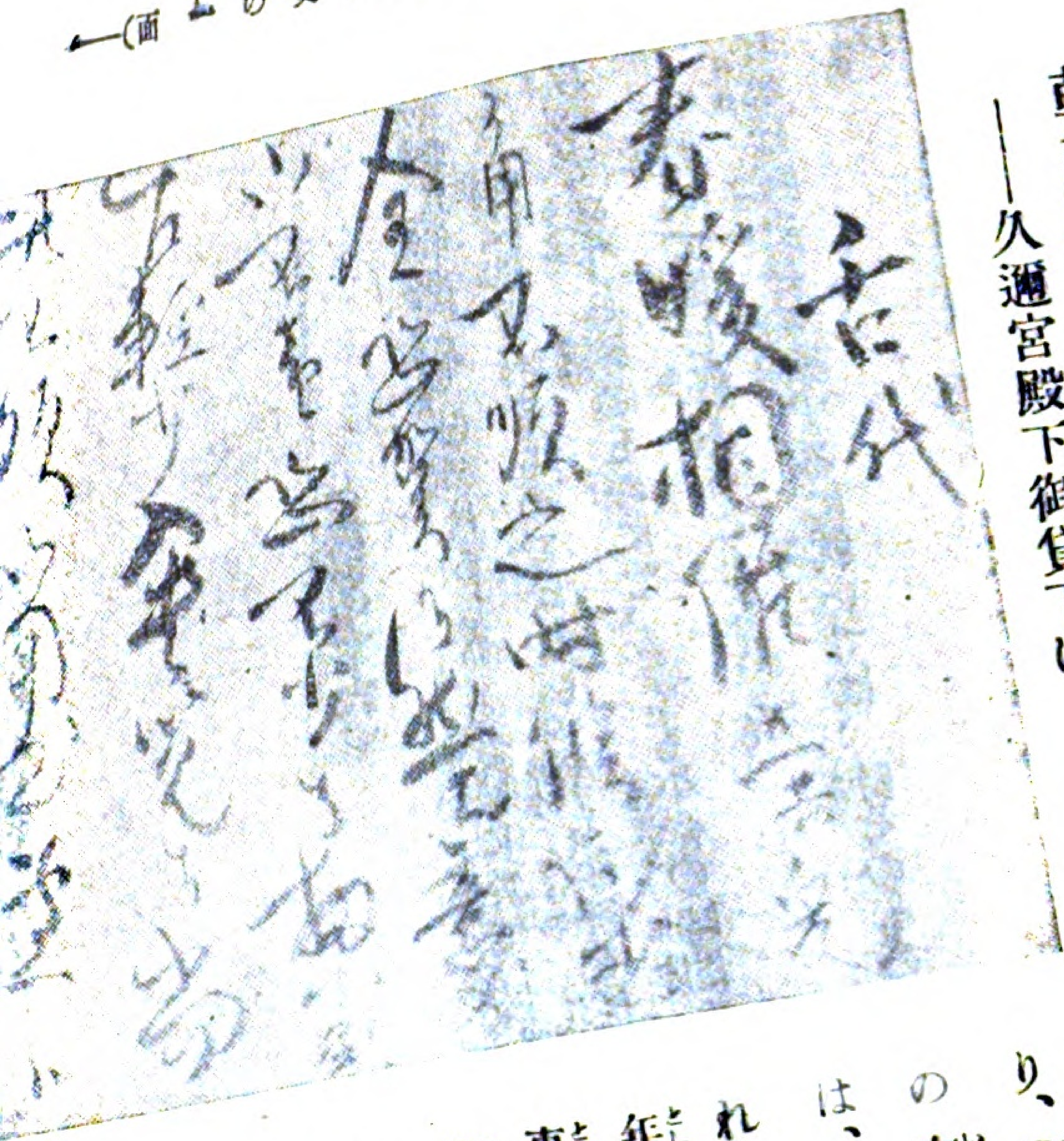
（第五十六）

安政五年戊午の年はあらゆる意味に於て、最も記憶すべき年である。凡そ革新の機運に際しては、世運の推移は太平無事の時と、同一視すべきものではない。恰も平野を流れたる水流が、懸崖絶壁にかゝる如く、すさまじき勢と、すさまじき速力とを以つて落下し來るものにて、とても平常の時間の計算をもつてこれに當て嵌むべきものではない。時としては太平無事の百年を、一日にて爲し終ふることもある。我等は歴史を考察するに就いては、時そのものゝ速力ばかりを以つてせず、併せて時を支配する勢の速力をも考察せねばならぬ。

安政五年戊午の年は、日下部伊三治が

星斗闌干月滿レ天。書窓閑坐不レ成レ眠。欲レ知世運隆興兆。神武東征戊午年。

朝彦親王御眞蹟
——久邇宮殿下御貸下げ——



と、吟じたる通り、當時の有志は、いづれもこの年を神武東征の當時に引きあて、皇運隆昌の端緒と考へ思ひ、いづれ

（第五十七）

我等は今この年に於ける概念をつくる爲に、此處に豫め一年中の主なる出來事を日記體に掲げておく。

正月二十一日。老中首座堀田備中守正睦は、外國處置奏上の爲上京。二月五日着京す。

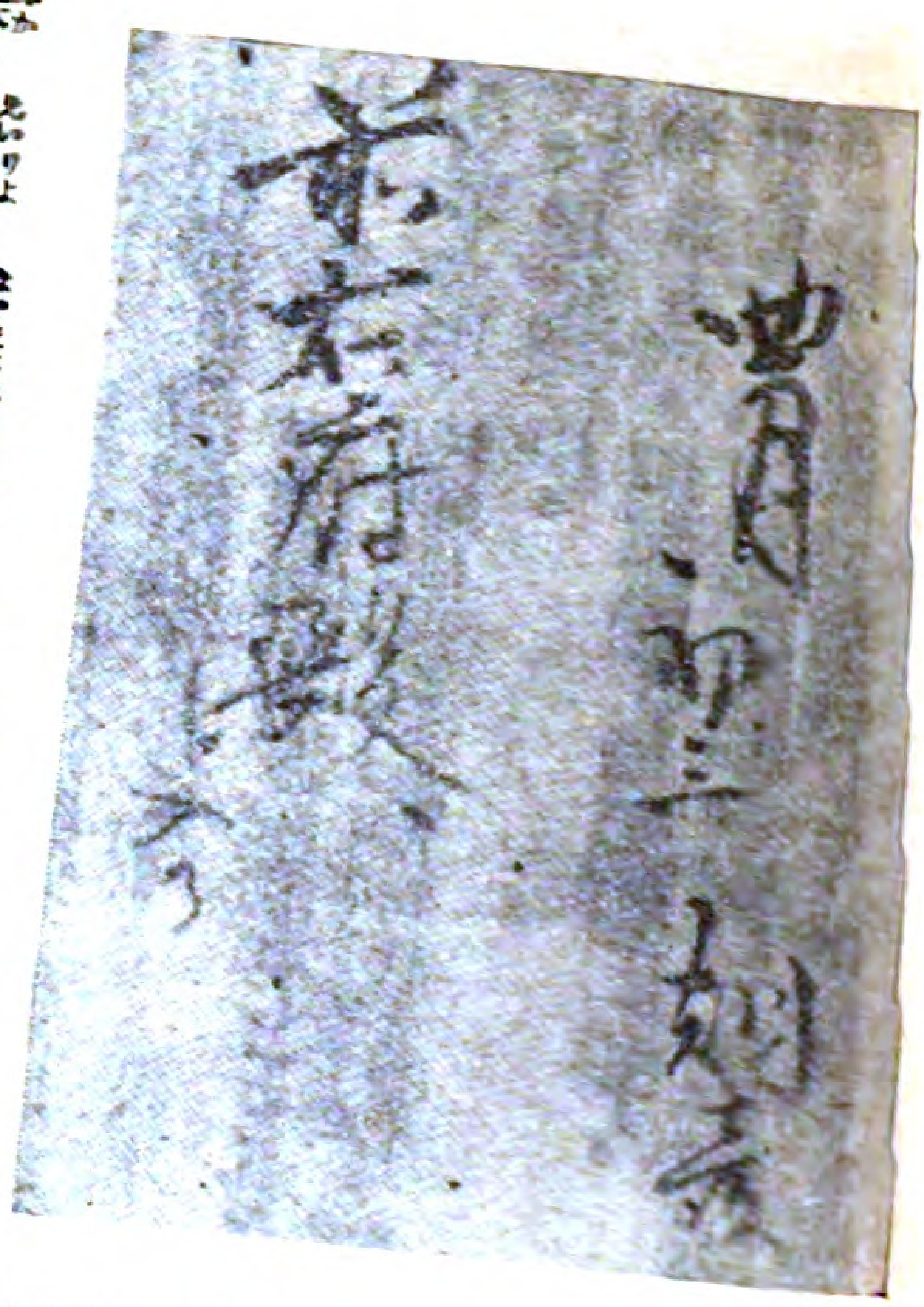
二月九日。堀田參內す。

三月五日。米國總領事ハルリス江戶に來り、假條約調印を促す。

三月七日。中山忠能以下七人、通商貿易の不可を陳じ、諸大名熟議の後勅答あらん事を請ふ。

三月十二日。公家衆八十八人意見を奉る。

三月十四日。公家衆百餘人九條關白に迫つて更に切論す。



深ク叡慮ヲ被レ惱候。此期ニ至リ候テハ人心ノ居合、國家之重事ニ候間、三家以下諸大名之赤心被ニ聞召ー度思召候。今一應台命ヲ被レ下、各所存爲ニ書取ー被レ入ニ叡覧ー候樣、御沙汰之趣被レ及ニ言上ー候所、叡慮之趣、御尤之御事ニ被ニ思召ー候ヘ共、人心居合之儀ハ如何樣トモ、關東ニテ御引請可レ被レ遊トノ事言上候處。人心居合之儀ハ、先以御安心被レ遊候ヘ共、神宮始御代々エ被レ對候テハ何共恐多ク東照宮以來之御制度ヲ變革被レ爲レ在候儀ハ、天下之人望如何ト思召、再度被レ惱ニ叡慮ー候間、何共御返答之被レ遊方無レ之、此度ノ一條、不ニ容易ー神宮始御代々へ被レ對候テモ、可レ有ニ如何ーヤ、

一、今上ハ於ニ關東ー可レ有ニ熟考ー樣、御沙汰被レ遊候事。

× × ×

三月二十二日。傳奏議奏堀田旅亭ニ臨み將軍世嗣の事を、英傑、人望、年長の三件を以て治定あるべき旨を演述す。

四月五日。堀田京都を發し、二十日中仙道を經て江戸に歸る。

四月二十三日。井伊直弼大老に任ぜらる。

四月二十四日。ハルリスを堀田邸に招き、假條約延期の談判をなす。同日松平伊賀守、久世大和守將軍に謁して、紀州慶福を立つるの議を決す。

四月二十五日。三家始め諸大名を召し勅答の趣を告げ、その意見を徴す。

四月二十六日、井伊直弼始て將軍に謁す。

五月七日。大目付土岐丹後守大番頭に轉じ、川路左衛門尉は西丸留守居に轉ず。これ皆左遷なり。

五月二十日。目付鵜殿民部少輔駿府町奉行となる。これ亦た左遷なり。駿府町奉行大久保右近將監禁裏附となる。これは寧ろ井伊の意見にて拔擢したものと思はる。

六月十七日。ハルリス小柴沖に來り、英船三十艘來る旨を告げ、假條約調印を促す。而して當時、ロシヤ、フランス等追々來らんとす。此に於て二十日、井上信濃守、岩瀨肥後守勅許を待たずして神奈川に赴き、假條約に調印す。

六月二十一日。その旨を京都に奏上す。

六月二十三日。老中堀田備中守（正睦）松平伊賀守（忠優）やめられ、太田道醇、間部下總守、松平和泉守老中となる。太田、間部は勝手掛り、外國の事を掌る。此日一橋慶喜登營勅許を待たずして調印したる事を以て、井伊大老を詰問す。

六月二十四日。尾張並びに水戸父子、松平慶永登營す。此れが當節柄有名なる推參登城であつた。

六月二十五日。紀州慶福將軍の養君としてこれを公表す。

六月二十六日。酒井忠義を京都所司代となし、老中間部詮勝に命じて上京せしむ。

六月二十七日。條約調印の上奏京都に達す。

六月廿八日。關白九條尙忠等を召し、御讓位の密勅を賜ふ。

七月一日。大廣間大名連署して、違勅交市を開くの不可を論ず。

七月三日。將軍病あり。

七月四日。三家並に大老の中一人を、京都に召さる〻六月二十八日附の書到着す。

七月五日。尾張慶恕隱居愼。水戸齊昭駒込邸に隱居愼。水戸慶篤、一橋慶喜の登營を止む。松平慶永に隱居愼みを命ず。

七月六日夜。若年寄本鄕丹後守やめられ、側衆石河土佐守寄合に貶せらる。

七月八日。外國奉行を置く。田安家家老水野筑後守、勘定奉行永井玄蕃頭、目付岩瀨肥後守之に任ず。下田奉行井上信濃守、箱館奉行堀織部正は兼任す。

七月八日。幕府より朝廷へ答書を奉る。

八月五日。孝明天皇には議奏傳奏の諸卿を召見し、御讓位並に幕旨詰問の勅書を示し給ふ。

八月八日。將軍の喪を發す。その實將軍は七月五、六日の間に死してゐる。

八月十七日。水戸の京都留守居鵜飼吉左衞門の子幸吉、勅書を奉じて水戸邸に至る。同時に禁裏附大久保伊勢守を經て幕府にもこれを賜ふ。又たそれぞれ緣故の公家を以て尾張、越前、

[illegible]土佐の諸藩にもこれを賜ふ。これが他日の大問題となつた。

八月二十八日。老中間部、太田水戸藩に到り、勅書を他に示すことを止めた。

八月三十日。水戸藩の家老五人を退けしめた。

九月三日。間部詮勝江戸を發す。同日所司代酒井忠義着京す。

九月四日。九條尚忠關白を辭し、近衛忠熙内覧となる。梁川星巖病死す。

九月五日。外國奉行岩瀬肥後守作事奉行に移さる。左遷也。

九月十七日。京都にて梅田源次郎を捕ふ。

九月十七日。間部着京。妙満寺に館し、病に托して出でず。

九月十八日。水戸の京都留守居鵜飼吉左衛門、その子幸吉を捕ふ。同日江戸に於て飯泉喜内を捕ふ。

九月十九日。九條公又出て事をみる。近衛公内覧を辭す。

九月二十二日。京都にて鷹司家、一條家の家臣その他數十人を捕縛す。鷹司公父子職を退く。

九月二十七日。日下部伊三治を江戸に捕ふ。

十月二日。[illegible]參内。

十月四日。江戸にて[illegible]を捕ふ。

十月十二日。近衛公、三條公辭職を乞ふ。

十月二十一日、三條公の乞を許す。同日九條公内覧職に復す。

十月二十四日。間部始て參内す。

十月二十七日。老中久世大和守やめらる。

十一月十六日。僧月照、西郷隆盛と共に薩摩潟に投ず。隆盛蘇生す。

十一月二十一日。將軍宣下。

十一月二十三日。伊達遠江守を隱居せしむ。

十一月二十六日。大阪城代土屋采女正免官。

十二月九日。宸翰を酒井忠義に賜ふ。

十二月二十一日。三條實萬淀の民家に退去す。

十二月二十八日、町奉行所にて今度の罪囚糾問あり。各牢屋預となる

晦日。間部詮勝參内。

以上、安政五年の要領である。而して翌安政六年に至っては、更に左の如きことがある。

（第五十八）

正月九日。京都よりの囚人藤井但馬、頼三樹三郎等八人江戸に着す。

二月十七日。粟田宮即ち青蓮院の宮を謹愼せしむ。

二月二十日。間部詮勝京都を發す。

二月二十六日。土佐國主山内豐信に隱居を命ず。

三月十日。京都よりの囚人十三名江戸に着す。その中には七十二歳の近衛殿老女村岡抔もある。

京都よりの囚人安島帶刀等三人江戸に着す。

三月十三日。間部詮勝京都より歸着す。

三月十七日。近衛公、鷹司公を蟄居。一條公、久我卿を蟄居隱居。萬里小路卿を隱居せしむ。

五月三日。鷹司、近衛、三條三大臣落飾あり。天皇宸翰を關白九條尙忠に賜うて、三公の落飾を止めしめんとし給ふ。所司代酒井等勅旨を奉ぜず。

六月二十四日。京都町奉行大久保伊勢守西丸留守居に左遷せらる。大久保は三月八日禁裡附より京都町奉行に轉じたが、その剛直の爲に左遷せられた。

七月二十日。間部下總守勝手係を免ず。太田備後守勝手係、外國係を免ず。松平和泉守、內藤紀伊守勝手係となる。脇坂中務大輔外國係となる。

七月二十二日。老中太田備後守免官。

八月二十八日。德川慶喜隱居愼。水戸齊昭水戸表へ永蟄居。水戸慶篤差控。作事奉行岩瀨肥後守、軍艦奉行永井玄蕃頭並に職祿を奪ひ謹愼。西丸留守居川路左衛門尉隱居愼み。太田備後守に愼みを命じた。此日死囚處斷あり。安島帶刀は切腹、茅根伊豫之介は死罪、鵜飼幸吉は獄門、鮎澤伊太夫、小林民部は遠島、池内大學は追放、近衛殿老女村岡は押込。その他數多あり。

八月二十九日。水戸齊昭發途國に就く。

九月六日。堀田備中守隱居。

九月十日。駿府町奉行鵜殿民部少輔隱居差控。黑川嘉兵衛、平山謙次郎、平岡圓四郎、いづれも免官差控。

九月十三日。堂上地下一統へ金二萬兩下され。九條關白に千

示を奉じし、[illegible]中五百[illegible]を進じ、[illegible]十[illegible]へ[illegible]五十[illegible]下さる。

十月六日。三條前内府實萬公薨す。
十月七日。有志處刑あり。その中にて頼三樹三郎、飯泉喜内、橋本左内等を死刑に處し、以下遠島追放等多し。
十月十一日。アメリカのミニストル登營。此日山内土佐守豐信隱居容堂に愼を命ず。
十月十七日。本丸燒失。將軍西丸に移る。
十月二十日。大番頭土岐丹波守隱居差控を命ず。
十月二十七日。元若年寄本郷丹後守五千石を削り、隱居愼み。吉田松陰を死刑に處す。その他遠島追放等多し。
十二月七日。粟田宮、即ち青蓮院宮に永蟄居を命ず。
十二月十六日。水戸慶篤をして、去年八月の勅書を返納せしむ。この勅書は水戸城中の祖廟に納む。よりて之を江戸に送らんとす。水戸の士民之を是とせず。途に在りて之を遮り奪はんとす。齊昭これを諭せどもきかず。
十二月二十四日。間部下總守老中をやむ。
十二月二十八日。志士の斷獄を司る諸有司に褒賞を賜ふ。

（第五十九）

以上が即ち二年間に於ける主なる出來事であつた。即ち大獄の渦中に於ける宮の如きは、單にこの大波瀾の中に於ける卷添へに逢ひ給へる御方と云ふばかりでなく、實は京都方に於ては、近衞公、三條卿と共に、最も有力なる主上の御相談相手に在して、その中にも宮は最も手剛き御一人で在したことは、幕府の夙に認めたるところにして、たゞ宮が、天潢の一派に在したが爲に、その力を逞ましくする能はず。しかも最初は愼みを命じ、遂に永蟄居として、宮をして一切主上と隔離せしめ、國務に就いて全く沒交渉たらしめたのであらう。

猶これよりして以上の所記を骨子として、如何にかゝる出來事が發生した乎の因緣、及び事情に就き語るべき筋がある。

（第六十）

既記の如く、堀田が江戸に歸着したのは、四月二十日で、その二十三日には井伊直弼大老に任ぜられた。これは云ふまでもなく、靑天の霹靂であつた。そもそも井伊の就職は、只だ幕府

の大老として出で來りたるに過ぎない。井伊家は本來酒井家と共に大老の家柄である。されば彼が大老に任ぜられたればとて、別段何等怪しむに足ることはない。されどこの事件は確に幕末の歴史にとつて、一大事件である。何となれば、井伊はその在職僅に二年に滿たなかつたが、併しこの間に於て、幕府を瓦解せしむべきあらゆる準備をなしたからだ。異りたる言葉で説明すれば、阿部正弘以來の方針であつた公武合體の、而して公武戮協の方針を一變して、飽迄も幕府御委任の一點張りに引戻さんとしたからであつた。井伊も彼流儀の勤王家であつたと云ひ得られないことはない。彼を目して直ちに不勤王、若くは非勤王といふは、彼を誣ふるものである。彼は逆賊でも、奸賊でもない。彼流儀の勤王心もあり、又た勤王をする心得も持つてゐたであらう。されど其の結果は決して勤王ではなかつた。而して亦た佐幕でもなかつた。

た。若し世の中に反動政治家といふ……き者は、その随一と云はねばならぬ。而して幾多の反動政治によつて、漸く阿部が千辛萬苦して收拾しかけたところの事局は、破綻を示し、手が附けられぬやうになつた。井伊の後に出で來つて、再び阿部の昔にかへさんとしても、最早事去つて、事更に多く、到底如何ともすべからざるものがあつた。

（第六十一）

されば井伊その人が大政治家であつた乎、否かはしばらくおき、井伊その人が大人物であつた乎、否乎は暫くおき、兎に角にその爲した仕事は、確に深き印象を歴史に殘してゐる。唯だその殘してゐる印象が喜ぶべきものにあらずして、悲しむべきことであり、讃歎すべきことでなくして、嘆息すべき事である

關係に關係しつゝあつたことは、疑を容れない。短く云へば、紀州慶福を將軍の相續者に擁立すべく出て來つたのである。誰がこれを然らしめた乎。固より將軍が彼を大老にせよといはねば、彼は大老となることは出來ない。されど誰が將軍をして斯く云はしめた乎。それは恐くは紀州擁立黨の面々であらう。一橋反對黨の面々であらう。而して又た水戸齊昭に對する反對者の面々であらう。卽ち其黨與的に云はゞ、幕府の大奧、將軍の左右、何れも心許なく思ひ、[illegible]の方によつて、彼等の望を滿足せしめん[illegible]たものであらう。

[illegible]

も云ふべき、宇津木六之丞の書めたる「公用方秘錄」に左の記く記してゐる。

『四月廿二日九ツ時過、御徒頭薬師寺筑前守殿御用所へ御[illegible]
野田小一郎罷出候處、今日御參[illegible]
[illegible]上御家ヲ見込罷出候[illegible]
御逢被レ成下置レ候樣仕度、御取次ニハ[illegible]
付、幾重ニも御目通[illegible]
小一郎被二申上一候ニ付、[illegible]
御密談、如何[illegible]
[illegible]

し候間、留守居之者使者ニ罷越候様、用意爲ニ致置一候様。」被レ仰候而與江被レ爲レ入』

云ふ迄もなく藥師寺は、紀州家老水野土佐守と親緣の者にて、無二の紀州黨だ。

（第六十三）

斯くて彼は四月二十二日、いよ〳〵大老に任ぜられた。その模樣は左の通りである。

『依ニ御奉書ニ六半時過（午前七時過）御登城被レ遊候處、於ニ御座之御間一御懇之被レ爲レ蒙ニ上意一御大老職被レ爲レ蒙仰難レ有旨御請被ニ仰上一御老中樣御同道に而御部屋へ御レ被レ爲、一老堀田備中守殿江被レ仰候ハ不肖之私大任被ニ仰付一候段難レ有奉レ存候得共、御時節柄より申何分恐入候間、御役之儀は蒙ニ御免一度宜御取成被レ下候様にと被ニ仰述一候處、

ニ被ニ仰出一候間、此上御辭退被レ遊候而
請被ニ仰上一二老之上座せられ、直ニ天下之政を御聞召而より議論御討話被レ遊候由。

但し其後與御右筆組頭原彌十郎殿江富田權兵衛款待之序に、御同人御咄被レ成候ハ、是迄御老中被レ爲レ蒙レ仰候方々、其日の御進退に御拘り、中々御政事筋御耳にも入不レ申樣に相見え候處、大守樣ニハ誠ニ御格別ニ而、未ダ蓐へあたゝまりの通り不レ申內に御異存被ニ仰出一候事ニ付、御同役共ニも舌を卷候旨の御內話御座候』

（第六十四）

そも〳〵一橋黨に於ては、一橋慶喜を將軍の世嗣となし、松

[illegible]慶永[illegible]の一ヶ條[illegible]あつた事は、宇津木の記したる『公用方秘録』中に左の文字あるを以て知るべし。

『御跡に而承り候處、松平越前守江大老被仰付可然旨伺に相成候處、

上様（將軍家定）御譜家柄と申人物ニ候はゞ、彦根を指置き越前江可被仰付筋無之ニ付、掃部頭へ可被仰付旨之上意に而、俄ニ御取極りニ相成候旨之事承申候』

これはこのまゝに信ずることは出來ぬが、兎も角も將軍をして、大老を撰ばしめたならば、恰も世嗣を撰ぶに、一橋を捨てて、紀州をとりたる如く、慶永を捨てゝ、直弼をとりたることは勿論であらう。少くとも慶永の名は、この場合に於て、直弼任用の爲に利用せられたに相違あるまい。

直弼任用に就いては、全く一橋黨では意外であつたに相違ない。併しながら極めて明敏なる岩瀨忠震の如きさへ、別段この事に就き、何等其の内輪のからくりを知るところはなかつたらしく、彼は永井玄蕃頭、鵜殿民部少輔と共に、老中に向つて、『今日の時であれば大老の撰定も必要であるが、非伊掃部頭はその器でない。斯る人を選擧せられていかで天下が治るべきや』と抗議[illegible]に非ふるのみ[illegible]上様へたといふことである。[illegible]彦根なんどが大老に任じたのとて、兄弟に等しき[illegible]、皆げにもなるまい』と橋本左内に云うてゐる。（昨夢紀事）

何人も井伊を誤解してゐた。實は反對黨ばかりでなく、彼を推選したる側なる老中の首班松平伊賀守なども、只だ彼を上に戴いて、彼の名によつて己が欲するところを逞くせんと試みたものであらう。それは松平慶永の懐刀中根雪江の書きたる『昨夢紀事』の中に斯く書いてある。

『井伊掃部頭殿は無識にして強暴の人なり……。此人蚤くより執權の企望ありて、既に去年伊賀殿（松平忠優）御再勤の折なども慇懃を盡され、黄金三十枚を贈られたれど、伊賀殿是を受けずして返されたることを、彼藩の小川民藏なる者に聞けり。……此度登用せられたるは、專ら伊賀殿の姦謀に出たるなり。諸有司も始のほどは、其不學無識なるを侮り思ひしかど、狼戾の性追々に暴威を逞くし、慘毒を恣にし、遂に天下の動亂を惹起せしが、その由來する處は、伊賀殿の私曲によりて釀成せられたり』

とあるをもて知らるゝ。

（第六十五）

斯くて敵も味方も直弼に裏切られた。直弼は眞の虎ではなかつたにせよ、決して張子の虎ではなかつた。彼は幕府が天下の政を專にする如く、己も又た幕府の政を專にせんと欲した。謂はゞ彼は日本に於ては幕府中心主義をとり、幕府に於ては井伊中心主義をとつた。固よりそれが必ずしも一人一個の爲ではなく、日本の爲でもあり、又た幕府の爲でもあると考へたものであらう。それほどの考なくしては、とても彼程の思切つたことは出來ない。

されば我等は彼の心事に就いては十分といはんよりも、寧ろ十二分にこれを諒とする所があらねばならぬ。併したがら彼は決して振古未曾有の危局を處理すべき政治家ではなかつた。

ある一切の勢力の退治であつた。彼は初から[illegible]つた。

平生大老は御用部屋に入らず、別に詰所を設けて、老中より將軍に具申するを聽くに過ぎなかつたが、彼は任命と同時に例格を破り、御用部屋に入り、直に政務をみた。この事に就いては前掲の如く、宇津木の『公用方秘錄』中にも、

『太守樣ニハ誠に御格別ニ而未ダ盤へあたゝまりの通り不申內ニ御異存被二仰出一候事ニ付、同役共にも舌を卷候旨の御內話御座候』

とあつて、彼は任命と同時に直にその本色を曝露して來た。猶この事に就いては長野主膳より島田左近に與へたる書中に、左の如くある。

『是迄之例は當分御川部屋と稱して、見習之上ならでは御政

[illegible]

[illegible]ニて[illegible]殿下[illegible]ニて[illegible]
相開候旨ノ御沙汰ニテ御上ニ相成候處、即刻御治定相成
昨廿九日廿十名、関司方恐縮。当夜御所近に付存寄之旨は一
無二覆被一申上候様、將軍家御首之官命相成申候。實に只今一
之處、內外之大事此中にて外國との戰争始り候はゞ、第一內亂
之大敗ともなり候へは、忽ちの內亂をふテ候事ヲ治メ不レ申ては
相成間敷、左右之大事を拖候時節之大役けしからぬ穴へ入レ一
候事と存候。併此義は必々御心中之外ニ漏し候而も、一大
事之時節ニ候へば、御含置可レ被レ下候。
殿下(九條關白)へ此由御披露被レ下候へば、天道之開ケ候
事は御悦被二下置一候ハん。此中ニも此時節一方を治メ候間
ニハ一方は罷出可レ申何れにしても働へ緣之下之舞ニて、
惡名は表へ發し候次第は御歎被二下置一候御事と恐察
仕候。皆ゆめ物がたり。あなかしこ〳〵』

× × ×

斯の如く井伊の使命は、外交の困難の際に天下の人心を調和按配して、擧國一致これに當るといふではなく、外のことは兎も角も、內に於ける水戸派を退治する事を、一大使命の如く心得ていたのである。[illegible]はこれを以て自ら秘せんと誓へたるのではあるまい。[illegible]が使命としたるところは、即ちこれであつた。もし彼の才力に彼以上の達見家あつて、彼の偏狹なる心を和げ、天下の爲に大下の公をなすべく、しかも當時の大勢に順應するに、その爲しきを翻したならば、幕府は固より政權を朝廷に返上せねばならぬが當然の事であるが、然も一切の事は當然平和的に解決を告げ得たであつたかも知れない。

惜しむ可し、彼が陰謀家退治なるものは、遂に日本をして蜂の巣を突破つた如くならしめた。彼の右腕たる長野、宇津木の徒は、寧ろ彼の過ちを補ふよりも、更にこれを増長せしめ、それに油をかけ、それに火をつけたに過ぎなかつたのは、如何にも慨歎の至りと云はねばならぬ。彼は就職と同時に、自ら看板でなく、立者でなく、名譽職でなく、幕府そのものゝ實權の所有者といふことを、先づ同僚に向つて示した。

(第六十七)

彼は就職後追々所謂水戸派、若くは一橋擁立派なるものゝ退

治を始めた。その顚末は旣記の通りである。唯だ岩瀬の如きは、一橋慶喜を世嗣とする方が外交上にも都合がよいといふ點にて、その贊成者たる丈にて、寧ろ水戸老公等の外交論とは、正反對といふべきものであり。然も外人と接觸するには、當時第一人者にして、彼に代るべき者がないから、井伊も當分の間は止むを得ずして岩瀬を用ひることゝなつた。

卽ち安政五年五月二十三日附橋本左內が、江戶より近藤了介に與へたる書中に、

『近來上田閣老——松平伊賀守——御大老——井伊直弼——邊邪說相始、正論直言之者を被二忌嫌一候て、旣に過日土岐丹波、川路左衛門、鵜殿民部抔、有志之御役人追々轉役被二仰付一、御時節柄不相當之事に候て、一統悵然仕候。何れ岩瀬抔も不レ遠御役も可レ被レ成二御免一抔風說も有レ之候位。其上西城之事も種々の說起り、中に一橋公を建候樣の儀難レ被レ行、

レ下候。』

又た同書中に左の如くある。

『閣老と申中、堀田は近來十分に京師之思召御了解にて、何分今度は篤と見込を相立て可レ伺との御論のよし。脇坂——淡路守安宅——も同樣。唯上田——松平伊賀守忠優——は關東にて獨裁にて可レ然と申見込にて、大に異論相立、當時之勢、堀田閣老之身分危位に相成居候。御大老と上田は隨分同說のよし承及申候。乍レ去閣中の事故詳切には知れ兼申候。何分有志の御役人左遷致候は、上田の所爲ならんと衆人皆申居候。』

併しその實は松平忠優でなく、井伊直弼であつた事は、後に於ていよ〳〵明白となつた。

五月二十四日附の岩瀬より橋本への書中に、

しになかい：

（第六十八）

井伊掃部頭が大老に任じて間もなく、三個の重大なる事件が出で來つた。その一は、米國との假條約調印であり、その二は、紀州慶福を將軍の繼嗣と定め西城に入ることであり、その三は堀田正睦、松平忠優を閣老より罷免し、更に太田道醇、間部詮勝、松平乘全を任用し、その井伊内閣の陣立を新にしたることであつた。

卽ち調印は安政五年六月二十日であり、井伊内閣の更迭は、二十三日であり、而して養君の發表は二十五日であつた。この三大事件が一週間以内に行はれた事は、頗る異常のことゝ云はねばならぬ。世間では井伊を違勅の罪人、不臣の首魁と云ふが、その實井伊は、出來得る限り獨斷的調印を欲しかなつたのである。固より井伊も、調印の止むを得ないことを知らぬでもなかつたが、それを爲すには、少くとも京都の勅許の必要を認めてゐたのだ。その證據とも云ふべきは井伊がその親臣長野主膳へ五月三日附にて與へたる秘書中にも斯く云つてゐる。

[illegible]
間違[illegible]申様[illegible]候。[illegible]
候。乍レ去三ケ月上旬ニ[illegible]ニ相成候ニハ不宜[illegible]
[illegible]油断不レ致様、閣老被二申居一候事ニ候。三ケ月九十日と申せバ七月廿七八日頃ニ相成申候。此度は右之日限参り候ハヾ是非〳〵調印いたし不レ申而は合點いたし不レ申事萬々一彼是手間取、其節未だ御使も歸府不レ致時ニハ、不レ得レ已事調印致候共不レ苦様願度事ニ候。しかし是は只今より申候義にも無レ之、夫迄に萬端御都合能相成候ハヾ、重疊之義、萬一不都合ニテ手後レ相成候節之義ヲ申入置事に候』

これにて見れば、彼は豫め勅許を得ることを最も必要としたことがわかる。

（第六十九）

然るにいよ〳〵勅許を待たずして、調印の止むなきに至つた事情は、『公用方秘錄』中に左の如くある。

『今日應接懸り井上信濃守、岩瀨肥後守金川より罷歸り申出候は、英佛之軍艦數十艘渡來致候趣、尤清國ニ十分

打勝勢ひニ乘じ押懸り候事ニ付、應援力甚御面倒ニ可ニ相成一乍レ去假條約書ニ御調印濟御渡しニ相成候ハヾ、如何樣にも骨折御迷惑ニ相成不レ申樣取斗可レ申旨申聞候間、三奉行始御役人中一同御評議ニ相成候處、軍艦數十艘渡來之上御免しと相成候而ハ、御國威も不ニ相立ニ付、唯今御免ニ相成候方可レ然旨、異口同音ニ御申立被レ成候間、天朝江御伺濟ニ不ニ相成一內ハ如何程御迷惑ニ相成候共、假條約調印ハ難ニ相成一旨被レ仰候處、御尤と御同心被レ成候ハ若年寄本多越中守斗ニ而、其餘之衆ハ何分數十艘引請候上之應接と相成候而は、假條約丈ケニ而は、相濟不レ申樣相成可レ申、實以不ニ容易一儀天朝より被ニ仰進一候儀も御國體を穢不レ申樣との御趣意ニ付、古制ニ泥ミ居候而ハ憂患今日ニ十倍可レ致、無レ據御譯柄御申解ハ如何程も可レ有レ之候得共、一旦爭端ヲ開き候而ハ皇居初沿海御手當も行屆不レ申事に付、調印致相成候

岩瀨兩人御呼出如何樣ニも骨折、天朝江御伺濟ニ相成候迄引延し候樣被レ仰候處、信濃守被レ申候は、仰之趣奉レ畏候得ども不レ及ニ是非一節ニハ調印可レ被ニ仰付一哉と御伺被レ成候處、其節ハ致方無レ之候得ども、成丈ケ相働候樣被レ仰候得バ、肥後守御申ニハ初より左樣之了管ニ而ハ迚も行屆不申ニ付、是非とも引延覺悟ニ而應接可レ致趣御申被レ成、則其趣を以御伺濟ニ相成、兩人ニハ御出立被レ成候由、御歸館之上被レ仰候ニ付、

御前江罷出候

公方樣江御伺濟なりとも

天朝之御沙汰を不レ被レ遊ニ御待一條約書ニ調印御達被レ遊候バ、全隱謀方之術中ニ御落入被レ遊候と申者ニて御違勅と申唱へ議論可レ致、實ニ御家之御大事、其罪御前御一人ニ御引受被レ遊

[illegible]

御進め相成候へば、其[illegible]

然ニ進り、勅許ヲ得候餘日も無之。猶又海外諸蕃之形勢を考察致候に、古昔と違ひ、航海之術に達し、萬里も比隣之如交易通商を開き、其外兵器軍制等皆實戰に試み、國富ミ兵強く、強て之を拒絶し兵端を開き、幸に一時勝を得候とも、海外皆敵と爲す時は全勝孰れに在るや量るべからず。苟も敗を取り地を割き償ハざるを得ざる場合に至らば、國辱焉より大いなるはなし。今日拒絶して永く國體を辱しむると、勅許を得ずして國體を辱めざると孰れか重き。唯今に而は海防軍備充分ならず。暫時彼が願意を取捨して害なき者を擇み許すのみ。且つ朝廷より被御進候儀は、御國體を穢さざる樣との御趣意に有之、抑も大政は關東へ御委任、政を執る者臨機之權道なかるべからず。然といへども勅許を待ざる重罪は甘じて自分一人に更候決意に付、亦云ふ事勿かれとの御意有之、夜も追々更候に付、御休息可被遊樣申上、直樣奥え被爲入。』

此の如く井伊當人は勿論、其の謀臣宇津木の如きも、朝命を[illegible]掛念もありて、[illegible]但だ水戸派等は、[illegible]印した方が、日本開國の機運を開く一大轉機ともなるべしとて、殊更に逡巡したる井伊大老等を脅迫して、この擧に出でたかも知れない。將た又た幾許か岩瀬等に於ては捨鉢とでも云ふべきところもあつたらう。

(第七十)

ところが閣僚の中にては松平伊賀守の如きは、最も熱心なる專決獨斷派にて、彼は堀田正睦等が餘計なることに京都迄出掛けて、かへつて味噌をつけて歸へつたのを齒痒く思ひ、寧ろ一氣に調印すべしとの意見であつた。その事は中根雪江の『昨夢紀事』にも斯く書いてある。六月十九日の夜松平慶永は、井伊掃部頭を訪うて談話をなし、談たまたま米國條約のことに及びたるに、井伊は曰く、

『余は兼て京都の事は厚く心得候て、是こそ第一義なるべけれと言葉を盡し候へど、備中は敗軍の將にて言句も出[illegible]

伊賀は一トロに長袖の望に適ふやうにと議するとも、果しなき事なれば此表限りに取計らはずしては、覇府の權もなく、時機を失ひ、天下の事を誤るよしを主張し、海防係りは恐怖而已にて、兎も角も差向きたる難を遁れんとの情態、唯本多越中計は余と同意にて其他の味方もなくて、孤立の勢ひなれば偏に貴兄等の援助を依頼するの外なし。伊賀抔は小身者の分際として、（信州上田城主五萬三千石）此頃は權威に誇り傍若無人の有様、此度の事抔も我意に任せて京都を押付んと致す條、言語同斷なりと罵らる。公（松平慶永）伊賀殿の京を輕蔑せらるゝは以の外に候へども、さらば足下の意に任せて再度の伺となりなんにも、先頃より度々申立候ひし御使の人、于今御定なき程なれば、彼の是のとたゞ日數のみ經たらんには、其内に英佛渡來して、兵威を以て逼りたらば、如何御處置あるにや。天朝崇奉の御趣意は間然なく候へど、外寇當前

（第七十一）

されば この事に就いては、必ずしも井伊のみを咎むべきではない。只だ井伊がそれ程迄にも此の一件を大切に思うたらば、調印の後、自ら京都にも出掛けて、正々堂々、その趣旨を貫徹すべく務めるのが第一であつたのに、かへつてこれを閑却し、何らそれ程の施設をなさず、單に恐れ多くも閣老の宿次奉書にて、一片の通告狀を武家傳奏まで差出したるに至りては、内閣の首班たる彼は、固より全く其の責に任ぜねばならない。彼が堀田及松平忠優を罷免したる事情に就いては、頗る込み入つたることがある。元來井伊は堀田の京都より歸着三日後に任ぜられたるものにて、固より堀田其人が井伊推薦の事に與り知るべき餘地はなかつた。

されど閣僚の中に於ても、若し彼を推薦したる者、若くは彼

閣老を以つて、政權を壟斷せんとまで企みたる[illegible]此の如くして兩者の衝突は必然の勢もて出で來つた。その事情に就て、堀田正睦が松平慶永へ語りたるところによれば、

『元來伊賀と掃部とは睦まじからず候ひしが、大老となりし以後は、伊賀より大に諂諛を盡し、又僕へも追從にて、何事も上坐〳〵と讓り聞え候は、表面の姦計にて、內實は大老へ取組み、僕を壓倒せんと種々の姦計を施し候』

と語つてゐる。僕とあるは正睦のことである。これは安政五年五月十五日夜のことだ。

猶ほ六月一日の夜、一橋慶喜の懷刀たる平岡圓四郎の語りたるところによれば、

『上田の工夫にて佐倉も關宿も倒して後、高松と姫路を大老となし、己れ一人にて權柄を握らんとの計略ある由』

との說をもたらしてゐる。上田といふは即ち松平忠優にて、佐倉は堀田正睦、關宿は久世廣周、高松とは松平讃岐守、姫路は酒井雅樂頭である。

これは事實乎、否乎は知らぬが、當時既に松平忠優が井伊をも押除けて、更に別に計るところのあつたことが察せらる〵。

猶ほ六月九日、[illegible]、其の[illegible]なる、[illegible]りたるところによれば、

『大老も已に伊賀殿の陰邪を悟り伊賀に賣られたりと怒り居られて、御養君の御弘めも濟たる上にては引籠られんとの事なる故、遠江殿(宗城)夫にては御爲になるべきにもあらず。併し姦人を除かん方こそよからめとお勸めありしかば、大に御同意にて、伊賀殿の奸狀種々物語られける內に、大老の持論南紀なるを知つて己が力人にせんとて推擧ありし事なれば、初の程は慇懃に敬待ありしに、近頃に至りては我儘の異論を出して余を壓へんとするも、西城已に南紀に決せる故にて、言語道斷の佞奸なり。此頃御庭番の上書御下ゲありしに、己れに不利なる事あればとて、一人して披見して濟せし事抔は以の外なり。備中抔も威勢に恐れ、閉口し、笑止千萬の儀なれば、彼の惡を發きて、罪を獲せしめんことは、何の難き事あらんと、牙を嚙んで憤怒せられしとぞ』

とある。これをみれば、堀田抔も老中首座にてありながら、かへつて松平忠優にやりつけられてゐたことがわかる。

（第七十二）

然るに松平忠優は、此の如くして遂に内閣を去らねばならぬ事情となつたが、殆ど無害であり、且つ外交問題にかけては寧ろ必要なる人物、有益なる人物である堀田までも、同時に罷め去つたのは、何故である乎。その事に就いては、六月十八日の夜、伊達宗城が井伊より直接聞きしところとて、これを松平慶永に告げたるものがある。

『扨別段に密話せられしは、兼ても御申聞ありし、伊賀守の事、御庭番抔よりも調書上り、愈姦狀明白なる故、其段及言上、上にも不屆なる奴なれば兎も角も取計ふべき旨、御指圖既に濟たり。備中は人物なれば其儘とも思ひたりしに、是は上より伊賀守を退くるならば、備中守も京都の始末等も不束なれば、一處に取計ひ可レ然との上意なれば、せん方なく

堀田は餘りに人間が無我であり、く、井伊にとつては同僚として少しく手重に過ぎたから、機會に一掃し去つたのではあるまい乎。井伊はいづれかと云へば、己の手に負ふ秘書官程の者を閣僚とする事を好んだ、有力なる閣僚を統御する等といふことは彼の長所でもなく、又た本意でもなかつたやうだ。

されば彼が堀田を罷免し去りたるのは、たとひ將軍の發意にもせよ、彼に於ては寧ろこれを歡迎したであらう。若し彼が堀田を必要としたならば、彼はその旨を將軍に言上するに、何の不可かこれあらんやである。

彼は寧ろ將軍をかりて堀田を退けたのではあるまい乎。

第三、西城の事は公然の秘密であつて、彼は寧ろこの事の爲に大老となつたのだ。今更この事に就いて彼是云ふべき必要もあるまい。

「石川啄木集」目次

―『現代日本文學全集』八月配本―

「石川啄木集」序

啄木は實に不遇な短生涯を終つた。物質的に酬いられるところの極めて少なかつたばかりでなく、その思想、藝術の眞價を認められることも、決して當然な程度には達してゐなかつた。然かも彼自身、勿論この兩方面における不遇を歎じなかつたとはいへないが、それがために、その生活の意欲を減失することもなく、その表現の歸向を轉更することもなく、遂に獨自の世界を展開し得たことは、その環境に處して、彼の才情の豐富と意志の强固とによるものといはなければならぬ。

『明日の考察！ これ實に我々が今日に於て爲すべき唯一である、さうして又總てである。』から彼は、その晩年の一論文の中に說いてゐる。現代の社會組織、政治組織、家族制度、教育制度、その他百般の事象に亙つて、靜かに、熱心に、深く、檢覈し、討究し、批判しなければならぬ、昨日に歸らうとする舊思想家、今日に沒頭しつゝある新思想家、それらの人々の前に、新たに明日といふ問題を提示して、これを「時代」の意志と體驗とに統合しなければならぬ。

『[illegible]、時代より[illegible]が進んでゐるといふ自信を此頃捨てることが出來ない。』からもまた彼は、その書簡の中にいつてゐる。

それは決して彼の「自惚」ではなかつた。然かも當時、極めて少數の彼の周圍のみしか、「新しき明日」への先驅者たる彼を知らなかつたのである。彼は「明日」に對する欲求と、準備と、計畫とのために、焦慮し、苦闘し、叛逆し、絕望し、諦め、悲しみ、憤り、嘆きつゝ、身を切るやうな物質生活の窮迫の中に、僅かに二十七年間の運命を終つた。彼の全精神は「明日」のために極度の緊張をなしつゝ、その肉體は遂に「今日」の傷ましい犠牲となつたのである。

然しその啄木の「明日」は遂に來た。生前においても詩集『あこがれ』のごときは、當時、天才の一少年詩人として、ロマンチシズムの時代に、詩壇の驚異とはなつたけれども、彼が「唯一」にしてまた「總て」であるとした社會認識の强調は、むしろ彼の死後、新潮社の厚意によつて出版することを得た全集三卷その他の效果が、彼への理解を全體的のものとし、その思想藝術を一般民衆のものとなしたことは否み難い。彼の遺友の一人なる予は、當時主としてその稿遺[illegible]に、これらの書作が、現代文學に[illegible]の中に加へられるに至つたことは、[illegible]圖と熱望の空しくなかつたことを欣幸とせざるを得ない。

歌集によつて、彼は最も多くの共鳴者を得てゐるやうである。然しながら、彼にとつて、作歌は畢竟彼の「悲しき玩具」に過ぎなかつた。そこに彼の社會意識が窺ひ知られるのである。彼は小說の創作に志してゐた。そして長短種々な創作を試みたが、遂にみづから滿足し得られるものは一篇も稿を脫しえず、評論に、詩に、感想文に、彼としてはそれらすべてが「未完成」のまゝに終つたのであるが、それだけ、彼の「時代」に對する野望の强かつたことが察し得られよう。

「石をもて追はるゝ如く」彼が去つた鄕里澁民村の一角には、死後「無名青年の徒」によつて一大記念碑が建てられ、啄木會と稱して各地に彼を思慕し、あるひは彼を研究考察せんとする團體の無數に設けられた事實もまた、彼が生前の信念と努力の一具現でなければならない。

昭和三年六月

土岐善麿

眞知子

野上彌生子

一

眞知子は自分の結婚問題に就いて、母がこの頃、急にあせり出したのを見遁さなかつた。父の死後、殊にふたりの姉たちが片づいてからは、未亡人らしく小石川の古い家に引つ込んでゐた母が、機會を作つては彼女をひとなかに連れ出さうとしたり、自分でも氣輕く附き合ひ先を訪ねたりするのは、その目的のために外ならないのを知つてゐた。專門學校を出て、それ以上大學の講義まで聽かうとしてゐる、才能のある、獨立の考を持つた、美しい娘に取つては、これは明かに屈辱であつた。

『ねえ、お母樣。』

或る日、外出の支度をしてゐた母に向つて、眞知子は思ひきつて切り出した。

『私のことなんか、あまりよそでは話さないやうにしてね。』

簞笥の前で羽織の紐を結んでゐた未亡人は、娘を振り返り、咎めの調子で聞いた。

『何んだつてそんなことを云ふのです。』

『いろんな家で自分のことを問題にされるのは、誰だつていゝ氣持ちやないでせう。』

『結構ぢやないか、問題にならないやうな娘なら、幾ら頼んだつて問題にしてくれはしませんよ。』

『頼むなんて、ぢや、なにを頼むの。厭なこつてすわ。誰がそんな——見つともない。恥ぢやありませんか。』

實際恥かしさと怒りで眞知子は赤くなり、涙が湧きさうになつた。

娘のこの興奮は、未亡人が一度は眞面目に話し合はなければならないと決心してゐたことに、丁度機會を與へた。

『おや、母さんが焦らして氣を揉んでゐるのを、未亡人は默つてしまつた。『何か餘計なおせつかいでもしてゐるやうにあんたは思つてるのかい。考へて御覽なさい。あと二月たてば幾つになるのだか。』

僅か七十日足らずの後に二十四になることは、母を脅やかしてゐるほど娘を脅やかしてはゐなかつた。

『年のことなんかよくつてよ、幾つだつて。そんなものに自分の運命を決められちや堪らないわ。』

『堪らないたつて、年は立派に女の運命を決める

態度で話すことは我慢ならなかつた。で、ふだんから、細心な出來得るだけの冷淡で逃げ廻つてゐた話題であつた。それだけ未亡人は捕へた機會を放さなかつた。

『眞逆あんただつて、そんな無鐵砲なことを考へてはゐないでせうから、もうそろそろ分別をつけて呉れなければ。——そりや當節のことだから學問もよござんすよ。出來ることをしとく分に損はないと思つて、私はそんなことであんたに反對したことは一つとしてない。でも、北海道の姉さんたちや、親類の人たちにして見ると、あんたがいつまでも結婚しないのは、私が甘やかして、好き自由な眞似をさしておくからだとしきや考へないのですからね。』

今度は未亡人の眼がうるんで來た。北海道の大學で生物學を教へてゐる曾根家の當主は、未亡人とは義理ある間柄であつた。父は可なり高い地位の官吏であつたが、金を殘さなかつたので、未亡人と眞知子はやつと昔の家に住んでゐると云ふだけの生活しか出來なかつた。

[illegible]

[illegible]を持つてゐる[illegible]すること

は、妻に取つては何でもなかつた。

この勢力のある、可なり美しい、年から云つても眞知子と七つしか違はない嫂は、その若さと美しさを北海道で消耗させる氣は決してなかつた。適當な場合に、實家の父の手を利用すれば、東京の大學か、それに劣らぬ地位を夫のために見つけるのはむづかしくはないと考へてゐた。またそれには現在の古ぼけた陰氣な邸を、もつと快適な、當世風の樣式に改築しなければならなかつた。實際あんな時代後れの不便な家で、東京の空に描いてる彼女の樂しい夢を實現させることは、思ひもよらなかつた。にも拘らず、まだその儘で手をつけないでゐるのは、夫の轉任が確定しないためばかりではなかつた。その理由を誰よりもよく知つてゐると信じてゐるのは未亡人であつた。

『馬鹿々々しい。』自然の發展から、話がそこまで及んだ時、眞知子は寧ろおかしがつて云つた。『お嫂さんに氣に入つた家を建てさせるために、急いで結婚しなけりやならないなんて、そんな滑稽な話つてあるか知ら。建てたけりや、私なんかに關係なく、いつだつて建ててよ。』

『さうは行きません。あんたや母さんのために建てる家ぢやなし、餘[illegible]

——そんな考をしてゐるなら、あんたは母さんに[illegible]ないところ

——お父さんはあれだけ[illegible]たのに、中々扱ひ難いところのあつた人だつたし、亡くなれば亡くなつたで、今日まで一日だつて母さんには苦勞の絶えた日はありはしない。それだのにあんたつて人は、ひとの氣も知らないで——』

『そんな話を聞かされると、私なほと結婚しようなんて思はなくなつてよ。お母樣だつて、私を無理にどこかへやつて、同じやうな苦しみをさせたくはない筈でせう。』

『それは別問題ですよ。母さんが苦勞したつて、あんたまで結婚して仕合せになれないつて法はないんだから。それどころぢやない、今までにだつてあんたがその氣なら、どんな幸福な結婚でも出來たのぢやありませんか。』

『もう澤山よ、お母樣。』

眞知子は遮つた。幸福な結婚と云ふものが、母の云ふやうにさう容易に誰にでも手に入るものだとは信じられなかつた。反對に、春燕の飛ぶのを見て急いでネルを着はじめるやうな、また十二時の時計に促されて、胃の腑が空かなくても空いても晝の食卓に坐らされるやう

な、謂はば觀念に過ぎない一つの儀式を境界として、突然特定した或る存在が自分の存在に結びつき、話すことも、笑ふことも、考へることも、食べることも、眠ることも、相手の存在を意識することなしには許されないと云ふ奇妙な生活の中で、眞の幸福や、自然な暢びやかな樂しさがあり得ようとは思はれなかつた。眞知子には、結婚する婦人たちは皆んな怖るべき冒險者に見えたと共に、自分が結婚に對して斯んな考へ方しか持たないのは、まだ誰をも愛したことがないからだ、と云ふことも知れてゐた。と云つて誰を愛すればよいのであらう。眞知子は決してそんな人には出逢はなかつた。彼女が今日まで結婚しないで來たのは、明かにそれが理由の一つではあつたが、併しそのため神經質になるほど愚ではなかつたし、知識に對する欲望も十分彼女を落ち着かした。二時間も母とそんな話の相手をさせられた後でさへ、眞知子はふだんと變らない平靜さで、學校に行き、歸るとノートの整理をしたり、參考書を讀んだり、演習の下調べをしたりし、夕方からは一人の女中に手傳つて、

時、眞知子はいつもより確かに五分長くその場を離れなかつ

の、洗ひあげられたばかりの美しい、健康な、五尺三寸の身體は、なんにもあはてる必要のないことを彼女に證明した。

『――いつだつていゝのだわ、結婚なんて。』

部屋に歸つても暢び〳〵と快しい氣持が去らなかつたので、いつもだとそれからまたすぐ何か讀みはじめるのに、勉強机の前の籐椅子を廊下に引つ張つて行き、それに凭つかゝりながら氣取つた中音で知つてる歌を次々にうたつた。綺麗なたつぷりした聲を彼女は持つてゐた。外には仲秋の月が少し曇つて現はれ、廣いが、手入が届かないのでどこか廢頽の趣のある庭を照らした。蟲が鳴いた。彼女はこの荒れた庭が却つて好きであつた。

併し二部屋向の茶の間の時計が十時を打つ頃には彼女も寢支度をはじめてゐた。而してまだ其處で女中のきみに肩を揉ませてゐた母にお休みなさいを云ひに行くと、序でに茶棚からチョコレートを摑み出

[illegible]

[illegible]階の人々を排除するのが例であつた。今年は第三日曜が選ばれ、[illegible]にも[illegible]排除の[illegible]が開いたら、未亡人は、眞知子のために是非[illegible]かたければならないと思つてゐるらしかつた。併しその朝になると持病の偏頭痛で床を離れることが出來なかつた。眞知子は自分もやめにしようと云つて見たが、それは許されなかつた。

『顔を見せないつて思はれちやまづいから、あんただけはいらつしやい。お嬢さんたちが東京にゐなければゐないだけ、斯んな時には義理は缺かされませんよ。』

未亡人は獨りとさう云つて勧め、また眞知子の一番上の姉で、芝の上村家に嫁づいてゐる辰子も行く筈であつたから、向で落ち合へばひとりでも困りはしないだらうと云つた。眞知子の躊躇は介添役の有無と云ふやうなことからではなかつた。そんなお嬢さんじみた取扱には、もうずつと以前から服してはゐなかつた。ただ眞知子は、田口家の毎年の園遊會は、年頃の息子や娘を持つ母達に巧妙に利用され、主人の老博士は、停年で大學をやめる前からプロフエッサー・ミッドルマンの渾名を貰つてゐるのを知つてゐるので、このことが一週間前の母のお說教や、近頃よく田口家を訪ねたことなどと連絡がないとは考[illegible]

「[illegible]の若さ[illegible]たけりや、[illegible]ことが出來[illegible]

[illegible]氣に行つてやられ[illegible]

禿けて、血色のいゝ、鼻の大きい、さうしてまつ白な顎髯を持つた、好々爺らしい陽氣さと、學者の職業的な物柔らかさの混和した見本のやうな主人は、丈も幅も夫に負けない位大柄な、權威のある顔をした、器量自慢の紋服の夫人と共に、庭の入口のテントに立つて客を迎へてゐた。

『まあ、眞知子さん。』五六人たて込んだ後のきれ目に、ひとり静かにその前に進み寄つた彼女を見ると、夫人は愛想よく呼びかけた。『よく入らして下さいました。――お母様は。』

眞知子は母の頭痛のことを話し、なほその傳言として、折角の招待を外づす殘念さを述べた。

『そりやいかん。悪い風邪がぼつ〱流行つてるから、御用心なさらんと。』

主人は醫者らしい質問の二三を、お愛想の代りにした。然も何んに

もないのだからと眞知子は答へた。

「なら直ぐと快くおなりになりますわ。でも、あなただけでも入らつしやれてどんなに嬉しいでせう。お母様には、この節はそれでもちよいく お目にかゝるのですけれど、あなたには、本統に少しも顔を見せて下さらないんだから。」

夫人は冗談と眞面目をいつしよにして咎めた。眞知子は顔のほてるのを感じた。未亡人だつて、以前は近頃のやうにしげしげこの家を訪ねはしなかつたから。——眞知子自身の縁談に就いて云へば、それは夫人から持込まれた縁談を二度まで拒絶したことに原因してゐた。

「何でした。眞知子さんが大學で聽いてゐるのは。」

「社會學ですわ、ね、さうでしたね。」

眞知子が返事する前に夫人が引き取つた。

「ほう、偉いものを勉強してるんだな。」

「ですから私云つてますの。眞知子さん見たいなお難しい方が、社會に[illegible]

新しい客が近づいた。眞知子はやつとこの關所から放免されるのが嬉しかつた。併しその前に夫人は、今日は是非晩御飯まで殘つて欲しい、久しぶりだからそれ位のことは聞いて呉れてもよい筈だと云ひ、眞知子が母の頭痛を楯に辭退しようとした隙をも與へず、丁度庭から其處へ來合せた末の娘で、眞知子よりは二つ下であつたが、それでも五ケ年前にもう結婚した富美子に、上手に彼女を引き渡した。

「富美ちやん、眞知子さんよ。御一緒に花壇の方でも廻つて御覽なさいな。——相變らず何んにもおもてなしは出來ないのですけれど、菊だけは今年は上出來ですよ。」

二人は連れ立つて、云はれたものを見るために並んで歩いて行つた。言葉の通り菊は見事であつた。併し客は花壇の前よりは、廣い庭の其處此處に設けられた模擬店の方へ熱心に集まつてゐた。この無邪氣な心理の働き方は、ことは違ふが、案内者の富美子の上にも同じく作用してゐた。打ち明けて云へば、[illegible]

富美子に取ら云ふ一點には[illegible]

『なにが。』

『いつまでも寢坊で、好きなことを勉強出來ないのですもの。』

『あなただつて、なさらうと思へば何んだつてお出來になるぢやないの。』

『駄目。――ほんとに駄目よ、家を持つちまつちや。いちんち忙しくつて。』

貞知子はもう少しで笑ひ出しさうになつた。父の病院に勤務してゐる醫學博士の夫を持ち、同じく父に供給された田園都市の文化住宅に二人だけで住み、これも同じく父の供給に相違ない婆やと小娘を使つて暮らしてゐる二十一の細君でも、結婚したとなれば人並に斯んなことを云ふのを數へられるのであらうか。でも田中の娘たちの中ではこの氣のよい、そばかすのある、小さい富美子が貞知子は第一に好きであつたから、相手の可憐な嘆聲を無視しないやうに氣をつけた。

『私また、あんたなんか毎日ひま過ぎて困つてゐらつしやるんだとも思つてたわ。』

『あら、どうして。』富美子は驚いた嬉しさうな聲で叫んだ。『それどころぢやないのよ。それだのに、誰にでもそんな風に思はれてるから口惜しくなつちまふ。だつて、宅ひとりにだつてとても手がかゝるのです

[illegible]

は起きられないけれど、[illegible]

遅いでせう。これからやつと起きて來たと[illegible]

新聞だつて家ぢう大騷ぎさせて。それで[illegible]一つ自分で[illegible]うとしはしないのだから憎らしいつてたいの。』

併し留守の間は十分ひまな筈だ、と貞知子が一と言挾んだのに對して、富美子は決してさうでない譯を十近く並べた。先づ小鳥の世話と、一匹のペルシャ猫の手入と、その猫の毛と同じ位綺麗にウェーヴさせるためには可なり時間のかゝる自分の髮結ひと、訪問と接客と料理と編み物と、今でも一週に二度づつ稽古に通つてゐるピアノの練習と――

『ピアノつてば、』富美子は思ひ出したやうに、其處で話を轉じた。『この間の帝劇のX――お聽きになつて。』

その著名なポーランド生れのピアニストは月初めに十日間帝劇で演奏した。貞知子は行けなかつた。

『まあ、惜しかつたのね。私、二晩だけは行つたけれど、お仕舞ひのショパンがどうしても聽きたくて、その積りで切符買つておいて貰つたのよ。ところが、どうでせう。病院の方で手の放せない患者さんが出來たとかつて、とうとう行かずじまひ。殘念で當分諦らめきれなか

つたわ。ですから、あんな時には××の從姉が私いつでも羨やましくなるの。旦那さん眼科でせう。どんなことしたつて夜まで引つ張り出されたりすることは決してないんですもの。それから見ると内科は面倒で氣骨が折れて、本統にいやだともつてよ。さうはお思ひにならない。』

實際、一方は命の問題であり、一方はこの上なく惡く行つたところで、誰かを盲目にするに過ぎなかつたから、その訴に對しては眞知子は理論的に同意しないわけに行かなかつた。と、富美子は、すつかり滿足し、なほ幾ら話しても話し足りない話題を續けるために、割に人の少ない洋菓子のテントを選んで休まうとしてゐたところへ、夫の木村伯爵が入つて來て、邪魔された。醫者らしく身についたモーニングの胸に、接待係のしるしの赤いリボンをつけた木村は、眞知子と、形式的な挨拶を交換するとすぐ、妻に近つき、明らかにそのため彼女を探してゐたやうに、何とかさんのお孃さんが見えたと云ふ報告をした。

も側にゐる眞知子を忘れるほど不作法ではなかつたので、聞いた

なた、御存じだつたわね、柘植さんのお孃さん。』

『柘植さん――』

眞知子は思ひ出せなかつた。

『ほら、あの子爵の。――貴族院へ出ていらつしやる。』

『いゝえ。』

眞知子はそんなお孃さんは知らなかつた。

『この春の私たちの音樂會の時お逢ひになつたと思つたけれど。――入らつしやらなかつたの。どうりで。多喜子さんつて、快活ないゝ方だわ。ピアノが御いつしよなもんだから、この節私の一とう仲よしなの。』

富美子はこの打ち明けを無邪氣な笑ひでし、眞知子とも屹度いゝ友達になれるから、一緒にあちらへ行つて紹介しようと云つた。併し眞知子は今少し足を休めて、其處のお[illegible]お菓子を食べて行きたいと、

十[illegible]つた。

一[illegible]と、一[illegible]子は、[illegible]手のつかないまゝ[illegible]に殘つてゐた。云ふまでもなく彼女を其處に引き留めたものは、そんな飲み物や食べ物ではなかつた。併し眞知子は斯かる場合に未婚の娘が普通感じさせられるやうな羨望からは自由であつた。假りに何か似た感情があつたとすれば、それは富美子の幸福な結婚そのものよりは、その結婚に、寧ろその夫に滿足し切つてゐる、彼女自身の單純な欲望に對してゞあつた。眞知子は、一年ばかり前母が急性の腎臟炎で入院してゐた關係から、木村をば富美子の夫としてより前に、病院の一醫員として知つてゐた。丁度彼女との結婚を決定的にする第一條件であつた學位が取れたばかりの頃で、彼はその小さい稍々尖つた頭を、假漆塗の羽目板のやうに綺麗に光らせ、それも誰のよりも綺麗なまつ白い上つ張りをふはくさせて、廊下を氣取つて歩きながら、こつそり看護婦にからかつた。特別に親密だと云ふ噂のあつた、上方訛りの、眼の可愛い看護婦をも眞知子は知つてゐた。

併しあの樂しさうな富美子に取つて、斯んな餘計な回想が何の役に立つだらう、と考へると眞知子は馬鹿々々しかつたし、下らないことを忘れもせず覺えてゐる自分に對しても厭な氣がした。で、それから遁れようとするかの如く、急いで卓の上のものを空にしてそこを出ると、[illegible]

『[illegible]しない[illegible]』

この[illegible]娘の[illegible]しい[illegible]に、[illegible]時に[illegible]子の目と耳に入つた。

『そんなに探して[illegible]たつて、斯んな隅つこの[illegible]た所にゐたんぢや、分りつこないぢやないの。』

『これでも、富美子さんの御案内なのよ。』

眞知子は云ひながら、彼女が引き受けて與れたその役目に對して、どんな報酬を自分が拂つたかを姉に知らせたなら、乾度面白がるだらうと思つたけれども、話さないうち辰子は田口の奧さんに聞いたと云つて母の病氣のことを云ひ出した。

『大したことはないのだつて。』

『いつもの頭痛。』

『ならいゝけれど、お母樣この節は少し弱つたわね。まあちやんも餘計な心配をさせないやうにした方がいゝのよ。』

『お母樣が餘計な心配をしたがるからいけないのだわ。』

『あんなこと云つて。』

『でもさうぢやないの。』

『さうぢやありませんよ。』

『さうですよ。』

議論の主題についてはどちらも口に出さなかつたが、それが何であるかはお互ひに分かりきつてゐたので、決して負けず、姉妹らしい微笑で云ひ張りながら歩いた。昔の大名の下屋敷の跡だと云ふ庭は、どちらに向いても十分廣かつた。また違つた方向で違つた特色を持つてゐた。二人の進んだ方は雑木と赤松の自然の森に續き、旨しい食べ物のテントも其處まではなかつたし、從つて一般の客は近づかなかつたから、歩きながら話すには便利であつた。それに暫くぶりに逢つて、二人は身内のものだけ分かりもすれば樂しくもある話をためてゐた。例へば北海道の方の話。眞知子のすぐ上の姉で、××の高等學校の教師の長谷部に嫁いでゐる峰子や、その一人の小さい娘の話。都合で近いうちに皆んなして出て來るかも知れないと云ふ便りのあつた話。――

『さう云へば、その手紙に、』眞知子は右に並んだ姉の表情を探るやうに見詰めて、『お嫂さんのことひどく心配して來ててよ。』

出た後、父と縁故の深い會社で重役並みの待遇を受け

ふ金と時間に不自由はしなかつた。器量好みで大騒ぎして貰つた嫁子に對しても、半年と誠實な夫でなかつたのは關係者に知れ渡つてゐた。

『でもこの節の様子はあちらのお姉さんに分つてなかつたから、いろいろ聞いて見て驚いたらしいの。』

『誰だか知らないがそんな田舎まで行つて、そのひとも餘計なお世話ぢやありませんか。それで、一體、どんなこと饒舌つたつて書いてあるのです。』

併し眞知子の處女らしい羞恥と厭悪が、義兄の悪い噂の詳細を口に出して、その妻なる姉に報告することは許さなかつた。でそれには答へず、自分の感想を代りにした。

『でもよく我慢出來てねえ、お姉さん。私なら決してそんな生活には堪へられないわ。』

『さう思ふのはまあちやんが二十三で、私はそれより六つ上だつて證據

[illegible]
[illegible]音樂會をし、芝居に行き、色んな藝事に手を出し、[illegible]な、併し鈴持の、お洒落の、中には淫奔者もある氣樂な婦人の[illegible]間を持つてゐた。子供がなく、兩親は田舍の家に別居してゐるので、どんなことでも出來た。眞知子は姉のこれ等のやり方には贊成されないものがあつたし、傾向や趣味から云つても違つてゐたに拘らず、かつきりした、女々しい點のない自由なその性格は嫌ひではなかつた。寧ろ非常に違つたものが非常に似てゐると云ふ有り勝ちな例に準すれば、兄姉ではその姉が最も自分に近い氣がした。顏も二人が一番似てゐた。たゞ辰子の方は幾らか太りかけて、結婚した三十女の瑞々した膨らみを持つてゐたに比べると、眞知子はまつ直ぐに、子供じみて、すらりとしてゐた。さう並んで歩いてゐる肩を見ても、姉よりは一寸高かつた。

二人は十月の午後の黄ばんだ太陽の下を森に沿うて歩きながら、再び庭の方へ出ようとした。餘興の大神樂がはじまつたと見え、陽氣な太皷の音が聞こえた。眞知子は晩までゐるか姉に尋ねて見た。辰子は友達と芝居の約束があるので頓て行かなければならぬと云ひ、客がたて込んでゐれば默つて歸るから、家の人たちには後でさう傳へて貰ひ度いと云つた。眞知子は引き受けた。併しまだ森からすつかり[illegible]お[illegible]共に、[illegible]さう[illegible]しい中年の夫人と、今一人の[illegible]內しながら、反對の路を歩いて行くのが目に入つた。彼女たちは斜面の小高くなつた木立の間を拔けてゐたので、向うからは氣つかれないで過ぎた。

「あのお孃さん知つてる」

「柘植さんて云ふのぢやない。」

眞知子は富美子が先刻話したことを思ひ出しながら答へた。辰子は連れの紳士に就いても知識を持つてゐて、彼が有名な資産家で千萬長者の河井家の一門であること、早くからケンブリッヂに留學して考古學を專攻し、日本にはやつと半年前歸つたのだと云ふことを傳へた。

「北海道のお兄さんなんぞも、あちらに行つてらした間懇意にしてゐたらしいの。何んでもそんな話だつたわ。」

「どこでお逢ひしたの。」

「この間の歌舞伎の慈善興行の時。今日とすつかり同じお取り合はせよ。」

この最後の言葉で話したものも聞いたものも一緒に微笑した。云ふまでもなく、田口夫妻が目的なしにそんな役目を勤める筈はなかつたから。同時に眞知子は、當面のさう云ふ大事な仕事がある間は、自分

にまで餘計なおせつかいをする筈はなかつたのだと思ひ、今日要らない心配をして來たのを滑稽に感じた。

三

晩餐は佛蘭西風なあつさりした、それで完備した食堂の裝飾に負けない簡潔なものであつた。人數は多くはなかつた。大部分內輪の人々で、その中に交つた河井は最も大切な客として取り扱はれ、多喜子と並んで掛けさせられた。眞知子は反對の側に富美子と並び、右の椅子には食堂が賑くばかりになつて飛び込んで來て、女主人の倉子から親愛らしい打ち解けた調子で遲刻を詰じられながら、竹尾と云ふ名前で紹介された若い醫者がかけた。併し眞知子の注意は、そんな知りもしない、紹介にもされない男のひとよりは、向側の二人の方へ引かれ勝ちであつた。何故なればまわりの人々はみんなその二人を目標にして話したり聞いたりしてゐたし、それを傍觀することは面白くないとは云へなかつたから。

『それ程のものではありません。』

河井はもの靜かな、おつとりした態度で受けた。

『いつ頃お出來になりますの。』

夫の後を繼いで倉子は聞いた。

『豫定の通りに行くと、あと二た月位で大抵すむ筈です。』

『お出來になりましたら、是非ねえ、奧樣。』

倉子夫人が柘植夫人に誘ひかけながら、一緒に參觀したいものだと云ふ意味を述べると、夫人は勿論贊成し、同時に娘もそんなものを見ることに非常に興味を持つてゐると云ふことを附け加へたので、多喜子はそれに依つて都合よく話の仲間入をした。

『參考品の整理だけでも大變ですわね。』

『まだ打つちやつてあるんです。』

『あちらのお珍しいもの隨分おありなのですつて。』

『整理がついたら、そのうちお目にかけませう。』

[illegible]

非常に満足さうに見えた。それに續いた話の間に、河井は中央亞細亞の方を廻つて、今少し寂しい場末を集める積りであつたが、既に亡人になつてゐる母の病氣の報知で旅程を繰りあげて歸つたのだと云ふことを眞知子は知つた。

『併し、あの當時の容態では、御母堂が今の程度にまで恢復されようとは、私はじめ誰も信じなかつたのですからね。』

『それにしても、よくまあ長い間お母樣がお手放しになつたと思ひますよ。』倉子は今獨逸に行つてゐる長男を引合に出しながら、『殊にお宅では外にかけ替へのないお後嗣でゐらつしやいますもの、ねえ奧樣。』

倉子の言葉には何んでも決して異議を立てないことに極めてゐるらしい柘植夫人は、この場合もすぐ同意し、あゝ云ふ確かりした立派な方でなければ中々出來ないことだと云つて賞め立てた。

『××家から來てゐらつしやるのよ。』

丸煮にした鶏の肉を上手に骨から放してゐた富美子は、その時徳川氏の血統を引いた大名華族の名前を擧げ、小聲で隣の眞知子に噂の人のことを説明した。

『今でもお綺いの。』

[illegible]

と、眞知子は一種反感に近いじれつたさを感じないではゐられなかつた。あんな人は到る所でちやほやされつけてゐるから、見え透いたお世辭を云はれても多分無感覺なのだ――眞知子にはさう思へた。而して何か非常にかけ離れた存在物を見るかのやうに、間の盛花の向うにフォークと共に動いてゐる、彼の華奢な女のやうな指を眺めた。

食事がすんだ。客は次の應間に移つた。併し、食堂で醸されてゐた空氣は其處でも變らなかつた。河井の意を迎へ、彼の注意を少しでも多く多喜子の上に向けさせようとするためには、あらゆる努力が拂はされた。彼女が富美子を相手にして彈かされたピアノのデュエットも、云はゞそのプログラムの一つであつた。

演奏は申分なく行つた。人々はわざとほんものの音樂會の時のやうに喝采した。河井も一緒に手を叩いた。好きな酒のあとで、禿げた剛い腦頂部を、赤々と上機嫌に輝やかしてゐた主人は、人一倍はしやい

眞知子

で、誰よりも高くぱち〳〵とやつた。

「ほんとうに、多喜子さんはいつ伺つてもお立派で、」倉子はさう云つて柘植夫人を顧ると共に、同時に河井の同意を求めた。「ねえ、あれ程お弾きになる方は、黒人の中にだつてさう澤山はございませんわ。」

河井は短い讃辭でそれを肯定した。而して夫人が殊更に富美子の技倆を賞め立てるのを聞いてしまつてから、彼は急に、二三脚向うの椅子に、菊の大きな鉢を傍にしてかけてゐた眞知子に向つて、彼女も何か弾いてくれるなら仕合せだと云つた。眞知子はそれを聞くと吃驚した。食堂に入る前、曾根の妹として形式的に紹介されたきりで、今まで一と言の話もしなかつた彼から不意にそんな所望を受けたのと、富美子や多喜子と共に人の前で弾くほど上手ではなかつたから。

「私駄目ですわ。」

眞知子は斷つた。

「あら、お弾きになる癖に、」富美子が向側の椅子から口を入れた。「そんな

めた。殊に倉子は主人役の禮儀として、當然彼女から云ひ出すべきであつた手落ちを償ふために、同時に河井が、本統に眞知子は上手でないのか、單なる謙遜か分らないので、自分の發言の結果に當惑してゐるのを救ふために、是非弾かせようとした。倉子は、丁度ピアノの近くにゐた竹尾を呼び立てゝ、樂譜台の樂譜を眞知子のところへ持つて行かした。

正直に云つて、眞知子は斯んな場合は素直に振舞ふ方が好きであつた。併し有る程度の樂譜は練習なしに弾けるやうな易しいものではなかつた。同時にそれが弾けない恥づかしさよりは、自分の拒絶を女らしいコケットリとして誤解されることの方が眞知子には何倍か厭であつたので、今一度きつぱり斷り、ピアノなんかいつ弾いたか憶えない位だと云つた。

「若いお嬢さんが、そんなことつてありませんわ。」倉子は明らかに不快の色を

誰でも耳にした如く、その若い紳士の肝を[illegible]つた

『ですから、今日もさう申したところなのですが、』倉子は殊あ反感のあつた夫人を主として相手にしながら、『何も社會學なんて、そんなものを勉強なさらなくたつてよささうなものぢやありませんかつて。だいち、誤解され易うございますからね、立派なお家のお嬢さんで、さう云ふ學問をなさつては。』

『左様でございますともね。』

『それ位なら何故フランス文學でもなさらないかと思ひますよ。當節は私どもの若い頃と違つてフランス語流行ですし、世間の聞こえもどんなにいゝか知れませんし、性質から申しても、お嬢さんには向いた學問でございますもの、ねえ。』

『全くフランス文學は思ひつきでございますね。フランス語をお稽古なさるだけでも調法でございますわ。』

『ほら、貞知子さん。柘植さんの奥様もあゝ仰しやるぢやありませんか。』倉子は非常に知識的な立派な話をしてゐると云ふ自信で、得意になつて、『でもどうしても哲學の方でなければお悪いんなら、美學なんかでもございませう。それなら間違のない學問でせうし、社會學なんてものよりは聞いただけでも優美でよろしうございますわ。ねえ、さうお思ひになりません。』

この際は[illegible]この様に、[illegible]貞知子は[illegible]て、[illegible]に[illegible]ら[illegible]に[illegible]した[illegible]、[illegible]か、[illegible]を對象とする意味からすれば、[illegible]答はないだらうと考へ、席では既に貞知子に[illegible]の人數や、學校の模様に就いて聞いた。貞知子は意識的に素つ氣ない返事をした。彼女は倉子のお談義にがつかりし、歸ることばかり考へてゐたから。で、三十分程してやつと迎ひの車が來るまで、向うの隅の卓で、主人が今度は婿の木村や、竹尾や、同じ病院關係の人々と、醫學上の術語を使つて何かしきりに話し込んでゐるのや、富美子が晝からの疲れで、何度も袖に隱しては欠伸するのや、並んだ多喜子が同じやうに眠い眼つきをしながら、河井に對してはどこまでも愛嬌よく話しかけたり、微笑したりしてゐるのを、ぼんやり空虚な氣持で眺めてゐた。

四

明けの日から數日の間は、貞知子は新にされた刺戟を以つて學校に出た。これは家の關係から何の役にも立たない社交じみた會合や訪問に引つ張り出された後、常に起る變化であつた。大學の講義も馴れて見れば想像したほどではなかつたし、三四のものを除けば、家で書物を讀んだ方が増しな位であつたが、あゝ云ふ場所に顔を出して、あゝ云

ふお饒舌に惱まされるに較べれば、どんな評判の惡い講義でも我慢が出來た。併し本統を云ふと、眞知子はこの頃は學校に來てもひとりぼつちで寂しかつた。同じ學校から來た聽講生で、もとの組は一年上であつたが、同じ社會學を聽いてゐるので親密になつた大庭米子が、暑中休暇で東北の田舍の家に歸つたきりまだ出て來なかつたからであつた。のみならず彼女はもう學校に來ないのではないかと疑はれてゐた。

『大庭さん、矢張りよすらしいのですつて。あなたのところに何か云つてよこしになつた。』

今日も控室で仲間の一人から質問された。眞知子は久しく手紙も貰はなかつた。ずつと前樣子を聞いてやつた時には、急に出られさうにないこと、それに就きいろ〳〵書きたいが、もう少し氣持が落ちついてからにすると云ふ返事があつたきりであつた。この友達を今まで故郷の兄の許に引き留めてゐるのは、傾きかけた地主の家の經濟的の事情だと云ふことを眞知子は知つてゐたから、噂のやうなことがあり得ないとも思はれなかつた。誰かに親しい遊り

なければならなかつた。而して少しは恨みも云つていゝ筈で

歸つて裏門のくゞりを入る時、眞知子は郵便箱を覗いて見た。空つぽであつた。家の中も女中がひとりしかゐなかつた。

『お母樣は。』

『田口樣へお出掛けになりました。三時頃までにはお歸りになるやうに仰しやつてゐらつしやいました。』

多分この間のお禮に行つたのだと思はれた。茶の間の時計は三時を三十分過ぎてゐた。併し學校に出る時だけ着ることにしてゐる質素な洋服を、不斷着の銘仙に換へたり、亂れた髮を直したりしてゐるうちに母も歸つて來た。

『丁度歸らうとしてゐたところへ柘植さんの奧さんが見えたものだから、』土產の菓子を茶道具と一緒に眞知子の部屋に運ばせて、母は話し込んだ。『そのうち是非あんたに遊びに來てくれるやうにつて仰しやつてゐたよ。』

うに、武田家と云ふ家柄を聞いても驚歎する夫人が、眞知子を近づけて自分の娘と親しくさせようとは信じられなかつた。

『さう云へば、あのお嬢さん中々人柄な美しい方ぢやないか。』

『御一緒よ。』

『富美子さんを待ち合せて、皆さんでどこへか出掛けるらしい様子だつた。』

それはこの節田口で橋渡しをしてゐる河井家との縁談に關した會合であらうと未亡人は云ひ、若し成功すれば一番滿足するのは柘植夫人であり、その氣持は最もよく自分に想像されると話し出したので眞知子は警戒した。あとに何が續くかは分かりきつてゐた。而かも持ち出されたものは、眞知子が期待した以上に進んでゐた。母は竹尾の名前を擧げ、彼との結婚を今日田口で勸められて來た話をした。

『この間の晩行つてたでせう。』

『ええ。』

『どんな風な人だい。』

『どんな風つて、忘れつちまつたわ、もう。』

これは七分嘘で、三分本統であつた。彼はそれ位特色がなかつた。若し隣りに坐つたり、樂譜を持つて來てくれたりしたことがないなら、(それも今から考へれば、含子の策略に相違なかつたのであるが、)眞知子はあの時紹介されたのさへ覺えてゐなかつたかも知れなかつた。尤をたしかに自分の友に紹介されてゐたことも、[illegible]彼が九州の或る炭坑會社の副社長になつてゐる關係から、式をさる二週間以内にしなければならないと聞かされた面白さに比べれば何んでもなかつた。その話は眞知子を吹き出させた。

『何が可笑しいのです。今少し眞面目に考へて臭れなけりや困るぢやありませんか。』

『だつて、眞面目に考へられやしないわ、そんな滑稽な話。』

『どうしてさ。竹尾さんなら面倒な係累もなければ、人物も極おとなしい方だし、それに學位も立派に取つてゐるのだから、どんなうちからでも貰ひかねないのだつて田口では云つてるんですよ。』

『でも、二週間で大急ぎだから私にして置かうつて云ふの。』

『呆れてしまふ、あんたつて人には。どうしたらさうなんです。』

眞知子がいつまでも本氣にならなかつたので、母は仕舞ひには怒つた。而して今度斷はれば田口は勿論、誰だつてもう彼女の結婚の世話はして臭れないだらうし、いつまでもオールド・ミスで、一生半ばもの扱ひにされるやうなことになるだらうと云つた。

『今度の話こそ誰が考へたつて申分はない譯なのに、一體なにが不足なんです、あんたには。』

『なにか不足だか、私にはそれさへ分らない位よ。たつた一遍逢つて、たつた一遍お辭儀しただけですもの。』

『そんなことならどうだつてなるぢやありませんか、あんたに嫁く氣さへあるんなら。木村さんと仲のいゝお友達だつて云ふから、富美子さんによく樣子を聞いてもいゝし、逢つて見ようと思へば、それだつて出來ないことぢやなし——あんたは二週間きやないつてことで馬鹿にしてるんだけれど、縁談つてものはさうしたもんぢやないのですからね。』

即ち二週間あれば、大抵の結婚に差し支へない譯だと云ひ、海外に赴任するばかりになつてゐた官吏と急に婚約の整つた或るお孃さんが、約束の日を五日後の日に更へて貰つただけで、立派に結婚をすまして夫と一緒に出立した例まで引いた。眞知子は笑はなかつた。

母の話題は正しかつた。若し女が運命の眞實な相手にめぐり逢つたならば、二週間は愚か、一瞬の發見でも十分足りたであらうから。併しこの際の不便は、眞知子が竹尾に對し一特別な感情を持つことが出來

母の腹立ちが、例に依つて北海道の嫂たちなり

愚痴や溜息に變るまで、眞知子は辛抱強く黙つてたゞ聞いてゐた。これは斯んな場合に彼女がこの頃とることにしてゐる唯一の防禦法であつた。と、其處へ廊下の唐紙が開いて、女中が風呂の湧いたことを知らせに來た序でに、一通の手紙を置いて行つた。

『あんた先にどう。』

『お母樣入つて。』

手紙は米子からであつた。切手が二枚張つてあつた。めつたにそんなことは米子にはなかつたから、心待の便りを手にした滿足よりは當り前の手紙ではないと思ふ不安の方が强かつた。で、母が口小言を云ひく出て行つたのをうはの空で聞きながら、封を切つた。彼女のノートのやうに正確な細字で充たされた洋罫紙が五六枚疊み込まれてあつた。何より氣になつてゐた退學のことは、一頁で分明になつた。

『——この決心をするまでには私も可なり迷つたのですが、矢張り思ひ切つてよすことに

――(子　知　貢)――

きり見ます。[illegible]

地主の家が、どうして[illegible]す。無理もないと思ひます。[illegible]詳しい話を聞くまでは、困るとは[illegible]の程度に困るかは十分に飲み込めなかつた[illegible]か、亡くなつた父の話をしたこと[illegible]動や、彼の義務だと信じて行つた地方的な公共事業を、[illegible]前の寛大と弱い意志を利用されたために[illegible]を今日の悲境に陥れた一半の原因[illegible]ふ言葉を使つて、何故すべてのと云はない[illegible]れは特別の負債や缺損がなくても、[illegible]とも貧乏の運命は、殆んど否定的なものに[illegible]等は田地や山林は持つてゐるかも知れないが、金は[illegible]ん。従つて小作米が唯一の収入で、それによつて[illegible]払ひ、用水や灌漑の諸設備をし、而して大規模の[illegible]のかさない一家の生活を支持すると共に、[illegible]を守つて行かねばならないのです。[illegible]田地や山林を所有[illegible]

[illegible]

れどころではない、私は地主が困つてゐる以上に彼等が困つてをり、地主が幾らあがいてもその窮迫から逃れることが出来ないと等しく、彼等は幾ら働いても目下の小作制度と社會狀態の下では裕福にたり得ないこと、同時に彼等の鍬や鋤の生産力は、他の電氣や蒸氣の機械力に依るそれとは比較にならないほどあはれなものだ、と云ふことを知つてゐます。突然妙なことを聞くやうですけれど、一人の百姓が一段の田地を耕作したとして、秋の收穫期にどれ程の米が取れるかお分かりになつて。平均三石とこの邊では見積られてゐます。云へ換へれば、一坪の土地から僅に一升の米しか生じない譯になるのです。あなたに限らず、都會に住んで、お米なんぞ用聞きの小僧に云ひつけさへすれば幾らでも手に入るやうに考へてゐる人達には、この事實は非常に驚くべきことのやうに見えるだらうと思はれます。而かも百姓は、その收穫の少くとも半分を小作料として地主に納めなければならないのです。前の例で云ふと、一坪の土地から辛うじて得た一升の中の五合を、完全に奪はれるのです。彼等は

りです。例へば草屋根の下に新たに[illegible]決してたとではないのですし、もう少したつて雪が來ると、以前にすぐ持ち出された手製の藁の草鞋も、今では都會から仕入れたゴムの長靴に殆んど變つてゐると云ふ有樣です。同時にこれ等の如何なる變化にも拘はらず、一坪の土地からは決して一升以上の米は取れないのだと云ふことを考へて見て頂戴。而してその米さへ、自分たちの作つたものは口にし得ないで、安い粗惡な外國米と買ひ換へて食べてゐるのだと云ふことも。――彼等が地主と爭うて、どうにして一合でも多く自分たちの取り前を増さうと骨折るのは、當然過ぎることです。

併し一方地主の困窮もはじめに述べた通りの状態です。私はこの邊にも既にぼつ〳〵始まつた小作爭議を見てゐると、何か首を締められた者が、苦しまぎれに仲間と首の締め合ひつこしてゐるやうな氣がします。此者は最初の下手人です。彼の敏活な黒い手こそ、地主と百姓と兩方の懷から掠め取り、あらゆる方法と機會に依つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

つの悩ましい方の[illegible]に依るのだと云ふことを、[illegible]
ければ[illegible]でもなく、[illegible]として[illegible]
ます。」

粘子の手紙は其處で一度切れ、別に違つた日附で書いた紙がいつしよに入つてゐた。比べて見ると、それは三日後に書き添へたものであつた。彼女は、讀み返して見ると餘計なことが多過ぎるのでやめにしようかと考へたが、書き直すとまたいつになるか知れないから兎に角この儘出すことにした。その代りこれで田舍の樣子も自分の氣持も、多分分つて呉れることゝ思ふとあり、最後に斯う附け加へてあつた。

「學校をやめるにしたところで、この儘兄の厄介になつてゐる譯には行かないので、矢張り東京で何か仕事を見つけたいと思つてゐます。そのことに關しては、亡くなつた次兄の高等學校時代からの親友で、私の勉強方面のことに就いても、これまで度々相談をかけてゐた人に頼んでやつてありますから、そのうちどうにかなることゝ信じてゐます。どんな詰らない仕事でも、どんな乏しい報酬でも、不平は云はない積りです。兄の世話にならないで、云ひ換へれば、あの百姓たちのものを掠め取らないで生活することが出來さへすれば、今の私にはそれが何よりの滿足なのですから。この希望と決心のために近頃は割に元氣に暮らしてゐます。では、遠からずお目にかゝれるやうに[illegible]」

この手紙の[illegible]があまりに[illegible]かつたから、[illegible]に[illegible]茶の間の食卓へ坐つた時、母がいつもに似ず[illegible]込んでゐるのが、何の爲か初めは氣がつかなかつた。で、箸を動かしながら、私達の中の自分を驚かしたことに就いて母にも聞いて見ようとした。

「ねえ、お母樣、この[illegible]二枚が[illegible]りに田だつたとして、其處からお米がどの位取れるか知つてゐらつしやる。」

「何んのこと、藪から棒に。」

母は呆れ、そのため一層不機嫌になつた顔で娘を見た。瞬間眞知子は竹尾のことを思ひ出したので、それつきり言葉を繼がなかつた。併しその手紙で最も強く彼女を打つたことは、今話さうとしてゐた話より、米子が職を求めて自活しようとしてゐる點であつた。若い進歩した娘たちには既に常識となつてゐる考へ方に依つて、眞知子は婦人の經濟的獨立の價値を十分知つてゐた。殊に今日は場合が場合であつただけ、友達の前に開けた新しい生活が羨やましかつたのであつた。で、その晩すぐペンを執つた返事にもその希望を一番に書いた。而して別に具體的には打ち明けなかつたけれども、竹尾との馬鹿〳〵しい緣談をほのめかし、さう云ふ問題と共に常に絡んでゐる自分の周りの中流的な、もの分り[illegible]に就いて不平を述べた。

五

『何んの用事。』

『それが分らないで入らしたの。』

『お姉さんの葉書には、學校の歸りに寄つて見れつてあつただけでせう。』

『成る程ね。それで何の話か見當もつかなかつたつて云ふ積り。』

『そんな譯ぢやないけれど。』

『なら分つてるんぢやありませんか。』

『いゝえ、分らないわ、――何んだつてお姉さんまであんな話に口を入れる氣になるのだか。』

眞知子は云つた通り昨日辰子に葉書を貰つたので、學校から芝の家へ廻つて來たのであつた。上方風の洒落れた好みで、居間と云ふより會席料理屋の一室でもあるやうな姉の部屋で二人は話した。

『だや、どうしても、まあちやんには嫁く氣はないのね。』

…ぢやありませんか。兎に角、…いとは云はないかも知れないわ。』

姉の美しい顔には、ふだん冗談口を利いてゐる時とはまるで違つた表情が、斯んな場合には表はれた。

『お母様もさう云つてゐらつしやる通り、竹尾さんの條件なんかこの節ではまあ申分のない方ですからね。たゞあんたが、一遍逢つたきりで何んとも思はない人だなんて云ひ出すから、ことがむづかしくなるのよ。もつと斯う不純に考へて見たらどう、結婚つてものを。』

『どう不純に考へろつて云ふの、ひとの結婚でもないのに。』

『自分のたつていゝのよ。たゞ本統の結婚は、小説だのお芝居だのとは違ふつてことさへ分ればいゝのだから。よく見て御覽なさい、どこの御夫婦もはじめ皆んな好きになつて、あの人でなければならないつて結婚したのだかどうだか。よしんばさうやつて一緒になつた人たちだつて、半年もたてば喧嘩するんぢやありませんか。』

『したつていゝのぢやない。そんな喧嘩ならはじめから嫌ひな人と

眞知子がすぐ返事をしなかつたので、辰子は續けた。

『大して氣に入らない着物だつて、季節になつて幾らかなけりや、着て見たつていゝぢやありませんか。』

『だけど、身につかなかつたらどうするの。あとで脫ぐ位ならはじめから着ない方が利巧だわ。』

一生脫ぐことも出來なければ、安心して着てゐることも出來ない人が幾らあるか知れない、と云ひかけて眞知子は口をつぐんだ。放埒な姉に對して、云ひ過ぎたのを後悔した。併し辰子には妹の無意識な突撃を微笑で受けるだけの餘裕があつた。

『あてつけ。』

『そんな積りぢやなかつたのよ。』

『どちらだつていゝわ。でもね、私が厭で仕方がないのに着てる着物を脫げないんだとは考へないで頂戴。だいち私は、上の姉が幾ら放蕩したからつて私を嫌つてしてるとは思はないんだから。あの人は生れつきの浮氣者よ。遊ぶのが好きなんだわ。たゞそれだけよ。』

辰子はたしかに愛情を以つてこの批評をし、同時に、着物に對して贅澤な選擇をするのは金持の特權であると同じ意味に於て、結婚も離婚も財産があり、歸つても親兄弟の厄介にならずにすむ人でない限り、[illegible]

「こんな[illegible]の女なんてめつたにありはしない[illegible]程ですもの。[illegible]たら[illegible]する[illegible]しいのだし、また着た以上は脫ぐのは損よ。』

『それがお姉さんの哲學。』

『ぢや、まあちやんなら。』

『私なら、裸のまゝ働くわ。』

ふんと云つたやうな冷笑が、辰子の高い形のよい鼻を掠めた。

『流行り言葉ね、それが、この節の若い人たちの。でもね、今の世間で女が働いて食べるつてことは、口で云ふほど景氣のいゝものぢやないわ、屹度。』

これまで家の中で流してゐた涙を、家の外に流しに行く、たゞそれだけの相違に過ぎないと辰子は云つた。眞知子は言葉に出しては反對しなかつた。姉の說くことが半分の眞理でないとは云へなかつた。併し働くことが選擇でなく必要となつた婦人に取つては、それは無意味であつた。三日前に貰つた米子の手紙は尙ほ強く頭にあつた。若し自分にも何かの職業と收入があつたならば、今度のやうな場合でももつと自然な權威のある拒絕が出來たであらう。眞知子はそれをしみ〴〵考へた。

晩御飯まで遊んで行かないか、主人の清三も久しぶりで家で食べる筈だから何か御馳走をしよう、と云つて留められたけれども、眞知子は學校のことがあるからと云ひ、二時を聞くと姉の家を出た。本統は、幾日も家を開けて歸つた夫と妻の間に坐らされることが、若し二人とも平氣にしてゐるならゐるで、どんなに堪へ難いかを思つたからであつた。

三十分乘つた電車を原町で降りた時、眞知子は前の花屋で母に頼まれた活花用の蔓物を買つた序でに、自分の部屋の小さい花瓶のために黄色い薔薇の花を少し添へさせた。花屋は花弁の散らかつた土間の臺の上に紙をひろげて花を包んだ。そこへ次の電車が留まり、どやどやと降りて來た客に交つて、焦茶の洋服を着た華奢な河井がゐるのを認めたのは、眞知子が出來上つたラッパ形の花包みを受け取つて花屋の硝子戸を出た時であつた。河井も同時に氣がついて帽子に手をかけた。彼は考古學で有名な教授の家をこれから訪問するところだと云つた。その老博士は眞知子の家からあまり遠くないところに住んでゐた

『併し伺つて見れば知つてゐるから出し…

…ま子供の頃はこの丘…

を改めて讃めた。殊に多喜子は、彼の…の稽古をはじめたが、非常にたちがよいと噂したので、眞知子には坊ちやんらしい正直さが少しおかしかつた。他の者なら、當然自分の妻となるのだと見なされてゐる相手を、人の前で決してさう云ふ風に噂することは出來ないであらう。

併し以上の話がすむともう話すことはなかつた。河井は北海道の兄に就いてこの前も聞いたやうなことを今一遍聞いた。眞知子は彼の研究室のことでも訊ねようと思つたが、それもこの間の晩の話題の一部を繰り返すに過ぎなかつた。と云つてほかに人通りもない位靜かな屋敷町を、殊に大して懇意でもない人と馬鹿のやうに默り込んで歩くのは厭ではあつたから、眞知子は絶えた話を繋ぐだけの意味で、彼が教授を訪ねるのは今日が初めてかどうか聞いて見た。河井は二度目だと云ひ、彼女の家がそんなに傍にあつたとは思ひも寄らなかつたと附け加へた。

『貴方[illegible]』
『さう、貴方です。[illegible]』
『私も試之。』

その古い小學校に對する共通の思ひ出が、その後の會話に一種子供らしい寛ぎを與へた。彼等は校庭の古い藤棚や、その下の砂場や、三本の櫻の木や、また一人の特色のある年取つた小使に就いて話すことが出來た。

林町の角で別れようとして、河井はそれから眞知子の家はどう行くかを尋ね、教授との用談には手間は取らないので、序で非常に失禮であるけれども、歸りに寄ることを許して貰へるなら未亡人に逢つて挨拶をして行きたいと云つた。眞知子は母も悦んでお目にかゝるだらうと答へた。で、二人は左右に別れた。

娘の知らせに依つて未亡人が茶菓子の用意をしたり、座敷の床のすがれた花を買つて來たのに活け換へたりして待つてゐたところへ、河井は約束の如く訪ねて來た。而して親子を相手に十分ほど簡單な、併し鄭重な物腰で話し、若し折があつて自分の方にも訪ねてくれるなら仕合せだ、と云ふ意味を述べて歸つた。

『中々立派な方ぢやないか、鷹揚で、品があつて。』後で未亡人は頻りにその噂をした。『それに倫敦で兄さんと懇意にしたと云つて、わざわざ[illegible]寄つて[illegible]こと、今[illegible]若い[illegible]感心だ[illegible]とこ[illegible]すこと。』

「あれが英國式なのよ、多分。」眞知子はさう信じた。『十分位で實にきちんと歸るところなんか、如何にも訪問のための訪問つて風だわ。』

『英國式にしろ何にしろ、あの人なら、自慢になるから。』

多喜子さんは仕合せな娘だと羨やましかつた末、未亡人は急に話を竹尾のことに轉じて、財産の點だけは仕方がないとして、それを除けば竹尾だつて大してひけは取らない筈だと云ひ、同じ位な年頃か、脊はどちらが高いか、また似たやうな風采かどうかと云ふやうなことを細に質問しだした。眞知子は相手にならない積りでゐた。が、その間に彼女の半面のふざけ好きな氣持がふと頭をもたげたので、竹尾は彼より若く見えるし、脊も高いし、風采だつてもつと綺麗な位だと云つた。

『この間はそんなことはちつとも云はなかつた癖に。』母は滿足らしく、同時に眞知子の變に笑つてゐる顏を疑り深く眺めながら、『それでどこが一體不足なんです、あんたには。』

『ぢや、立派過ぎるのよ、私には。』

『何んですつて。』

『多喜子さん見たいな、華族のお孃さんでも貰つてあげた方がいゝのだわ。』

『眞知子。』

母が厳しい聲を出したので、眞知子は急いで眞面目になつて言譯した。

『この話はもうこれつきりにしませうね、お母樣。お姉さんにも今日さう云つて來たのだから。』

六

半月ばかり經つと、眞知子は米子が既に上京して、或る協會で三河島に設けてあるセツルメントで働いてゐると云ふ知らせを受け取つた。宿は田端で、地圖が書いてあり、よかつたら今度の日曜日にでも訪ねて欲しいとあつた。

その日は雨のあとの美しい小春日和であつた。眞知子は早い晝飯をすましてから家を出た。地圖に指定してあつた停留場で電車を降り、場末らしい小店の並んだ通りに入つて七八町も行くと、道は稍急な樹木の多い坂の方向へ自然に曲がつてゐた。眞知子は坂の上にある、

見た。と、低いかなめ垣を境に植木屋の古びた

物や苗木の畑に圍まれて立つてゐる向うに、磨り硝子の窓を思ひ

廣く取つた、一見して畫家か彫刻家の仕事場らしい建物の側面が目に入つた。一部の開いた窓に乾してある焦茶色の雨コートは、見覺えのあるものであつた。

米子は飛んで出て、友達を迎へた。

『斯んな家つて思はなかつた。』

『だつて、何んとも書いてないから。』

『驚かしてあげようと思つて書かなかつたの。』

『いつでもさうなんだわ、あなたは。』

東北人らしい口重さと沈着と一緒になつた米子には、ふだんでもよくそんなことがあつたので、眞知子はわざとその不平を誇張し、序でに三河島のセツルメントの保姆さんの住ひとしては過ぎたものだと惡口を云つた。階下は畫室の外に疊を敷いた四疊半と台所のついたその小さ

聞いて[illegible]、あまり[illegible]て[illegible]彼女は[illegible]此処にたつたのだ、と知らされた時には、彼女らしくにこに[illegible]合を膝にしながらも、この邊には多分澤山ゐる筈の同じ畫家仲間が、どうしてこの家を見落してゐたらうと云ふ位だした。眞知子はこれを話した。

『場所だつて、靜かで、氣持がいゝし――』

米子は意味のある笑ひ方で遮つた。

『さう見えるでせう。でも本統は見たほど氣持のいゝ家ぢやないのよ。だから居着かないの、誰が越して來たつて。』

『どうしてなの。』

『今に分かるわ。』

『またあなたの秘密主義ね、それが。』

『秘密のうちが面白いのよ、何んでも。』

『お化け。』

『えゝ、お化け。』

二人は笑つた。眞知子はお化けぐらゐ出たつて構はないから、出來れば自分も越して來たいと云つた。

『あなたの手紙見た時は羨ましかつたわ。』

『あんな貧乏話が羨やまれるの。』

『[illegible]』と[illegible]、

『似合しい生活ね――』

『さう見えて。』

眞知子はいつかそれを思ひくらべてゐた。本統は彼女と同樣に無一物である筈の自分が、家の名や、親達や、兄の地位に依つて、富裕な何不足ない階級の中に數へ込まれてゐることが。――若しその迷惑な擬裝物を拂ひ除け、この崖の上の靜かな小家で、彼女とふたり質素な虚飾のない生活を營むことが出來たならば、彼女を惱ましてゐる結婚問題や、その他の面倒な家庭的の束縛から容易に遁れられさうな氣がした。

『ねえ、』眞知子はその空想を相手に打ち明けることに依つて、一層たのしい興味を感じながら、『あなたを世話して下すつた方が、私にも何か見つけて下さらないかしら。』

『私のしてるやうな仕事があなたに出來て。』

『信じないのね。』

『少くとも關さんは信じないでせう。』

『關さんつて仰しやるの。』

『えゝ。』

『何故信じないだらうつて云ふの。』

『何故つて、あの人はプロレタリアトの[illegible]は[illegible]の問題だと云ひ、[illegible]

を持つてゐるのだから、私なんかでも、どんな考へ方をしたつて關さんから見れば附け燒刄なのだわ。』

『ぢや御自分では勿論純粹なプロレタリアト。』

『私の隣り村の鍛冶屋の息子よ。』

『でも大學は出たのでせう。亡くなつたお兄樣と御一緒だつたんなら。』

『卒業するばかりになつて止めさせられたの。ほら、あの××事件のお伽噺だわ。』

眞知子は異常なことを耳にした場合の驚きで眼を丸くした。三年前、關西の大學に起つて、多くの學生の放校や若い教授の免官に終つたその左傾的な騷動を、眞知子は忘れてはゐなかつた。殊にそれは純粹な學術運動と云ふより、社會科學の研究を標榜したもので、官憲の壓迫に依つて却つて英雄的にされた彼等の言動は、同じ學問に志す若い者の同情と興味を煽つたので、當時の新聞紙に報導された公判やその他の記事に對しても、眞知子は最も熱心な讀者であつたと云つてよかつた。

な強い好奇心から、眞知子は彼に關し[illegible]

した。併しその時窓の外に不意に一つの奇妙な叫び聲が起つた。人間の聲と云ふより、それは野獸の咆哮に近かつた。而して一層激しい怒と絶望の訴に充ちて續いた。

『……』

眞知子は無言のまゝ質問の對象を變へて米子を見詰めた。

『下が腦病院になつてるのよ。』

それで何もかも分つたでせうと云ふ風に、米子は眞知子の呆れてゐる顏を半分面白がつて眺めながら、關が暫く此處で暮してゐた時分にはあつと凄い狂躁性の者がゐたのださうだと云ふ話をした。

『その氣狂ひのいちんち怒鳴つたり騷いだりするのが、丁度事件のあとの苛々した頭に變に痛快で、鎭靜劑の加減かなんかでおとなしくしてゐられると、却つて空虛なもの足りない氣持がしたのですつて。』

『そんな風な感じ方をする人、ほかの事に對しても。』

『幾らかさうよ、[illegible]

つた。何かに云つて、隣[illegible]

気配があつたので、隣の人達が立つて來るにつれて[illegible]になつたのであつた。併しどう気をつけて見ても、その隣に[illegible]の表情が潜んでゐるとは考へられない位、米子が隣に就いて語る態度は明るく落ち着いてゐた。ここに依ると夕方訪ねて來るかも知れないから、逢つて見たら、と云ふやうな話をした。

『逢つてもいゝけれど。』

眞知子は生返事をし、世間で云ふ意味で美しいとは云へないかも知れないが、鋭い瞳の人らしく滑らかな白い皮膚と、蒼色がかつた表情的な眼をした、而して細しやくれた米子の小さい顔を眺めながら、ひそかに心の中で思つた。矢張し何んでもないんだわ。でなけりや逢つて見たらなんて云ふ筈はないから。――

『それとも夕方まではゐらつしやれないの。』

『――』

『いやなひと、何をぼんやり考へてゐるの。』

米子がおかしがつて笑ひ出したので、眞知子もてれ隠しに一緒に笑ひながら、思ひ切つて云ひたかつた。隣さんとあなたのことを疑つて見たのだと。――併し幾ら仲のよい間柄でもすつかりはなくならない女らしい慎しみが、それを口留めした。

[illegible]

は案ならばまた來るかもしれないと云つて[illegible]

眞知子の名前を云つて上ることを[illegible]米子に

小さな開いた部屋のドアを隔てゝこれ等の言葉を洩れ聞きながら、眞知子は一種矛盾した心理から平靜を失つてゐた。今日あれだけ話題になつた彼を見たくないことは勿論なかつた。それでゐて上らずに帰つて呉れゝばよいと念ずる気持が一方にあつた。彼女は耳をすました。矢張り上つて行くことになつたらしく、暗い入口の板の間で外套でも脱ぐやうなけはひがしてゐる間に、米子が先触れに戻つて來た。部屋には椅子が二つしかなかつた。

『ストックから持つて來るわ。』

米子はそんな冗談を云ひ、窓の横から直ぐ廊下に出られるやうになつた狭いドアをあけて、細長の餘計な家具が詰め込まれてある物置にそれを取りに行つた。眞知子も何んとなく立ち上り、あとを追うて行かうとした。併し米子と入れ違へに直ぐ隣が入つて來た。而して彼自身も眞知子だけを其處に見出したことは意外らしかつたが、それでもたゞ冷然とした一瞥と共に輕く頭を下げただけで立つてゐた。眞知子も一緒にお辞儀した。彼が何んとも云はなかつたから、自分でも離れた

椅子の傍に同じやうに立ち、同じやうに默つてゐた。奇妙な初對面であつた。而かも眞知子のはじめの不安定な氣持は、その瞬間ひそかな驚きに變つてゐた。關の外貌は彼女が米子から得た知識に依つてぼんやり想像してゐたものとは可なり違つてゐた。少くとも紺の脊廣のぴつたり身についた、中肉の恰好のいゝ身體つきや、額と眼に特長のある蒼白の印象的な容貌には、東北の寒村の鍛冶屋の息子らしいところや、事件の後東京に來てからは、月島邊の勞働者の間で暮らしてゐるのだと云ふ人らしいところは見えなかつた。文學をやつても屹度出來たのだわ。この人なら。——眞知子は考へた。でも何んて威張つてるんだらう。ひとがゐるのに鼠一匹ゐるやうな顏もしないのだもの。——少し口惜しかつたので、眞知子は自分でも負けないで濟ましてゐようと思つた。一脚の小さい籐椅子を抱へて米子が引つ返して來るまで、それに成功した。

併し、關の眞知子に對する卒つ氣なさは、三人にたつた後でも大して變りはなかつた。多分誰にでも斯んな風なのだ、眞知子はさう思はうとした。また當然さう思つてゐゝ位彼は寡默で、餘計なことは何んにも云はなかつたが、それでも米子に對しては不自然でない親しみの口調で、家はどうにか整頓したか、別に不自由なものはないかと云ふやうなことを尋ねた。話の模樣では、米子が其處に落ちついてからやつと二度目の訪問のやうであつた。

『下の形勢はどうです。』

彼は話の續にそれを聞いた。

『病院。』

『相變らずやつてますか。』

『日によつて違ひますわ。今日はちよつと騷いで眞知子さんを喫驚させたとこなの。ね。』

眞知子は出し拔けにあんな聲を聞かされて驚かなければ、驚かない方が嘘だと云つた。

『ぢや本統にお化けならよかつたの。』

『えゝ。』

『負け惜み。』

二人は晝笑つた話を思ひ出して今一度親密にほゝ笑み、序でに米子はその意味を關に說明した。

『あなたさへ何か仕事を見つけて下さるなら、お化け位平氣だから越して來ようつてことになつてたの。それとも氣狂ひなら見合せ、眞知子さん。』

眞知子は脣の笑を捨てないで、同じやうに笑つてゐる米子を眺めた。彼女が眞面目に話してゐるのでないことは明白であつた。實際ま

大學ひとりのことを考へて見ただけでも、こんな[illegible]に[illegible]されるはずのないのは眞知子自身にも分かつてゐた。たとへただ[illegible]一講[illegible]がどんな教事をするかは興味があつたので、彼女は[illegible]に投げた[illegible]をそれとなく關の方へ轉じた。併し關はそんな話は問題にもしないで、まるで無關係なことを眞知子に問ひかけた。

『一週何時間くらゐ聽きます。』

『二十二時間。』

『毎日ですね。』

『えゝ。』

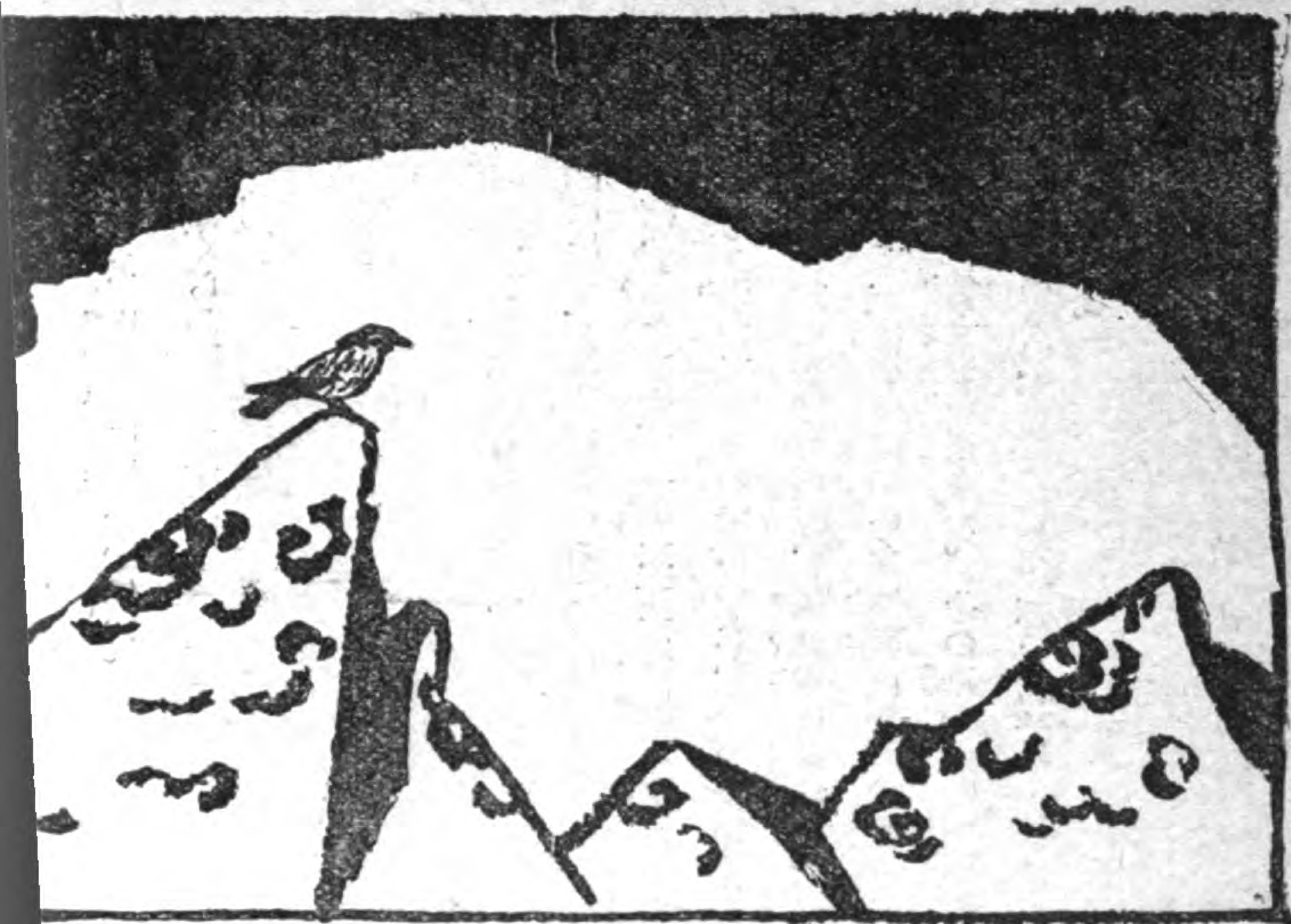
『どんな面白い講義があるんです。』

この質問にはすぐ素直に答へることは出來なかつた。どんな面白い講義があれば、飽きもせず一週二十二時間も聽けるのか。——[illegible]の[illegible]子は明かにさう云つてゐるのであつたから。でたくも[illegible]からの積極的な氣持が消えてなかつたので、眞知子は[illegible]いた。

『あなただつて、大學で面白いお講義ばかりお聽きになつてゐ[illegible]』

關はじろりと彼女を見据えた。その冷やかな白い[illegible]には、微かな、微笑に似たものが現はれた。[illegible]それ[illegible]つた。而して五分ほどとして靜かに立ち上ると、[illegible]てゐた[illegible]の日取りに就いて[illegible]時よりは一層冷淡に見ゆる一[illegible]に依つて、[illegible]

[illegible]



面白くなる

片岡鐵兵

夕方、工場の門を職工たちが出てゆく。青服の流れの中に、湯沸し器の番人、村上文吉もまじつてゐた。

大きな頭、胴が長い、短い脚、人並みに青服を着てゐるのだが、家鴨のやうな格好だ。まだ二十四五の若さだが、時折り老人のやうな表情をする他は、いつも善良さうに、ニヤリ〳〵してゐる。

數人の職工が、文吉を取卷いて、惡意のない、ふざけ方でからかひながら行く。往來が、事務所の一つの窓の下になると、彼らは、いきなり文吉を寄つてたかつて、高々と抱き上げた。

その窓と云ふのが、重役や高級社員の娯樂室の窓で

りかへつて此の光景に拍手を送るといふ騒ぎだつた。それ程、この點景は夕方の勞働者の溢れた街路に明さを添へた。

窓から首をのぞけた支配人が、

「こら、馬鹿なことをするな！」と職工たちを叱りつけたので、一段落ついたが、一體、今頃、支配人などに叱り付けられて、おとなしく職工が引込むといふ奇怪極るこの會社は、抑々何であらう？

有名なボオル紙の工場で　この地方の財界で幅を利かせてゐるばかりでなく、「勞資協調」の實をあげてゐるといふので、いつも讃められてゐる模範工場でもある。

村上文吉はそこの湯沸し番であつた。いつも工場の片隅の、大きな湯沸し器の前に立つて、ニコ〳〵しながら、家鴨のやうな身體をヨチヨチ動かせてゐる。毎日、湯を飲みに來たり、土瓶に湯を貰ひに來る職工たちの、好いからかはれ者であつた。みんなは村上文吉を愛してゐた。彼といふ存在は、全工場に微笑を供給してゐる。それを供給して貰ひたいから、からかふのだ。神よ許せ、である。

湯沸し器に二つの把手がある。一つをまはせば、蛇口から湯が出て來る。他の一つをまはせば、冷水が出て來る。その二つの把手の使ひ分けに就て、彼は熟練してゐた。

他に、何に熟練しよう！　この會社ならこそ使つて呉れてゐるのだ。その點、文吉と、その父とは、會社に對して同様の恩義を感じなければならなかつた。

會社に對して、といふよりは、社長に對してゞある。社長と、文吉の父とは幼な友達であつた。その關係で、社長は何の取柄もない彼ら親子を使つて與れてゐる——と彼ら自身、考へてゐた。

「俺は、先づ第一には國家のために生命を投げ出さう。その次ぎには會社のため」

父親のそれが口癖であつたのだ。

藁の堆積が揺れてゐる。

荷車を曳く男の額には汗が流れてゐる。車に積んだうづ高い藁は、彼の背後からおほひかぶさる程——それが揺れてゐるのだ。

この地方は平原で、有名な米の産地だ。田舎路を、毎日、いく臺となく、藁を積んだ荷車が、街へ、街へと行く。藁が賣れるのは好い。

ボオル紙工場は只のやうな値で、原料を買ふのである。

會社の門に並んで、大きな藁の倉庫が往來に沿つて幾棟かある。一と

つの倉庫の入口に、計量所があつて、半白の老人が、その計量係りである。

毎日、藁を積んだ荷車が、何臺も何臺も、工場に到着する。荷車を、倉庫の前に停めると、車力の男は、藁を地におろし、更らに計量係りに、目方を量つて貰ふ。

何貫目、運んで來たか？

「あついな。こんな汗だ」

「せいぜい、目方を甘くして上げようぜ」

荷車の、車臺の腹に、辨當包みがぶらさがつてゐる。車力の男が、それを取るためにしやがんでゐる。老人は、計量器の目盛りの上に分銅を走らせながら、スガ目で車臺の腹をぬすみ見る。しやがんだ車力男と視線が合ふ。笑ふ。

「御馳走だな」

然し、永年の熟練だ。百姓の藁の目方を盗むことは「××のため、會社のため」のモットオと矛盾しはしない。これが、文吉の父親であつた。社長は、何の

この會社が模範工場の誇を失はぬ第一の原因は、勞資協議會が持たれてあるためであつた。

訓練されぬ勞働者だから、資本家共に自由にあやつられてゐる。年數回、定時に持たれるその協議會なる物のだらしなさは――それは殆ど出鱈目と云つても好かつた。

職工の中から、毎年廿名の代議員が互選されるのであつた。その代議員と、社長以下の重役や高級社員が、社の會議室に集つて、取り止めもなく、衛生設備や、職工慰安會の件などを議するだけで――それでも、この協議會あるが故に、年々工場内の設備は改良されるし、資本家側と勞働者との意志は通じ合ふし……と云ふ工合に宣傳されてゐた。

だから不平はない――もし職工たちが、ほんたうにそれを信じてゐたのだつたら、

夏の協議會が近づいた。代議員に一人缺員が出來てゐる。先月、ロオラア室で働いてゐた職工が一人死んだが、それが代議員だつたのだ。

缺員選擧――工場內では然し、そんなことを問題にする者はなかつた。

「誰がなつたつて同じことだ」

みんなの頭がさうだつた。會社は、協議會で巧くごまかし得てゐると思つてゐるが、そんな物を信賴する大衆は一人もゐない！　協議會のおかげで、多少、便所がきれいになつたり、どぶさらへが行はれたつて、生活は少しも樂になるのではないのだから。

「今度は一つ、村上文吉君を代議員に、出さうではないか」

誰か云ふとなく、そんな事を云ひ出した。

「それが好い、それが好い、平常大きな顏してやがつて、こんな時ばかり、ペコ〱運動してまはる役員職工なんかに、投票するな」

「どうせ、つまらん協議會なら、つまらんついでに、文吉君を出してやれ」

職工個人から個人へ、職場から職場へ――この面白い計畫に就いて

[illegible]

をかけて買はうと思つて、自分に職工たち[illegible]を選擧[illegible]する者には、すこしも人氣があつまつて來なかつた。

投票の結果は、村上文吉の當選となつた。全工場が、ドツと歡聲をあげた。うすのろの村上文吉を協議會に送る――職工たちのこの諧謔は見事功を奏した。彼らは、諧謔を以つて、協議會に對する反感と不信念の情を表現したのであつた。

「俺は、どうしたら好えのだ」

人々の歡聲のまん中に棒立ちになつて、文吉は、只、キヨト〱してゐた。

「心配することはない。俺たちが背ろにくつ付いてゐるんだ」

誰かが勵ますやうに云ふと、みんながドツと聲をあげて笑つた。

この町にも勞働者の政黨の支部がこの頃出來た。朝はやく、通勤の途上工場の門口の附近で、職工たちはよく、ビラを貰つた。

「君たちの工場の勞働條件はどうか。不平を掲げて、俺たちの所へ相談に來て呉れ」

「働く時間を八時間にしろ、賃銀二割値上げしろ、この要求を資本家

共の面に叩き付けろ！」

未組織勞働者たちは、心の中ふかくに永いこと眠つてゐたものを、次第に呼び醒されるやうな、何か懷しい、快い聲に接するやうな氣持ちにさせられるうちに、自分たちの要求すべきものをハッキリ知るやうになつてゐた。けれども、誰も、起き上つて團結のために手を差し伸べようとする者はなかつた。我々は要求すべきものを持つてゐる。だが、そのために苦しい思ひをしたり、忙しく立廻つたりして、鬪爭するのは、いつの事であらうか、遠い未來の夢ではないか、いつまでたつても、「今日から！」といふ氣持ちにはなれない、起き上る日は永遠の明日だ——そんな漠然とした實感から掛け放れた希望だけが、彼等の內に、ほの明く灯つてゐた。

模範工場の資本家共は、笑つてゐる。勞資協議會などを持つて、うまく勞働者をごまかして居れば、何の不安もな[illegible]

大きな力を。全世界の勞働者を、怒りの中につないで行くその力は、どんなに隅つこにかくれてゐる工場をも見逃しはしない。その工場が、地球の上に建つてゐる限りは。

こゝの工場も、矢張り地球の上に建つてゐるのだ。職工たちは成程まだ組織されてゐない。鬪爭を夢のやうに考へてゐる。けれども、あの力は——資本家共の眼からは神秘的にさへ感じられるあの力は、いつか工場內部に侵入して來てゐるのだ。實を云ふと、それは神秘的でも何でもない。大衆が大衆に結び付くのは自然である。この自然を助勢せしめるやうに、働き掛けて來る黨の手——巨大なその手が伸びて來るまでゝある。——だが、これも怪談的な魔手ではない。拷問されれば、額も腫れ上るし、髮の毛も脫け上る人間の活動に違ひないのだ。「拷問する奴の方が餘つ程妖怪だ。」それが、こゝの工場にも、不斷に働き掛けて來てゐるのを、資本家共も、そろ〳〵恐怖し始めてゐるのではあつた。

[illegible]

それだから幹部の代表者に選ばれた文吉の唇から、[illegible]せ掛けられる語を聞いたなら、森本宗兵衛は飛びかかるひするに違ひないのだ。

「文さん、今度は頼むぜ。折角、俺たちがお前を代表者に選挙したんだからなア」

職工場に來ては、職工たちは、冗談めかして云ふ、

「せめてお前でも確りやつて呉れんと、誰も他には頼み甲斐のある奴はないんだから、よ、文さん」

「俺はんから、社長に云つておやり、八時間勞働、賃銀二割增し、積立金即時拂戻し、それを聞かなきや、みんなでストライキをやる、と脅してやると好いや」

誰彼の口からとなく、文吉は毎日、みんなからそんな言葉をきいた。

賃銀を二割増すこと、働く時間を八時間に減らすこと、積立金を拂ひ戻して貰ふこと、それだけの事が、他の何事よりも、全職工の常識的な要求であること、そして、みんなはストライキをしたがつてゐる！ といふ事が、おぼろながら文吉の頭に叩き込まれて來た。

「何をおいても、それだけを云はんと、みんなは困るぜ、文さん。そ[illegible]」

[illegible]と文吉は訊いた。

「[illegible]のには、みんな[illegible]もなしだもの、云ふもんか。今までの代表者[illegible]はんから、[illegible]に、お前を選んだのさ、[illegible]」

「たつた一人の[illegible]のお前に、何百人の俺たちは手頼つてゐるのだ。」

職工たちは、職工場に集つてニヤリ／＼しながら、冗談を吐くうちに、無意識に、その本能的な要求を、打ちまけたのであつた。然し、「何百人が手頼つてゐる」といふ言葉は、文吉の心を激しく刺戟した。何百人のために！ すると、文吉は、急に心の中に、何百人の身體の重みを感じた。容易ならぬ立場に、みんなから追ひやられたやうな氣がして、泣き出したくさへなつた。

「どうしたら好いのか、俺には分らん」

困つたやうな顔で、文吉は云つた。

「何でもない事さ。賃銀を二割増して下さい、働く時間を八時間にして下さい、積立金を返して下さい。さうでないと、みんなはストライキすると云つてゐます」

「賃銀を……二割、増して、八時間にして、積立金を拂つて下さい」

と文吉。

「さうだ、さうだ。それから、さうでないと、みんなは……その次

ぎ、云つてごらん」

「ストライキしよります」と文吉は一生懸命であつた。

ストライキはわるい事のやうな氣がした。けれども、みんながさう云ふのだから——文吉は何となく、子供が、不良少年に加擔する時のやうな不安をおぼえた。

一(面白くなる)一

「文吉、お前、協議會に出たら、何を云ふつもりだ？」

協議會の前夜、會社から歸ると、父親は心配でたまらぬ顏で訊いた。

「何云ふて好いか、俺には分らん」

「よろしい。そんなら默つとる事だ。みんなの背ろに腰掛けて、なるべく、うつむいて居るんだぞ。好いか、要求なんぞ、これつぱかしも口に出すんぢやないぞ」

「だけど、云はなくちやならん事があるかも知れん」

度すべからざるものを相手にしてゐる事に氣がついたかのやうに、父親は絶望的に呟いた。

「お前が不埒なことを云つたら、俺は會社の人たちに顏むけがならないんだ。俺たちが食つて行けるのも、社長さんのおかげだぞ。他所へ行つては、乞食をするほかはないんだぞ。その恩を忘れたら、どうなると思ふ？」

いつの間にか、母親もそばに坐つてゐた。父親の云ふことを聽いてゐると、我が家のうへに、今、大きな災難がおち掛つて來てゐるかのやうに感じられた。災難になるもならぬも、息子の心の持ちやう一つにある。ところがその息子が馬鹿と來てゐる！　だから、心配なのだ。

「職工の人たちも、あんまり不眞面目ぢやないか。何も、文吉なんか選擧しなくても、他にいくらでも、代議員になりたい人はあるの！」

「そんな親不孝はせん」

文吉は、半分泣き出しさうな顔を、親たちの方へむけた。

「よし、よし、それなら好い。」

父親も母親も、そこで初めてほつとしたやうに顔を明るくして眼を合はせた。

この年で、他所へ行つては働けぬ、働かして呉れる所もない、今日、食つて行けるのはひとへに社長の洪大な恩義にある。父親の思想は其所だ。そしてこの社會は、このやうに他所へ行つては食つてゆけぬ人間を、日々、無數に作りつゝある。「第一に××のために、その次ぎには會社のために!」この忠良なる市民は、晩酌一本飲むのにさへいつも不自由してゐる。それ程、貧乏であつた。

勞資協議會は、多數の傍聽者に見守られながら、會社の會議室で行はれた。

正面に、社長が椅子により、テーブルに兩肘をついて、やゝ身體を乘り出すやうな姿勢である。彼は、溫顔、始終ニコニコしながら、口を利いてゐた。

社長の兩側に、いはゆる並び大名の形で、專務、支配人等が、腰かけて控へる。これ等は[illegible]だけで、テーブル[illegible]。

彼ら資本家側と向ひ合つて、――社長のテーブルから二間ほどの遠さに、勞働者代表委員たちが、自分の小學校の教室のと同じ、机の腰掛けに三列になつて控へてゐる。

「もう、何か、して貰ひたい事はないかね」

一と通り代議員の云ふことを聽いたあとで、社長はみんなの顔を順々に見まはした。

「何か、無いかね。」

みんなは考へるやうな沈默におちた。

「無いやうだね。それではと――第二工場の雨漏りの件と、ポンプ修繕の件、それから、社宅を取替へる件、女工へ裁縫教師――だいたい、そんな物だね。これだけ改良するのには可成り、會社の方も犧牲を拂ふのだから、お前たちもそこを諒として貰ひたい――が、もう何も、願ひ出ることはないかね」

村上文吉はどうしてゐるのか? 彼は腰掛けの一番うしろの列の端つちよに、小さく身を縮めてゐるのであつた。先刻から、彼の心の中は激しい鬪爭で、背中がたはむやうな氣持ちだつた。何百人のため! 父母のため! どちらだ?

「村上、――お前は、村上だな、確か」

社長はニコ〳〵しながら文吉を指さした。

「………」

文吉は顏をあげた。

「村上だね」

「はい」

「まだ一言もお前は云はんやうだね。何か云ふことはないのかね」

村上文吉は、何か云はなければならぬのを感じた。けれども、云ふべきことは何も持たなかつた、もし次の事を云はなかつたら……。

「賃銀を二割上げて貰はんと不可ません。働く時間は八時間で、積立金をすぐ拂つて貰はんと、みんなはストライキしよります」

傍聽席がざはめいた、反對に、協議員たちの顏色は一樣に緊張した。

「馬鹿、何を云ふ！」

資本家側の末席にゐた工場監督が立上つて、つか〳〵と文吉の側に來ると、いきなり彼を突き飛ばした。

「私は遺憾に思ふ。今日は折角議決したいろ〳〵の改良も、當分、取消しといふことにしておく」

村上文吉が、起き上つた時には、社長も立上つてゐた。そして、

「では、閉會に」と云ふと、サッサと部屋を出て行つてしまつた。

翌日の朝、會社の裏の空地に祀つた稻荷の側ら、松の枝にぶら下つた村上文吉の縊死體が發見された。

村上文吉は、本當のことを云つて死んだ。だが、何故死なゝければならなかつたか？　恐らくは、自分のために、折角議決された改良案が滅茶々々になつて皆に迷惑をかけたと云ふことを氣に病んだのであらう。

走せつけた父親と屍體とを中に、空氣は忽ち職工の群れで埋まつた。

誰かゞ、怒鳴るやうに叫んだ。
「俺たちが殺したやうなものだ。可哀相なことをした。面白半分に、文吉さんを投票したりして……」
「さうだ、みんなが、不眞面目たのが一番いけないのだ」
折柄來合はせた支配人が、叱るやうな調子で云つた。
「嘘だ！」
群衆の中から、一人の職工が叫んだ時、「さうだ、俺たちではない」といふ考へが、電のやうにみんなの頭を貫いて行つた。
××××したんだ。
貴様もその××きだ！
群集の眼は、一人の支配人の上に憎悪に輝きながら集つた。
「みんな集れ！」
稻荷の祠の上に飛び上つた一人が大聲で叫んだ。そして、
「諸君。」
演說だ。職工たちは、ときの聲をあげた。
誰も、職場の部署につく者はない。
彼奴らに殺された人の云つた通りに、俺たちは、賃銀二割上げ、八[illegible]
××××された人の意志は、俺たちの胸の中にまだ生きてゐる。
×された人の意志をついで、これらの要求を、彼奴らの前に叩き付けろ！
怒りは、自然の團結にまで激成された。
支部へ、指導に來て貰ふために、使ひの者が出發した。だが、それがまだ來ぬまに、職工らは、早くも綿の倉庫を占領してゐた。
ストライキの突發といふ電話で走せつけた何十人かの警官たちが、來るとすぐ物々しく事務所の入口を閉めたのは、敵味方の區別がハッキリして、××××いことであつた。
以上の物語は、世の中がだん／＼××××たるといふ事の、一つの證例に他ならない。（完）

卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その六

「さあ、もう分りましたやろ、うち着物きるわなあ」と云はれるのを、「イヤや、イヤや、もつと見せてほしいイッ」と、わたしは慄へたみたいに首を振つてせびりました。「しやうがないやないか。いつまではだかになつてたかてしやうがないやないか。」「あほらしいもない、いつまでははだかになつてたかてしやう……」

「あほらしいもない、いつまではだかになつてたかてしやうがないやないか。此の白い物を取つてしもたら、——」さう云うていきなり肩にかかつてゐるシーツを掴みますと、「放してほし！　放してほし！」と、いつしよ懸命に剥がされまいとしなさるので、シーツがぴりぴり破れました。わたしはかアッと逆上してしまひまして、くやし涙を一杯浮かべて、「そんなら、いらん、あつ

はないのですけれど、[illegible]

を[illegible]みつけた[illegible]が、ほんとに何でも[illegible]たやうに思へましたさう

です。さう云へば光子さんも、やつぱり默つてわたしの顏をじーッと觀つめたまま、ふるへてゐなしたやうでしたが、ついさつきまでの氣高い楊柳觀音のポーズが崩れて、羞かしさうに兩方の股をおさへて、一方の足の先を一方の足の上に重ねて、片膝を「く」の字なりにすぼめながら立つてゐなさるのが、哀れにもうつくしう思へました。わたしはちよつといたいたしい氣がしましたけれど、シーツの破れ目から堆く盛り上つた肩の肉が白い肌をのぞかせてゐるのを見ますと、いつそ殘酷に引きちぎつてやりたうなつて、夢中で飛びついて、荒荒しくシーツを剝がしました。わたしも眞劍なら、光子さんも氣を呑まれたと見えまして此方のするままになりながら、もう何事も云はれませなんだ。ただ兩方が、憎憎しいくらゐな激しい眼つきを片時も外らさずに相手の顏へそそいでゐました。わたしはとうとう思ひ通りにしてやつたと云ふ勝利のほほゑみを、――冷やかな、意地の惡いほほえみを口もとに浮かべて、、、、、、、、、、、、體に卷きついてゐるものをだんだんに解いて行きましたが、次第に神聖な處女の彫像が現はれて來ますと、勝利の感じがいつのまにやら驚歎の聲に變つて行きました「ああ、憎たらしい。こんな綺麗な體をしてて！いゝうちあんた

[illegible]云うて光子さんのふるへる[illegible]を[illegible]

つかり握りしめたまま、一方の手で[illegible]を引き寄せて、腰を持つて[illegible]

きました。すると突然光子さんの方から、「殺して、殺して――！

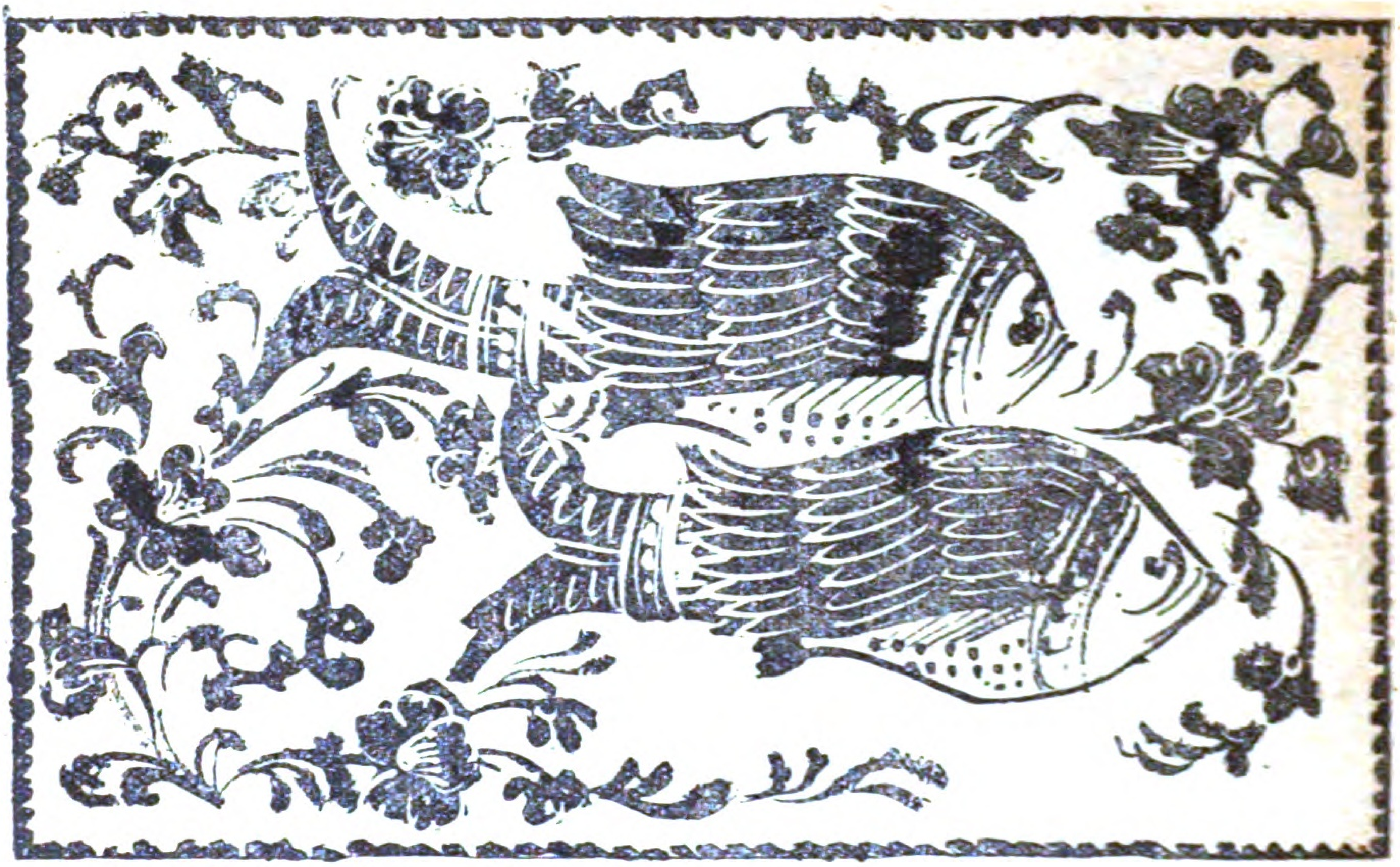
い、うちあんたに殺されてほしい、――」と、わめくるほしい聲がきこえて、それが熱い息と一緒に私の顏へかかりました。見ると光子さんの頰にも淚が流れてゐるのです。二人は腕と腕とを互ひの背中で組み合うて、、、、、、、、、どつちの淚だか分らない淚を口に飮み、どつちの、、だか分らない、、を胸に聞きました。

その日はわたし、別にどうと云ふ考へはありませんでしたけれど、光子さんを連れて來ることを夫に默つてゐましたので、夫の方では學校の歸りにわたしが事務所へ寄ると思うて、ゆふがたまで待つてゐましたさうですが、いつ迄たつても來ませんので、家へ電話をかけて來ました。「そんなんやつたら、ちよつと知らせてくれたらええのに。えらい待ちぼけ喰うたもんや。」「つい、うつかりして濟まなんだけど、急に話がまとまつてしもてん。」「ふんで、光子さん まだゐやはんのか。」「まだゐやはるけど、もう直き歸りはるやろ。」「まあもうちよつと留めといたげエな、僕此れから直ぐ歸るわ。」「そしたら大急ぎで頼むわ、――」わたしは口ではさう云ひましたけど、心のうちでは夫が戻つて來ますのを何か面白う思ひませなんだ。さつきの[illegible]があつて

から、わたしの胸には幸福の感じが充ち充ちてゐまして、今日は何と云ふ楽しい日だらうと、足が地に着かないやうに浮き浮きして、些細なことにも直ぐに心臓がどきッと早鐘を打つやうになつてゐましたのに、夫に帰つて来られてはその折角の幸福へヒビが入るやうに感じたのです。わたしはただもう光子さんと二人きりで、いつ迄も話してゐたかつたのです。いや、話なんかしないでも構ひません、黙つて光子さんの顔さへ見てられたら、――自分がその人のそばにゐると云ふことだけで、限りない幸福が胸一杯になるのです。「なあ光子さん、今電話かかつてなあ、うちの人帰つて来るさうやねんけど、あんたどないする？」「えー、どうしよう！大急ぎで着物着んならんわ」と、光子さんは慌てて着物を着ながら、――もう夕方の五時時分でしたが、その時まで二三時間もシーツ一つでゐなさつたのです。――「うち会はんと帰つたら悪いかしらん？」「あんたに会ひたい云うてたけど、……今ぢつき帰つて来るよつて待つてたらどう？」わたしはさう云うて引き留めはしましたものの、その実夫が居らん先に早う

の不満の色が顔へ出まして、妙にふさぎ込んでしま

んも、わたしがさう云ふ風でしたし、初対面でもありますし、それにいくらか気がとがめてもゐなさつたのでせう、あんまり物数を云はれませんので、二人ながら手持無沙汰で、めいめい何か別な事を考へてゐる、と云うたやうなあんばいでした。さうなるとわたしは、いよいよ邪魔をされたのが腹立たしいて、夫を憎うさへ感じました。「二人で何して遊んでてん？」と、夫は光子さんの手前、ぼつぼつそんなことを話しかけました。「今日は寝台をアトリエに使てしもてん」と、わたしはわざとあつさり云うて除けました。「――観音さんの絵描きなほそ思て、光子さんにモデルになつてもろてん。」「ロクな絵もよう描かんくせに、モデルこそええ迷惑だなあ。」「そやけど、モデルの名誉回復のために描きなほしてくれ云はれてんもん。」「お前等何ぞ話したかつてモデルをわやくちやにするだけや。モデルの方がずつと綺麗やないか。」夫婦がそんなことを云ひ合つてゐるあひだ、光子さんは羞かし



飛劍幻なり

泉　鏡　花

一

此の編の讀みはじめに、五百羅漢堂の一條を出したいと思ふにつけて、何處か、近郊の寺院に其の堂があるまいか、と心當りを聞合はせた。本所割下水の有名な五百羅漢は、書もつでも讀み、話にも聞いて知つて居るが、知つて居るだけに、幾度かの火と、風と、地震のために、今は殆ど影も留めないことが分つて居る、慌てゝ電車に乘つた處で仕方がない。さて尋ねると成ると友達連中にも心當りが一寸ない。幸ひ番町近邊に、奥澤九品佛の、可碩上人の繪像を輪番のお婆さんたちの講中がある。その中へ問合はせると、講元の在家が知つて居た。麻布の邊に、一個寺あると聞いたけれども差當り其は分らぬ。北豐島郡石神井の長命寺、稱して新高野山に、五百體の羅漢がある。と云つて、寺判の朱の捺つた巡拜の綴帳まで見せられた。まことに不斷の心掛のよくない事は、早速には石神井の見當がつかぬ。それ方角だ、と成ると、買置の東京地圖が明治三十五年版。北豐島郡だけは分つたものゝ、電車は、新宿か、板橋か、と指の先でぐる／＼廻つてまごつく處へ、講中では、また、若いもの？が、鈴木主水の晝遊びの暖簾口や、くら

やみの丑松の雨宿りの軒下でも捜す事か、羅漢に結縁は、と殊勝かつて、念入りに聞合はせて、追續ぎ知らせてくれたのが目黒の羅漢寺の其であつた。

然も大正七年の大暴風雨ともろともに凄じい海嘯の時、ノアの船に乘るやうに、虚空の濤に漂々として此處に漂着された、前記本所榮螺堂の羅漢たちであるのを知つた。――剰へ、此の目黒で、更に、あの大地震に逢はれたのである。

御存じの行人坂を下りて、川筋を左へ、野道少しばかり横ぎつて斜に路地を行くと、町家續きの右側の石段を上つた奥に、伽藍の棟が聳えて居る。

聳えて居る、が、見るからに、扉は傾き、軒は頽れ、棟にはぐわらぐわらと瓦の落込んだ、猛獸の噛合つたやうな穴がある。震災のあとを未だ其のまゝの大破らしい。

あゝ、此が羅漢堂か。

左右に、六體七體ばかり、流れ着いた船板を想はせる縁

をしさうに見え、巌穴へ入つたやうな冷い風が

つた經机の上には、蚰蜒に似たお蠟燭が青く這ひ、擬寶珠形の蠟燭立は團扇が挫げたやうである。

申すも憚多いが、震災のあとを引續き此の雨に朽ち、風に曝れた、ものゝ譬にも言ふ荒寺の正面に、金像にして丈餘の世尊釋迦牟尼佛が、さし入る日の影の動くまゝに、ほの明るく、颯と暗く、時には晃晃と輝いて拜まれる。金衣の大趺座の右の膝の處に、玉を鏤した綵なす御髮の高い、相格の優婉端麗なる、白衣の觀世音こそ、塵埃の中に、時々はおん袖の蟻を拂ひ給ふよ、柔かに白き胸も殘ンの雪におはしませ。羅漢たちは、金銀も彩色も、脫落し、剝凋して、頰の赤黒きは熱に惱める如く、顏の蒼黴したるは、凍つて裂けさうで傷々しい。赫と瞬つたのも、伏狀に眠つたのも、盲目に案じたのも、しよぼりと濕つたのも、ふゝんと乾いたのも、たゞ、目は一つとして光つたのはない。

勿論、此の目が一千座の明星にきらめいたのには、われら式の凡たよ

として雲に翔り、風を起ら、霧を放ち、雷を操りさうで、あの逞しい方々は、あの中に、兩手の十指、はた爪長く鋭さに、腹に穴を穿いた黒羅漢を御覽に成つたであらうか。

土間に落ち疊つた、朽葉、落葉、屋根の泥、古垣の一塊は、恰も、西遊記の老猿が觔斗を起して、毛蟲の毛で脚元を切割いて、赤き肝、靑き肚、黃なる臂、五臟六腑を摑出し、たゝきつけた趣がある。然も、貴さは、蟻一つ、草鞋虫、げじげじ、やすで如きの這寄る影さへない。一疋も蠅は居ない。一處も蜘蛛の巣が掛からない。健在なり、拂子、錫杖。かくて、獨鈷を投げて毒蛇を封じ、杖を執つて甦らせて、犧牲の蝶々を救はるゝであらう。

私は跪いて祈り、佇んで拜した。

が、長くをがんでは居られない。まつたく愆る狀は勿體ない。世話にいへば、おいたはしい。……それに、洞拔けた高天井の大穴からは、眞中で折れた棟木のさゝくれが、大蛇の腮のやうに、俯向けに覗いて、ぼた／＼と血の垂れるやうに黑煤が降り、風の音とゝもにばらばらと木屑がこぼれ、唯今に、めり／＼と來さうでならぬ。

わが俗氣を追はるゝが如く、肩をすくめて扉を出た。而して、瑞光殿の碧い額を、胡粉の靄に仰いだのである。

——また揭示によれば、堂を修すべき壇越が今ないらしい。

時に、一寸齒の違つた處がある……と云ふのは、何か前から[illegible]もし、——して、これからお話をしようとする、[illegible]か、其の仲よしの「お神姉さん。」と云へば「[illegible]さん。」……で、從姉と連立つて參詣した、流れ故郷の五百羅漢は、其の地の名所——これは筆者も旅行のついでに知つて居る。小石川音羽の通——[illegible]故人蓼太にいゝ句がある。（鶉なくや音羽九丁に影もなき）御成道が出來てからは其風情はない。如何にも其頃の景色が目に見える。——あの眞直な閑な道を、臺町から目黒坂の上へ渡したやうな高臺で、一際に樹が、林が、籔が茂つて、耕地、水田、處々、畦も薄暗い樹下を潺湲なる熊川の水が清く流れる。……其の靑道のはづれ、目黒山へ、やがて近く成る處に、榮螺堂があつて、通りがゝりにも擬寶珠が眺められ、繪心のあるものでなくても、一寸筆を擧げて行くと、スッと一刷の雲か棟にかゝりさうな、即ち其が羅漢堂である。その堂の裡を[illegible]は見ない。が、床板を段々のぼりに、螺旋にめぐる、輪なりに五百羅漢を安置す、と言ふのである。

見聞の狹いお恥かしさは、五百羅漢とさへ言へば、何處のも同じ式で、目黒のもぐる／＼廻るのだらうと思つた。其處で、其の榮螺を、すぐに本文の榮螺堂に寫さうと云ふ拙見だつた、……惜ぬすみの

をして、五百羅漢の光景は、讀者の想像にお任せしよう。

また聞く處によれば、川越の喜多院にも、五百羅漢がある。皆石佛で、野天に並べたるゝさうであるから、いづれも、一様でない事は疑ひない。

で、此の榮螺堂のは、おなじお木像ながら、目黒の殆ど等身なるに比して、やゝ小形である。五百の數も丁ど揃つて――いや少し多いかも知れない。或時代には、志す佛を羅漢の一體に刻んで、こゝに納める風俗があつた。勿論、擦れ剝げ、缺損じたのも少くないが、まだ生々としたのもゐらるゝ。總體に、彩色は歴々と殘つて、白粉、黄泥、朱丹の綾、紺紫、碧緑の隈、鑲めた金銀も底光りに窺はれる。瞳も黒い。或は光る。……黄に樺に髯も。また、唇の赤いのさへあるのである。

「何う、兄さん、肖た方がありますか。」

小窓に片肱を掛けて、すぐ下の苅田を見ながら、圓髷のやゝ縺れた細面の白い顔を、振向けもしないで、澄まして言つた。

窓は晴れた、が内は言ふまでもなく薄暗い。數が續いて、遙に熊川の瀬が冷く響く。……春は半ばながら、北國の冴返つた風の寒い日であつた。

次第のぼりに一巡した、此の高い處から見ると、數々の羅漢は、其の色彩と光澤と暈影と、さながら疊んだ虹である。また床下へ尾の影を垂れて、大きく蟠りつゝ次第に昇つた一條の神龍に相齊しい。……七彩の互鱗に、且つ一ツ一ツ五百の顔があつて、目鼻が附着く。……

然う思つて、やゝもの可恐さをさへ感じて居た男は――だから、「何との羅漢さんか莞爾して、其の笑つたのが思ふひとの顔ですとさ。」と婦の云つたのに對して、「可哀相に、坊さん頭ぢやあれ、」と云ふと、「私のをプツリと切つて、髪に被せて上げませうか。どの羅漢さんか、顔さへ研ければ肖ませうよ。」と釵をぐい、と指をはじいて、横顔で振返つた時はハッとした。こゝに天井の黒雲近く、上段に擡げた、其の龍の口に、捌き髪の白い顔を、啣んでぶら下げはしないか、とさへ思はれたさうである。

わすれたやうに言を替へて、

「煙草は不可ますまいな。」

知れた事を――

「嚴禁。」

其處で、はじめから支いては居たかつた洋杖を、脇へもう一息ぐい、と上げると、窓際に寄つた。

「……まつたく、そんな氣で來やしません。久しい事だが、まるつきし小兒の時、六才か七才……それとも四才ぐらゐだつたか不知。母親に手て

を見られて、紅い顔を[illegible]されるに[illegible]ね、町では[illegible]し、路は[illegible]し、[illegible]は[illegible]し、[illegible]は[illegible]、[illegible]の[illegible]は[illegible]て、榮螺堂は美しい[illegible]の中です――こゝへ入つて[illegible]た時は、何とも言へない、……

其の街ですよ。芝居一つ……場末の活動寫眞もない時分だから、珍らしいものと言つたら、はじめて見た雛祭か、内の錦繪、惠比壽講の比羅ぐらゐなのが、五百羅漢へ來たんでせう。山からいきなり、東京の大歌舞伎。いや、そんなものより、小兒の讀本にもありませう。大昔の羅馬の劇場へ、母親の袖から飛出した、……飴の中からぢやないんだね。」

と渠はひとりで笑つた。

「をかしいのは、其の羅馬の劇場で食つたものが、橄欖の實でも、羊の蒸燒でも何でもない。……松風に芝舟といふ……」

「仙人が流されたやうなのね。」

「干菓子だよ、姉さんは知らないかね。」

「極の安菓子。」

「まあさ。」

「知つて居ますよ。――今時あんなものを食べる小兒なんぞ居るもんですか。」

[illegible]い。……[illegible]て居ますがね、[illegible]で[illegible]さんの[illegible]と見えるに、[illegible]を入れたのをぶら下げて、此の羅漢を巡りました。[illegible]に[illegible]し、[illegible]に一[illegible]に[illegible]んで居るし、陽氣でね。羅漢たちも、誰か坊さんごッこで遊んで居るやうに見えて、それこそ、極樂へ來たやうでしたよ。」

「此の[illegible]い坊さんたちの中を、兄さん、貴方、綺麗なお母さんに手をひかれて歩行けば、それこそ極樂ですわ。……羨ましい事。」

「たかく御殊勝だね。――殊勝といへば、昨日は私の誕生日だつたから、母親の信心した摩耶夫人にお參詣をするし、此でも緣なき衆生にあらず……一層、小兒のうち坊主にでも成れば可ござんしたよ。」

「ほゝゝ、今からでも遲いことはありますまい。」

「いや、然う言了つちや方なしだ。けれども、頓個緣のない事はないんですよ。憶出すなあ……矢張り其の時分の事ですがね、私の生れた細い町筋の、あの、上へ行くのが少しづつ高く成るでせう。小兒の目には餘計遠いやうに思はれますね。父親と同業の家があつて、其家の息子で、私より三つぐらゐ年上なのが、一度遊びに連れて行つた事があります。よちよち、其だつて大旅行で、行暮れもしないで、向ふへ着いて、二階へ上ると……内にもあるから二階には驚かなかつたけれど

も、眩い物干に、大空の雲の峰に向つて、大な手が一つ生へて居るぢやありませんか。目をまん圓くしましたよ。身體は縮こまつて。……佛手柑の盆栽だつたんです――さあ、不思議で堪らない。父親の仕事場、店の向正面か、障子一枚ほど竹格子に成つて居る。――孃さん、あなたも町内へ遊びに來ると、門口へ入る前に、彼處から覗いたでせう。……他の事ぢやあつたけれど……」

婦は頷いて一寸俯向いた。

「……彼處はね、母親が娘時分、小さく仕切つて、少し借りて、店にして、江戸から持つて來た、繪草紙だの、錦繪だの、千代紙……」

と少し聲がうるんで、

「千代紙だのを、くらしの料に賣つた事があるツて―後で知つた處ですがね。木登りの覺悟で、摑つて、彼處から伸上ると、上の町一目に見えて、其らしい物干はあるが、不思議な手は見えません。此方は繪に描いた天竺の眞中、公園の紀念樹ほどに、其の佛手柑に憧憬れるのに、その後息子も遊びに來ず、

や、其の顔は一眼を瞬えまいぞ押入の。で、一糸のやうにあかりは射すが覗けません。……あれを開けて、と強請ると、佛樣はお構ひないが、方角が惡うて、それがための釘づけよ、あの窓を開けると魔物が内を通る、と云つて……父親も母親も誰も言ふことを肯きません。あきらめも、わきまへもなく、内證で、かたくごそ〳〵と、さあ、幾日か行つて居ると―可恐いもんです。其だけでも魔が魅したと見えて、芝居の繪の切組燈籠ね――何處で覺えたか、見て來たか、あれを欲しがるもんだから、材料は、いゝのが母親の文庫にある。お弟子の職人に器用なのが居て、勿論、……袈裟法衣、御袴などの裁縫職だから、鏝や糊は手のものでせう。暮の忙しいのに、第一時候違ひだ。可愛い我兒の事だから父親も默つて居たらしい。たゞし職人も、坊さんの袈裟を貼つてるより氣乘りがした。内證内は母も手傳つたかも知れません。

大晦日の、しかも逢魔ケ時、黄昏です。出來たあ―諸ちやん、と親

の火がちら〳〵と映ると思ふと、[illegible]に四郎でも何でも構はん、目に燃えた炎は真紅に染まつたから、やあ源氏だ、と云ふ拍子に、源家の御曹子だと天狗の守護があるのだけれどね、裁縫屋の小倅だから、河童の皿を真俯向けに鞍馬の[illegible]を倒に落ちたんです。

が、下に、大な佛手柑があつて、其の上へトンと落ちると、柔かな指が開いて、其の中へ、霧、霞、真綿を飲むやうに、ふわ〳〵と入つたんです―常人の心持は。……また暖かい雪の中へ潜つたやうにも覺えて居ます。かすり疵一つなかつたさうですがね、前歯を二本折つて、猶甜い苦いは夢中でも、何しろ、ものが食べられない、砂糖と蜜柑を吸つて當分育つた。其をね、中へ包まれたまゝ佛手柑の汁を吸ふ氣で居ました。

―然う云ふ事があつたんです。

「佛縁がありませう。……考へて見ると、出家得道をして居れば可かつた。――前歯二本ない坊さん。」

「つきあひ悪いわね。」

「いや、其處を、強て御案内を願つたと云ふのも、そんなこんなで……昔が可懷いからなんです。何しろ、佛手柑と五百羅漢は忘れません。しかしもつと陽氣だつたがなあ。淡い寂しさはあるにしても、春ら[illegible]」

「それはね、兄さん。」

お雅は窓を背後にして、斜めに横向いて、づらりと列ぶ羅漢に向つた。

「其時分は、此處へお參詣が隨分あつたからです。春さきは縁日ですわ。――何しろ、甘茶の日には、私たち振袖のお晴着に着換へて、お釋迦様のまはりで、綾糸の手鞠をついた時分ですもの……思出して御覧なさい。此の寺通りを、ちら〳〵ちら〳〵、蝶のやうに、花のやうに、大人も子供も通つたでせう。」

「成程、然う言へば目に見えるやうですよ。」

「それが此頃では、いつが日にも、此處へ入つたものなんか捜したつてありますまい、釘つけにしないうちが見つけもの。」

と、戸を引きかけて、また仰ぎ狀に空を見た。

「御覧なさい、……遠くに佛手柑が見えます、真白な。――」

「あゝ、まだ雪が山にありますね。」

「窓下は谷底でせう？　寒いのね、かぜをひいたり、兄さんが怪我をしないやうに。」

窓はカタリと閉つた。

「あゝ、薄暗く成つた。――自殺でもするか、世間の義理に道ならぬ

ことでもある同士が、もしか心中をするなら、此處が可ござんすね、兄さん。」

「野郎はまだしも。」

男は何故か勢よく、

「そんな事をして、誰が此の經藏の中へ入れますか、髮が長いんだもの、務々した。……」

「だつて、剃りますよ、其の髮は一所に棺に入れるまでもですよ。」

「薄氣味の惡い、いやな事を。」

「最もお釋迦樣も觀音樣も、それで御承知をなさるか、何うだか……あゝ、然う此の御堂にはおいでに成らなかつたつけ。」

「まつたく、然う……見えないね。……それで餘計に陰氣なのか知ら。遊山氣分で、その昔は、此の中で逢ふものも、燕か、蝙蝠のやうだつたのが、何だか今度は、入る時から、狸か、梟……」

「御挨拶ですね。せめて木菟。」

「私の事さ。」

「そんなら、狸どの。」

「木菟氏……」

「出掛けませうね。」

で、足袋をほの白く、お律が入違つて、さきへ歩いて、船底を渡るやうな、床板を踏鳴りに——

「さあ、嚴しい事だよ。入口に閻魔樣が見ておいでだ。」

「何の、閻魔なんか、女の裸體を見れば莞爾々々ぢやありませんか。地獄の繪を御覽なさい。」

言ふ事は憚られる、が、お律が此の元氣でないと、それから、釋迦、觀音の此處にましまさぬ理由を聞きながら通過ぎるのを何ほ憚られたであらう。二體は本堂にある。此處から近い黑樹山、六方壁、八千坊、熊堂、累々たる峰谷に、密林の暗闇を鏤して、天狗魔神、谷關もおびたゞしく、殆ど異境と稱して可い。一類と眷族か、城下への出入りの衝に當る、この紫蝶堂は、軀を經藏にして、魔性を封じた、と言ふ傳説がある。ために其の靈像の當體は知らず、釋迦、觀音は本堂に移して置くと言ふのである。

聞くうちに經藏の龕は眞暗い。——入つた時は、尊者たちが、坐つて、ことこと傾向いて人を見たのが、いま出かゝると、申合はせた如くぐつぐつとづらりと斜向いて、ぐつたりとして、中には居眠をさるゝらしいのさへあつた。

「……又一倍陰氣に成つたね。」

首だけが背後に白い。背を覗くやうにして

「弱蟲ね。あんたに陽氣ぢやありませんか。あれっ」

戸の隙に過ぎた中に——[illegible]——[illegible]から[illegible]と、おたし

くらゐに、ひらりと[illegible]の[illegible]の[illegible]に[illegible]いたのが見えた。

「おゝ、[illegible]——[illegible]。」

[illegible]に[illegible]、目の前に、[illegible]に三味線を[illegible]つた一[illegible]の白い[illegible]を[illegible]た[illegible]は[illegible]である。[illegible]はなさい。[illegible]人[illegible]にも[illegible]で、糸は切れたが、一[illegible]たみでつら、[illegible]は[illegible]つて居る。しかし[illegible]下つて其の[illegible]ちようとする[illegible]を、[illegible]く[illegible]、[illegible]に、[illegible]つて、[illegible]を立てた[illegible]の、[illegible]に[illegible]として、[illegible]のへ、[illegible]に落ちて、[illegible]の[illegible]が[illegible]つた、[illegible]である。が、[illegible]てた[illegible]に、[illegible]く[illegible]いて[illegible]を垂れて、[illegible]も[illegible]に見えた。[illegible]に[illegible]と思はれるが、通りすがるもののゝ[illegible]に[illegible]があるから、[illegible]へかゝきないと[illegible]けぬ。且つ[illegible]たら、[illegible]と[illegible]に、[illegible]ばなるまい。[illegible]たり、[illegible]、[illegible]ある。[illegible]、尺八の[illegible]でも、[illegible]して、[illegible]らしめたであらうが、[illegible]である[illegible]人とも一寸[illegible]を[illegible]れた。

「あゝ、[illegible]だ……[illegible]。」

「[illegible]——[illegible]だよ。」

[illegible]にだになさいたが、[illegible]の[illegible]らく、[illegible]に[illegible]、[illegible]の[illegible]は、[illegible]して、おのづから[illegible]つた。

「[illegible]——兄さん、[illegible]た一」

二人の[illegible]が[illegible]び[illegible]れた。[illegible]一[illegible]に[illegible]るのであらう、[illegible]タリと落ちた。[illegible]として、[illegible]たる[illegible]に。

かたく、みしり、ごとんと、[illegible]の[illegible]は、一[illegible]に[illegible]いたらうである。

二

「阿婆——阿婆、阿婆や。」

妙な呼び方、と此の際では、……[illegible]の[illegible]きで、[illegible]が[illegible]いた怪談と思はるゝであらう。決して然うでない。[illegible]さきから[illegible]つて来た、——栄螺堂を寺内に[illegible]つ、[illegible]の[illegible]である。[illegible]と[illegible]も、[illegible]の御弟子の一人であつて見れば、[illegible]の[illegible]いたことにして[illegible]いて[illegible]へなさそうだけれども、見た[illegible]の[illegible]、また一[illegible]家らしくない。[illegible]の[illegible]つた[illegible]の[illegible]せたのが、[illegible]に[illegible]取つた居士帽子で、をかしく栄螺に似たのを被り、[illegible]の[illegible]を[illegible]めに[illegible]いたのが、[illegible]と見えて、[illegible]が[illegible]れ、[illegible]踏んだ[illegible]との間、[illegible]ばかり[illegible]が[illegible]居る。[illegible]いた[illegible]の[illegible]——[illegible]た——[illegible]に、[illegible][illegible]げて居たのだらうであるが、[illegible]……[illegible]

ことでもある同士が、もしか心中をするなら、此處が可ござんすね、兄さん。」

「野郎はまだしも。」

男は何故か勢よく、

「そんな事をして、誰が此の羅漢の中へ入れますか、髪が長いんだもの、房々した。……」

「だつて、剃りますよ、其の髪は一所に棺に入れるまでもですよ。」

「薄氣味の悪い、いやな事を。」

「最もお釋迦様も彌陀様も、それで御承知をなさるか、何うだか……あゝ、然う此の御堂にはおいでに成らなかつたつけ。」

「まつたく、然う……見えないね。……それで餘計に陰氣なのか知ら。遊山氣分で、その昔は、此の中で逢ふものも、燕か、鶯のやうだつたのか、何だか今度は、入る時から、狸か、鼬……」

「御挨拶ですね。せめて木菟。」

「私の事さ。」

「そんなら、狸どの。」

「木菟氏……」

「出掛けませうね。」

で、足袋をほの白く、お律が入替つて、さきへ導いて、船底を渡るやうな、床板を爪探りに――

「さあ、謹愼の事だよ。入口に閻魔様が見ておいでだ。」

「何の、閻魔なんか、女の裸體を見れば莞爾莞爾ぢやありませんか。地獄の繪を御覧なさい。」

言ふ事は憚られる、が、お律が此の元氣でないと、それから、釋迦、羅漢の此處にましまさぬ理由を聞きながら通過ぎるのを猶ほ憚られたであらう。二層は本堂にある。此處から近い黒樹山、六方壁、八千坊、熊堂、累々たる峰谷に、稠林の暗闇を鎖して、天狗魔神、谷扉もおびたゞしく、殆ど異境と稱して可い。一獸と靈族が、城下への出入りの衝に當る、この榮螺堂は、軀を羅漢にして、魔性を封じた、と言ふ傳説がある。ために其の靈體の當否は知らず、釋迦、羅漢は本堂に移して置くと言ふのである。

聞くうちに羅漢の龕は皆暗い。――入つた時は、先達たちが、揃つて、ことこと俯向いて人を見たのか、いま明かゝると、申合はせた如くくつくつとづらりと俯向いて、ぐつたりとして、中には坐睡をさるゝらしいのさへあつた。

「……又一倍陰氣に成つたね。」

首だけが背後に向い、背を覗くやうにして

「弱虫ね、あんなに陰氣ぢやありませんか。あれ皆」

戸の縁に過ぎた帆に——紫紺——[illegible]と、おなじくらゐに、ひらりと紫の蓋の畫に浮いたのが見えた。

「おゝ、景氣が可い——此は壯だ。」

同時に男は、目の前に、既に三味線を取つた一體乳の白い顏を視た。棹は黒檀である。形は小さい。素人目にも花櫚胴で、絃は切れたが、一筋だけだから、駒は留つて居る。しかし撥下つて其の落ちようとする駒を、輕く壓へた状に、手が掛つて、膝を立てた坐像の、顏の瞼も白々として、胡粉のみ、彩色は落ちて、羅の面影が殘つた、殆ど裸身である。が、其の立てた膝に、深く俯向いて頸を垂れて、斜に向いた肩もしなやかに見えた。面相は嘸と思はれるが、透りすがるものゝ腰ぐらゐな處に膝があるから、床へかゞまないと差覗けぬ。且つしどけなさうだから、奥殿と同樣に、たしなまねばなるまい。持ものが拂子なり、獨鈷、琵琶ならば勿論である。琴、尺八の類でも、人をして、やゝ憚らしめたであらうが、三味線である

二人とも一寸手を觸れた。

「あら、綺麗だ……玉虫。」

「お律さん、——河鹿だよ。」

玉虫ほどに小さいが、緑青の翼きらきらと、胴に漆の高蒔繪、胸毛の紅は、名香を馥と燻して、おのづから芬と薫つた。

「[illegible]——ぢいさん、[illegible]……[illegible]よ」

二人の花が再び囁かれた。[illegible]一[illegible]に[illegible]來るのでせうか、[illegible]タリと落ちた。円[illegible]として、[illegible]たる[illegible]に。

かた〳〵、みしり、ことんと、邊の[illegible]は、一同に驚いたやうである。

二

「阿母——阿母、阿母や。」

妙な呼び方、と此の際では、……話の續きで、羅漢が大口を開いた怪談と思はるゝであらう。決して然うでない。出さきから歸つて來た、——榮螺堂を寺内に受保つ、當山蓮寺の住職である。末法の世と雖も、釋尊の御弟子の一人であつて見れば、羅漢の口を利いたことにして置いて差支へなささうだけれども、見た處の風采が、また一向出家らしくない。頬骨の張つた色黒の痩せたのが、土耳古形に見に腰を取つた居士帽子で、をかしく榮螺に似たのを被り、鼠色の被布、茶絲の袴を短めに穿いたのが、嘉平次と見えて、裾がよぢれ、日和下駄を踏んだ足袋との間、二寸ばかり毛脛が出て居る。網代編の手澤のついた藤の提籠——中に茶道具を心得た——を片手に、片手に何の花か一枝提げて居たのださうである、が、聞きもらした。……たしか、らる

んだ白木瓜であつた。宗教上の智識道德は、われらの論ずべき處でない。此の上人は、茶道、いけ花に堪能の聞があつて、檀越には限らない、所々の在家に出稽古をする。其の歸山した處である。

いつも厨裏の方から入るのを、榮螺堂を右傍に、正面本堂の階段に向ひ立つて、「阿媼—阿媼……」四五度呼んだが、勝手が違つた上、いづれは耳も疎からう、一向に應じないので、茶の湯上人は、大きくポンポンポンと手を敲く。

佛を眞向に、此の相手は作法に背く。が、うつかり行つたものらしい—然う言へば何事ぞ、上人のやゝ黄を帶びた眼中、ものに驚いた色がある。しかし、手を敲くのに枝を忘れず、手籠に載せて縁に差置いた。

これに投入の式が備つたのは、宗匠の心得と云つても可い。方丈で用ある時は、此のポンくが習慣だと見える。動物と齊しく、飼習した衆生には、言葉よりも、此の形式の方がよく意を通じて

—六十あまりの婆さんが、見當も間違へず、廊下傳ひに、よたくと、が急いで來た。ひしやげたやうに皺手をついて、

ゐぢやかな。」

「いんにい。」

「ふん。」

と、袴腰に肱を突張り、握拳を如意の如く頬に當てゝ、釣合を取つて膂を曲げ、榮螺帽を傾けながら、

「阿媼には氣が着かんぢやつたかも知れんわい。」

「へいへい、お留主樣には、よう氣をつけて居りますで…へい、御前樣と一足違ひぢや、とおつしやつて、どういふ御樣子の方でござりますいの。もし。」

「それかな、はてな、…いや、阿媼には氣が着かんぢやつたかも知れんわい。」

上人は、根上りの松越に、門内要館の堂を透かすと、道向ふの古刹の土塀の、竹藪の形を引いて、其の額を暗くした。

「榮螺堂に氣色もなく…本堂に影も見えずと…いや、阿媼には氣が着

「へいい！」
と、しよぼ〳〵目を瞬きましに、[illegible]かせて、[illegible]、
汚れた膝で摺つて出る。
「貴はな――山伏氏と虚無僧おや。」
と、疲れ聲を沈めて、咽喉佛を動かすと、下足禁制の壇に腰を落して息を吐いた。
上の賽錢箱の薄縁につくなんだ婆さんは、化猫のやうに見えて、うそ寂しい。
「大概の方から、いま蹤つて來てな、臨地宗禪寺の、あの高い釣鐘堂の前へ掛ると、黒樹山の方から、二人、汚れて、ぐなりとした虚無僧と、肩も肱もごわ〳〵突張つた山伏と、連立つて來るぢやて。押並んで、や、一隊の騎兵が通るて。おなじ方角の聯隊から出た事は言ふまでもないがな、恁う並んで來る……馬足の砂煙と、……妙な事には、中に川一筋あるほどに、虚無僧山伏の頭の上は、くつきりと澄んで埃がない。また稀有な事には、私等も此邊で見覺えた、驅足ではないのぢやが、騎馬は相應に早いものを――別に急ぐでもなしに、遙くからすツと風筋を揃つて來た。――思はず、私は立留つて、……釣鐘堂の前で、……聞けな、阿媽。――ふと考へた事には、いま此處で此の鐘が鳴らうづなら、其の音ともろともに、あの二個は、蝶、鳥、木の葉
と[illegible]、
し、[illegible]
前へ掛ると[illegible]、少し足を早めに、ツツイと[illegible]出て、虚無僧は
笠を仰向け、山伏は錫杖を脇へそばめて、一度榮螺堂の擬寶珠を仰ぐやうにして、すつ、と入つた。
はあ惡い、ようないぞ。あの人たちの來せた方角が、六方顯、八千坊、熊堂(くまたかどう)坊主火山と累つて、名代の、おもしろうない所、とぎよツと氣を打つた。が、いや、迷ひおやろ、然うでもない、諸國遍路の修行者が道作して、五百羅漢を參詣に來たか知れぬと、先づ其にして、心を鎭めて、私も續いて入つたが、影も見えぬぞ、堂の裡に。」
宗匠の作略は、入り掛けに、もう榮螺堂を覗いて、厨裏へも行かず、直ぐに本堂を窺つた事が知れた。
「何處を覗いても、形も見えぬ。さて、しかし此は慌てる處でない。分別は分別として、阿媽、榮螺堂は、此の何年にも、つひぞ參詣のものもなし、鎚を掛けたまゝであつた筈ぢやが、今見れば片扉明いて居るぞ、阿媽。」
婆さんは、ついた手と一所に、背中をぶる〳〵と震はした。平常ならぬ上人の氣色に、恐れたよりは、返事を忙込んだものである。
「……御上人はお留守にござりますし、のい。」

「お〻よ。」
これは落着いてよかつた。其の留主であるのは住職も承知らしい。
で、此の中でも應揚に頷いた。
「へい、それで、婆かあけまして。」
「阿嬢かや、何でぢやい。」
「へい、お二方、御參詣かござりまして。」
「それ、それ、それぢやから、聞かぬ事ではないに。」
「いんね、もし、」と……婆さんが言つたのは——先刻の男女の事で
あつた。
「お歸りがけに、へい厨裏へ顏を出しなされて、お供物一包みたさり
まして、——三味線をお持ちになりまして。」
「三味線を——三味線を、……何か藝人かなう。」
「いんね、へい、うたをなさる氣にござりますよ。」
上人は氣の晴れたやうに輕く笑つた。
「はゝゝ、阿嬢、何を言ふぞ。うたも唄へば三味線も彈くつ。」
「阿嬢。」
「何で、何で、婆の一了見でござりませう。……お姫子樣が御存じで、——それ
のい。」
太い息をつきながら、
「はあゝ、澤子が出合ふたか。あゝ、誰にせい、何にせい、——
は大變な事をした。」
婆さんは、襟首を取つて搦立てられたやうに、よわれた胸を、ひよ
ろりと立てゝ、
「あの中に、御前樣、お金子でも、小判でも、……えゝ、それは、つ
ひ早や、存じませぬ事で早や。その御參詣人は、申譯ではない。麁忽
とは思はねど、此の三味線が、時の拍子に折れました、損じました。
形だけでも、もとにしてお納めをせぬ事には、御佛前のお香料、何と
しても氣が濟みませぬ、と申されまして、お姫子樣、御得心の上に、
はや……」
上人 [illegible]

「あいたッ」頭の[illegible]がタトヽトヽトと階に響いた。川下の[illegible]を、[illegible]の[illegible]へ[illegible]ならしい。

「いや、頓倒ぢや。これは尋常事ではないぞ。」

欄の擬柱を、左右に二三度行きめぐりして、ぐつたりと、手籠を力に膝をついた。何の枝か、其の花も曠野に咲く。……幻怪なる虚無僧と山伏の消えた影を求むるやうに打仰いだ、町通りの大空には、怪しき名の山が重つて、黯淡の眉の雲が漾ふ。宗匠は、上人は、我が寺に腰を掛けながら旅に疲れた趣である。

「伯父様、お歸り遊ばせ。」

明答の中を捷徑して、古卒塔婆を分けながら、十八九の、断髪ではないが、至極當今なのが明い顔で其處へ來た。

開いた手帳を胸に當てゝ、紫の絹糸のついた鉛筆を持つて居る。

「お名刺が頂いてありますわ。」

と、膨りした胸を輕く壓へて、

「相澤謙吉先生――東京の――大學の先生で、歌よみの方よ。伯父さんも御存じでせう。」

「知るも知らぬもない、名刺ばかりで、何ぞな。」

「あら、寫眞でも知つてますわ。寫眞より少々何だけれど……あの方[illegible]……い、[illegible]て、――大川たの、[illegible]たの、野たの。」

「……大川たの、山たの、谷たの[illegible]、こうだないと言へば。」これ、其處ところかい、旅と

「あら、可厭だ、伯父さんは、古くて、人を知らないのね、先生は旅ですけれど、もう一人の姉の人――姿も知つてゝよ。顔は知らないさうだけれど、此の土地のね、有名なね、あの鍛物屋のおかみさんだつて言ふんですもの。」

「へい、御前樣。」

しかも、天附茶碗。

「あら、いやな婆や、こんな處へお茶をついで來て。」

上人は、しかし、震へる手に其の茶碗を拾つた。

「いや、何事も約束ぢや。棟の下なら、階壇で結構とも。難有いことと思へ。……大道の野原で湯水に渇えねば可いがなあ。これ、私が小兒の内から、代々の申傳へぢや。あの三味線が堂を出ると、世間に、いや、城下に大變が起ると言ふのぢや。」

「まあ、呆れた迷信だわねえ。」

伯父上人の宗匠に對して、お嬢さんは勇敢であつた。

堂の結構も安置した羅漢の式も、身勝手な筆者の假想とは違つたが、——目黒の厨裏で取次いだお嬶さんも何うやら似て居れば、片袖に鍵を取つて、扉を開いて下さつた若い婦人が、此のお嬢さんに亦其のまゝらしいのに——歸途を歩行ながらハタと目黒川の橋の上で思ひ當ると、いづれの羅漢か、倶通方便の功力を感じて、欄干越に、堂に向つて、再び脱帽し恭禮した。

三の一

「從兄さん、從兄さん。」

袋物屋の女房お律が、氣を負つて、と呼懸けながら、並んで歩行く從兄を、呼んだばかりで默つて指さしをする。……道傍を曲尺に劃つて、傾向ふ二階屋の横窓の高さに、蘆簀張出しの踊屋臺が掛り、簾が四枚捲上つて、太夫と三絃とが麻裃。で、時雨に殺かこぼれたやうに薄白けて並んで居る。——もう日が暮れて間があつた。

茶色の紋着、薄汚れはしたが白襟で。……一方色代の

の紋着。骨組の太い、大面なのか、ぬけ上つた額を總髪にしたから、不氣味なほど顏が大きい。髮に仇づやの見えるのは染めたらう、としさへ六十に近さうである。

「瑠璃たね——あゝ、三十三間堂……と書いてある。」

書いてある。然矣、脣はもく／＼開く、が、聲は動く、が、腰も曲も判然とは聞こえない。殊も、づつと後に、從兄妹同士が立つた、しかし百羅寺の門一構之往來から細引で劃つたのだから、然したる距離ではないのである。

「……此方の比羅を御覧なさいよ、そんな事より。」

「あゝ、法樂か。——大きく書いたな。しかし、大道の芸人は大抵法樂と極つて居る。それにしては入りが薄いんだね。——平太郎の化へ……それ、大きな鼠か、鼠か。」

「あれ可厭。」

へて並つて居るが、[illegible]けたものゝ、[illegible]いてないのは[illegible]せの場所は、驛役の小松原に似て、下草に花のほしい鯖の種も色には出ぬ。

陽氣はづれに寂いのが一つの原因であつたらう。紅白の段々幕、旗、高張、店飾に景氣をつけて、場末に近い處だが、此の二三日、町内の特別賣出し——最も一般に不景氣は不景氣だ。しかし、投賣の露店、口上づきの藥種などは緣日なみに人影を黑く吸つて、錢人を吐かせて居るのに。——不斷何の催のない晝間でも、此の寺には參詣が群集するが、火の用心が嚴格で、規矩として、昔より暮六つからは門を堅く鎖す。……大門の扉に、犇々と打つた乳の數も、黑い蝙蝠が倒に睨む。

剩へ、直きに町の突當りを、大川が流れるのであるから、水の瀨が床の蠟燭に冷く通つて、柳は沈む、灯は暗い。

お柳は聲も絶々である。

「——氣の毒だなあ。……一つ拍手をしやうかね。」

「およしなさい、こんな陰氣な處でさ、うつかり手なんか叩かうものなら、屋根の上から返事をしますよ。」

「あゝ、空はやみだ。——今にも降りさう……より、柳が落ちて來さうだね。しかし、うまいのかも知れないよ。あの、太夫は——」

「[illegible]、そんな[illegible]よか、[illegible]いと[illegible]ませんか、——前刻から。」

竹本之輔

「……鶴澤松風——やあ、これは不思議だ。面白い。」

「ね、兄さん……ですからさ、たまには一所に歩行くのが可ござんすよ。」

三の二

相當の年紀だらうに、巾着から出る干菓子のやうな、安甘いことを言つて居るのを、驚かすのではない。——榮螺堂の上人が恰も爆彈が宙を飛んだやうな騷ぎをする、——三味線は、と見ると、喜吉の方は、杖をスポンとついたばかり、これはまだ可い。お律は、と見ると、あらう事か、澄まして懷手をして居るではないか。

第一、大川が、此處はまるで違う。道ならば其間、約二十町。城下の西北を、ともに貫き流れて、前のは熊川、これは卯川。——二つとも、(の)を中につけても呼ぶ、熊の川、卯の川と——淵黑き夜の色、淺瀨の月影を擬へて言ふのではない。白百合と露草と、薊の花と、撫子と、其のいづれを水の裝、流の姿に譬うるかは、名を聞いて知れるであらう。

（七）

從つて、午後三時頃、榮螺堂を出て、こゝに來るまで、邪等には自然途中がある。唄も淨瑠璃もないから遠慮をしたが、大切な三味線を忘れてはならない。和尚のためにも、注意までに言ふべき必要があらうと思ふ。

——（飛劍幻なり）——

——榮螺堂を出た二人は、吉道りを眞直にせず、隣地釣鐘堂の横に小路を籔林——此のあたりは筍の名物で——籔續き、田と畑。やがて崖の端から急な坂を下りて、熊川の岸へ立つと、流橋と云ふ欄干のないのがある。一昨年の洪水に、前口半ばから裂け落ちた、中流の瀬の早い處から鎖編みに繋橋が架つたが、眞青な瀬が巖を打つて飛沫を上げつゝ橋が高い。お律が前へ立つて其處を渡りかゝる時、忽然として……ではあるまいが、急流に目を取られて氣がつかなかつた。男が二人、あとの岸へ、渉いたと思ふと、どゞと勢よく橋板を踏んで、近づく。其の響きに、假橋がゆら〳〵動く。默つてお律が、向ふむきのまゝヌツと下を出す、

はづんで留る時、流網を頤んで持つた向……んで、猿摑みに欄杆をする〳〵と下りてゆく。旅を投げたのも身輕にお……いた。下りた處は直ぐに急流の早い瀬で、胸まで、ざんぶと浸るが早いか、網を捌いて、左右に分けて、二人兩方へ引きながら、淺瀬の方へ、水柱を上げて、ばちや〳〵と横に走る。絞つて落ちる流の雫は白く透通る鮭を顯した。「天晴れ、勇士だ。——最も水は些とぬるんだらうが。」「寒の中より冷いんですとさ。山奧の雪が溶けて來ますつて。其だから、今時分、また鮭がとれるんです。」「鮭、成程、あの勢では鯇や鯎ぢや對手に取つて不足だらうね。……あゝ、光つて飛んだ、岸へた、顯へた、壯快な。——落見に成つたせゐか、それ、胸へ引掴んだ鮭が人間の背ほどに見える。礫へ投げたぞ、見事だなあ。」熊川も上流で、場末の小家の裏川岸だから、殆ど人通りのない處、此の繋橋の向ふ斜めに——右前の塔だと其の尖端が纏はれやう——竹と林に包まれた榮螺堂の裳あたりから、早く人のとる魚を狙ふか、一二三羽鳥が飛んで來るのも、二人は佇んで見たのであるが……

さん、[illegible]千石？」「二千石さ。」「御覧な[illegible]たつて、[illegible]
萬石さんと言つたんですのさ。——感心に、[illegible]
を掛けないで、御繁榮へお進物に、お律と思ひついたのは嬉しいけれど、鮭はおよしなさいな。」と莞爾して輕く頭を掉る。「失禮かね。[illegible]くつて。」「可厭だ。いくら、お人品だつて、お美しいたつて、人間ですよ、猫が鼬いもないけれどさ。——あれ、鮭を取るのがうまいだけ、人間離れをして、鵜か、獺か、二つのやうに見えるでせう。其の鮭を、惚れた婦。」「露骨だなあ、言ふ事が、女の癖に。」「何です男の癖に。——あの人が容色望みで、十萬石へお嫁に貰はれると、夜夜中、べそをかきながら、卯の川邊をうろ〱して、死損つたのは、一寸誰？……おまけに十六七でさ、いけすかない、ませの色氣つたらありやしない。」「これは手酷い、御免御免。」と席さがりに中折帽を俯向けて、「しかし、それも昔の事……」今はたゞ故郷に、名木の梅櫻か。それも、住佗びた隱れ家と言へば、町の名の卯の花を夜見るやうな面影のみ。「其處へ鮭や鱒を持つて行けば、まるで獺が獻上をするんだわ、をかしいと言ふのは其の事です。海のものになさい、何てつても、鯛が結構、いきも姿も立派なのを、私が見立つてあげませう。——近づきの魚問屋がありますから。」——其處で、町々を二十餘町、山の手から下町へ、まるで趣の異つた、卯の川のほとりへ來た。——

[illegible]
其の問屋の隣りである。

處で、人を…特に婦人の住居を、樣子で見ても打絶えた中を訪れるのに、夜に成つたのは些と可訝しい。が、それには、廻りあはせが一寸あつた。

「今日は―ずべさん。」といきなりお律が聲を掛ける。長土間の[illegible]戶、爐の大茶釜に控へた、一目見ても禿頭の問屋の親仁を、ずべと言ふ。…津兵衞ではよもあるまい。すべりと禿げたか、つるりと辷るか、掛構ひのない事務多しい、と從兄が一驚を吃したほど無遠慮な馴染らしい。おまけに、あとでお律の聞いて話したのでは、ぺろ兀に、むらがあるから、すべりに渾をつけたのだと…呆れたものだ。…かッしりした年配者。家業柄目はしが利いて、「おゝ、東京からお越しでがすな。…はあ、御新造さん御一家の。…お歌の先生、承つて存じて居ります。」と世辭とは見せず、さて質實に言ふのを聞くと、いま東京の劇壇に、劇作家の某氏は此の問屋の婿どのである。即ち、某氏が以前此の土地の高等學校に學んだ折の問屋の娘との情事で。其の人たちから、豫て樣子を聞いたと云ふ。「婿たちにも久しく逢ひません。東京からお

いでは可懐い。是非一献、いや、お用ゐの事は、それも聞いて存じて居ります。何、手間も雑作も要る事ぢやあがあせんや。仕出しの真似をしますから、料理人が控へて居ります。此奴が滅法氣焔家でがしてな。およそ洲と云ッば、人間が泳ぎながら、刎ねる魚にくらひつく位でなけりや不可え、なぞと、ははは、お笑ひぐさに、おためし下さい。ほんのまあ、摘み料理で。御道中の建場茶屋、お腰掛け同然だが、さあ、お上んなすつて。—御新造さん…相かわらずだね、あなたが然うやつて、斜ッかひに框へ腰を掛けて、片膝もたせ加減に、褄をお投げなすつた處は、まるで、これ、二番目狂言のゆすり場だね。」「失禮だよ、ずべ親仁。」「いんや、仇つぽくて難有え。また今日は、相棒がよくておいでなさるから、よけいに引立つ。いよ、御新人と言ひたいくらゐで、はッはッはッ。しかし、旦那、いや先生。お育柄に似合はねえ、島田の時分から附つたものでがあしてな。—あゝ、其の肝心なお進物、鱸はお誂と云ふ處が奥の職傍の三和土に反つてます。御自分に手鍵…よりか棹で引掛けて御覧なすつて、承合刎ねます。頭は兀げて

事、獺が帳消したわっ。」「大きに—お使者たと格合が…様が魚をぶらさげてお出掛けと成つて、先方が御婦人では、成程、獺…じみますぜ。大川もまた此の邊は獺の本場でな。」と此奴も氣が早い。しかし、獺吉に取つても、此の贈りものが、受容れらろゝか如何か、模様によつて、今は獺仕とは聞くものゝ、他家の美しい夫人である。期せずして、様子が知れよう。便宜らしくも考えた。「お相先は—」卯木町、名川様、はてた細い處でがすから、お名前は？」獺吉が言徒むと、お得が爽かに云つた。「お須賀さん。」——あゝ、此の目顔の廣い問屋も忘れた。名川は實家の姓に返つたのだ。が、其の十萬石と云ふ、館に嫁して、十萬家の城下第一の貴女であつたとのを。—獺吉は褄が冷たかつた。

倚ほ他所事ならず佗しかつたは、二つ三つ猪口を重ねた時で。—

—はじめから、ぞろ〳〵、ぞろ〳〵、問屋の表に、それ〴〵着飾つた人通り。腰に瓢箪をつけ六閘箱の翁も見える。祭禮、遊山の季節でもな

獻貢か。——杉戸の畫の宗達の虎だらう。空屋敷の大廂に、眞晝間誤の光つたのは、と云ふくらゐ。……天井板一枚でも、先づ土地の名跡を、むざ〳〵切崩すのは惜いものと、話合つたものでがす。——處が、つひ近日、一手で立派な買手が着きました。神戸の大商人で腹が廣い。……引移る間、縦覽勝手たるべしと云ふ觸出しで、こゝ四五日あゝやつて人が出ます。おゝ、おゝ、五人づれで、重詰吸筒持參なのが通りますぜ。此だから、御殿は近くでも、辨當の出前も出ねえ——あゝ、奴、名川……」お律が再び「お須賀さん、」「間違えめえぜ。」成程、貴女は忘れられた、爾吉は再び襟が冷たかつた。

　まことに馳走惑で、少し醉も廻つたが、些と手間が取れて小僧の自轉車がパッタリと留まつた時は、一時に酒が覺めたのは言ふまでもない。「分つたの。」「へい、……御新造さん、名川ッて二階借なんですね。」「何うでも可い。」と親方は苦笑ひ。「小路が畝込んで居て、とても知れないんです、へい、今日は、今日はッても、なか〳〵出て來なさらないんで。……そのうち、裏から女房さんが來ましたから、名川さん——と言ひますとね。取着きの梯子段の下から、天井を向いて——お二階さん、——お二階さんッて……呼ぶんです。だから僕、」「私と言へ、奴、また遣つて居やあがる。」「へへへ、あの、其の何です、二階から下りて來るんだらうと思つてると、臺所から、淺黄の紐の襷がけで、出なすつて、白い襷さん姉の手拭を取つて——誰方？と手をついたんです。をかしいや、角屋なんか出入をしないんですね。」「大きにお世話だ。」「綺麗な姐さんですね、手なんか雪で拵えたやうだ、色の白いッたら、町の名より餘程白いや。お娘さんなんですかね、そりや上品だけれども、安女ですね、前掛がすり切れて……」お律が一寸目配せをしながら、「お返事は？」「えゝ、——相澤さん、お客様が後程參ります。——」爾吉は冷汗を流した。「あちらでは、宜しう……」默はず、きちんとして手を膝に置いた。「骨のないとこ。」其の口へ、お律がむしり肴の箸を運びかひ、次手に膝の下へ掌を「二廻、廻。」親方は天窓をすべりと、「困つたものでがあすてな。」「……お待ち申します、とおつしやつたらう。」とお律が言ふと、きよとんとして居た奴が、急に心着いて、「へへへ、御新造さんたら、何でも知つてら。」問屋がとつかりと膝をくずした。「さあ、消りは知れました、御緩り。」「親方、串戯を言つちやあ不可い。」爾吉は、冷い衣紋にうつむいた。直ぐ立つ、とは尚ほ言出しにくい。……ずべ親仁の倅の嫁、と云ふのも給仕について、膳を濟ます前に燈が入つた。恁くして夜の辻淨瑠璃であつた。

　——和尚さん……此の時には、もう三味線は二人の手にはありませんでした。——

三の三

で、途中もう一つ、こんな事があつた。お律の袋物家業は、遊廓に緣があつて、三味線屋にも糸が續く。其の知つた顏に無理を聞かせようと、あの熊川をやがて町々を通つて來ると、許可は受けたらうが店舖の並んだ道の幅一杯に、けば〳〵しい青塗の自動車が一臺、帆を張つたやうに着いて居る。金色燦爛たる陶器店の前の處、瀨板を渡れば摺違ひに拔けられるが、急ぎもしないから、立停つて、ふと袴地が目に着いた。三軒隣り同じ側の吳服屋の店飾を覗いて居ると、間もなく、縮らかしの大廂、大天井、槍ケ嶽とも呼べないから、アルプス岱とか稱うるのに、額を濃く覗かせた、厚化粧で、ぼつちやり丸顏、年紀は三十四五を十ばかり若づくりなのが、毛留をぎら〳〵と指輪のダイヤを光らせて、稻妻の走らぬばかり、雲地紋蝦紫の金沙のコートで、フエルト草履の恐しく厚い夫人が、出尻で肥つた、六つばかりの男の兒の手を曳いて、陶器店の軒を出る、とバタンと扉が開いて運轉手が一揖す

覺しかりける次第だなあ。」「其の癖、夢を見たやうでし

「え〻。」「氣がつかないんだね、其の樣子ぢやあ。」「何が。」「串戲ぢやあないわ。……振分髮の何とやらぢやありませんか、幼い時の許婚」「許婚？」「じれつたい、越前屋——越野のお牧さんぢやありませんか。——おや、失禮だつけね、牧子夫人。」「何だ、お牧だ、へい。」「追掛けたら、どう？」「馬鹿な事を。あの、たしか四人目かの一番上の姉の亭主が職人で、內へ出入りをした時分、然うさなあ、雛祭で、一度小さな蒔繪のお膳で並んだ事があつたつけ。職人徒で掛けかまひかないから、何とか言つて冷かしたのを覺えて居る。……早いもので、まだ小學校を出たぐらゐな時だらう。其の姉がなく成ると、亭主の「たしか小八。」「然うですよ。越前屋小八、したゝかものだからね、木ッ兒に の義理の妹さ。あの、お牧を、家業道具の竹箆で、新粉のやうに捏ちて了つた。」「そんな事をするからだわ、三十も違う若い女房の、白くてあぶらぎつたのを、じろり〳〵、——可哀相に中風症に成つたん

[illegible]かねませんぜ。[illegible]……はしたいけれど、[illegible]にお牧かなあ。」「[illegible]ひなしよ。」「[illegible]いたたお[illegible]りやうの[illegible]しいのに」「そのね、四五年前に東京へ出て來て、私の二階を訪ねた時は、技野牧子と云ふ小形の名刺で、誰だか急に見當がつかなかつた。ひどく變れてね、亭主が長々の煩ひで……端から言ふ事も弱つて居た。…ひつゝめた束髪で、米琉の絣の袖をしよんぼりと合はせてさ。何でも長男が藏前――其の時分は藏前だつけ、高等工業の陶器部へ入つた、とかで、其の後見をしながら、御當人は傳手があつて、裁縫ものゝ註文取に方々を廻つて居る……と云つてね。山の手の、安い鮨を御馳走した事があつたつけ。――お言葉の十萬石の奥方のね、實家へも、其の御殿へも、越野小八、お主同樣に、いつもお出入で居た事を知つてるから、心臓はドキ〳〵したけれど、其の頃の樣子を聞いてね、お家沒落の殿樣は、長崎とかで暮して居る。落人の奥方は、實家……も兩親がなくなつて、家もおとろへた。其の兄の許へ引取られなすつた。有爲轉變の世の中ですわね、なんか言つて、米琉の袖が濕つぽかつたよ。何しろ評判の方だから、いまお見上げ申しても、それは〳〵お美しいと……」「御馳走樣。」「山の手の鮨ですよ。」「圖々しい。」と、我身でも思ひながら、年とゝもに度胸が据つて、はじめて年賀狀を出すと、ま[illegible]分つたんですよ。引越しの時、[illegible]と一所に。――お[illegible]代[illegible]さ……たよし其の以前に[illegible]心も兼ねて……半分を二かけ、「まあ、あつかましい。」「いや、十萬石へだやあない。技野牧子さん――家内に散々ひやかされながら、實質で、おとなしづくりだから、其の柄を見立てゝ、水引も大袈裟だし、出さきの手土産のつもりでね。神田佐久間何某方、處番地はすぐ忘れる質だから、花の名刺を袂へ入れて出掛けたがね、……つら〳〵思へば、――唯今の大發展緋縮緬の蹴出しの兆は、名刺の表に顯はれたんだね。××デパートメント裁縫部外交員さ。」「逢ひましたか。」「いや、少々は昔話もと、嫌味たらしい、が、故と、夜分に出向いたものです。……知れ憎い處でね、あつちこつち聞合はせたが、其の時は妙な氣がした。變に色氣でもありさうな。突當つて、あとへ戻つて、もう一つ曲る、と云つた路次ではあつたが、小ぎれいな二階建さ。――處が留守です。……奥に病人でもあるらしい藥の香がして、屑婆さんと云つた風のが取次いだつけ。妙に氣抜けがして輕い小包を渡すやうに、ポンと置いて、さつさと歸つた、其切なんだがね。」お律が歩行きながら向直つて、「兄さん、兄さん。それ、それですよ。和洋とも腕利で、年をとつてもハイカラな職人でね、大きなデパートメントとゝかの裁縫部へ勤

めたのは。——其の病人は、女房だつたかも知れません。お牧さんが外交に顧まれて、其家に使はれて働いて居るうちに、其の女房がなくなると、ひとりでに寢起の世話をするうちさ、親方……と云つても裁縫委員と出來たでせう。」「成程、出來もしたらうが、可哀相に、小八爺さんは活きて居ましよう、怪しからないね。」と喟然とすると、お律は澄まして、「まあ、お聞きなさい。——運が向いたと云ふのはね、……窮通をして、運が向いたもをかしいけれど、小八爺さんものみこんで、」「つゝもたせか。」と往來をかねて小さな鋪。「あれ、また其の前があるんですよ。其の裁縫師が、仙臺の支店の部長、まあ、元じめに榮轉をしたんだわね。……大屋臺を構へて、内には職人の四五十人、朝、夕、夜なべまで切つて廻す、おかみさんぢや勿體ない大奥様に成つた處で、中へ人も入つたさうだし、……そんな事はてきはきと、あゝ云ふおとなしらしい、ぽつとりものと云ふのが却つて然うなの。牧子夫人自分でも、此の故郷へ歸つて來て、爺さんに話をつけると、鳴らした世間

かしに來たやうね。」「中學以上の兒を持つて、實に羨しい、善惡邪正は別として四邊を睥睨して居るね。何しろ餘り上等でない唄よみなんぞは故郷へ錦でありません。」

「何だい、あんなものを、……一杯お飲みなさいよ、弱虫。」と一つ背中を敲いた、午後の町中である。——時代は移つた。一昔以前だと、こゝらの土地で此の躰は、志士に石子詰にされたに違ひない。

——もう一度、辻淨瑠璃の場面へ移らう——

四

三十三間堂も、はじめから女夫坂の方へ近かつたらしい——見て居るうちに、白髮は頸を伸ばし、顏を長くし、やゝ色まで蒼くした。總髮は頬を膨らし、肩を張り、赤くなつて、双方裃に震動を加れた。が、床のもの寂しさは、あふれた十夜寺の帳附である。……さても今

こゝに、何とかして、

[illegible]ところ、
ろ、魁く思ふ云ふ時は、吹通しの夜風にも忍に耐へないと、白髪は、ひ
よろ〱と荒い息を吸込むし、鶏冠の解は向の方を舐めた。
時に、白髪は麻裃の肱を沈め、一段低く成つて袖も差々と白扇を
抜いて、パッと煽ぐ。一方は、ゲワッと可恐しい口を開けて、燭臺に
伸掛つた。蠟燭は同時に消えた。
大得意なのは踊る態だ。
薄くぼつと成つた對の麻裃は、其のまゝ横膝行に膝行つて退る
と—床を張出した後に二階の横窓があつて、其處へ吸はれた。吸はれ
て入るや否や、パッタリと障子が閉つた。
四五人、拍手したのがある。が、夜空に、むら〱と古綿が亂れて
飛んだ。
「寂しいなあ。」
「何うしたんです。酔も何も醒めちまつて、……妙に白ッちやけた色
をして。」
「いや、歌なんぞも、人に對してね、あんなものだ、と思ふとね。」
「贅澤おつしやい。歌なんか。…第一私にだつて分りやしない。分り
やしない私が、何う……兄さんに對して。」
と、ふと聲がしめやかである。

「ほゝゝ、又お姫様なんて仰りますのう……[illegible]に遊い
に行く世話なんかするもんですか。……最もこれから先きは生まれたつ
て一所には行つて辿りやしない。……可恐い處よ。川縁で、目暗で、
陰氣でさ、人通りなんかありやしません。……そんなに滅入つて了て、
……貴方……でお行きますか。—出世したら何う。」
「いや、前刻の事もあるんだから。……最もこんなに夜にも成つた
し、様子を見て、一旦其なり歸るかも知れないけれども。」
「ぢやあ直き其處が川縁ですから——對岸を向うへ渡るんです。卯木
へ渡るのだから雪とでもすれば可いのに、尚ほ寒い。—知つてますか
ね、川下の方へですよ。……あら、白玉を賣つて居る。」
「夏のもんだと思つたが……」
「それは都の白玉でせう。……此處のは、餡子を入れて燒くんだも
の。—何だい、小兒の時、ほしがつて指を啣へて見て居た癖に。……
今ぢやあ歌なんかよむ、と思つて。」
「恐縮、恐縮。」
「露と答へて何とかでしよう。其のくらゐな事は知つて居る。小學校
で藩のお姫様と隣の椅子に居ましたからね。それ、窪地ですよ、岸が
低い、足許へ浪がかゝるやうでせう。どツと鳴つて—こゝは卯川中で

も瀬が早い。堰があつて一落しです。昨日だか、こゝで鮎が十幾つと
れたんですつて。」

「いよ〳〵瀬だ。あゝ、向うに、ぼツとして。」

あとさき消えて、中が浮いたやうに橋が見える。

「瀬が橋をたよりにするものですか。でもね、夜道はお氣をつけなさいまし。—鬼にくはれちや不可ませんよ。」

「串戲ぢやない。が、此處を行つて可いのかね……何だか他家の庭のやうだね。」

「四五軒、此處の家はね、岸が低くつて、すぐ洲があるもんだから、門口から、洲の間へ道を通して、垣を結つて、……洒落こるわね、庭のやうにしてあります。御覧なさい。藤があつたり、……山吹はまだか知ら……緋木爪は盛りでしやう。そら、ぼつ〳〵薄黒く見えるのが其らしい。一寸した畠を造つたり、藤豆なんか、澤山にとれますとさ、夏向は茄子や胡瓜。ほゝほ、河童になつた。」

カタ〳〵カタ、故と駒下駄を鳴らして見せて、ぴたりと留めた。寂然とする。

「心配だわね。」

男は五六步引返す。

「……お律さんこそ、大丈夫かい。すぐ家へ歸るでせうね。」

「家へなんか、……私は、お母さんに逢ひたく成つた。」

「あゝ、そんな事を。」

お律の母は、其の稚い時、彼の女を棄てゝ家出して、いまだ行方が知れないのである。

「何なら、私の宿へ行つておいでなさい、……直ぐ歸る……」

「また……明日！」

カタ〳〵カタ、足を切つたやうにすつと分れた。夜の底を一つ拔ると、町一條、夜市の街燈が賑やかである。

「魔ものゝやうだな。」

川上の方に空一處を蔽うて、一個眞黒に、椎の大木の茂つたのが、水あかりに森然として仰がれる。十萬石のいま空邸が其である。柵を離れて、下伏の、松、柳の、川筋に薄紅いのは、彼處に遊廓の近い燈の影で、目貫の町へ大橋が架つて居る。其處と——蜜橋を渡つて、破れた垣、崩れた塀を幾廻りして藤吉が立つた耳に、遠く其の邊から、太鼓、太鼓、三味線の囃子がきれ〴〵に、雨催の空から響いて來た。（—演藝場に遊廓連の催があると聞いた。）——此處までの距離は、讀者が、榮螺堂から、熊川を過ぐる騎馬の跫音を聞かれたのと略同じである。

コンコンチキチ、コンチキチ。……就中冴えるのは、打鉦の調子であつた。

「まるで狸囃子だ。」

コンコンチキチ、コンチキチ。……

「何がチャンチキ、チンチキだい。」

「勝手にしろ。」

魔所の中に、彩色で踊つて居よう。舞つて居よう。前後に就て會話はないが、蜜橋を渡つて入る町から、餘りに荒廢した小路を見た。暗中に閉いた幻の花畑より、石垣に縋つた目の前の白い野茨は何ほど優い。町の名の卯つぎの花は、まだ面影にも立たないで、道芝は小溝に沈み、窪地の水溜に黴の臭がして、裂けた板塀は卒都婆に似てゐる。

——聞け、世にある樂等。こゝに淪落の貴女を知らずや。——

茅葺まじりに石ころ屋根の小家飛々、……金のために問屋の小僧に聞いた、佗しい二階家は唯一軒、道の曲るに從つて、すぐに尋當てた。が、燈も洩れない入口の狹い戸の簀の戸と稱するのが、枯れた溝萩を束ねたやうで、心なく音づるゝのは、驚かすやうな、嘲けるやうな遠慮が出て、忍んで二三間あとへ戻つて、低い土塀の頽れた壁に、土を吸ひ面をつけて、せめて卯の花咲け、其の人の心慰むべきに、と囃子を呪つて、藤吉は何とも知らず、はら〴〵涙を流した。

カタカタカタ。

忍びやかな跫音がして、ひつたり留まつた。

「藤さん。」

時に、其のひと聲。

ほんのりと、薫がした。

「薊さんで居らつしやいますか。」

「あ。」

もの丶十尺とは隔たらない、すぐ其處か同じ土塀の曲角で、其の角を小楯に、半身で此方を透かした立姿が、半ば袖で蔽つた小提灯のあかりに映つた。袖にまた片袖を、打かさねるやうにして、片手に菖蒲が濡色の手拭は――湯上らしい。其の露もこぼれさうな黒髪の艶を翳して、恰も落殘つた塀瓦が庇崩しに組違つて、蜘蛛の巣は あらうとも、香狭間のやうに氣高く輝いた。同時に伏目のまゝふつくりと視た、鼻筋がすつと通り、唇は花の花片を含んだやうである。

思ひ掛けぬ出會に、腰を落して踞みはしないが、渠は目前の其の面影を、遠く、高く、霞を掛け、霧に包んで見た。――草が蓬に茂つて居る。間に、鷺の立ち、蹈の浮いた濠を隔てた、城の櫓の矢狭間の窓に。――或は、土筆を摘み、茅花を抜き、露虫を追ひ、鈴を探すに馴れた、大手前の草土手を、深く濠に近づいて

か、あれ／＼と憧憬れて、底知れぬ淵に陥らうとする時とし云へに雲松が鳴つて、矢叫びの音を立て、風に蔦が逆立つて、それが、きれいな大蛇に成つて、青い石垣を落して迫つた。

渠は憤然とした。

「薊さんで居らつしやいますね。」

五

「昨日は月野の摩耶夫人様――」

市より三里、同村の所在なり。

「それは好い事を遊ばしました。貴方の御誕生日ゆゑに……」

「私の誕生日と申しては、贅澤なやうでございますけれども。」

いや、たあいがない。私の誕生日――と云つたつて、何も贅澤な事はあるまいが、對話は此の程度で相應しからう。どんな歌をよむか知らないが、膝の前の點心が、餡子と黄粉と、……萩の餅で、甘好き、

から……[illegible]……に
も逢ひません、餘を見るやうな氣がしまして、――それに、[illegible]日た
ものですから、彼まだ暗いうちに、――[illegible]、此方へ參る汽車は、乘
換で、かはりの車が繼つけで居ました。……あの、渺々とした一輛
に、まだ乘客が一人もなくつて、しら〳〵あけの、ぼッとした、淺黄
のクッションの裡へ入りますのが、一歩づつ、天の川の隧穴へ、…段
段に嬰兒に成るやうな氣がしました。――途中、親不知と云ふ處は、
稱が嶮しくありませんから、荒海は背後にして、姫川の方ばかり見ま
したほどです。」

「それでは、すぐお參詣をなさいましたか。どちらへもお寄り遊ばさ
ないで。」

「いきなり月野の停車場まで乘越しました。」

「澤山お參詣がございませうね、御利益を下さいますし、それに、お
美しい女體でおいで遊ばしますから。」

「其を知つて居ませんのですよ。村の人たちが。摩耶夫人では何うも
尋ねにくゝつて、お姿を申して聞くと、漸と、「あゝ、お産の神様か」
で分りました。それから村わきの徑にかゝつて、白壁造りの一軒屋の
寺を、森の遠くに見て、畔道を傳ふのですが、振返る村の流の柳だの、
向うに霞んだ櫻だの、路傍の紫雲英、鼓草を見て、あゝ、母のお腹に

[illegible]……ですけれども、
[illegible]で居なさるやうに思はれます[illegible]……――しかし其の[illegible]
すか、私ですか、氣も恍惚して、桃の花の流れるのに乘つて行く氣か
しましたほどです。其の内陣の、小さなお廚子のやうな裡に、高い御
厨子がありました。可なり大きな寺ですが、[illegible]を分けました階に
も、花片の散つた廊下にも、取次も、案内も、香染の法衣を着た、骸
骨のやうな坊さんで。……しかし、扉を開きますまで、莊厳な讀經が
ありました。」

「そして、しみ〳〵お姿を。」

「女體でおいでなさいますから、然うまざ〳〵とは遠慮されます。そ
れに、野山の明方を見ますやうに、目は朗かでも澄込の奥は薄暗うご
ざいますから。――しかしすらりとした立像で、白い〳〵端麗なお顔が、
少しばかりお覗きになりますやうに見えました。氣高いうちに、お顔
は、不思議に婀娜に拜されました。…影も金色に、…提灯の灯…」

うつかり言つて、ハッとした。血を染めた歌人の顔色は煤けた提灯に
髣髴したらう。土塀、あの土塀の角の、圓髷にして瓜核顏の面影は、崩
瓦の菱垣も、丹碧を鏤彫した、其の香狭間の牡丹に映つたのであつた。

慌たやうに言直して、

「…蠟燭の……蠟燭です。」

「いゝ事を遊ばしたのね。」

と、もの優しく、言も解けて、

「伺つては居りますけれど、まだ私は存じません。…此の近間の蓮田村に、清蓮庵と申します庵室がございます、其處にも、摩耶夫人様が、お一方。」

「あゝ、それは、從姉から聞きました、―明日にも又お參詣をしたいと存じて居ります。」

「そのお姿は、私も、お見上げ申して居りますのでございますよ。お話を伺ひました樣子では、月野のお像より、小造りで居らつしやいませうか知ら。―婀娜にお見えなさいますッて…蕭さん、貴方、よく、そんなことを。」

歌人、提灯氏は狼狽した。

「えゝ、えゝ、繪なんぞで、其の……自然、友人に、說明をされたりします。」

「まあ、何うしたのでございませう。つひ、むかしの貴方のやうに[illegible]

「いつも其の時分の事ばかり、蕭さん―と申上げるのもお[illegible]ますね。……御覽なさいまし、自分だつて、こんな煙草をのんだりして。……貴方がお遊びにおいでの頃、此のお年で、煙草、まあ、おませな、」

提灯氏はまた悄げた。

「御免なさいましよ。然う存じながら、内證で匂が好きなので、兄も喫みますし、嫌ではないのでございます、でも、女だてらに、と思つてたしなんで居ましたけれども、一昨年の夏、大變に煩らひまして、久しい間寢て居まして、ね……」

「お胸？」

「いゝえ、水あたりでございます、引越したてに、此處であの洪水にあつたんでございますが、其の時はね、蕭さん、水が最う少しで、此の二階へ着く處でございました。」

想ひ遣らるゝ、其の窮苦、困惑を。此の纖婉、蒲柳の夫人は、知か、

い梅の其の傍にございます、今頃あたり、まへ晩方の一ばいまして[illegible]閑靜な時などは、帆へ影が映るやうに見えますの、嬉しうございます。桃や李だと、葉に成つて毛蟲が可恐うございますけれど、梅には居りません。實が落ちて沈みましても、それが藥だと申して、其の農家では自慢をします。」

胸も涼しく、芬と薫つた。……眞白な掌が、梅花の如く、一兩度、茶碗の底を撫でて、茶卓にのせたものである。

「それは〳〵、貴女が御自分に重い釣瓶を。」

蕭吉は水のやうに身に沁みた。夫人が十萬石の深閨秘帳に翠眉かれ、偶々の外出の芝居見物にも、前後に女中小間使が五人、と聞いた頃にも、あこがれて見た夢は不思議に、圓髷艶やかな、後向の、それも窶れて、釣瓶に縋つた、肩の若い姿であつた。

「そんな事、まあ、女の役でございますもの。……あの、こんなむさくるしい處で、と思ひましたが、お話の梅の枝に掛けて拜みたうございます。蕭さん、月野のお像は、お頂きになつて居らつしやいませうね。」

聞くとゝもに蕭吉は、何故か眉を寄せて、氣色ばんだ。

「えゝ、然も彩色のを頂きました。——思切つて……思切つて申しますが、貴女に似ておいでなさるんです。」

「まあ、勿體ないことを」

お夫人は、手を合はせて、頭を低く禮拜した。[illegible]に、茶碗の上に、佛像が一体、折敷に秋の餅が二個、一つにあつて、小さな紫の服紗包の上に、また同じ香包の上に据ゑたのは、青地金襴を裝つた、妙法蓮華經、普門品第二十五。

「御本尊とは申しますまい、繪です。まつたく貴女に似ておいでなさると、熟と視て居て、うつかり蔵まうとします時、「不可んぞ！」いきなり、しやがれ聲で喚くんです。これはと思ふと、持つて居た竹の杖を撞木のやうに振上げたんです、凄じい勢で。「惡いんですか。」「折れめが附くわい、無禮ぢやらう。」「何うして頂くものなんですか。」「うむ、心あるものはな、お掛地の表具を持つて來て、それに卷納めて去るんぢや。」はる〴〵旅を來たものを、と腹なぞ立つ方が間違ひで、此の嚴さで、夫人を守護する。……山國の田舍寺は、却つて、出家が御殊勝なと、難有く貴くも思はれまして。」

蕭吉は正した膝をしめつゝ云つた。

「それでは一先づ、と返しますと、像を引取つた時、ふと心着きましたのは、いつの間にか、坊さんが變つて居ます事なんです。其の經を誦み、廚を開き、古金襴の微な帳を卷きましたのは、頬も口もへし曲つて、片意地な、肝持らしい老僧で、其の黄色な法衣でしたつけ。今

吃のは、もう些と年紀若で、鼠の法衣で、色の黒い、そして胡麻鹽の毬栗頭で、陰氣で、險相で、矢張り痩せはふけたのが、——其處から乘出すやうにして叱りつけました。夫人の堂と本堂の間の、——眞暗な處へ、くるりと後向きに入りました。あ、盲目だ、と思ふ……目に殘りましたのは、何うも、今のが瞽者らしいんです……」

と半ば言消して、ちらりと見た。お須賀は、おくれ毛も曇りなく、瞽ひたる目にも映りさうな顏の色の明るさである。

「おめくらは氣が遁れませんから、一向に、大切に、お守りをしますのでございませう。でも、少し邪慳でございますこと、——あの、瞽さん。」

と、自分でも兩手に湯呑を取つて、

「おめくら、と言へば、脂貞さんでございますね。あなたの仲の惡るかつた。」

唯、うけ答へが咽喉に支へた。（脂丸貞治。）脂貞とも、貞の市とも密に云つたが、渠は、（さだち、）[illegible]

は、此の男を嚆矢とする。……驢を乘廻はした事さへある。瓢を打つ。黒羅紗で、其の山高帽子で……此の二個條は——しかも痩せがれたのも仔細ない。が、高々と騎した盲人の、其の形は沙漠に顯はれる幽靈のやうで、或時、市の要處の記念塔より高く顯はれたのを見て、不氣味さに煩つたものがあつた。何しろ盲人の手曳なしに騎馬で横行するのは、奇怪よりも危險である。忽ち其の筋から沙汰あつて禁じられた。

若くて、盲目で居て、書畫骨董の鑑定に巧者と、他も言へば、自からも名乘つて——實家はもと貴金屬商であつた名川の家に、半ば顧客として自由に出入した。——お須賀さんの結婚を覗かうとするものは、しばしば店頭の火鉢に、心はたかぶり、氣は驕つても、盲目の肩のしよんぼりと、膝の兀げた尼のやうに坐つたのを見た。いや、何うも長坐をする事——政どんと、捨小僧の將棊の助言までして、さて歸る時は、屹と一度奥へ入つて、土間を、必ず、お須賀さんに手を曳か

親であへたので、膝から腰へかけて斜違にして、ふん〳〵と吹いたあとを、ぺろりと舐る。此奴を、蹴からたまはつた大お椀で、内證で見て、『畜生！ 大方、[illegible]の手に、[illegible]』

しつかしい。」蔵吉は、浅間しがり、口惜しがつた。いや、羨しがり、嫉しがつたのであらうも知れない。

十萬石の分夫人たりし後も、執着に、執拗に——赤楝蛇の悶急ならず、黄頷蛇の鈍重ならず、只烏蛇の聰捷と、嫋娜を併せて、附絡つて居たのである

いまも、言はんとして口を閉ちたが、——摩耶夫人の像を拒んだ、——二度めの坊主は、形貌ともに、脂貞、其のまゝに見えたのであつた。

六

「あの方も。」

と、もの靜に、

「お氣の毒に亡くなりましてね。」

「脂……貞……が。」

渠は思はず、坐の横の梯子段の仄暗た穴を、深く見た。——堺もし女體の佛身に關せずば、と其時の竹の杖の憤も、今は却つて三味あなたの何室へ、[illegible]をひかれるやうで、[illegible]。

「此とも知りません、……それは何時。」

「一昨年の[illegible]……三月と今ごろでございました。」

「自分でも、半分ぐらゐ、醫師の心得もあつたんですのに。」

「それが何ほ不可なかつたんでございますよ。藥は、うちにありますし……毒を嚥んで、」

自殺た——自殺をした。ハッと戀に負けたやうな氣がして、……に得も言はれぬ寂しさを感じた。とゝもに、脂貞を侮り卑んだ己が、おちた。「偉い、」と言はうとした聲を吞みつゝ。

「また、何うしたと言ふんです。」

「夜半に使が參りましてね、——兄が駈けつけました時は、酷い吐血だつたさうでございます。——もう一日も缺かさずに、其の日其の日の新聞を持つて參つては、——内にもありますのに、それに兄が居りましても、私に讀ませる方が縁起がいゝと、然う申しては、細い數字の相場づけを、私に讀ませますのでございました。勝の上の相の木(諱、十萬石の取を言ふ)が強ものに出ますと、何でも我が手一つで買取つて、あの虎の書院に坐つて、白眼み摑んで見せる、と申しましてね。其の以前から大前でありました處を、五年、十年、無理な相場をしましたが——何の、私に讀ませますのが縁起な事がありませう。」

と慇懃に、香包みの紙入を撮んで、

「……言つても肯かないのでございますもの。取返しのつきません酷い損をして、そのためだつたさうでございます。でも、一生懸命で、爺さん、一度可恐い事がございましたよ。其の夏——兄も亡くなりますし、かれこれ、秋のはじめに此處に引込む事になりますと、少しばかりの荷が、あの、……まだ階下に殘つて居ります時、急な出水なんでございましよう。それ、十間、それ床、それ又と、下の道具を此の二階へ——其の、貴方の傍の欄干の處に居て、私は、押上げるものを受取つて居りますうち、「お内の屏風——お二階さん」と梯子の中段から——いま、其處に立てゝありますけれども。」

こゝは直ぐ梯子を上つた六疊で、並んで次の間かあるが、もの置に使つて入りも動けない。雜具、夜のものなどを藏したらしい。立入つた處、簞笥、長持などありさうに思はれぬ。四枚の襖だが、破損して、揃へて開閉の出來ぬのが見て取られて、其のがらくたかくしか、

「どんな方だか私には分りません。——此の間聞きました歌の御本でさへ、……太層お出來遊ばすつて、人の風説をお嬉しく存じますばかり、澄みませんか、私には。」

「やあ。」

提灯は完全にこゝで消えた。歌人を挟へたゝみ込みさうに、頭を胸へ下げたのである。

「如何に自分で自惚れても、貴女と、傍に見せるやうなのは、一首だつて出來はしません。」

上げた面は青いまで、冷い汗を流したらう。

「でも、御心勞なさいます事——お頭があちこち痛くなつて、」

一寸、言が途絶えたが、

「兄が大切がりましたものでございますから、落さぬやうに取らうとしますと、縦でなくつて、其の取込の紛れに、平たくして差上げましたのが、どう手を掛けても、づし〳〵と驚くほど重くつて、引上げられ

すと、何うでございませう、其が脂貞さんの、黒い、血だらけた顔で、手足がする〳〵と伸びました

飛退つて斃れさうに成りました、私は、其の裏窓の——雨はひどい隣でございましたけれども、何時屋根へ出て遁げなければ成らないかも知れませんから、明けたまゝにしてありました、其の座敷へ腰を掛けて柱へつかまつたのでございます。」

「それでお嫌ひなさいましたか。」

「はい、いゝえ、氣の所爲だと思ひますし、……それに知つた方は、そうした洪水や、暴風雨には、急にかはりがあるから、相場を聞きに耳を突出したに違ひない、相場の亡者は、場所へ行けば、ぞろ〳〵して居る、と笑つて下さいますし、—其の時の脂貞が、部屋へ入つたのでございますと、それでも居辛うございますけれど、屏風を揚げました拍子に、どぶりと下階へ落ちました。最も水が寄せまして、家主の方たちも、其切り二階へ上りましたのでございます。

でも、氣味が惡うございますから、脂貞の蜘蛛の這つて居りました、屏風の裏は、見ますのが可厭でございましてね、こゝに居ります時は、あゝやつて表を此方へ、向ふに用のあります時は裏を此方へ—其度に向を換へて建直しますのでございます。あの、短冊の方たちも、お爺さんや坊さんだと申しますから、何でございますか、似たやうな形に見えて、[illegible]に揃つて了ひますよ。」

「[illegible]つてお了ひなさい。」

と氣を[illegible]つて行つた。

「[illegible]に成るさうです。」

「でも、こんなで居て、其のお金子を人様にさしあげますのも行過ぎて居りますし、献貢ならば存じませぬ事、お歌なり發句なり、其の立派な事はまた別でございますけれど、短冊をお金子にして、牛欄一筋でも、そんな知らない坊さんたちや、お爺さんのお世話になるのは、可厭なんでございますもの。」

あはれ、天眞の貴夫人よ。

「まことに美い貴女には、發句より、歌より、氏神のお札の方が大切です。」

「あゝ、あゝ。」

おや、押入—いや押入ではない。長火鉢を前にお須賀は横斜めに居る卜形に、下へ、一を敷いた處に蕭然が。背後はすぐ下屋根の裏窓で。…其の正面の襖二枚は、裡が押入だ、とばかり思つた、其處から唐突に怯かされたが、のつけに女の欠だから、駄駁は胸を衝かない。然うでないと、脂貞の黒い魂が、蜘蛛になつて、青ざめた顔で出た、

時も時。
「あゝ、あゝ。」
續けさまに欠伸をして、
「幾時……今……お二階さん――」
「は、」
と云つたが、時計が掛つて居ない。お須賀が、しなやかに膝で立たうとするのを見て、藤吉が、袂へ手を突込んで、時間だけは確堅さうなのを、
「お間に合ひますか。」
睫毛を濃く、瓜核顔の伏目で、唯見て、
「九時五分ばかり――相澤の旦那さんがお見えに成つて居りますよ。」
「お客、誰方。」
憮然とした面色で、
「……お珍らしい人、當てゝ御覽なさいまし。」
と、輕くからかふやうに打微笑む。

目覺しい、裾間の蝦茶紫のコートが脱放しに掛つた……を匂はせて芬と出した。越前屋小八の前妻お牧が、胸も顯出で、殺みだれ、いや寢くづれ髮の耳元はむら兀したが、額から乳に濃い白粉。桃色の達手巻がづり下つて、むつちりとした腰のまはりに紅羽二重に薄綿を包んだ奴を、ぬくぬくと巻いて居て、
「おほゝ、御免なさいませ、こんな、うまい形をして、冷性なもんやからねえ。」
立出でるまでもない、すぐ敷居を膝で摺つて、べたりと進んで、膝で嬌態をした横坐りに褄が亂れた。片膝まる剝きに緋縮緬が疊へこぼれて、も一つ下を桃色のフランネルが筋の如く動いて、膚は汗ばんで、とろりとして居る。
讀人はこれには見惚れた――實は……作者も大好である。此姿態は我が好む處、讀者のためにも描寫を委細にと思ふのに、然うは行かない事が湧いた。毛糸のジヤケツで、一個むくむくと肥つた小兒が、目をこ

面に臨かなかつた。牧子夫人は懐紙を取つて、「何ですれ、坊や。」と客には構はないで、謙一の唇を拭いて遣る。言ふまでもなく謙と一所で。其を拭かせながら、仰向けに乗上つて、ふるんと顔を振つたが、忽ち、ニタ／＼として、「食へ！」お須賀の手づくりのお萩を黒い靴足袋で、ぐにやりと踏んだ。「食へツたら。食はんかいや。」ポンと足を挙げた「何するのや、ね、坊や。」と牧子の悉掛りもしない先に、蔵吉の膝を蹴上げた。[illegible]

紙、扇、髪、簪まで虫取草を引絡せて、キチ／＼と笑つて、[illegible]しやくる、髪を逆立つて反らした指の、白い蝶が、ちらちらと、[illegible]萎んで、うつすり顔に色の染まつた時であつた。

ピシヤン、謙一の横外頬、はづみをくつて、一と一つ跳つて、前のめりによろける處を、襟首を取つて、真俯向けに取つて伏せた。

——乃ち折角の桃色と白い處が閉却された所以である。

か、御縮緬は[illegible]れた。

「何するんです、何するんですか、何を。」

[illegible]

七

[illegible]

居ながら、蚤を取つて遣るほど抓る眞似もしないぢやあないか。母の慈悲は灸を据ゑる、佛の黒子もおなじだが、近頃、母性愛と變じてから、奮放しの溝漬茄子だ。頭を見ろ、酢ばく、甘たるくふやけて居やがる、肥つてるんぢやない、むくんでるんだ。――外行か訪問着で、ナプキンの掛き方や、ホークの扱を、琴曲の一曲の如く心得て、トンカツを食つたつて、小兒に牡丹餅を踏潰さして何うするんだ。可愛い子だらう、お前さんに取つては、好い兒だ、好い兒だらう、賢い兒だらう、偉い兒だらう、……が、人樣の難儀、はたの迷惑を考へたまへ。――如何に自分の兒が可愛いたつて、他人も可愛からうと思ふと間違つてら。……何、此方が間違ひだ。一人の兒ぢやない、ふう、歴乎とした男親が居ります……と、すりへらした、よい／＼の舵板をミシン靴に乘換へた亭主だな。仙臺鮪か、不漁の時は一寸々々お目に掛つてら、土手で買つて禮を言はすから何時でも連れて來るさ。ろくでもない歌なんぞ、……世間に何の益たゝず、御奉公の眞似も出來ないが、其奴の横ぞつぽを撲つたばかりは國家のおためだ。……貼、骸の、

な小兒は生みやしたい！

第一其の間違つた了見だから、隣主人も同樣な、此方のお内へ、呆れた、のめ／＼と潜り込んで、据膳の突出しで、脊から腹をくちくして、褌をとらないばかりに、炬燵へはだかつて、のう／＼と樂寢をするんだ。これ、水一杯でも、お須賀さんが、二町さきから手桶でお汲み遊はすんだ。覗いてつけりや盲目も目が開く。麻を濡らせば齒が白く成るものを、揚子せゝりで嗽をして、黄色い泡沫を噴いたらう。以前の榮耀を見返し面に、孔雀の尻尾を押立てるんなら、また憎體面の張合もあるんだ、が、性はしみつたれで、旅籠錢をかするんだ。――何を土産に持つて來た。紅白の水引は見當らないぜ。……食料はお前さんたちの仕來りは黒目の紙袋を紙捻で括拂つたか、唾を吐け。つて三升五合さ、それで三度くつて七日泊りと極つてら。」

牧子は半は泣しやべりに、

「お須賀さん、――何とかおつしやつて下さいねつ。」

壁を破、一六、

「澤山、まをとこをなさいませ、へん、ヲチすで離たれようと思つてから。」

と、麁で呼吸して、足をばたつかせる彌一を抱いて、椅子を一段つつ、どしんどしん、下階で様子を伺つたらしい。しばらくして、凄じい音で簀子格子のしまつた時まで、はじめよりして一言も、ものを言はず、見返りもせず、血も動かさず、色澄んで、端然として、しかし、やゝ内向いて、重き黒髪を支ふるやうに、ぴたりと支いた長煙管は、窈窕たる麗媛の金色の杖、雪女郎の水晶の撞木に似て、閃々として、光つて、威があつた。

八

襟を引合せ、きちんと手をついて、夫人は、雪白の頸脚を深く會釋した。

改つた挨拶に、愕然としたのは彌吉で、一膝あとに退つて中腰に成つた。いまの暴力に愛相を盡かして、退散せしめらるゝ、と思つたのである。

「ありがたうございました、彌さん、私は生れましてから此方、親兄弟は申すまでもありません、親類にも知合にも、使ひましたものゝ端々にも、自分で思つて、いま貴方が、あの兒になすつたり、おつしやつたりした事を、……私には成らないばかりではありません、[illegible]のとは思はなかつたのでございます。……お恥しう存じますが、また椎の木の家に歸ります時分、夫が、新地（遊廓を云ふ）に馴染みました女を、茶の湯に連れて参りまして、女房顔した挨拶の仕方が惡いと申して、其の女に、恁うやつて、お叩頭の仕直しを三度させられた事がございます。……其の時の思ひさへ、今夜で、胸が、晴れました。――もう瘋癲に、食べこぼしますよりか吹き散らす御飯だの、蹴返す碗皿の拭掃除ばかりでも、涙が出たのでございます。身を投げます處を助けられましたより、どんなに嬉しいか知れません。心も明るく、氣がはつきりといたしまして。……あゝこんな世もありますか、違つた世界を見ましたやうで。」

「其の世界へ入らつしやい、東京へお出でなさいませんか。」

此奴圖に乘ると思はるゝまで、口もはづみ、氣が能つて、

「小家一つ借りて差上げますほどの効性はありませんか、二階一室二室は何うにか成ります。水道の栓を捻つて、お好きな茶をめしあがつて、暖い處、涼い處、明い處で、……さうしてお氣に入つた新聞の續きものでもお讀みなさいますほどの事はおさせ申します。決して、御心配なく――申しては如何ですが、……間違つた了見は出しません――當は家内も存じて居ります。」

雪さん、ほんとうにおつしやいますか。」

「串戯に、こんな事を。」

「私も些とは裁縫が出來ます、御覧なさいまし、此の内職で、どうにか暮して居りました。」

香包の、唯それのみならず、熨斗、束熨斗、本水引掛、短冊包、瓶子、銚子の蝶花形、折形、包を内職に——土地の地紙屋から京の問屋へ取次ぐのだとの事。

「此地では、こんな處へ誰も預けては下さいません。裁縫は少しいたしますから、品が拜借さへ出來ますれば、もう少しは働けます。お茶をのんで新聞などと、そんな贅澤はいりません。田舎ものがお恥しい、薄暗い屋根裏でも、——」

「飛でもない事。」

「唯、あの、雪さん、」

と言葉も縺るのを、どんな事と意氣込めば、

「私、娘の時のやうに、紅い綺麗な針さしの針箱が欲しうございますの。——其處に坐つて裁縫が

「何を謝へます。何、貴女、貴女のため

から降つて來ます。——思切つて、明日にでもつ」

しばらく熟と瞳を伏せた。

又しばらくして、

「一寸。」

雪吉の袖をすれ〳〵に、背後へ、窓の方を廻りながら、

「いつもは一人で、何しますけれど、貴方と云ふたよりが出來て、甘へるやうでございますか、何でございますか、氣味が惡い。……一寸見て居て下さいましな。」

「あゝ、其處へ、」

件の屏風の蔭である。夫人が、する〳〵と入るのを、心得て、裏を取つて引返す端に、疊んだ掻巻に鴛鴦が一羽で寐た、枕切の羽色の艶。

ゾッと震へながら五六歩退つた、且つ脂臭の蜘蛛の形が、また粘々濕々と濡れて居さうだつたからである。

二三度、抽斗の音がすると、折疊んだ紙を一枚、香包、熨斗では

其處へ折目を開いたのは罫紙である。

「お分りに成りますか。」

屏をくれつて、半勝手に膝を斜めに、寄るのを覗く、頬が近く、白い襟がほんのりする。

證

これは寫しとるに及ばない。夫より、妻に離婚の承引を求めた證券で、當名は但し媒妁人――某である。

硯箱は傍にあつた。

「私がこゝへ名を書きますと、それで、夫婦が別れるのでございます。椎の木の人は、其の新地のと、いま長崎に居りますが――私は、はなから、承かつたのでございますけれど、まだ兩親も居りますし、其の後も、兄が承知をしませんので、此のまゝに成つて居りますから、まだ、縁は切れません。爺さん――どんな事がありませんでも、大切な貴方のお身體、藪口がないとも限りません。いまこゝへ名をかいて、きつぱりと別れます。離縁をされます。

爺さんと、恁うして二人で居て、名をかきますのは、此で二度めでございますね。――私が十七、貴方は十六。いまも同じこと、まあ、極りのわるい。……雪がしきりに降つて居て、店も眞白にちら／＼としますの中へ、私がお湯屋から歸りますと、貴方が店に居らつしやいます。店の人たちは入交つて、奥へ行つて、――二人ばかりに成りました。卓子傍で、貴方は新聞を讀んで居なさいます。政どんが算術の稽古をしかけた、折込みの石盤がありました。顔のほてりに冷たさも嬉さも忘れて、たゞ白い、たゞ白い、美しい、……傍の貴方に見せないやうに、袖でかくして、たゞ白い、美しい、……名が「雪」ならば嬉しいこと、と然う思ひながら、「すが」と私の名をかいて、何にも言ふことはありませんけれど、ふと、お手紙のつもりに成つて、爺さん……御免なさい……と書かうとして、字が書きにくゝつて手間を取ると、ふとお覗きなすつたから、急いで石盤を隠しました。覺えて居らつしやりはしますまいね。」

卯の花の咲く幻に、鐵瓶の湯氣も散りかゝる。

「いや、忘れません。」

「もう歸つたと思つた脂良が、首だけだして、其處を覗いたのでございましたわ。」

ハツと二人で顔を見た。濡れたやうに、艶々と後毛して、――すが――片頬の、毛筋の影も假名である。

「女が印形をつきますのは、厳いやうで可厭でございます。――貴方捺して下さいまし。ほかに印はありません、此で、此の脚で、」

と、白瑪瑙の簪を抜いて、硯箱の朱を渡した。脚を立てゝ、圓規

にすれば、と言ふ。色のつくばかりもたゞ事でない。指を切つて血を絞る、手も震へたさうである。が、此の禁厭の形は何うも説明の仕様がない。梵字に似て猶ほ原始的で、たとへば千鳥の趾であつた。

「あゝ、今では、もう晴れて、此の御本。」

普門品に手を置いた。「もう晴れて」……は解せぬと思へば、其の下の贖罪の服紗を開くと、一首の歌の本。讀人棚澤藤吉である。

「名だけも人妻で居ますうちは、目が曇つて分りません、待ちこがれました今夜からでも。」

藤吉は狼狽し姿勢し慚愧した。まつたく以て目が曇らう。露骨に、猛烈に、面識の人が歌つてある。城の天守の兩膝などは、まだしも靈のかゝつた方で。推して知るべし、著者のために、たゞ御推察を願つて置く。

「何うぞ、平に、平に、其は。」

不意に裏窓の四枚の障子が、音もなしに、眞中から兩方へすつと開いた。敷居際から下屋の板屋根にごろ／＼と驚の石の並んだのが、庭木の梢を繞い霧に、風が揺つて、一處磧を宙に敷いたる如く、室の燈に映ると思ふと、

「あれ。」

脆手に普門品を取ると悲しく、片膝の褄を投げ状に、お須賀は客を

……輝く、紛[illegible]、後に庇つて、半ば投げて、猶縋る。半ば恐怖に頰を顫はふと、折本は、風を吸ひつゝ、さら／＼と解けて開いて、御經の文字は楊柳の雨を、斷く葉にこぼれあへず、點々と美人の袖を鎧めたのである。

「お客に怪我のございませんやう——惡事も、災難も、すがゝ主人でございます、普門品第二十五、」

と云つた。

賊か、魔か。

男としては、卑怯である。我こそ、其の人を庇ふべきが、何を思慮する隙もなく、番腰に且つ突伏したのは、障子の開くとゝもに一巾の電光が、山を映して閃いたので、鶴破雷鳴よ、と摺屈しつゝ……ああ、いつかは、此のまゝ軟い膝に片頰を埋て、紅い絲のついた針で、蚊帳に繕つた松風の梢、と寸秒のうちに、そんな事を思ひ／＼待と視ると、怪奇と、吃驚を通越して、巾着の菓子が、折鶴と鬼に化けて驚はれたのであらうと思つた。室の敷居と隔り隔りはしないが、遙くか、遠くか、屋根の上に、朦朧として立つたのは、雪の雛形、二人である。

「御許され、其方。」

と、右に、錆びた聲が言つた。

「縦子より仕へらうとも、天眼より來らうとも。いづれは、貴女をお

「[illegible]し申さいでは。——其の儀お詫びを仕る。」

其は手を下げ、僧面の肥つたのは、扇子を膝に腰を折つた。

「儂は差置け、貴女に對し、害意、惡心は微塵もござらぬ、先づ以てお心易う。……お身近に參りたう存ずれども、權現おはします、御殿にも憚り多い。……控へて此にて御意を得まする、御免。」

二人が目を合はすやうに見えた。窓の敷居とすれ／＼に、袴腰を極めて坐を占めた。

「さて、至極內所にて、些く密談を仕ります儀、お聞きづらうおはさうなれども。」

一段聲を低めたが、はじめから、口がたゞ其處に動く。それだけで、聲は耳元に近く聞えたのである。

「……此の間に、此の間に。」

お須賀が炬燵のかくれ部屋を。

「いや客人のお耳にも入れ申したい。其のまゝ。聊かも御懸念な事ではない、さりながら。」

と背屈みに膝を据ゑた、色やゝ青く、面の嚴し。

「靜に、奧方、必ずお驚きなされまい、ではござれども。——」

「とう、とう、とう、とう、とう。」

と低く細く、肥つた方は息を吐いた。

太鼓に打つた丁とうたう、

「とう、とう、とう、常夜。正……九つ時を前後に、當町中は一大事、火ぢや、火事ぢや、大火、大火事ぢや、一面の火の海ぢや。」

「が、が、が、が、が、が、がくがくがく。」

と、また肥つたのが顎の外れるまで息を吐いた。

「鬼火でござる。魔緣、魔性のなす處、千年百年、修羅の炎、瞋恚の焰、虛空三界に燃えに燃ゆる、祭らざる惡靈、虐げられた怨靈、僞られ嘲けらるゝ、天狗、鬼。水なき亡者、飢ゑたる幽靈、悉く、惡執を八千坊、九面堂の大魔神、——われら魔緣の頭目に托せて、即ち暴威を働き申す。——山嶽焰を迸らせ、惡魔黑烟を吐き落すも、たとへば客人が、彼の幼きものに筝を擲うたと同一所爲ぢや。幼兒は其の懲めを知らなんだ。町も人も聊も又火の禍を知り申さぬ。知らぬばかりか、あれ／＼踊を踊るぞの、チキチン、コンコン、チキチン……と……何がチキチンコンコンコンぢや。」

「げげげげ、とう、とう、とう、とう。」

「知らずに行うたればとて、無體、暴慢、餘りに驕横なる時は、人間とても忍ばれまい。魔ぢや、惡鬼ぢや、妖しい神ぢや。が、魔界にも規矩があります、謹愼がある、恐がござる。彼處に、天高く、雲遠に、峰白き處にましきす、姬神……其の言靈の際なきまでも、幽明暗示

の御許容ならでは、こゝに年の數、月の數、日の數、時の數、相極まる、時節到來いたしたりとて、卒都婆一基灰にならず、炭俵も燒け申さぬ。

然る處に、驕り慢りもの〻人間一人あり、峰高き、其の神境を犯すさへあるに、姫神御寵愛の川蟬に向うて、禁斷の時と場處を憚らず、鐵砲をば打放す——雪間の白菫よりも妙なる御手の影おはすものを、何とて狙がつき申さう。なれども唯その響きによつて、鳥の胸の紅い羽、一枚、ひら〳〵と雲を縫つて下り、山腹の八千坊、大權神の青い掌に落ち申した。

此を熊川の水源の淸水に翳す。火のト、火の象でござつての、おお、影が鮮明に燃えました。さては姫神も御承認た。—水に消えぬ火は、人の力にも防がれぬ。秘事を漏らして、町を救はう、家を扶けうなどとは、夢にも思うてはあひなりませぬ、此の儀、命のため中入れます……」

「とう、とう、とう、とう。」

「時に——魔神の其の火のトは、瀧にも洗まず、巖にも裂けず、谷を渡り、町へ流れて、榮螺堂に影を映すと、三味線の蒔繪が一點紅の色に出た。」

爺吉は色を變へた。

「措急無用ぢや、元來、白い乳、白い腕の一體は、首を斬られた女人での、切口さへ眞赤なのぢや。」

爺吉は呼吸が詰つた。指を見た。べとりと血がついたやうである。

「二百年來の怨を籠めた、其の怨も火で燃えよう。あれに首のあるやうに、客人の目に見えたのは、せつかくの參詣、いまはしく、淺間しき形を見せて不快の思させまいため、娑婆氣ないづれかが、好意を以て、うしろか、横か、前か、羅漢が、づつと凭りかゝつて、其の頭を貸したのぢやがの。

こゝぢやよ、客人、好意もあれば惡意も存する。……魔緣の暴威を防ぐための羅漢と雖も、人は訪はず、世も忘れ果て、其のありなしさへ辨ぜぬ時は、餓うる、渴える。もとより一堂五百餘體、其の糧は人の信仰ぢや。其の飲むものは、世の心ぢや。然るに糧空しく、餘りに餓ゑ、水乾いて咽喉渴するに及んでは、魔緣忽ち其の空しき體を借り、心に宿る。何事もなりゆきぢや。火の軍のさきがけは、或は羅漢であらうかも存ぜぬよ。」

「かたかた、かた、かた、かたかた。」

「さてとよ、…奧方。貴女を騷がせ、驚かせ、われら罷出でましたは、餘の儀ではありませぬ。貴女、かつてのお住居、大椎の樹の、あの館でござるの。」

「はい。」

と、今は唇もうつくしく返事が出来た。

「一草、一樹、一石、一水に至るまで、景色あり、風情あり、趣も備はつて、由緒来歴ある殿造、家構も、今に於て数奇結構、十ウに七つは破損壊滅仕らぬ。手に取つて金目、銀目は、われら存ずるところではござらねども、値は軽くも五十萬兩などと申す。道理ぢやて。襖の引手、釘かくし一具にも、黄金白銀に名誉の彫刻の手を掛けて、紅、紫の總も色が褪せぬ。一くべ、ふすりと、其が一くべ、ふすりと焼ける、唯一夜に灰でござる。風向、火元、ともにようない。われら九萬堂に窺へば、おゝ、火焔の只眞中ぢやと、一口に告るでござる。其處をば、何とぞ、何とかいたして、と縋り申すと、うむ、美しく、優しく、神もおん慈みの、あの奥方。貴女にして、館に災作まうならば、毛を翳いて煙を分け、焔を攫んで投げ散らし、風を乗挫いで、一棟ありのまゝに助けうと、大魔神の内意——斯くの通り、兩個承る處でござる。」

「とう、とう、とう、とう。」

「次第に斯やうぞ、委細は遁つておやる。そのうちに時刻近づく。取るものも取りあへずお迎ひのため罷出ました。の、唯おんいでであれ、奥さま——お供お迎き申上げよう。それも門、格子とも申されぬ。あれには、おい君が容り、黒い髪が覗いて居ようも計られぬ。まつたく此の屋根が揺擦でござる。お立ちあれ、貴女、お立ちあれ。平に奥方。」

「不可ません、それは不可ません。」

「が、が、が、がかかかかッ。」

「何と御意ある。」

「……此のお客様、——此のお方と、確としたお約束申しました。つひ今しがたまでは、あの、名ばかりも紫の樹に縁があつたのでございますけれど。」

「いや、それは存じて居ります。」

面の皺に合點を吸込んで、

「其れほどの事を存ぜいで、斯やうな肝入が成りませうか。既に其の客人も、薄暗の通りがかり、面をもよく存じてござる。」

「失禮をいたしました、失禮でございますが。」

半ば夢中で、お須賀の袖の下から顔を出した。辛うじて男である。

夫人よりも、魔に近く確と坐した。

「あゝ、よく分りました。辻淨瑠璃に擬へて、今夜、其の火の、火災のおつげを、戒を、お與へになつたのでございませう。不思議に、お論も、糸の調べも、聞こえないと存じました。それは一體に、神は[illegible]告を下したまうても、濁世汚濁の人間の耳に入りませんで、此の[illegible]をどうすることも出來ないのが、[illegible]、いや、[illegible]、[illegible]、[illegible]の

勝らしうございます。唯今とても、傍に心の澄んだお須賀さんがおいでゝなければ、私如き耳には聞こえますまい。何事も存じませんで、辻では失禮を申上げました。」

老たるが又ニヤリとして、

「思過しぢや、荷負けでござるよ。は、は、は。あれは怪しいものではなうて、古俳優の義太夫狼藉と、三味線は、大阪角力の腰砕けで、一人土俵の偉がりでの、當人たちは人もなげな慢でござるよ。慢を慢とも思はぬ處が、不便や、正直と言へば正直で。それ餘りの、あの不人氣に、むか腹立つたと、悄れたのとで、振舞酒の二階座敷へも留まらず、しよぼりと、のさ〳〵と、中土間を息づきかた〴〵汗を入れにの、あれでも大汗ぢやて。ははは。裏口の川べりへ、——且つは面目も失うて、暗がりへ拔けた處、——客人さきに通られた、洲に花畑、干場など設けた彼處ぢやが。……

——何ぢやい、土百姓めらが、さきへ出た、八木節、安來節、ばかり騒ぎくさつて——

と、煙が鳴らすと、

い。おゝ了うた、此の構では——

——いや、自棄に却つて此の扮裝か面白いぞ、眼かた處を繕つて逃れ。蜻蛉かへりぢやと云ふたら、叱られはせんであろで——

變裝ではない向へ、それよ〳〵、椎の木の館の方へ、暗がりを、とぼり、とぼり。

——や、や、怪態な、蜻蛉かへりぢや云ふうちに、前へ立つたおぬしを後で見ると、却て、蜻蛉はれるやうに見えるぞ、措くまいか——

と向きをくるりかへるとの、角力の方が俳優を見て、

——おゝ、今度は、また此方が前へ立つた處を、後で見ると、幽靈が、しよぼ〳〵と、わいが送つて行くやうぢやい——

——あだ忌々しい、そちらを向かぬか——

——くそ縁起な、向直れ——

西を向いて、二人のそく〳〵、南を向いて、二人ほそ〳〵、の、五六間づつおなじ處を、行つたり來たり。……」

「かあく、がく、かく、かく、けげげげ、くわつ〳〵くわつ。」

大溜息、川音を颯と吸込む處に、――眼の蛇の鱗を稲光ほどに魚の鰓が飛上る。やや、鮭ぢや。やけ腹に、義太夫よりも此が金目ぢや、問屋は近いぞ。角觝を取るより、魚をとれ。先づ以て褌を。……やがて五つ紋着、へんぺらの尻端折で、手捕の了簡が素人ぢや。瀬を刎ねる鮭は、三つか十か、山鶏の尾のやうに、掛抜けには勝るに因つて、やがて双方とも素裸の、いや堪へられぬて、その笑はせる事にはの。古俳優は汚い畚ぢやが、角力はきれいさつぱりと緊めて居らぬ、あは、あは、おは、あは。」

「がッ、がッ、がッ、がッ。げ、げ、げ、げ、げ、げ。」

「其の躰で、洲畑の物干場の大竹棹を掴取つて、流の面を双方から、盲打に、ばしやん、ばしやん、引掻廻はし、薙ぎ立てる。今が、今も眞中ぢや。あは、あは、あは、あは、あは。」

改つて、もの靜に、

「此の不意の推參、いづれは怪しく醜い狀を、うつくしき貴女に見入り申す。……おなじく騒がせ申す分ならば、せめての儀式禮服と、彼等の解棄てを着服しました。」

「顔も似ておいでなさいます。」

「辻で一度目に映つたるが、おなじやうに、客人の目から、また奥方の心へ通るのでござらうの。」

「あなた様は、水の神様。」

「樹の神様。」

と精靈が頷いて言つた。

恥ぢたる色見え、

「何が、何が、何として、われら式が神でござらう。妖怪變化……魑魅も同然、隱すも詮ない。此の老の身は、椎の下闇に底暗く、藻を被いで生を續くる、河童、人とりがめの一類、たゞぢや、獺でござる。

――又これなるは、其の椎の根より池のあたり、館の庭に經立つた蝦蟇とのでござつての。」

「とう、とう、とう、とう。」

「奥方、おいで遊ばす頃には、小光と申す腰元が抱きまして、お目たまはつた事もあつたげに申す。」

「くろら、くろら、ころろろろ。」

「いづれ日蔭のものにはござれど、八千坊内に於ては、蝦蟇との、老獺、おの〳〵槍一條は立てさせます、伴も少々召連れをります。われら承る上はお身の上、決して疎略に計らひますまい。速に當の館へ、の。」

「そうして、唯私が、あの邸へ入りますと。」

「即ち館の御主、女君の座に入らせられる。これ其の御身に備つ

た、宿命の御果報ぢや。」

「まあ、彼處は……もう他人のものではございませんか。」

「されば、其處か、もの〻廻り合せ。たとへば、貴女がこれよりして夜の御殿へお入りに成る。目下は空邸同然なれど、鶴破、近火と言はゞ、持主の豪商駆つけ申さう。火花の光に、貴女のお姿、……それからは何となります、戀ひ、慕ひ、狂ひ、憧憬れ、やがて、草一叢、土一塊まで、貴女のお掌に納ります。」

「妾になるのでございますか。」

「いや、それとても御果報。」

「聞くのも可厭でございます。」

「はて、しばらく、一に見参い、物の……たとへぢや。分けて、申さば、辨財天の池の御堂。」

「彼處には、辨天様は、もうおいで遊ばしません。」

「さ、さ、それからがあの邸、没落の基でござつたの。今夜の魔焔に、あのあたり道陸神より、辨財天女、唯今の御在所へ、救の水の急飛脚飛びましたれども、牡丹瑠璃鳥の花園にて、天女は、ツンと横をお向きになつたと申す儀……

時、貴女が、一つ、ツンと横を向きなりと、何うなと遊はせ。大火焔の中と申し、人は天女と崇めませう。もとより、其の功徳によつて、焼残る御邸ぢや。自然とお化粧料に相成りませうぞ。」

「もう、私は澤山でございます。そんな事。」

「はあ、魔性のお勸め御合點ないか。いや、それもつて、其のお客とお約束の儀があるからぢや。更めて客人、——御意見はの。」

向直られて、坐を正した。

「ただ、お須賀さんのお心まかせ。

「御一所ならば何何でござる。」

「いゝえ、お客様が御承知でも、それはかりはなりません。いまはいかに他人とは申しても、貴女の夫の住居の家へ、此のお客様御一所は——私から申します、此の方も、嘘にも御承知はなさいません。」

「むゝ、それは、何ともお心ない。地の下の虫も焼けませうに。」

お須賀は、熟と思悩む状見えつゝ、乾として、

「お主がおいで遊ばすか、邸の黒髪、父の骨、戀しい人の血一滴、あの邸にあります事たら。——無情いと申しても——

琳、探幽、應擧。また大雅院の天井は、狩野守景と申す人の墨繪の龍がござるげなや。」

「はい、それはございます」

「虎よりも可恐い。……それぱかりは、我等隙覗きも仕らぬ。引かへて、欄間の鯉の巧さは、木彫りとは存じつゝ、恥入つた逸でござる、其以て、パッと灰ぢや。」

「自然お預り申しますなら、大切に守護いたします

皆、お立派でございませう。番人に成るのは可厭でございます。墨繪の龍のお守をするより、紅い針さしで仕事をします。」

「やあ、お志し。お須賀さん。」

「あゝ、些とお控へが願ひたい。これは、難澁。其處で抱合はれては困却を仕る。――さて如何に、蝦蟇どの。」

「とう、とう、とう、とう、とう、とう。」

二個横に更めて向直つた。

「あきらめ申さう。貴女仰せらるゝ處も一理ある。名畫、名器。立處に灰に成らば、皆それ〴〵身の上の不祥なのぢや、金毛の虎、白羽の鷹も、力あり命あらば、自分に火を潜つて飛ぶか、自然人の手に助かり申さう。牡丹、芥子一輪たりとも、いま奥方の心を引入れぬは、……言はゞ德が少いのぢや、其の德の備はらぬは、――鑑定は出來ぬ。が、贋物かも知れ申さぬよ――」

「げげ、げツ、げげツ、げツ」

「存分は申出た。志は濟まいた。然らば退りいきに任し申さう。はあ、これは、これは、夜陰と申し、お騒がせ、慮外でござつた。」

「お立ち――」

と屋根の行が、五つ六つ、むく〳〵と動いて呼んだ。

「もし……あの、あなたには失禮でございます、御家來の方たちに、心ばかりお供へものがいたしたう存じます。」

此の、夫人の言も終らず、ストストストと梯子段にもの音するや、鰐一枚、鯱の面ばかりが横啣えに尾を刎ねて、座の宙をスッと屋根へ消えると、同時に、窓から、トンと飛込んだのは、秋の餅の重箱の蓋である。

老獺は啞然として、

「やあ、御厚意を、疾く存じて、先はじつた意地汚が、えゝ、貴女が吃驚遊ばすわ、控へをれ、コナも小僧。

あゝ、幽冥と、人界は、近う見えても爲が遠い。又の御見も如何ござらう。……」

「とう、とう、とう、ころろろろ。」

「お健かに、さらば、おやすみ。」

と云ふ〳〵折目正しく白足袋の爪さき四つ揃つて、一足、屋根を四五尺あとじさりに退ると思ふと、すつと空へ縮んで、大屋根の上に聲がした。

「九萬堂か赤いな、風ぢや。」

生暖い風が大波を打つて吹込んだ。

二人は身繕をし、支度をした。

月野は三里離れて居る。清蓮庵こそ、風下で半里に近い。通夜して、摩耶夫人の御像を守護しようと云ふ、お須賀の發言である。

表戸をば、變化の言に聞いて避けた。

二人は屋根へ出て立つた。此の下屋の張出し屋根は、男は飛べさうに低い。雪をおろす時、立掛けたまゝの階子が隣の桃の葉を潜つて軒にある。縋つて下りても夫人の褄は亂れまい。

お須賀の汲むだ一手桶が戸袋の際にあるのを、こゝの家へ寸志として、つと提げて、小楷子を五六段、大屋根の眞棟に立つた。

「一齋さん。」

友染の片褄端折りに、白地の手拭を被つた、世話に、艶に媚めかしい。しかし火の戰場に赴く覺悟の引緊たる上品な姿は、繪の拔出したやうで、消えさうである。

「大丈夫。」

乾の天に、空暗く、羅漢堂と思ふあたりに、むく／＼むく／＼と、佛手柑の形の雲が、湧並び、立重つて、拳を合せ、頭を擁へた。星がキラキラと雲の切れ目に、一つづつ眼を象嵌して、皆羅漢の顔である。

飛ぶ、飛ぶ。其の一群の中から、鐵鉢の形が飛ぶ、獨鈷の形が飛ぶ。電信柱の挫折れたかと思ふ錫杖が、ひかりもの〻光を放つて、下に大川の水を映して、一直線に、深夜の市街の
時、怪しや、りん／＼と鳴つて通つた。

榮螺堂には、土間に、雇はれた男が五人、火の氣を嚴禁して夜番をして居た。上人は袴の股立を取つて、市中を驅廻つたけれども、河鹿の三味線は行方が知れない。

午前一時である。風更に煽を立てゝ、一陣、堂を龍まきに續るとともに、羅漢の顔が、皆一齊に、パッと眞紅に成つた。諸聲に絶叫して、夜番は遁出したさうである。

同時に、町の中心に火の柱が立つて、五つに折れて落ちて七つに裂けた。

曉かけて家數凡そ三千軒餘、實に土地としては明曆にありし大火以來と言ふ。十萬石邸の落つるとゝもに、飛火は卯川を越した。

火の海の岬に灰色の椎、唯一樹。

燃え盛る焰の中を、血の色した素裸の漢が二人、狂亂して踊り廻つた。一人は三味線を高く振つた。

皮肉とも言はう。火元は—お律が修繕を頼んだ三味線屋が、更に河鹿の鑑定を持込んだ、某の骨董店だつたさうである。（完）

編輯だより

◇問題の思想檢事、思想警察の大網が全國的にひろげられた。我々は默してその成果を冷靜に見ることとする。

◇樞密院は一日でも早く廢止した方が國民のためだ。今では殆んど議會の權能を横取せる形。政友會は權力にかぢりつくことのみ考へて他日の悔に思ひ至らぬのは可哀相である。

◇夏はどの書をよむべき、撰擇を嚴重にすべきである。輕いものを片つ端から亂讀するのは百害あつて利益が少ない。それよりは一つか、二つか選擇してそれを熟讀し、かみしむべきである。避暑する人はその地を撰ぶことも肝心である。

◇改造社版「マルクス、エンゲルス全集」第二回配本は七月三十日頃の豫定。今回も八百五十頁の堂々たるもので内容の充實は一卷以上。エンゲルスの輝ける業績を語る「反デューリング論」「空想的社會主義と科學的社會主義」「家族私有財産及び國家の起原」「住居問題」「フオイエルバッハ」「國際問題」その他十數論文が這入る。

◇改造社版「マルクス、エンゲルス全集」は世界に於ける尤も完璧した全集たらしめる爲め世界に散在せる寫眞、逸文まで全部收錄する爲め特派員を獨、露、佛、英に派した。

◇「現代日本文學全集」の「石川啄木集」は既に配本を了つた。「志賀直哉集」と共に好評嘖々たるものがある。此機會に當りて本會員たらんとする人々も多いやうである。彼はいつでも「新しき明日の人」であつた。「來るべき未來の藝術」の創造者であつた。彼は先行の人、先驅者として現代に生きている。

◇この一集は會員多數の熱望を以つて特に發行期を早めただけ詩歌を讀んでも、創作隨筆をよんでも鏘として鳴るの思ひがする。次回は豪宕の氣魄を以つて知られ、志士的風格を以て知らるる「二葉亭集」とする。未來の大外交家、大政治家をも兼任する意氣のあつた熱情の彼はバイロンにも比すべき大きい線の持主であつた。

◇社會各方面より好評を浴びた「上田敏全集」は初版は賣切れて再版出來した。「葛西善藏全集」も第一卷が出來。

◇九月には陣容堂々壯大無比なる「現代經濟學全集」を發行する。又、九月號の「改造」には浮世繪版を十數葉添付する。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵税不要
壹ケ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和三年七月十八日 印刷納本
昭和三年八月一日 發行

(五拾錢)(郵税參錢)

編輯兼發行兼印刷人 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一三一 一一三二 一一三三 一一三四

芥川龍之介著

童話集 三つの寶

（菊二倍判）

定價五圓

郵送料 内地 廿七錢

最新刊

小さい人々の爲に、一番安心して與へられる童話集として、玆に芥川さんの『三つの寶』をお薦め致します。藝術味の豊かな、文章の美しくて正しい、そして事柄の面白いこんな傑れた童話集は、未だ見たことがありません。それに小穴畫伯の描かれた十數枚の扉繪と挿繪とは、芥川さんの童話と相俟つて、小さい人々の微笑と滿足を迎へるものばかりであります。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社